深淵の異端者（現実→TOA）

Jastice

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
深淵の異端者（現実→ＴＯＡ）

【Ｎコード】
Ｎ１１００Ｉ

【作者名】
Ｊａｓｔｉｃｅ

【あらすじ】
人生を走り続けた彼を待っていた物は・・・己の手を血で汚す事だった。命を絶った筈の彼は異世界の存在により2度目の生を与えられ、世界を救う可能性の一つになる契約を結ぶ。そこで彼が探す存在理由は一体どのようなものなのか……それは星の記憶が知るのか。それとも、彼自身が創り上げていくのか……それは誰にも解らない。

第０話

「さすがに疲れた……」

人生は走り続けてきた。

自分の目指す憧れを求めて……

俺はとある腕の良いと評判される医者だった。

医者になったのは俺は子供の頃、重い病気に掛かった俺を救ってくれた医者に憧れたからと簡単なことだ。

そこから始まったんだと言えるだろう……

必死に頑張って、努力して、第一外科のエースとも呼ばれるようになる事が出来た。

そんな絶好調の俺に一件の手術依頼が舞い降りて来ていた。

それは、俺が子供の頃かかった病名と同じ物だったからだ……

これを見て思った。

これを成功させれれば【彼】を超えられるかもしれない。

そう考え、すぐさま執刀を了承した。

だが、運命は俺には微笑んでくれはしなかった……

手術を失敗に終わらせた俺は勤めていた病院を解雇される処分を下された。

直接の原因は俺で無かったとはいえ、【チーム】としてのやり遂げる能力が無かった俺を含めた他のメンバーにも責務はある事だろうからむしろ当然の処置だと思った。

病院としては、だが……

真実を言えば俺はその患者を自分の理想へ近付けるための踏み台にしようと考えていた。

“罪人”の俺としては軽すぎる物なのだから。

患者の家族にこのミスを伝えた時、その人の妻がこう言った。

＞希望をありがとう＜と……

その言葉は心を罪悪感で埋め尽くすようになるには十分な物となり、俺は逃げ出した。

病院を、町を、県を、そして国を……

無我夢中で逃げだした終着点は乱戦中の真っ只中のアフガニスタンのとあるボランティア活動の医療現場であった。

ここを選んだのは【彼】がいると言われてたからだ。

俺は未だ捨てかけてた憧れにしがみつく事にしていた。

――――“彼に会いたい”――――

それだけを思い、ひたすら自分が出来る事を考え歩み続けていた。
もし彼に会えたのなら、今まで俺が目指そうとして来た事は正しかったのか？
自分が医者であり続ける意味を教えてもらえるかもしれないと踏んだ。

――――――――――――

ここでの生活もだいぶ慣れてきた所、とある事件が起きた。
乱戦中の兵士達が物資保存庫の物資を強奪するべく、テロを起こして来たのだ！
キャンプの中の人達を含めたＮＧＯ団体の人達を人質として膠着状態が続いていった。

何時までも続くのかと不安と苛立ちでいっぱいになってた俺の前で衝撃的な場面に出くわした。

撃ったのだ……

それは一瞬の出来事であった……
まだ１５にも満たない少年の兵が人を見せしめとして撃ち殺したのだ！

この時に自分は初めて現実というものを今まで以上に深く実感させられたのかもしれない。
そして、恐怖心が強まっていった……

“このままだと殺される！”

純粋に俺は本気で生きたいと感じた。
だから、それを行動で表すのにはそう時間が掛かる事はなかった……

―――――――――

誰もが寝静まるような深夜の時だった。
ここアフガニスタンは電気での明かりなど民家から漏れてくる事はまったくと言ってないので、テントの周辺以外は闇が広がっている。
見張りから逃げるには好条件といえるだろう……
事実、この時間帯は人間にとっては心身揃って疲労がたまっている所でもあり、意識が呆ける。
そこを突いて俺は昼時に目を付けていたある物を盗み出して外へ走り続けていた。

それは、“一挺のライフル銃”であった……

射撃の経験はとある手術依頼で行った外国の射撃場での一、二回だけだ。
そこで俺は余興でやっていたのだが、偶然にも射撃の腕が抜群に

良いと周囲の利用者にも言われていた。

――――狙った的は外さない――――

そんな言葉の通りで俺は全ての飛んでくる的を一発も漏らすことなく撃ち当てたのだ。

そんな現象を間近に見て自身もが驚愕した事も覚えている……

だから、その能力をここで使う事に決めたのだ……

此方からは焚き火が照明の役割をしているため、兵士達のシルエットが明確に見える。

それとは対照に向こう側からは無限の闇によって俺の姿をとらえる事は難しい。

俺は膝を地面に付け、銃の後身を肩に押しつけて固定させる。

弾は予備で二つのマガジンが手元にある。

これは優位と言っていいものだろう……

そして、俺はスコープを覗く……

その先には兵士達の話し合い、笑っている姿が写っていた。

あの少年兵も一緒だった。
彼らをよく見てて俺は思った。
彼らも同じ人なのだと……

だけど、甘えるわけにはいかない……
今は大丈夫だがたとえ俺がこの場から逃げ切れたとしても人質がまた殺される可能性も少なくはないのだ。

だから、ここで散ってくれ……

改めてスコープに記されてる標準の目盛を合わせる。
狙うのは頭じゃなくていい。的の大きい体を狙え……

即席で作り上げた自分だけのルールは覚悟を完全に決めさせる暗示へと変化させる。
正直、命の危機に陥る状況はこの土地でも何度かあった。

違うのは……

俺は初めて“治す者”から“殺す者”に変わったという事だ……

――――ドオウゥゥンッ……！！！――――

静かな土地で銃声が鳴り響く……

命を終焉へと導く殺戮の音が……

――――ドオウゥゥゥンッ……！！！――――

またしても銃声は鳴り響く。
その音の数だけ命が消えていく。

撃つ……撃つ……撃つ……撃つ……撃つ撃つ撃つ撃つ――――――
！！！！

その繰り返しが俺にとっては正義なのか、悪なのかは誰にもわからない。
マガジンは気がつくと取り替えていた。

だから、まだ続ける……
あちらも銃を乱射し始めてきている。
音と光で場所を見つける所は彼らもさすが兵士であると賞賛できるだろう。
でも俺もここで死ぬわけにはいかない……

場所を移動しつつ、なおかつ途中で手探りで見つけた障害物となる所に隠れつつ、それを繰り返し続ける。

だから、俺はまだ生きている……

銃声も少なくなってきて、俺のペースも拍車がかかった。

次の狙いを定めてスコープを覗いた時、トリガーに掛かる指が一瞬止まった……

泣いていたからだ……

彼らもまた、死にたくないと戦い続けていたのだから……

それを見た時、俺は思った。

“もう後戻りはできない”、と……

だから、全てを終わらせる……

―――――――――

＞i11682―1010＜

何もかもが終わった時、俺に待っていた物は喪失感とさらなる罪悪感だった……

人質は一人を除いて全員が助かった。
俺と違い、手を汚さずにいれたのだから彼らは笑顔を持っていた。
それをスコープ越しで唯見つめているばかり……

それは、悔しくなるほど羨ましいと思えるものだった。

俺はもう医者なんかじゃない、人殺しだ。
全うな人生など送れる可能性など0に等しい。
だから、俺も終わりにしよう……

ライフル銃の銃身を上に向け、それを口にくわえる。
そして、靴を脱いで足の親指をトリガーにひっかける。

その動作の中、考えていた。
思えば、俺はただ【彼】に認めてもらいたいと心のどこかそう思ってたのかもしれない。
だから、【彼】のようになろうではなく【彼】になろうと自分を見ようとしなくなっていたのかもしれない。
その結果がこういう事だったのだろうか？

望んではいなかったんだ……

唯、俺は……

人を治して救う、そんな医者になりたかっただけだったんだ……

……

……

……

……

・　・　・

――ドオゥウゥンッ……！！！――

第０話（後書き）

これはギャグ、シリアス、コメディー等を中心としたＴＯＡの二次創作です
処女作なので読者の方は面白ければご感想をおねがいします
それが作者の創作意欲にかわります

プロローグ編

――きよ、人の子よ……起きるのだ――

誰だ？俺に話しかける奴は……

そんなことはあり得ない筈だ、俺は自ら命を断ったはずの存在だ

……

話す事も喋る事も聞く事もできないようになった筈だぞ？

……なら“此処”はどこだ？

――ここは世界を紡ぐ次元の狭間だ、本来は死者はおろか生命が来れるような場ではないがな――

……！？お前は俺の考えてる事がわかるのか！？

――人の姿のままでは不可能であったが……我がそなたの体を【音素（フォニム）】に変換させたためだ――

ふぉにむ？聞いた事のない言葉だな……

――それはそうだ、我はそなたとは違う並行世界に存在する者なのだからな。似て異なる世界の物を全て知ってる訳ではあるまい――

並行世界……なんとも夢のあるようなお話だな、まぁ、今の俺の

状態を考えて信じない訳にもいかないけどな……それで、結局あんたは何者なんだ？

――む……いろいろと話してて我の事を紹介するのを忘れていたようだな、では改めて紹介しよう。我の名は『ローレライ』、惑星オールドランドに存在する第七の音素集合体に位置する者だ――

ローレライ……たしか、ドイツの伝承で歌で人を惑わそうとした水の妖精の名だな……

――ほぅ……我と同じ名を冠する存在がこの世界にもいるとはな、さすがは並行世界といえる――

んで？その妖精さんと同じ名の奴が俺みたいな自殺者にいったいなんのようだ？

――我の存在する世界を救う手助けをしてほしい――

は……？

――いきなりこのような事を言ってすまないが……時間がないのだ……――

ちょ……ちょっと待てよ！！いきなり世界を救えだのなんとかといっても意味が理解できるわけがないだろ！！

――では、長くはなるができるだけ簡潔に話そう……惑星オールドランドには星の記憶というものが存在しているのだ。それには人一人の未来までもが正確に記されており、我の世界にはそれを知る業を持つ事ができた。それが預言（スコア）と呼ばれる物であり、それは人の

王が持つとされる権力と同等の力を見いだせるまでにもなったのだ。だが、預言にも良い方向に導くものもあれば悪い方向へ導くものもある。オールドランドの者達は預言が絶対であるという考えを２００年の間に心の奥底まで癒着させてしまったのだ……預言が必ずしも繁栄に導くものではないと疑いもせずに……――――

……その預言のせいで結果的に世界の危機に陥る最悪の未来のシナリオを人々は選んじまったという訳か？

――――理解に苦しまずに助かる……その通り、世界は二度も滅びかけた。だが滅びはしなかったのだ、我が愛し子『聖なる焔の光』のおかげで……――――

滅びはしなかった……？あれ、じゃあそれで良いはずじゃないのか？

――――良い訳がなかろうが！！我が愛し子はその為の生贄にされたのだ！！かつては一つの国のために、そして世界のためにまでと３度も世界はあの子の生を否定されたのだぞ！？――――

……生を否定された？

――――そうだ！！だがあの子は決してその運命を嘆こうとはしなかった……己が“レプリカ”だから……【聖なる焔の光】の身代わりだから……だから命を捧げようと考えてた。しかし、最後には己は一人の人だと……唯それだけだと……本当に生を望むようになってくれた……我にはそれがどれほど喜ばしかったことか……――――

……その子は……幸せになる事が出来たのか？

――……そうでもあり、そうでもないといえる……あの子は、『ルーク』は『アッシュ』と最後には一体化した……そうして戻ってきたのは、結果的に言えば『ルーク』の記憶を持った『アッシュ』であったからな――

一体化とはどういうことだ？もしかして融合とかなんとかしたのか？

――まだ話してなかったが、整理しよう……『アッシュ』とは本来『ルーク』という名であった者の事だ。預言に死を詠まれ、あの子は【栄光を掴む者】に惑わされたために己の分身である『ルーク』としてのレプリカを作り、己の死を逃れようとした。だが、その中騙された事に気づき、『ルーク』に戻ろうとした……だが、『ルーク』はすでに己の分身が位置していたのだった。それを見た時、【栄光を掴む者】の洗脳生活によってか『アッシュ』は『ルーク』としての居場所を奪われたと考えてしまった。……あの子はまだ立つどころか考える事も出来ない赤子当然の存在だったはずなのに・・・――――

質問だ、レプリカってどういう事だ？

――レプリカとは我の持つ第七音素のみによって人為的に作る事が出来る「複写体」の事を言う。譜業と呼ばれるものによって有機体をもレプリカを作る事を人々は可能にしたがしかし、レプリカは人々にとっては理解しがたい存在でな、一部が劣化を起こしたり、レプリカの元である被験者（オリジナル）がレプリカに存在を喰われてしまう大爆発（ビックバン）現象が起きたりと未だ我にも全てを知ることができぬ存在とされている――

だからその『アッシュ』と『ルーク』は一体化したという訳か…

…じゃあ最後に質問だ、お前の言う音素とはいったい？

――音素とはオールドランドに存在するあらゆる物質を構成する元素の一端、または元素から逸脱した存在の事を指す物だ。それは我の持つ第七音素を含め、闇、地、風、水、火、光、音の属性を持つ七つの音素が存在している。そして、音素は一定量集合すると我のように意思を持つことができるのだ。他にもシャドウ、ノーム、シルフ、ウンディーネ、イフリート、レムと称されてる我の仲間達がな――

おいおい、精霊の名前勢ぞろいかよ。ま、そんなことは置いといてと……どうして“俺”なんだ？

――一つは我がこの世界を探し当てた時、偶々見た人の中にそなたが目に付いた事、そして、もうひとつは……そなたはあの子とどこか似ていると感じたからだ――

そうか……

――もし引き受けてくれるのならばそなたは人の赤子として二度目の人生をオールドランドで送る事にさせよう。もしそうでなければ……ただ無として何かしらの力によって今の存在を消され、別の存在としてまたどこかで生を受ける事になるだろう……もちろん、記憶も何もかも失ってな……――

脅しまがいな言い方だな……

――そう受け取ってもいい……そなたは異端者（イレギュラー）として私の言いなりになれと遠回しに言ってるようなものなのだからな。我は何通りも存在し続けるあの子の悲しみの未来に終止符を打てるのなら何だ

ってするさ――――

だからといって俺がそのオールドランドに現れる事になったからって未来を回避する事はできないかもしれないぞ？

――――ではそなたには第七音素を扱う資質と前世の記憶を持たせる事にしよう。それらを使って進んで行くがいい。あぁ、あとオールドランドの秘預言と呼ばれる滅びの指標と我がそう呼ぶ物の全貌を記憶に加えておいてやろう――――

ハハハ……あんたなんでもありだな……まるで神様だ。

――――まるでではなく、我は神同様に崇め上げられてるがな――――

そうか、じゃあ納得するとしようじゃないか！返事はＹｅｓだ！！

――――感謝する人の子よ、これで可能性は増える事になる――――

じゃあその『ルーク』を支えていくため頑張っていきますか……

じゃあローレライ、準備はいいぜ？

――――では、行ってくるがいい――――

俺の体に解けていく感覚が足だった所から始まって行く……

もう肉体はないのだが、それは心地よく温かい感じだった。

それが体の半分にまで達した所、最後にローレライが何か言っていた気がしていた……

――忘れないでほしい、星の記憶は絶対ではない事を……
ユリアが愛した世界を嫌いにならずにいて欲しい……
そして、そなたには加護を……ルークには祝福を渡して
ほしい……どうか――

それを聞きつつ、俺は意識を閉じる。

次に目覚める時はきっと新生児としてだろう……

新たな人生を楽しみながら、走り続けていこう……

さぁ、物語の始まりだ！！

第1話

ＮＤ２０００
ローレライの力を継ぐ者、キムラスカに誕生す。
其は王族に連なる赤い髪の男児なり。
名を聖なる焔の光と称す。
彼はキムラスカ・ランバルディアを新たな繁栄に導くだろう。

ＮＤ２００２
栄光を掴む者、自らの生まれた島を滅ぼす。
名をホドと称す。
この後、季節が一巡りするまでキムラスカとマルクトの間に戦乱が続くであろう。

ＮＤ２０１８
ローレライの力を継ぐ若者、人々を引き連れ鉱山の街へと向かう。
そこで若者は力を災いとしキムラスカの武器となって街と共に消滅す。
しかる後にルグニカの大地は戦乱に包まれ、マルクトは領土を失うだろう。
結果キムラスカ・ランバルディアは栄え、それが未曾有の繁栄の第一歩となる。
やがてそれが、オールドラントの死滅を招くことになる。

ＮＤ２０１９
キムラスカ・ランバルディアの陣営は、ルグニカ平野を北上するだ

ろう。
軍は近隣の村を蹂躙し要塞の都市を囲む。
やがて半月を要してこれを陥落したキムラスカ軍は、玉座を最後の皇帝の血で汚し、高々と勝利の雄叫びをあげるだろう。

ＮＤ２０２０
要塞の町はうずたかく死体が積まれ、死臭と疫病に包まれる。
ここで発生する病は新たな毒を生み、人々はことごとく死に至るだろう。
これこそがマルクトの最後なり。
以後数十年に渡り栄光に包まれるキムラスカであるが、マルクトの病は勢いを増し、やがて、一人の男によって国内に持ち込まれるであろう。

かくしてオールドラントは障気によって破壊され、塵と化すであろう。
これがオールドラントの最期である。

――――――――――

「あと……3年か……」

そこから全てが始まる……その為の準備はできるだけ済ませた。
それが吉となるか凶となるかは俺にもまだわからない。

「ハイル～！昼食の用意ができたわよ～！？」

「あ、は～～い！すぐ行くから待ってて～！？」

ハイル・シュヴェール……それが俺の新しい名前だ。

ここフェレス島に住む元傭兵の父と商人の娘であった母との間に生まれた男子として生まれ変わった

今ではもう十二歳となり、家族と水入らずで暮らし続けている。

全てが始まる１５年も前に生まれた事を初めて知った時はローレライに少し口を零す事も何度か少しあったが……まぁ、今となっては慣れたといっていいだろう。

あと自分の髪が前世と違い青色だったり、譜術という現代では魔法と言っていいような物を見ているとやっぱりここは自分の元の世界と違うのだなと改めて実感させられたりと今ではいい思い出となっている。

「今日は何？母さん」

「ふふ～ん♪あなたの大好きなシチューよ。」

「え、まじ！？よっしゃあ！！」

「こらこら、そうはしゃがないの。」

精神年齢としては４０歳を超えてる俺がこういう風に振舞ってるのは理由がある

俺はもしかするとこの人達が待ち望んでいた“本当の子供”の存在を奪って生まれてきたのかもしれないのだから……

だから、少しづつ修正させて子供らしくなってこの人達を悲しませるような真似をさせないために【ハイル】という名の少年を創り上げた

「そういえば父さんはいまどこに居んの？」
「そうねぇ……漁をしにもう2時間も経っているからそろそろ帰ってくるんじゃないかしら？」
「そうか、じゃあ三人で席について昼食できるかもね？」

こうするのは罪滅ぼしとか大層に考えるのは偽善になるかもしれないが、俺に出来る事といえばこれぐらいしか思いつかない……
だから……俺は□□□□という存在を止める覚悟を決める事にしよう。

「ただいま、今戻ったぞ～！？」
「おかえりなさ～い！！」
「お、ハイルか！！いやぁ～今回は良い物が釣り上がってお父さん気分が良いもんだよ。」

――ですから、今は貴方達二人の息子で居させてください――

――どうかお願いします――

昼食を終え、両親に外へ出かけてくると一言告げて家を出た。
ここマルクト領ホド諸島の一つ、フェレス島では建物自体が道として繋がり続けて出来ているような構造なので街路と言った道が無い。
そのため、お隣さんの家の前を事ある毎通ることにもなる。
ここの住民の家は現代で言えばマンションの一室づつとして配置されてるようなものだ。

「だけど上る場所とかも多くて少し移動に疲れるんだがなぁ……」

この世界でもエレベーターと同じ物があるが、俺が歩く道では途中で梯子を使う事が多い。
当初は使う事に戸惑ったが、１０年も経てば慣れてしまった。

「さて、今日もあそこに行ってみるとしますか」

そう独り言を呟きながら梯子に手を掛け、上がっていく。
その間で感じる潮風は心地よくて俺のお気に入りでもある。
一応もらった小遣いを持ってきているが食べ歩きとかは俺の趣味じゃない。
前世の記憶と性格によってか生物学系統の本を時々買って読む事が多い。
今じゃ俺の部屋の本棚にはそれ関連ばかりしか収まってない。

「この世界の文字を覚えるのには一苦労したな」

不思議だがこの世界では喋る言葉は日本語だったが文字は違った。
フォニック文字と言う物らしいが初めて見た時は文法もまったくさっぱりだったが五年の間で必死に解読した。

これでも国立出身だから頭脳の方は舐めないでもらいたいぜ……

そして、今日も日光浴をしながら建物の一番高い所で静かに読書やその他をする……

「今日も来たわねハイル!?ここはあたし達の場って決まってんだから!!」

にはまだ早そうだな……

―――――――――――

～Ｓｉｄｅ：ノワール～

あたしはダチであるヨークとウルシーと共に目の前に立ち塞ぐように道に一列並んでいる。

こうするのはあの男、ハイル・シュヴェールという奴がいるからだ。

あいつは事あるごとにあたし達の邪魔をしてくるからね……

「またお前かノワール……今日はいったい何の用だよ」

「ハンッ!!この間の仕返しに来たに決まってるじゃない!?」

「俺達の渾身の傑作を台無しにした件についてのな!!」

「傑作って言うのは聞こえが良いが実質あれは悪戯と言う名のトラップだろうが……邪魔だったから壊して何が悪い？」

「ううるさいよ!!一生懸命作ったのに一瞬でお釈迦するあんたがいけないのよ!!」

「なんだその理屈は……とにかく、そこ通りたいからどいてくれないか？」

「ちょっと待ちなよ・・・面白い事がもうすぐ起こるからさ」

「……？」

よしよし、あとちょっとだね……

そろそろといくとしようじゃないか！？

「ウルシー！今だよ！！」
「了解でゲス！！」
「おいおい、いったい何をする……」

バシャアァァ……！！！

「……ッ！！？」

よっしゃ、成功だ！！

「あはは！！ざまーみろ～」
「うまくいったでゲス」

実はあいつの真上に海水の入った樽を吊るしておいたのさ。
あたしの合図でウルシーが仕掛けの縄の引っ張ることでぶっ掛けると言う訳だ。
てな訳であいつに一発やり返す事ができて満足さ。

けど……その後が大変になるんだけどね……

「ヨーク、ウルシー！！逃げるよ」
「「おう！！（でゲス！！）」」

三人でこれだけはルールとして決めてる事がある。

――――――ハイルが怒ったら絶対に捕まってはいけない――――――

捕まったら本当に酷い目に会うからね……

前あたしが捕まった事があってね……その時の報復が……

お……お尻ペンペン１００回だったって事があるんだよ！！

しかも容赦いらずで全力だよ！？皮が捲れちまうかと思っちまったよ……

と……とにかく！！やる時にはとんでもなく注意が必要って訳さ！

「てめぇらあぁぁぁぁぁぁそこに立ち直れえぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！！」

今回は逃げ切れるかどうかはローレライでも預言でもわからない。

それだけ覚悟を決めるのが一番大事だね。

じゃあハイル！あたし達との第６１回の鬼ごっこを始めようじゃないか！！

本ばっか読んでないで少しは遊んでみろってんだい！！

―――――――――
～Ｓｉｄｅ：ハイル～

やれやれ、またこいつらに付き合わなきゃいけないのかよ……
どうやらノワール達は必要としてこの世界の知識を取り入れてる時の俺を見続けていて放っておけないようだ。
だからわざとからかったりと良く突っかかってくるんだなと俺は考えてる。

俺としては体力を付ける機会として受け取るようにしている

でもな……ノワール、俺もむかつく事はむかつくように思うんだからな？

捕まえたら俺もそれなりに仕返しするぜ！！

そうして約２０分後……

「や……止めろでゲスウゥゥゥ――――！！！」
「だ～め♪自分の悲運さを恨む事だな」

今回はウルシーを捕まえる事ができた。
足を四の字固めにして逃げ出せないように仕込む。

「ゆ……許してでゲス！ノワールにどうしてでもやってくれって頼

まれたから仕方なかったんでゲス！！」
「仕方がないで済ませるほど俺は甘くありませ～ん」

さて、今回のお仕置きはと……

「さてウルシーよ……」
「は……はいでゲス！！」

――――――ギュッポ、ギュッポにしてやんよ♪――――――

「アッ――――――――――――――――――！！！」

下のアレを力の限りギュッ！！としてポン！！と弾き飛ばす刑である

一方……

「ウルシー……あんたの犠牲は無駄にしないよ……」

目頭に涙をうっすら溜めながらその悲劇を眺めるノワールと……

「ひ・・ひぃ!!あんなにしたら潰れちまうって!!」

下を押さえながら顔を真っ青にしながら同じ光景を眺めるヨークがいたとか……

第2話（前書き）

今日の愚痴
バイト先でのお客の子供に「おじちゃん」と呼ばれた
俺はまだ１８だよゴルァァ！！（怒）

第2話

「てめぇコンのガキゃぁ！！せっかくの上玉が逃げちまったじゃねえか！！」

「どう責任とってくれんのか教えてくれねぇかよオイ！？」

「うるさい！！　僕はお前達が嫌がって連れて行かれようとしている女の人を助けただけだ！！　罵声を浴びられる覚えはない！！」

「……どうしたもんかね（汗）」

只今、栗色の髪をした子供が俺の後に隠れるようにおり、前には現代で言うチンピラという奴らがいるというサンドイッチ状態です。

なぜこうなったのか、それは少し前に遡る……

～回想～

「ホドへ行ってみないかい？」

突如として父はホド旅行を持ちかけてきた。

なんでも、綺麗で素晴らしい場所だから一度見た方が得だということらしい。

その提案には俺も賛成した。

なぜなら……

ＮＤ２００２
栄光を掴む者、自らの生まれた島を滅ぼす。
名をホドと称す。
この後、季節が一巡りするまでキムラスカとマルクトの間に戦乱が続くであろう。

今はもうＮＤ２０００だ。
バチカルの首都キムラスカでは【ルーク】が生まれる年となった。
俺も１５となり、世間では独り立ちしても可笑しくない年齢だ。
……余談だが、この世界の一年はなんと地球の二倍の月日をかけてなる物と知り驚いた。
だとすると、俺の感覚で言えば１０歳で成人になっていたことになっている。
しかし、精神年齢を今で変換すれば６０歳の爺寸前であると考え直して凹みました。ｏｒｚ
だが摩訶不思議なことに体はちゃんと１５歳にふさわしく成長している。

……話がそれたが、まぁ来ちゃったわけよホド島に。
そこで俺はある調査を行う為にホドに建てられてる図書館に赴く事を目的とした。

【栄光を掴む者】

その意味を冠する名を持つ者を探すために……

この世界の言語にはかつて古代イスパニア語と言う物が存在していたらしい。
【ルーク】（聖なる焔の光）もそこから取られて名づけられたそうだ。
フェレス島にも古代イスパニア語に関しての書物はあるが、全貌までを記すような物までは無かった。
だから、ホド島へいくメリットはそこが一番大きい訳だ。
そうして、家族旅行で来たここは本当に素晴らしい土地だと感動に浸った事があった。
白を基本とした建物の街並みは地球では世界文化遺産に入れても文句なしとも言える美しさだろう。

そうして、食事をしたり買い物をしたりと家族で楽しんだ後俺は両親に頼んで一人で図書館に行きたいと頼んだ。
今回の旅行は宿を取るから指定された時間帯までに戻る事を前提にすることにして許可を取る事ができた。
だが、ちょっと問題が起きた……

迷いましたよ、えぇ、思いっきり……

ちくしょう、こんな事になるんだったら地図買っときゃよかったな。
とにかく悩んでいる暇はない。虱潰しにしてでも探すしか……

「どどどいてくださ～～い！！！」

ん？こんな時に誰だいったー――

ドムッ！！！

「ぐぶぉぁふぁあ！！！」

「へぶっ！！！」

それは唐突な事であった。
いきなり目の前の街角から子供が飛び出して来たのだ。
身長さの違いにより、その子供の頭が俺の腹に見事にクリーンヒットしてくれました。

「かはっ！！　おま、いきなりなにする……！！」

「逃げんじゃねえぞこの糞ガキゃあ！！」

……どうやら解決は一筋縄とはいかないようだ。

～Ｓｉｄｅ：？？？～

≪騎士とは護る事に本質がある≫

それが父上の口癖だった。

だから、目の前にいる男達がしていた行動には僕は我慢できなかったんだ。
今は修行中とはいえ、これでもアルバート流剣術を習ってる身として男達から女の人を逃がさせる事くらいはできたけど……
今度は逆に僕が標的とされてしまった。
大多数を相手をするには僕には力不足だった。
だから、その場で逃げ出す事に決めたんだけど、運悪く人にぶつかってしまい、結局再び男達に囲まれてしまった。

「あの～……なにがなんだかよくわからないのですが、この子がなにかしたんですか？」

「ん？そういやお前誰だ？」

「なぜかこういう事に巻き込まれた一般人と言わせてもらいます」

「なんじゃそりゃ？　まぁいい、兄ちゃん……そいつを渡してくんねえかな？」

「そうだな、キッツ―いお灸をすえてやらねえと俺達も気が済まんのよ」

「なんなら兄ちゃんも一緒にやるか、ゲヘヘヘ？」

怖い、今ここで連れてかれたら無傷じゃすまない。
そう悟ってしまった。
だから、今僕は必至に問いかけるように隠れるようにしている背中のこの人の服を引っ張っていた。

うぅ、こんなんじゃあ父上のような騎士になるなんて……

僕はこれ以上無く情けなかっただろう。
結局自分の力量を見極める事もせずに無謀な事をしでかした報復に怯えてるしかなかった。
きっと、この人は余計な事に巻き込まれたくないから僕を……

「何バカなこと言ってんだオッサン？　さっきから話聞いてりゃ実質あんた等が悪いに決まってんだろ馬鹿かテメェら！？」

えっ……？

「なっ、て、てめぇ！！」

「鏡でももう一度観とけこの≪ピ――――≫が！てめぇらみてえなイケメンならぬ逝け面が女なんざ捕まえるなんて１０年早いんだよこの≪バキュウン≫の≪イヨォォ！！≫が！！あれか？それで捕まえれなかったから次はショタに走るの？変態なの？馬鹿なの？死ぬの？わかったらその≪イエェァアア！！≫をとっとと治めて家で慰めてろや！？」

……なかなかすごい人だ（汗）

どうすればそういう風に言葉を出せるんだろう。

「な、ななぁ！！」

「我慢ならねぇ！！　こいつら一緒に袋叩きにしてやる！！」

「上等だコラァ〜！！！」

まずい！！このままじゃ！！
そうして男達はこの人に掴みかかろうと勢いよく手を服に伸ばしてきた。
このままだとこの人は！！

「そこの君、しゃがんでな？」

「えっ！？」

いきなりそう言われたけどその通りにすることにした。
その瞬間……

グォン！！！

人が宙に舞っていた。
いきなりの現象に僕は目を疑った。
自分よりも身長の高い相手をこの人はなんの苦もなくそんな神技をやってのけたのだ。

すごい――――

ひょっとしたらこの人なら――――

～Ｓｉｄｅ：ハイル～

「ふぅ、前世で合気道と柔術まがいの武術習ってたりしてよかったな本当に」

俺は実は前世では守備にたけた護身術を習っていた事がある。
基本を覚えてからは医大時代での後輩に接骨医院に勤めてた奴がいてそいつから関節のつぎの仕方を一時教わり、自己流の柔術を創り上げてた。
殴り合いとか蹴り合いは苦手な俺にはまさにピッタリな武術だといえるだろう。
フェレス島でいた時ではノワール達含め、島の子供達相手で実験…
…ゴホンゴホン！……試合をしてこの体で合わせれる技を磨きあげた。
ただ、これらは相手が攻撃に回ってこない限り使える事が出来ないが、まぁ、この男達は今頭に血が上ってる最中だしこの世界には格闘技はあるが合気道のような武術は無いそうなので仕組みを知られる心配もない。
まさにうってつけの実戦訓練だ。

では、かかってくるがいいさ！！

第2話（後書き）

やっと第二話です。
感想をくれた読者の方々ありがとうございます！

第3話

数は7人・・・倒したのは3人目・・・・・
結果は良好だ・・・・・

「どうした・・・？怖気づいたか？」
「く・・・くそがあぁぁぁ！！！」

軽い挑発に乗った男の全身を瞬時に観察し終える
武術を習ってる形跡はなし・・・拳は力任せ・・・
ならこれだ！！

グリンッ！！！

「ごえぇぇぇ！！！」

腕を曲げて迫ってくる拳を最小限の力でそらす
そして、瞬時に手首をきめて古武術の一つ＞小手返し＜を繰り出した
男への衝撃は自身の体重と重力によって変換されて凄まじい物と化した

「四人目・・・」
「な・・・なんだよこいつ！！」
「落ち着け！！一斉にかかってやれ！！さすがの奴も多数を一度に相手をする事はできないはずだ！？」

む・・・それはまずいな・・・・・
確かにその通りだ、さすがの俺でも阿修羅みたいに手が何本もあるわけじゃない

弱点を突かれ始めたか
そうしている内にも男達は此方に迫って来てる
考えろ・・・何か解決策があるはず・・・・・

ダッ！！！

「・・・ッ！！！」

その時だった・・・
突如俺の背中に蹴られたような衝撃が走った
いったいなんだと顔を後にむけようとすると・・・
俺の体を大きな影が覆い尽くした

「崩襲脚！！」

その正体は先ほどの少年だった
そのまま彼は高く飛んだ後、男達に向かって叩き下ろすような鋭い蹴りを放った
はっきり言って命知らずも良い所といってやりたい・・・・・
・・・が、チャンスだ！！
そのおかげで男達はドミノのように地面に倒れこみ、隙を作った
そこを俺は逃すことはなく、縮地の歩法で一瞬で距離を詰めて男達に仕込みを施す

・・・ガシッ！！・・・グキッ！！・・・ガチンッ！！・・・パキッ！！・・・コキンッ！！・・・

「いでででで！！！」
「な・・・なんだこりゃあぁぁぁ！！」
「ぎゃあぁぁぁ！！は・・・外れねえぇぇぇ！！！」

「秘技・・・人間テトリス!!」

手足の関節を“ツボ”を押して外し、三人分の物をうまく絡ませてパズルのように組み合わせてからまたはめ治すというトンデモ技である

しかも、無理やり外そうとすると関節をさらに痛めるという仕組みなので外から外してもらわない限り解除不可能である

・・・俺以外に出来る奴が入ればの話だが・・・・・

さて、そろそろ潮時だろうな

この騒ぎを駆けつけて遠くから兵士達が走って来てるのが見えてきたいろいろ面倒事にまきこまれたくはない・・・だから!!

「少年!!逃げるぞ!?」

「えっ?は・・・はい!?」

一応この少年も連れて行きながら逃げる事を決める

そして、俺達は全速力でその場を去っていったのだ

5分後・・・

「はぁ・・・はぁ・・・さすがにここまで来りゃ追ってきはしないだろう・・・」

「けほっ!!つ・・・疲れたあぁぁぁ・・・」

もはや騒ぎは聞こえず、俺達は商店の並ぶ大街道の隅で休んでいたさすがに全速力は辛かったな・・・・・

「ふぅ・・・・・さっきはありがとうな?」

「えっ!?・・・は・・・はい!!」

一応この子には礼を言っておこう
大事に至らない結果まで導けたのはこの子の手助けがあったからだ
と言っていいからな

「でもな・・・小さい子供が危ない事に首を突っ込むのは関心しない
いな・・・」
「・・・!?子供扱いしないでください!!」

おおっと、この子にとってはそういう事は突っ込まれたくはないそ
うだな
でもな・・・・・・

「事実、無関係な一般人を巻き込み、俺にまで矛先を向けられるはめにさせた一番の原因はどこのどいつだ?」
「うっ・・・!」

まぁ・・・喧嘩を買ったのは俺だがそういう事は本来めんどくさい
から止めてるんだよ
だけど、この子みたいな場合は別だがな・・・・・

「大人ぶる余裕があんなら人に守られる心配させないようにするんだな?」
「ううううぅ〜〜〜!!!」

口元を歪めて悔しそうに此方を見てくる
・・・・あ、そういや思い出した

グワシッ!!!

「ふひょ！！」
「援護してくれたのは感謝するが人の背中を足蹴にしてまでやることじゃねぇだろうが！？」

ミョ～～～ン！！！　ミョ～～～ン！！！　ミョ～～～ン！！！

「ひふぁい！！ひふぁい！！ひゃふぇふぇぇぇ！！」
「だめだ、これは全体的な結論によるお仕置きだ」

俺は少年の両頬を両手の人指し指と親指で摘み、少し強めに引っ張るそれを止めさせようと少年は俺の腕を外そうとするがいかんせん力量の差によってそれは叶わず・・・
見事に伸び縮みさせていくばかりであった

「ほれほれ！？」
「ふえぇぇぇ～～～ん！！」

あ、やべ、本気で泣きそうだ・・・
そろそろ止めてやろう
そうして手を頬から放してやるのだった

「ぐす・・・」
「あ～・・・悪かった、俺も調子こいたわ・・・スマン」

少し拗ねちまったな・・・
これはまいった・・・前世で子供が注射を嫌がる時に泣き顔は何度か見てきた事はあったがそれとはまた別のパターンだからどう声かけるか・・・・・

「まぁ・・・体は大事にした方が良いぞ・・・正義感が強いのは良

い事だがそれによって命の危機に合うような事態に何度も合ってちゃ身が持たない」
「だって・・・」
「お前の体はお前だけの物じゃないんだ・・・産んでもらった親御さんを心配させる事だけはするんじゃない」
「・・・・・」
「いいか、世の中ってのはな、唯正論だけを振りかざしてるだけで進むほど簡単にはできてはいない。自分の目指す道を進むためにはその為の努力を精一杯するんだ」
「・・・うん」
「焦って大きな目標にすぐ挑もうとするな？地道に小さな目標を少しづつ達成させていく・・・それが成功へと繋がっていくものだ」
「はい！！」

これくらいに言っとけばいいかな？
昔培った患者への励まし方がこんなとこでも役に立つとはな・・・・
それに、どうやらこの子も納得してくれてるようだ
さて、そろそろいくとしよう・・・・・

「ヴァンデスデルカ様！！」

・・・・か？

「お探しになりましたよ？お見失いになられたと聞かれて【ファルミリアリカ様】もご心配なされております！！」
「母上が！？」

な・・・なんだ？
突如として騎士としての姿をした４０代後半の中年の男がやって来

て隣にいた少年に呼びかけてきた
一瞬の出来事であったから少なからず俺も驚いてしまった

「ペール!!聞いて!!この人がね!!」

そう言いながら少年は騎士に何やら話し合う
そして、話終えると今度は此方に向かって歩んできた
すると、俺の目の前に立つといきなり騎士の礼義の形を取り始めた

「へ・・・え・・・?」

「話はお伺いました!暴漢共からヴァンデスデルカ様を助けていただき誠に感謝いたします!!私の名はペールギュント・サダン・ナイマッハと申します・・・フェンデ様に代わって重ねてお礼を申し上げます」

フェンデ・・・ナイマッハ・・・・・・
どこかで聞いたような・・・・・・
・
・　・
・
て!!

「あ・・・あの!!ホド領主ガルディオス伯爵の分家、『剣』と『盾』の役割を果たす騎士の名家、フェンデ家とナイマッハ家!?」

なんたる偶然だ・・・そんな大物がこんな所に・・・・・・

「いかにもその通りであります、私はその内の『盾』の役割を受け持つ者とされております」

「いえ！！ご丁寧にどうも！！」

あまりの緊張に声が張っていた

「そこで突然となんと言いますが、ヴァンデスデルカ様は貴方様にお礼がしたいとのことでして・・・お屋敷にご招待させてもらいたいと申して居られる」

「うん！！僕もお礼がしたいから是非来てほしいです！！」

いろいろとまずったかもな・・・・・

そう考えるのは少なくなかった・・・・・

かくして、俺はフェンデ家に招待される事になってしまったのだ・・・・

そこで起きる事は一体なにが待ってるのやら・・・・・・

第3話（後書き）

皆さんご察しの通り、この少年は幼少時代のヴァンでした
これからの展開も期待していてください！！

第４話（前書き）

二日前、右手を怪我しました・・・・・
久々に声にならない叫び声を住宅街の中で出してしまった

第４話

コポコポコポ・・・・・

「紅茶はいかがですかな？」

「あ・・・はい・・・いただきます・・・・・」

今俺はフェンデ家の豪邸の客室にいる

そこで待たされる事になり、ここの執事さんらしい人から紅茶を勧められていた

というか・・・落ち着けません・・・・・

こういう場合はコーヒーが一番良かったんだが生憎この世界にコーヒーはないそうだ

だから普段飲まない紅茶でなんとか精神を抑え込ませていた

「・・・でかい屋敷だな」

そのついでに部屋を見回してみる

この屋敷に来る前にガルディオス家の屋敷も見たが、此方の屋敷の土地坪はそれよりやや小さいと言ってもかなりの広さだった

やはり貴族としての威厳を表すように２０００年もの間で少しづつ大きくしていった結果、この屋敷の形となったのだろう

キイィィ・・・・・

「・・・・・！？」

扉が開いた・・・・・

そこには二人の人間がいた

・・・一人は威厳に満ちたような男性・・・・・恐らくここフェンデ家当主の方だろう
んでもう一人・・・・・・て、あの子じゃないか!?

「待たせてすまない・・・暇を余らせてしまったかな?」
「いえ・・・そんなことはありません!むしろ俺・・・いや私みたいな者をこのような所にご招待させていただき感謝しきれません!!」
「ハハハ・・・そう謙遜なさらなくてもいいのだよ?普通に君として何時も通りの口調で話してもらっても構わないさ」
「は・・・はぁ・・・・・」

・・・立派な志を持った人だな・・・・・
そう思えた、きっとこの人は屋敷中の人達に慕われてる気がする
先ほどの執事も穏やかな顔をさせていたな
恐怖等で従わせるような場合ならあんな表情は出来ない筈だしな・・・・

「詳しい事は私の息子から聞いている・・・改めて礼を言わせてもらおう・・・・・そして、申し訳ない」
「・・・へ?」
「ヴァンデスデルカ・・・お前は無断で一人になり、己の立場を弁えずして剣を振って命を危うくさせ、さらには何の関係もないこの人にまで迷惑をかけた・・・・・何か言う事はあらぬか?」
「・・・・・申し訳ありません、父上、それと・・・」
「ハイルだ・・・ハイル・シュヴェール・・・・・」
「ハイルさん・・・ご迷惑をかけ、さらには助けてもらい誠にありがとうございました・・・・・」
「いや・・・まぁ・・・偶然っちゃあ偶然・・・だからねぇ・・・・・」

厳格な人だ・・・・・
どうやら話を聞くにこの子は屋敷の外を自分の母と護衛達で出かけてたのだが、少し退屈になったらしくて自分でどこか行ってしまったそうだ
そして偶然にもあの現場に遭遇して俺に会ったという事だ
やれやれ、母親も心配しただろうなぁ・・・突如いなくなってたんだからな
この人もそうだ・・・怒りの顔でこの子を今も睨んで向き合っているが内心は知らせを聞いて慌てていただろう

「このように・・・息子も十分に反省してる様子です。どうか許してはもらえないだろうか？」
「大丈夫です・・・俺が手を出したのはこの子と同じように男達がやってた事が気に入らなかっただけですから」
「そういえばハイルさんって誰からあんな武術習ったんですか！？すごかったですよ！！大きな人でも軽々と投げてて・・・・・」
「軽々しく口をはさむなヴァンデスデルカ！！私はまだ許した訳ではないぞ！？」
「・・・・・はぁい」

いきなり怒鳴られて少年・・・ヴァンデスデルカはシュンとしてしまった
まだ自分は叱られてる最中だと意識したのだろう

「さて、そろそろ主題の方へ入らせてもらいたい・・・・・ペルスラン！！」

そう誰かの名を呼ぶと扉の奥から先ほどの執事が少し大き目の袋を持って此方にやってくるとその間にあるテーブルに置いた

「ここに２０万Ｇ（ガルド）ある・・・感謝と謝礼を同時にしてこれを送らせてもらいたい・・・・・受け取ってくれぬか？」
「に・・・２０万！！」

ここの通貨はＧ（ガルド）と呼ばれる物で流れている
円と比べてすれば１Ｇが約１０円と換算できると昔考察した事がある
つまり、ここにあるのは円にして約２００万円であるということだ
一般の市民が一括してもらえるような金額ではない
家族三人で普通に１０年ほど暮らせるようなくらいなのだから・・・
・・

だけど・・・・・

「・・・・申し訳ないのですが、これは受け取れません」
「・・・なぜかね？もし良ければ理由を聞かせてもらいたいのだが」

少し驚いたような顔をしながらそう問いかける

「対価としてもこれほど貰うのも割り合わない・・・・・それに、俺はこういうのを貰いたいためにその子を助けた訳ではありません。遠慮とかを入れずに言わせてもらえばそう言う事になります」

これは昔からある性分だ
医師として手術代は常に対等な料金で支払われた場合でなくてはいけない
俺には良く勤めていた病院よりも大手の場所からの勧誘や引き抜きのメールや紹介書といった物を散々送られて来た事もあった
時には米国や英国のとある有名な大学病院からもだけど、俺はそれをすべて断ってきた

たしかに、普通ではない設備や場所は俺にとっても憧れてる所もある・・・・・が

ただそれだけでしかない・・・・・

患者を生かそうと唯治療していくだけの奴にはなりたくなかった
俺は患者に生きたいと考えてくれるようにする奴になりたかったんだ

だから・・・・・“ご褒美”を貰う為に得にしかならない事だけをやり続けるような人生は送りたくないのだ

「ですから、それは頂く訳にはいかないんです」
「・・・・・そうか、君がそう決めるのなら私はそれを受け入れなければならないな」
「すみません、折角の御好意を無駄にさせてしまって」
「いやいや、このようにするのを決めたのは私自身だ・・・君には何の不義はない、だが困った・・・それでは私が納得する事は出来ぬのだ・・・・・」
「父上、ではこういう事は・・・・・」

ヴァンデスデルカは耳元で何か囁いていた
聞き終わった途端、微笑をしながらまた話かけてきた

「ではこうしよう、何時でもこの屋敷に遊びへ訪れると良い！私達は君の事を歓迎させてもらおう」
「え・・・えぇ！！い・・・いいんですか・・・・・？」

これ以上もないほどの特別待遇とも言えるだろう
下級貴族でも当主に会うためには一々アポイントを取らなければならないのに・・・・・

「その時には私の息子ともぜひ話し相手としてあって欲しい！なにせ同世代の友達を持つ機会があまり訪れにくい立場ゆえでな・・・・・」

「それで良ければ幾らでも良いです！ただ・・・俺はフェレス島に住んでますからそれはホドへまた来る場合になりますけど？」

「ハイルさんフェレス島出身なんですか？」

「あぁ、もしよかったら一度いらしてください！そこの高台から見る海の絶景は絶賛物ですから！？」

その後は俺は屋敷を出て宿屋に戻った

そこに待っていた物は・・・・・両親の雷でした（汗）

面と向かって怒られるのは子供に戻ってもやはり辛い物です・・・・・

トホホ・・・・・・

かくして、俺の貴重な時間は終わりを迎えたのだった

あれ、なんか忘れてるような・・・・・・

やべ、当初の目的達成してねぇ・・・・・・

それに気づいたのは島に戻る寸前だったとか・・・・・・

第４話（後書き）

公式でも外伝でもヴァンの父親の名は判明しておりませんでした。
よって書かず仕舞いとなりました。
ご了承お願いします。

第5話

「荒れ狂いし濁流よ！≪スプラッシュ≫！！」

今俺は島の端にあるさら地で譜術の練習を行っていた
街中で派手にかますのはご法度だからこんな所でやるしかないのは当たり前だが・・・

ザバァァァッ！！！

激しい水流が地上の真上から発生した譜陣から降り注ぐ
水の流れだからとは侮れず、その威力は辺りの地面を抉り、岩の一部を削り取るほどだ
俺は色々自分の譜術の才能を自分で調べていた
その結果でわかったのは俺には第七音素（セブンスフォニム）の他に第四、第六が適正で良いらしい
他は使える資質がまったくなかったそうだ
そもそも、譜術とは音素をフォンスロットというここで言う“ツボ”を通して取り込み干渉することで魔術的奇跡を起こす技術の事を言う
それを受け入れる物は分量や資質が先天性で決められてしまっているまぁ・・・簡単に言いや食べ物の好き嫌いのような物だな

「ふぅ・・・中級譜術は良くて５・６回までか・・・・・」

俺が譜術を使えれように決めたのは先行性の攻撃ができるようにするためだ
合気や柔術だけでは人間相手ならまだましも・・・魔物相手ではそうは言ってられない

さすがの俺でも3mも背丈があるような魔物とかをこの技術だけで
立ち向かえる筈がない
それを解決させたのが譜術を使うことだ

だが・・・

「やっぱり使う時に静止しないといけないのが問題だな・・・・・」

やはり動けないという問題があることだ
もし一人の場合では危険性はかなりアップされてしまう
防御もできないまま攻撃されるのがオチである

「・・・・・武器を・・・持つか?」

だからこう俺は考える事にした

では、さっそく武器屋へ直行としようか?

~20分後~

「よぉ!!シェリイーおばさん元気か!?」
「あぁぁ!!ハイルの坊主じゃないか!?あんた家の店に何しに来たんだい?」
「おいおい・・・武器屋に来るというならやる事は一つと決まってるだろ?」
「冗談は止してくれよ!?おまえさんのような本の虫が武器を扱う?ハンッ!!十年早いね」
「客に言う一言がそれかよ!!後齢で店始めたから追いつけなくて頭呆けたか?」

「ふん！！未だ小便臭いガキが何言ってんだい！？家はまだまだ現役だよ！！」
「もう『ピ――――』は固まって引退してんじゃないのか？」
「「ぐぬぬぬぬ！！！」」
この人は武器屋の店主シェリイーさん
豪快で男勝りな性格をしている事で評判だ
俺とはちと色々あって会っては言いあっているという関係になってしまっている
本人が言うには『可愛くないガキ』との評価だ・・・・・
余計なお世話だ・・・・・ババァ・・・・・
ゴホンッ・・・愚痴を零してしまったな・・・・・
ちなみに、俺は筋肉を鍛えるとかといった運動はあまりしていないだから回りの住人には俺を本ばかり読む奴・・・・・つまり、本の虫と思われている
「ま、このままだと長くなりそうだから武器見せてもらうぞ？」
「たくっ・・・とっとと選んでさっさと帰んな？」
「ハイハイ・・・ワーったよ」
そんなこんなで陳列された武器の数々を見させてもらう
剣、槍、杖、手甲・・・・・どれもこれも攻撃に特化した武具ばかりである
その中で侍の魂と呼ばれた刀まであったのを確認した時は驚いたが・・・・・
だけど、俺はこれでは選べない・・・・・
俺は刃物はメスか包丁かナイフといった最低限の物しかこの手に握

らない事に決めている・・・・・
手甲も良いかと思ったが、これを使うためには格闘術を習う事になってしまう
折角のスタイルを大きく変えてしまうからアウトだな
ではなにか・・・・良い物が・・・・・・・・ん？
そんな中、陳列台の隅にそれはあった・・・・・

「おばさん・・・これは・・・・・・！？」
「おや、そんな所にあったのかい？すっかり売れないから忘れかけてたよ・・・・・譜銃を見るなんて久しぶりだね」
「譜銃・・・？」
「そ、フォンスロットから取り込んだ音素（フォニム）を譜銃の中の感知収束装置を使って集め、それを弾丸として打ち出すものさ・・・剣より軽いし女性にも扱える代物だから昔仕入れた物なんだけどね・・・ふざけた事に欠陥品だった訳だよこれが」
「欠陥？」
「感知収束装置が普通より強めでさ、普通より威力が強い音素弾を打ち出す事が出来るんだけど代わりに連射ができなくなっちまったんだよ・・・・戦場では行動の早さが命取りとなるのにねぇ・・・・2・3秒しないと発射されないんだこれがまた」
「・・・・・」

聞いた事があるな・・・・・
譜銃は確かに遠くの敵を攻撃するのに有利なものだが・・・物理攻撃力はないことが欠点だ
盾や幅の広い剣で簡単に音素弾を弾かれてしまうから対人戦では不向きとされてたらしい
だけど・・・

これは使えるかもしれない・・・・・！？

「おばさん!!これくれ!?」
「はぁ?お前さん家の話を聞いてなかったのかい?これは・・・・・」
「それを承知で言ってるんだ!!売ってくれ!!」
「・・・酔狂でも起こしたかい?ま、いいか・・・売れれば良しとしておこうじゃないか?」
「ありがとう!!」
「ふん・・・とっとと譜業店のとこ行って撃てれるように音素振動数を合わせてもらうよう調節してもらうんだね」

そして、少し安めの代金を支払い店を出ていく
目指すは譜業店にある工房・・・・・
調節のついでにある事をしてもらおう・・・・・
ひょっとしたら・・・

“アレ”が・・・・・再び・・・・・・

それは・・・傲慢だったかもしれない・・・・・
“アレ”は俺が初めて持った武器だから、それが良かったと思った
それとは別に、戒めとして形に表して自分の傍に置いときたかった・・・・
それが贖罪になると・・・勘違いした・・・・・
いや、勘違いしたかったのかもしれない・・・・・

そして彼は、かつて血濡れた牙を再び手に入れる・・・・・

それは何の為に使うのかは・・・彼のみが知る・・・・・

第6話（前書き）

今回はちょっと長めです

第6話

ダンッ！！！！！

音素弾は目標に向かって飛んでいく
それは光の速さと同等の威力によって・・・・・
遠くまで飛ぶその光は的を見事撃ち抜いた

「・・・まだまだだな・・・・・“アレ”には届かないか・・・・・」

その手に持つのは改造され、普通では見られない形をした譜銃
銃身長（バレル）は三倍にもなり、銃床は重りを付けてバランスを保たせる
それから発射される音素弾は大口径の大きさにまで引き上げられ、
連射性を失った代わりに飛距離を三倍にも高めた代物
俺はこの作品を≪狙撃譜銃≫と命名した・・・
この世界では狙撃という物は弓矢が主流という認識が強められている
確かに、譜銃より弓矢での威力は物理面として勝る
それに比べ、音素弾は弾というより熱の塊と言い表した物だと考える
こいつはあのライフルの弾と比べて重力、風、湿度等、様々な要因
に大幅に干渉されるので基本的に命中は期待出来ないし威力もかな
り半減するので使い勝手が悪すぎるのだ
だが、それは悪魔で普通の譜銃の場合だが・・・

その分こいつは狙撃という技術面に特化している・・・だが、
まだ標準は元よりついたサイト（照準器）でしか合わせられないか
ら自分の目を使うしかない
銃身（バレル）に施す筈のライフリングも刻まれていない

弾の威力もかつてのライフル銃に届かない
まだまだ問題がありすぎるのだ

「良くて2・・・300mが限界ってとこか」

これでもかなりレベルアップしたが・・・俺には満足できなかった
やはり自然に前世の物と比べてしまうからそう考えるのだろう・・・
・・
けど、弾の制限がないのが一番の頼もしさといえる

「実験はこれで終わりにしよう・・・」

これにて、本日の実験は終了となったのだった・・・・・

～30分後～

長く歩き続け、ようやく街地へと戻ってくる事が出来た
狙撃譜銃は布を巻き、ベルトを細工して背中に背負えるようにしてある
形が形だから変な視線を浴びたくないのでこうしているのだ
そんなんで街中を歩いていると広場で多くの男女が集まって雑談しているのが見えた
途中として、その雑談を聞きながらにすることにしてみた

「もうすぐガイラルディア様も3つになられるのね・・・」

「今度の誕生祭はどのような出し物があるのかしら?」

「そういやシグムント様が後ほどここフェレス島に視察に参られるらしいぞ！？」

「ホントか！？そりゃあ大変だ！！店に戻った方が良いな！？」

・・・確かに珍しいな・・・・・

ジグムント・バザン・ガルディオス・・・・・

ホド領主にしてフェンデ家当主が使う古流剣術アルバート流の派生、シグムント流の使い手とされている

そこにはたしか二人の子を授かったんだっけ・・・・・

その片割れが確かガルディオス・ガラン・・・・・

ま、んな事俺には大して関係ないんだがな・・・・・

それより、早く【栄光を掴む者】についての手掛かりを早く見つけないと

実は、ホドでの図書館行きを逃したために資料が少なすぎて困っているのだ・・・・・

・・・誰か他人の家からそれ関連の書物を譲ってもらうぐらいしかもう手立てがない

さらにはっきり言えば・・・・・金がねぇんだ・・・・・

金欠狙撃手・・・・・

こんな肩書きは絶対いや――――――！！！

そして、予定通りにホド領主はやって来た
護衛としてナイマッハ家当主、ペールギュント氏を筆頭に幾人かの
護衛兵を連れてだ
街は今歓迎のため、パレードそのものという現状がお似合いだ
お・・・ノワール達もいたわ
今俺は例の高台にいる
やはり見晴らしがいいから街全体を殆ど見渡せるから良い所だと言
える
ん?子供を二人連れて船から出てきたな・・・・・
たぶん、女性の方はマリィベル・ラダン・ガルディオスだろう
確か歳の離れた姉だった筈だから間違いないだろう・・・・・
・・・・・となると、来てないのはユージェニー夫人か・・・・

ユージェニー・セシル・・・・・
キムラスカの公爵家セシル家の出身で、和平の証としてシグムント・
バザン・ガルディオス伯爵のもとに嫁いだ方らしい
今でもちとキムラスカ出身だからと何かと反発をしてる派が存在し
てるらしいが、伯爵がうまく受け流しているからその事に関しての
心配はあまり必要なさそうとのことだ
そのためかどうかは知らないが、今回の視察の参加は拒否したそう

だな
でも、マルクト貴族の間でなにやら裏で何やら噂してるらしいがな・
・・・・
“ユージェニー夫人はキムラスカよりの間者（スパイ）とのことらしい”
これがホントかどうかは俺には区別は付けれない
だが、伯爵は愛妻者として評判され、その夫婦関係も良好であると
評判されてるからその噂は迷い事として俺は取らせてもらうとしよ
う・・・・・・
さて、そろそろこの視察も終わりに向かってるから帰る事にする・・
・・・・・・・
・・・・・ん・・・・・・・？
～Ｓｉｄｅ：？？？～
ククク・・・・そのままだ、そのまま・・・・・
俺はとある暗殺団の一員だ・・・・・
今回の依頼はあの名家ガルディオス家の当主の暗殺・・・・・
依頼主はとあるマルクト子爵の男からだ
なんでも、戦争に否定的なガルディオス伯爵を殺し、そこから我ら
マルクト帝国にいる異分子を芋づる式に拘束するのが目的らしい
けっ・・・綺麗事言えば依頼しやすくなると思って安く見やがって・
・・・・

どうせ自分達の地位を底上げするためそのために邪魔な有力な伯爵を殺したいだけだろうが・・・・・
まぁ・・・俺達暗殺団にとっちゃ善悪など関係ねぇ・・・・・・
いかに多く報酬を貰えるかが問題だからな・・・・・・

よし、あの位置でいいだろう・・・・・

俺はバックにある弓矢を取りだし、弦を張りつける
そして、矢の矢じりには別に取りだした木筒に入った毒液に浸す・・・
こいつはテオルの森の植物系の魔物が持つ毒を抽出した物だ
ひとたび体に入れば震えが止まらなくなり、傷口の周りから腐食が広まり、そして死に至る
使う俺でさえとんでもねぇ毒薬と思えるほどの代物だぜ

じゃあ、始めようじゃねぇか・・・・・

俺は矢をつがえ、弓を引き始める
木製の弓がしなり始め、不気味な音を響かせてく
そして、狙いは民衆に手を振り笑ってる伯爵の所に定められる・・・・
これで大金が貰えるから楽なもんよ・・・・
後はこの場から立ち去れば良し・・・と

そうして自身の輝かしい未来を手に掴むため、弓を最後まで引き終える
後は指を離すだけ・・・これで良い・・・・・
そして、矢は放たれる・・・・・

ダンッ！！！！！

事を彼が許すはずがなかった・・・・・

「ぎゃあぁぁ！！！」

男は何が起きたのか全く分からなかった・・・・・
雷鳴のような大きな音が鳴ったかと思った瞬間には自分の左手が血を流し、弓が壊れたのである

「な・・・なん！！！」

ダンッ！！！！！

またもや音は鳴り響く
その次には男の右足に穴が開くという現象が起きた
その事に脳が気付いた時には激痛が走り、耐えれず絶叫を上げた

「あの屋根の上に誰かいるぞ！？」

「矢を持ってる！？今すぐにあの者をひっ捕らえよ！！」

そして、男は結局誰に自分の左手と右足を壊されたのかわからないまま・・・処刑される事となるのであった・・・・・

「・・・悪いな、人を殺すような事をしようとしている奴を見ては関係ないで済ませる訳にはいかないんでな・・・・・」

その当の本人は、自室の窓から外を見て煙を出す狙撃譜銃を上に向けて持ちながらそう呟いてたとか・・・・・

第6話（後書き）

台風通り過ぎるの早・・・
自分としてはもう少しとどまって欲しかったかな?

第7話

皆さん改めてこんにちわ
ハイル・シュヴェールです・・・・・
今や１６となり、立派に今・・・・・

「ハイル！！そっちの網を早く引け！！」

「だあぁぁぁ！！重えぇぇ！！！」

父の漁の手伝い係に任命されました・・・
なぜかって？もちろん小遣い稼ぎです
この世界の漁の仕方は一般的に網漁とされているらしい
竿釣りも一応あるらしいが、大物のみでそれでは商売にならないらしくて主にしている人は大していないそうだ
しかも魚の種類は多くして市場に売り込むのが得策との父の経験談がある

「網は束ねて持て！！広がったまま引っ張るんじゃない！！破れるぞ！！」

「くぬうぅぅ！！！」

しかし、さすがにこれは応える・・・・・
めっちゃくちゃ辛いです・・・何十キロあるのかと思うわ
元傭兵だからの父は楽々に引いている
・・・・筋力はやっぱ付けた方がいいかもしれん

「よしよしよし！！今回も収穫ばっちりだ！！」

「ぜぇ・・・ぜぇ・・・やっと引き上げれたあぁ・・・・・」

ようやく仕事完了だぜ
この量だとすると・・・よくて３０００Ｇくらいは良くて儲けられるな
この世界の月間生活費は一家一人で２０００Ｇほどだ
量は週に二、三回行うようにしてるから月額最高４００００Ｇ稼げる
つまり、引いて一家の月間に蓄えれる貯金は最高３００００Ｇとなる
これで普通だから恵まれてる方だと俺は思う
この世界でもやはり貧民という人達はいるらしい
そういう人達は戦争で親を亡くした子供たちや男手がない母子家庭・・・またはその影響で仕事場を失くした者達がそうなってしまう事が多い
現にマルクトの首都グランコクマにも影でひっそりと生き続けてる者達がいるのだ
だが、中立国のダアトや貴族政の意識が高いキムラスカよりは少しばかり人数は少ない
戦争の実績が良い方が難民も少なくなるのもかつての世界でも同じことだったな・・・・・

「おや？向こう側から船が近づいてきているな・・・」

「ん？どうしたんだ父さん・・・・・」

おかしいな・・・フェレス島の領域海を犯してやってる訳ではないんだが？
そうしている内にも向こう側から止まれの命令サインが出されてるのが見えていた
・・・・まぁ、話は聞いておく事にしようか

「立ち止まれ！お前達は何者だ？」

「いえ・・・私達は唯ここら辺の海域で漁をしている者達です。別に怪しい者ではありません」

「・・・そうか、なら警告させてもらう。今日からここいらの海域での留まりは禁止させてもらう。我がマルクトとキムラスカとの国境線での小競り合いが始まりはじめた・・・しばらく危険な状態が続くとのことらしい」

「はぁ！？ちょっと待ってくれよ！！それじゃあ俺達はどうやって仕事すりゃあいいんだよ！！ここら辺じゃないと良いのが獲れないんだから無理言うなよ！！」

「この指示は皇帝陛下による物だ！！逆らうというのなら国家反逆罪となる可能性があるぞ！！」

「ハイル！！やめろ！！・・・倅がご迷惑をお掛けいたしました。すぐ終わらせます・・・・・」

「父さん！？」

「・・・・・行くぞ」

父はそれ以上は何も言わず、船を漕ぎ始めた
確かに俺もわかっている・・・・・
この世界は絶対王政が布かれてる
王の命令に逆らう事は即罪人と見なされ、悪くて処刑だ
父も俺達家族を余計な目に合わせたくないからと下手に突っ込むよ

うな事はしたくないんだろう
だから・・・今は我慢だ・・・・・・

「わかった・・・それではそちらの兵士さん」

だが・・・

「なんだ小僧?」

「F●ck you and go to hell♪」

「は・・・?」

少しは仕返ししとく・・・あちらには解らない言葉で
おまけに指立てのポーズもキメてだ!

さて、そんなかんだで仕事を終えた俺達はすぐさま家へ帰った
何時もより早い帰宅に母は不思議がっていたが、原因を述べればすぐさま納得し軽く両親同士で文句を言っていた
そんな所を見送って俺は古本屋へ向かう
今回はなんと!!ホド島の図書館からの余分な本を買い取ったとの話を聞き、さらに古代イスパニア語の歴史的文書が売り出されたのだこれを逃す訳には行かない!!
急いで俺はそこへ向かうため、ダッシュしていく
街道には何人かいるが、避けれるほどの反射速度は持っている
そうして走っていくと広場に出てきた

「あら!?ハイルじゃないの?どこいくんだい?」

「そんなに急ぐなんて珍しいじゃねえかお前?」

「何時もは本の虫のハイルがゲスか?」

「明日は雨が降るかもね・・・・・・」

「いや、槍が降るだろうな・・・・・・」

そこの外野!!やかましいぞ!?
俺は人外生命体かコラ!!
少しムカついたので・・・・・・

「落ちよ!!光の鉄槌!!≪リミテッド!!≫」

きっちりお仕置きはしときました
もちろん手加減してるぜ?
さて急ごう・・・・・・

「あたいらが何したっていうのよ~!!」

少し焦げた状態のまま後から叫んでる姿が見えたが気にしない方向で・・・・・・(酷!?)

ようやく念願の物が手に入り・・・俺は家へ持ち帰った後すぐさま書を開いた

辞書のようになっているからかなりの単語が入っている
そこから探して行ってやや一時間・・・ようやく見つけたのだが・・
・・・

「・・・・これは何かの悪戯か・・・ローレライ・・・・・・・？」

その結果に問題があった・・・・・・
【栄光を掴む者】・・・・・・
辞書から関連した場所を取りだして行き・・・・・・
それは、古代イスパニア語で表して行くと・・・・・・

Ｖａｎ，，，，，名誉、勲章、栄光

ｄｅｓ，，，，，～の、を

Ｄｅｌｃｕ，，，，，手に入れる、獲る（～ｃａ）・・・の人

Ｖａｎｄｅｓｄｅｌｃａ　・・・つまり、あの子の名前だったのだ・
・・・・

俺はこれが解ったと同時に思った・・・・・・
まだ１０歳ぐらいにしかならないような少年がどうやって島などと
いう大地の一部を消滅させるのか・・・
普通に考えてありえないようなことだ・・・・・・
もしかしたら、この一連の出来事はパズルのように外部からの力に
よって行われる物なのではないか？
ＮＤ２００２での預言の中には“季節が一巡りするまでキムラスカ

とマルクトの間に戦乱が続くであろう”
戦争が起こる事が記されているが、どちらが有利になるかは決まってはない
軍隊によるホド島周囲の警戒態勢・・・・・預言にあるホド島の消滅・・・・ここに何か謎があるかもしれないな?
まさか、預言の成就にはこの後マルクト軍の関与が必要不可欠とされている・・・・・
・・・・・こいつは大問題だな、

「とにかく、全てはお前だけが知っている・・・そう言いたいのか・・・・ローレライ?」

こうして謎が解けていくのだった・・・・・
全てが分かりきるまでにはもう・・・・・

やがて、舞台は始まりの幕を上げるカーテンコールへと近づいていく

第7話（後書き）

ちと今回は強引な感じがしました
スランプ症状がで始めそうです（汗）

第8話（前書き）

初めてロト6を買ってみた
今日が抽選日でやや期待状態です

第8話

「やあぁぁぁ！！！」
「甘い！！」

ついにＮＤ２００２になった……
ホドが滅ぶ……この子によって……
いや……詳しくは他の誰かの手によってだ。

「うわあぁぁ！？」
「まだまだ重心が剣を振る時に引っ張られてるな……脇を絞めて弧を描くように振ってみなさい」
「は……はい！！」
「ハイル君……わざわざすまないね？ヴァンデスデルカの試合相手をしてもらって」
「いえ？こちらは武器を持つ相手に対しての対策訓練としてでも役立ってますからありがたいですよ」
「ハイルさん！！もう一度！！」
「はいはい……ではもう一勝負な？」

今回俺は約2年ぶりにフェンデ家に訪れる事にさせてもらった。今では自分で働いているため、船代を払う事も出来るくらいになったからだ。久しぶりの来家だったが、この二人は何の惜しみもなく俺を歓迎してくれた。特にヴァンのはしゃぎぶりは凄かったな……
……まぁ……ちょくちょく文通してたことがあったからなぁ……
あ……ちなみに愛称としてヴァンと呼んでほしいと言われたな。
それからは当主と何気ない世間話のような事をしたり、食事を楽しんだりと様々な事をしていたが……
ヴァンが剣の腕を俺に見てほしいとお願いしてきた。なんでも初

めて出会った時に見た俺の勇姿を見てからずっと腕を磨き続けてきたらしいから成長した自分を見てほしいと言ってきたのだ。そんでもって試合形式で体で実体験することに決めました。

「牙連崩襲顎！！」

そしてヴァンはアルバート流奥義を放つ。

一番最初に習得する基本でもあり、これで“卵”として認められる物でもあるらしい。

この奥義は双牙斬と崩襲脚を組み合わせた連続剣技とのことだ。

「ふっ！！」

木刀から繰り出される鋭い切り返しをバックステップで避けようとするが……

「そこだ！！」

遠心力を掛けた崩襲脚が俺の体を逃そうとはしない

ヴァンはこれで決まった！！そう確信したが……

「ならこうだ！？」

ハイルは片足を軸にして逆回転しながら蹴りを避け、そのままヴァンの後を取ったのだ。

そのままホールドされ、身動きができないまま座らされて制圧される結果になることになった。

「ここをこうして組んで締めあげれば……動けないだろ？」

「ウーッ！！ウーッ！！」

解こうともがこうとするが無理だった。それもその筈、今かける技はチョークスリーパーホールド……別名裸締という格闘技においては脱出不可能とされている技をかけられているのだからだ。

「これで5回目の負けが決まりだな」

「うぅぅ……ハイルさん強すぎる……」

「まぁな……力強くがモットーのお前の剣術にとって俺の柔術は天敵となるからな？そして、まだ剣を“斬る”ではなく“当てる”の振り方にしてるから間合いが分かりやすいってことが欠点になってるぞ？」

「ほぅ……やはり息子の剣の腕を正確に指摘できるとなるか」

「自分は唯体の仕組みから乗っ取って言ってる推測に過ぎませんがね？」

とまぁ、うまくやってる……こういう時間は俺も楽しむ事にしているし、いつかは必要になるだろう。

そして、今まで技の練習として相手した実験ｔ……島の皆よ有難う！！

「ふふ……中々賑わいになられておられますね？」

「母上！見に来てくださったのですね！？」

突如として後に使用人を二人ほど連れた女性が現れた。

おそらく、この人がヴァンの母親であるファルミリアリカ・サティス・フェンデ夫人だろう

……凄い美人だ、絶世だと評価できる。優しくて慈愛に満ち溢れてそうな人だ…

「ミリィ！マリィベル様とのお茶会に誘われてガルディオス家を出

向いた筈だが……ずいぶん早かったようだな？」
「え……えぇ……旦那様、別に大した理由ではありませんわ？少し体調が良くないらしくて私自身からお茶会を辞退させてもらいましたのです」
「母上？どこか悪いのですか？」
「大丈夫ですよヴァン？さほど悪くはない感じのようですから」
「……ミリィ、あまり無理をしないほうがいい。さきほどマリィベル様から知らせを頂いてな、なんでもお前は吐き気を催したそうではないか？」
「で……でも！！本当に大丈夫なんですの！？心配いりませんわ？」

何か隠してそうだな……
肌から見て脱水症状を起こすような病気とかにはかかってはなさそうだな……
嘔吐感だけは酷く、体の体調は大きくは崩しては無さそうだしな。
……この場合（ケース）は……

「ファルミリアリカ様、失礼ながら何度か御質問させてもよろしいでしょうか？」
「貴方様は……確か、ハイルさんでしたかしら？」
「はい、私の名前はハイル・シュヴェールと申します。以後お見知りを」
「貴方様の事は旦那様から聞かされておりますわ？なんでもヴァンの命の恩人だそうですね」
「偶然でしたからその件に関しては堅苦しい関係は必要要りませんよ、それで質問なんですが……例えば、近頃体が重く感じられたとか刺激のつよい味の食べ物を食べるようになった事はおありですか？」
「良くおわかりですね？確かに、そのような事を感じたりした事は何度か……」

「それで……無礼を承知で問いになられますが……」
「はい？」
「“月のもの”はここ二ヶ月ほどお止まりになられていらっしゃられてますか？」
「えっ！！！／／／／／」
月のもの……現代で言えば女の子の日、生理の通称である。
こんなことを平民で立場上まだ医者にもなってない俺が貴族に馴れ馴れしく聞くのは結構まずいんだが……
「ハイルさん、月のものってなんのことですか？」
「ヴァンデスデルカ！！余計な質問はしなくてよろしい！！……ハイル君、さすがにそのような質問は些か失礼ではないかな？」
やはり、自分の妻の体についてはあまり聞かれたくないような趣向がこの人にはあるか……ちなみにこの世界での医学関係の知識は医者や研究者、またはそうなろうとする人以外には殆ど知られていないらしい。この世界にも問診は別として触診などといった行為についても意味がわからないこともあるそうだ。
……となると言い訳は
「いえ、自分は医学関連の本をよく読んでおりまして先ほどの質問は別名“問診”という患者自身の体調不良を聞いて病名を判断させる一種の行為ですから別にやましい考えを持ってたわけではないです」
確かにそういう本を見た事があるが違った事はフォニムによる体の結合に関しての事と俺の知ってる外科手術の概念や治療法がなかったことだ。

あと、なんか間違った治療法が書かれた物があったのを見た時は本の著者に切れたね……

責任者出てこいやコラ！！

……だから、俺は自分が想いを込めて詰め込んできた医療知識はこの世界でも大切に持っていきたいしな。

「君は……医者を目指しているのかな？」

「それはまだ決めていません……ですが、間違ったことは言ってはいません」

俺はこの世界でも医者をやるか正直迷ってる。

治癒譜術や薬が主力の世界に外科手術と言った刃物や針などで体を切り開き、患部を取り除くといった常人には邪道の行いに見える代物を教えてそれが認められるようになるか？

俺はこれしか知らないし、これしかやらない……必要な場合だがな……

「少し、見せてもらいます」

でも、俺はやれる所はやる事にしよう……

しばらく二人は自分の妻、または自分の母を部屋の扉の前で待ち

続けていた。恩人の言葉を信じ、無事を心の底で祈りながら答えを待ち続ける

キイィィ――――

そして、扉が開き……初めに彼女が出てきた。

「ミリィ、ハイル君はどうだと言われた？」

「旦那様……」

ふと見ると少し様子が違った……

少し、恥ずかしそうに顔を伏せながら間を止め……次にこう言ったのだった。

「来年からここはより賑やかな家に御成りになられますわ♪」

「……む？」

フェンデ当主とヴァンはその言葉の意味がまだよくわからなかった。

だが、その意味を知るのは彼の次の言葉によってであった。

「おめでたですね？」

「……なんと！！」

そう、ご懐妊の知らせであった。

ハイルの読み通り、ファミリアリカは妊娠2カ月と診断できたのだ。

「え……ぇ……？どういうことなのですか？」

ヴァンはこの言葉の意味がまだ解らなかったようだ。
なので、解りやすくして教えてあげた。

「お前のお母さんのお腹にはな、赤ちゃんがいるんだぞ？つまり…お前はお兄ちゃんになるって事さ」
「僕が……お兄ちゃん？」
「そうだ」

そう聞き、分かった途端礼儀を崩すようにはしゃぎ回った。使用人や執事の人達も彼らにお祝いの言葉を次々と掛けていた。またこの家は幸せが一つ増えたんだな……

けど……この家族はあの預言でこの後どうなるんだ？
――話してあげたい――けど、それはこの先の未来を変えてしまい本来の流れから外れてしまう。

だけど俺は……この人達の笑顔を護ってあげてみたい……

ローレライ……この世界の残酷な運命はお前の意思じゃないんだろ？

お前も傍観者としてではなく何か行動を起こして欲しいんだがなぁ……

でも、できないから俺という異端者（イレギュラー）を生んだんだろ？

少し……ズルをさせてもらおうか？

第8話（後書き）

次話はホド戦争真っ只中です
早く本編書きたい……

第9話（前書き）

少しホド戦争編は長くなるかもしれません

第9話

「ハイル、どこにいるの～？」

彼女は家の中を探し回っていた
朝から自分の息子が見当たらないからだ

「どこにいるのかしら・・・あら？」

そして、息子の部屋に入った所でそれは見つかった
木製のテーブルに小さく置かれた置き書きである

「これは・・・・・！？・・・何をしてるのあの子は！！」

－－－－－－－－－－－－－－－－－－－

－－－－－－－－

～知り合いの無事を確認するため、ホドへ行かせてもらいます
勝手な判断をしてごめんなさい　～
ハイル

－－－－－－－－－－－－－－－－－－－

－－－－－－－－

その内容を見た瞬間、部屋を飛び出した
その後には夫にこの事を伝えるべくして彼の元へ向かった

「あいつは何をしているんだ！？今ホドは・・・紛争地帯になりかけてると言われてるんだぞ！！そこへ行くなんて・・・火の中へ飛

び込むに等しい！！」

「あぁぁぁぁ・・・・・ハイル・・・・・・・」

彼らに出来る事は・・・唯息子の無事を願い戻って来る事を祈り続けるしかなかった

～Ｓｉｄｅ：ハイル～

「父さん、母さん・・・ごめんなさい」

この世界に生まれ、第二の両親となってくれた恩は忘れません
こんな親不孝者だけど・・・再び会える事を願います
だから・・・必ずフェレス島へ帰ってきます・・・・

フェレス島から出発したホドへの物資運搬船の荷物の中に紛れながら俺はそう願う
今から行く所は戦争の場だ
まだホドは海上戦で持ち続けてるそうだ
この物資船は島の裏側から入港する予定の筈で俺はそこを狙って忍び込んだ
波に揺れる船と共に体を揺られつつも狙撃譜銃を抱えて息を潜めたまま到着するのを待ち続ける

「おい、聞いたか？ガルディオス領主の屋敷には親戚一同集まってたらしいぜ？」

「そういや今日はガイラルディア様の誕生日でもあったな・・・運が悪いぜ・・・二日間の内に来られてこれから誕生祭と思った矢先に戦争開始だもんな・・・・・」

「こんな時期に誕生祭やるってのは感心できない事があったけどよ・・・・今となっちゃどうとも言えねぇや」

「無事にホドへ辿り着けれるか不安だな俺達・・・」

その話からするとまだホドの陸地自体は無事か・・・・・
きっと領民は避難しようと混乱してるだろうな
けど・・・・何千、何万の人が預言による現象で亡くなる
島が消滅するという事は・・・大規模な爆発によるものだろうか・・・・？
とにかく、ヴァンに会いに行こう・・・話はそこからだ・・・・・・
被されている布から見ると、ホドは目の前だ・・・・・
そのままいけば・・・・・

ドゴオォォォンッ！！！

そんな時だった・・・・・
突如として物資船が攻撃を受けたのだ
帆は焼かれ始め、半分は機能しなくなってしまった

「キムラスカ軍の戦艦だ！！」

「やべぇ！！包囲網の緩い所を突かれて突破されちまったんだ！！
このままじゃ侵入されちまう！？」

「どうすんだよ！！向こうは譜術ブッぱなしてきて警戒体制だぞ！

！」

なんだと！！
めちゃくちゃやべぇじゃねえか！？
まずい・・・時間を取られたくないこんな時に・・・・・・！！
ここで戦うか・・・・・いや、まだ遠すぎる
こちらは唯の物資船、変わって向こうは戦艦・・・・・・こっちはあっという間に木端微塵にされちまう
となると・・・こうするしかない！！

ガバアァァ！！

「うぉ！！おまえさん誰だ！！」

「何時の間にこの船に乗ったんだ！？」

ザパアァァ！！

俺は後からかかる男達の声を無視しながら船から飛び降りた
背中に固定した狙撃譜銃は落とさないようにしてある・・・島までの距離はおおよそ２００ｍ・・・・・・
的は大きくされないように・・・気付かれず、注意を反らす・・・・・・
幾らなんでも軍は海上で人一人の為に労力を使うような事はしない筈だ
泳ぎきるしかないな・・・・・・

そして、俺はホドへと向かう

～Ｓｉｄｅ：ヴァンデスデルカ～

「父上・・・僕達はどうすればいいんでしょうか・・・・・」

「・・・・・」

父上から聞いた所、キムラスカの軍がホドに攻めてきたとの事だ
僕達は今ガルディオス家の屋敷にいる
将来剣を捧げる主人にして友であるガイラルディア様の誕生日により僕達フェンデ家一勢も出席したんだ
だけど、戦争が始まってしまった・・・・・

「ヴァン・・・どうしたの？」

「なんでもありません・・・・・ガイラルディア様」

これから五歳になるガイラルディア様は戦争という物をまだ詳しくは知らないんだ
だから、周りの空気のギスギスした物が疑問に思えて仕方がないらしい

「皆様方・・・このたびは大変な時期ながらもわざわざの御来訪誠にありがとうございました・・・・・ですが、今現在ここホドは危険な状態に陥っています・・・しかし、何とぞ落ち着きを持ったままでいていただきたい」

シグムント様はこの場に集まった親戚方を何とかまとめようとしているけど・・・騒ぎだしてるばかりで焼け石に水でしかない

時には八つ当たりの言葉を出し始める始末だ
どうしたらいいんだろう・・・・・
そう考えてると僕達の方へ使用人の一人が近づいてきていた

「フェンデ様・・・貴方様にお会いしたいと申されてる方々が屋敷の前まで来てらっしゃいます」

「・・・・このような状況で私に？してどのような者達だ」

そして、次に発せられた言葉に僕は嫌悪感を煮えたぎらせる事となる・・・・・

「フォミクリー研究所の者達との事です・・・・・」

～Ｓｉｄｅ：ハイル～

「げほっ！！げほっ！！・・・はぁ・・・はぁ・・・・・」

何分時間をかけたかは解らないが、どうにかしてホドの港近くで上陸することができた
全身びしょぬれで息は激しくなっている・・・相当の力を使い果た

してしまったか
周りには避難を求めて慌てている領民達が大勢いた

「いつになったら避難船が到着すんだよ!!キムラスカの兵達は目前にとなりつつあるんだぞ!!」

「このままマルクト人の俺達をマルクトが見殺しにするのかよ!!」

「おねがいです!!この子だけで良いんです!!早めにここから非難させてください!!」

「帝国は一体何をしているんだ!!」

其々の言葉が飛び交う中、俺は人混みを潜り抜ける
押され、引っ張られたりと様々な衝撃が襲うが一々気にしている暇はない!!
早くフェンデの屋敷に向かわなくては・・・・・

「大変だ!!包囲網が完全に破られたらしいぞ!!」

「本当か!?となると・・・キムラスカの奴らが流れ込むぞ!!」

くそ、向こう側はもう敵兵が徘徊してる事となるか!!
ますます難しいことになってしまったな・・・・・
出来るだけ姿を晒すのは得策じゃないと決めるとしよう
俺は出来るだけ裏通りを使う事に決めた
薄暗く、細道だから軍が進んで使うような道ではないと思うからだ
間に合うと良いんだが・・・急ぐしかないか

～１０分後・・・～

ガシャガシャガシャガシャッ！！！

「いたか！！」

「だめです！！見当たりません！！」

「くそ・・・何者かの奇襲を受けたが警戒態勢は怠るな！！再び発見次第殺せ」

「はっ！！」

しくったな・・・見つかった・・・・・
狙撃譜銃による攻撃で行方を追わせずには済んだがこの民家の中に隠れてても見つかるのは時間の問題だな・・・・・
それに予想以上にキムラスカの兵士が多い・・・屋敷に近くなりつつあるから収束しているんだろう
フェンデの屋敷やガルディオスの屋敷が攻められるのもそう遅くはない・・・・・
事態は・・・最悪だ・・・・・
生きて帰れるかはもう考えてる暇など与えてくれない

なら・・・俺自身が命運を掴み取るまでだ！！

よし、そろそろいく・・・・・

ドゴオォォォォォォンッ！！！！！

「なんだ！？」

突如爆発音が近くから発生してきた
かなりでかい物だ・・・・・
譜業兵器による物だろうか？

「・・・・あそこは」

たしか、ガルディオス家の屋敷だったはずだ
正門の防壁が壊されたか・・・・・
瞬く間にキムラスカ兵が屋敷へと侵入してるのが此方からでも見える
・・・絶体絶命かもしれない・・・・・あそこは

「貴様！！ここで何をしている！？」

「げっ！！」

考えてる暇はないんだ！！
もう後戻りはできねぇ！！
逃げ切るしかない！！

「凍てつきし氷刃の雨よ、来たれ！！≪アイシクルレイン！！≫」

第9話（後書き）

ふと思う・・・自分の作品はおもしろいかどうか詳しく知りたいです
良い点、悪い点含めてでも感想等を書いてもらえると嬉しいです。

第１０話

～Ｓｉｄｅ：ヴァンデスデルカ～

「お止めなさい！！ヴァンデスデルカをどうなさるおつもりなのですか貴方方は！？」

「この少年は第七音素譜術士（セブンスフォニマー）としての資質が最も高い。そして、ダアト上層部からの進言による事もあり、とある実験に付き合わせていただきたい」

今、僕と母上はホドにあるフォミクリー研究所に来ていた
少し前に屋敷にいた僕達の所に此処の研究員達がやって来てこう言ったのだ

――この戦争を覆すには貴方様の子息の持つ第七音素（セブンスフォニム）が必要不可欠なのです――

実は前々から僕は父上に連れられて此処に来ていたんだ
彼らが言うには秘預言（クローズスコア）に関連しているとの事らしい
ユリア様の子孫である僕達フェンデ一族が預言について疎かにするなんて言語道断・・・・・
すぐさま了承の意を相手に伝え、僕は研究所に出入りする事になった
でも、そこで行われた事は耐えがたい苦しみを催しながらの人体実験だった・・・・・
なんど抵抗した事だろうか・・・・・幾度逃げようとしただろうか・・・・

「グランコクマにいるカーティス博士は何と言っている？」

「すぐさま例の計画を実行せよとの事です！！」

「よし・・・すぐさま装置を作動させる準備にとりかかれ！！」

母上はこれから僕にされようとしている事を止めさせようとしていた
でも、女性の身が大の男達の力にかなう訳なくどこかへと連れていかれていく
ジェイド・カーティス・・・・・・
この男を僕は絶対に許さない・・・・・・
もし、会う事があるのなら・・・・・

――――――コロシテヤル――――――

～Ｓｉｄｅ：ハイル～

「死ねえぇぇ！！！」

「させるかあぁぁ！！」

グォンッ！！！

走り続け、迫りくる兵士をかわし、時には攻撃し、俺はフェンデの屋敷にとうとう潜り込むことができた

すでにこの中は所々キムラスカ兵によって蹂躙されており、壊れてる跡がむき出しだ
それに・・・ここの使用人であったであろう死体達も・・・・・
・・・・・ご冥福を祈る
そうしていると嘗て戯れた庭の方に出て来れたのだ

「これ以上この屋敷を壊させる事はこの老いぼれと言えども、ペルスラン・ギュスターヴが黙ってはおけん!!今はこの屋敷にはおらぬ当主様に変わって我が槍捌きを受けるがいい!!賊兵どもが!!」

「く・・・じじい!!命が惜しくば今すぐこの場で投降しろ!!」

「笑止!!汝らの仕えるべき者によれば我らは一人足りとも生かさぬ事を命令してるとの事!!虚実を良い張って隙あらば殺す魂胆であろうか!?」

「・・・では、我が剣によって血の海にまみれて死ぬがいい!!」

あれは!!ペルスランさん!?
周りを見るに、今まで戦っていたんだろう・・・・・
何人もの敵兵が床に血を流して横たわっている
・・・そうとうできるな
だけど、そろそろ限界だ!!
もう動きがおぼつかなくなってしまっている!!
助けるしかない!!

ドゥンッ!!!!!!

「ぬぉっ!!!!」

振り上げようとした敵兵の剣の柄を撃ち落とす
突然の出来事に敵兵がやや混乱し出したが・・・
その瞬間をこの老人が見逃す訳がなかった・・・・・・

「隙あり!!」

ドシュウッ!!!!!

兜の隙間を狙って彼の放った槍の一撃は敵の首筋を貫き絶命した
そして、それと同時にペルスランは崩れ落ちた
おそらく疲労によってだろう・・・・・

「ペルスランさん!!大丈夫ですか!?」

「ハイル様!?なぜこの屋敷へ!!」

「・・・偶然ホドに来てたんですが、このような事態になってしまったため気になって此処へ来てみようと思ったんです」

少し嘘だが今は詳しく喋ってる暇はない
あの子はどこなんだ・・・・・?

「ところで・・・ヴァンは・・・ヴァンはどこにいるんですか!?」

「ヴァンデスデルカ様でなさいますか!?あの方ならば隣に建つガルディオス様の屋敷に数時間前に御出掛に参られました!!」

「隣!?糞・・・入れ違いかよ!!」

「もし会われたいのでしたら・・・今は正門の方面は危険です!!

この屋敷の裏口を通ってそこからガルディオス様の屋敷に入られる方が一番安全ですぞ！！」

となると、この屋敷の最奥までいくしかないか・・・・・・
だけど、今いい方法は確かにそれぐらいしかないな・・・・・・
よし、なら話は早い・・・・・すぐに・・・・・・・

バァンッ！！！

「いたぞ！！ここに二人いる！！」

「発見次第抹殺せよと元帥のご命令だ！！攻撃開始！！」

くっ・・・こんなときに！！
時間が無いんだ！！お前達の相手は・・・・・・！！

「ぬうぉぉぉ！！！！！！」

ガキィィィンッ！！！！！！

「ペルスランさん！？」

「早くお行きなされ！！ここは私にまかせなされ！！」

「そんなことできません！！あなたも一緒に！！」

「うおぉぉぉ！！！！！！」

「ぬぅん！！！」

ザシュッ！！！！！

「私はここの執事として主人の帰りを待たなくてはならぬ身！！この屋敷を離れる訳にはいかぬのです！！」

「だけど・・・！！」

「早くしなされ！！それともこの老いぼれの力を信用せぬとでも！？」

「・・・・・」

・・・・・俺は・・・

「くそ！！！」

・・・・なにもできないのか・・・？

こんな時では俺の持つ知識が嫌に邪魔に思えて仕方がない・・・・・・

大きい犠牲を選ぶより小さい犠牲を選ぶしかないから・・・・・・

今目の前にある一つの命を救うことさえもできないのか！！

ちくしょう・・・・ちくしょう・・・・・

「ちくしょおおおおおおおお！！！！！」

俺は走り出す・・・・・

後から数多の剣戟の音が響いていようとも・・・・・・

俺は決して振り返る事はしなかった・・・・・・

ペルスランさん・・・・・あなたの想いは・・・無駄にはしません・・・・・

だから・・・・・かならず・・・・・

そして、ガルディオス伯爵の屋敷の窓際の壁に俺は今貼りついている
ここから中を覗くと様々な人影が映ってくる
ここからが本番だな・・・・・・
・・・・・じゃあ・・・

行くぞ！！！！！

ガシャアァァァン！！！！！

「何奴！！」

ドゥンッ！！！！！

「がぁぁぁぁ！！？」

窓を蹴り破り、迅速に屋敷へ侵入した後近くにいた兵士を撃つ
鎧に覆われていない部位を覗いての射撃は今の俺でもできる物だ
よって俺はこの兵士の太腿辺りを狙ったのだ

「て、敵だぁぁぁ！！ここにいるぞ！！」

今で言って、タイムリミットはヴァンが預言を達成させてしまうまで・・・・・

成功条件はそれまでにヴァンの発見・・・・・・
失敗条件は・・・俺が死ぬ事だ・・・・・・
だが・・・・・ッ！！！！！

「ＮｉｅＧｅｂｅｎＡ！！　（決して諦めるな！！）」

俺はそう誓おう・・・・・・

第11話

～Side：ガイラルディア～

「良いですかガイラルディア、あなたはこのガルディオス家の跡継ぎなのですよ!?だから・・・ここで死なせる訳には参りません・・・・」

「姉・・・上?」

「兵士達が去るまで絶対にここから出てきてはいけませんよ?わかりましたね!?」

「・・・・・うん・・・・」

姉上は僕を暖炉の中へと連れて来ていた
ここはいつも姉上の説教から逃げたりしてた時に良く入り込んでた僕にとって思い入れのある所なんだ
皆言う・・・敵国の兵隊さん達が僕達を殺しに来るって・・・・・
だから、そうされないようにと隠れていろって姉上は今僕に言い聞かせているんだ

「お前達!!武器を扱える者は武器を、譜術を扱える者は杖を持ち、何とかして立ち向かうのです!!そして、できるだけこの部屋へキムラスカの兵共を向かわせないようにしなさい!!」

「はっ!!」

「御意!!」

「畏まりました！！」

周りの人達は真剣な眼つきで何かをしようと準備している
皆・・・これから何をするの？
姉上・・・・・どこへ行くのですか？

「姉上・・・・・」

「・・・・・」

ギュッ・・・・・

「心配なさらずともいいのです・・・姉上は必ずここに戻ってきますからね？」

何時も以上に優しかった
抱きしめられ、何時までもこうされていたいと考えていた・・・・・
だから・・・・・

ドゴオォォォンッ！！！！！

「女子供とて容赦するな！！譜術を使えるだけでも敵と見なせ！！」

「マリィベル様！！最後のバリゲートが・・・・・！？」

「一刻の猶予は無いというのですね・・・・・参りましょう！！」

早く戻って来てください・・・姉上・・・・・・

～Ｓｉｄｅ：ハイル～

「覚悟！！」

「ぐっ！？」

ちくしょう・・・敵の数が多すぎる！！
おかげで前に進もうにも進む事が出来ない！？

ガキィィンッ！！！

「くらえっ！！」

斬りつけようとした兵の斬撃を狙撃譜銃の銃身で受け、そのまま回転をつけて底で体を叩きつける
鎧で覆われているため人体に直接のダメージは行かないが、衝撃だけはバットに叩かれたような物が伝わる筈だ
そして、案の定その兵は後へ転がりながら倒れていった

「外も駄目・・・中も駄目・・・じゃあどうすりゃあいいんだよ！？」

四面楚歌になっちまいそうだ・・・・・
このまま地道に行くしかないか・・・・

「ここだ!!見つけたぞ!!」

むっ・・・前から数人やって来たか!?
後へ下がって距離を・・・・・

「こっちにいるぞ!!挟み撃ちだ!!」

しまった!!挟まれただと!?
まずい!!このままだと・・・・・

「ようやくだな・・・なかなか良い動きをしていたが・・・・・両面ともなると貴様でも太刀打ちできんだろう」

あぁ・・・そうだよ・・・・・
くっ・・・万事休すか・・・・・
・・・・・いや・・・

「お褒めの言葉は受けとっとくよ・・・だけどな・・・・・」

諦めねぇのが俺の生き様なんだよ!!

バタンッ!!!

よし、開いていたか!!
確かに挟まれていたが・・・この通路は部屋が一定の間隔であるようになってる
鍵が掛かってたらアウトだったが・・・・・運よく掛かってなかったしな
まて・・・とりあえずはドアを塞がなくては・・・・・

俺はすぐさま傍にあった部屋の本棚を倒してドアを塞ぐ
これで暫くは持つだろうが・・・時間の問題だ・・・・・
どうする・・・どうすればいい・・・・・
考えろ・・・・・
ここは二階だ・・・しかも窓はなし・・・・・
隣の壁を突き破るほどの譜術はこれ以上は使えそうにない・・・逆
に精神力が尽きて俺が倒れちまう
・・・・・・
・・・・
・・
・
・・・・・・!?・・・・・・

バンッ!!

ついに兵士達はドアを突き破って部屋へ侵入してきた・・・
しかし・・・

「い・・・いないだと!?」

「いや、この部屋のどこかへ隠れている筈だ・・・探せ!!」

そうして探して行くが・・・・・

「どうだ!?」

「だ・・・だめです!!見つかりません!?」

「どういうことだ!?確かにあの男がこの部屋に入るのは我々全員が見ていた筈だぞ!!」

「ですが・・・・!?」

八人掛かりで部屋を探索してみるも、結局彼を見つけることはできなかった・・・・・
では彼はどこへ・・・・・・?

気になる事は・・・・・

上の換気口を覆うフェンスを取りつけるボトルが溶けたような跡があった事だ・・・・・

「はぁ・・・はぁ・・・積み重ねた荷物を完全に崩しといたからまさか上に行ったなんて誰も思いつかないだろうな」

俺は部屋の上にあった階層の間にある換気口に入り込み、彼らから
完全に撒く事に成功した
仮に見つけたとしても、重装備の彼らではここを通る事は無理だと
思う
そして、俺は四つん這いで少しづつ手足を前後に動かして進んで行く
途中で見えるフェンスからは誰かが戦ってる様子が覗える
恐らくこの屋敷の人達だと思う
しかし、この換気口は迷路のように複雑な形をしてるな・・・・・
・・・・・一つ一つ虱潰し出調べていくしかないという訳か・・・・・
・

フェンスを一つ一つ覗きながら進んで行く・・・
そして、第六番目に通り過ぎようとした所だった・・・・・

～Ｓｉｄｅ：ガイラルディア～

ドアの向こう側がより一層騒がしくなっていく・・・・・・
皆が戦ってるんだ・・・
僕もなにか役に立ちたい・・・なにかしなきゃ・・・・・・
それがいけなかったのだろう・・・・・・
気を緩め、彼は姉との約束をこの時に破ってしまったのが・・・・・・

バァンッ！！！

「見つけたぞ！！」

「・・・・・！？」

そう、暖炉から出てきたその丁度に敵兵が向こう側からこの部屋へ入って来てしまったのだ
そのため、簡単にガイラルディアは見つけられてしまった
そして、兵は・・・自分の持つ剣を構え、こちらに向かって走ってくる
その意味に少年は恐怖を感じた・・・だから、その場から動けなかった・・・・・
そのまま・・・・・・

「ガイ!!逃げて!!」

突如、横からマリィベルがガイラルディアの体を吹き飛ばしたのだ
床に転がり、尻もちをつく彼がその後に見た物は・・・・・

大切な姉が兵にその身を剣で貫かれる光景で・・・・・

グァシャアァァンッ!!!!!

ある筈であった物であった・・・・・

「・・・・あなたは?」

突如換気口のフェンスごと落ちてきてそのまま兵士を下敷きにした男にマリィベルは正体を訪ねた

「今は俺が何者かはどうでもいい事だ・・・あえて言うなら・・・・・」

――――――正義の味方かな?――――――

第１１話（後書き）

やっちゃいました！！後悔なしでやっちゃいました！！
これで３Ｇ君（笑）の女性恐怖症の元は断ち切られたという訳です

第１２話

「正義の・・・味方・・・・・？」

「そ・・・まぁ・・・さらに詳しく言えばヴァンの知り合いと言っとくよ」

危なかった・・・・・
急いで譜銃でフェンスのボトルを撃ち壊して降りてみたが大事には至らなかった
この二人はたしかガルディオス家の子息と令嬢だ
つまり、この戦争の地での“頭”の子達と言う訳だ

「ヴァン・・・それはもしやヴァンデスデルカの事でしょうか？」

「そうだな・・・あぁ・・・とりあえずお前達に尋ねたいんだが・・・その当の本人はこの屋敷のどこら辺にいるんだ？」

「ヴァンは一時間ほど前にどこか外へ行ったよ！？」

「！！？」

おいおいおい！！またすれ違いかよ！？
この時までの運の悪さが痛すぎる・・・・・

「君!!ヴァンは外のどこへ行ったかもっと詳しく教えてくれないか!?」

「う・・・うん・・・・・・」

そして、ガイラルディアが正に教えようとしていた所であった・・・・

ガシャガシャガシャッ!!!

複数の鎧が擦れて音を立てながらこの部屋に近づいてくるのが察しできた

「ちぃ!!話は保留だ!!すまないが隠れていてくれ二人とも!!速く暖炉の奥へ!!」

「御待ちを!!貴方はどうなさるおつもりなのですか!?」

「敵を撹乱させて意識を俺に全て向けさせるようにさせる・・・・・誰もいなくなったのを見計らってうまくこの屋敷を脱出しろ!!」

「・・・・何故なのですか?」

「ん・・・?」

「貴方と私共は今となってようやく顔を知る事になった全くの他人なのですよ!?それなのに・・・何故貴方はそんな私共のために命を張るというのですか!?」

「何故かって・・・そりゃあ簡単な事さ・・・・・」

――――――俺が助けたいと思ったから助ける・・・唯そんな理由さ――――――

「そ・・・そんな簡単な事で・・・・・・!?」

「正直言って誰かを助けるのに一々理由なんて持たなくても良いと俺はそう思ってるさ?じゃあ隠れて隠れて?」

「・・・・・御武運を」

そして二人は暖炉の奥へと入っていく
しゃがんで覗きこまない限りそう簡単には見つからない筈だしなさてと・・・

「炸裂する力よ!!≪エナジーブラスト!!≫」

パアァァァン!!!

向こう側の廊下に小規模の譜術の爆発を起こす
この音を聞いて幾人かはこっちに来るはずだろう
そこを・・・・・

「飛び抜ける！！！」

ドアを抜けると左右の廊下の奥から兵士が集まってくるのが見えた
こちらの行動に気付いたらしく、声を荒げて俺を捕えようと追いかけてきていた
途中譜銃を脇に挟んで固定しながら後に向けて撃ったりもする
バックショットをやるなんて考えても無かったな・・・・・
とにかく、敵をできるだけ多く誘導してあの二人が逃げやすくなるようにさせてからこの屋敷を出よう
俺は走り続け、辿りついた所には今までの所とは少し違う大き目のドアがある部屋の前にと来ていた
ここは・・・まだ調べてないが・・・・・
どうしようとするか・・・・・

～Ｓｉｄｅ：？？？～

終わった・・・・・
私は嘗ての友の亡骸を見下ろす
右手にはその者の首を掴んだままで・・・・・
赦せとは言わぬ・・・シグムントよ・・・・・
お前とて国を支える臣の一人であるからわかるはずだ
これは自国（キムラスカ）と他国（マルクト）の存亡か滅亡を懸けた戦いだ

上からの命令に私情をはさむ訳にも行かぬ
そして、私と貴公は戦いどちらかが勝ち・・・負けた・・・・・それがこの戦争の結末と言う訳だ
・・・もう・・・・・この屋敷に足を運びこむ意味などない・・・・・
・
この首を命令通り、軍艦へと運びこみ自国（キムラスカ）へと持ち帰るのみ・・・・・
・

バァンッ!!!

「何者だ!!?」

・・・この部屋には私とシグムント以外誰も入れるなと言いつけておいた筈・・・・・
騎士達は何をしているのだ・・・・・・？

「・・・・・聖なる焔の光？」

「・・・・・・ッ!?」

なぜその言葉を!!
それは・・・私を含めてキムラスカ上層部にしか知り得ないはずだ!!!
この男・・・いったい・・・・・・

「貴様はこの屋敷の使用人か!?いや・・・そんなことはどうでもいい・・・・・先ほど発した言葉、それをどこで聞いた!!」

「・・・・・・ッ!?」

「答えよ！！」

この男は恐らく・・・将来我がキムラスカに害を及ぼしかねん存在になりえるかもしれん・・・・・
今ここで芽を摘み上げなくては・・・・・

～Ｓｉｄｅ：ハイル～

「・・・・・聖なる焔の光？」

あの髪の色は・・・ローレライが言っていた・・・・・
いやまて・・・・・ルーク（聖なる焔の光）はＮＤ２０００で生まれた筈だ・・・・・
という事は・・・あの男は・・・・・

「貴様はこの屋敷の使用人か！？いや・・・そんなことはどうでもいい・・・・先ほど発した言葉、それをどこで聞いた！！」

「・・・・・ッ！？」

しまった！！迂闊だった・・・ルーク（聖なる焔の光）はまだ一般的に知らされてはいないんだった
なのに俺が今の時期に知ってるなんて明らかに可笑しいと気づいてしまった！？

「答えよ！！」

どうする・・・なんとかして誤魔化すか・・・・・無理だ・・・良い考えが思いつかない

下手打ってしまったな・・・・・
しかたがない・・・・・

「さあな・・・敵に答えろと言われてはいそうですと答える筈ないだろ?」

「く・・・貴様!?」

「それに、そんな事は今どうでもいい・・・・・そこを通してもらう、一刻も早く外へ出たいからな」

「それはならん!!この屋敷にいる時点で貴様は抹殺対象の一人となる・・・上の命令より貴様も殺す!!」

「・・・そうやってお前達はこの屋敷の罪のない人達までも殺したんだな・・・・・」

戦争では敵国の者を殺すのは当たり前・・・・
だけどな、それは政治家の考えだけなんだよ・・・・・
この人達はただ静かに暮らしていたかった筈なんだ・・・・・
よくも巻き込んでくれたもんだ・・・

「だったら、俺は・・・お前を力の限り・・・・・壊す!!」

殺しはしない・・・・・

「ではゆくぞ!!」

「そっちこそ来やがれ!!」

覚悟しろ・・・・・

お互い飛びこんで来る間に俺はまず譜銃を撃ちこむ
だが、弾の軌道を読んだらしく男は剣でそれを軽々と弾いた
そして、接近戦となる
譜銃を持ってては柔術は使えないが・・・盾にする事はできる
でも行動が遅くなるからこの攻防は接近戦に向かない・・・・・
おそらく・・・このままではこちらが不利だ・・・・・
それに・・・この男、戦い慣れている!?
太刀筋は剣を握った事が無い俺でも解るくらい荒めの代物だが、剣技は実戦向きに昇華されつくした猛攻の剣だ

「うおぉぉぉ!!!」

「う・・・く・・・・・・!?」

ガキィィィンッ!!!

強い・・・さすがガルディオス伯爵と一騎打ちの決闘をして勝利した男だ・・・・・
駄目だ・・・腕が・・・耐えきれ・・・・

ビキッ・・・・・

「・・・・・!?」

なっ・・・・・譜銃が・・・・・!!
壊れようとしているのか!?
盾としても使ってきた衝撃がもう耐えきれなかったんだ!?
や・・・ば・・・・・

「その首もらおう！！」

ズシャアッ！！！

・・・・・・
・・・・・
・・・・
・・・
・・
・

「・・・・・・～～～ッ！！！」

「運の良い男だ・・・とっさに身を引き右目を掠るだけで済ませたか・・・・・・」

この男から放たれた上向きの突きは俺の右目の周りの皮膚に縦一文字の傷を付ける物となった
危なかった・・・もし避けなかったらその剣が俺の喉を貫く所だった・・・・・・
けど・・・右目を開けられなくなってしまった・・・・・

血が一々目に入り込もうとして邪魔になる
・・・・これじゃあしばらく使えない・・・・・

「元帥！！」

「お前達！！閣下をお守りしろ！！」

しかも・・・向こう側は味方多数って訳か・・・・・
譜銃は壊れ、右目は使えず視野が狭くなった
さらに体力もそろそろ限界だ・・・・・
ははは・・・本気(マジ)でやべぇ・・・・・
俺死ぬかも・・・・・

「手を出すな！！」

「閣下！？」

「これは私とこの男の戦いだ！！貴殿らが加担するべき物ではない！！」

「・・・ですがしかし！？」

「この私、クリムゾン・ヘアツォーク・フォン・ファブレの命令に背くと言うのか！！」

「・・・・・ッ！！・・・わかりました・・・・・」

・・・・・あんたもあんたの誇りと大義を懸けて戦ってるという訳か・・・・・

・・・・悪いな・・・少しあんたの事を誤解してたよ・・・・・

「では、ふたたび始めようとしよう？少しは休めたであろう・・・」

「は・・・ほざいてろ・・・・・絶対俺が勝ってやる！！」

「その威勢・・・中々、気に入ったぞ・・・・・」

「くく・・・褒めてもなにも出せねぇぞ？」

「ははははは！！・・・・・今更ながら問おう・・・貴様の名は？」

「・・・・・ハイルだ・・・」

「では私も改めて名乗ろう、ハイルよ・・・・・私の名はクリムゾン・ヘアツォーク・フォン・ファブレ・・・・・キムラスカ公爵にして白光騎士団元帥！！」

「大層な肩書だな・・・だけど、戦いにんなもん必要ないだろ？」

「何かとふざけた口調をするのだな・・・・・まるで道化師ではあるまいか」

「道化か・・・それもいい・・・・・」

道化で結構・・・異端者で結構・・・・・！！

俺は今俺が成すべき事をするだけだ

さぁ・・・戦おうぜ！？

第１３話（前書き）

戦闘編はなんか不慣れという感じです・・・
可笑しければ指摘ください

第１３話

「爆炎刃！！」

「荒れ狂いし濁流よ！！≪スプラッシュ！！≫」

ここガルディオス伯爵の屋敷は戦場と成り果てていた
その内の一つにて二人は激しい戦いを続けている
片や猛々しい剣術を駆使する紅髪の男・・・
片や体術と譜術を駆使する蒼髪の男・・・
その関係はまるで水と油と言い変えれるようだ

「魔王爆砕陣！！」

「閃光よここに来たれ！！≪レイジレーザー！！≫」

クリムゾンの放った強烈な衝撃は床を砕き、ハイルの譜術の軌道を強引に逸らさせた
行き場の失った譜術は後側の壁を突きぬいて見えなくなる
その現象を見た周りの兵士達は喝采を上げ、盛り上がっていく

「はぁぁぁぁ！！！」

「うおぉぉぉ！！！」

ギィン！！　ガキンッ！！　ガンッ！！　ギャリッ！！

次には自分の獲物で打ち合いを始めた
剣が譜銃を、譜銃が剣を弾き・・・逸らし・・・防いでいく
それは一種の嵐とも言えた・・・

チッ！！

「ガッ・・・！！」

ドゴォッ！！

「ぐふぅっ！！」

次第にその攻撃は少しずつヒットし始めていく
体に剣先が掠め、鮮血を噴出させ・・・
顔に銃身が当たり、痣を作り出し・・・
両者とも痛み分けに等しく闘い続けていた

ドゴッ！！

「ウッ・・・！？」

だが、優勢は少しばかりクリムゾンに傾いている
ハイルの隙を突いて鳩尾に強烈な蹴りをくらわせて体を勢いよく床に倒した
そのチャンスを見逃すはずがなく追い打ちに突きを放った

「終わって・・・」

ガッ！！

「・・・！？」

グォンッ！！

「たまるかぁぁぁぁ！！！」

「うおぉぁあああああ！！」

ドシャガシャ――――――――ン！！！！！

ハイルはその突きを首を捻って避けた
そして、その勢いを使ってクリムゾンの利き手を掴み、足を下腹部に潜り込ませた
ルール無視の巴投げである
クリムゾンは壁に衝突させられ、その傍にあった花瓶等と一緒に床に崩れ落ちたのだった

「ごほっ・・・ごほっ・・・！！まさか放り投げられるとは思いもよらなかったぞ・・・」

「ならもういっぺんくらってみるか？」

二人は笑っていた・・・
それは余裕による笑みであったか・・・または違う意味によるものかは・・・・
この二人以外には誰にもわからない・・・・・

「・・・おいオッサン、そろそろ決着付けようぜ？」

「・・・よかろう、その煩い口・・・・・永久に閉じさせてやろう！！」

その言葉から二人は初めて静かに対峙した
真剣な表情となり、先ほどまでの戦いが全て前戯だったかと感じさせられるような雰囲気を漂わせる
それと同時に周りの兵士達も全員黙る
ある者は己の使えるべき者の勝利を願い、確信し・・・・・
ある者は予想だにしないしない結末が起こるのを期待し・・・・・
それぞれがまるで劇場の観客席に座る客のような眼を持つようになった時であった

「じゃあ・・・」

「では・・・」

――――――勝負！！――――――

同時に彼らは飛びだす・・・
全てがまるでスローモーションの映画のように進みだして行く・・・
あと五ｍ・・・四ｍ・・・三ｍ・・・・・
距離は瞬く間に縮まっていく
そして・・・走る動作から次の段階へと行動を移し出していく・・・
クリムゾンは胴薙ぎをすべく、剣を並行に走らせるために腰を下げていこうとする・・・
しかし・・・

ブォンッ！！

「・・・！？」

ハイルは予想だにしなかった行動に移った・・・
投げたのである・・・・・譜銃を・・・
それは回転しながら進み、クリムゾンの顔に目掛けていこうとする
譜銃は言い換えれば鉄の塊に近い・・・・・・
それが顔に勢いよくぶつかるというのはひとたまりもないことなのだ・・・
だから、急遽クリムゾンは別の行動をすることにしたのだ
譜銃を切り上げによって弾くことに変えたのだ・・・・・・
だが、それがハイルの狙いであった・・・
もし、その痛みを我慢しながら最初の行動をしていたのなら・・・
勝っていたのはクリムゾンのほうであっただろう・・・・・・

「でりゃあああぁぁぁ！！！！！」

ゴシャアアアッ！！！！！

切り上げによって無防備になった首に突進力をフルに加えたラリアットが見事に決まった
その衝撃は体を一回転させるほどにまで進化させたものであった・・・
そして、宙返りが終わった後にさらに待っているのは床による重力の力である

「がはぁっ・・・！？」

ドッ・・・！！！

そのすぐ後には先ほどの譜銃が落ちてくる
ガチャンッ・・・と静かに床に叩きつけられる音が響くと共に周りの兵士達は騒ぎ出し始めた

「ファブレ元帥!!?」

「閣下が・・・負けた・・・・・・?」

「馬鹿な!?」

それは信じられないという兵士の心そのものを表す言葉ばかりのものであった
それはそうだ・・・・・
クリムゾンはかつて、バチカルの闘技場で鬼神の強さを誇った≪ベルセルグ≫の通り名を持つバチカル最強の武人としても伝えられていた男でもあったのだからだ
だから、目の前にいる二十歳にも満たない青年ごときに敗れるなどとあってはならないのだ
しかし、実際はハイルも満身創痍の状態で“運良く”勝てたのがこの戦いの真実なのだが・・・
そんなことなど今この場にいる者達にはとうてい考えきれなかった

ジャキッ!!

「道をあけろ!!さもなくばこの男の命はないぞ!?」

ハイルにとってそんな余韻に浸ってる暇はなかった
すぐさま譜銃を拾い、未だ朦朧としているクリムゾンの首を締めあげるようにして抑え込み、逆の手で譜銃の銃口を頭部の米神に当て

つける
いわば人質である・・・

「き・・・貴様!!卑怯な・・・・・・!?」

「感想など聞いてねぇ!!道を開けるのか開けないのかどっちか答えろ!!」

「う・・・く・・・!!」

兵士達はドアの辺り居た者だけが動いて行った
ドアが開かれ、その近くから離れていく
出口への活路が開かれたのだ

「この屋敷を出た瞬間にこの男は解放してやる・・・」

「それを信じると言えというのか貴様!!」

「なら何人かはついて来てもいい!!俺は約束は破りはしない!!」

「・・・・・チッ・・・!!」

その言葉通り、引きずられていくクリムゾンと共に少し離れた後から四、五人がついてくる
ピリピリとした一触即発の状態のまま廊下を彼らは歩いて行く・・・
隙あらば奪い返そうとも考えてる兵士もいるが、ハイルの行動に隙など見えはしない
ただついて行くという事しかできないのである・・・・

「（・・・うまくいったか・・・・・・）」

実は、今の所ハイルだけにしかこの状況の打破方法は知られていない
実は今構えてる譜銃は・・・すでに壊れていたのだ・・・・・
譜銃とはどのような攻撃をするかを知られてはいるが・・・どのよ
うな構造をしているかはあまり知られていなかったのがこれ幸いと
化した
幾度もの打ち合いにより、中身の音素収束装置はすでにイカれていた
だから、撃つ気は殆どないし・・・撃つ事もできない・・・・・
いわば張りぼて（ダミー）である

「う・・・ぐ・・・・・このような結果になるとは・・・想像だに
しなかったぞ・・・・・」

「勝負は小さな石ころだけでも大きく戦機は変わる・・・応用力が
大事ってことだよ」

「ふ・・・その言葉、しかと覚えておこう・・・・・」

「・・・あんたも稀に見るような立派な武人だと俺は思うぜ・・・・
・勝てた自分を誇っても良いくらいだ」

「そうか・・・」

この二人は良くも悪くもない関係を持ったようだ・・・
滅多にならないような事であろう・・・
そして、出口まであと少しという所であった・・・
前から見覚えのある者がこちらに向かって来ているのに気が付くの
であった

「ペールさん!?」

「君は・・・どうしてここに・・・・・・!?」

見えない歯車は次第にはめ込まれていく・・・・・・
それは音も出さずに自然として・・・・・・

オマケ
・ある廊下での途中・・・

「なぁ・・・ちょっと言いたいんだが・・・・・・」

「何だ・・・・?」

「あんた・・・前髪の毛根薄くなりかけてないか?」

「なっ・・・!!!?」

「この調子だと・・・“デコ禿”になる可能性大だねあんた・・・・・・」

「嘘だ!!そのような筈は・・・・・!?」

「でもねぇ・・・こういう例良く見た事あるし、間違ってないと思うんだけど・・・・・」

「断じて違う!!私は“禿”になどならん!!!」

「・・・スッキリしようやオッサン・・・・・」

「な・・・なんだ・・・その哀れむような目は!!やめろ・・・そんな目で見るな!!」

「あ～きら～めましょぉ～♪あきらめま～しょぉ～♪」

「嫌だ!!禿になど・・・禿になど絶対にならん!!」

「ス～ッキ～リしまっしょぉ～♪」

「その歌止めろぉぉぉ～～～!!!!!!（泣）」

「「閣下・・・・・」」

ズルズルズル・・・・・

ファブレパパ・・・この頃にてデコ禿に悩む年頃であった・・・・・

パッパッパラッパ～♪

第１３話（後書き）

ファブレの髪型はきっと遺伝・・・・・・
デコという名の・・・（笑）

第１４話

～Ｓｉｄｅ：ヴァンデスデルカ～

「よし、全ての書類や資料の回収確認が終わった！！これより被験者（オリジナル）とレプリカを使っての超振動実験を開始する！！」

「装置起動開始！！」

あ・・・れ・・・は・・・だ・・れ・・・・・？

ぼく・・・が・・・もうひ・・・と・・・り・・・・・？

「被験者、体内の第七音素（セブンスフォニム）収束中！！」

「同じくレプリカ、収束開始！！」

体・・・が・・・くる・・・しい・・・・・

なにかが・・・・でて・・・・・く・・・・る・・・・・

ビー・・・！！ビー・・・！！ビー・・・！！

「緊急事態発生！！被験者側の第七音素（セブンスフォニム）が急激な活性を！？」

「何！！すぐさま抑え込め！！同質量の第七音素（セブンスフォニム）による超振動でなければ規定外の範囲まで及ぶ事になるぞ！？」

「だ・・・だめです！！抑え込めれません！！今だ活性化の傾向あ

り！！」

「まずいぞ！！この研究所の下には・・・・・セフィロトが存在しているんだぞ！？それまでも消滅させてしまったら・・・・・」

「急げ！！この実験は中止だ！！中止するんだ！！速く装置を止めろ！！」

こわい・・・こわい・・・コわイ・・・・・コワい・・・・・・コワイ！！！！

キュイィィィ――――――――――ン！！！！！

ダレ・・か・・・・・・

タス・・・・・ケテ・・・・・――――――――――――――！！

～Ｓｉｄｅ：ハイル～

「もうそろそろか！？」

俺は壊されつくされた街道を走り抜いていく

目指すはフォミクリー研究所・・・・・次こそが本命となるだろう

かなり時間を取ってしまった・・・まだ間に合うか心配だ・・・・・

――３０分前・・・――

「フォミクリー研究所？」

「そうだ、そこに二人が連れて行かれた・・・フェンデは・・・・・」

「フェンデの当主は・・・いったい・・・・・」

「・・・・あの男は、最後まで戦った・・・そして・・・始祖ユリア様の墓前に連れて、そこで見取ってやることしか私にはできなかった・・・・・」

「・・・・・そうですか・・・」

「あやつはこう私に言い残して行った・・・『ガルディオス家を・・・私の家族達を・・・どうか最後まで守り続けてくれ』とな・・・」

「・・・なら、果たすのみです・・・・ペールさん!!マリィベル様とガイラルディア様はこの屋敷にある暖炉の中に隠れているでしょう。今ならキムラスカ軍はほとんどこの屋敷を立ち去ってる筈です」

「それは真か!?」

「たしか、裏側の港にも小さな船は何隻かは残ってるでしょう・・・そこを使えば・・・・・」

「しかし・・・君はどうするんだ？一緒に逃げる事は出来ないのか？」

「・・・俺には、まだやるべき事がありますから・・・・・」

「二人をこれから助けに行く気か！？無理だ、あの研究所は関係者以外は立ち入る事が出来ない仕掛けが施されているんだぞ！！」

「恐らく・・・その心配は無くなると思います・・・・・」

これからこの島は・・・・・

「・・・？」

「いえ、なんでもありません・・・・・」

―――――――――――――――――――――――――――――――――

ペールさんから教えてもらった道からすればもうすぐの筈なんだが・・・

煙幕が掛かったような景色ばかりで遠くまでが見渡せない！？

少しこれは厄介だ・・・

迷い、困惑の表情が現われてくる・・・

だが・・・彼は気付かない・・・・・

最悪のカウントダウンはすでに始まっている事に・・・

バシュウウウウウッ！！！！！

「なんだあれは！？」

それは、天空へと伸びていく光の柱であった・・・・・
それの出現は周りの空気までも急激に変えていった
先ほどまで濁った視界は塵一つない鮮やかな色をつける景色となる
その光景は、まるで神々の降臨を思わせるほどに綺麗で・・・異質なものであった・・・・・
だが、それは空からの黒い塊が降ってくる事により、早々と地獄へと向かう・・・

「うぉッ！！！」

それは・・・この世の終わりかと俺は思えた・・・・・
黒い塊は、建物や何かの譜業の大きな一部であると解った
それが絶え間なく振り続けていく・・・・・
すでに壊れた住宅や街路をさらに壊していく・・・・・

嘗て前世で見た火山の噴火と類似した光景であった・・・・・

「この辺りに留まるのは危険だ！！研究所に！？」

おそらく、あの光がある場所が研究所だろう・・・・・
あそこで一体なにが行われているのかは俺にはわからない・・・・・
だけど・・・行かなければならない・・・・・
俺は上から降り注いでくる残骸に注意しつつ足を進めていく

～Ｓｉｄｅ：ヴァンデスデルカ～

何が起きたんだろう・・・・・
一瞬気を失ったかと思えばそこは嘗て研究所であった瓦礫に埋もれ

た建物の中に僕は居た・・・・・
周りには元からあった筈の譜業はどこにもなかった・・・・・
服に引っ掛かっているその一部を外し、そこから歩きだそうとした

「・・・ッ!!?」

ベタッ・・・・・・

立てない・・・足がまるで言う事が聞かないんだ・・・・・
足だけじゃない・・・体全体が石になったように重く感じる・・・
たった一歩歩くだけでも胸が苦しくなりそうだ・・・・・

僕は傍にあった譜業の棒状の部品の残骸を手に取り、杖として用いながら少しづつ歩く・・・

そういえば母上は・・・?

探さないと・・・・・

早く・・・

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ――――――――――――!!!!!

これは・・・地震・・・・・?
こんな時に地鳴りが出てくるなんて珍しいや・・・・・

ガラッ・・・

「ぐ・・・うぅ・・・・・・」

ここの研究員!?

瓦礫の中から頭部に血を流しながら這い出てきたのをヴァンは発見した
苦悶の表情を顔に出しながら力の限り、そこから脱出しようとしていた

「ぐ・・が・・・こんな・・・こんな事になる筈じゃなかった・・・・・」

どうやらこちらの様子に気づかないらしく、そのまま独り言を呟いていた

「カール陛下は・・・この実験を成功させれば・・・秘預言の成就に繋がると・・・・・・」

力なく・・・失意のどん底と表してるかのように声は弱々しい

「・・・待てよ?秘預言は必ず成就されるように・・・・・・」

ヴァンはその研究員の行動や言語を物陰からジッと観察していた
その者から発している言葉の意味に不審な点を感じ取っていたためだ

「・・・・・ハ・・・・ハハハ・・・・・・そうか・・・そういうことだったのか!!」

突如として研究員は笑いだし始める・・・狂喜とも言うかもしれない・・・・・

「これこそが預言の成就だったんだ!!俺達は・・・その為の犠牲とされたんだ!!」

「・・・・・ッ!?」

「ホドは・・・滅びる!!【栄光を掴む者】によって!!セフィロトツリーが壊れたこの島の結末だ!!」

ガタッ!!

「誰だ!?」

持っていた棒を驚きのあまり落としてしまい、その音が居場所を突き止めさせる原因となった

「・・・お前か【栄光を掴む者】!!喜べ、お前のおかげでまた世界は繁栄へと近づくのだ!!」

「ど・・・どういう・・・・・!?」

「おぉ・・・始祖ユリアよ!!貴方様の懇願は果たされるべき道へと進んでおります!!貴方様の子孫によって!!」

それは、預言（スコア）という存在に縛られた狂信者の姿であった
恍惚とした笑みを浮かべているのに、ヴァンにはそれがなによりも恐ろしい物だと感じれた
その顔の持ち主はゆっくりとこちらに歩み始めた

「!!お前は偉大なる繁栄への礎となれるのだ!!さぁ、まだ作業

は終わってはいない・・・最後までやるべきだ!!」

「ひっ・・・!!」

「心配はいらん!!まだ装置は起動できる筈だ!!さぁ、こっちに・・・・!!」

ゴシャァッ!!!!!

その言葉は最後まで紡がれなかった・・・・・

天井から屋根の一部が落ちてきてその研究員を下敷きにしたのだ・・・

その場に残るのは・・・・・

まるでヴァンを最後まで引き摺りこもうとするような血だまりの後であった・・・・・

「ウワアァァァァァ――――――――――――――!!!!!」

叫んだ・・・恐怖した・・・・・

先ほどまでの体の不調子がまるで嘘のように駆け足を始めさせる

一刻も早くその場からヴァンは逃げ出したかった・・・・・

そして、実験場から離れて行ったのであった・・・・・

～Ｓｉｄｅ：ハイル～

「研究所に人が全く見当たらないとは・・・どういう事なんだ?」

研究所に潜入してみたハイルであったが・・・そこはもはや廃屋といえるような物と化していた
いくら探しても人の気配が全く感じれないのだ・・・
あるのは壊れた部屋や廊下の光景だけ・・・・・

「誰か!!誰か居ないのか!?」

試しに大声で叫んでみる・・・
返事が返るかはどうかわからないが、やらないよりはましだろう・・・
・・・
すると・・・・

――――ぇ――――――こ――――して!!――――――にいる――――――?――――――

奥から同じように大声を出して呼び掛けてる存在が居る事に気がついた
すぐさま、そこへ向かう事にした
長い長い廊下を全速力で駆け抜け、その終着点には堅牢な扉が塞がっていた

「もし!!そこにどなたかいらっしゃいますか!?答えてください ますか!!」

この声は・・・・・

「まさか、ファミリアリカ様!?」

「・・・!!私の名を・・・?貴方様は!!」

「俺です!!ハイルです・・・今その扉を開けます!!離れていてください!!」

俺は音素を取り込み、すぐさま練り上げて譜術に変換させる
使うのはあまり威力が大きすぎない物を・・・・・

「炸裂する力よ!!≪エナジーブラスト!!≫」

パァンッ!!!

錠部分に衝撃を与え、無理やり扉をこじ開ける事に成功した
開いた扉の先にはヴァンの母であるファミリアリカが居る

「どうして、あなたがこのような所で・・・・・?」

「この研究員の者達にヴァンデスデルカと無理やり引き離されて・・・そのまま此処へ」

順を追って説明をしていってもらった・・・・・・
が・・・・・

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ――――――――――――!!!!!!

突如として地鳴りが響き渡る・・・・・
此処でのんびりとしている暇はないようだ・・・・・・

「ヴァンデスデルカが居る筈の実験場はこの研究所の地下に存在してます！！急がなければあの子は・・・・・・！！」

「わかりました・・・・・案内をお願いします！！」

ホド崩落まで・・・あと２０分・・・・・・

第１５話（前書き）

この頃体調がｇｄｇｄです。
肺がムズムズして咳が出やすいとです。

第１５話

「なんだ!!いったい何がどうなっているんだ!?」

ローレライよ・・・願わくば聞いてくれ・・・・・

この子が一体何をしたというんだ・・・・・

「大地が・・・崩れるって・・・・・そう言ってた」

「冗談だろ・・・そんな馬鹿なことが・・・・・」

どうしてこれほどまで重く、辛い宿命を背負わなければならないんだ・・・・・

これが全て知らずお前の力によって運命（さだめ）られているなんて・・・無責任にもほどがある

「このままじゃ・・・僕達も・・・・・」

「ここの崩落に巻き込まれてお陀仏だという事か・・・・・」

俺はお前にどんな結末を送ればいいっていうんだよ・・・・・

お前の気に入る物だけにすればいいと思ってるんなら・・・赦す訳にはいかない・・・・・

「僕が・・・なんとかする・・・・・」

「何か方法があるのか・・・・・？」

なぁ・・・聞いてくれないか・・・・・

「僕達フェンデ家に伝わるユリアの譜歌を歌えば・・・・・」

どうかこの少年に・・・救いの手を・・・・・

「ごめんなさい・・・・・ごめんなさい・・・・・ごめんなさい・・・・ごめ・・・・」

今俺が望むのはそれだけだ・・・・・

――――クロア　リュオ　ズェ　トゥエ　リュオ　レィ　ネゥ　リュオ　ズェ～♪　――――

その旋律は・・・堅固たる護り手の調べ・・・・・

あらゆる魔の手より、担い手を中心とした空間に虚無を生み出す・・・・

あの後、俺とファミリアリカ様は足を引きずりながら廊下を歩いて来るヴァンを見つけだすことに成功した

だけど、その時にはすでに預言の成就は着々と進み・・・ホドの消滅までと進む事になっていた・・・・・

今まで以上に地鳴りは酷くなり・・・震度という物を体で測れないほどまでとなった
周りの床が少しづつ陥没を起こし始め、本能で俺達は命の危機を悟った
この島は・・・消えてしまう・・・・・
もはやこれまでかと思っていた所、ヴァンは何やら解決策を見出していたそうだ
なんでも、ユリアの譜歌が助かる鍵となるという事だ
説明し終わったと同時にヴァンは詠った・・・・・
それは、聞いたことも無いような旋律の並びであった・・・・・
言葉が紡がれていくにつれ、温かい光が包み込んで行く・・・安心感をそのまま感じているようだ
そして、詠い終わる・・・・・
まばゆい光が発した時には・・・俺の意識は閉ざされた・・・・・

・・・大地は終わることなく落ちていく・・・・・・
土が捲れ、岩はひび割れる・・・・・
落ちていく・・・・
全てが、崩落していく・・・・・・
そして、俺達は魔界（クリフォト）へ・・・・・

「う・・・」

どれほどの時が経ったのだろうか・・・・・
ようやくハイルは目を覚ました

「ここは・・・・・？」

ハイルは辺りを見回した
驚いた事に、全てが紫色に染まっている・・・・・

「（ここはホド・・・なのか？）」

先ほどまであった研究所という所を示す物さえもどこにも見当たらなかった・・・・・
あるのは、紫色に染まった空と泥の海・・・
ハイル達はその泥に浮かぶ僅かな大地の上に辛うじて立っていたのだ・・・・・

「ハイルさん・・・気がついたんですね・・・・・」

「ヴァン！？お前こそ大丈夫か・・・！？」

「はい・・・僕はどうにか・・・・・でも、母上が・・・・・」

その後にはファミリアリカがぐったりとして横たわっていた
すぐさまハイルは脈や瞳孔を見て正常かどうか調べる

「・・・軽い脳震盪・・・いわば気絶状態になっただけだ・・・命

に別状はない・・・・・・」

「本当ですか・・・よかった・・・・・・」

「・・・ヴァン・・・どうしたんだ?どこか苦しい所があるのか・・・・・?」

「・・・違うんです・・・・・そういう訳じゃないんです・・・・・」

言葉では喜んでるのに、表情からは全くと言っていいほど覇気がなくなっていた
それもそうだろう・・・周りが周りなのだから・・・・・
紫にけぶる世界・・・転がる無数の死体・・・地獄の光景とは、まさにこのことだ
遠くを見てみても、見渡す限り死の世界・・・・・
障気でけぶる空はぼんやりと紫に輝き、時折、雷らしきものが閃いている

「なんなんだここは・・・それに、上を見てみると水が大量に降り注いできている・・・・・俺達はあそこから落ちてきたというのか・・・大地ごと・・・・・・」

「大地が・・・崩落したんです・・・・・・せいで」

「・・・・・ヴァン?」

「全て・・・僕の・・・せいなんだ・・・・・・」

「・・・落ち付け、ヴァン」

「ホドは・・・僕が・・・滅ぼしてしまったんだ・・・・・僕の・・・力で!!」

「・・・おい」

「全部全部!!何もかも!!!!!もう・・・もう・・・・・・!!」

「・・・・・」

そうだった・・・・・この崩落はヴァンによって起きた事だった
こいつは今罪の重圧に潰され掛かっている・・・精神的にまずいな・・・・・
あまり刺激はしない方がいいという訳だな

「・・・とにかく、この状況をどうすればいいかよく考えよう・・・詳しい話はそれからだ」

「う・・・ぅぅ・・・・・・」

顔を下に向けながらもヴァンは俺の言葉に賛同してくれた
・・・泣いているんだろう・・・・・・
そりゃあ泣きたくなるだろう・・・こんなことが起きれば・・・・・・・・ん?

「・・・船?」

泥の海の向こう側から何隻か船が此方に向かって来ていた
・・・もしかして、脱出できた人達が船共々一緒に・・・・・・
いや・・・あんな高さからだ・・・まず助かりはしない

じゃあ、あの船に乗っているのは誰だ?
・・・今は疑問に思ってる場合じゃない!!

「お~~い!!!ここだ!!!助けてくれ!!!」

この小さな大地ももうすぐ沈む筈だ・・・
それまでに離れないと、折角拾った命が無駄になる
気付いてくれ!!

俺の声が届いたのかどうか知らないが、船はまっすぐ此方に向かって来ていた
恐らく、元からここを目指しているのだろう・・・
そして、船はすぐ傍まで来ていた・・・・・

「これで一応安心した・・・ヴァン、歩けるか?」

「う・・・うん・・・・・」

「お前のお母さんは俺が運ぶ・・・もし辛ければ手を貸してやる、これでいいか?」

まだフラフラだが、歩ける力は些か残っている
船からランプウェイ(斜路)が出てくると共に向こうからも人が出てきた
十人ほどだろうか・・・俺達の前に立ち並んできていた

「生存者がいるとは・・・何という奇跡だ」

「あんた達は・・・何者だ?服装から見てホドの住人ではなさそうだな・・・・・」

「そう警戒することはない・・・私達はここ魔界（クリフォト）にある唯一の町、≪ユリアシティ≫の者だ。この大地、ホドの調査団としてつい先ほど赴いた所だった」

「魔界（クリフォト）・・・ユリアシティ・・・・・？両方とも聞いたことが無い言葉だ」

「私達の存在は外郭大地に存在するダアトなる都市、そこのローレライ教団に所属する上層部の身にしか知られておらん・・・お前達が知らないのも無理は無い」

「外郭大地・・・・・駄目だ・・・何が何だかこんがらがってきた・・・・・」

「・・・とにかく来るがいい、一先ずはユリアシティにて話を聞こう」

俺達はそうして、何人かに支えられながらも船に足を運んで行く
怪我や疲労で正直俺も立つのがやっとなほどでこれに甘える事にした・・・
船の中は不気味に薄暗い・・・音素灯の譜石が豆電球のような灯りを発していた
そして、船は動き出す・・・俺達を乗せて・・・・・

「ヴァン、どこだ～！？」

俺は甲板で人探しをしていた

船の一室にファミリアリカを寝かし付けた時、気がつけばヴァンがどこにも見当たらなかった
今のあいつは何をどう思っているのだろうか・・・・・
絶望するのは・・・俺は経験済みだ・・・・・

そして、俺は見つけた
甲板の隅で小さく座りながら向こう側をボゥッと眺めていた
俺はその隣に座る

「隣、もらうぞ」

「・・・・・」

「・・・もう、何が何だか分からなくなってしまったな・・・・・
あの日常には・・・もう戻れないのかな・・・・・」

「・・・・・うん」

「ヴァン、良ければ話してくれないか・・・お前に何があったのかを・・・・・」

「・・・・・」

「・・・喋りたくない・・・か。じゃあいい、無理に話してもらっても後味が悪い・・・・・」

話は一向に進まなかった・・・・・
全てにおいて行動が消極的だ・・・・・
俺も実を言うとどうすればいいか考え切れていない
自分の知る星の記憶を今話してみようにもなにも価値はないだろう

ただこの子を傷つけるだけだ・・・・・・

「ハイルさん・・・・・・」

「・・・・・・？」

「罪って・・・赦される物なんですか？」

「・・・・・難しい質問だな・・・唯、俺に言えるとすれば・・・・・」

――――――決して忘れ、逃げてはいけないものなのかもしれない――――――

第１５話（後書き）

そろそろホド戦争編も終盤に近づいてきました。
此処が終わったら文字の配列変えてみようか検討中です。

第１６話（前書き）

やっぱり詰める方が良い味出ると感じました

第16話

今、ハイルは目の前の男、テオドーロと対談をしていた
今回の崩落について、秘預言について、ここ魔界（クリフォト）について…等などとにかく色々なことを再び知った
そして、今回は全てが終わりかけた所から始まる

バンッ!!!

ハイルはテーブルに手を思いっきり叩きつける
憤怒を込めた拳を……

「あんた…ふざけてるのか?」
「ふさけてはおらん、始祖ユリアの残した秘預言は必ずしも成就されるよう理が定められているのだ」
「それをあんた達はずっと前から知っていたはずだ!なぜ何もしないんだ!?」

そうだ…誰よりも…俺と同じくらいその事を知っていた筈だ……

「我らは預言の監視者としての義務をまっとうする存在でしかないのだよ…預言が正しい方向に進むかどうかを見極める、それだけが私達の存在理由なのだよ。民の救出には同じ外殻大地の民が当たるべきですのでな」
「人が…大勢死ぬ事をたった其れだけで考慮したということなのか!?」
「其れだけとは……異な事をおっしゃいますな。オールドラントの民にとって預言は遵守されるべきもの。預言を守り心健やかに過ごすことで、この星は繁栄が約束されるのです」

「少なくとも俺は……こんな預言を遵守する神経が健やかとは、とても言えないが」
「如何なる手段を用いてでも、ユリアが遺された預言の通りに星の歴史は刻まれなければなりません。外殻大地の方々ならば、それは良くご存じのはず」
「……」
解ってたまるか……
命を…何だと思っているんだ……
「秘預言には島の消滅は読まれていても、そこに住む人達は死ぬなんて詠まれて無い……あんた達は一人でも多くその命を助けようと考えなかったんだな……」
「先ほども申したように、我らはこの地を動けぬ身。民の救出には同じ外殻大地の民が当たるべきですのでな」
テオドーロはまるで他人事とばかりの口調で言葉を紡いでいくその行動にもうどうでもよくなったと言うように前髪を乱暴に掻き毟った
「預言の公開もせず、危険が解っていながら見て見ぬふり…監視者と言うより傍観者だな……」
「返す言葉もありませんな」
相変わらず口調を変えないテオドーロの姿にしびれを切らしたのか、席を立ちすぐさま立ち去ろうとした
「納得いきませんか……我々の存在に……」
「別に……そう思われるからこんな所に存在を知られず暮らしているんだろ?」

「そうでしょうな、しかし、我々はこれから先もこの役目を続けていくでしょう」
「……“これから”は、誰にも解らない……そう、絶対に……」

――未来は与えられるものでは無い。自分たちの力で創り出す物なんだ――

ハイルはそう言い切った
預言遵守を旨とするユリアシティの住民達の代表であるテオドーロにその言葉がどう響いたのかは、彼にはわからない……

執務室から出たハイルは改めてここユリアシティを見回した
見たことも無いような譜業がこちらあちらに使われている
聞いた所、これらすべては創世暦からずっと使われ続けてきたものらしい
瘴気に覆われたここ魔界でもユリアシティの住人が障気蝕害（インテルナルオーガン）にならないのは一重にこの街を覆うフィルター状の譜業のお陰だろう

オイ……あいつだ……
外郭大地の……
市長と何を……
早く立ち去って……

……どうやら俺達はこの街の住人には歓迎されるような事はないだろう
そりゃあそうだ……閉鎖された世界を生きるここの住人にとって俺達外郭の住人は妬ましく思う存在だ

ったく…居心地悪いったらありゃしねぇ……
さっさとヴァン達の居る部屋へ戻ろう

「待たせた、此処の市長と何かと話し付けてきた」
「ハイルさん、おかえりなさい！」
「ただいま、……で、様子はどうだ？」
「…ううん、まだ起きないんだ母上……」

今だファミリアリカは目覚めてない……
おそらく、疲労も重なっていたんだな
寝息は穏やかで顔色も悪くないからそう考えれる

「まだ待つしかない…か、じゃあその前に説明する。ヴァン、ホドが無くなった今お前達は住居を失ったに等しい……それに、今だ外郭……つまり、元の地上は戦争中だ。話によるとこの戦争は冬頃まで続くだろう……」
「冬頃まで……」
「だから、戦争が終わるまでここユリアシティで暫くテオドーロ市長の元で世話にならせてもらう。いろいろ大変だけど、頑張ろう」
「……ハイルさんも、ここにいる？」
「えっ……？」
「一緒に……いる？」
「……まぁ、マルクトとキムラスカが戦争中の間では小さな村でも出歩きを禁じられる状況だからな、俺も早くフェレス島へ帰って両親に自分の安全を伝えてやりたいが…無理だからそういうことになるな」
「本当……！！」
「どうしたヴァン？やけに焦ってるって感じだな？俺がどこか……」

「怖いんです……」

話の途中に小さく呟くようにそう言った
そして、恐れるように体を固めていく……

「ここの人達を見てみたんです……皆僕を見つけるや冷えた視線を向けて……ここに自分の居場所は無いと言わんばかりに……恐ろしくて…恐ろしくて……！」

「…そうか、お前もこの街の奴らに会ってきたんだな……」

「そんな事をこれからいつもいつも向けられると考えると、堪らないんです……！」

「……」

確かに……耐えきれるレベルじゃないな……
今さらだったが、こいつはこれでも１１歳なんだ
悪環境と言うにも程度がありすぎるよな……

「人間は古くから行われる風習も積み重なれば生活の一部として暮らして行くようになっていく……ここの人間はそんな典型的な者達ばかりだ。崩すにも相当な力が必要となる……」

「……」

「だけどな、ヴァン…決して逃げちゃいけないんだ。絶対に諦めちゃ駄目なんだ。己の足を止めるのは、いつだって絶望じゃなく諦めだけだ」

「諦め…だけ……」

「これから先、つらいことも楽しいことも沢山あるけどすぐに過去になる。だから、今を大切にしろ！」

「……はい」

だから……強く生きろ……

俺が言えるのはそれだけだ……

「そんなかんだで色々あったから腹が減ったな、飯にしようか」
「あ…でも僕……」
「ハハハ…俺が作ってやるから心配するな!?でもまぁ…手伝ってくれるんなら嬉しいな」
「手伝います!」
「よし、そうと決まれば台所へゴー♪」

話した事は無かったが、自分はキャンプ生活が長いために料理し続けてる経験が前世である
だから、大抵の物は作れるのだ
ちなみに、一番得意なのはカルボナーラです

２０分後…

暗い…私はいったいどれほど眠りに就いていたのでしょうか……
それに、此処は一体……
見たことも無い部屋……あの二人は?

「起きました?」
「……!?」
「あ、そのままベットの上にいてても良いですよ?ご遠慮なさらくともよろしいので」
「はぁ……」
「ちょっとこっち来~いヴァン!」

ヴァンもいるのですね……それは良かった

……良い香り…いったいどこから……？

「どうしたんですかハイルさん、後はお皿に乗せるだけで……母上！」

ヴァンは起きている自身の母親の姿を見るや駆け寄った
そして、二人揃って抱きしめる

「どうやら、心配を懸けてしまわれたようですね……」

「母上……はははうえぇぇ……」

ヴァンは泣きながら喜んでいた
もう二度と目覚めないかもしれない……そんな想像が少なからずも心の中に潜んでいたからだ
だが、そんな心配も気鬱に終わった
現にこうしてファミリアリカは目覚めてくれた

「おや…お邪魔だったかな……」

少し離れた場所でハイルはそんなことを呟いていた
その言葉とは別に表情は穏やかだ

「親子…か……」

ふとハイルは自分の今の両親の事を考えた
厳しいながらもいつも家族の事を考えてくれる父
やさしく、自分の事をいつも応援してくれた母

「早く会いたいな……」

そして、謝らないと……
けど、今は……

貴方達のヌクモリを分けさせてください…感じさせてください……
……

二人を見ながらそう思うのであった……

第17話

あの日から四か月目の月日を俺達は迎えた
ユリアシティで暮らして行く事に慣れ、ようやくマシな形となった頃だった
幾らかは薄れたが、ここの住民とも大抵の接点を持つようにもなった
此処に住むのを拒み続けてた人達ではあったが、それがなくなったのはある事を知ったからだ
フェンデ家はあの始祖ユリアの子孫であったことだ
ファルミリアリカ様にも聞いた所、フェンデ当主が入り婿で自身がその血族だったらしい
それを知ったとたん、ここの住人は踵を返したように態度を変えてきた
なんでも、始祖ユリアの子孫ともなるなら尊重するべき存在に等しいとな……
現金な奴らだ本当に……
それに、俺はその子孫の忠実な使用人みたいな事を陰で口叩いていたし……
まぁ…そんな事は二人が頑なに否定してくれた
ヴァンもそんな事を聞いた時は怒ってくれたりもしてくれた
俺の事はかけがえのない人だと言い張っていた
そんな風にまで言われて俺も若干照れたな……
そんな訳で俺はユリアシティで今だ生活している……
何にもしない訳にもいかないので雑用を主にしたような仕事をちょくちょくとしたりしている

ゴトッ……

「支給された食料の荷はこれですべてです」

「そうか…じゃあ倉庫に運んで置いとけ」

今俺は外郭から送られてくる物資の運搬をしたりしている
ユリアシティに住む住人は普通の街と比べて人口は少ないが、それでも多いと感じれる
その分だけ物資は届くのだから木箱詰めや麻袋詰めの荷を建物まで運ぶ

「倉庫は……裏の方から行くんだったな……」

場所を思い出しつつ荷台を使って運んで行く
坂道とかあったら大変な量だが、この地は平坦な形にしかなっていないからあまり心配する事は無い
早めに終わらせておこう

「衣服類、薬品類、食料類……確認完了」

ふぅ…これで終わりだな
渡されていたチェック表に記入して最終確認をし終えた
後はこれを渡して帰るだけだ

「しかし、なんか暇だな……」

ここには本の類はあるにはあるのだが……預言、創世期、ダアト、ユリアとジャンルがそんなものばかりしかない
読もうにも俺にとっては前世でいうと聖書を日常で読み続けてるようで嫌になりそうで仕方がない
それでも、オールドランドの裏側を色々知るためには仕方なく読む

しかなかった

「はぁ…せめて生体系の本が読みたい…」

此処で愚痴を言ってても仕方がない……

部屋に戻ろう……

「今戻りました」

「お帰りなさい、ハイル。今日はお早いですね？」

「今週分は少し少なめでしたからね…ファルミリアリカ様」

「あら、もうそんな堅苦しい口調で話すのはせずとも良いと前にも申しましたわ？」

「……固着してしまいましたからまだ…」

「ほらまた、…あなたには礼を言っても言いきれないほど感謝しているのですよ？この四か月…私達をいつも見守ってくださったのですから……」

「……」

そんな褒められるような事じゃないんだ……

そういう風にしてたのは…自分に後ろめたさを感じているから……

何とかする…そう宣言したはずなのに…俺には何もできなかったに等しいから……

結局ヴァンには咎を背負わせる事になったんだ

「そう…今は見守る事しか……」
「……？」
「あ、独り言です」
「そう……ならいいのですが」
「そういえば、お腹の方もずいぶんと大きくなりましたね…もう妊娠中期に入ったところでしょう」
「…この子は私にとって旦那様からの最後の贈り物ですから……」
「……そうですね、無事に…生まれてきてほしい…いや、絶対無事に産まれてくると信じています」

これ以上、この人達に悲しみを与えないでくれ

だから、頼む……

「聞きたいんですけど、名前はもう決めました？」
「えぇ、初めて貴方が懐妊の知らせを伝えた後に旦那様と二人で決めておいたのですから」
「お早い事で…してその名は？」
「それはね……」

ダッダッダッダ！！！

そんな時だった…誰かが走ってこっちに来る音が大きく聞こえてきたのは……
その人物は良く知っている者であった

「ハ……ハイルさん！大変なんです！リートが…リートが……！？」
「どうしたヴァン？リートといえばライラックさんの所の息子んとこの名前じゃないか…その子がどうかしたのか？」
「と…とにかく来てください！」

「お…おい……そんないきなり引っ張るなよ」

息を荒げながらもヴァンは俺の袖を引っ張って強引に連れて行こうとする

とにかくなにやら一大事らしそうなので速さを上げて走って一緒に着いていくことにした

「リート…リート！しっかりしてくれ！リイィィトオォォ！！！」

着いた先には人だかりができていて、その中心に横たわり苦しそうな表情をした少年とそれを心配して呼びかけてる男がいた

…何があったんだ？

「どうした！その子になにかあったのか！？」

「あ…あんたは……」

「今はそんなことどうでもいい！それより何があったか詳しく教えてくれ！」

「数分前に…段差で躓いてしまって……あそこにある譜業に胸をぶつけて……それから急に苦しみだして……！！」

「胸をぶつけた……？」

それを聞いた俺はすぐさま顔色を覗って見た

…唇や顔の皮膚が青紫に変わり始めようといる……まずい、チアノーゼの兆候が出てる可能性ありだ！！

そして、上着を破りすぐさま触診に移る

なぜ態々脱がさないのかと言うとその時の衝撃で患部を余計に傷つける可能性があるためだ
……肋骨に損傷なし……呼吸に浅さは見られない……肺に異常は無いという事か……
となると……心臓か!?
ゆっくりと耳を心臓のある場所に付ける

ズズ……ズズズ……ズズ……

心音が不安定……脈は低下傾向……全身がうっ血状態……これは……
……!?

「まずい!?心タンポナーデだ!」
「し…しんぽたで……!?なんだそれは!」
「心臓は本来心膜と言う物に包まれている臓器なんですが…なにかしらの強い衝撃により臓器本体の方に損傷を受けて出血し、その血液が臓器と心膜の間に溜まっていくとそれが心臓の動きを阻害し、全身に十分な血液を送れなくなってしまう症状の事です!!」
「心臓が!?ど…どうすればいいんだよ!?」
「……」

どうする…考えろ……
解離性大動脈瘤だと手術をしなければ助からない……
だけど、ここには麻酔はおろか…抗生物質も外科手術道具もない……
いや、ここじゃなくてこの世界にはまだないんだ……
考えろ……考えろ……
……
……
……
…

……！？……

「今すぐ俺が言う物を持って来い……」
「な……なに！？」
「裁縫針、ナイフ、フォーク、コルク栓つきのガラス瓶、ゴムのチューブ、沸騰させた熱湯を大量、白ワインのような色のつかない酒、一度も使ってない清潔な布を大きい方と小さい方を何枚も…そして絹糸だ！！」
「なんだそれは！？そんな物持ってきてどうするんだ！」
「そうだそうだ！！早く治癒師をダアトから……」

「良いから持って来いと言ってるだろうがウスノロ共が！！！！！！この子の命がどうなってもいいのか貴様らは！！！！！！」

「ひぃ……！！」

そして、最後には逃げるようにその場を離れて行った
他の人達も同様だ
“あの頃”に戻りかけたな俺……

それからは、すばやくユリアシティ中から住人が俺が提示した物を持ってきてくれた
絹糸は困った事に見つからない可能性が大きいかと感じて少年の毛髪を代用する策を考えておいたが心配なかった
なんと、ファルミリアリカが初めてユリアシティに来た時の服がその素材だった
後で感謝だ……
ゴムチューブは譜業の部品の一部でそれを包む部分を取りだしたので代用した

そして、俺は準備を始める
大き目の白い布を所に穴をあけて簡易式のエプロン状にして作り出し、それを着込む
小さ目の方は口や頭や手の部分に巻き付けてマスクや手袋などの代わりにする
麻酔は無し…抗生物質は無く直接的なアルコール消毒と煮沸消毒のみ…
昔の人はそんな状況でも手術をし、運が良ければ回復した記録がある
それに、俺は第七譜術士（セブンスフォニマー）だ
縫合した後、治癒譜術で素早く患部を塞げば何とかなる可能性は大だ……
これはスピードと的確な処置が命綱となる
後は……俺の腕が錆ついてなければの問題……

それじゃあ……

「手術（オペ）を始めます……」

取り戻すまでだ……

第１８話（前書き）

手術の場面に関しては本当の仕方を詳しく知っている人でも考慮してお読みいただく事を望みます。
かじった程度ですから……（汗）

第18話

「きゃあぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」

ここユリアシティにて誰かの悲鳴が響き渡った
声から察するに女性に間違いないだろう
なぜ叫んでいるのかというのは目の前で見る現象に原因がある

「心膜穿刺ならびに排液完了……これより心膜切開を行い患部の修復に取り掛かる……」

目の前の男が彼女にとって異系の存在と認識しているからだ
男は全身を白い布で覆い、ナイフで男の子の胸を斬り裂き、次にはフォークでその傷口を強引に開きだす
何を考えているのか解らないが沸騰させたお湯や白ワインをそれに濡らしたり男の子の傷に布で塗りつけたりするなど狂人がやるような事ばかりをしている
そして今、男は裁縫針で露わになった心臓を突きさしたのだ
その瞬間、男の子の胸の傷から勢いよく血が噴水のように噴出してきた

「ややや…やめろ！これ以上この子を傷つけるな！」
「静かにしろ……集中が途切れる……」

男は止まらない……
先ほどの血を浴びて真っ赤になろうとも……
怯えもせず……目を背けたりもせず……
彼女にとって彼のことをこう表せるものであった……

――――悪魔……と――――

～Ｓｉｄｅ：ハイル～

外野が一々煩いが説明している暇なんてない
確かに、外科手術なんてものを始めてみる人間にとっては気持ち悪い物この上ない
現に何人かは離れている…これを見ないために……
俺から考えて、現代の医者はいわば異常者といってもいいだろう
前世は時代が進むにつれて人の認識の仕方も変わっていったが、初心に戻して見てみれば人間の体を切り開く人を見て正常だなんて言えるだろうか？
答えは断じて否…だ
この世界は言わばその初心の心を持つ人間ばかりなのだけどそんな心情や感情を考慮してこの手術をやっていく訳にはいかないんでな……
このまま続けさせてもらうぜ……

「裂傷部分発見……これより絹糸による縫合を行い、後にファーストエイドをかけつつ修復しながらの抜糸を行う……」

良かった…肺動脈での右室部位に小さな裂傷だけか……大静脈か大動脈に裂傷があれば本来ならば人工血管を使わざるを得ない術式をすることになるはめになったな……
これなら助けられ……

ガバッ！！

「……！？」

「貴様！これ以上何かするというなら殺してやる！！！」

後から突如男がハイルの腕を抑えつける

針を持ったまま何とか持ちこたえ、後を向き男、ライラックに話しかける

「離せ！早く仕上げないと余計に大変なことになるぞ！」

「もう何もしないでくれ！この子の体は……できるだけ無傷のまま見届けてやりたいんだ……」

……無傷のまま……見届ける……？

ハイルはライラックの言葉がどこか可笑しく感じれた

今の所、泣きながらも抑えられてる格好を固められたまま話しかけた

「あんた…どういうことだ？まるで最初から諦めてる様な言い方をして……」

「諦めるも何も……リートは…この年で死ぬ運命だったんだ……」

「死ぬ……だと……」

「あぁそうさ！二年前預言を詠んでもらったんだ！リートの預言はＮＤ２００２の内に事故によって命を落とすだろう…てな！だからどうしようとも無理なんだよ！」

「……」

預言で死を……

「それを聞いて私達がどんなに悲しんだか貴様にどれくらいわかる！？せめてその日が来るまでにこの子の好きな事をしてあげようと決めつつもその日が迫っているという恐怖を……何もできないという私達のくやしさを……」

「そういう意味なのか……」
「今日がその日だった……預言は絶対だ！なにしようがそれは変わらないんだ！でも貴様がしている事はなんだ！息子の体を切り刻んでるだけじゃないか！」
「違う、こうすればこの子は助かる！自身を持って言えるからそうしてるだけだ！」
「助からないと言ってるだろうが！預言に詠まれてたんだぞ！貴様がする事は無駄以下の何でもない！」

無駄じゃないんだよ！！
くそ…預言まで考慮しきれなかった……
恐らくこの人を説得する事なんて無理かもしれない……

「なんでそう早く諦めてしまうんだ！？あんたはこの子の父親なんだろ！？無事を願うのが筋ってもんだろうが！！」
「だから……預言が……！！」

「いいかげんにしろ！！！！！」

ゴッ！！！

ハイルは裏拳を放って強引にライラックを引き離した
そして後へ転がっていき、殴られた部分を抑えつつもライラックはこちらを見据える

「うぅ……」
「預言に詠まれた？だから諦めろ？どこまで腐ってるんだあんたは！！」

その眼は今までに見た事のないようなものであった……

痛みをこらえつつもその眼に捕えられる……

「預言は事実であっても決して真実なんかじゃねぇんだ!!可能性の一つでしかない!!……それ以前にあんたは親失格だな!?己の息子の命を雀の涙くらいにしか軽く見てねぇんだからな!!」

「ち…ちが……!?」

「いいや、違わない!!あんたはこの子を今さっき見捨てたんだ!!それが何よりの証拠だ!!」

「あ…あぁぁ……」

すぐさまハイルは手の布を熱湯や白ワインに付け消毒し直す
途中である患部は埃が極力入らぬよう消毒済みの布で覆って置いとくその作業をしつつ話は続ける……

「はっきり言っとく…俺はあんたみたいな奴が大っ嫌いだ!不可能を可能にする努力をせず、あまつでさえ知らず可能を不可能に変えてしまおうとするその心を持つ人間がな!!」

「……」

「運命が決められた物だとするなら俺達人はなぜ生まれた!?なぜ考える力を持った!?……己自身の幸せを掴み取る為だ!」

「しあ……わせ……?」

「そうだ、自分の足で歩み寄らなければ決して手に入る事のない幸せだ!」

時間が経ち、再び作業に入り始める
一つ一つが迅速な行動だ
そして、遂には遅れを取り戻し始めた

「あんたも試してみろよ……たとえ後の人生が明るかろうが暗かろうが努力だけはできるじゃないか……頑張って頑張って、後悔だけ

は残そうとしないでくれ」

――――だから、俺に賭けてみてくれないか……？――――

その姿は眩しく見えた……

先ほどまで誰かに“悪魔”と呼ばれていたこの男が……

ライラックはこの時決意する……

目の前の男に全てを賭ける事を……

「息子を…リートを……どうか…頼む……」

「…まかせろ、必ず助ける……」

再びハイルは裁縫針を手に取る

消毒し終えたそれは微かに熱いものであった……

そして、針を右室部位の裂傷部分に縫い進め、縫合していく……

「肺動脈右室部位…ならびに心膜縫合完了……そして、癒しの力よ≪ファーストエイド！！≫」

左手から第七音素が癒しへと変換された力が放たれ、傷を塞いでいく

その間、右手をうまく使って縫合した絹糸を抜糸しながらだ……

これで感染症と化膿の危険性は減るのだ

「次は閉腹し、ドレーンを入れて陰圧落差を応用してでの排液を終えたらファーストエイドをかける方法を取る……」

そして……遂に……

「癒しの力よ≪ファーストエイド！！≫」

患部を塞ぎ、チューブを抜きとり、最後の治癒譜術をかける

「手術（オペ）…完了いたしました……」

全てが終わったのであった……

「ふぅぅ……」

ドサッ！！！

今まで集中した分終わった後にドッと疲れが襲ってきた
付けなかった手を地面に置く事もしていた

「終わった……のか……？」
「あぁ……この子は生きてるよ。脈も安定しているし顔色も良好だ」
「本当に……助かったのか……」
「当たり前だ」
「ハ…ハハハ……良かった……良かった……良かった……」

壊れたテープのようにその言葉を呟いていた
だがその顔は涙で頬を確かに濡らしていたのだった……

「……」

こんな状況下でも成功して助かったな……
大口叩いた分やれなきゃ裏切りだしな
ま…良かったな本当に……

「どこにいる！あの男は！？」
「こちらです市長！」

……騒がしい事になりそうだな……

この時ハイルは忘れていた……
己がこの街での禁忌を犯していた事を……
そして、彼はどうなるのか……

それは後にて知る事となる……

第１９話（前書き）

ヴァンやティアがユリアシティで冷たく見られてるのはこういうような同じ事があったからだと私は考察していますね

第19話

今、この場は殺伐とした雰囲気を発していた
鋭く、睨みつける視線が四方八方と感じられるのだ
俺は執務室に設置されている円卓の一つに座っている
隣にはフェンデ母子、向かい側にはライラックさんを含め…ユリアシティの管理の補佐を任せられる人間が座り、奥にテオドーロが座っているという構造だ
議論の内容は先ほどまでの“アレ”についてだ

「…よろしい、ではこの件はシュヴェールが全て独断で起こした事とし……よって処罰は……」
「……」
「ここユリアシティでの市民権利を剥奪する物とす……」
「どうして！ハイルさんはリートを助けたのに……！」
「やめなさいヴァンデスデルカ……これでも、軽く済んだ方なのですよ……それに、ハイルが全て責任を負うと自ら申しているの……」
「責任って……預言に死を詠まれた人の命を助けた事！？それのどこが悪いんだ！ハイルさんは……！」
「よせヴァン……これ以上はいい……俺が決めた事だ……」
「でも……！？」
「ずっと前に言ったろ……世の中には唯正論だけを振りかざしているだけで進むほどそう簡単には出来てないって事を……これがその例さ……」
「……ッ！」

此処までになる事を説明するには時間を遡るだろう……

～3時間前…～

「探したぞハイル！お前はなんと恐ろしい事をしでかしたのだ！？」
「…こんな時に何の用だテオドーロ市長」

術後の所に何人かを連れてこちらにテオドーロは向かってきた
顔が合うやすぐさま向こう側は静かな怒りを見せてこちらを咎めて来たのだ

「ライラック！お前も解っていた筈だ、この男のした事の重大さを！？」
「いえ……その……」

ライラックはその言葉に答える事が出来なかった
正確に言うと何と言えばいいがわからなかった……

「……とにかく執務室に来るのだ、話はそこでしよう」

その様子を読み取ったのかそれ以上に追及は止めていた
後にはすぐさま踵を返して向こうへ戻って行った

「……なんなんだ一体、いきなり怒鳴りこんできて……」
「……シュヴェール、この街についてを良く思い出してみてくれ」
「ユリアシティは監視者の住む街、預言の遵守を義務とした……！？……」
「気付いたようだな……」
「俺は預言に反していたという事か……？」

その通りである
本来リートは預言に死を詠まれていた人間であった
日時はわからなかったが、事故によって命を落とす事はここユリアシティ中の殆どの人間に知られている
だがそれは覆され、現にリートは生きている
しかし、それは“此処”にとって禁忌の行動とされているのだ

「不味い事だ……元々あってはならない事とされているのだから……」
「……くだらねぇな……」
「えっ……！？」
「言わばあれだろ？郷に入っては郷に従え……でもそんな物で危険に晒す様な状況を態々作るような事などお断りだ」
「……」
「行くか……あの頭の固い老人に一発何か言ってやんなきゃこっちも気が済まん」
「あ…あの……ちょっと！？」

こうして、そのまま執務室へと向かっていく
強気に出ているが実は内心は焦っている事が何個かある
この街の人間は預言に反する者、または反した者には容赦などしないだろう
となるとライラックやリートはどうなる？
……うまく話を立ち入る必要もあるな……

「来たか……そこに座るがいい……」
「大勢揃って御苦労さま…だな……」

入った先には重役会議を行うかのような姿勢をし続ける者たちがいた
……!?……ファルミリアリカ様とヴァンもいるだと……!?

「なぜ二人が……!?この件は俺に関しての事のみの筈じゃ……
…!?」
「ハイル……“あなた”の事だからこそ私達もこの議会に参加し
たのです」
「僕達も……納得してないから……」
「……」

すまないな……
別に恩義に対しての見返りが欲しかった訳じゃないんだが、二人は
やる気が出てるそうだ
一旦礼を取ってから俺は席に座った
そして、それは議会の始まりの合図と化す

「今回、皆に集まってもらったのはその男がした事についての問題
を考えてもらう事だ」
「ライラック氏の男児、リートに詠まれていた預言については皆も
承知のはずであろう」
「なんでも今日その預言が成就されたとのことだが?」
「いや違う!そこにいるハイル・シュヴェールに預言を阻止させら
れたのだ!」
「なんと、それは本当か!?」
「恐ろしい事を……!?」

向こう側、ユリアシティの管理補佐達は荒げた様子で討論し続けて
いる
預言を覆した事を悪と最初から決めつけてだ……

「お言葉ですが皆様方、預言は絶対にしなくてはならないと先ほどから申しておりますが……それはどなたが決めた事なのですか？」
「……愚問ですな、ファルミリアリカ様……貴方様の偉大なる祖先ユリアに違いありませんか」
「ではお聞きいたしますが、もし預言を成就できなければその者はどんな結末を迎えると言うのですか？」
「個人のならばその者の人生の破滅を迎えると言えるでしょう……」
「それは肯定しかねますわ……預言とは確かに繁栄を導く物として伝えられてまいりましたが逆の事をすればその結果もまた逆となるなどとフェンデ家でさえもそのようには伝えられてはおりませんわ？」
「ぬぅ……」
「歴史もまた預言の通りに進まねばならないのならば、何故ユリア様はわざわざ膨大な預言を残したのでしょう。抗おうとする者が登場しても、おかしくはありませんよ？」
「それは…秘預言の事でございますな……それに関しては恐らく我らの行動範囲とするためと言っときましょうな……」

それに対し、テオドーロはあくまで預言の存在を肯定する立場として言葉を紡ぐ

「行動範囲…ですか……」
「さよう……しかしそれもまた預言の内にあるのでございましょうな」

預言は全てお見通し…とも言いたいのか？
俺達の行動は星は元から解っていたというのか？
けどたとえそうでも星は星で俺達は俺達で決めるとか考えないのかねぇ……
どうして預言に人は従って行くようになったのかな

便利だから……必要だから……？
昔の連中に問いただしてみたいもんだな……

「……フェンデの者としてではなく、私ファルミリアリカとして申します。正直に言いますと私は預言の遵守は外郭大地の住人と同じくして来ましたが…未曾有の繁栄など興味はありません！」
「なっ……！？」

それはここで言ってはいけない！
そんな事をすれば立場が悪くなるだけです！
どうしてそんな事を……！？

「未曾有の繁栄などと言う物など存在する訳がありません……限界と言う物がある以上永遠など存在しません。私は唯皆が笑って暮らせる世界……そうなって欲しい事を願っているのですから」
「貴方様は預言を違えるおつもりなのですか！？」
「後から来る幸せを望むため今を犠牲にするより今を大事にして生きる……それこそが正しい生き方ですわ」

そう言うと俺の方を少し見て来た
前にそんな風に話したっけな……
覚えていてくださったのか……

「ですから私はハイルの行った事への意見に対しての異議を求めます」
「……僕も、異議を求めます！」

……この人達はユリアの子孫という縦書を捨ててまでも俺を助けようとしている……
けど、それでいいのか……？

もしかしたら俺はこの二人の人生を台無しにしてしまうかもしれないのに……

……いやだめだ、ここはやはり……

「市長、この件に関しては全て俺が独断で強制的に行った事だ！ファルミリアリカ様とヴァンデスデルカ殿とライラック氏には関係ない！」

「……！？……」

「それは……そなた一人の責任である……そう申したいと言うのか？」

「あぁ……」

「そ…そんな、ハイルさん！？」

「弁護はもう結構です……ですが、ありがとうございます……ヴァンデスデルカ殿」

「……ッ？……」

ヴァンはハイルの様子が可笑しいと感じれた

今まで敬語でなんて喋ってくれなかったのに……

まるで今は赤の他人のように振舞っていた

どうしてそんな事をと頭の中で疑問に思い続けている

だが、ファルミリアリカは気付いていた

ハイルは自分達にまで火の粉を飛ばさぬようあえて自分一人で泥をかぶるつもりなのだ……

たしかに、先ほどの自分の言葉には所々立場上不味い所があった…

……

その事はここユリアシティの住人が黙って見過ごすほど甘くはないだから、これ以上の負荷をかけさせないようにしてくれているのだろうと感じ取っていたのだ

「では、本格的な話に移ってくれ…市長」

「うむ、潔しである」

そして、冒頭に戻る
途中でもっと重い処罰をかけようとしていたが、ファルミリアリカ様が釘を刺したのだ
もし、そうするのならば自分達はフェンデの名を返上することになるだろうと……
さすがにそれは向こうにとっても不味かったらしく、慌てて考え直したそうだ

そして、俺は明日にはこの街を出ていかなければならなくなった……
二度とこの地に踏み入る事が出来ない追放までとはならなかったが……お別れになるのだ
たまにしか会えなくなるだろう……しかも、ユリアシティに二人はいる以上文通さえもできなくなる
関わりが大幅に減らされたのだ

「嫌だよ……ハイルさんと別れるなんて……」
「ヴァン……」
「僕も行く！このまま……」
「いい加減にしなさいヴァンデスデルカ！」
「……母上……どうしてそういうの……ハイルさんがいなくなればいいと思っているの！？」

パァンッ！！！

「……ッ！！」

「そんな事……そんな事などある訳がありません！！」

泣いていた……

貴方は俺を家族だと言ってくれた事がありましたね……
それは軽い冗談だと考えてましたが……本気だったんですね……
その涙が証拠なんですね……

フェンデはマルクトでの名のある貴族……
俺達の知るホドに関しての事を他のマルクト人達に伝わるような事があれば皇帝は黙っていない筈……
それを考慮して俺はここに二人には残ってもらう事にした

俺はヴァンの傍に立ち、しゃがみながら向き合う

「いいかヴァン、別れという物はいつか必ず来る……それが人であろうと動物であろうと……だけど悲しむことはない、終わりが来る事はまた始まりを迎える事と同一なんだ」

「……」

「離れていても俺はお前の事を忘れやしない……それだけは覚えていてくれ……」

「また……会えますよね……？」

「あぁ…絶対にな……」

そして、俺は指きりをした
ホドには日本と同じく格言やおまじないが存在するのだ
その中には指きりも入っているのだ
他愛もないようなちっぽけな約束の仕方だが……その中身は大きいだからきっと……

そして後日、俺はユリアロードからアラミス湧水洞へと移動した…

……

第２０話

ザパァッ！！！

「うお！水！ぬ…濡れ！……？」

「騒ぐな……セフィロトの力によって弾かれるようになっている…濡れはしない」

「んな事言ったってこんな風になるなんて知らなかったんだから仕方ねぇだろうが……」

ユリアロードを抜けて今までとは比べ物にならないほどの青々とした樹林の景色が眼に入った

……久しぶりの木々だ、妙に懐かしく感じてしまう

ユリアシティにも魔界（クリフォト）で唯一花を咲かすセレニアの花があるが、小さくてひっそりと佇んで咲いている物でしかない

緑色は癒しを人に与えてくれる……初めてその意味がわかった気がした

「案内はここまでだ……ここを抜けて北西に向かえばダアト港に着く」

「だが…東へ行けばダアトだが……お前には相応しくない神聖な場であろう」

「……別に俺はダアトには行かないさ、ま……こっちからお断りだが……」

「……減らず口を……」

たく……此処まで盲信すると俺には逆に哀れに思えるな

預言はあと約１６年後には覆される未来が待っているというのに……

……

ま、知ってるのは今の所俺とローレライだけだがな……
さてと、食料やテントに薬品……それに壊れた狙撃譜銃が持ち物としている
あそこでの値段……ぼったくりも良い所だったな、食料も中々分けてくれなかったし……
ここは魔物の巣窟でもある……だから注意して進まなくちゃいけないってのに……
少なからず俺を此処で果てさせようって魂胆だな

「これでも唯ユリアシティで生活してたわけじゃないんだがな……」

この四カ月、ヴァン相手に試合をしていたり時折突っかかってきた街の奴を“徹底的”↑ここ重要、に技を磨かせる為に戦ってたりもした
お陰で上級譜術を2，3回ぐらい使えるようにもなれたいざという切り札になりえるだろう

「それじゃあ行きますか……」

そして、俺は足を進めて行った……
ここから見てみると、洞窟の入り口があちらこちらある
此処を抜けるためには向こう側に行かなければいけないから通りきるしかないな……

「お邪魔するぞ…と」

青みを含んだ岩壁を伝っていき中に入って行く
その中は清んだ水が溢れんばかりに流れる水脈が存在していた

「水か……これほどまで透明な物なんて前世でもめったに見れない

な」

心が落ち着いていく
それほどにも綺麗な物なのだった
水の匂いという物がこれほど美味な物だと初めて知った

「あぁ～あ～～川の流れのよ～うに～～♪」

川と言ったらお馴染のあの方の歌を思い出した
少しはっちゃけたのか歌いだしたりもしていた

「ゆ～る～や～かにぃ～～この身をまぁ～かせてぇ～いた……♪」

グニュッ！！！

水脈を渡っている途中、ふと妙な感覚が足元から伝わってきた
なにやら柔らかそうで生温かい……

「なんだ？何かあるの……」

ニュルルルッ！！！

下を向くと同時に透明なスライム状の形をした物が足から這い上がってきた
それは段々と下腹部辺りまで伸ばして行った
いきなり物体Ｘな感じの物に出会ったためハイルは……

「ぎゃあああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」

当然絶叫した……
そして、すぐさま腰にあるナイフでその物体を剥がし落そうとした
しかし、ハイルにはさらなる困難が待ち受けていた……

バサバサバサバサッ！！！！！

先ほどの絶叫を聞きつけたのか、蝙蝠の形をした魔物が大量にこちらへ飛んできたのだ
ご存じかもしれないが、蝙蝠は超音波を自ら発してそれの反射の仕方を感じ取って物の位置を認識する夜行性で大変賢い生物である
そんな音が眼代わりの生物相手に絶叫なんて浴びせてみたらどうなるだろう……
ましてやここは洞窟の中……音が反射するにはうってつけの場所である
たちまち引き寄せてこられる……しかも相手は唯の蝙蝠ではなく魔物だ
命の危機にもさらされる可能性が大なのだ

「てめ！こっちくんなぁ～！？ぎゃあぁぁ！首噛むな！！群がるなぁ～～！！！」

集団と言う名の（レ○プ）攻撃にさすがのハイルも堪らない
実をいうと、ハイルは害虫や害獣といった類のものだけは好きにはなれない
精神的に参るだろう……

「こ……のぉ！！我に仇なす者よ、その身に聖印を刻め≪エクレー

ルラルム！≫」

カァッ！！！

なんとか精神を保ちつつ譜術を放つ
眩い十字の刻印が近くに浮かび上がり、そこから発する波動が敵を呑みこんで行った
しかもこの譜術は光属性なので、眼の弱い蝙蝠達には感覚を麻痺させる代物でもある
その目録どおり、魔物達は次第に離れていく
だが………

「群がってくんじゃ………」

ここに………

「ねぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！！」

怒りのア◯ゴモードと化した鬼神がいた………

「魔を滅ぼせし神槍の一撃よ！我が手に集い、敵を貫け！！」

グ・ン・グ・ニ・ル！！！！！

ドゴオオォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォン！！！！！！

……説明しよう……
なぜ、ハイルがかの陰険鬼畜メガネの恩師の譜術を使う事が出来るのか……
実はこの世界に送った張本人が…やっちゃったＺＥ♪という感覚でやってのけてしまってたからだ
だが、今のように怒りとかでリミッターが解除されるような条件下でない限り使う事は殆どないだろう

シュウゥゥゥゥ……

「・　・　・……あれ、俺何やったんだ？」

しかも、無意識とのことでばれる心配はなしだそうである
もしばれたら……ハイルはこう詠むであろう……

ローレライ
　いっぺん表
　　出てこいや♪

そして、殴れるなら殴りたいであろう（笑）
なんともやりたい（殺りたいとも呼ぶ…）放題沢山の音素集合体であろうか……

「……とにかく早く此処から出よう…長居は危険だ」

考える事は後にしてとりあえず進むのであった……

その後は色々と災難であった……

上から落ちて来た大きな蟹の魔物に襲われるわ……

半魚人っぽい魔物に追いかけまわされるわ……

そろそろ鬱になるくらい悲惨な目に会っていた

しかし、ようやくアラミス湧水洞を抜ける事には成功していた

「蟹怖い……半漁人キモい……蝙蝠ウザい……ぶつぶつ……

……」

見事なｏｒｚ状態でありました……

黒い瘴気がふつふつと湧き上がって来ております

「……今日はもう暗いな……此処で野宿しかないか」

ふと周りを見てみると日が落ちてきているのが見えた

出発が午後であったので道中時間を掛け過ぎたためか夕暮れ近くとなっている

そんな訳で背中のリュックから折りたたまれたテントを取りだす

骨組みを立て、杭を打ち込み、形を整えるといった昔風の風避け程度の物ではあるが無いよりはましであろう

手際良く立て終えた後は周りに落ちている枝を集めに行った

薪の代わりに使えるので多く集めておいた方が良い

火は魔物も恐れる物、これがあれば警戒してこちらには近づく事は殆どなくなるだろう

そうして準備は整っていくのであった……

「……静かなものだ」

パチッ…パチッ……

火の傍に寄り添いながらポツリと独り言を漏らす
虫の鳴音も聞く事も無く、前まで聞いていた水の流れも聞こえなくなっていた
唯一聞こえる物とすれば時々吹いてくる風の音ぐらいだ

「ダアト港へついたら……フェレス島行きの船に乗ろう……母さんや父さん……ノワール達やシェリィーおばさん……それに……」

明るく照らし続ける火の光を浴びつつハイルはこれからやるべきことを考える
両親に真っ先に誤ろう……
あいつらとまたふざけ合ったり……あの人と言い合ったり……
やりたい事がたくさん思いついていた
自分にとって帰るべき場所はあの島だ
皆がいるあの島なのだ……

「……もう寝るか……」

横にあった譜灯を消して力を抜いて横になる
今大事なのは休む事だろう
焦ってはいけない……時間は沢山あるのだから……

「おやすみ……」

それは自分に向けての挨拶ではあったが……
優しい物だとふと思えた

彼は眠る……
親しき者との再会を胸に秘め……
今は静かに眠る

後に、残酷な事実を知る事になろうとも……

第２０話（後書き）

このごろ不眠続きで頭が痛くなりつつあります……

第２１話

とある場所では主に参拝者や精進修行のための人々がまず最初に集まる所がある
そこがここダアト港である
港では教団関係の制服を着ている者がいるのも可笑しくは無く、あえて言うと一番多いところであろう
ダアト港からの行き先はキムラスカ、マルクトどちらでも許可が出されている
基本、中立国家であるダアトでは国境での小競り合いなどという物は存在しないため自由であるといえよう……
逆もまたしかり、二国からの来国者の受け入れも特別な許可はいらないのだ
翌日、ハイルはそこに到着していた

「なかなか……しんどい……」

道中魔物の襲撃により心身疲れかけており、いささか足取りが重いとりあえずは簡単な店で休憩を取る事に決めた
近い所だとそこは酒場である

「酒は飲まないが、とにかく入るか……“ここ”での情報も知りたいしな」

まずはここ外郭大地では何が起きたかを知りたい
ユリアシティで外郭との交流を一時遮断していたため約四カ月分の変化を俺は知らない
唯知っているとすれば、ホド戦争は導師エベノスの仲裁により停戦したそうだ

よってキムラスカとマルクトの関係は一時停戦状態ということである
政治に関してはあまり関心がなかった俺でも探らなければいけない
事がたくさんあるしな

カランカランッ！！

「いらっしゃい……ご注文は？」
「すぐに発つ……簡単な物をたのむ」

注文しないわけにはいかないので建前としてやっておく
体は１８だが心は６０超えてます……
ちなみに酒はあまり飲む方じゃなかったぞ？
あと、この世界では酒を飲める年齢とかは正確に定められてないらしい

「おい聞いたか？ローテルロー橋の戦いであの“死霊使い（ネクロマンサー）”が出陣したらしいぜ！？」
「あ…あの戦場の骸をあさり、死者の復活研究をしているといわれる！？」
「すごかったらしいぜぇ……マルクトが一時あのキムラスカ英雄として名高いニコラス・スティール将軍によって壊滅状態に追い詰められたんだけどよ……死霊使いの使う強力な譜術発った一発で戦況をすぐさま逆転させちまったらしいぞ！？」
「一発って……どんだけすさまじいもんなんだよ……」
「そのおかげでニコラス将軍眼を焼きつけられちまってな……二度と出陣できないようにされちまったんだぜ？」
「ははは……かの英雄様も眼をやられちゃあ御終いって訳か」

死霊使い……か
なんとも物騒な二つ名だ……

骸をあさるってのは医学生時代似たような意味合いで俺もやっているが死者の復活まではさすがにやれんわ……
人は必ず死ぬ……それが遅かれ早かれ……
ゾンビもどきでも作って何かしたいのかねぇ……

「マルクトも自国の領地が滅んだってのにそれを口実に戦争引き延ばすなんざ正直迷惑だよな」
「あぁ～ホドか……皇帝がいうにあそこにあった兵器関連の研究所がキムラスカの大型譜業爆弾の攻撃によって大規模な爆発を引き起こされた結果、島ごと文字通り消えてなくなったっていう……」
「土の一粒さえも残ってないらしいぜ？」

……皇帝の奴め、やはし事実隠蔽をしてきやがったか
本当はフォミクリー関連の資料を流出を恐れ、超振動の実験を兼ねて葬り去ろうとしたが、それが失敗に終わり自国自身で己らの領地を滅ぼしてしまったというのに……
自ら出た錆をそこまで隠したいというのか……
……まったく苛々する

「そういや知ってるか？ホドの消滅の影響で起きた津波によって近くの領地までも沈没させたって話しだ」
「でっかい津波だったよな！ダアト港が一時水びだしになるくらいヒデーもんだった……」
「それで……えーっとなんだっけ？その領地である島の名前……」
「なんだ解らないのか？えっとたしか……」

フェレス島っていう所だったぞ……？

……なんだって……？

「今ではそこでの物資を入れてた木箱や家の一部等が海の上で漂ってる風になってるだとよ」

「フェレス島ってあんま聞かないけど……結構人いたんじゃねぇのか？」

「まぁ……商業での交流が盛んになって来ていたから結構いたんじゃないか？」

「ふ～～ん？」

フェレス島が……沈没した……？

ガタッ！！

「おい、そんなデマ誰が流した……？」

「ん？何だあんちゃん知らねえのか？マルクトから正式に知らせがでた話だぞ」

「デマじゃなくて正真正銘事実だとよ」

嘘だ……

「フェレス島からの難民が多く出て路頭に迷う奴が多いって話だ」

「グランコクマでもその事に関しての暴騰が起こった事もつい最近出てるぞ？」

嘘だ嘘だ嘘だ……

「……もしかしてあんちゃん…フェレス島の……」

「えっ……！？」

ガバッ！！

「うぐっ！？」

「なぁ…冗談だと言ってくれよ……なぁ？」

「お…落ちつけよ！おい…！？」

ドガッ！！

「嘘だと……！嘘だと言ってくれえぇぇぇぇぇぇ！！！！！」

「ぐがあぁっ！？」

「だから落ち付いてくれ！！」

ハイルは男の一人の襟を掴み上げ、真偽を問いただすべく乱暴に振りまわすようにした
だが、望んでいた結果が得られず行動はさらに過激になっていく
壁に強引に押し付けてまるで無理矢理でも問いただそうとするようになっていった

彼は……大切な物を奪われたのだから……

その後、騒ぎを起こしたため酒場から追い出されたハイルは浮浪者のように建物の壁に寄り座った状態でいた
その姿は人から見れば、生きる気力を失った死人のようであった……
眼に光は無く…孤独という名の鎖を幾重にも巻き付けられた人形……
そう言い表せることもできた

「（…俺は、また取り残されてしまったのかもしれない……）」

かつて、人を殺め…唯一人絶望に捕えられた……

「（俺は……本当は一体何を目標にして生きていけばいいんだろうか？）」

俺の目標は唯の借り物……
己自身の意思はなく、偽りの存在……

「（偽物が…本物になるのは無理……そんな簡単な事にようやく気付くなんて……）」

フェレス島に済んだ日々が…唯一俺が“ここ”にいるという事を証明できる物だった……

「（何もかも…消えてしまった……じゃあ俺は……？）」

存在してもいい“存在”なのだろうか？
この手も…足も…髪も…血も……
全ては本物の【ハイル・シュヴェール】だけの物だったんだ
“俺”はそれをいつの間にか自分の物と塗り替えるように考えていた……

「これは…そのことを忘れた“罰”なのか……？」

――罪って…赦される物なんですか？――

ヴァン…その答えを探すのはお前だけじゃなくなるかもな……

ザッザッザッ……

ふと、思いにふけっていると誰かがここに近づいてくる
足音に気付き、顔を上げてみる
その正体はダアト港の定期船の案内役を務める船員であった

「あの～…いったいどちらの船便をお待ちですか？」
「……え？」
「いえ、ずっと港口の目の前で待つようにしてましたからそうなのかと……違いましたか？」
「あ……えっと……」

もう、行き先はどうでもいい……

「今、何処行きが残ってるんだ……？」
「あ…はい！今から出港する船は……」

――ケテルブルク行きとなっています――

「……じゃあそこでお願いする」
「では、切符をあちらで……」

そして、ふらついたような足取りで切符売り場へと向かう……
その行き先がどうだと、それからどうするかと……
何も考えず……
フェレス島が無くなった今、彼に帰る場所は無い……

そのまま失意の最中、ハイルを乗せた定期船は帆を立て、譜業動力を回し始め……

今、ダアト港から出港する……

消えた景色の住人は…そこで今度は何を見つけるのか……

第２２話

雪とは何か？
大半の者が空から降ってくる水の結晶だと答えるであろう
だが、またある者はこう表現する……
世界で最も美しく、最も儚い宝石……

雪とは何か？
それは、見る者によって様々な物へと変わる贈り物……

帆を張り、風を受け、ゆっくりと海路を進んで行く定期船……
その内部でハイルはベットの上に横たわっている
気力が見えないのは相変わらずで、起きようともしていない……

「……」

フェレス島はホドが崩落した直後、発生した津波によって沈没した
……
ホドが崩落したのは俺がフェレス島を発ってから約二時間後……
フェレス島の住人は戦争の火花が及ぼされる危険性はないと知らされているため、警戒が薄かった……
仮に出発してたとしても準備等に使ったり決断するために使った時間を考えればそれは約一時間前……
本土に着くまでは一時間以上……

しかも、津波の高さは島の高さを考えて５０ｍ以上
船に乗っていたとしても飲み込まれる可能性は大だ……
だから……生存率は……

「０に近い……てか……？」

思いつきたくなかった……考えたくもなかった……
希望なんて存在しないに近かった……

「糞……」

ドッ！！ドッ！！

「糞ったれ……！！」

ゴッ！！ゴッ！！ゴッ！！

うつ伏せになりつつ右手でベッドの毛布を叩きつける
このどうしようもない考えをどう処理したらよいか思いつきもしない

「……外出るか」

そして今初めて、ハイルはベッドから起き上がった
空気を新しく吸うために扉をあけ、甲板に出ていく

「パパー！見て見て雪だよ！？」
「ホントだ！そろそろケテルブルグに着く頃じゃないかな？」

自分以外に船客としてどこぞやの父子が空から降り注ぐ雪を見て興奮しているのが見えた
そういえば、父や母には殆ど我儘みたいな事をしたことは俺は無かったな……
子供らしく振舞い、仮面を被る日々……
それは別に冷めた生活ではなかったが……
唯、その頃は必要な物といえばここオールドランドを知るための最低限の物ぐらいしか欲する事は無かった
……今思えばなんか他人から見ればつまらないような奴に見えたかもしれん
…もう……今更だが……

「ハハハ……」

両親…か……
前世でも全然顔を合わせた事が無かったな……
人生二回に渡って親不孝もんだよ俺は……
もう何も残っちゃいない……
軽く笑い声を出しながら俺は眼から一筋の涙を流す

「そろそろ到着いたします、船を降りる準備はお早めにしてください」

ふと甲板の入り口の方から声がしたので振り向いてみると船員がいつの間にか立っていた
どうやら到着の知らせをわざわざ伝えに来てくれたらしい
ケテルブルグ…か……
銀世界と呼ばれる雪国の街だったな……
考えもしないでこの船に乗ったが、乗ってしまったものは仕方がない

少しはどうするべきか考えるか……

向こう側から音素暖炉や音素灯の光が家から漏れる景色が見えてくる……

嘗て前世で旅行で行った場所の景色に少し似ているとふと思ったりもしていた……

そして、異端者はケテルブルグへと足を付ける……

船から降りた後は少し店を見たりして時間を潰す

ホドやフェレス島のように賑わいは無くとも、立派な屋敷や店がある所だ……

ただ、全体的には何と言うか……田舎っぽい

それが俺の結論だった……

「というか、向こう側にある屋敷がある意味別物って感じだよな……」

どこぞやの貴族が住むような屋敷がひっそりと佇んでいる……

それがこの街の違和感の正体だった

同じ船の乗客に聞いた所、なんでも皇帝の眼につけられてる重要な人物が住んでるとの噂らしいとか……

詳しい事はあの屋敷が全て知ってるだろう

「……ふぅ……」

一先ず俺は近くにあったベンチに座っておく

雪が積もっていたためか座所は冷えており、それを我慢しつつも腰

を降ろしていく
次には肘を両膝に立て、手を軽く重ねてそこに顎を乗せる
今の所できる楽な姿勢を取る事にしていた
そして、視線の先は子供達が今も遊んでいる広場に向かっていた
そこには雪合戦やカマクラを作ってたり雪玉を大きくしたりと色々
な遊びをしていた
その光景は微笑ましく、少し微笑をもらしたりもする

「子供……か……」

俺は結婚なんて考える暇もないくらい突っ走ってきたからなぁ……
戦場で幾人もの人々の出会いを通じて医者をやってきた
その中で子供達とも色々触れ合ったりしていたな
例えば、勉強を教えてあげたり世界の地理について話してあげたり
と色々やった
嫌がったりする様子なんて全くなかったさ
皆勉強や新しい事を知ることがとても大好きな子達ばっかだった
今時の日本の子供にはありえない事だよな……
でも、あの子達は知りたい事がたくさんだ…まるで知りたくない事
がないみたいだった
今思えば、皆良い子だった……
なのに、どうして彼らはあんな場所で…あんな時代で生まれてきて
しまったのだろう……
先ほど言った子供達にな……実は、亡くなったのも少なくは無か
ったんだよ……
病気で、戦火で、怪我で……
時には地雷で両足を失った子……
時には枯葉剤による影響での双結児の双子の姿……
生きる希望も未来も勝手に奪われた子達も沢山俺は見て来たさ……
その中で救えたのは俺でも2，3割り程度でしかなかった

限界があった……

一人で何でもできるとそこまでは考えては無かったが…それが悔しかった……

所詮俺も恵まれた人間として生まれ、育った奴だ……

恵まれなければ凡人としてそのまま生を終えていたかもしれない

「俺自身は偉くもなんともない…唯の人間だよ……」

誰かの支えがあるからこそ人は成長していく……

その支えが大きければ大きいほど……

しかし、その大きさゆえに道を外す人間も出てきてる……

世界はどうしてこうも複雑なのだろうか……

「世界は…常に非情だ……誰かの為に働きかける事はない……

だから、自分自身が動かなければならないんだよ……」

忘れるな…この苦しみ……

刻みつけろ…この痛み……

神に誓うな……己に誓え!!

「それこそが…本当の……」

ツンツンッ!

「んっ?」

葛藤し続けていたハイルの足元に何か違和感を感じ取った

どうやら何かが足元を小突いているようだ
いったい何が……？
そう考えて下の方へ視線をずらしてみると……

「ブ――――――――！」

ブウサギと呼ばれている生き物がいた
まだ子供のようだ……
そして、首にリボンや体に服を着せているとなると……誰かが飼っているペットか？
とりあえずそのブウサギを手で持ち上げ、膝の上に乗せてあげてやった

「どうしたんだお前？飼い主から逸れたか？」

「ブ～～～……」

「そうか、大丈夫だ……きっとお前の飼い主はお前を見つけだしてくれるよ……だから安心して元の目立つ場所に帰っておきな？」

「ブ――――――！」

言葉は解らないが、以心伝心したためかなんとなく言っている事は感じ取れた気がする……
しかし、ブウサギを飼うなんて物好きな奴がいるもんだな……
ブウサギはたいてい食用で家畜として飼われるのが多いのにな……
しばらく……面倒見てやっとくか？
なら見つかるまでやってやるとするか……
でもホント、飼い主は誰なんだ？
顔を見てみたいな……

～Ｓｉｄｅ：？？？～

「ネフリィィィ――――――！！！！！！！俺の大事なネフリィィィ――――――――――――！！！！！！！！！！！」

その頃、向こう側の家の裏側では金髪の男が必至な形相をして辺りをぶちまけたりして何かを探していた

「ま…まさか！？俺のネフリーが可愛いからって……何処ぞやの奴が攫ってあの毛並みの綺麗なネフリーの体に（以下省略……）なことを！？うぉおおおお！！！！！！ネフリィィィ――――――！！！！！今待ってろぉぉぉ！！！！！！すぐ助けてやるからなあぁぁぁぁ！！！！！」

そして、暴走する金髪男は全力疾走でさらにヒートアップしながら此処銀世界の街を探し回るのであった……

彼の愛しのブウサギが見つかるのもそう遠くない未来である……

第２２話（後書き）

ケテルブルグは資料によると、まだホテルやカジノの開発はこの頃には行われていないそうです。
そして、最後に出て来たのはお馴染のあの人ですね。（笑）

第２３話（前書き）

ｇｄｇｄが……まずい集中力がｇｄｇｄだ……

第２３話

「ホントにすまん！！俺が悪かった！！」
「あぁ……ホントにな……」

ハイルの目の前には金髪の男が脂汗を流しつつ必死に謝っている
それも最終形態ＤＯ☆ＧＥ☆ＺＡをしてまでも……

「俺はもう怒ってない……だからそろそろその姿勢を止めろ、見苦しいから」
「お、おう！！」

なぜこうも金髪の男は焦っているかと言うと……

「プギュゥゥゥゥ！！！！！！」

ギリギリギリッ……

「いや本当に勘弁してください可哀そうだからネフリーを解放してあげてくださいお願いしますから！！（汗）」
「知ってるか……豚肉ってのはな、肉を良くほぐして血を抜いてから捌くと新鮮で旨みが増すそうだ……」

こいつ…ネフリーを喰う気満々だ！！

ハイルは表面上は穏やかにしているが、右腕は抱えているブウサギを絞め殺すくらいに力が入りすぎていた
その強さはブウサギが悶絶するくらいだからかなり強いといえるで

あろう……
そこから見て、言葉とは裏腹に激しく怒っている事がわかる

「勘違いでいきなり殴ったのは悪かったです！！この通り反省してます！！」
「ふ～～ん……」

なぜこうなったのかは今から数分前に遡る……

～Ｓｉｄｅ：？？？～

「いない！いない！いったいどこなんだネフリィィィ！！！！！！」

これ程探しても見つからないのか！？
やっぱり誘拐……それだけは許さん！！
だったら……すぐに犯人を見つけ出して俺のネフリーを怖がらせた報いを思い知らせてやろうじゃないか！！

「うぉ！どうしたお前いきなり！？」
「ブ――――――！！！」

この声は……！？

その声の方を向いてみると、青髪の男が己の大事な大事な↑（大切なので此処二回）ブウサギを片手で抱いているではないか！
しかも、そのブウサギは暴れているように見える……

瞬時、金髪男はその場面をこう考えた

“

「このやろう、てめぇ大人しくついてきやがれ！」

「ブ――――――（助けてぇぇぇ！！！ご主人様ぁぁぁ！！！！）！！

！！！！」

「へへへ、さぁ～てどう扱ってやろうかなぁぁぁ？」

「ブ――――――（うわあぁぁぁぁん！！！怖いよぉぉぉ！！！！）！

！！！！！」

”

「てんめぇぇぇぇ！！！！！！」

考察が終えた後、すぐさま金髪男はその場へと勢いよく向かって行った……

～Ｓｉｄｅ：ハイル～

「どうだ、お前のご主人は見つかったか？」

「ブ――――――……」

先ほど出会ったブウサギを右腕で抱えつつ飼い主を探してあげていただが、様子からしてなかなか見つからないようだ

「困ったな…他に飼い主を知っている人がいればいいんだが……」

しかし、此処の事を深くは知ってはいないし……もう夕暮れ時に近いから人が少なくなりつつある

早く何とかしないと……

ジタバタ……！！！

「うぉ！どうしたお前いきなり！？」

「ブ――――――！！！」

突如として腕に抱えていたブウサギが暴れだした

落ちそうになるのを防ぎつつ、バランスをなんとか保ち直す

「てんめぇぇぇぇ！！！！！」

そうしている間に誰かがそう叫ぶのが聞こえた

今だふらつきつつもその声が発した方へ顔だけ向けて見る

その次に見たのは……

バキッ……！！！！！

誰かの拳によって視界を遮られた暗闇であった……

「うぼぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」

たまらずハイルは何処かの別世界の皇帝の某叫び声をあげるという

変な行動を取ってしまった

ズザアァァァッ……！！！！！

それから勢いに引っ張られ、雪の上を滑るようにして地面の上に倒れた

「よくも俺のネフリーをキズモノにしようとしてくれたな！その罪は俺にとって万死に値するから覚悟しやがれ！」

「な…なぁ！？」

キズモノって……俺は恋人をゴミのように捨てようとした彼氏って事なのか！？

失敬な！！そんな事はおろか、前世でも今だチェリーボーイで生を終えたわ！！

……今の言葉、自分で言っておいてなんか悲しくなるね……（泣）

……ってとにかくそんなこと考えてる場合じゃねぇ！？

今だ痛む頬を抑えながら傍にいたブウサギを再び抱きあげつつ距離をとって金髪男と向き合った

「いきなり何しやがるお前は！？」

「お前の話なんぞ聞く耳など持たないぞ！とっとと俺のネフリーを放しやがれ！！」

「……ネフリー？」

「お前が攫おうとしているそいつの名前だ！」

ちょっと待て……攫うって……このブウサギを……？

なんか可笑しいが、とにかく……

「あれ…お前のご主人か？」

「ブ――――――！」

「……ほれ」

「よし、返すつもりがないというんだな！それじゃあこっちも……

…へっ？」

今だ一人相撲をしているこの男に一応ブウサギを放してやる

突如自分の考えとは全く違う行動をしたことに男は間抜けな声を出す

「お前……どういうつもりだ？」

「どうもこうも……俺はこいつを偶然見つけて飼い主を探してやろうとしてただけだ」

「それ……ホントか？」

「そうだが？」

「……」

「……」

「すまなかったあぁぁぁぁぁ！！！！！！」

そして、まぁ冒頭に戻るのだ……

呆気なく結末を終えたため自分でもなんか拍子抜けだったけど、仮にも殴られたからお仕置きをしてやっているのだどうやらこいつ、ブウサギ命って感じだな

「この街にブウサギ料理の専門店ってあるか？子供のブウサギは確か串焼きが一番美味って聞いてるんだが」

「やめて！！ホントやめてください！！（汗）」

ズルズルズル……

ブウサギ（ネフリー）を抱えたまま街中を歩き続ける
その後ろには何とか止めようと体を引きずらせながら俺にしがみ付く男が……
やべ……たのしいぜ♪
……ゴホン……今のは無し！……そろそろ許してやるか……

「ほい、今度は見失ったりするなよ？」

そう言ってネフリーを男に差し出す

バッ！！！

「おう！ネフリー！！俺は寂しかったぞぉぉぉ！！！」

素早く奪い取るようにネフリーを受け取った途端、急にフランクな表情になった
こいつさっきの絶対本気で反省してねぇ……！
……まぁいいや、そこまで気にするほど堅くは無いし……なにより……

――――今日の俺はぁぁぁ……紳士的だぜぇぇぇ！！！（アナゴ風）――――

んっ？なんか乗り移られたような……

「イヤ～悪かった！お詫びと言っちゃなんだが……お前まだ飯食ってないか？」
「ん……あぁ……まぁ確かにここに来るまで食事はしてないが？」
「じゃあうまい飯食える所知ってるから其処でお詫びだお詫び！」
「いや、ちょっと何をする！」

いつの間にか手を握って引っ張っていこうとしていた
なんともマイペースな男だな……

「そういや名前聞いてなかったな……聞かせてくれないか？」
「……」

あ～あ……
嫌な頼みをするなよ……
俺の事も知らないくせに……

「あ～……俺なんか不味い事聞いちまったか？」
「…いや、別に……」
「じゃあ俺から先に名乗るぞ？俺はフランツっていう奴だ」
「フランツな……」

どんどん話を進める気かこいつは……

「んで歳は２２のお兄さんって訳だ！」
「……１８だ」
「俺より４歳年下か……なら十分だな！」

何が十分なんだ、何が……
そろそろ離れたいんだが……

「とにかく…俺はもう何も気にしちゃいない、お詫びなんて結構だ…だからさよなら」
「おいおいおい！そうつれない事云うなよ！人の親切は素直に受け取っておくもんだぞ！？」
「それ……お前が言うか……（汗）」
離れようとしてるが歩くと共に男もこちらに着いてきている
あぁもう、埒が明かん！
「俺とあんたは赤の他人、それ以外の何でもない……もう良いだろうが……」
「……」
歩みを途中で止め、後に振り返って男に睨みを利かせた眼を向ける
その直後、男は今まで浮かべていた笑みを消す
「…そうか、じゃあ仕方ないか……」
さすがに続ける訳にはいかないと感じ取ったのだろう
これ以上は余計な事まで知る羽目になりかねないと思った
「その、まぁなんだ……気持ちだけは受け取っておくよ……」
だが、ハイルは一応なるべく傷つけないような言葉を選んで言ってやっていた
その言葉が嬉しかったのか男はまた笑みを取り戻す
「そうか！じゃあ次会う時は必ずだぞ！？」
「まぁ……考えとくさ」

そうして、その場からハイルは離れて行った
後から男が何か言ってるが、あまり気にしない感じでいる事にした

今日はもう宿を取ろう……
次をどうするかなんて後で良いさ……

≪2時間後…≫

ボフッ！！！

「ふぅ……」

街の中心辺りにあった宿を見つけ、今日はそこで寝泊まりとした
少し安物のベッドの毛布が圧縮されてそこから空気の音が出る

「ウジウジ悩んでてもしょうがない……」

過去は戻らない……
なら未来の事を考えろ
……でもそんなの簡単に切り替えられる訳が無いんだよ……
俺は“人間”なのだから……

「ＮＤ２０１８まで俺は何をするかを考えなきゃいけないのか……
…たとえ嫌でも……」

契約を結ぶ時、俺はあの時何を考えたんだろうか……
もうおぼろげになりつつある記憶を今再び思い出そうとする

だが、肝心の所がどうしても思い出せない

「あの時、俺は“楽しもう”としたのかもな……」

思えば舐めていたのかもしれない
ちっぽけに見てた物が余りにも大きな物だと気付かされ、ようやく
それを知った
今までに背負う事も無かった責任の重さ…それが原因だろう……
俺はそれに縛られかけているのだ……

「俺がやろうとしてる事って……実質世界に喧嘩を売る事と同類だよな……良く考えてみりゃ」

預言はオールドランド中を覆い尽くしている
数字にすればどれほどになるかもわからない

「なら…今度は間違えない……」

“俺”を創り出そう……
何者にも縛られる事のない“俺”と言う存在を……

カリカリカリッ！！！

「んっ…何の音だ？」

どうやら窓からその音がするが……
ここは一階だ…じゃあ窓の付近に誰か居るのか
不思議に思い、窓の方を良く見て見ると……

「……ネフリー！？」

何と、あの男フランツのブウサギ、ネフリーが窓を引っ掻いていたのだ
それであの音が響いていたのだろう
それを確認し終えた後、ハイルは靴を履いて外に出て見る
宿の外を半回転回った所にネフリーは居た

「お前……なんでここに？」
「ブ――――――！！！ブ――――――！！！」
「どうした……慌ててるのか？」
「ブ――――――！！！！！」

バッ！！！

「あっ…おい何処に行くんだ！？」

何度か泣き声を上げた後、ネフリーは此処から走って行った
しばらく様子を見て見ると、しばらく走り終えた後こちらに振り返ってまた鳴き始めた

「…俺に着いて来いと言ってるのか？」

大体として伝えたい事を読み取ってみた所、そう考えれた
こいつは何か重要な事を俺に伝えようとしている……
とにかく……俺は着いていくことにした

「ま～た面倒な事に巻き込まれそうだな……」

その考えは、見事に的中する事となる……

第２３話（後書き）

ピオニーの口癖って良く解らないです……
調べ直して研究してこようかと思います……

第２４話

「おいおい、俺とのデートはいっぺんでやるのはお断りだぜ？」

金髪の男フランツはその言葉とは反対に建物の裏側にて背を付けながら緊迫した雰囲気で振舞う
なぜならば、向かい側には黒尽くめのフード付きの外装を着込んだ五人組が囲んでいるからだ
しかも、手にはナイフを中心とした暗器を手にしつつだ……

「……今度は俺の兄貴か？それとも元老院の誰かか？依頼主は……」

「……」

「な～んて…答える訳ねぇよな……」

相変わらずおどけている口調のフランツに対して五人組は相変わらず沈黙を守っている
余計な事を喋るような口は持ち合わせてないという感じだ

「…ったくあの糞親父め……預言がどうとかで人の将来勝手にきめつけやがって……」

フランツはこう言う事になる原因に対して愚痴を零す
それは顔を歪めさせてしまうほど嫌な物であるとこちらからでも解る

「ま、今そんな事愚痴愚痴と言ってちゃショ―もないが……」

チャキッ……

その間、黒尽くめの五人組はそれぞれの武器を構え始める

「おいお前ら、この俺の命が欲しけりゃ甘く見ない事だぜ…でないと痛い目に会うぜ？」

それに対しフランツも自身の構えを取り始める
そして、しばらくの静寂が訪れる……
雪が降り続け、視界を悪くされつつも互いをしっかりととらえ続ける
少しづつ足を動かす音が聞こえ、緊張感は最高に達する頃……

バッ…！！！

遂に動きを見せた
最初に動いた方は五人組の方である
まず二人組が左右から素早く駆け寄り、相互にナイフを突きたてようとする
狙うは肺や心臓……
暗殺者にとって大切なのは標的をいかに早く殺すかだ
この場合、二人はフランツの肺を目掛けて狙った
そのままナイフは突き立てられ……

「はぁっ…！！」

る訳にはいかなかった……
即座にフランツは回し蹴りを仕掛け、二人共腕を蹴り払う
鈍い音をたて、ナイフが雪の大地に滑り落ちると同時に二人は腕を抑えつける
かなりの痛手を貰ったようだ……

「舐めんなよ…これでも自分の身を守るくらいの嗜みは一応付けて

いる物でな？」
「……チッ……！？」

初めて五人組の方から舌打ちと言えど、口を開かせた
標的についてどうやら考えた事と違っていたためか予想を裏切られたのだろう

「さぁ…どんどん来やがれ！」
「調子に…乗るな！！」

バッ…！！！

今度は剣を携えた一人が出てくる
ナイフとは違い、リーチが長い剣では素手で立ち向かうのは至難の技だろう
実際に剣道三倍段説というのも出るほどその理はリアルとなっている
見る限り、相手は剣を前に出して構える方だ……
その姿勢は相手の急所を一撃で潰す刺突を目的とした物だ
突進力を使って放つその攻撃は並大抵の防御では防ぎきれないだろう……

「来るか……！？」

フランツはならば距離を大きくとって避ける事を選んだ
たとえ致命傷ほどの威力を放つ一撃でも当たらなければ意味はない……
バックステップを繰り返し、後へ下がる……

ガッ…！！！

「……！？」

しかしそうはいかなかった……
先ほど倒した二人が後から捕まってきたのだ
一人は足を…もう一人は腰に腕を巻き付けフランツの行動を制御する事に成功させた

「くっ…この！……放しやがれ！！」

ゴッ…！！！　ガッ…！！！　バキッ…！！！

腰に巻きつく方に打撃をくらわせ、何とか拘束から逃れようとする
しかし、足をうまく動かせないため力を良く込められず決定打を打ち込むほどの威力が出せない
そのため、逃げられず…どんどん剣はフランツの体へと吸い込まれるように向かってくる

「や……べ……」

この時ばかりはフランツも命の危機を感じ取った
このまま俺はあの剣に突き刺されるのか……
脳はその思考を浮かび上がらせ、刹那諦めを感じ取らせた

「ネフリィィィシュゥゥゥトゥゥゥゥ――――――――――！！！！！」

「ぷぎぃぃぃぃ――――――――！！！！！」

バコォォォ――――――――――ン！！！！！

「ごばあぁぁぁっ…！！？」

しかし、天は彼に味方したようだ……
己に剣を突き刺す筈だった暗殺者は何者かの叫び声と共に飛んできた物体に顔を叩きつけられ、大きくバランスを崩した
その物体の正体はどうやらブウサギ……

ブウサギ……だと……？

「ネ……ネ……」

「ネフリィィィ――――――――――――――！！！！！」

ドンッ……！！！！！

「ガッ…！！！」
「ギャアッ…！！！」

その正体はなんと己の愛しの大事な大事な（↑ここ大ｒｙ）ブウサギ、ネフリーであった
それを見るやフランツはまるで爆発したかのように動きを封じていた二人を体から瞬時に吹き飛ばすという荒業を成した

そして、すぐさま眼を回し、気絶しているブウサギを抱きしめ、慌てながら心配するようになった

「……あれが、火事場の馬鹿力ならぬ…雪場の馬鹿力……」

今、彼のブウサギを蹴飛ばしたこの男の辞書にはどうやら反省と言う名の言葉は存在しないようだ……

～Ｓｉｄｅ：ハイル～

「おい！どこまで行くんだよ！？」

宿屋からずいぶん離れてしまったな……
まだ止まる傾向が見当たらないし……

「ったく、あの男あったら唯じゃおかねぇぞ…」

正直ハイルは怒ってた
休む筈だったのにまた何処かへと駆り立てられるような羽目にされた原因のこのペットの飼い主、フランツを……

「くっ…この！……放しやがれ！！」

んっ…？この声……あいつだ！
その声の発した所へ近付くべく、路地裏を通って行く……
すると、先ほどの男が抑えられ、剣を突き刺されようとしている様子が見られるではないか！？

このままだとあいつは……！！
危険を瞬時に感じ取ったハイルはすぐさま打開策を考える
そして、突発的に自分の足元の近くにいるブウサギ、ネフリーが眼に入った
其れから判断した事は……

ネフリー……鳥になってこい！！

「ネフリィィシュゥゥウトゥゥゥゥ――――――――――――――！！！！」

ドガアァァッ…！！！！！

ネフリーをサッカーボールのように蹴りあげ、敵にぶつける事であった……
某少年探偵も驚きの発想である……
だが、そんな奇行とは裏腹に効果はあった
フランツが殺されるのをなんとか阻止する事が出来た
ネフリーが見事にクリーンヒットしてくれたおかげである…

「ネフリィィィ――――――――――――――！！！！！」

すると次にはフランツを抑えつけていた二人を吹き飛ばし、ネフリーの元へと閃光のごとく向かって行った

「……あれが、火事場の馬鹿力ならぬ…雪場の馬鹿力……」

いやまぁ、んなこと関係ないんだがな……
とにかく、結果オーライってことで♪

「なにしやがんだぁぁてめぇぇぇ!!!!!」

ダダダダッ…!!!!!

わぉ…めちゃくちゃ怒ってるわ……
しかも拳を振りかぶりながらだ……
だが甘いぞフランツ!!

「でりゃあぁぁぁ!!!」

ブォンッ!!

「そおいっ!!!」

ギュルルッ!!!　ドゴッ!!!!!

「あだぁぁぁぁ!!!!!」

ハイルは殴ろうとした腕を左腕で絡ませ、身動きを一瞬封じた後右腕の肘でフランツの型の急所を打ち込むというカウンター技を仕掛け返した
そして、絡ませた左腕を引きフランツをうつ伏せにさせた

「おいお前!俺のネフリーを蹴るとは何てことしやがるんだ!?」
「仕方ねぇだろう!咄嗟の事だったからこうするしかなかったんだからよ!」

「今度ばかりは殴る！絶対殴る！……あだだだ！？」
「喧しい！一々ペットの事で喧嘩事にするな！死ななかったんだから良いだろうが！？」
「一々だと、俺のネフリーへの愛を一々だと！！」
「お前の愛など知るか！」
「こ…この！！腕を外しやがれ！！」
「外したら暴れるだろうが……」

先ほどまでの緊迫感はどこへ行ったのだろうか……
もはやこれは何処かの友人同士の喧嘩であった……
五人組は自分の使命を忘れて唯そのまま眺めていた

「お前にはブウサギの素晴らしさが解らないのか！？」
「食用でしか素晴らしさは見出せん！」
「食用だとぉぉぉ！！？お前…あの可愛いブウサギを食用でしかだとぉぉぉ！！！」
「えぇぃ、もううざいわこのブウサギ馬鹿！！」

ボスッ…！！！

「ガッ…！！！」
「しばらく眠ってろ！」

ハイルはフランツの鳩尾にキツめの一発を喰らわせて意識を刈り取らせた
さすがに効いたのか、すぐさま静かになった

「さてと……」

一仕事終えたかのように息を吐き出しならフランツを地面に寝かせる

「で、おたくらはこれからどうしたいんだ？」

次には後を向き、フランツに変わって五人組と対峙する
その行動にやっと我を取り戻したのか意識をこちらに向け始めた

「何者かはしらんが、我々に用があるのはそこの男でね……貴様にはどいてもらおうか？」

「だが、死にたいというのならば別だが……？」

チャキッ……

再び己の獲物を構え始める
殺気を纏わりつけるのもそう遅くは無かった……

「死にたいのならば…か……たしかに、さっき知りあったばかりの男に命を掛けるのは秤に乗せてもつり合わない行動だな……」

「何……？」

「だけどな、後味悪くなんだよな……人が死にそうって場面をそのまま見過ごすってのはな……」

そう、それは手術中以外の事でさえも……

「それに、どうやら俺は頼まれたようだからな……」

そういって向こう側に倒れているネフリーに視線を移す
今だ眼を回していて絶賛気絶中である

「では、貴様も排除せねばならないようだな……」

「できると思うか……？」

「……何？」
「悪いがな…俺はこういう場合……」

「情けを絶対掛けないようにしてるからなぁ……」

ジャリッ！！！

ハイルは足の踏み込みを強め、姿勢を中段半身に構える
しかし、普通とは違って腕を上に上げて構えようとはしていない
一見不利になりそうな姿勢だが、そうでもない……
これは守の構えとしての完成図でもあるのだ

「全力で来な…そうするほど俺は強くなる……」

おそらく、その言葉の意味が解るのは彼らがハイルの攻撃を受けた時であろう……

第２４話（後書き）

ピオニーって確か趣味で格闘技覚えてて使えるようですね？

第２５話（前書き）

合気道ってすごいよね
塩田剛三さんが一番のお気に入りです

第２５話

銀世界の街、ケテルブルグは普段は穏やかな雰囲気を持つ所だ
だが、今回は違う所がある……原因は路地裏の広場だ
殺気と闘気が充満し、対峙し合う人間達がその根源といえる
その内五人は物騒な人間だと他人から見ても解る者達、そして一人は構えをしたまま彼らをジッと睨み続けている
気絶している一人と一匹は考えない方向で！（酷）

そして、遂に動きを見せ始めたのは五人組の方であった……
五人での陣営を作り、一人を囲みだす
其々の武器を取りだし、今にも殺そうという仕草がよく解った

バッ…！！！

先ずは一人、背後に位置していた男がハイルに攻撃を仕掛ける
刃が歪な形をする殺傷能力だけを追求したようなナイフを背骨あたりに目掛けて突き出す
彼にはスピードには自身がある……これまで何度か依頼を受け、成功させたという経験を持つからだ
だが……

ガッ…！！！

「……ッ！？」

その自信は……

ギリリッ……！！！

「う………がぁ！」

脆くも崩れ去る事となった………

ゴシャァ………！！！！！

「背後を取ってしめたと思ったか………？」

足音に合わせ、瞬時に右回転で振り向くやナイフを持つ右手を左手で掴み上げ捩じり込む
次には自身も回転しながらその右腕を己の背後に頭の方から潜り抜けさせつつ、後を取って腕を完全に決める
それで終わりとはいかず、次にはそのまま相手の背後から自分の右手で男の肘を掴みそのまま車輪を押すように思いっきり押し付けるそのため、苦痛から逃れるため捩じり込まれた腕を元に戻そうという男の反応とハイルの押す力が相乗を起こし、男は大きく前回転をして背中を打ちつけた
見事な四方投げである………

ガシッ…！！！

「覚悟しとけ………痛いぞ…？」

ゴキィィィッ…！！！！！

「ギャアアアァァァァァァァ──────────！！！！」

一応言っておく…これはスポーツではないのだ………

純粋な殺し合いであるのだ……
負けたら終わり……二度はない……
だから、ハイルは相手の肩の関節を思いっきり外した……
静かにやるとは対象に、それは骨と言う体の支柱と共に肉の屈折の
制御の役割を持つ物を一気に失くされた
痛覚を直接捩じられるに等しい痛みが男に襲い、悲鳴を上げさせた

「さぁ……次来な」

作業を終えたハイルは立ち上がり、軽い挑発を掛ける
男達は先ほど彼が一体何をしたのか解らないという思考をもったまま
まだが、何もしない訳にはいかない……

「ぅ……くっ…！」

次は二人一気に仕掛ける事にした
初めて動き始めた双剣使いと先ほどフランツに剣を突き立てようとした男がそうだ
二人は武器という有利を確信しつつハイルに向かう
まずは双剣使いが先に前に出た
多数の攻撃パターンを持つ双剣の軌道を読む事など困難なことだ
一つを防がれるのを覚悟してもう一方で攻撃する素振りを見せ、最初の一撃で切りつけよう……
男は裏をかいての攻撃に出ようとして剣を振りかぶるが……

ズザァッ…！！！！！

「……イッ！」

ハイルは防ぐという動作をする事はなかった……

足の爪先で土と砂利ごと雪を蹴り上げ、男の顔に掛けたのである
予測できない動作に驚きを感じながら、眼に入ったそれらを片手で擦り落とそうとその動作に入った
それがハイルの狙いであるとも知らずに……

ガシッ…！！！

「敵の前で眼を反らすの感心しないな……そういう場合、下がるのが鉄則だぞ？」

ザクッ…！！！

何をされたのか男は良く解らなかった……
己の双剣は相手に掠りもせず…気がつけば己の肩と胸の間に吸い込まれるように両方刺さっていた……
刺された所から血が滲み始め、ようやく自分の一大事に気付く事となるのだ……

「ヒ……ァァ……う…腕がぁ……」

「そこは上腕の神経が通っているからな……切断させてもらった」

男は指先一つ動かす事が出来ない腕にされてしまった……
ハイルがやった攻撃の正体は相手の力を跳ね返す三珍の姿勢を使った応用である
視界を奪ったその隙にハイルは男の懐にまで歩を進め、そのまま内側から両腕を捩じり、相手側に剣を向けるよう仕組んだのだ
そして、そこで使った三珍は力のベクトルを最大限に垂直にして安定させる空手特有の防御技術である
それを使ったハイルはその時は己の体重６５？と同質の鉄塊と化し、相手から衝突させた

男は言わば棘付きの鉄壁に突っ込んだ行為に等しい事を仕出かしてしまったのだ

ガバッ…！！！

「借りるぜ！？」

「ガッ…！」

ドシャァッ…！！！

「……ッ！」

まだハイルの手は止まらない……

次は先ほどの男の黒布の外装をフード部分から剥ぐようにして奪い去る

その途中、もう一人の剣の男に蹴り飛ばして……だいきなり飛ばされてきた事に若干驚きつつも横移動して回避し、再び視線をハイルに戻す

グル…グル…グル……

ギュッ…！！！

「……何をしている？」

「言うと思うか？」

何をしているかと言うと左腕に先ほど奪った外装を巻き付けたのだまるでけが人のギブスを付けるかのような感覚で……

「ほら、お前も来いよ？それとも臆病風に吹かれたか…？」

「……ッ！！！」

何を考えているか解らないが、攻撃の手を緩めない訳にはいかない……

それに、相手側の呼吸は次第に乱れ始めている……

疲労を蓄積させていけば好転が訪れるかもしれない……

そこから考えて行動は早かった

ヒュンッ…！！！

「はぁっ！」

「むっ……」

力の限り斬撃を続ける……

ハイルはそれを察して大幅に避けて距離を取る

だが、逃がすまいと追いついて剣を振り続ける

「くっ…なかなか……やるじゃねぇか……」

「うおぉぉぉ――――――！！！！！」

ハイルは少々焦っていた

自分の柔術は相手に触れてこそ使える物だ……

こいつはどうやら俺を近づけさせないようにしつつ斬ろうと躍起になって攻撃している

近づくにはやはり“アレ”をやるしかないか……

「死ねぇぇぇ――――――！！！！！」

「……！？」

意識を反らしたのが不味かったのか……

相手の剣の領域まで入ってしまっていたようだ……
しかも、剣は斜めに振り落とそうとされる寸前だ
なら迷う暇はない！

バシュッ……！！！

剣は振り落とされ……肉を斬ったかのように思えた……

「……なっ！？」
「知ってるか…剣や刀は切っ先で当てるからこそ斬れるんだ……」

だが外装を巻いた左腕で男の剣を受け止めていた
先ほどの音は布が切れた音であったのだ……
しかも、血も流していない……

「つまり、逆に言えば柄元の部分じゃ斬れにくくなっちまうから……」

ガシッ…！！！

「覚えときな！！」

グォンッ！！

「うおぁぁぁぁぁ――――――――！！！！！」

ズシャアァァッ……！！！

自分の両腕をうまく使って相手の両腕を体重を掛けて引っ張り、そこから巴投げを掛ける

ルール無しの技の為、男は大きく飛ばされて地面を転がる羽目になった
受け身を取れず、苦痛に悶絶するようになる

「ふぅ…布巻いといて良かったな……」

一応として外装を巻いておいたのは剣に毒を塗られていた場合に備えてだ
別に自分の服でも良かったのだが、敵を前にして服を脱ぐなど言語道断だ
しかも自分の服は薄い方だ……もしこちらでやっては刃を通されてしまうかもしれない
だから厚みのある敵の外装を選んだのだ
なんという応用力だろうかといえる……

「さてと……」

ジロッ……

「ひ……ひ……っ！！」
「お…落ち付け！」

どうやらこの二人は自分の腕に自信がないようだ……
怯えきってしまっているな……
だが、見逃すわけにはいかない……
暗殺者として生きる以上覚悟を決めるんだな……

「清浄なる光よ、邪悪を滅ぼす槍と化せ≪ホーリーランス！！≫」

それは、六つの光でできた槍であった……

光属性の上級譜術≪ホーリーランス≫
対象となる敵を聖なる槍で貫くという……
彼らにとって、裁きの槍として降り注いだ……

「お～い、起きろ！」

ポンポンッ！！！

全てを終えたハイルはフランツを起こす事に決めた……
頭を軽くひっぱたいて意識を覚醒させようとしていた

「……」

だが、起きない……
強く打ち過ぎたか？
しょうがない…こう言う場合あれをやるか……
そう考えてハイルはフランツを先ず上半身起き上がらせる
そして、後に立ち、左手で首元を抑えて……

「いっせぇ～の～……」

右手を構え、力を込めて……

「せい…！！！」

背骨の痛覚に一角打ちを打ち込んだ……

ドスッ…！！！

この行為は杭を背中に打ち込むに等しい…よって……

「イダアァァァァ――――――――――――――――！！！！！！」

めちゃくちゃ痛いのである……

「痛ッ…！！な…なんだ！？何が……！？」

「やっと起きたか……」

「んっ…お前は……ッ！！」

暫く混乱していたが、しばらくしてようやく現状を思い出したそうだ……

「おい…！！あいつらはどうしたんだ！？」

「安心しろ……全員死んじゃいない、ま…半殺しにはしたが……」

「半殺しって……！？」

その言葉で辺りをフランツは見回す

横に倒れ、唸り声を上げてる男……

肩を抑え、苦痛に顔を歪ませながら座り込んでる男……

丸くなるようにしてグッダリとしている男……
黒焦げになって横になる男二人……

良く見て見ると呼吸をしてるからどうやら生きてはいるようだ……

「安心しろ…死んじゃいない……念のため治癒譜術を軽く掛けてやってある」
「そ…そうか……」

自分が気絶していた間にここでいったい何があったのだろうか……
そんな事を考えているとふと肩を叩く感触があった

「あんた…うまい飯食える所知ってるって言ったよな……」
「へっ…？あ…あぁ……たしかに言ったな……」
「もう限界だ……腹減った…宿屋じゃもう時間で食えないだろうからそこで飯食わせろ」
「えっ……？」
「人を巻き込んだ迷惑料と考えとけ……」
「いや、来たのはお前の勝手じゃ……」
「お前のブウサギ…ネフリーだっけ？あいつだよ…俺をここまで連れてこさせたのは……」
「……！？」
「ペットの責任は飼い主の責任だよなぁ……てな訳でちゃんと取れ」
「ネフリーが…俺を……」

グラッ…！！！

「お…おい！？」
「わり…俺もう限界だわ……正直言うともう歩くこともままなら

ないんだ」
「限界ってお前……」
「肩借りるぞ……」

ガシッ……

「これで何とか…歩ける……」
「ほ…本当に大丈夫なのかお前……！？」
「……ハイルだ」
「はぁっ…？」
「一々お前なんて呼ぶな…俺の名前はハイルだ……覚えとけ」
「…じゃあハイル……一応言うぜ、ありがとな……」
「……あぁ、でも一番の功績はあそこのネフリーに言っとけ」
「そうだな！！ネフリー！こっちこ……」

絶賛気絶中です（笑）

「あああああ！！！！！」
「そういや忘れてた……」
「貴様ぁぁぁ！！さっきのお礼の言葉返しやがれぇぇぇ！！！」
「叫ぶなよ……それに、ね・む・い……」

ガクッ……

「うぉっと！！お前…いやハイル！しっかりしろ！！」
「ハハハ……上級…譜術……使ったのが……まずったかな……」
「まずったじゃねぇだろ！！……ええぃしかたない！」

バッ…！！！

フランツはハイルを背負った……
いわばおんぶである……

「フラ…ンツ……？」
「しっかり捕まってろ！！」

そして、フランツはハイルを背負い…走り出す
フランツは考えた……
たぶんこの弱りようは…虚弱状態になっているに違いない……
遅行性の毒を体に入れられたな……
ちくしょう、奴らめ……最後の最後で一矢報いやがったか……
たしか、屋敷にパナシーアボトルが置いてあったはずだ……
それを使えば……

薄暗い銀世界をフランツは駆け抜ける……

その背には己の命の恩人を背負って……

第２６話（前書き）

本編よ……ｃａｔｃｈ　ｕｐ！！
早くそこまで行きたいとです。

第２６話

ガツガツムシャムシャ……！！！

「すげー食べっぷりだな！？そんなに腹減ってたのか？」

ゴクンッ！

「アラミス湧水洞を出てからそれ以降なーんにも口にしてなかったんでね」

「アラミス湧水洞！？お前まさかダアトからここに来たのか！？」

「いや、俺は別にダアト出身じゃないし…ダアトに行ったことも無い……」

「ん…？じゃあお前、なんでそんなとこに居たんだ？」

おっと…ユリアシティについては口にしてはいけない約束だったな……

半分嘘とホントを混ぜて話すか……

「少し旅をしていてな…その途中でそこで野宿するために居た」

「旅…？」

「そう、旅だ……何の宛ても無い……」

「ふ～～ん……」

宛てが無いのは本当だがな……

「それにしても……」

チラッ……

改めて俺は周りを見てみる
豪華な家具、天井に吊るされてるシャンデリア、品質の良い大きめのベッド……
ある所を除いて普通じゃめったに見られないような物ばかりが置いておった

「ここって何処……？」
「もちろん俺の屋敷だぜ！」
「屋敷……あぁ、この街の隅にたしか建ってた屋敷か！」
「外から見て結構大きかっただろ？」
「そうだな…だけどな、今一番聞きたい事と言えば……」

この屋敷に住むような男とは……

「あんた…いったい何者だ？」
「…そうだな、ここまで知った以上隠す必要はないよな」

フランツは少し溜息をつきながら眼を閉じてそう呟く

「じゃあ約束してくれるか？俺が言う事を誰かに漏らさないってことを…なら俺はお前に話してやっても良いぜ？」
「口は固い方だ…でも別に話したくないなら言わなくても良いが？」
「おっと…そうきたか？でもな、一応お前は俺の命の恩人なんだ、なのに俺は今だ自分に関してお前に嘘をついてるなんて失礼な真似はしたくない」
「嘘……？」
「…俺の名前は本当はフランツじゃないんだ…俺の本当の名前はな……」

――――ピオニーって名前だ――――

「ピオニー……」

「おいおい驚かないのか!?マルクトに詳しければ誰でも知っている名前だぞ?」

何処かで聞いた名前だな……

たしか、政治関係の本をユリアシティで読んだ時に見たような……

この屋敷を見るに貴族の住むような構成をしている……

なら貴族の子息か……この男は?

「父親の爵位は……」

「いや、俺の親父に爵位はないぞ?」

「なら、仕事は?」

「んーまぁ、人を束ねる事をしてると言っとこうか?」

「…なんかあんた、楽しんでないか?」

「さて、それはどうだろうな♪」

ぜってぇ楽しんでる!!

じゃあなんなんだ!爵位を持たないで尚且つ屋敷を構えれるような人物と言うのは……

…一人いた……

ははは、確かに…その人物は爵位を持っている訳がないな……

「ちなみに…父親の名前は……?」

「ようやく解ってきたようだな…もちろんカールだ!」

「五世ですか!」

「五世です!」

「マルクト皇帝ですか！！！」
「ズバリ皇帝だ！！！」
「あなた皇太子ですかぁぁぁぁぁ！！！！！」
「ハッハッハッ！！どうだ驚いたか！」

ジーザス…マルクトの皇太子ピオニ―殿下ではありませぬか……
ようやく思い出した…マルクトの歴史書だあの時読んだ本っていうのは
ねぇ、これって不味くないか……俺死亡フラグか？いや、この場合処刑フラグだな……
思いっきり殴っちゃったよ皇太子……
人生終了だよ俺きっと！？

「申し訳ありませぇぇぇぇん！！！！！」

すぐさまＤＯ☆ＧＥ☆ＺＡである
もはや不敬罪だけじゃ済まされん域まで犯しちゃったよ！
すみません、音地帯にいるかもしれない父さん母さん……
もうすぐ貴方の息子はそちらに向かうかもしれません……

「おいおい、別にそういう風にしなくて良いぞ？俺は軟禁の身で国に関することなんてまったくしちゃいねぇし…実質継承権なんて他の三人の兄妹の中でも一番下とされてるからな」
「へっ…？」
「俺の母親……まぁ側室って言えばいいかな…一番位の低い方だったからその息子である俺もそうなったって訳だよ」
「そうなんですか？」

……じゃあちょっと待てよ？
そんな人物を暗殺に掛けようとするか？

普通逆じゃないのか……？
いや、念のためという思考でやるならそうかも知れんが…
何か違う……

「そういえば、あの暗殺者達はなぜ貴方様を？」
「……預言だよ」
「預言…？」
「グランコクマにいるあの糞親父が詠ませた預言士が俺が次期皇帝になるって預言を詠み上げるなんて馬鹿な事をしたもんでよ…そのおかげで以前より外に出にくくなったわ…食事は毒見がビッシリと付くようになって楽しめんわ…散々だよ本当に……」
「次期皇帝…貴方が……？」

政治でも預言は依存されてるんだな……
だけどそれでいいのか？
たしかに、預言は便利な物だ……
先の解らない選択をして失敗する可能性を大幅に下げる事が出来るそれに、その力の誇示は強大だ
意見の食い違いという物が出る事は無く、議会は通りやすい結果が出せる
でも、もしその預言が“外れる”事となったら？
考えもしなかった事態での対策なんて考えつく事が出来るだろうか？
いや、まず無理に近いだろう……
そういう物は同じ事を何回も経験してからこそ身につける事が出来るんだ
例えば、安心だという立て札が掛けられた古びた吊り橋を渡るかを決めるのだってそんな事だ
危険を回避する術を持とうとしなければならない

「歪んでるよな…そんな事で皇帝決めるんだったらなんで王位継承

権なんてものが存在するんだか……」
「…たしかに、必要ないですよね」
「あーやめやめ、こんな真っ黒な内政関係なんて喋りたくないからこれで終わりだ！それと…何時までそんな口調で喋るつもりだハイル？」
「いや…こう言うのは普通義務というか何と言いますか……」
「俺にとっちゃ敬語はウザッたらしいこの上ないもんだから今までの通り話せばいいぞ？」
「……」
「そこで黙るなそこで！えぇい、ならこうだ！皇太子勅命ってことで許す！」
「勅命って……それ皇帝だけにしか使えない特権じゃ……」
「そこは気にするな♪お前は頑固すぎるんだよ」

今思ったが、こいつが皇帝になっていいのか？（汗）
後にこいつによって振りまわされる部下達の涙目が浮かび上がってくるんだが……
ていうか、イメージの初めから全然違うし……
もっとこう……なんか威厳を持つもんじゃないのか？

「それでは「敬語なしだ！」……じゃあピオニー…あんたなんでそんなにフランクな振舞いしてんだ？」
「実は俺はこの２３年間ここで軟禁されてるなんて言われてるけどな、実際はそうじゃない……脱走してはこの街の近所の奴らと遊んだりもしたさ…しかも私塾に内緒で通ってたって事もある、おそらくそうしている内に威厳を持てとか慎みを持てだとかなんだか馬鹿らしく思えちまってなぁ……」
「脱走…まさか、今回外に居たのも……」
「ご名答だ！けどなぁ、お前を屋敷に運んできた時にそれがばれちまったからまた護衛の奴らとかにこっ酷くもうするなって懇願され

ちまったわ」
「何回脱走してんだあんたは……（汗）」

なんだろう……王族のイメージがガラガラと崩れ落ちてきてるよ……

いや、別にこういうのは知らない訳じゃない
実際１０００年以上も昔、イギリスの皇太子が庶民の生活を知るため船の技術者として国を渡ったって話を聞いたことがあるしな…
でも実際この眼で見ると…なんとも違和感が……

「よし、ここで本題に入るとするか！」
「……は？」
「ハイル、お前ここで使用人として働いてみないか？」

なんですと……？

「……ちょっと待て！なんでそんな方向に！？」
「俺はお前が気にいった！だから俺の傍に置かせておきたいからだ！」
「気に入ったって……そんなモンで人の勤め先決めていいのか！？」
「俺が良いっていうなら良いんだ♪」

な・ん・だ・そのジャイアニズム！！

「だから、俺は旅の途中で！！」
「……それは嘘だろ？」
「……ッ！？」

何……

気づいていたのか……？

「俺は経験上人が言ってる事は嘘か本当か良く解るからな……」

「……う……」

「俺はお前に本当の事を話したぞ？…なら、お前はどうするんだ？」

「……解った……」

今回は…俺の負けだ……

腹括るか……

「そういう事だったのか……」

「俺には…もう何も残っていないからな……」

俺は今までの全てを話した

ホドを、フェレス島を、フォミクリーを、この時期に詠まれた秘預言の事を……

ユリアシティについても向こうも守秘義務を全うする事を約束した

から話す決断をした
全てを話し終えた時、ピオニーは何か考える顔を…俺はうつむいて
暗い顔をしていた

「すまない……」
「ピオニー…！？」

ピオニーは俺に頭を下げて謝罪の言葉を掛けて来た
突然の事で俺は驚いてしまった

「全ては俺の親父が撒いた種だ…仮にもその息子である俺が無関係
でいる訳にもいかない」
「止してくれ…あんたに謝られても俺が困る、それにあんたを恨む
なんてお門違いもいいトコだ」
「いや、そもそもこれは謝って済む問題じゃないんだ……」
「……それもそうだな」

この戦争でホドやフェレス島ばかりじゃない……
住む場所を失った難民、戦火で両親を殺された戦災孤児……
これから大量に溢れ出てくるに違いない
それを謝罪で済ませれるほど解決できる甘い物なんかじゃない

「国の繁栄の為に預言は成就するべきものとする……ガキの頃か
らそう教えられちゃいるが俺はそうは思いたくねぇな……」
「まぁ…悪魔で“国”であって“民”の幸せに繋がる訳じゃないか
らな……」

そう、戦争で犠牲を多く出して得た繁栄なんて大きいにもかかわら
ず実質小さい物だ
それを享受すべき人が少なくなるんだからな

「戦争を始めるのは何時だって人間だ……けど、それを結局終わらせる事が出来るのは人間でしかない……」
「そうだな…どうして上に居る奴らってのはそんな手段を取りたがるんだか……」

そんなの簡単だ……
一番効率が良いからだよ
力で黙らせる…それこそが正義だと心の底から感じ取ってしまいたくなるからだ

「まっ、こんな所だよ…俺がここにまで至る事になった道筋は」

思えば、ずいぶん破天荒な人生だった……

「ハイル…お前は…悲しくないのか？」
「……悲しんでるさ、でも、だからって何をすればいいか俺にはまだよく解らないんだ」

どうにでも良くなった……
これからすべき事なんて……

「……しっかしなぁ……」
「……？」

ピオニーは何かを考えていた
けど、肝心の答えがどうも出そうにない
そのまま暫く静寂になっていた頃であった……

ドタドタドタッ！！！

「……を…べ……！！」
「ぶか……！？」
「……ッ！！」

「……なんか外が騒がしいな」
「何が起こってんだ？」

騒ぎ声と乱暴な足音がドア越しの廊下側から響いてくる
何か騒ぎが起きているようだな……

「ちょっと見てみるか」
「えっ…？」

そう言ってピオニーはドアの方へ歩いて行くとそれを開け、外の様子を調べてみる

「どうかしたのか？何やら騒がしいようなんだが……？」
「で…殿下！？」

ここの使用人らしい女性がいきなりピオニーに声を掛けられて緊張した姿勢に変化した
まぁ…仮にも皇太子から声掛けられれば普通そうなるわな……

「はい…それが、調理場にいる料理人の一人が酷い腹痛を訴えたと同時に倒れ込んだため、屋敷の医師に今診てもらっているんですが……どうも一向に良くならず、そればかりか余計に苦しみ始めてなさるそうなんです」

「それは大変だな！じゃあお前もここで止まっている場合じゃない…すぐに手伝いにいったほうがいい！」

「畏まりました！」

そして、彼女は再び走っていった

……腹痛……それも調理場で……

食中毒でも引き起こしたか…？それとも……

……

「ピオニー…俺もそこに連れて行っちゃくんねえかな？」

「別にいいが…何をするつもりだ？」

「俺だったらその腹痛の原因を判明させる事ができるかもしんないからだ」

「……そう言うならついて来い、案内してやる」

それから俺はピオニーと共に目的地へと向かう事となる……

そして……

あの胸騒ぎは的中する事になるのであった……

第２６話（後書き）

前マルクト皇帝のフルネームが解りません。
だから通称カール五世で通しました。

第２７話（前書き）

今更ですが、明けましておめでとうございます。

第27話

「うがぁぁぁぁ……！！！」
「しっかりしなさい！意識を失くしてはいけません！」

屋敷の調理場では人だかりが集まっていた
白衣を着た医師らしい人間が一人の患者を抑えて暴れるのを止めようとしていた
患者は苦痛の顔と共に叫びを上げ、苦しみを少しでも紛らわせようとしているようだった

「レイシス先生！こいつはどうなるんですか！助かるんですか！？」
「…胃腸に関しての薬はもはや効きそうにありません……もう、今は譜術で痛みを和らげさせることぐらいが限度となるでしょう……」
「……ッ！？」

つまり、助かる見込みが低いという事だ
薬を服用させても効果がない以上、打つ手は無い……

「もう少し…もう少しだけ治療してやってください！こいつはまだ半人前ですが、料理人として今まで頑張って来てた奴なんです！ここで短い生涯を迎えさせるなんて……酷過ぎる」
「むぅ…しかし、これ以上の投与は患者に害を……」
「お願いします！！」
「……」

料理長は希望に縋って医師に患者の治療を勧め……
医師は患者の体を考えてこれ以上の治療を止め……

どちらとも正解でも間違いとも言えない対話が続く中……
彼らは現れた……

「此処か？さっき言った場所は…」
「ん……？」

「「殿下……ッ！！！！！」」

ピオニーとハイルであった……
この時になって丁度辿りついたようだ……
周りにいた使用人達はこの屋敷での主人が突然現れたため一斉に頭を下げ、膝を着いた

「…今は楽にしていい……そんな場合じゃないだろ……？」
「は…ハッ……！！」

ピオニーはそれをすぐに止めさせる
なんせ人の命が掛かっている状況だ
王族として相応しくだとかそういう体面を持つ暇など在りはしない……

バッ……！！！

「ちょっと失礼します……」
「君は……誰かな？」
「自分の身の紹介は後にさせてもらいます……邪魔ですから…」
「……ッ？」

この屋敷の医師レイシスはハイルに対して持った印象はこうだ
失礼な奴だ…と……

ハイルは別に悪気があって言った訳ではないのだが言葉を選ばずに出した物がこうであったためそう考えられても可笑しくは無かっただろう
だが、そんな事を考える事は後回しにして今は目の前の病人に意識を集中させた

「すみません…幾つか質問よろしいですか？」
「……うぅぅ……」

返事としての言葉は無かったが首を縦に勢いよく振って肯定の意を示してくれた
もはや喋る事も出来難くなってしまっているようだ……

「此処までお腹が痛くなる前まではどこら辺が痛いと感じてましたか？」
「……ま……まん……なか……！！！」

始めは腹の中心……

そして、今は……

グッ…！！！

「ガアァァァ――――――！！！イテェェェェ――――――――――――――――！！！！！」
「き、君！いったい何を！？」

ハイルは何を思ったのか右脇腹の方に指二本を使って軽く押してみた

傍にいたレイシスは患者の苦しみようを察してハイルが何か変な事をしているではと警戒する

「右脇腹…！？」

痛い部分が広がり…患部が固くなり始めている……

これは……

「盲腸（虫垂炎）だ！！」

しかもこの様子では完全に腹膜炎を起こしている！！

まずい……

腹膜炎が起きているとなるなら……

この患者は……

――――半日で死ぬ…！！！――――

手術しなければこの患者は助からない！！

どうする…今回は昏睡状態などで麻酔は多少必要なくても何とかやれる状況じゃない！！

これじゃあたとえ症状が解ったとしても手術が行えない……

患者が意識下の中で麻酔なしで執刀なんかしたら激痛で臓器が飛び出す事がある！！

マズイ……出来ない……

「どうしたんだハイル!?いきなり蹲ったりなんかして!?」
「……ッ!!」

諦めるな……考えろ!!
この世界でも麻酔の代用になるような薬はあるかもしれない
……駄目元でも聞いてみよう

「あの…聞きたいんですが……」
「……何かな?」
「エーテル……ってありますか?」

麻酔の母とも言われる薬剤：エーテル……
１８４６年モートン氏によってエーテルによる全身麻酔が行われ、
その後広まったとされる物だ
１６世紀に合成され、催眠効果を持つ事が発見されてから当時人体に最も害の少ない麻酔とされた
吸入から始まり、開放点滴法による導入が確立されてからは多くの外科手術に貢献してきた偉大なる発見と発明である

この世界にも前世と同じような薬効のある物もあったが…名前が全く違っていた
もし、今回もそうなら諦めるしか……

「エーテル…エーテル……もしかしたら君が言うのはひょっとしてアトミックエーテル酸というものかい?」
「アトミックエーテル酸……?」
「そうだよ……フォニミンと混ぜると血中酸素を分解させる薬と

して有名なものだ」

……違う
それじゃない……やっぱり駄目だったか……
そんな物じゃ麻酔の効果を一割も発揮しない
やはり無理か……

「そういえば、間違えてその煙を吸ってしまってその為の解毒剤を服用したけど分量が多すぎて仮死状態にしてしまったという事故があったなぁ……」

ガバッ…！！！

「その解毒剤です！！」
「え…え……？」
「その解毒剤を仮死状態にするくらいの分量でください！！」
「解毒剤……そんな物をどう使うって言うんだ！？」
「それについてお話します！！」

そして、改めて俺は患者の病名について、治療法について詳しく迅速に説明した
それを聞くやレイシスは驚愕の表情をしていた……

「つまり…君はこの患者の腸の一部がエンショウというものを起こしているため、それを切って取り除かなければならない…そのため、痛みを一時的に感じなくさせるための薬が必要って訳かい！？」
「仮死状態にさせる薬ならば、使い方を考えれば痛覚を麻痺させる事に使えれるかもしれませんから！！」
「馬鹿な…そんな治療法なんて今まで聞いたことも無いぞ…！！だが…君の話しは理がかなっている……」

「正しいかどうかを探るのは後にして早くその薬を飽和状態になるまで水に溶かして持ってきてください！！」
「わ…解った……！！直ぐに用意しよう！！」

そっちは頼む……
じゃあ俺はアレを取りに行こうか……

「ちょっと必要な道具取りに行くため宿屋に行ってくる……その人の様子ちゃんと見といてくれ」
「は…はい……！！」

ユリアシティで使った疑似手術道具を荷物に入れておいた
わざわざかき集める必要はもうしない為にもな……
念を入れといて良かったわ……

道具の煮沸消毒完了……
次は…この薬剤をどう使うかだ……
この解毒剤は血中酸素を分解するのを阻害する効果がある……
だか、副作用として筋弛緩剤と同じ効果を発する……
つまり、大量に服用すると心筋まで弛緩させてしまう事があるから仮死状態になるという事だ
そもそも、全身麻酔は仮死状態にする事と同等の意味を持つ
全身麻酔では静脈麻酔薬と筋弛緩剤を両方使うからな……
そこに本来ならこのような大きな手術では効果が薄い冷却麻酔を使

えば良い
首、脇、患部の周りに冷水を包んだ布を挟ませる方法だ

「……仮死状態になる一歩手前の状態になればいい…そうなれば成功……」
「つまり、昏睡状態に近くさせるという訳かい…？」
「痛みとは、そもそも意識されてこそ感じる脳の防衛反応ですからね……」
「しかし…マスイか……痛みを感じなくさせる薬があるとは思いもしなかった……」
「ですが…これは完全な物とは言えないでしょう……患者が“解って”しまったら最早効果はすぐになくなる……」
「危険は上場……か」
「では…始めます……まずは冷水を含ませた布を指示する場所へ……」
「解った…君の指示に従って行こう……」

レイシスはハイルの言った場所へ持ってきた冷水タオルを置く
置かれると同時に患者の肌は赤みが引き始めてくる……
血管が委縮して血液が流れにくくなっている証拠だ……

「では次に…この解毒剤を……開放点滴法で少しづつ使用していきます」
「カイホーテンテキホー？」

開放点滴法……
エーテル麻酔でも使われた昔の吸入麻酔の使用方法だ
いくつも重ねたマスクに本来なら揮発性麻酔薬を垂らして徐々に麻酔を掛けていくという物である
ちなみに、揮発性と言うのは今で言うならガスと言った方が良いだ

ろう……

「よし…いくぞ……」

１０滴……

２０滴……

４０滴……

一分間に徐々に垂らす液を増やしていく……

二倍にしてやっていくのがコツだ……

「ゲボッ……ゴホッ……！！」

「すまない…耐えてくれ……」

開放点滴法は効果に時間が掛かるというのが穴だ……

患者が異物として感じ、涎を多く出す事があるから良くふいとく必要がある……

ビクッ……！

「む……！？」

ビクッ……ビクッ……！！

「痙攣が起こり始めたな……」

「効いているのか……」

なら此処からは少し慎重に……

仮にも劇薬の分類に入る物だ……
さじ違い一つで効果は変わる……

ピクンッ……ッ……

痙攣が止まった……
呼吸は……

成功だ……

「うまくいったのかい…！？」
「脈もある…呼吸もしている……麻酔導入完了です……」

それじゃあここからだ……
ビンに入れてあった蒸留させたアルコールを患部に塗っていく
これはアラミス湧水洞の出口で野宿してた時の間に白ワインから作っておいた物だ
消毒完了……
それじゃあ……

「手術（オペ）を開始します……」

第27話（後書き）

実際エーテル麻酔での開放点滴法はそんなに早く効きはしません。
フィクションとしてこの話の中の事は捉えていてください。

第２８話

グシュッ…グチャッ…ズチャッ……

「……おぇぇ」

「ヒ…ヒィ……！！」

「そこ、押さえを止めないでくれ！」

盲腸の治療は軽傷の場合での抗生物質投与、重症の場合での虫垂切除がある
今回は後者であり、今腹膜と腸を退かして虫垂を探している所だ
虫垂は虫の幼虫のような形をしているのが特徴であり、平均にして親指くらいの長さがある
ちなみに、虫垂の役割は善玉菌をためておく機能があったみたいなのだが、現在は食料から善玉菌を摂取することが簡単で、この機能は重要視されていないらしい
なので、虫垂炎で虫垂を切除しても生活に支障は起きないとされている

「……手伝っている人以外は見たくなければ離れていい…無理に見なくても良い物だからな」

「ハイル…お前は……！！」

「…いや、私は手伝い続けるよ……医師として見届けないといけないと思うから……」

ピオニーは驚き続けていた
今まで屋敷の生活でこのような体験をすること自体初めてなのだから仕方がない事だ
レイシスはこの手術を一瞬も見逃さないようにしながら助手の役割

をしている
虫垂を探す過程で現代の手術では腸にガスを入れて膨らませるのが普通だが、この世界にガス自体を持つ事はないなので使う事が出来ない以上、手探りで腸をずらして虫垂を探していく他ないからだ

「ガーゼ……いや、短く切り取った布を何枚か持ってきてくれ」
「これ…でしょうか……？」

さらには吸引機も存在しないガーゼを使って出血で血が溜まる毎に吸い出さなければ患部が見えなくなってしまうちなみに、このガーゼはアルコールと同じ過程で作っておいた物である

「あと、そこに瓶詰めした水があるだろ……それにきれいな塩を一つまみほど入れて良く溶かしてから持ってきてくれ……一応言うがスプーンとかでかき回すなよ？そのまま回すように振って溶かしてくれ」
「は…はい……」

これは鍋とかをうまく使って少しづつ集めた蒸留水である
皆は生理食塩水と言う物を知っているだろうか？
生物の細胞にはそれぞれ浸透圧と言う物が存在している
塩化ナトリウム、カリウムの濃度がそれに左右し、それが細胞より高ければ中の水を奪い細胞は収縮し、低ければ水を吸い取り細胞は膨張するという生物学現象が起こる
そこで浸透圧を等しくしたのが生理食塩水である
ちなみに、人の浸透圧は０．９％であり例にすれば１？に荒塩９ｇ溶かした蒸留水の事を言う

実際の手術でも患部を洗うために生理的食塩水（略称、生食）を使っている
これを使うのは虫垂炎で溜まった濃汁や腹水を洗い落とすためである

「……見えた」

これだ…これが虫垂だ……
炎症のためにミミズほどの細さだった物がソーセージほどの太さにまで膨れ上がっている
これを先ずは切除だ……

「虫垂切除に入ります…その為、レイシス先生はある事をやってもらいます」
「えっ…？」
「虫垂を切除する時、そこの血流を一時止めるために絹糸で結紮…いえ縛っていてください」
「血の管を縛るって……そんな事をしたら血が溜まって破裂してしまうのでは！？」
「もちろんずっとだと動脈瘤などを引き起こしますが一時的なら他の血管…血の管によって体が本能的に順応して流れを合わしてくれるので心配はいりません」
「そう…なのか……そんな事は聞いた事がない……」
「それはそうだろうな……」
「何…？」
「いえ…今は手術に集中してください……時間を掛け過ぎて出血を余分にさせたくはない」
「……わかった」

先ずは結紮での糸結びを教えた
手術での糸結びは蝶結びとかそんな簡易な物でやってはない

方法としては男結び、女結び、外科結び等といろいろあるが上げていてはキリが無いほどある
今回は止血や重要な部位の糸結びをしてもらう
そして、止血が始まった所……

「鋏……」

チョキッ…チョキッ……

パチンッ……！！

虫垂の切除を完了させた
次は腹膜炎の方の切除へと入ろう……

「これ…燃やして廃棄しといてくれ」

そういって切除した虫垂を布に包んどいて近くにいた使用人の一人に渡しとく

「わわわ私がですか！！」
「火にくべるだけで良いから……だからただ捨てるなんて真似するなよ……」
「わかりましたぁ…！！！」

少しドスの効いた声で言い聞かしとく
これで迂闊に外に捨てるだけとかの真似はしないだろう……
そうすれば医療廃棄物になってどれほど恐ろしい可能性が待ち構えてるか……
さて、続けよう……

「……ぅ」

「「……！！！」」

患者が意識を取り戻し始めた！？
不味い！！思ったより麻酔の効果が薄すぎたのか！？
……早くする必要があるな……
俺は患者の首元に丸めた布を置いて視野を防がせる

「起きようとしてる…どうするん……」
「しっ…！静かに……起きて自分の状態にはっきりと気付かせる
真似は危険です……そのまま患者に腹部を見せずにいさせてくれ
……まだ意識は朦朧としたままだ」
「……わかった」

腹膜炎は…意外と広いな……
これでは少々時間が掛かりかねない……

「……理…長……」

この患者……何か言いたいのか……

「料理……長……俺……頑……張るよ……」

料理長……？

「ルノ……！？」

「認めてくれる……まで…俺……頑張る……よ」
「……馬鹿野郎……そう言うのは治ってからにしろってんだぁ……」
「だから……ぅぁ！！」
痛みが激しくなってきてるのか！？
まずい…まずいぞ……
「誰か……患者を……押さえていてくれないか？」
小さな動きも術中に大きな影響を与えかねないからな……
すまない……無理矢理でも止めさせてもらうぞ……
で…誰かいないのか…？
「俺にやらせてくれ…坊主……」
「料理長…？」
「こいつは今でも頑張ってるんだ……俺もこいつのために…何かしてやりたいんだ……」
「…わかりました……上半身をなるべく動かさせないようにしっかり押さえていてください」
じゃあ俺も…アンタの決意に答えて頑張るよ……
「うぁ……ぁうぁ……！」
「ルノ……頑張れ！！」
ジョキンッ……
「まだ終わらないのですか……！？このままだと危険です！！」

ジョキンッ……

「ハイル……！！」

パチンッ…！！！

ズルズルズルッ……！！！

「取れた！！！」

見事に長い腹膜炎だ……

こいつが腹痛の原因だろう……

縫合して……後は腹腔の洗浄だ……

「生食を……さっきのビンに入った水の事だ」

手渡された生食を縫合部位、腹腔のあらゆる所に隙間なく掛ける

あとは……ドレーンを入れての陰圧落差を使った排液を行って繰り返す……

「グゴッ……ゴハァッ……！！！」

「もう少しだ！！もう少しで終わる……！！我慢してくれ！！」

麻酔もそろそろ危ない……

ガス欠寸前と表しても良いくらいもう危い！

「排液完了！！そして……癒しの力よ！！≪ヒール！！≫」

先ずは臓器の縫合部位をヒールでくっつける！！

そして、左で徐々に抜糸を行いながらだ……

「……閉腹します」

此処でそのままヒールを掛けて治しても良いのだが……それでは

大幅に新しい皮膚組織を創り上げての治癒になってしまうから今後

の生活に支障が起きてしまうかもしれない

第七音素（セブンスフォニム）での治癒譜術とは人の元から持つ回復力を早めるのが正体だ

皮膚が離れたままでの治癒の仕方では体は新しい組織を創り上げる

という方向に反応してしまうからだ

だから、縫合して密着させれば範囲は縮まり、動きにも支障はさほ

どきたさない

シュッ……シュッ……シュッ……

「早い……」

レイシスはハイルの縫合術に見惚れていた

その造形は命の創造を表す美しい物へと知らずに変化していたからだ

だから…神業とも思える縫合術に眼を張った

パチンッ……！！

「閉腹完了……癒しの力よ！！≪ヒール！！≫」

そして、最後の治癒譜術が終わった……

「手術(オペ)…完了しました……」

全てが終わった……

患者ルノは治癒譜術の余韻によってか落ち着いた顔をしていた

もう痛みは感じてないようだ……

「病巣は完全に切除しました……後は2，3日療養していれば大丈夫でしょう」

「助かったんだな……」

「はい……？」

ガバッ！！

「本当に…こいつは助かったんだな……！！」

「え…あ……はい……」

「ありがとなぁ……本当にありがとなぁぁぁぁ……」

「……」

俺は…命をまた救う事が出来た……

この行為は決して無駄ではない事を譲りはしない……

ありがとう……

長らく忘れていた……

俺は……

その一言を聞くために医者になってたんだ……

「患者はベッドに移しておくかどうにかしておいてください……」
「君は……？」
「少し…外へ……」

屋敷の外は相変わらずの雪景色であった……
着替えずに手術着のままでいた事は忘れて俺は外にいた
外の空気を吸いたかったこともあるが……もう少し何かを考えていたくもあった

「やっぱり……」

俺は新しくなる必要は無いのかもしれない……
前世での罪…思い出…その他もろもろ全てを受け継いでではなく…
……ありのまま俺でいなければいけないのかもしれない
名だけではなく、存在自身としての“ハイル”でいようとそう言う風に考えなくても良いのかもしれない……
俺は俺でなければやれない事がここには沢山ある……

俺はやはり医者でいよう……

それは存在意義や償いだとかで決めないで……
前世での俺を今ここで誕生させ、移動しよう……

「けどな…“ハイル”……お前の名前はこのまま使わせてくれ…
……それだけが今したい俺の唯一の我儘だからな」

全部…全部まとめて受け止め……背負っていけばいいのだから…
……

俺の名は……鞍馬蓮二……

かつて、地球で医者としての自分を探していた男だ……

そして、今の名は……ハイル・シュヴェール……

契約者としてこの世界オールドラントに舞い降りた男だ……

第２９話（前書き）

引き出しの中を探していたら5年ぶりに電気マッサージ機が見つかった

さっそく使ってみたら……

ミ・ナ・ギッテキタァァァッ！！

第２９話

「そうか…行くのか……」
「悪いな……お前の提案にはまだ乗る事は出来ない」

ケテルブルク港には三人の男がいた
ハイル、ピオニー、レイシスの三人である……

「ありがとうございますレイシス先生…態々俺の為に紹介状なんか書いていただいて……」
「お礼はいいですよ…君には医者になるべき存在だと私自身も推薦したい事だからね……これから君が向かう場所にいる医師は私の同期でもある……良くしてもらえるだろう」

ハイルの手には一通の封がされた手紙が握られていた
会話から聞き取るにどうやら紹介状のようだ

「ベルケンドに行っても手紙を送ってこいよ!?楽しみに待ってるからな!!」
「まぁ…暇な時には書いてやる……」
「おいおい!そんな冷たい事言うなよ!?」

タッタッタッタッ!!!

「そろそろ出港の時間です!準備はお早めに……」
「……ん…じゃあピオニー…レイシス先生…お元気で……」

そして、船に乗り込むべく振り返って足を進める
乗り終えた所に斜路が上がり始める

「頑張れよハイル！！俺もやれる所だけ精一杯やっていくからな！！」
「全体的に頑張れよ…せめては！（汗）」

斜路が完全にしまり、甲板の所にいる船員が出港の合図を出す
船に内蔵された譜業が唸りを上げ、それと同時に動き出して行く
次第にそれは…港へと離れて行った……

「俺も…お前の上に立てるくらい……凄い奴になってやるからな……それでな…」

離れていく船を見つめながらピオニーはそっと呟く
それは己に対しての彼への誓いであった……

これは…遠い昔のお話……

（五年後………）

「………あいつも相変わらずだな………（汗）」

23歳となったハイルの手には一通の手紙が握られていた
その内容はこう書かれていた………

――――――――――――――――――――――――――――――――――

よぉ！元気にしてるかハイル！？
俺も元気だ！変わらず屋敷の軟禁状態は続いているがな………
この頃家庭教師達が帝王学やら皇族の作法やらと嫌でも覚えさせようとしてくるのが嫌で仕方ねぇんだこれがまた！！
あ、そうそう…実は今回手紙書いたのはな………俺にも恋人が出来たんだって話だ！！どうだ羨ましいだろ♪
しかも相手は俺の愛しのブウサギ、ネフリーと同じくらい前から大好きだったネフリーだ！もちろん人間だぞ？一応言うけどな…
それについて俺の可愛くない陰険ジェイドがネチネチと嫌味言ってくるようになってまだ関係がギクシャクしているけどな…（汗）
あいつも兄なりに妹を心配してるんだろうが………事もあろうに俺に対して“貴方がネフリーと付き合うなんてアホが移るだけです”
なんて言いやがったんだぜ！！そこから揉めたんだが…ジェイドの奴…
サンダーブレード（手加減した）を俺にぶっ放しやがった！！

さすがに俺も怒ったが……あいつの無言の笑顔でこれ以上喋れなくなったよ……恐えぇぇぇ（汗）お前を思い出したぜ……
ひょっとして…お前もしかしてジェイドの親戚なんじゃないのか…？
近頃そう思えるようになって来て不安なんだが……
まぁ……また何かあれば手紙を寄こしてくれよな？じゃあな！
By：フランツ

―――――――――――――――――――――――――――――――――

「たぶん…今でも屋敷抜け出してるだろうな……」

手紙は一応名を変えて送ってる様だ
そこらへんはちゃんとしてるか……

「ハイル君！！ちょっと来てくれないか？」
「はい！なんでしょうか？」

突然の呼び出しに俺はすぐさま返事を返し、俺は白衣を纏う
先ほどの声の主は今、俺が助手として働いている診療所の院長を務めているシュウ先生だ
音素研究員としても嘗ては有名だったらしいが、今では此処ベルケンドの診療所の院長をしている
己の部屋の机に先ほどの手紙を置き、扉に向かっていく

バタンッ！！

ドアの向こう側には…二人の人間がいた
それは…自分が良く知っている人だった……

「え…フィリスさん!?」
「おひさしぶり♪ハイル君」

フィリス・ハーベルト……
彼女は自分の何時も使う薬剤を調合してくれているお得意様だ
粉末だけでなく、薬液としても作る事が出来るという凄腕の女性薬師でもある
なんでも、元は毒薬の研究者であったらしい……
そして歳は「教えたら…解ってるわよね♪」……ハイ!!
一応、俺より上である……

「いきなりだから私も驚いてしまったよ……それで、いったい何用でこちらに?」
「ちょっと新しい薬についての研究成果を話しあいたくてね……ケセドニアから態々来ちゃった♪」
「まさか!……放線菌からの抽出法が見つかったんですか?」
「そのとおり!…これが成功できればかなりの人が結核の脅威から逃れられるかもしれないわ……」
「まさか……顕微鏡の使い方をたった2か月で熟知するなんて……」
「助かったわ…その顕微鏡って物をくれて私の研究にも拍車が掛かり始めたしね」

結核菌の特効薬、ストレプトマイシン……
１９５２年にワクスマンらが土壌にいる放線菌から見つけだしたペニシリンに次ぐ偉大な発見である

「さすがに１０００株もの試験体を虱潰しに調べていくのは疲れた

わぁ……」
「お疲れ様です……あの、ケセドニアにいるアイラとトールはどうしてますか？」
「えぇ、二人とも元気にしているわ！貴方が提案したペニシリンという薬のお陰でアイラも全快したし……孤児院ファミリアの子達とケセドニアの色街の女達も病気になっても心配ないようになったわ」
「一応言っておいてくださいよ……薬の厄介になりすぎないようにって」
「それもそうねぇ…確か…耐性がついちゃうんでしょ？」

俺がケセドニアに行ったのは遍歴医として臨床の修行と冠しての時の2年前だ
そこでフィリスさんとも出会った
治安が悪い自治区のケセドニアでは当然衛生管理も悪い所がある
そこを重点に俺は動いていた…色街に出向いたのもそのためだ
性病という感染症にかかった患者が溢れるほどいたよ本当に……
そこでフィリスさんに青カビにある抗生物質について話してなんかできないかといった所……
見事にペニシリンを抽出する事に成功できた
毒薬を専門として研究してたフィリスにとって抽出、濾過、昇華、分画と言う動作は朝飯前で、2週間で方法を見つけだした
まさしく天才だろう……この人は……
しかも、麻薬から麻酔を創り出してくれたのもこの人だ……
この世界でも麻薬はあったが…ドラッグとしての認識だけだった
そこは思いつかなかったわ！！って酷く驚いた顔してたっけ…初めて話した時は……

「フィリスさんのお陰です……ありがとうございました」
「な～に言ってるの？貴方の助言や知識が無ければさすがの私もあ

の薬を創り出す事はできなかったわ……その点で貴方も彼女達の恩人なのよ？」
「まぁ…それはそうですが……」
「まったく…貴方は自分を過小評価しすぎだわ！もっと誇りなさい己自身を！」

キィッ…！！！

「こんにちわ！！ハイル先生はいませんか！？」
「おや…クロード君じゃないか……」
「あ…シュウ先生こんにちわ！お邪魔します」

話の途中でもう一人の来客が現れた
彼の名はクロード・ラウル……
ここベルケンドの「い組」のヘンケンさんとキャシーさんの元で働く譜業技師である
先ほど話した顕微鏡を作ってくれたのも彼である
彼は音素を使わなくとも役に立つ道具を作る事がモットーとしている男だ
俺の使う手術道具を設計してくれたりもしてくれた
これを依頼した時は喜んでやってくれたのを今でも覚えている

「ハイル先生！依頼したスコープと言う物が装着完成したから届けに来ました」
「何！本当か！？」

実は…俺の武器、狙撃譜銃を治し……さらには改造を施してくれる仲でもあった
色々と自分の知る知識を教えて見た所、技術者魂に火がついたらしく…余分に強力にしてしまった訳だこれが……

このスコープもその一部だ……

ガサガサッ！！

「これは……！！」

「飛距離８００ｍまでもの射撃を可能にする事が出来た代物ですよ！音素弾の威力も前の３倍まで跳ね上がって直線に軌軸を安定して発射できます」

「……最高だよ」

「感謝の極み……」

どこぞやの主従の一部シーンが再現されてた……

「ハイル…なんかすごい物が出来あがっちゃったわね（汗）」

「一応護身用的に極力使う事にしてますから……」

「そう言えば前作ったランチャー銃と麻酔銃は使いましたか？」

「あぁ……あれか、良く作れたと思ったもんだよあれは……」

「クロード…あなた……兵器開発者じゃないの本当は……（汗）」

「失礼ですよフィリスさん！！僕は暴力目的での道具は開発なんてしません！」

なにやらおだやか？な会話が続いていた

そんな時であった……

「たたた大変だぁぁぁ！！盗賊達が商店を襲ったそうだぞ！！」

「今そいつらは！？」

「馬車で街の外に出ようとしている！！すぐ駐在の兵を呼ぶんだ！！」

「……ちょっくら行ってくる」
「さっそく実験台ですね……」
「馬鹿な奴らね…こんな時に……」

「「フフフフフ……♪」」

「…あの…君達……？（汗）」

なにやら息が合う三人であった……

Ｓｉｄｅ：盗賊Ａ

「よし、駆けろ！！」

ピシャンッ…！！！

勢いよく鞭が振られ、馬車用の魔物を刺激させる
それに応じ、魔物は走り始めた

「やったぜ相棒！！大量だぜ！！」
「あぁ…！！後はこいつを売りさばく場所だな……」
「うまくいきゃあ俺達金持ちだ！！」

馬車の中では他の仲間達が盗んだ品と共にいて成功の喝采を上げていた
それを聞きながら盗賊Ａは馬車の手綱を巧みに操り、街を抜けだして行く

「（街をぬけだせばこっちのもんだ！！この馬車は他とは違う速い奴らを選んでおいたからな）」

盗賊Ａは確信していた……
己の成功を……
完璧な作戦を……

それは彼さえいなければの話だったが……

ドオォォウウウウウウウウン……！！！！！

突如、雷鳴のような音が響き渡った……
鼓膜を振わせ、誰もがその音に気付く
それと同時に……

ガコンッ…！！！

「なっ！？」

馬車の車輪が壊れたのだ！
後方の左輪が粉々に砕け、馬車は一気にバランスを崩す
遂には横へと倒れこんでしまう

「うぉぉぁぁあああ！！！」
「な…何が起きたんだ！！」

その現象に盗賊達は唖然とするしかなかった……
その後、彼らは後ほど馬車で追いかけて来た兵に捕えられたらしい
……

その頃……

シュウゥゥゥゥゥ……

「威力強すぎだろこれ……（汗）」

音の反動に痺れたハイルが民家の屋根の上に居たとか……？

「良い仕事してますねぇ……」

第２９話（後書き）

この二人のオリキャラについては近々番外編として出そうと思っています。

第３０話

「はい、もう熱は完全に下がったようですね…お薬はもう終わりにしましょうか」
「ありがとうございます、先生」

診察室で今俺は診断をしていた
昔はシュウ先生と合同でやっている事はあったが今ではちょくちょく自分自身でやらせてもらっている事が多い
ちなみに、この母子は子供が風邪の為、通っている人である

「ではまだしばらくは体を冷やさずに温かい食事を取らせて療養させておいてください、それではお大事に」
「センセーまたねー！！」
「はい、またね」

基本この世界は専門医師として活動することはない
殆ど内科医の類の医師には悪い所に応じての薬の処方が殆どの診断方法だ
まぁ…薬は使い過ぎが毒ってのは一応考えに入っているそうだがやり過ぎな所もいささか見れたな……

キィッ……

「ハイル君、これで午前の診察は終了だね…いったん休憩にしよう」
「えっ？もうそんな時間ですか……」

シュウ先生が隣の診察室からやって来た
少し休むとしようか……

そして、俺とシュウ先生は近くにあったイスに座って姿勢を崩すようにした
俺は腕を伸ばしたりと軽いストレッチをする

「しかし、もう五年も経つんだね…君がこの診療所に来てから」
「早いものですね……」
「君は本当にすごい、私と違って医大学院に入らずして独学で医学を学び通してきたとは……」
「医大学院ですか……」

この世界にも大学のような所はあるそうだ
その中で医者を目指す者が入るのが医大学院と言う所だ
そこに入ってこそようやく医者としての道を踏み出すと世間では知られている
けど…ちょっと違う事がある……
そこに入るのは多くが貴族か金持ちの出の奴ばかりだ
たしかに、医大は地球でも同じように学費が掛かるってこともあるが…何より変なのがそこでの偏見だ
考えてみよう……そんな所で平民出の人間がいたらどうするだろうか？
もちろん嫌味の一言や二言は言われるに違いない
シュウ先生もそこで相当な苦労をしてたそうだ…
この人も平民出だった
だけど…周りよりも結果を出し、援助金を受けるほどにまで努力しつづけたお陰だ

「そういや、そこから手紙届いてたな……たしか内容は…学院にも入ってない奴が好き勝手やって調子に乗るなって解釈だった」
「変な解釈だね……しかし、実質はそうだろうね……」
「まぁ…一応資格取るために出しておいた論文にケチをつける理由

が俺が唯の平民だって事が我慢できないんでしょうね……医者は貴族様とかのゴマすりに精を出すための職業じゃねぇっつのに…たく」

「そういえば君のその論文…「細菌感染説」だったね……あれは素晴らしい評価をうけたそうじゃないか」

「半分はクロード君のお陰ですよ…あの若さで俺の言った顕微鏡を完璧に作り上げるなんて…良いセンス持ってますよ」

「その為に君が考案したレンズと言う物…ベルケンドの方々も驚きが隠せないような物が出来上がったと喜んでたね」

「えぇ…まぁ……」

周りの人は俺が全て考えた物だと思っているが……俺は覚えた物を唯必要な事で出しただけだ

俺は俺の元の世界の他人の努力の結晶を自分の物と偽る事は極力したくはない

有名になろうという訳でもないからな……

必要な時だけ出す…唯それだけだ

「しかしまぁ、君はもう私よりも上にいるんじゃないかい？」

「いえ、貴方から学んだ音素学については俺はまだまだ足りない……それに、腕がどうとかじゃありませんよ」

「本当に…謙虚な子だね君は……」

俺はある物を理解するためにシュウ先生から音素学を学び続けた

フォミクリーだ……

預言と言う名の鍵と共にあるもう一つの鍵の原点……

その内にあるレプリカ技術……これがどうしても知りたかった

今やその技術は禁じられた物となり…それに関しての本は禁書扱い

として処分されている
聖なる焔の光【ルーク】が生まれる為に存在した技術……
そのためには基礎となる音素（フォニム）についてを知らなければならない
渡りに船って訳だ…そこでシュウ先生は

バタンッ…！！

「ハイル先生！！その……」
「どうしましたかリーシャさん？」

今扉を開けて入って来たのはこの診療所の受付リーシャさんである
この慌てようは…まさか……

「あいつが来たんですか……」
「はい！今日も来ました！」

……やれやれ、休憩時間を削るしかないか……

≪診療所前≫

「たのむ！ハイル先生に会うだけでもいいんだ！入れさせてくれ！」
「ですから！お断りだとその件はハイル先生が申した筈です！お帰りください！！」

「いいやゼッテー諦めねえぞ俺！何としてでも俺は！！」

バタンッ…！！

「またお前かゼノン……」

「先生…！！」

たく、これで来るのは何回目だ一体……

こいつの名はゼノン・フォルト・ブリジスト……

此処ベルケンドを領地とする貴族ブリジスト家のお偉いさん所の一人息子だった奴だ

だったなのは今は違うって意味だがな……

早い話が放楽息子だな……

「お前仮にも貴族の子息としての姿勢もっとけよ……それとまだ大変な次期なんだからいつまでうろついてないで親父の手伝いをしとけ」

「いいや！俺はあの日から目覚めた…！！その為に俺はアンタの元で学びたい！！」

実は1年前、こいつは毒蛇の魔物に街の外に出てた時噛まれてな、たまたま見かけた俺が持っておいたパナシアーボトル等を使って助けてやったのが縁だ

あとこいつ、それまではとんでもないドラ息子って感じだったんだぜベルケンドのマーケットとかで親父の威光を盾に好き勝手やってたそうだ

俺に絡んできてた事もあったなたしか……

「あの時いった言葉、今でも忘れてねぇんだ先生…≪命は尊い物だ

…それはお前にも言える、未来ある存在なのだからな…≫」
「はいはい、一種の気の迷いって事でそれは……とにかく帰れ」
「いいや帰らねぇ！！俺は医者に……！！」

パシュッ…！！

「ぬおぉぉぉぉぉぉ…！？」
「医者になりたいなら先ずは一般教養を学びなおして来いお前は…
大体俺は教え子を持つ気などまったくないからな」

なんか喧しいから麻酔銃をゼノンの足元に発射してやった
ガス弾の独特の発射音が響き渡った

「そこを何とか！？」
「駄目」

パシュッ…！！

「うぉ！！お願い……！！」
「無理」

パシュッ…！！パシュッ…！！

「どぉぁぁぁぁぁ！！頼み……！！」
「消えろ」

パシュッ…パシュッ…パシュッ…パシュッ…パシュッ！！！！！

こいつ中々動体視力良いな…何発か本気で狙ったんだが……

「ゼェ…ゼェ…ゼェ……ホント頼みますよぅ……」
「あのなゼノン…医者はそんな簡単になれるもんじゃないぞ……」
「努力だけは人一倍する!!だから頼む!!」
「……じゃあ、お前は人の死に慣れる事を努力する事だな……」
「えっ……？」
「医者は万能の神様じゃない…時として死に直面する場面に出ることも一つや二つじゃない……仮にだ…お前のせいで患者が死んだとしたら……お前はどうする？」
「それは……」
「そう簡単にはこたえられまい…医者は常に責任という重圧に圧し掛かられていく職業だ……お前は何も感じず今まで人に迷惑を掛けていた…それは責任と言う物を考えた事が無かったって証拠だ」
「う……」
「努力するから？なりたいから？……そんな陳腐な志で人の命を預かろうなんぞ言語同断だ……」

「首を洗って出直してこい!!!!!」

「……」

ゼノンは黙りこんでしまった
己が余りにも未熟な存在だと考えたからだ
ハイルの啖呵に気落とされていた

「今はやるべき事は違うだろ？お前の親父さんは仕事で失態を起こしてしまったために貴族権剥奪になりかねない状態だそうじゃないか……そんな時に息子としてお前がやらなければならない事は何

だ？もう２０歳で成人の儀は済ませている男が何時まで世話になりっぱなしじゃカッコ悪いだろうが」

「……はい」

「じゃあ…俺は診療所に戻る……次会う時はちゃんと予約を入れてやれ、毎回強引じゃこちらもかなわん」

そうしてハイルは診療所へと足を運んで行った

「……それじゃあ！それが終わったらまた会っていいですか……！！」

「……」

その言葉に俺は後へ手を向けて腕を上げて応じたＯＫという表しだ

「よっしゃあぁぁぁぁ！！そうなりゃ急ぐぜ！！」

単純な奴だな……（汗）

しかし、ああまで変わるとは…人間わからないもんだおっと……休憩時間少し過ぎちゃったか？出来るだけ急ごう……走るか……

「すみません遅くなりました！！」

「またブリジスト家の子息さんの相手をしたのかな？」

「毎回飽きないもんですよ……あぁ…あの様子じゃまたすぐに来そうだし……」
「大変だねぇ……君も…（汗）」

シュウ先生の労りの言葉がなんとなく心にしみた感じがした

「……ハイル君、君に渡したい物がある……」
「……なんですか？」
「……」

スッ……

シュウは無言のままハイルに一枚の紙のような物を机に置いたそれをハイルは手に取って調べてみた……

「これは……！？」
「すごい事だ…本当に……」

それは…封をするために付けられた蝋の印であった……

――――――玉璽――――――

皇帝のみが用いる事が出来る印章が浮かび上がっていた……

第３１話（前書き）

この時期になると色々忙しいです

第３１話

「お待たせいたしました…こちらの馬車へとご搭乗なさってください」
「……わかった」

此処はグランコクマの港だ
そこへ船から降りた途端現れて来たマルクト兵達が出迎えの礼を取る
しかし、どうしたもんかな……
まさか皇帝に呼ばれるとは……
ピオニーの父親か…噂じゃ圧政を敷きいる暴君だとまで言われてるらしいな
まぁ…そうじゃなきゃホドを≪あんな事≫に態々するような奴ではないだろう
今回持ってきたのはクロード印の特殊性能を持つケース…中は手術道具、しかも、特殊な開け方で裏面は狙撃譜銃のパーツが隠せる代物だ
そして、ランチャー銃、麻酔銃と懐に忍ばせれる非殺傷の武器が二つ……
ランチャー銃とは高い場所に移動するために用いれるようにした約１００ｍのワイヤーの先端にアゴ付きの刃が取り付けられたのを発射する移動手段用の銃だ
左腕に装着でき、これは動力源が第二音素の塊を使った電気式で動く
ここまでするのは何か胸騒ぎがするからだ……
あの皇帝が少なくとも俺のような存在を正規の理由で呼び出す筈がないと思えたからだ

「一応、念のためにシュウ先生とかに話を付けておいて良かったかもな…」

もし俺になにかあったら俺に関する物は一切隠しておいてほしいとフィリスさんやゼノンらにも協力を求めておいたあいつらなら立場を利用してなんとかできるだろう……

馬車は歩を進め始める……目指すはグランコクマ宮殿……そこにカール五世がいる……

「水の都とはよく言った物だ……」

此処グランコクマは第四音素の加護を大いに受けている土地と話されているそれに比例して街中に水路が布かれ、宮殿の裏側には滝が見えるほどだ…馬車の窓から見渡せる景色からそう判断する…そろそろ到着する頃だろうな……

キィッ……

「ハイル・シュヴェール氏がご到着になられた！丁重に御持て成ししろ！」

「ハッ…！！」

話をすればそうなったか……
さて、馬車から下りるか

ガコッ…

「どうぞこちらへ…」

そこへマルクト兵の一人が馬車の扉を開け、礼を取りに来る
それに従って俺も一度礼をして馬車から外へと出る

「……」

目の前に広がるのは巨大な宮殿…
こんな建築物など前世では外国の歴史ある建物を見る以来だ
凄まじいほどの存在感が俺の体を押し出してくるような感じがした
少し緊張が走る……
そう考えていると向こうから人がやって来た
服装を見てみると他のマルクト兵とは違った青い制服を着ていた
軍人としては珍しくメガネを掛けた男だった

「グランコクマまでの足運びご苦労様です…失礼、私は今回案内役を務めさせていただくジェイド・カーティス少佐と申します」
「ジェイド・カーティス……もしや死霊使い（ネクロマンサー）殿でしょうか？」
「これはこれは、あなた様にも知られているとは……私も有名になったものですね」
「いえ、少佐殿の研究内容は医師である私にも眼を見開くほどの価値が御有りでした」

まさか、あの骸狩りが案内役として回されるとは……
ジェイド・カーティス……
本名ジェイド・バルフォア……これはピオニーからの手紙が教えてくれた
この男の経歴ははかどれない……
わずか８歳で譜眼を発案し、１２歳で軍人の名門カーティス家へ養子に入る
その同時期にグランコクマの軍の士官学校に入学し、たった１年で卒業する
そして、サフィール・ワイヨン・ネイス博士との共同研究によりフォミクリーを発案する
だが、現在ではフォミクリー研究を破棄し、軍の仕事に集中しており、異例の出世の早さをしてきているとされている男だ……

「私も医師の資格をお持ちでしてね、貴方の書かれた論文には大変興味を持たれましたよ」
「…貴方のような天才譜術博士に私のようなしがない医者の論文を読んでもらえるとは光栄です」
「ですがもっとも興味を持たれたのは貴方の行う治療方法です…今までに見たこともない方法で病人の病を治してこられたとお聞きになってますよ?その中には助からないと思われた者も治してしまわれたとか……」
「……えぇ……」

そんな情報何処から仕入れてるんだか……
まぁ、他の医者がさじを投げてた病気を治したってのは事実だがな……

「実は、前々から貴方の事はとある私の知り合いから知らされていましたよ…素晴らしい方だと」

「……まさか、その知り合いとは“フランツ”という男ですか？」
「…！？……おや、偶然とは恐ろしい物ですねぇ……」
「私も“フランツ”さんから少佐殿の事は手紙で教えていただきました……悪い意味でですが…」
「それはどういう……」
「子供の頃オネショした時のシーツを譜術で乾かそうとして燃やしてしまったとか、士官時代に其処の教官からホの字の色眼鏡で見られてたとか……」
「も…もう結構です！！……それ以上は止めてください！！（汗）」
「苦労してなさいますね……手紙に人のプライバシー丸ごと公開して俺に送ってた事ありましたよ？……おそらく仕返しとしてですかね……」
「あの…馬鹿が……（ボソッ…）」
「何か……？」
「いえ、なんでもありません♪」
「そ…そうですか（汗）」

ジェイドはこの時、すぐに有給を取ってあの幼馴染をシバキに故郷へ帰ろうと心の中に誓うのであった……

―――――――――――――――――――――――――――――――――――――

≪ケテルブルク≫

ゾクゾクゾクッ……！！

「…！？…な、なんだ！！この悪寒は！？」

その頃、屋敷の中で命の危機を感じたピオニーだったとさ♪

「では、私はここまでです…どうぞ奥へ」

ようやく謁見の間の前まで来る事が出来た
いよいよだ…これが吉となるか凶となるか……
全てはこの扉を通ってから決まる……

ギギィィ――――――……

重い扉が次第に開かれていく
落ち付け…呑まれたらいけない……
己の意思を貫き続けろ……

タッ…タッ…タッ…タッ…

…さすが皇帝だ……
警備も厳重にしている……
周りに多人数の兵士が囲いを作るようにして壁に配置しているな…
頂点としての構えがある
それに…やはりピオニーの父親だという面影がみえる

ガバッ……

「ハイル・シュヴェール、勅命により参りました」
「御苦労…面を上げるがよい……」

一通り謁見の礼を終え、顔を上げる許しを得る

「今回余がそなたを此処グランコクマに招いたのはそなたの医学知識をとある研究に回してもらいたくして来てもらった……この研究は着目していたフォミクリー技術の前責任者であるカーティス少佐の研究結果から無理に等しいとされ、諦めかけておったのだが…そんな所にそなたの噂を聞いたのだ……なんでも、人間の体を切り開いて臓器自体を修復して難病を治す医者が我がマルクト領のベルケンドにいると……」

「研究…ですか……？」」

フォミクリーに着目した研究…？

マルクトは一体何を……

「失礼ですが、発言の許可をいただいてもよろしいでしょうか？」

「許す、申してみよ」

「その研究とはいったいどのような物なのでしょうか？」

「おぉ……主題を話すのを忘れる所でおった」

その次の言葉に、俺は驚愕と怒りを感じずには居られなかった……

「その研究とは、不老不死とレプリカの軍事転用である……」

「な……ッ！？」

何と言う物を……！？
仁徳も何もあった物じゃない……

「一つよろしいでしょうか…何故陛下はそのような研究を……」
「……」

皇帝は沈黙を始め、しばらくすると玉座から腰を上げた
そして、その周りを歩きだすようにして動く

「余は…約４０年にも渡りマルクトを納め続けた…その間に何度もの戦争が起こり、憎きキムラスカの人間共を負かし、時には負かされてきた……」

足は今だ止まらず……

「この国の先に不安を覚え、余はローレライ教団に預言を求めた……しかし帰って来た答えはどうであろうか……≪ＮＤ２０１９，キムラスカ・ランバルディアの陣営はルグニカ平野を北上するだろう。軍は近隣の村を蹂躙し要塞の都市を囲む。やがて半月を要してこれを陥落したキムラスカ軍は玉座を最後の皇帝の血で汚し、高々と勝利の雄叫びをあげるだろう。≫…何と言う事か！！マルクトの滅亡ではないか！！」

玉座に拳を勢いよく叩きつけ……

「その為に余はまだ死ぬ訳にはいかぬ！！その為には寿命という枷を失くした体が必要なのだ！」
「それならば…後継者としての陛下のご子息とご息女はこれからどうするのでしょうか…？」

「皇帝は余一人で十分だ…あ奴らは余の玉座を常に狙い勝手に争うような愚息でしかおらん……」

愚息だと……

仮にも血と肉を分けた子じゃないか！？

この男、絶対的なプライドが異様に高い

自分こそが一番マルクトをうまく治められると自信過剰になってる

「では…もう一つ……レプリカの軍事転用とは？」

「生体レプリカには人間をも複写する事が出来ると聞いておる……それに、なんでも刷り込みと云う物を施せば最低限の事はやらせられると云われてるそうだ…そこで兵士としての行動を刷り込ませ、戦場に投下させれば無限の軍隊が即座に完成する……幾らでも変えの効くレプリカを兵士として仕立て上げれば余の大事な民を態々戦場で失う事は少なくなるからの……」

レプリカが…変えの効く物だと……

道具としてだと……

ふざけるな……

「ではシュヴェールよ！！我がマルクトに忠を尽くすべくしてこの研究の総責任者に任命する！！」

「……ッ！？」

「安心するが良い…研究には罪人の体を使って人体実験するのも良し、研究費用は極力大目に見させてもらおう」

俺の…医術をこんな事の為に……

この男は……

何処までふざけた奴なんだ！！

「では、後日改め詳しい「お断りします」事……」

「今、何と申した……」
「失礼ながら陛下、私はそのような研究をすることなど断じて拒否させていただきます」

ザワザワザワ……！！！

周りがざわめき始めた……
それも仕方がない……王命に逆らうとは、つまり死を覚悟しろと言うに等しい
そう言う事だから大抵皇帝の行った事に肯定の言葉以外はあり得ないのだ

「そなたは余の命令に従えぬ……そう申すというのか」
「私は…医者として…何かの為に生きると決めた身ですが、他人の欲望の為に態々人生を使いたくはありません」
「よ…欲望だと！！貴様…！！何と言う事をほざく！！」

傍にいた大臣がその言葉に反応し、俺に向かって怒りだす

「欲望じゃないですか……何時までも皇帝でありたいと願い不死身の体を欲し、民の為と言いながら結局は己の保身のためにレプリカ兵を創り出そうとする……これを欲望と云わず何と言うんですか」

「グッ……きさまぁ～……！！！」

いつの間にかマルクト兵が俺を囲うようにして立ちふさがって来た槍やら剣やらと多種の武器が俺に向けられてくる

「シュヴェールよ……そなたは愚か者だ…そのような眉唾のような理念を貫こうとはせずに余に従うべきであったな」

「従う…？その従ったとある伯爵様を五年前に領地もろとも滅ぼしたのはどこの誰でしょうか？」

「何…それは……！？…そなた、もしやホドの！！」

「少し違う、俺はフェレス島の生き残りだ……だが当時、俺はホドにいた……そこで直にお宅らのやり方を見てきて生き延びて来た人間さ」

「そ……その者を殺せ！！国家の害になる反逆者だ！！」

沈黙は金なり……

証拠隠滅が主流ってか……

上等じゃねぇか……

「悪いが…俺はまだまだ死ぬわけにはいかないんでね……」

「何…！？」

「この宮殿から……」

スチャッ……

「脱出させてもらおうか！！」

バシュゥッ！！！！！

左腕に潜ませていたランチャー銃が発射され、刃付きのワイヤーが
宮殿の天井に突き刺さる

「ふっ……！！」

ギュイィィィ……！！！

もう一つのボタンを押し、ワイヤーが巻き戻されていく
それと同時に俺の体も天井へと向かっていく

「と…飛んだ！？」
「慌てるな！！すぐさま出口を固めろ！！」
「逃がすなぁぁ！！！」

「鬼さんこちら、手の鳴る方へ……とな」

果たして、ハイルはグランコクマを無事に抜け出す事はできるのか
……

第３１話（後書き）

ランチャー銃はとある映画Ｋ２０の金城さんが使ってたような物と同じような性能と考えておいてください

第３２話

ドォォォン！！！

「うぉっ！あっぶねぇ～なぁ～……」

今日、グランコクマは譜術の嵐が降り注いでいた……
それは主に建物の屋根等の上部に集中しての物であった

「譜術士多すぎだろこの国…！？」

そう、今ハイルは屋根伝いで移動して逃走を図っているのだが…奈何せん兵士達の譜術が絶え間なく仕掛けられていた
手の届かない場所にいる犯罪者には剣や槍は通用しない…だから、遠距離攻撃が集中する
ここマルクトは譜術研究が盛んな事で有名な国家だ……
だから、譜術士が多いのは決して珍しいとも言えない

「あそこだ！見失うな！！」
「全部隊、構え！！」

「それはちょっと無理！！」

さすがにそういうのは危ない…大怪我はさせないくらいに応戦しよう……
言っておくが…俺も５年の内に成長した……
自分にとっての体内時計は１０年だから、経験の力が相乗してくれている
体術だけじゃなく、それは譜術にも言える事だ

敵が放って来た風の譜術によってできたFOF（フィールド・オブ・フォニムス）に入って立ち止まる
今だ漂う風の音素を自分のフォンスロットに取り込み、今から使う
譜術の為の水の音素と同化させていく
水と火なら別だが、風となら相性が良くて溶け込むように同化しや
すいからな……
それによってできた反発し続ける力に形を創り出すため、詠唱を紡
ぐ……

「聖なる意思よ…」

想像するのは怒れる雷神の猛撃……
それと同時に空に譜陣を数か所描いていき……

「我が仇名す敵を討て……」

一気に放出する!!

「≪ディバインセイバー≫!!!」

プラズマと云う物をご存じだろうか?
気体、固体、液体に次ぐ第四の状態とも言われる物質だ
その正体は色々あるが、一般的には極限にまで圧縮・真空にした空
間上にある気体の原子で中性子が分離し、正イオンと負電子が自由
に拡散する…つまり電離した気体の事を指す
ディバインセイバーはその力を水の音素で収束させて稲妻のように
降り注がせるのがその正体だ
早い話が風の音素が電気、水の音素が電線の役割を持たせた巨大な
譜の塊って訳だ

ババババババッ……！！！！！！

「ぐあぁぁぁぁぁ…！！！」

「退け！退くんだ！！」

「た…助けてくれぇぇぇ！！！」

一応マーキングを使って周りに被害は及ぼさないよう極力してあるし、人に直接当てないように調整しているから大丈夫だろう…たぶん（笑）

よし、一旦攻撃が止まったか……

今の内に……

「終りの安らぎを与えよ≪フレイムバースト≫！！」

ゴオォォォォ…！！！！！！

「…ッ！！！」

第二音素の譜術！？

確かフレイムバーストは中級譜術の筈！？

なのに、何だこの威力は！！

上級並じゃないか！！

まずい、このまま迫ってこられたら危い……

応戦するしかない……

「具現せよ、敵を滅ぼす神の雫よ≪セイントバブル≫！！」

ゴポゴポゴポゴポッ…！！！

いくつもの水塊が現れ、炎の濁流へと急速に向かっていく……

そして、互いが衝突し……
それは相殺されると共に周りに向かい風を撒き散らした
この風は恐らく気圧落差の急激な変化で起こったんだな……

「よっと……」

崩壊した屋根から瓦礫を伝って地面に降り立った
そして、目の前の男に視線を向ける

「中々の腕前ですね、私も些か驚いてます」
「これは此方のセリフですよ……少佐殿」

そう、この男を忘れていた
天才譜術士ジェイドカーティス……
この男は不味い…今の俺じゃあ勝てん……
無理に戦うとやられる……

「おや、どちらへ行かれるんですか？」

ジェイドはハイルに向かって手を向けると同時……
ハイルの後方に第五音素の譜陣が現れる

ドゴゴゴゴッ…！！！！！

「……！？無詠唱によるロックブレイクだと！？」

その譜術はたちまち土を盛りあがらせ、ハイルの逃げ道を瞬時に塞ぐ
譜術には無詠唱による方法もあるが、音素を取り込む下準備である
詠唱失くして自身の持つ音素所有量を使ってでは些か威力が頼りなくなる

だが、この男はその結果を見事に覆して見せた……

「……譜眼か……」

「良く解りましたね…？……私の両眼は譜を刻む事によって限界値を凌駕するためのフォンスロットと化してますからこんな芸当も簡単な事です」

「なんですかその反則技術……（汗）」

「発案した私にとっては便利この上無い代物ですよ♪」

えぇい！そんな笑顔で言われてもこちらが困る！！

「スマン…少佐殿……見逃してくれませんか？」

「だめです♪」

「やっぱりですか…俺捕まったらどうなるんだろうか教えてくれないか？」

「そうですねぇ……基本処刑ですが、良くて牢獄の中で強制的に研究をさせるか拷問して貴方の医学知識を洗いざらい吐いてもらう事になるでょう」

「Ｈｅｌｌ　ｏｒ　Ｈｅｌｌ　かよ！？」

「ヘルオァヘルがどういう意味だか解りませんが悪い意味であるのは確かですよ？」

「絶望した！これからの人生に絶望した！！」

「だったらあんな事などしなければ良かったでしょう……ちなみに捕まったら拷問係は私でお願いさせてもらいます、新しい知識を得れて楽しめるという一石二鳥ですから♪」

「鬼！悪魔！陰険！鬼畜！ホモの標的！！」

「……最後の言葉については後に詳しく聞かせてもらいましょう……」

わ～い……思わず毒吐いちゃったよぉ～～～

しかも堪忍袋にクリーンヒットだ……青筋浮かべてるし……（汗）

「唸れ烈風、大気の刃よ、斬り刻め≪ターピュランス≫！！」

ヒュオォォォォッ…！！！！！

「烈風じゃねぇよ！！竜巻の間違いだろうが！？」

服の一部がボロボロに切り込まれたぞ…！？
かなり力込めて入れやがったなあの男…！？
しょうが無い！今弾は少ないから出来るだけ使いたくなかったが贅沢は言ってはいられない！
麻酔銃だ…！
ハイルは内側の胸ポケットのホルダーから銃を取り出す
麻酔弾は全部で２２発……アルミニウム製の超小型注射器に原液を約１~２ｍｌ詰め込んである
体内に入れば暫くすると半気管等が麻痺してその後には強烈な眠気に襲われる
ガスと共にマガジンに詰め込んであり、オートマチックではないから発射するたびリロードを繰り返す仕組みだ
もちろんクロード印である……

チャキッ……！！

「おや、それは譜銃ですか？ずいぶん珍しい物を……」

喰らいやがれ…！！

バシュッ…！！

「むっ…！？」

バキャッ…！！

「な…避けただと……」

トリガーの指の動きに合わせて撃つ前に避けたのか？
くそ、弾は無駄にできないっていうのに……！！
後の壁に跳ね返って落ちて行ったか……

「これは……なんとも珍しい弾の形をしてますね？音素の塊を打ち出す型ではないという事ですか」

「……ッ！？」

「なるほど…これは敵に当たると同時にこの中に入っている液体を注入する仕組みですか…いやはや、攻撃方法も変わっているとは恐れ入りますよ」

「ゲッ……！」

麻酔銃について解析しやがった……あの様子じゃ続けても避けられるのがオチだ……
もう奥の手は殆どないぞ？……ケースにある狙撃譜銃は組み立てる時間など待ってはくれないだろう
考えろ…考えろ……
外からの攻撃が出来ないなら……

タッ…タッ…タッ…タッ……

「どうしましたか？…観念して拘束される気になりましたか？」

「……」

ケースを放し、両腕を上に上げてそのまま近づいていく
向こうはまだ警戒心バリバリだ……
“だから”俺は何もせずに近づこう……

タッ…タッ…タッ…タッ……

「……本当にこれ以上抵抗する気が無いのでしたら其処で座って後ろを向きなさい…手を後ろに回してですよ？」
「……わかった」

ハイルは言うとおりにしてジェイドがこちらに近づくのを待つ……

「第一、第二部隊は集合しろ！これから搬送する罪人の監視を命ずる」
「ハ…ハッ！！」

……このまま来い…

「では、縄と錠による拘束をさせていただきます」

そして、ジェイドは腕を伸ばす……
腕辺りを掴もうとした時であった

バッ……！！

「うぉりゃっ…！！！」

突如ハイルが後ろ姿での体当たりを掛けて来た
しかし、力の込もっていないそんな体当たりなど気にもせずに受け

止めるジェイドではあったが……

ヂクッ……

「……ッ！？」

その瞬間、手のひらや手首ら辺に針が刺さった感覚が襲いかかる

「オッケーだ！！」

バシュッ……ギュイィィ……！！！！！

その隙をついてやや真っ直ぐにランチャー銃を発射して巻き戻される力を使って場所を離脱しようとした
その途中にケースを回収してだ…

「……！？逃がしませんよ…！」

ジェイドはその様子から瞬時に譜術を起こそうとしたが……

グラアァァァ……

「…う……く……？」

突如、強烈な眩暈がして集中が途切れてしまった……
何事かと思い、もう一度腕を見ると……

刺さっていたのだ……

あの麻酔弾が……

実は、ハイルは近づく前にマガジンから二発麻酔弾を取り外し、手に隠し持っていたのだ
そして、ジェイドの隙をついて自身自らがジェイドの体内に麻酔を注入したという事だ……

「油断……しました…か……」

ガクッ……

「カーティス少佐!?」

その場に崩れ落ちたジェイドを気にして何人かの兵士が駆け寄ってきている
一杯喰わされた……ジェイドは最後にそう考えて徐々に眠りへと誘われていったのだった……

「ここの港は使えないとなると……別の港を使う他ないか……」

その頃、ハイルは街の出口辺りの物陰に隠れ、今後の脱出プランを練っていた

となると……遠いがケテルブルクしかないな……

其処に行くとなると、ピオニーに迷惑はかけたくないから姿を見せずに通り過ぎよう

だが、その為にはグランコクマを出てその途中に入るテオルの森を通らないといけない……

あそこの軍の守りは此処並に固いって言われてるが……森に入れば食料や水は何とか確保できるようにはなるだろう

なら…決まりだ……

「テオルの森で持久戦となるかもな……」

軍の捜索が緩まった所で通り抜けるしかないな……

サバイバルの経験は少しはある……

此処の世界での食べれる物は大体覚えているからな……

「先ずは行ってからだ…ここはそろそろ不味い……」

良く見渡すと、兵士達がだいぶ近づいてきている

俺の行動を大体読んでいるっていう証拠だろう……

そして…彼はテオルの森へと足を進める……

第３２話（後書き）

英検２級受けてきました。
自己７５点中４６点でした……微妙ですね。

第３３話

「居たか…？」
「変わらずの結果です…ここら一帯に逃げ込んだと情報は入っているのですが……」
「引き続き第二と第四は捜索を続けろ…第三は師団長の不調により今は動かせないからな」
「了解しました……」

ガシャガシャガシャガシャッ……！！！

軽装の鎧が擦れて激しく音を立てながら離れて行った

「しかし、向こう側も安心しては居られん筈だ……テオルの森は奥底には強力な魔物も多数は生息する森だ……」

「アツツ…火傷と切傷がいっぺんにか……」

ハイルはジェイドによって受けた譜術の傷跡を治癒譜術出直している所だった
今彼は緑の生い茂った樹の上に潜んでいた
太い枝が座るにはちょうど良い場所となっており、今手元にある荷

物も並べておくこともできた

「……今の内に狙撃譜銃を組み立てておくか……」

この森は其処らとは違う……
フレスベルグやライガといった魔物の上位種が生息しているといわれている
そんなのが群れで襲われてこられたら……間違いなくその時には俺は奴らの腹の中だろう……
対策には越した事は無い……

チャキ…ガチャ…バチン……

一つ一つパーツを順番に組み立てていく
何回も練習しといてるからさほど苦労せずにできるようになった
そうして半分にまで完成の所にだった……

ガサガサガサ……！！！

「ここら辺はまだ調べてはいないそうだ……」
「では、我ら第二師団はここらを中心に捜索を開始する……散れ！」
「ハッ…！！」

「ここまで辿ってきやがったか……」

余り物音は立てない方が良いな……
葉が擦れる音で気付かれるかも知れないからな……

枝から少し顔を出すようにして下の様子を覗っておこう

「罪人シュヴェールは譜術の使い手であると報告されている…発見した場合むやみに近寄らないのが得策といえる」

猛犬注意のレッテル付きかよ俺は……

ま、せいぜい探しておけ……俺は見つかりはしないからよ

Ｓｉｄｅ：マルクト兵

「隊長…あの男は一体何者なんですか？」

「詳しい事はわからんが、報告によると戦場に出た経歴もない唯の一般人だそうだ」

「本当なのですか？あの動き…唯の一般人には出来る物ではありませんよ……」

「アレは凄かったな…カーティス少佐と譜術で善戦してたしな」

「あんな物喰らったらひとたまりもないよな……」

「静かにしろ……此方の動きを知らせてると同じ事だ」

「失礼しました…隊長……」

今私達は師団の中の部隊の一つとして捜索を続けている

この隊の隊長を含め、全員で１０人……

用意としては十分だろう……

「しかし…この森は相変わらず薄気味悪い……」

「木々のせいで日光が十分に射し込まないからそう見えるのかと…
……」

此処は森として広大な場所だ
おそらく相手にとっても絶好な隠れ場と化すだろう
慎重に私達はテオルの森の奥底へと進んで行く……
すると……

ガサガサガサ……！！！

「……誰だ！？」

いち早く隊長が反応してそれに続き、隊員達が攻撃態勢に入る

シ――――――――ン……

「……ん…音が鳴らない？」
「風だったのか……？」

音は向こう側の草むらで鳴ったが、それ以降は何も反応しなくなった

「…ヨッツァ、確認を頼む」
「……はい」

部隊の一人、ヨッツァは剣を抜き身のまま慎重に音のした場所へ向
かって行った
忍び足でそろりそろりと…近づいていく
近くに来た時にはさらに歩幅を縮めながら進む

「……？」

身を屈めるようにして見渡してみるが、それでは何も解らないなので、そこの草むらを掻き分けてみた
其処にいたのは……

「ウゥゥゥゥ……！」
「魔物の子供…？」

其処には、右の前足に血を流して横たわりつつも此方を威嚇してくる魔物がいた
顔は黄色い毛を持った猫のようだが、姿は中型の犬くらいはある

「隊長、魔物です……怪我をした魔物の子…が……」

ヨッツァは報告をするために後にいる隊長と隊員達のほうへ振り返った……
……が、その報告はその途中で詰まった

「どうした、魔物の子供がどうとか……？」
「あ…あぁ……ァ…ァ……！」
「……ヨッツァ？」

ヨッツァは震えだしていた
その様子が可笑しいと彼らは感じ始めた頃、ヨッツァは指を指した

「う……う……後ろおぉぉ……！！！！！」
「うし……ろ……？」

その言葉の意味が解った時にはもう遅かった……

――――――グルルルルルゥウ……――――――

Ｓｉｄｅ：ハイル

バチンッ…！！

「よし、完成！」

やっと出来上がったか……

しかし、静かになったな……

全然人が通らない……それだけこの森が広いってことか

……深入りは遭難の元だろうしな……

「ランチャー銃の手入れでもしとくかな……？」

そうして、ケースの裏側に入ってる手入れの道具を取り出そうとする……

「うぎゃあああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ――――――――――！！！！！」

「……ッ！？」

悲鳴……！？
いったい何が……

「……」

だけど、俺は今逃亡者としての身だ……
態々危険を冒す行動は避けなければいけない……
すまない……

「助けてくれえぇぇぇぇ――――――――！！！！！」

悲運なのは仕方がない
受け入れておくれよ……
そう、これでいいんだ……
これで……

Ｓｉｄｅ：マルクト兵

ドゴオォォッ…！！！

「げぼぉっ！！」
「た…態勢を立て直せ！散り散りになると一人に集中して攻撃されるぞ！！」
「だ…だめです！毛皮が分厚くて刃が通りません！？」
「譜術だ…譜術を使え！！」
「うわあぁぁぁ――――――――！！」

なんて事だ……
まさか、ライガの集団に出くわしてしまうとは…！？
まずい、もうすでに七人の犠牲が出てしまった……

「避けろぉぉぉ…！！！」
「……ッ！？」

「グオオォォォ――――――――！！！」

ブォンッ…！！！

「う…く……！！」

気を反らしていた隙を突くかのようにライガの一匹が私をその丸太のような腕に付いた爪で引き裂こうとしていた
それに反応し、すぐさま横に飛んで回避を図る
結果、成功してその爪は空を切った

「ァァァアアアァァア！！！！！」

また、やられた！？
一人、また一人と減っていく

ある者は硬質な爪で、またある者は強靭な牙で、そのまたある者は
屈強な体格で死を与えられていく
気がつくと、すでに私一人だけとなっていた……

ガキンッ…！！！

「…クッ……！？」

「グルルル……」

左から攻撃を仕掛けてこられ、それを何とか剣で防ぐが…一撃一撃
が重い物でどうも受けきれない
退くしかない…生き残らなくては……！？

ガリッ……！！

「アッ……！！？」

しまった…！？
左手を噛みつかれ……

グゥォオンッ……！！！

「がああぁぁぁぁ――――――！？」

兵士はそのまま勢いよく左手を軸にして叩きつけられ…転がって行
った
さすがに三匹ものライガ達を一人で相手するには実力不足だったの
だ……

「ううぅ……」

全身が痛みにより麻痺を起す
しばらくは立ち上がれない体になってしまった
だが、“彼ら”は待ってはくれない……
三匹のライガが囲みだし、唸りを上げて舌舐めずりをし始める
彼らにとって男はもはや食するだけの餌でしかない……

「これまで…か……」

もはや逃げられない……
男は覚悟を決め、眼を静かに閉じ…食べられる時を待つ
その答えに応じるかのようにライガ達は口を開け、男の体に牙を突き刺そうと近づく

ギュィィィッ……！！！

だが、突然の奇妙な音にそれを止め、顔を上げる
そして、音のした方へと視線を向けた時だった……

パシュッ……！！！

「グアゥッ……！！！」

一匹のライガの首筋に何かが刺さった
微痛な物ではあったが、驚くには十分な物であったそうだ……

「……その食事待ったと言おうか？」

その次にはもう一匹のライガの背中に左から紐のような物を伸ばした男が舞い降りて来た

そして、右手に持つ物でそのライガの頭に押し付け、また破裂音が響き渡る

「ギャゥッ……！！！」

その瞬間、ライガは暴れ出す……

それに応じて男はライガの背から下り、最後のライガに長い棒状のような物を向ける

ジャキッ……

「退け……無闇にお前達の命は奪いはしない」

「グルルルル――――――――！！！」

その言葉はライガには通用せず、尾を立て、毛を逆立て、威嚇をし続ける

「……もう一度言う…退け」

「グオオォォォ――――――――！！！」

やはり言葉は通じないため、ライガは本能のままその男を咬み殺そうと突進してきた

しかし、その動きを男は上空に上がって避け、次には長い棒状の物“狙撃譜銃”を向ける

ドオオォォォゥウン――――――――！！！！！

それはライガには当たらなかったが…その足元の地面を抉った

「……！？」

それに驚き、ライガは飛び退いて距離を取り始める

そして、男は逆に近づく……

先ほど己が喰おうとした“餌”に……

バシュッ…！！ギュイィィィィ――――――！！！！！

そして、男は餌を奪い去りこの森の上のどこかへと姿を消して行った……

「グオオォォォォ――――――――――――――！！！！！」

後に残ったのは悔しそうに咆哮を上げるライガの姿であった……

Ｓｉｄｅ：ハイル

「しっかりしろ…今治癒譜術をかけてやる」

「う…うぅ……」

助け出せたのはこいつだけか……

残りの九人はすでに事切れていたからな……
こいつは左手の咬み痕と背中の軽い打撲で済んでよかったが……
だけど、あの時結局生きてても全員は無理だったろう……
このランチャー銃は合計約２００?までしか持ち上げられない
俺の体重が６５?だからあと約二人は持ち上げれるが、それは生身の場合だ……
鎧を着込んだこいつらでは二人は出来るか怪しくなる……
だから一人しか連れだせなかった……

「私は…生きてるのか……？」
「残念だが、お前以外はもう死んでしまったよ…」
「何故…助けた……私とお前は…敵の関係の筈だ……」
「まぁ、そう思ってたが……別に気まぐれと思ってくれ」
「気紛れ…だと……」
「そんなもんさ……消毒するぞ」

バシャッ…

「～～～～～～～～～ッ！！！」
「我慢しろ…魔物の口の中は雑菌だらけだ……一度感染を起こしたら大変な事になる物もあるから今の内に殺しておく方が良い」

その例として狂犬病とかだが、この世界にはそんな類の病気は例があまり見られないから可能性は今回薄いだろう

「命を司りし女神の抱擁を≪キュア≫！！」

今回は傷が深いから強めの治癒譜術を掛けておく
淡い光が兵士の腕に照らされ、その後には傷は見えなくなっていた

「腕はもう大丈夫だろう…一応調べて見たが神経の損傷もなしだ…
……後は背中の打撲を癒しとけばまた兵士として活動できる」
「……」
「……やれやれ、そろそろ離れた方がいいか」

まだ気付かれては無さそうだが、何人かの青い姿がチラチラと見え
てくる
別のマルクト兵士達だ

「一応、駄目元でお願いするが……俺が此処にいた事は伏せとい
てくれ」
「……ぁ……」
「じゃあな、出世しろよ……若造」

バシュッ…!!!ギュイィィィィ――――――!!!!!!

ハイルはあっという間に姿を消した
そして、その場には少し静かになる

ガサガサガサッ……!!!

「どうした、何があった!!」
「お前は、確か…第二師団の奴か?」

そして、彼は救われた……
その後には幾人かの兵士の肩を借りながらも軍部へと帰って行った
らしい……

「まだ若くて軍に入って間もないのに…災難だったな」
「いえ……貴重な体験だったと思ってます……」
「ハッハッハ…！！グランコクマの軍部に連絡を入れたい…所属と名前を教えてくれ……」

「マルクト帝国軍第二師団所属…アスラン・フリングスです……」

これは、とある若き将校のほんの一部の記憶……

第３４話（前書き）

来週から大学でテストなので短い間停止させていただきます。
この作品を心待ちにしている皆様には多大なご迷惑をおかけすることをお許しください。

第３４話

Ｓｉｄｅ：シュウ

「それは…どういう事でしょうか……」
「言った通りだ、罪人ハイル・シュヴェールはテオルの森で事切れたと調査結果が出された」

……そんな、まさか…あの子が……

「あの者は皇帝陛下の勅命を事もあろうに足蹴にし、暴言を吐いたのだ。これは立派な不敬罪と国家反逆罪が立証されている」

ハイル君…君はやっぱり予測してたんだね、こうなることを……

「本当に……彼は死んだのでしょうか？」
「調査の所、魔物に襲われた形跡…ボロボロになった衣服…多量の血痕…毛髪等があの場で見つかった。音素反応を調べた所、彼の物と一致したらしいから間違いないだろう」

なんという事だ……魔物に襲われ、無残にも其処で終わってしまったのか
どれだけ悔しい事か……

「して、この診療所を訪れたのはもう一つある。生前にてハイル・シュヴェールが研究で使ってたとされる私物を帝国へ提示して貰う為だ」
「……それはもうありません」

「何…？」
「此処を発つ前に彼が内緒で処分してしまった為、もうどこにもありません」

これは嘘だ…本当はブリジスト子息の屋敷に移動させて隠している用意がいいね…相変わらず彼は……

「それは信用できん、我々が直々に中を調べるようにと許可の権利を頂いているのでな。…入らせてもらうぞ」
「たとえ事実だとしても私には許可できません…ここは診療所です。病気でここに入院している患者がいるんです！」
「……」

彼の‘記録’を引っ掻き回されてたまるものか……
此処に彼が居たという事実を潰そうというのなら私は出来る限り抵抗させてもらう
私にとって、ハイル君は教え子と同時に息子のようだった……
初めて此処に来た時は私の事を一番良く考えてくれ、気遣ってくれる事も一度や二度ではなかった
何時も一生懸命で、医者とはこういう物だと改めて知らせてくれたりもしてくれた……
そんな彼を私は次第に見守るようになっていった
彼の成長を楽しむ事を……

「だが、我々も義務のためこの事は遂行しなければならない……捜査を開始するぞ」
「……ッ！？」

兵士達は私を手で押しのけて診療所へ入ろうとしていくが、私は逆に押し返して抗議を上げる

しかし、一人を相手にしている間に他の兵士達が診療所へと侵入していくため間に合わなかった
こんな時に己の非力さを悲観に思った…事実、私は何もできない……
これではだめだ…だめなんだ！

「そこの兵士達、その建物を調べる事は無駄だ…すぐさま中止しろ……」
「…誰だ、貴様は？」

そんな時だった…後ろから突如として声を掛けた男
それは最高の助太刀人であった……

「もう一度言うぞ？その建物には罪人シュヴェールの私物は一切残ってはいない。この私が証人だ」
「我々のやり方に口答えするのか？たかが一般市民が軍の行動を指図するな」
「…市民ねぇ……どうしてこうも格好だけで人間判断するんだか……」

男は呆れたようにして溜息を吐く…その行動を兵士達は馬鹿にしてるのかと捉え、何人かが詰め寄ってくる

「いい度胸だ…少し懲らしめてやってもいいんだぞ？」

ガバッ…

兵士の一人が男の襟元を掴み上げる
…が、その行動はすぐに止める事となる
その原因はその男の襟元に付いているボタンに刻まれた家紋だ

「…こ、これは!!……ご、ご無礼を!!」
「ふん、まぁ…許してやるこれくらいは……」

その家紋は対になった双槍をモチーフとした銀で刻まれた物だった…
それは…マルクト貴族の一人、ブリジスト侯爵家の証明となる物であったからだ

「三度目はないぞ…今すぐにその捜査を中止しろ」
「……ぅ…で、ですがこれは……」
「そうか、命令が聞けないという事はマルクトの下級兵は我が侯爵家を下に見ているという事だな?すぐさま軍部に抗議文を送らせてもらおう」
「……!?…す、すぐに中止だ!全兵集合!!」

ゼノンは己の地位をうまく使っての立ち回り方を学んできた
この捜査は一般市民には伝わっていないものの筈だ…または今の皇帝を潔く思わない他の貴族達にもだ
それなのに、この行動の目的を公開されるような真似が起きたらどうなると考えるだろうか?
忽ち市民の支持は下がり、反対派の貴族達はそこを突いて皇帝の地位を引きずり下ろす策略を練り上げるような巨大な出来事へと変貌を遂げるだろう
それほどにまでハイル・シュヴェールの技術を利用するための秘匿されるべく物は諸刃の剣となるのだ

「報告書には何も発見されなかったと記載するがいい、でなければ……わかっているだろうな?」

お前の首など簡単に吹き飛ばせるんだぞ?

どこぞやにもいるような権力者の権力の使い方をゼノンは実行する
後で上部に賄賂を少しやっといても大丈夫だろう

「わ、わかりました……では、これより帰還する」

周りの兵士達は納得がいかないが、逆らうわけにはいかなかった
何故なら、彼は‘貴族’なのだから……
貴族の子息は成人を迎えたら、その当主として成り替わる事が多い
だが、ゼノンの父は二年前、下を任せる部下の貴族が不正を行った
為…責任追及として立場が危うい状態に成りかけた事がある
その当時１８になるまではゼノンは今でいう不良として親の威光を
笠に度重なる悪行をしていた……
そして、あの男の出会いを境にこの２年必死に政治の勉強をして未
だ危うい状態だが、侯爵としての立場を保ち続けるブリジスト家を
持ち直すまでに成長した
実質上今のブリジスト家当主はゼノンとなっているという訳だ
その為、影響力は子息としてより大きい

「ブ、ブリジスト侯爵様…危ない所をありがとうございました」
「あ～あ～、シュウ先生はハイル先生みたいに楽にしないんだな相
変わらずにな」

兵士達が去った後にゼノンは先ほどまでの雰囲気とは一転した表情
に変わり、更には口癖も荒い方へと変えていた

「やっぱりこうなったか、さすがハイル先生の言うとおりだぜ」
「あの、どうしてそんなに喜んでるんだい？」
「そういやそうだ、シュウ先生に渡すもんがあんだった……え～
っと…これだこれ」

懐を探し回ってゼノンは内側のポケットから一通の手紙を取り出した

「これは自分が三日後帰らなかったら開けて読んでシュウ先生とかに内容を伝えといてくれと先生にお願いされたもんだ……この手紙がいうには…自分が死んだと報告されるかもしれないけどそれ偽装だからそこんとこよろしく♪…だってさ……」

ガクッ…！！！

シュウは一気に力が抜け落ちた
先ほどまでの苦労は一体何だったのか…小一時間己に問い詰めたくなった

「いつかは解らないけど自分についてはほとぼりが収まった頃に連絡するからそこんとこもよろしく♪…なんか先生楽しそうに書いてないかこの手紙……」

そうだった……
この男は唯ではくたばらないような人間だった……
だったら心配する必要無かったんじゃないか？
もう何が何だか分からなくなってきたシュウ先生なのであった……

一方、その当人はというと……

「フィィィィィィィィィィ――――――――ッシュ……！！！！！」

ザパアァァッ…！！！

元気に食料調達として川で魚釣りをしていたところだった……

「今日は四匹か…大量だな……」

テオルの森で野宿して早三日目……

死亡偽装のために度々出会った魔物の攻撃をワザと受けて服をボロボロにしてそれに血や毛髪をいくらか振りかけ、上手いように事件現場そっくりに作り上げといた物を兵士達に見つかりやすいようにしておいた

自身は木の上にいるから魔物に襲われにくいため、安全に生活してるなんて普通では考え付かなかったために見事に勘違いしてくれた日に日に兵士の訪れる数も減ってきていたから効果てき面だろう

ちなみに、受けた傷はしっかりと治しておいた

これからはどう行動していこうか……

とりあえず一週間はこの森で野宿していく計画だ……

それからは姿を隠すための変装をするなりして人々から忘れ去られるのを待つしかないだろう

幸い、己の死亡をすぐに確認させるような仕込みをしたから指名手配をするようなことはまずあり得ないだろ…む、またかかったか……

「来い来い来い…！！」

以外と森林ライフを満喫しているハイルであった……（苦笑）

そして、次の五匹目を釣り上げる所にまで言った所に……

ザパァァッ…！！！

パシッ…！！！

「あれ…？」

掴んだような音が響いたがそれは彼が発した音ではないではいったい……？その答えは目の前にあった……

「グル……♪」

中ぐらいの、大きさで表わせば自分の膝の高さより少し高く大きいライガがおいしそうに先ほど釣り上げた魚を旨そうに加えていた

今日の晩飯ゲットだぜ…！！

どこかのポ●モンマスターの決め台詞が聞こえてくるような感じがした……

「おいてめぇ！それは俺の今日の晩飯だ！！」

「……」

ダッ…！！！

「この糞ライガがあぁぁ…！！！」

制止の言葉も聞かずそのライガは一目散に逃げ出した
それもしっかりと魚を咥えてだ…ハイルにはライガとの遭遇率が高いというのだろうか……
ライガはライガで今日の食事が手に入ったで嬉しそうだが……

「フフフ腐腐腐……」

その後ろで何やら殺気をビンビンに感じ取り、汗を流し始めたハイルさん、ここの生活を満喫しているとは言ったが…とある問題がある
寝る場所が安定しないから体が痛む、虫がウザったい、なんか痒い……
そんな状況なのでストレスが溜まり始めていたのだ……

「俺の獲物を……」

少し、イッチャッタ…という訳だ……

「盗るんじゃねえぇぇぇ――――――――――――――――！！！！！」

ズダァァンッ…！！！

「ぶるうあああぁぁぁぁぁぁぁぁ――――――――――――――――！！！！！」

言い忘れたが、ハイルはローレライの魔改造によって怒りのボルテージがＭＡＸに達すると隠された力が解放され…アナゴモードへとシフトチェンジするのだ

全力でそのライガを追いかけ始める…その姿は狂戦士（バーサーカー）といえる
髪が熱気を帯びたようになり、顔も険しい物へと変化していた

今ここに、彼らのデスレースが始まる……

第３４話（後書き）

＊飽くまでで彼は銃使いです。斧は使わないとです…（笑）

第３５話（前書き）

テスト終了しました。
再開させてもらいます。

第３５話

「ＷＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹ――――――！！！！！！！」

皆さん今晩は、緊急ニュースをお知らせします。
今日夕方頃、テオルの森に蒼い悪魔が出現しているとの情報が流れております。
叫び声が聞こえたら半径２００ｍ以内には近づかないようにと注意を促しているとの事です。
もし捕まると逃げられませんので要注意してください。
以上です……

「ライガ！俺様の糧となるがいい！！」
「ギャウゥゥゥ――――――――！！！！！！」

以前としてハイルと子ライガは追いかけっこしていたが、両者共々一歩も譲らないままであった……
ライガの方としては唯弱肉強食の世界にそって人間から獲物を捕る思考を持っているが、その考えをこの男に順応させるには危険過ぎた。
なんせ……

「今日のご飯はライガ鍋と焼き魚じゃぁぁぁぁ！！！！！！」
「ギャウゥゥゥ――――――（嫌だぁぁぁぁ――――――）！！！！！！」

こいつ…この俺を喰う気だ！
捕食者である筈の自分が被食者である人間になぜ…！！
やばい、あの眼は依然飢えた兄弟とおんなじ眼の色だ！！

完璧に身の危険を感じ取っていたため唯々逃げるしかなく、向かう勇気が無かった。
人間の言葉は解らないがアレはさすがに不味い…！？
アレは絶対≪やった≫側の人間に違いない！！

「Ｃａｔｃｈ　Ｍｙ　Ｈｅａｒｔ！！！」

バキキャァァッ…！！！

ハイルの手からは無詠唱の初級譜術が放たれたが、もはや初級というレベルではなく中級の上といえるくらいの威力で逃げてたライガの傍の樹を抉った。
その威力ゆえに樹はゆっくりと倒れていき、ライガがその下を潜り抜けたと同時に横たわる。
これで逃げ切れる…そう安心しかけたが……どうやら彼には幸運の女神の加護は無かったらしい。

「ちょろまか動いてんじゃねえぇぇぇ！！！！！」

ドゴオォォォォン…！！！！！

突如発生したレーザーによって彼が通った樹の場所には見事な焼き丸跡が形成されていた。
どうやらハイル…レイジレーザーをＦＯＦ無しでやり遂げたそうだ……
音素の補助なしで派生譜術を詠唱するなんて…ハイル、恐ろしい子！！

そして、この鬼ごっこはこうして続いて行った……

≪1時間後……≫

「ぜ～…は～…ぜ～…は～……」
「クオォ…ォ……ォ…ォォ……」

最早鬼ごっことは言えない代物ではあったが、最後になってようやく静かになった。
譜術が飛びまわり、樹の上からの奇襲が起きたりなどと色々あったが…さすがに一人と一匹も疲労で共にダウン寸前だった。
両者とも膝が笑っている……それほどの物だ

「ギ…ギブッ……」
「カフッ……」

ドサッ……

そうして、寝転んで今までの疲労を少しでも休ませようと身体の防衛本能が働き始めた。
その姿は上から見れば片仮名の“リ”に見えなくもないという変な形で……

「げほっ…げほっ……！！おまえ、足早いな……」
「キュウゥゥゥゥン……」
「まぁ…人間が魔物に身体能力で挑む事態が間違ってるけどな……」

ハイルさん…貴方の存在自体が間違っているのでは……
突っ込みたいが記憶はローレ（ｒｙ）……

「ハァ……わかったお前の勝ちだ、後で其処にある飯持ってけドロボー――」
「グルッ……」

未だに寝転んでいるが、会話だけは成せるには成せれてるようだ……
本当は何を言っているのかどちらも解ってないが、合図のようにして意思疎通を図ってた。
ハイルは傍に転がっていた魚を指さしてそのまま力を失くした。
どうやら眠りに付いたようだ……
もう森は暗闇の最中…夜目の効いてる人間でない限りここらまでは入ってくる筈のない所にでだ……

モフモフ…モフモフ……
あぁ、この至福の時……
言葉では言い表せないこの感触……
幸せすぎるぜぇぇ……

昔近所に住んでた猫のような…懐かしいもんだ……

バシッ……！！

いてぇ…！？誰だ、俺の顔叩く奴は……！！

ベシッ…ベシッ……！！！

体が動かないだと…って痛い痛いヤメレ！！！

パチィィィンッ…！！！

叩くなあぁぁぁ…！！！！！

ガバッ…！！

「いい加減にしろおぉぉぉ！！！！！（怒）」

ハイルは先ほどから感じる顔の痛みにより眠りから覚醒し、勢いよく起き上がって怒号を叫ぶ。

今までのは夢だとは完全には気付いてはなかったが、今になってようやく状況を把握し始める。

「……へっ？」

最初に目についたのは真正面にいて己の体の上に乗っている物体

…もとい人物であった……
ボサボサの桃色髪、弱々しい細い小さな身体つき、汚れ所々破れかけた布……
どう見ても子供にしか見えません…どうもありがとうございました……

…ってそんな事云っている場合じゃねぇ!?
なんでこんな森奥で幼い子供がいるんだよ!!
まさか…捨て子なのか!?

「お…お嬢ちゃん……とりあえず先ずは俺の体から下りてくんないかな?」
「……?」

コクンと首を傾げてまぁ可愛い!…だからそんなこと考えている場合かこの馬鹿野郎!!
こんな場合どうするんだよ!!やっぱり詳しくはこの子に聞いて……

「ガルルルル……」

…な~んか後からやぁ~な鳴き声が聞こえてくるんですが?
それも音からしてかなりデカイのな……

ギギギギギ……

ハイルは仰向けの態勢のまま首だけ縦に後ろを向いてみた。
その先には逆さまの視界が待っていたがそんな事はどうでも良い……

紅と灰がバランスよく混ざった毛皮…緑色を基準とした立派なたてがみ…普通のライガよりも二回りは大きい巨体……

こいつアレだよな…オールドラントの生物図鑑で見た事あるね…

……

ユニセロスも印象に残ってたが、こいつも捨て置けない……

ライガの長

――――ライガクイーン――――

今に解った…俺は餌として運ばれたのか……

ここたぶん巣だな…岩でできた洞窟だが枯葉や木枝で床を敷き詰めて整えてるし……

なら話は早い…すぐさま逃げるか……成功率は確実に低そうだがな・・・

もしかしてこの子供も俺みたいな過程で此処に連れて来られたのか……？

にしては服が随分年季が入ってる様な物だが……

「グルル…！！」

思考の最中にて、横から鳴き声が響き渡った……

相変わらず姿勢は苦しいが、頑張ったその方向を向いてみると…

あのデスレースといえる鬼ごっこで善戦したライガが其処に立っていた。

「お前…！？」

「ガルルル……」

声を掛ける途中にそのライガは此方に向かってきた。
いや、正確にはその奥にだが……
そして、ライガクイーンの前に来るとその次には必死に鳴いて何かを伝えようとしていた。
こちらでは吠えあってる様にしか聞こえないが…彼らにとっては会話なのだろう……
そして、それが終わるとライガクイーンの方は洞窟の奥の方に行って座り込み、小さいほうのライガは俺の所へと駆け寄って来た。

「……？」
「ペロ…ペロ……♪」

何だかわからないが、頬を舐められてた。
これってあれか？親近感が湧いた存在にやる一種のスキンシップって奴か？
前世の子供時代に犬の本で読んだことあるんだが……
……ってかくすぐったいんだが

「ちょっとすまない…立たせてもらうぞ」
「がぅ……」

このままでは何も始まらないのでとりあえず立つことにした。
そん時にこの子をどかしたんだが…がぅ……？

「えぇっと…君、お名前は？」
「あぁ～ぅえぅあ…？」
「……」

これは…俗に言う狼少女ならぬライガ少女……？

冗談言ってる場合じゃない…だがこれでハッキリした。
恐らくこの子は赤子に近い歳でこの森に捨てられたんだ。
そこで何の因果かライガクイーンが拾ってこれまで育てて来たんだな……
この服は多分産着だ……んっ…服に何か縫ってあるな……

「ちょっと失礼させてもらうよ？」
「へあぁぁ…？」

これは、刺繍による文字だ…泥まみれで読みにくいが……途切れてはいないから何とか読めそうだ

――アリエッタ・／／／／／／／／――

家名の所は完全に潰れて解読は出来なかったが…名前の方は読めたか。
なるほど、この子はアリエッタって名前なのか……

「良い名前だな……」
「ゥ……？」

ガサガサガサッ……！！！

またしても入口の方から物音が聞こえて来た。
今度は…あのライガ三人集じゃないか……
ちょっと…やべぇ……こいつらに麻酔銃や威嚇射撃くらわしてたんだっけ……

「「ガルルルル――――――！！！！！」」

うわぁ～い！完璧怒ってるよ…威嚇モード切り替えですか。

「グオオォォォォ――――――！！！！！」

その時、後からライガクイーンが大きな咆哮を上げる。

用意が出来てないからかなり驚いたが、何とか恐怖心を顔に出す様な真似はせずに済んだ。

何故そんな事をしたのか不思議に思ったが、その意味がその次に良く解った。

あのライガ達が退いて行ったのだ…恐らくアレは“止めろ”という意味だったのかもしれない……

でも何故だ…？なぜ態々人間の俺なんかの為にこんなことを……

実はハイル、ライガクイーンがライガの子の話より聞いた、自分たちでは立ち向かうには力不足かもしれない…そして、気に入ったと等という理由である事を知らない。

弱者は強者に従う…魔物の中の掟をハイルは知らぬ間に勝ち取っていたという訳だ。

「おや、あれは……」

ハイルはライガ達が退いた所に視線を向けると、其処には多くの獲物となった魔物の束が形成されていた。

しかも、良く見ると自分が持ってたはずのケースと釣り上げてた魚の全てまでも……

「盗んできたのか…それとも唯偶然見つけただけか？」

まぁ、そんな事はどうでもいい……

これからどうしよう……この巣にいるのは何かと危険かもしれ

ないし（主に喰われる）
また別の寝床を探すしかないかぁ…面倒だなぁ……

ガシッ……！！

「んっ……？」
「う～♪」

ノシッ…ノシッ……！！

「いやちょっと何してるの!?（汗）」
「あい…！！」

グワシッ…！！！

なんか知らんが子供（アリエッタ）が座ってた俺の背中からよじ登って頭に寄りかかって来た。
その次には乱暴に髪を鷲掴みにして引っ張ったり折ったりしている。
痛たた…！！

「こら、やめなさい…！！（汗）」
「うぎゅうぅぅ～♪」

まさか蒼髪が珍しいのかこの子にとっては……

「降りろ…！！」
「（ビクッ…）！！？」

ァ…このパターンなんか解る。

この後はきっと……

「……」

あぁ…そんな涙目にして落ち込む素振りはヤメテ！！お爺ちゃん（精神年齢約７０歳）罪悪感感じちゃう…！！！

…ってママさん！！そんな唸り声を上げてこちらを睨まないで！！私がわろうございました！！

「わ…わかった……幾らでも触らしてやるから泣かないでくれ！！（汗）」

「……～♪」

ワシャワシャワシャッ……

トホホ、一難去ってまた一難だよコリャ……

色々と何か諦める事にしたハイルなのであった……

第３５話（後書き）

アリエッタはアビスの裏方アイドル！
これ鉄則ね……

第３６話（前書き）

自分でも２８２８が止まらぬ！！
頼む、なんとかしてくれ！！

第３６話

チチチチチッ……

深く木々が生い茂たテオルの森に日が射し、朝が訪れる。
何処からと鳥の囀りが聞こえ、それは魔物達の活動の始まりの合図へと変わっていく。
すると、土の中から、草むらの中から、樹の上からと眠りについてた魔物達が姿を現し始めた。

そんな様子の中で彼は潜み続けている……獲物を狙う狩人（ハンター）として。
己の体をこの森の一部と化すようにして武器を構え続ける。
もうかれこれ３０分はジッとしている……狙いは湖の畔として。

「……来る」

ハイルは気配を察し、確信を持った……己の待つ獲物が現れる事を。
そして、今まで以上に神経を研ぎ澄ましてスコープ越しの視界を凝視する。

暫くして現れたのは歩行型の鳥の形をした魔物であった。
彼らは集団で群れとして行動してきたようだ……
一匹、また一匹と口を湖に付けて水を飲み始めていた。

「……」

狙撃の基本は集中力を極限に高めてからの行動だ……その為には

酸素を多く吸わなければならない。
そして、片目でスコープを除いてはいけない……眼に余計な負担を掛けてもう片方の眼に支障をきたすからだ。
呼吸回数を二倍にして深く……十分に溜まるのを肺で感じ、そこで息を止める。
撃つまでのタイムリミットは取り込んだ酸素が薄くなるまでだ。
酸素不足で視界が徐々に落ちていくため、その間に狙いを定めなければならない。

「……狙いは首にするか……」

群れの中の一番の大物は畔の中心部分にいる奴だな……
アレがあの魔物のボスってところか……
その姿に敬意を持って……

一撃で苦しまずにしとめさせてもらおう……

ドウウゥゥゥンッ――――――!!!!!

命中……だがすまないがこれで終わりにはしない……
もう二、三匹はしとめさせてもらう……

――――兄弟達が腹を空かせているからな――――

ドウウゥゥゥンッ――――――！！！！！！

ドウウゥゥゥンッ――――――！！！！！！

あの出来事から早二週間……

結果的に俺はライガクイーンの巣でライガ達とアリエッタと一緒に住む事になった。

始めはライガが今にも飛び掛かりそうな勢いで俺を睨み続けてはいたが、ライガの子供達とアリエッタの世話を色々してて懐かれた為、そのお陰で警戒心を解いてくれたのが一週間前だ。

今では立派にライガの家族の一員だ……そんなこんなで俺は狩りなどをして彼らの分の生活も手助けしたりしている。

「さてと、血抜きをして解体といこうか」

足元には先ほどまで水を飲んでた鳥系の魔物が五匹ほど首から血を流して横たわっていた。

良く見て見るとなんか……こう……チ○コボの子孫なんじゃないかと思える姿と大きさだな。

懐からナイフを取り出して順番に首の左側にある動脈を切って血を外に出来るだけ出し尽くす。

次に腹を裂いて臓器を取り出し、傍に落ちてた担ぐにはちょうどいい枝と持っていた丈夫な蔓を使って腑抜きした魔物を順に吊らしていく。

これで持ち運びの準備は完了……後は……

「お～い！もう良いぞ！？」

その声と共に奥から二匹のライガが現れる。
こいつらは今まで待機してもらっていたんだ。

「さて、こいつら巣に持って帰ろうぜ。任せるぜ？」
「グル……」
「ガルル……」

合図とともに俺が作った獲物を吊るした枝を口にくわえる。
詳しく言うと、三本こういうのを作っていたんだ。
1：2：2の比率で2の方は棒の端に二匹吊るして中心はこいつらが咥えて運びやすいようにした。

「さてと……」

ボスンッ……！！

俺は片方のライガの背に乗って最後の一匹の方を担いだ。
力持ちじゃないから一匹が限界だからな……俺には。
左手にはケースを持ってと……

「じゃあ、よろしく頼むぜ」

手で背中を軽く叩いて合図を送ると共にライガは歩を始める。
そして、ある程度勢いがついた所で掛け始める。

「相変わらず早っ……！？」

……できればこいつ等には加減という物を知ってもらいたいな……

乗るたび毎回股が痛くなってかなわんわこりゃあ……

≪１０分後……≫

よし、見えてきた……やっと巣に戻ってこれたか。

おっ……アリエッタと子ライガ達、それにライガクイーンも外に出てるのか。

どうやら日光浴をしてるようだな……自然の殺菌か……魔物も知らぬ間に効率の良い生活知識を持てるようになってるんだな……

蚤の死滅にも役立つ……そういや前、子ライガの子供に蚤移された時は地獄だったな……

まぁ、今となっては良い思い出でもあるが……

「ただいま～！！」

「「ガウッ……！！」」

「おうぁぇい～♪」

子ライガ達とアリエッタが反応して返事をしてくれた。

その風景には何かと癒されるぜ。

「今日の朝飯は鶏（？）肉だ！！」

「「グルッ……♪」」

「あい……！！」

魔物の食事は一日二回とされている。
これは魔物が獲れない日々に備えて脂肪を溜める為だとかそんな説が多くあるが、俺には詳しく解らない。
だけどアリエッタは人間だ……赤子の時はライガクイーンの乳を、ある程度育った時には魔物の肉を喰わせるようにしたようだが、魔物の肉はどうやら体を形成するための蛋白質の類は殆どの奴らが望めそうにないらしい。
例外としてブウサギの肉は栄養率が高くて食品として出回ってるんだけどな……
知ってるか？豚の細胞って人間のとほぼ同じらしいぞ？
だから前世でも豚肉は食い過ぎると太る事が多いが戦後重要な栄養源となった貴重な食材でもあるんだ。
そんな訳で、このままでは生きていくには何とか大丈夫そうだが……アリエッタは成長が遅い体になってしまうな。
そこん所なんとか考えないと……

「でもなぁ……俺国上犯罪者だからなぁ……此処から近いグランコクマに態々買いにも行けないし元より金失くしちゃったしな……」
「うぁいぁいぃ～！！」
「あっ、すまない待ってくれてたのか……すぐ行くよ」

一先ずは保留、飯にしようか……
アリエッタって今まで生肉食ってたんだよな？
衛生上不味いと思うから焼いた肉を食べさせてるんだが……固くて喰いにくいからミンチにしてハンバーグみたいな形のを喰わせている。
それと……野菜、食わせなきゃな……
この森にないから目処が立ってないけどな……

「アリエッタ」
「あぇっあ？」
「違う違う……ア・リ・エッ・タ……はい、もう一回」
「あいえっあ」
「お前……母音以外基本話せないんだな……」
「あぃえあ……あいえっあ……あいえっら！！」
「あ……少し違うの話せたけど駄目だ」
「……がぅ」
「まぁ、地道にやっていこう」

ワシャワシャ……

一応頭を撫でてやった。
今俺はアリエッタに話し方を教えている。
せめて人間の言葉を覚えさせたい……その思いから始めてあげたんだが、困難しているよ見事に。
何を喋ってるのか自体解ってないだろうからな……魔物の言葉から人間の言葉を変換させるなんて子供の脳じゃ普通無理だからな。
先ずは名前から言わせてみようとしてるが……三日目になってアリエッタは俺が自分に言葉を言わせようとしてるのをやっと理解した程度だ……

一先ず区切りを付けた所で俺はまた再開した。
アリエッタじゃ長いのか？じゃあもっと短い言葉で……
そう考えながた辺りを見回して言葉となる物をさがす。

そこで俺は向こうにいるライガクイーンを見つけた。
其処から閃いた言葉があった……
俺はライガクイーンに指を指しながらある言葉を言った。

「ママ……」
「ぁあ？」
「マ！！」
「んま！！」
「よし、いいぞ！！もう一回……マ！！」
「ァァ……マァ――――――！！」
「続けて！！マ・マ……！！」
「マァ――ムアァ――――――！！」
「偉いぞアリエッタ！！」

ワシャワシャワシャ……！！

さっきより大きく撫でてあげた。
一文字だけの言葉での“ママ”なら言えると思ったが、どうやら当たりだったようだ……

「マァ――――マァ――――……マァ――――マァ――――♪」
「ハハ、気に入ったのかその言葉……それじゃあ他の言葉も覚えていこうか？」
「あい……！！」

一応言っておく……俺はロリコンではない！！
だから、無闇に自分の事をパパとは呼ばせていないぞ！？
ホントだからな……決して邪しい思いは寄せてはいねえからな！？

ホントだからな！！（一応二度忠告しました）

この後も俺は巣の改善をしたり、子ライガの世話をライガクイーンと一緒にしたりと一緒に暮らす以上最低限の事をしていった。
譜術によって水を作れるから態々飲み水を得る為に湖や小川まで行かなくていいなどとライガ達にとっては俺は無くてはならない存在になりつつある。
さて、今日も疲れた……今後については大方指標を付けている。
此処を去るのは1ヶ月目に入ってからにしよう……アリエッタやライガ達には悪いが……俺には此処にずっといる訳にはいかない……戻るべき場所があるからな。
アリエッタは……ライガクイーンの意思に任せよう……このまま残るか……それとも俺と着いてくるか……
でも……ベルケンドに本当に戻っていいのか？……待てよ、あそこって軍兵駐在してなかったか……？
……やっぱりまだいい案を出すには早すぎるかもしれない……

国に追われない方法……そんな都合のよい物が存在したらこんなに悩まないでも済むんだがなぁ。

あ～頭痛い……こういう事考えるのはやっぱ割に合わねぇんだよ俺にはたくっ……

巣の中で寝転びつつも愚痴を零してまた寝返りを打つと先ほどから同じ事をしているが……まぁ、あまり心配はない……と思う。

けどなぁ……何より一番の問題が……

「…スゥ…スゥ……」

アリエッタよ……何故俺の体を枕にするようにして寝ている。

ライガクイーンに寄り掛かればいいじゃないか……

けど、今起こしたら嫌がるだろうな。

そんな事になったら……

『娘に何しとんじゃあこのアホンダラあぁぁぁ――――――!!!!!!』

クイーンに制裁されるわ!!

マジ笑えんわ……此処で死にたくないからそんな下手な真似は打たないようにしよう……

けど……

なんかこういうのって……

温かい物だな……

彼はまだ知らない……

その温かい生活が……

取り壊されることになろうとは……

第３６話（後書き）

ニコ動にあるアビスＭＡＤ、「愛されていたい」
アレは名作です。めったに泣かない作者の私でさえ零しちゃいました。
ぜひとも見る事をお勧めいたします。

第３７話（前書き）

オラクル騎士団戦です

第３７話

「……物騒な事が起きそうだな……」

それは三日後の昼の時であった……

森暮らしに慣れ、気配に敏感になったハイルが感じた重い空気。

それは徐々に此方に近づきある。

「ライガ達の様子からして……おそらく人間だな、それも大所帯って所か」

軽く１００人くらいはいるそうだ……

ライガ達が神経質になるのも頷けるしな。

「しかし、何でまた態々ライガ達の寝床に侵入しようとしてるんだ？こいつ等には人里を襲うような真似は全くないというのに。」

そうだ、人間を喰うのは運悪く獲物探しの時に見つかった奴か己らの領域（テリトリー）に入ってきた奴らだけにしている。

ライガ達にも彼ら自身が創り上げた固い掟が存在しているからな。

「もし、ライガの討伐だとしたら……狙いはここだな……」

この巣にいる敵の大将ともいえるライガクイーンだ。

クイーンが殺されればライガ達の総統力が一気に下がり、混乱が生じる。

再び持ち直すには成体になったライガの雌達が戦ってまたクイーンを出すにはかなりの時間が必要となる。

「アリエッタ……ママと一緒に巣に戻っているんだ。ちょっと勝手な事をする奴らを懲らしめてくるからね？」
「……（コクッ）」

魔物に情を沸かせるのは本当はいけないのかもしれない。
人間達にとって魔物は脅威の存在に他ならない。
だけど良く考えてみたらそれは人間のエゴだと俺は思う。
何種類かは除くが彼らは欲望のままに相手を傷つけはしないし、必要以上に獲物を獲る為の殺戮も起こしはしない。
彼らは自然のままに生きてきているだけだ……それに比べて人間はどうだ？自分達が住む為だけに樹を伐採したり、邪魔な魔物を駆逐したりなどとやりたい放題だ。

だから、今回だけは俺はこっちの味方をするぜ……
少し頭を冷やしてもらおうか……

Ｓｉｄｅ：とある兵士

「よし、全員止まれ！！これよりこの任務の最終確認を行う」

私は神託の盾騎士団（オラクル）第三師団に所属する者だ。
今回此処に来たのはマルクトより依頼されたライガ達の駆除、そして……ライガ達に育てられたとされる少女の保護である。
なんでも、目撃者が言うに“ライガの群れの中に桃色の髪を持つ女の子がライガに跨っていた”とされている。

ライガは凶暴な魔物だ……人間に懐くなど普通ありえない。

しかし、もし懐いてるとしてもその少女をライガと一緒にさせるなどとそのままにしてはいけない。
我々が保護し、ちゃんと人間らしい生活に戻してやらなければならないと師団長よりの言葉だ。

「今回の任務は集団体制で行う。マルクトの報告より小団体では危険だと証言されている為だ」

陣営を作らずにそのまま一直線に進むようだな……
前後左右からの襲撃の対応はこれでばっちりだろう。

「では、前進！！」

そして、私達は進み始める。
巣はここテオルの森の奥深くに存在するそうだ。
魔物の襲撃に備えていけば辿りつける筈だ……

メキャメキャメキャッ……！！！！！

「「うおぉぉ…！？」」

何が起きた……！！前方の方から悲鳴が聞こえたぞ！？

「わ……罠です！！何故か落とし穴が掘られていました！！」
「な……何！？」

落とし穴……なぜそんな物が……
まさか、例の少女が……

「むっ……何か足に引っかけたような……」

ゴシャアッ……！！！

「「ぶおぉぉあああ……！！！」」

なんと！！次には森の左の方から蔓に巻き付けらるた大木が飛んで来たではないか……！！

お……恐ろしい……何て恐ろしい森なんだ

「う……くっ……作戦変更だ！！どうやら足元に幾重もの罠が仕掛けられている！！一定間隔をとっての陣営を形成してます……」

「グオオォォォ――――――！！！！！」

「で……出たあぁぁ！！ララライガだあぁぁぁ――――――！！！！！」

「た……助けてくれえぇぇぇ――――――！！！」

何と言う事だ……一瞬にして師団が混乱に陥ってしまったではないか……！？

何故だ、何を一体間違ったというんだ……！！

Ｓｉｄｅ：ハイル

「あいつらには一応殺さないようにと伝えてあるから一応心配いらんだろう」

しかし、面白いほどに罠に掛かってくれたなぁ……
この巣を中心に円状にして獣道の所々に罠を掛けといた。
これを突破するには相当骨が折れるぜぇぇ～？

この罠は俺が狩りの時にいかに効率よく捉える事が出来るかと試行錯誤の末に完成した物だ。
材料は殆どが木、石、土でできたエコな物である。
危険を感じた時点でお前らは俺の罠にはまったんだよ……

「だけど、あれじゃあ完全に防ぐ事はできないだろう……」

何十人かが罠を通り抜ける気配を感じ取る……運のいい奴らめ……
……

「頼むぜ……兄弟」
「「ガウッ……！！！」」

今に解らせてやろう……害意を以ってこの森に入った事が間違いであった事を……
……

左手にはランチャー銃、右手に狙撃譜銃、懐に麻酔銃（残り１６発）、腰にナイフ一本。
今の俺の最高装備を以ってお前らを迎えてやろう……
安心しろ……殺しは俺の趣味じゃない……生かすぐらいはしてやる。

バシュッ……！！

「行くぜ！！」

ギュイィィィ――――――――！！！！！！

Ｓｉｄｅ：副師団長

何て言う事だ……百人余りにもいた団員が一気に２０人近くまで減らされてしまった。

この森は何かおかしい……魔物よりも何か別の存在が居る……

検討が付くのが例の少女だが……もしもそうなら天才だぞ！？

たかが４、５歳の少女が作れるようなレベルではない物ばかりだった。

面白い……意地でも邪魔をするというのなら僕も気を抜く訳にはいかない……

何としてでもその少女を僕の“計画”のために引き摺りこみたいものだ……

魔物を使役する能力……手駒としてこれ程素晴らしい物はない。

軍人として育て上げれば半無限の魔物の兵隊が完成する。

ガサガサガサッ……！！！

「……ッ！！！」

師団長は手を上げて≪止まれ≫の合図を送る。

それに連なって付いてきてた兵士達も立ち止まる。

「（魔物か……いや、音からしてそんなに大きくは無さそうだ……）」
「クレド師団長、ご指示を！」
「私が確認してこよう……待機だ」
「ハッ……」

クレドと呼ばれた男は盾を構えて防御に備えたまま音の方へと近づいていく。
いざという時に用心は越した事はない……
そして、草木を掻き分けたその先には……

ガササッ……！！！

「グルッ……♪」
「ぬっ……？」

目の前にはライガの子供がこちらを見ていた。
けどそれだけで変だとは余り思わないが……そのライガの前の足元にあるのが原因だった……
石が山盛りに盛られてる場所があるのだ……それも彼の腰元まで……
視線をもう一度ライガに向けるとある事に気付いた。

「ガウッ……！！」

口に蔓を巻き付けた石を咥えているのだ。
それが確認できるとライガの方は向こう側へと走っていった……
可笑しなことに……その後には蔓が長く引っ張られているのが解る。

ヒュンッ……！！！

限界にまで引っ張られた蔓が石山から外れて勢いよくライガが去った方へと飛んで行った……

ビキビキビキッ……！！！

そして、その次には……

「どうしましたかクレド……」

その次の言葉が紡がれるのは終わらせた。

爆発音のような物が起こったと思ったその次には大量の石が流星群のように彼らの方へと飛んできたからだ。

此処でハイル、限界にしならせた樹の幹と根を使っての広範囲型パチンコを設置させてたのだ。

クレドは大量の石の多くの一部が自分に当たり、地面に倒れて悶絶していた。

その後ろでは鎧に当たったり顔にあたったり足に当たったりと多くの兵士達が犠牲になっていた。

「ぐっ……！？」

これほどまでに巧妙な罠まで作れるというのか！？

素晴らしい……素晴らしいぞ！！

副師団長は少しでも自分に当たる石を防ぐために自身の長剣で防ぎながら歓喜していた。

その笑みには屈辱の文字が見当たらない……

「気を許すな！！動けぬ者はそのまま治癒係の到着を待て！！動ける者は……」

「うっ……」

「イッ……！？」

「ガッ……！？」

ドサドサッ……！！！

「……ッ！？」

何が起こった……！？兵達がひとりでに気絶した……？

……何か刺さっている。

その一人に近づいてみると首元に針が付いた何かが刺さっていた……

ジャキッ……

「其処か……！！」

音に反応して咄嗟に初級譜術を放つ。

しかし、狙いが定まっていなかった為僅かにずれてしまった。

其処に“彼”はいた……

怪しげな木の仮面をかぶり、手には見たこともない武器を携えた男が……

「お前だな！！私の団員をこんな目に合わせたのは！？」

「……」
「沈黙か……それもいいだろう、それ相応の対応をさせてもらおう！！」

副師団長は手に持つ長剣を横薙ぎの構えにして男に近づいて行った。
それに反応し、男は右手に持つ武器を彼に向ける。

「（あれだな……！？先ほどの物の出所は……！？）」
「ハアァァッ……！！！」

パシュッ……！！

ブォンッ……！！

彼は剣の腹を使って風を巻き上げ、男は何かを発射する。
しかし、今回は彼に分があった……
巻き上げた風は肉眼では捉え難い何かの進行方向を強引に曲げ、彼の後ろの彼方へ飛んで行った。

「……ッ！？」
「セァッ……！！」

驚愕している所に彼は剣を袈裟切りに振り下ろす。
だが、男も反応して後ろへとバックステップして何とか紙一重で避ける。
右肩から僅かな血を流しながら再び男は彼と距離を取り……そして互いに対峙し合う。

「（こいつ……侮れない……）」

「（やばいな……いったん巣に戻って態勢を立て直すか……）」

それぞれの思考の中で判断が決まる。

バシュッ……！！！

男の方は左から伸びた紐のような物を伸ばし……

ギュイィィィィ――――――！！！！！！

森の奥底へと消えて行った。

「待て！！」

一先ず追いかけようとしたが、生身の足では到底追いつけそうにないと判断し立ち止まった。

「くっ……！！」

迂闊だった……！！第三者の可能性も考慮するべきだった！！

糞……【あの人】の言うとおりだ！！

“他人まかせにせずに常に自分自身の判断も大事にしろ”

そのとおりだ……僕は与えられた情報だけを頼りに全てを決めた……

その結果がこうなってしまったんだ……！！

「今の内に戦える者だけは態勢を整えるようにしろ！！それからあの男を追う事にする！！」

「それでは、後方の方から応援を呼びましょう……罠から生還できた者達もいるそうですから」

「まかせたぞ……」

二度目は通用しないぞ……僕は負けない……

今は亡き【あの人】の為にも此処で立ち止まる訳にはいかない……

……

父を……母を……故郷を……そして貴方を亡き者にさせた預言（スコア）に

溺れたこの世界に復讐する為にも……！！

「あの若造……見覚えがある気がするんだが……」

運命は……廻り始めるというのか……

第３７話（後書き）

この頃の師団は第一師団長　ラルゴ　団員６０００人　第二師団長　カンタビレ　団員６０００人　第三師団長　クレド　団員６００人という設定です。

第３８話

「ギャウゥゥゥ……！！！」
「もうちょっとだけ我慢してくれ、後二、三個破片を取り除けば終了だ」

巣に戻って来た俺はライガ達の状況を確認した。
死亡３匹、負傷５匹……やはり此方側も無傷とはいかなかったそうだ。
今俺は最後の五匹目のライガの治療を行っている。
剣を刺された際にそれが折れ、破片が傷深くに残っている為だ。
一応麻酔を掛けてやってるが、人間と魔物では使う量が俺にはわからない。
獣医だったのなら別だったんだがな……

よし、掴んだ……

カランッ……！！

ピンセットで摘んだ鋼の破片が受け皿に置かれる音が響く。

「命を司りし女神の抱擁を≪キュア≫！！」

傷口に淡い光が照らされ、見る間に塞がって行った。

「時間が惜しいから縫合までしない方式ですまないな……」
「グルッ……」

気にする事は無い、そう言った気がした。

「しかし、マルクトではなくダアトからの干渉だったか……」

あの国では神託の盾騎士団（オラクル）という二国での解決しきれない事を依頼で派遣される軍隊が存在すると言われている。

まぁ、殆どが預言だとかそんな関係だと言われてるそうだが……

「さ～て、どうするもんかねぇ……」

向こうも粗方復帰した兵の増員により持ち直しているだろう……

幾らか気配が増えてきている。

「あそこまで進まれてると罠は使えないな……」

このまま撃退するのは一時保留しよう……

元より俺達の目的は血を見る事じゃないしな……

「一度だけ、話をするか……」

Ｓｉｄｅ：副師団長

もうこの辺りには罠は設置されてはいないようだな……

けど安心はできない……あの仮面の男はかなりの策士だ

一気に片づけようと行動に入る可能性もある。

「全員気を抜くな!!周囲に警戒を怠らずに前進しろ!!」
「ハッ……!!」

ガサガサガサッ……!!!

……来るか!?

物音の次には何匹ものライガが横に並ぶようにして草木の陰から現れる。
その次には後ろから大きな影が映る……
そう、ライガクイーンまでもこの場に来たのだ……
その左右横にはライガに乗った桃色の髪の少女と仮面をかぶった先ほどの男も現れる。

その光景に周りの兵士達は動揺を隠せずざわめき始める。

「静まれ!!どうやら今の所向こう側には敵意はないらしい……」

その通り、現にライガ達は向こう側で並んで此方を見ているだけであった。
その様子を副師団長は的確に捉えていたのだ。

「お前達はなぜこの森に入って来た?ここはライガ達が住む領域…それ以外のなんでもない。こいつ等は必要最低限にして人間を襲うような真似はしていない筈だ」

仮面の男はそうこちらに問いかけ始める。

「我々が此方に赴いたのはマルクトより依頼されたライガの討伐、そして、そちらの少女の保護活動による物だ。」

副師団長は丁寧にその問いに答える。

「この子……アリエッタを保護するために来ただけなら納得はしたが……ライガ達の討伐は止めてほしい。別にこいつ等自身は人間を直接襲う真似は全くしていない。危険性は低いはずだ」

「なぜお前は魔物の味方をする……」

「別に味方をしてるかそんな事ではないさ……俺は事実を述べているだけさ」

「そう考えてないと言うのなら何故私達軍を攻撃した!?」

「殺気充満させているような輩に話し合いなんて通じないだろうと考えたからだ……第一負傷者だけで死者は出してはいない筈だ……もし最初から殺る気だったならお前達……全滅してるぞ?」

「くっ……!?」

「それに比べて……此方は3匹死んだ……お前らはライガ達の怒りを今買ったという事だ……俺とアリエッタが制止してなければ今頃本当に人里を襲う始末になりかねんぞ?」

「……」

「たくっ……他人の家に土足で入り込んだら当然その家主が激怒すると同じ状況じゃねぇか……」

……確かにその通りだ……意見が通っている。

僕達はライガ達を本気で怒らせてしまった……このままでは近隣や道を通る旅人に被害が回る……

「其処で……勝負しよう……」

「勝負……?」

「双方で代表を選んで戦うんだ……」

「具体的には……?」

「此方が勝てばすぐさま出ていき、二度と此処ライガ達の領域に入

り込まずに依頼されたマルクトには討伐したという嘘の報告をしてもらう事、お前達が勝てば俺とアリエッタを連れていき焼くなり煮るなり好きにすればいいさ……けどライガ達には人間を自分達から襲わないようお願いしているからこいつ等の討伐は今後の状況に任せてくれ。」

代表か……なら……

「私が出よう……」

「なるほど……大将自らが出陣というわけか……」

「私は飽くまで仮だ……師団長は何処かの罠に掛かってテントに運ばれている」

「そうか……じゃあ此方は、俺が出る」

丁度いい……ここでお前を倒す！！

「それじゃあ……行くぞ！！」

男の方から開始の合図が出て彼も長剣を鞘から抜く。

攻撃は向こうから始まった……

「荒れ狂いし濁流よ！≪スプラッシュ≫！！」

Ｓｉｄｅ：ハイル

「荒れ狂いし濁流よ！≪スプラッシュ≫！！」

先ずは小手調べだ……中級譜術で様子を見る。
譜銃は奥の手として取っておきたいから背中に背負ったままにする。

「……ッ！？」

横に飛んで避けたか……だが甘い！！

「我に仇なす者よ、その身に聖印を刻め≪エクレールラルム≫！！」

休ませる訳にはいかないな……？徹底的に追い詰めさせてもらおうか……

しかし、またしても避けられる……
向こうも反撃に出るそうだ……

「舐めるな……！！光龍槍！！」

剣を槍のように構え、一気に突くと同時に剣の先から光の龍が現れた。
それは激しい螺旋の光線となってハイルへと飛んでくる。

「フッ……！！」

下にしゃがんで転がりながら紙一重に避ける。
光線の熱が通り過ぎる感覚が来る。

「歪められし扉よ、開け≪ネガティブゲイト≫！！」

其処を追尾として彼はハイルのいる場所に譜術を詠唱する。
第一音素の力により空間が強烈に圧縮する。
言わばブラックホールもどきである。

「チィッ……！？」

ハイルは前進のバネを使いながら両腕両足で跳ねるようにその場を離脱する。
しかし、彼はそれを読んでいた……

「耐えてみせろ、≪グランドダッシャー≫！！」

ハイルの着地地点で強大な第三音素が暴れ、岩石の波が出現する。
地の上級譜術グランドダッシャーが炸裂した。

「ぐあぁぁぁぁ――――――！！！」

ドゴゴゴゴゴッ……！！！！！！

今度ばかりは避け切れず、命中してしまった。
岩石の波に打ちつけられながら其処に呑まれていく。

「（やったか……！？）」

大抵上級譜術を喰らえば人間など戦闘不能に陥る物だが……
まだハイルは倒れてなどいない……

「降り注げ……」

グランドダッシャーにより発生した土煙から詠唱の声が聞こえ始

める。
それに気づき、距離を取ろうとするが……それではまだ足りなかった……

「光の結晶≪クラスターレイド≫！！」

空中に幾つもの譜陣が出現し、そこから極光を放った透明な岩【結晶】が円形に降り注ぐ。
その結晶は槍状にもなっていた為に降り注いだ一つが彼の右足に突き刺さったのだ。

ドシュッ……！！

「がぁぁ……！！」

足を傷つけた結晶は直ぐに崩壊し、音素へ還って彼には傷跡だけを残した。
いつの間にか向こう側にいるハイルは譜術の跡から姿を現すが……その姿は何処かボロボロだ。
頭からは血を流し、服は所々破けて血が滲み始めている。

「き…効いたぞ……中々やるな……」
「き……貴様の譜術も……流石だ」

両者とも冷や汗をかきながら言葉を紡ぐ。
痛みを我慢して次の行動へと移る準備に掛かる。

「守護方陣！！」
「大地の守りよ、包みこめ≪レストア≫！！」

其々怪我の大きさに合わせた治癒をお互い施す。
ハイルは僅かに残った第二音素のＦＯＦを使ってキュアの派生譜術≪レストア≫を掛ける。
これにより、体に受けた全ての傷を表面上塞ぐ……しかし、筋肉や内臓を打ちつけた時の衝撃による痛みまでは消す事は無い。
そして、それぞれが傷を癒し終わる……

「やはり譜術を使っていては決着は付きにくい……互いの持つ獲物で戦おう」
「そうこなくてはな……古より伝わる私の剣術で貴様を仕留める！！」

ハイルは背中から狙撃譜銃を取り出し、副師団長は長剣を霞返しの構えを取る。
両者ともに集中を高めていき……そして、動き始める。

ドウウゥゥゥンッ……！！！

ハイルは一発相手の利き手に放つ。
この勝負は戦う事が出来なくなった方が負けになる……
ならば先ずは相手の長所から潰した方がいいと考えた。
だが、物事は簡単には行かない……

ガキンッ……！！

彼は剣を立てて上手く譜弾を防御したのだ。
方向を銃口から予測して受けるとは何と言うセンスであろうか。

「まだだ……！！」

ドウウゥゥゥンッ……！！！

ドウウゥゥゥンッ……！！！

ガキンッ……ガキンッ……！！

再び二発を放つが手を少し動かして方向を変えただけでまた防がれる。

物理攻撃が無い譜弾では受けるのにはさほど苦労はしてないに違いない。

凄まじい動体視力だ……

「飛燕……」

気が付くと距離をだいぶ詰められていた。

彼は剣を腰に付け横に構え……

「瞬連斬……！！！」

突進と共に凄まじい薙ぎ払いを放つ。

ガキィッ……！！！

「ぐうぅぅ……！？」

その斬撃を銃身で受け、一撃目は防ぐが……彼の攻撃はまだ終わらなかった……

ハイルの後へ抜けたと同時に薙ぎの遠心力を使って回転蹴りを放ったのだ。

「がはっ……！？」

背中に二度強烈な蹴りが入り、肺から空気が外へ押し出される。
蹴りの衝撃で半回転したハイルに映る次の視界は下からの切り上げされる長剣の姿であった……

「させるか……！！」

ギャギャギャッ……！！！

左手に固定されてるランチャー銃の土台で強引に防ぎ、斬撃を押し戻した。
そして、右足の蹴りを顔に喰らわせようとするがそれは空振りに終わった。

バチッ……ジジジ……！！！

ランチャー銃を破壊されたか……上空移動はもうできない……
先ほどの斬撃により本体を傷つけられたようだ。
第三音素が漏れてショートを起こしている。
痛たた……肋骨にヒビ入るかと思ったぜ……

ピシシッ……

「……むっ？」
「げ……！？」

乾いたひび割れるような音が突如響き始める。
何処からと彼は暫く探してみるとそれはハイルの方から出たよう

だ。

なんと、ハイルの仮面が割れ始めているのだ。

グランドダッシャーの衝撃と先ほどの切り上げが仮面に掠った為に木の仮面が耐えきれなかったのだろう。

縦に亀裂が入り始め……そして、遂には割れて下に落ちる……

パキィィィンッ……！！！！！

「えっ……？」

「くそ、顔が……！！」

ハイルは焦った……自分は一時は指名手配されてた身だ……己についてマルクトに入ったオラクル騎士団の中に知っている者がいたら今までの偽装がばれ、隠れて来た意味がなくなってしまう！！

軍ほど犯罪者について詳しい所はいないのだから……

「……貴方は……まさか！？」

「……チッ！？」

ビンゴ、どうやら知られているようだ……！！

手立てはない……もはやる事はこの勝負を早めに終わらせるしかない。

「くらえ……！！」

ハイルは麻酔銃を連射する……今後の為にとっておく事は考えずに連射する。
弾はまた一つと減っていくが、当たりはしなかった……
撃っても弾いてはまた弾くと言う行動に入ってしまう。

ガチンッ……

くそ、弾が切れた……！？
もう麻酔銃は使えないか……！？
なら、こいつは最後にこう使う！！

ブォンッ……！！

ハイルは麻酔銃を彼に向けて投げる、
かつて、一人の男と最後に戦った時の戦法と同じだ……

「待ってください……！！」

ガキィィンッ……！！！

案の定、麻酔銃を剣で弾いた所を即座に譜銃を向ける。
それにしても……待てだと……？
戦いに待ったなど必要ない！！

そして、引き金を……

「ハイルさん……！！！！！」

ピタッ……

「えっ……？」

俺の……名前を……？

それにその呼び方は……こいつは……

「ハイルさんですよね……？僕です……！！ヴァンです……！！」

「なっ……！？」

ヴァン……なのか……

栗色の髪、青い瞳……

間違いない……あいつだ……

「生きててたんですね……！！マルクトによって処刑されたと聞かされたのですが……」

何……？俺は魔物に襲われたんじゃなくて処刑された事になっているのか……？

はぁ……そういうことか……

たかが犯罪者一人軍隊を使っても捕まえられなかったなんて事知られれば名折れだからなぁ……

「五年ぶりか……お前も１７か……」

「そう言う貴方は……お変わりない姿で……」

「……勝負はお預けだ……話し合いで……いいか？」

「もちろんです……」

かくして、鍵達はここで再会する……

第３９話（前書き）

すみません、今回は色々とふざけます！！

第３９話

「……」
「……」
「どうした、楽にしてもいいぞ？」
「いえ……あの、ハイルさん……」
「何だ……？」
「こんな場所であなた以外に楽にできる人が入れば勇者と言いたいです……」

それもそうだ……ここはライガクイーンの巣なのだ。
前方にライガクイーンが佇み、左右にはライガ達が並んで座り、後方にはもう何匹か覗き込んでいるという常人ならば恐怖以外何でもない様子になっている。
唯一の癒しはハイルの傍で子ライガ達と戯れているアリエッタであろう。

「あぁ、こいつら今腹は減ってないから襲うなんて真似はしないさ……たぶん……」
「たぶん……！？たぶんって何……！？」
「気にするな……」
「気にしますよ……！！」

今この巣にいるのはライガ達、ハイル、アリエッタ、ヴァンである。
ヴァンが率いていた兵士達は外で待機中だが……彼らも落ち付いてられないだろうな……

「さて、本題に入ろう……ヴァン、先にも言った通り……こいつ等

の事は見逃してくれないか……」
「……それは、難しい事になります……」
「マルクトからの依頼による為か……其処が問題か……」

このライガ討伐はマルクトの意思による物……偽装報告はばれた場合国際問題にまで発展するほど厄介な代物だ。

「そういえば、アリエッタはどちらの保護対象なんだ？」
「マルクト領地での孤児は大抵としてマルクトの孤児院に迎え入れられるのですが……この少女は特別です。」
「……魔物に育てられたこの子が人間生活を受け入れるのにはかなりの時間が必要……だろ？」

難しいな……俺としては無理やりにしたくは無いが……

「ですから……我々ダアトが責任を持って保護する事にします。」
「ダアトか……その理由は……？」
「考えてみてください……この子は少なからず魔物と通じる能力を持っています……そこにマルクトの軍部が眼を付けたら……？」
「……孤児院から忽ち軍隊行きだな……」
「そういうことです……ですが、我々ダアトは中立国家です。立場としては戦場に赴くような状況は全くないでしょう。」
「ふむ……」

たしかに……危険な目には会う事はないな……

「ちょっと時間をくれ……」

そうヴァンに告げてハイルはアリエッタの方へと向かう。
そして、手振り素振りをしながら話す。

この子はまだ言葉は解らないが……形で表した物で解る方にはなってくれた。

「（此処、皆、危険、アリエッタ、彼ら、ついていく、皆、無事）」

「いあぁぁ……！！！」

しかし、アリエッタは首を振って拒絶の意を示した。

流石にそうだろう……今まで住んできた場所と家族と離れるなんてこの子には耐えれない。

そのままアリエッタはライガクイーンの方へ駆け寄って毛皮にしがみ付きながら此方を見る

「この子にはどうやら此処を離れる意思は見られないな……」

「……ハイルさん、そう言えば貴方の方はどうなさるんですか？」

「んっ……？」

「このまま森で隠居生活をしていても限界は来るでしょう……軍は不確定な要素ほど見逃さない所が大きい。」

「つまり……逃げ切れる可能性は低いって訳か？」

「はい……」

そこは前から悩んでいる所でもあるんだがなぁ……本当にどうするか……

「そこで……提案があります……」

「……聞いてみよう」

「ダアトに亡命なさってください……」

「亡命……！？」
「貴方の罪の真相については秘密裏に聞いています。私はあなたが間違った事をしたとは考えていませんから」
「同情はいらないぞ……？」
「いいえ、本心です……」
「ハッ……ダアト関係の奴らに嫌われた俺がダアトに亡命だなんてとんだお笑い草だ」
「ユリアシティの件は今は水に流して……どうでしょうか……」
「……」

亡命をすれば確かに追われる事は無くなる……
だけど、マルクトの地を二度と踏めなくなってしまう。
シュウ先生、ゼノン、クロード、それにベルケンドの皆にもう会えなくなってしまうと言う事だ。
代償は大きい……
だが、アリエッタの為にどちらかを選ばなければならない……

「もう少し待ってくれ……」
「え……あ、はい……」

もう一度アリエッタに簡単にして主旨を伝える。
このままライガクイーン達と共に暮らしても大丈夫なようにできるだけ処置を施して生活していくか……
自分と着いてきてライガ達の安全を確保するためにに向こうで暮らして行くか……
アリエッタは悩むように唸り声のような声を上げる。

「アリエッタ、お前自身の意思に俺は強制はしない……決めてくれ」
「うぅぅ……」

今だ悩み続ける……しかし、その後でライガクイーンが動き始めた。
何をする気かと思って見てみると……アリエッタの体を鼻先で押すようにしていた。

「グルル……」
「へあぁ……？」
「～～～～～！？」
「～～～～～！？」

魔物としての話し方で何やら言い争っているように見える。
ライガクイーンの方は静かな感じで鳴いてる様にしているが……
アリエッタの方は駄々をこねるような声を出している。

「ガルルルル……！！！」
「ぁ……ぅ……」

どうやら終わったようだ……最後にライガクイーンが激しく吠えた。
いったい何を話したのだろうか……？
そう考えているとアリエッタがハイルの方へと向かってくる。

「……」

念のため……確認しておこう……

「（一緒、来る？）」
「……コクッ」

なるほど、さっきの話はライガクイーンにアリエッタを通して話

し合ったのか……

察するにライガクイーンは着いて行った方がいいと結論を出したのかもしれない。

……人間であるこの子はやはり人間として生きるべきと考えたのか……？

魔物の子が親離れする時期は親が決めるそうだ……

親はわざと子に冷たくして住んでいた巣に近づけさせないようにして子が自分の寝床を作らせるように仕向けると聞いた事がある。

だが、人間は魔物と違って成長は遅い……

ライガクイーンはそれに気付き、自分達のリズムではこの子を生かせれないと考えたのかもしれない。

「「ギャゥ……！！」」

ん、子ライガが何匹か近づいてきたぞ……

ライガクイーンに再び視線を向けるとそれは当然の事だと言ってる様な顔をしている。

なるほど、こいつ等も連れて行けと言う訳か……自分達を忘れない為に……

「……という訳だ、よろしく頼むな……？」

「いや何話してたのか全然わかりませんから……！！！」

「理解力が足りんぞヴァン二郎よ……！！」

「その範疇超えてます……ってヴァン二郎て一体何なんですか……！！！」

「冗談だ……」

「はぁ……なんか疲れました……」

「結論として俺とアリエッタはダアトに行く事になる……ライガを

数匹連れてな……」
「ライガもですか……？」
「あぁ……けど子供だから目立つようなヘマは起こさないから安心しろ」
「う～ん……なんとか、船に乗り込ませれる事はできます……」
「迷惑を掛けるな……ヴァン……」
「いえ、これは僕にとって僅かな恩返しでしかありませんから……」
「僅かだなんて……俺にとっては十分だ……ありがとう」
「はい……」

その後、俺達はライガの巣から出発していった……
ライガ達は最終的に何匹か遠くに分散して数を誤魔化してもらうように話を付けた。
途中兄弟達がヴァンの率いる兵士達を含めて拠点の手前まで乗せて行ってくれた。
あの送り迎えは嬉しかったなぁ……
軍とともに姿をオラクル兵に変装してグランコクマに入り、無事にグランコクマ港にある定期船に乗り込む事が出来た。

そして、出港する……
久しぶりに見た海は何処までも青く感じる気がした……

「船に乗るなんて初めてだろ……？」
「ぎゅぅぅぅ……♪」
「「ガウッ……！！」」

アリエッタは船に伝わる揺れが面白いのか転がってる……

あ～あ～……そんなにしたら汚れるって……
というか、もう二週間ほどちゃんと風呂入っていなかったんだよな……俺って……
一応河で水で濡らした布で拭いてたりはしてたが……完全とはいかない。
……久々に風呂はいるか……こいつ等にもお湯という物に触れさせておくか……

≪２０分後……≫

「ちょっ……暴れるなアリエッタ！！其処のライガ……！！排水溝はトイレじゃない……！！！」
「いあぁぁぁぁ……！！！！！」
「ウウゥゥゥ……！！！」

見事なカオスが形成されていた……
唯子供を風呂に入らせるのがこんなにも大変だったなんて……
前世と現世のお父さん、お母さん……幼い頃の自分が苦労を掛けました……

「がぅ……！！！」

感傷に浸っている所に体を持ち上げていた途中のアリエッタがさらに暴れる。
その影響は……彼に大ダメージを与える事となった……

キィィィィィンッ……！！！！！

「Ｆｕｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏ――――――――――！！！！！」

タマゲリーブルースである……

見事アリエッタの足がハイルの急所を的確に蹴り当てた。

その痛みにハイルは手からアリエッタを落とし、その場に震えながら蹲る。

「うきゅうぅぅぅ……♪」

「「ガゥ……♪」」

やっとハイルの拘束を抜け出せたのが嬉しかったのかアリエッタは手を叩きながら笑っていた。

それにつられて子ライガ達も何やら楽しそうにする。

「……」

スッ……

ハイルは暫くしてようやく立ち上がる……

しかし、先ほどとは違った雰囲気を纏いながら……

「「ビクッ……！！！」」

それに気付いたアリエッタ達は後ずさる。
その行動を余所にハイルは手にシャワーと体を洗うタオルを取る。

「アリエッタ……てめぇは俺を怒らせた……」
「ぁ……ぁ……いあぁぁぁぁぁ……！！！！！」
「ギャウゥゥゥゥ……！！！！！」

その後、彼らはきっちり隅々までと洗われましたとさ……♪

「フハハハハ……！！！ワッシャワッシャにしてやんよ～～♪」

もちろん、彼の方はノリノリであったが……

第３９話（後書き）

タマゲリーブルース……（アニメ浦安鉄筋家族より……）

詳しく知りたい方は検索で……

第４０話

「う～～～……」
「ウゥゥゥ……」
「すまん、調子に乗りました……機嫌直してください皆さん……」

お風呂での暴走の件により不機嫌気味なアリエッタと子ライガ達にハイルは土下座をしていた。
全員支給された服をきて髪も毛もすっかりと綺麗になっている。
俺は黒いシャツと茶色いズボンでアリエッタは白いワンピースへと着替えている。

キィッ……！！

「そろそろダアトに到着しますのでご準備……を……？」
「……」

偶々入って来た兵士はその光景を見てなんともいえない気持ちになった。
子供に土下座をする大人なんて……始めて見たからだ……

「……みたな……？」
「……へ？」

ヒュカカカカカッ……！！！

「ぎゃあぁぁぁぁ……！！！！！」

ハイル、反射的にその兵士を何本ものメスを投げて壁に繋ぎ止めるという荒業を実行する。
見事な人型でメスの造形が形成する。

「言うなよ……喋ったら……解剖（バラ）すぞ……！？」
「ひ……ひいぃぃぃ――――――！！！！！」

先ほどの事実を闇に葬り去る為に徹底的に脅す。
その凄まじい表情で兵士はガタガタと体を震え上がらせる。

「あの、何やってるんですか……ハイルさん……？」
「……んっ？ヴァンか……？」

そこに兵士にとって救いの手が訪れてくれた。

「君、持ち場に戻りなさい……」
「よ……よろこんでぇぇぇ――――――！！！！！」

ドタドタドタドタッ……！！！！！

「何をしたんですか……ハイルさん」
「すまん、何も言うな……」
「ハァ……」

これ以上は聞いても無駄な気がしたのでヴァンはその点については終了する事にした。

「先ほどもお伝えされてると思いますが、ダアト港に入港するのでご準備をお願いします」
「解った、素早くやるさ……」

「ここが……」
「あちらがダアトになります……」

傍にいた兵士の一人からそう説明を受ける
正に宗教都市だな……遠くから見てもローレライ教団の人達が大勢いるのが解る。

大きな石碑の建っている丘から、巨大な尖塔のある教会を中央にした都市が見えた。
嘗て通ったダアト港までの道を通ってさらに進み、ようやくここまでたどり着いた。

「このパダミヤ大陸には教団の教えについて書かれた石碑が三十三あります。それを第三十三石碑から順番に巡るのが巡礼。ですが、全てを巡るのは大変なので、五大石碑だけを巡る初心者用の巡礼も人気なんですよ?」
「巡礼か……」
「ちなみに、この丘にあるのが第四石碑です。」

兵士が言うように、目の前には自分より二倍以上はあろう大きい石碑がある。
内容は言った通りにローレライ教団の教えが古代イスパニア語で

書かれている。

「ダアトまで後少しです……もう少しの辛抱を……」

「一応聞きたいんだが、何で俺相手にそんな畏まった態度してるんだ？」

「ヴァン副師団長から失礼のないようにとのことですので」

余計だぞ……ヴァン……身内贔屓は程々にしといた方がいいと言っといた方がいいかもな。

でも、あの若さで副師団長に就くとは大した物だといえる。

そのまま俺達は丘から繋がる坂道を下っていく。

ダアトはもう直前だ。

「……なんだかやたら人が多いな。」

ようやく街の門を潜り、石碑を中心にして商店や宿屋の並ぶ通りに至る。

しかし、良く見てみると商店は多くは無い……

たしかダアトは農業も工業も行ってなかったが……

「聞いていいか……？」

「なんでしょうか……？」
「ここに住んでいる人間は一体どうやって生計を立てているんだ？」
「ダアトでは教団に属する者達は主に信者からの寄付金が財源となっており、生活費は教団から支給されます。また、一般的な市民は自給自足で暮らしているんです。」
「そんなんで本当に生活出来てるのか……？」
「もちろん、商店を持つ事を禁じてる訳ではありませんが……暮らしてる者達は必然性を感じてはいないんですよ。ここ第一自治区にある宿屋も特別に許可されたケセドニアの者達です。」

つまり、宗教都市ダアトに集まる人々は、預言（スコア）に従って穏やかな生活を送ることこそを望んでいるのだろう。
預言を守るために見殺しにされた人々がいることなど、想像すらすることなく……

「……ある意味封鎖空間だな……」
「……何か？」
「いや、なんでもない……」

気が付くと教会の内部へと入り進んでいた。
軍は今でもなお進行を進める。
ハイル達もその中にいるが、暫くすると横からまた他の兵士がやってくる。

「失礼、貴方方はこちらへ……此処より我々が向かう先は神託の盾（オラクル）騎士団の関係者のみしか進めませんので……」
「そうなのか……？」

彼らが言うに、入口からすぐ横にあったこの扉に繋がる地下が神託の盾（オラクル）騎士団本部へと繋がる道の事だ。

関係者でも何でもない俺達はまだ進む事のできない領域という事だな……

「教団の待合室に案内します……ついてきてください」

「……失礼する……アリエッタ……こっちに来てくれ」

一人の兵士の後に俺達はついていく。

その途中でアリエッタと手を繋いでいるのは……ご愛敬と考えてくれ……

長く続く廊下を歩いていると他の教団員と違った服装をする者が前からやってくる。

「これは……！！詠士モース……！！」

詠士……導師、大詠士に次ぐ権威の者だ。

詠師の席は六つあり、テオドーロもその一人だ。

「どうしたというのだ……？其処にいる二人は……？」

「ハッ……！！それは……」

それから兵士は説明をする……俺達について……

「なるほど……片方の少女は件の預言に詠まれし者なのですか……」

「預言に詠まれし者……」

アリエッタが預言に詠まれてた……ここに来る事を予言されていたと言うのか？

「“魔物を従えし幼き者はここダアトの者達の導きにより来るであ

ろう”その通りになりましたな……めでたいことです」

……この言葉で解った……この男、テオドーロと同じタイプだ……

預言の通りに叶えれさえすれば【現在(いま)】の幸せを平気に壊す様な男だろうな。

「して、そちらの者は……ダアトへの亡命者とか……」

「……私は祖国にとって必要のない人間とされた者です……未練はありません……」

「ふむ、難民をも受け入れるダアトにとってそのような事は珍しい事ではありません……ローレライの導きのままにこの地で生きていく事です」

そして、詠士モースはその場から立ち去って行った。

あの男の目を見て考えてみた……ここの上層部は預言主義で塗り固められてるかもしれない。

ちゃんとした判断には期待できそうにないな……

「では、行きましょう」

「あ……」

しばらくした所に兵士が進む事を催す。

それに従い俺達はついていくことにした。

その後、待合室についた俺達はヴァンを待つ事にしていた。

俺としてはジッとしているのに何の問題は無かったんだが……

ゴトンッ……！！！

「うぃあぁぁぁぁ……♪」
「ガウッ……！！」

ジッとしていられなかったのかテーブルの下で子ライガ達とアリエッタが追いかけっこしていた。
楽しそうにしている所悪いが……さすがにモラルを考えさせないといけないよこれは……
少し厳しめに接するか……

「コラッ……！！いい加減其処から出てこいアリエッタ……！！！」
「あぃあぃあ――――――！！！！！」
「グル……」

子ライガ達は俺の言葉に反応して少し大人しくなったが……アリエッタは相変わらず暴れまくる。
そればかりか俺から逃げようと反対側の方へと四つん這いになって這っていく。

「だからやめなさいって……！！」

少々困った顔をしながらハイルはテーブルに沿って下を覗くようにしてアリエッタを追いかける。
しかし、体が大きいハイルの方はうまく動きが取れず、さらに奥へとアリエッタを逃して行く……

「このっ……！！」

ガシッ……！！

「いあぁぁぁぁ……！！！」

ようやく服の一部を掴んで動きを抑えさせた。
だが、それに対抗してアリエッタはジタバタと大きく揺れてそれから再び逃れようとする。

「静かにしろって……！！」
「うぅぅ……！！！！！」

ゴンッ……！！！！！

「あっ……」

ハイルは一瞬間の抜けた声を出した。
何故かと言うと……

「……ぴゃ」

アリエッタが勢い余って頭をテーブルの裏に思いっきりぶつけたからである……

「ぴゃあああぁぁぁぁぁ――――――――――――――！！！！！」
「あぁ……！！言わんこっちゃない……！！」

それはもう、盛大に泣きだしましたよ……
ここにライガクイーンが居なかったのが救いでしたねぇ……
もしそうなら今頃骨付き肉ですよ……

後の体験談をH氏はそう語る……

「あ～よしよし……！！痛いの痛いの飛んで行け～？」

「えぐっ……グスッ……」

本格的に泣いた子供は止めるのに苦労する事は結構知っていたが、一応としてマイナーな慰め方でぶつけた頭の所をさすってやった。

何処からどう見てもパパさんやっています……どうもありがとうございました。

ガチャッ……

「お待たせしましたハイルさん……さっそく……」

「あっ……ヴァン手伝ってくれ……！！」

「え……えぇ……！？」

何故か都合のいい所でヴァンを子守りに引き摺りこめた……

実はヴァン、赤子から面倒を見ている妹が居る為結構こういう事には手慣れていたりとか……

そして今、ヴァンの助けもあってかアリエッタも落ち付き、泣き疲れてソファーに横たわって眠っていた。

その傍には子ライガ達が寄り添っていて幸せそうな顔だ。

「はぁ……なんかドッと疲れた」

「お互い苦労しますね……」

「「はあぁぁぁぁ……」」

深いため息が双方から吐かれる。

想像以上に疲れたらしい……

「では、本題に入ります……ハイルさん……」

そして、これが後にダアトの住人に敬愛され……

「軍医としてここで働いてみませんか……？」

神託の盾（オラクル）騎士団に畏怖される……

白衣の悪魔の誕生であった……

第４０話（後書き）

アリエッタかわいいよ……アリエッタ……（笑）

やっぱいいですね～♪

第４１話（前書き）

今回はちょっとぼのぼの（？）です。

第４１話

Ｓｉｄｅ：とある兵士

俺は神託の盾騎士団（オラクル）に所属する兵士の一人だ。
名前は伏せさせてもらうぜ？
さて、この頃ダアトで起きた事と言えば……

第一自治区で強盗が現れた……しかし、その１０分後に謎の音と共に制圧可能となる。
貧困街で病人が少なくなってきている。
教団にいた何名かが何者かの襲撃により素っ裸で氷漬けにされていた。

最後のはなんか気になるが……そういやその人達がどこかの子供を苛めてたって噂があったっけ……
まさかそれが原因か……恐ろしいぜ……

そして、一番のニュースが新しく治癒係に凄腕の治癒譜術士が入ったと言う事だな。
第三師団の副師団長の推薦で入ったらしいけどその期待に答えるかのように評判を上げている。
てっきりコネで入ったのかと思ったけど治癒係に相応しい働きをしているそうだ。

けど、その男についてなんか怪しい噂が流れているんだとよ。

いわく……

彼に治療される事は人間としての何かを失いかけない。
勝手に彼の研究室に入ったら死にかけた。
ヴァン副師団長とイケない関係……！？

そういや……最後の噂してた女性の騎士団員、しばらく人前に見せられない顔にされたと報告が……
いやいやいや、俺は何も聞かなかった……！！そうだ、何も聞いてねぇ……！！！！！
何事もマイナス方面に考えない方が良いな、うん……！！

さて、そんなこんなで俺にとある問題が……
風邪引いてるんだよ……

そんな訳で軍医として、治癒係として入隊したハーミット医師の診察室へ向かっていく。
こんな事聞いた後で行くなんて……なんか、乗り気がしねぇ……
……

Ｓｉｄｅ：ハイル（ハーミット）

コンコンッ……！！！

「はい、入ってください」

数日で久々に医者をやったという実感が取り戻せたよ。
疼いて仕方が無かったし……吹っ切れて良かったわ……

俺はここダアトで住み込みで軍医として働く事になった。
アリエッタもここの託児所兼孤児預かりの場で俺が終わるまで面倒を見てもらっている。
けど、魔物に育てられたという事で近寄りがたい雰囲気になってたが……其処は時間でどうにかしてもらうしかない。
けどそれで苛めてた奴を見かけたからブリジットコフィンを喰らわせてスッパにして放置してやったが……（↑お前か！！）
ちなみに、ダアトへ亡命するに向けて俺は偽名を名乗る事にした。
ハーミット……英語でＨｅｒｍｉｔ（隠者、無滞者）と意味する言葉を選ぶ。
留まらず移動し続ける俺に当てはまった皮肉な名前だ……

さて、次の患者は誰だ……？

「失礼します……」
「え～、今日はどうかしましたか？」
「頭がフラフラしてて、体がだるいんです……熱もあって……風邪でしょうか……」
「そうですねぇ……口開けてください……」
「（口を開ける……？）ア――――」

カチャッ……

ハーミットは咽頭の様子を調べる為専用の器具を使って舌を押し付ける。

「ほがっ……！？」
「喉の腫れを見てるので少し静かにしてくださいね？」

おっと、元からの癖でそのままやってしまった。
こんなの使う所なんて見たことないからな……この世界の人達は。

「見事に腫れてますね……じゃあ次は上着を脱いでください」
「うぇっ……!?」

ぬ……脱ぐ……!!
いったい何を……!!もしや、この人ホ……!!!

「其処から先を考えるのは禁止です……心音と呼吸を調べるだけですから……」
「はっ……!?」

考えを読みとっただと……!!
この人一体何者……!?
……とにかく、そうじゃないのなら別にいいか……

それから、ハーミットは聴診器を使って異常がないかを調べ……
殆どが終わらせれた。

「ちゃんとした休養を取らない為に免疫が落ちた事による風邪ですね……遠征で眠らない事が多かったとか……？」
「あ……一週間前に行きました……」
「余り油の多い食事は控えて出来るだけ柔らかい食事を取りながら温めて療養してください……寝る時は時折水分を多めに取っておく事……薬はあまり使わないで自然治癒力でいきましょう。」
「先生……実は二日後どうしても外せない任務があるんですよ……無理言っちゃなんですが……直ぐに効く薬くれませんか？」

ピタッ……

ハーミットはカルテを記入する手を止める。

「……あまりお勧めしませんよ？」

「それでもいいです……お願いします。」

あれか……やる方もやられる方も良い気にはなれないんだが……

……

しかたないか……

そして、ハーミットは診察室の奥にある部屋へと入っていく。

「（何かな……すごく苦い薬とか……）」

ガチャッ……

「さぁ……始めようか……」

「……」

出て来た瞬間彼は顔を青ざめた。

なぜなら、さきほどの白衣の男が見事に変わっていたからだ。

頭には髪を全体に覆うキャップ帽、防止用ゴーグル、マスク、無駄に長い白い防護服……・・

最初から最後まで何もかが変わっていた……

「いやいやいや、先生なんですかその姿は……！！」

「今回使う薬は特別でね……重装備にさせてもらう」

「特別って……一体どんな薬を……！！！」

「これだ。」

ハーミットが右手に持っていたその薬とは……

Ｉｔ'ｓ　ａ　ＺＡ☆ＹＡ☆ＫＵ！

風邪の秘薬、究極兵器とも言われる禁断の代物であった。

「あ……あの、それを飲めばいいんですか……？」
「いや、これは飲む薬じゃないんだ………」
「じゃあ、どう使うんですか……？」
「≪バキュウゥゥゥン！！！≫して≪ズガガガガ！！！≫やって使う薬だ……」
「………や……やっぱやめます………！！！」
「一度決めたからには責任持ってちゃんと使いなさい。効果は俺のお墨付きだから。」

ガシッ……！！！

「いやあぁぁぁぁぁらめえぇぇぇぇズボンを脱がさないでぇぇぇぇぇ－－－－－－！！！！」

そして、診察室では甲高い男の悲鳴が響くのであった………

「アッ－－－－－－－－－－－－－－－－－－！！！！！」

今日もハーミットの診察室は好調（？）なのであった……

≪２０分後……≫

「うおおぉぉぉぉ……！！！」
「おだいじに～？」

バタンッ……！！！

男泣きをしながら彼は勢いよく診察室から去って行った。
さすがにアレをやっちゃ男の尊厳もヘッタくれもないもんな……
……
一応言うが、こういうのは本当に偶々だからな？
軍人は迅速な復帰をしなければ立場上危なくなるからな……そのためだ。
何時もは普通の診察と治療で終わらせるぞ俺は……？

まぁ、注射やアレはまだオールドラントでは始まってない医療法だからな……
初めての奴がああいう反応するのは仕方ないとしようか（↑酷！！）
けど、ああいう事になって病気になりたくないと思うようになる人も多くなるからそれはそれでいいんだよなぁ……
治癒係の他の医師達も患者が減ったと報告が来ているし……でも、唯行きたくなくて病気を隠したままにするという事になるのも問題だからなぁ……
今度人間ドッグという物を月に二回導入してみるか……

「さて、そろそろ勤務時間も終了するからアリエッタ迎えにいくか……」

この教会の孤児達の所に預かってもらってるからな……

俺がいなくても無事にやってればいいが……

「んで、心配した結果がこれですか……」

「すみません、本当にすみません！！！」

今俺は目の前にいる孤児達の世話係をしている女性から謝罪の嵐を受けている。

俺がアリエッタに向かって“気持ち悪い子”とか言ってワザと無視をしたりした他の世話係に≪×××≫の≪パオォォォンッ！！≫な目に合わせたのを聞いたからかね……

別に俺は過剰に心配するような事はしないが……人間として許せない事をする奴には別だ。

此処の人にはそれを解って欲しかったんだが……ちと不可能かもしれん。

「あ～そんなに謝らなくてもいいですよ……子ライガまでも特別にここに連れて来させてもらってる立場ですし……」

「……やっぱり、アリエッタちゃんには難しいんでしょうか？」

「あの子は同年代の子供と交流を持った事がないからな……どうすればいいかわからないんでしょうね。」

「あの、言ってる言葉もお互い解らないようですし。」

まだ早かったかな……こういう問題ってのはやっぱり難しい……

……

アリエッタはどうやら旨く孤児達と溶け込めてないそうだ。

しかも世話係の人もどう対応すればいいか困ってる。

人見知りが強いのか……

「それで、アリエッタはどこへ……？」

「部屋の隅で……ライガ達と戯れてます。」

「そうですか……」

こういうのは本当に時間に任せるしかないんだ……

根気強く見守るしかないよな……

そして、アリエッタと共に割り当てられた自分達の部屋に戻る。

一応ベッドは二つあるが……今だ別れて寝たがらない。

それは嬉しいんやらどうするんやらと迷う事だがな……

「あぁ……疲れた……」

もう外は暗く……教会の窓から街の明かりがチラチラと見えてくる。

基本夜更かしはする方だが、これまでの野生生活で体内のリズムが最近狂ってる。

早い時間で眠気が襲ってくる事が何度もある。

そして、俺はベッドに潜り込み、久しぶりに長い眠りを取る事にする。

落ち葉や枯れ草の上で寝てたのと違って心地よい。

ゴソゴソッ……

やれやれ、また潜って来たのか……

甘えるのも子供の内だからな……まぁ許す。

お休み、アリエッタ……

こうして、彼らはダアトでの日々をまた一日と過ごして行く……

「う～ん……う～ん……いでで……！？」

「グルルッ……（バリバリ……！！）」

「ガルゥッ……（ガリガリ……！！）」

「すぴゃあぁぁ……」

その次の日ではハーミットの両足を寝ぼけて餌と思って噛みつく子ライガ達とそれによりうなされるハーミット、その横で幸せそうに眠り続けるアリエッタの姿がベッドにあったとか……

第４１話（後書き）

今後の設定としてハイルはハーミットと名乗る事になります。

ハイル＝ハーミットですのであしからず……

第４２話

「はいお疲れ様、今日の訓練はここまでです。」
「「ありがとうございました……！！！」」

あー疲れた……
えっ……今何をしてるのかって……？
見ての通り訓練だ……軍の治癒士（ヒーラー）も戦いを専門としなくても補助をするための演習とか色々あるものでな……
俺はその中で軍医兼指導員をやらせてもらっている。
第七音素（セブンスフォニム）の使い手は貴重な存在とされ、軍になくてはならない。

そのために若い衆には徹底的に覚えさせ、少しでも早く任務に就かせる事が重要視されている。
俺は使い手としては熟年扱いになるほど能力が高い方だから新人育成に回されている。
音素（フォニム）の取り組み方、譜術としての練り方……様々な事を教えている。

「今日は時間余ったな……何処かで時間つぶししてるか。」

まだアリエッタを迎えに行く時間には早すぎる。
食堂でなにか摘んでいくか……

オラクル用の食堂は結構広いそうだ……何か話を聞ける事ができるかもしれないしな。

色々と考えを走らせながらハーミットは歩を進める。
その先はオラクル専用の食堂だ……

Ｓｉｄｅ：？？？

「もうお前が無くなって８年にもなるんだな……シルヴィア……」

俺は手に“あの日”の記念として作った筈であった今は亡き妻の形見であるロケットを乗せてそう呟く。

それに詰まっているのは喜びではなく悲しみ……奪われた娘による己の後悔……

「メリル……」

今だあの子の姿どころか声も見る事も聞く事のできない娘の名をポツリと呟く。

そして、その次には大きな溜息を吐きだし……黙想に入る。

“あの日”……俺は砂漠越えのキャラバン隊の護衛を何時もより早く終えてバチカルに帰宅したところだった。

数日前に生まれた自身の娘の姿を一秒でも早く見ようと興奮してたせいでもあったな……そうしたのは……

だが、帰ってくると……シルヴィアも赤ん坊もいなかった。

其処にあるのは不気味に射し込む赤い夕陽の光のみ……

嫌な予感がしたよ……その時は……

それに反応して俺は家から飛び出し、シルヴィアと赤ん坊を必死

で探した。
だが、何処をどう探しても二人は見つからなかった……

義母に問い詰めても知らない通す一方……それに怪しいと思った俺はしつこく探った。
ようやく聞けた言葉は……【預言が……】だけでその後、義母は何時も通り乳母としてバチカルの城へ登城していった為にこれ以上聞く事が出来なくなった……
俺の焦りと不安は大きくなる一方、そのまま夜は明ける。

次の日の朝、家のベッドで寝ていた俺は窓から聞こえる騒がしい声で目が覚めた。
不思議に思って窓を開けて見てみると集団で集まっている人達が目の前に広がった。
すぐさま服を着替えて俺は其処の一人に何があったのか?と尋ねてみた。
その男は【港に女の水死体が上がったそうだ……】と答えてくれた。

女の水死体……その言葉に俺は更なる悪い予感が浮かんだ……違ってほしい……そう考えながら集団を押しのけて強引に港へと進んで行った。
そして、港にたどり着くと其処には麻布を被せられた死体が横たわっていた。
傍にいた兵士の静止の言葉を聞かずに俺は麻布の上の部分を静かに捲った……

悪い予感は当たってしまった……
その女性の体は青白く冷たくなり……唇は真っ青で……眼は酷く

錯乱した跡がくっきりと残る……

綺麗だねと褒めた筈の……彼女の金髪は海水でボロボロとなった……

最愛の妻……シルヴィアの変わり果てた姿がそこにあった……

俺は、この出来事を信じたくなかった……だけど、いくら叫んでも妻はもう喋らない……

死んだという……事実だけが其処にあった……

その後、帰って来た義母を今度は逃がさぬように暴力を振るう覚悟で問い詰めた……

その結果、義母は話した……

【預言が……貴方達の娘はキムラスカの王女になるべくして生まれたから……死産となったナタリア王女の代わりとなるべくとして……】

義母は言うに、メリルは義母が預言士（スコアラー）に詠まれた通りに今ナタリアとして生きる事となった……こうなる事は起こるべくして起きた……だから、わかってほしい……

何が解って欲しいと思ったよ……

俺は義母の静止の声を気にも留めずに武装し、何もかも関係なくバチカルの城に乗り込もうとしたさ。

目の前に立ちふさがる兵士達は己の獲物である大鎌で払いのけ、ついに上層部まで着いた時だった……

頭に血が上っていたのだろう……俺は誤って鎌を一人の兵士の首に突き刺してしまった。

鮮血が飛び散り、その兵士は一分も経たない内に絶命した……

その光景にようやく熱が冷め、俺はその場に座り込んだ。

当然、その行動を逃す訳なく兵士達は俺を取り押さえ、拘束した。

数日後、俺は城の牢屋の中で死人のように座っていた……

娘を取り返す事も出来ず、この国の人間を殺した俺に待っているのは唯死のみであろうと何度も考えていた……

だが、死神は俺の命など刈り取るに値しないとでも宣言されたに等しい処分が下された。

バチカル追放……

何の冗談かと思ったよ……この処分について抗議をした所、こう返って来た。

【お前の今度の行動は預言に詠まれていたのだ。王家の血を絶やさぬ為に必要な預言の一つとして……陛下はそこに目を付けられ、お前の罪を軽減しなさったのだ。陛下の慈悲深い御心に感謝するのだな……この事は全て忘れ、お前は他の道を探すが良い。】

預言……最初から最後までこの言葉が着き回っていた。

俺はその時、拳を握りしめて滴り落ちる血が地面を濡らしていた。

心の中で渦巻く憎悪が吹き出す先を求めて荒れ狂っていた。

俺たちが何をした!?

俺は世界を呪った……家族と引き離されることに耐えられなかった、心の弱さが悪いというのか？

そんなバカな！　家族を愛するな、忘れろなどと、どうして言えようか？　間違っているのは俺たちではなく、この世界そのものだ！

預言を信仰することは、その先に続く未来に希望があると信じればこそだ。

祈りを捧げる先に救いがもたらされると信じるからこそ、誰もが預言に詠まれた未来を受け止めるのだ。

だが、あの時の俺はどうだった？

預言に詠まれるまま我が子を引き離された結果として、妻の心は衰え、崩壊した彼女の世界は死を選ばせた。

あの後聞いた事だが、義母は全ての結果にただ畏れ戦き、娘の葬式にすら出ようとしなかったそうだ。

そんな義母に対して覚えるのは……哀れみだった。

俺の憎悪の向かうべき対象は預言に支配されたこの世界そのものだった……

だが、この世界で預言に憎しみを抱いた先にあるものは、絶望だった。

誰もが盲目的に預言を信仰し、その存在を疑おうとすら思わない……

俺は世界に絶望し、砂漠へと帰った……

ケセドニアで暴力の日々を過ごし、酒を浴びるように飲み、仕事にも手がつかなくなって自暴自棄になりかけた時に……俺は奴と出会った。

そいつは俺と同じく預言で家族を……全てを失った奴だった……

……

奴と俺は似た境遇により互いに惹かれ、この世界の憎悪を打ち明ける仲ともなった……

そんなある日、奴はとある計画を俺に話した。

その話は耳に届く声は魂を直接撫であげるようにして、俺の心を掴み取った。

自分よりも一回り程離れている若造に、自分が完全に飲まれていることを俺は悟った。

「この世界の開放を……その瞬間を見せてやろう……僕の力となれ……“砂漠の獅子王バタック”」

そこで差し伸べられた手を俺は……手に取った……

そして絶望の深淵を知りながら、全てを覆すと約束してみせた男に対して、犬の如き忠誠を誓った。　もはや過去の全てを切り捨て、男の目指す世界の実現に向けて邁進することを約束した……

忠誠の代価として、新たに与えられし新たな役割と名前……

――――神託の盾騎士団（オラクル）第一師団長　ラルゴ――――

もう“バタック”はいない……過去を俺は捨て去った……

それ故、今もなおこの心を煌々と燃やす憎悪の炎は決して消える事は無い……

全てを飲み込み、燃やしつくすまで……

……む、深く過去を振り返っていたようだな……

どれほど時間が経っただろうか……？

……ふ……感じたほど経ってもいないな……

「あのー、隣いいですか……？」

Ｓｉｄｅ：ハーミット

なんか一層と雰囲気が漂う巨体の男がテーブルの奥に座ってたもんだから興味半分で声掛けて見たが……良かったのかな？

「別に席など他にまだ腐るほど残っているが……？」

「此処来て数日なものですから顔合わせでもしようかと……」

カタンッ……

俺は注文した簡単な食事が乗った台をテーブルに乗せる。
そして、席を引いて其処に腰を下ろす。

「ん……？そのロケットの中にある絵の赤ん坊……お子さんですか？」

「あ……あぁ……」

良く見てみると随分手入れがされている。
よほど大事にしてるんだろうな……

「かわいいじゃないですか」

「ふ……そう思うだろ……？」

お、微かに笑った……けど何処か悲しい表情をしているな……
すこし不味い方向へと持って行かないようにしとこうか。

「ハーミットと言います。ここの軍医（ヒーラー）兼治癒士達の教官を務めている者です。」

「ハーミット……まさかお前があのハーミットか……？随分若いな。」

「あぁ……オラクルで出回ってる噂は半分はデマですからそこん所はよろしくお願いします。」

「半分は合っているのか……」

男は苦笑しながら呟く……

「俺の名はラルゴだ。第一師団長を務めている者だ。」

「師団長……！？」

「……お前はここの上司の顔ぐらいは知れ。」
「基本診察室、研究室、自室、託児所、治癒士（ヒーラー）の訓練所ぐらいしか赴かない者でして……」

ラルゴは呆れた様子でハーミットの事を見据える。

「それに上司については詠士モースと第三師団のクレド師団長、そして知り合いである副師団長のヴァンしか顔を知りませんから。」
「ヴァンと知り合い……！？」

その言葉にラルゴは興味を示す。
あの男の知り合いとなるとこの男ももしや……

「昔、故郷でいろいろありましてね……あの子の家族とも親しかったんですよ。」
「ほぅ……」
「時々試合相手をしててよく俺に勝てなくて悔しがってたあの子供があんなにも大きくなったもんですから正直驚きですね」

今では想像できないあの男、ヴァンの幼少の姿が思い浮かぶ。
憎悪を持たなかった頃のヴァンを……

「ハーミット……お前に聞きたい」
「何ですか……？」
「お前は預言についてどう思う？」
「……」

ラルゴは此処が重要な事だと考えた。
もしも、自分達と同じなら……同志として迎え入れてもいいと考えているからだ。

対して、ハーミットはこう答える。

「どうでもいいですね……」

「何……？」

「俺は医者を通して預言で死を詠まれた人間を治した経験がありましてね……そこから俺は預言なんて占い程度にしか考えていませんから頭に入れてません。」

「だが、事実預言は当たる事の多いこの世界になくてはならない物となっている……其処の所はどうなんだ？」

「預言という固有名詞が生まれる前の世界は……今と大して変りないんですよ。勝手に争ったり仲良くしたりと……田畑が豊作になるのも持ち主の努力のお陰……病気が治るのも治す者と治ろうとする者の努力のお陰……其処に預言が出て来たとしても結局何もしなければ結果なんて出ないんですから。」

「変わりが無いだと……」

「そうですね……元々“預言”なんてものは本当はありはしないに等しいんですよ……その正体は人間が都合よく作り上げた幻想のような物ですから。」

「都合良く作り上げた……幻想……」

「そう、永遠・絶対という言葉があっても実質が存在しないというモンです」

「だが、もしもだ……もしも預言で不幸な目に会うと詠まれ、その通りに起きたとしたらそれはどう説明する……」

そうだ……それならどう説明する……

「預言で悪い事が起きるならそうならないよう反対の事を……対策をしようとしなかったその人が悪いだけですよ」

「何……！？」

「大体がその人は諦めるか一人でどうにかしようとした者ですよ…

…良く考えて見れば。協力すれば出来ない事は出来るかもしれないと思いついてなかったという事実があるだけなんですから……」

「しかし……」

「この世界も確率が存在するんです。世界という表裏のコインを何回も投げて次は面か裏……重ねるごとに確率は多くなっていく……それだけ未来は変わっていく……けど“此処”の人達は自らコインを投げようともしていない、預言という足場があるからこそそれは表のまま……または裏のままですから……」

「……」

「つまり、コイン自体が……足場がとかそんなんじゃないんです…投げようとしない人間が悪いだけなんですよ。」

だとすれば、娘が攫われた一番の原因は……ああなるという預言を義母に詠んだ人間……

この男は……いったい……

「しかし、ローレライ教団に属する貴方が何故このような質問を……？」

「あ……あぁ、実際一人一人預言についてどう考えているか唯聞いてみたかっただけだ……」

「そうですか……あ、やべ……アリエッタを迎えに行く時間が……！！」

「もういくのか……？」

「すいません……！！お先に失礼いたします！！」

そうして、ハーミットはすぐさま食器を返して食堂へと出て行った。

その場に残されたラルゴはまた一人、黙想に入る。

「あの計画は……いやしかし……」

そう呟くラルゴの言葉は誰の耳にも入らない……

その後、ハーミットは迎えに遅れた為にアリエッタに拗ねられていたとか……

その事実もまた彼は知らない……

いや、知る必要がある自体知らないが……

第４２話（後書き）

今回はラルゴ視点で書かせてもらいました。

第４３話

ダアトへ来て早三ヶ月……一つの季節が通り過ぎた。
余計な干渉を受けずに未だにうまく過ごせている。

「墓参り……？」
「今日は……僕の母の命日なんです。」
「……俺がユリアシティを出て行って数ヵ月後に亡くなったんだよな……」
「難産でした……妹を産む為に無理をして……」
「その妹さんがメシュティアリカ・アウラ……古代イスパニア語で【清純なる心を持つ者】か……いい名前だよ、本当に。」
「……父と母が一生懸命考えて付けた名前です。」
「あの人達らしいよ……」

ハーミットは今は亡きファルミリアリカの顔を想う。
優しく、平穏を愛し、何時も明るく振舞っていた女性を……

「そこに俺もついてきてほしい……？」
「きっと母も喜んでくれます。そして、貴方には是非とも妹の姿を見て欲しいんです。」
「……“あそこ”は好きになれない場所なんだがな……」

だけど、そんな事は些細な事だ……
気にしなければ良いだけだ。
もう5年も経っているから殆どの人が俺の事など頭に入れてなどいないと思うが……

「解った、今日の一日を其処に使わせてもらおう……」

「本当ですか……！？」
「あ～あ～、この頃運動不足だからアラミス湧水洞はいささかキツイかもしれんが……」
「ハハハハ……僕もサポートしますから安心してくださいよ？」
「ＯＫ、そこんとこ頼むわ。」

そんな会話が今から1時間前だ……
俺達は今“ユリアロード”の前に立っている。
相変わらず勢いよくセフィロトの力で水が弾かれている。

「じゃあ、起動させます……意識を軽くしてください。」
「あぁ……」

力を抜き、無心状態に近くさせる。
余計な雑念は省いて唯流れに身を任せる事にする。
すると、徐々に力が下へと向くのが感じられた。
閉じた瞼を通して眩い白い光が映り始めていく……

―――――――――

「着いたか……」

気が付くと巨大な譜陣が描かれた薄暗い部屋に俺はいた。
五年ぶりだというのに……ここは全然変わってないな……
少しは楽しなってのに……相変わらず此処の奴らは思考が固いな。

「案内します……僕達の部屋へ。」

ヴァンはそう言って歩き始める……さて、ついていくとするか。
ゲートを通り、あの大広間へと出てくる。
今もなお創世暦の譜業は起動し続けているのが確認できる。

「ヴァン、久しぶりだな。また妹に会いに来たのか？」
「えぇ、離れてる以上会える時間も限られている物ですので……」

先にゲートを通ったヴァンが直ぐ右から誰かに声を掛けられていた。
どうやら此処の見張りをしている者のようだな……

「んっ……？そちらの人は？」

む……、此処は余計に喋らないようにしときたい物だが……

「神託の盾騎士団（オラクル）所属の治癒士（ヒーラー）、ハーミット……僕の知り合いだ。」

ナイスだ、ヴァン……

「ハーミットだ、“初めまして”」
「ようこそユリアシティへ……ヴァン、知り合いを連れてくるなんて珍しいじゃないか？」
「ちょっとね……」
「あぁ、そうそう……ティアちゃんはテオドーロ市長の所にいるそうだ。」
「そうですか、教えていただきありがとうございます。」

テオドーロ市長……また厄介なのが……

「すまん、できるだけあの人には会わない方向で……」
「そうですね……じゃあ、先に部屋へ案内します。」
そして、嘗て三人で住んだ懐かしい所へと足を進める。
遠くは無い……直ぐ近くの所へ……

―――――――――――

「いやー懐かしい。」
変わってないな……新しく本が入っているとか机が散らばっているとか以外は……
何々……大譜歌についての本、預言についての本……ジャンルが統一しているな？
あいつ過去の体験上こういう物を読むのは苦しい物だと思うんだがなぁ……

ガチャッ……

「待たせてすみません。」
「そんな事ないさ、全く問題ない。」
「さぁ、ティア……この人がハイルさんだよ」

……この子が……たしかに、あの人の面影がはっきりと写っている。
まさしくあの人の娘さんに間違いない。

そういや、他人以外の時は俺の事ヴァンはハイルと呼ぶんだよな。

「……こんにちわ」
「こんにちわ、君がティアちゃんだね？」
「……うん」
「俺は君のお兄さんの友達のハイルだ、はじめましてかな？」
「お兄ちゃんの……？」
「そう、よろしくね。」

なんかオドオドしてるって感じだな……
初めて会う人だから緊張してるのか……？

「ハイルさん、そろそろ……お墓の方へ……」
「……そうだな、お墓はこの部屋の奥か？」
「ねぇねぇ、何をお話しているの？」
「んっ……あぁ、これから僕とティアのお母さんに挨拶をしに行くんだよ？」
「ふ～ん、そうなんだぁ……」
「じゃあ、行こう……あんまり待たせちゃファルミリアリカ様に失礼だ。」

俺達はここの奥の部屋へと進んで行く。
その先には、ひっそりと佇む小さな墓石と……あたり一面に広がるセレニアの花であった……

「驚いたな……前は花なんてなかったのに……」
「僕が移したんです、母が好きな花でしたから……」
「ぁ……」

タッタッタッタッタッ……

突如、ティアは掛け出して墓石のある方へと向かう……
いや、正確にはその周りに咲くセレニアの花にだ……

「お兄ちゃん……お花さんまた元気ないよ……」
「あぁ……やっぱり場所を移したから弱くなっちゃんたんだね。」
「お花さん……また元気になってね……」

ティアの手から淡い光が花を照らし始める。
これは……第七音素（セブンスフォニム）……！！

「ヴァン、あの子もセブンスフォニマーなのか……」
「……恐らく、血筋でしょう。」
「あれぇ……」

ティアから困惑するような声が聞こえてきた。

「お兄ちゃん……！！お花さん……元気にならない……」
「え……？」

良く見てみると、先ほどよりはしな垂れ具合が違うが……元気になったとは言えにくい。
力が足りないのか……？

「どうして……お花さんこのままじゃ枯れちゃうよ……どうして……」
「……」
「……」

ザッ……

「ちょっとごめんね、俺に任せてくれないかい？」
「……うん」

やれやれ、アリエッタの顔が思い浮かんじまったわ……
何時の間にか子供の涙には弱くなってしまったらしい……

だが……ロリコンとは言わせんからな……！！！

「ふ～……」

俺は手の平をかざし、フォンスロットで己の第七音素（セブンスフォニム）を譜術として練り込んで行く。
そして、使い慣れた譜術『キュア』を詠唱した……
この子のは譜術としてではなく唯純粋な第七音素（セブンスフォニム）を使っただけが原因だったんだろう。
すると、かざした花ばかりか周りの花も活性化するという結果が残る。

「こんな物かな……？」
「すごぉ～～い……！！お花さんいっぱい元気になったぁ～！！」

目をキラキラして活性化した花達を見続ける。
満足したようだな……

「ハイルお兄ちゃんありがとう……！！」
「珍しくはないさ、ティアちゃんも頑張れば俺みたいなことも簡単にできるようになるさ。」
「ホントー！！ティアもあんな風にできるの……！？」
「頑張れば……だぞ？」
「うん、ティアも頑張る……！！そしてね、その力でお兄ちゃんを

手助けするのが夢なんだよ……！！」

俺はヴァンの方へと振り返ってみる……どうやら照れているようだな。

「おぅ、頑張ってあの“シスコン未遂”助けれるよう努力しなさい」

「ぶぼっ……！！」

ヴァンが吹き出した……おいおい、汚ねぇな……

「変な事吹きこまないでくださいよ……！？」

「ユリアシティに来る前までずっと妹について自慢げに話し続けたのはどこのどいつだ……？」

「う……」

そう、こいつ実はずっとティアについて呼吸し直す間もないように喋りまくってたんだよ……

妹の事になるともうウザいという他ならないんだよな……これが……

別に怒ってないさ……たぶん……

「でも、ハイルさんだって前にアリエッタの事をベタ褒れしてたじゃないですか……！？」

「あの子は別だ……！！できるようになった事を褒めて何が悪い……！？」

「ティアだってこの頃きちんと挨拶もできるようになったりと成長してる子です……！！」

「んだと……！！こっちだってなぁ……舌足らずでも人の名前を覚えて呼べるようになってる……こっちの方がすごい方だろうが……！？」

「この前僕に似顔絵を……！！！」
「俺だって木の実とかのプレゼントを……！！！」

お互い娘と妹の自慢し合いへと知らぬ間に発展していった。
はっきりいって……駄目だこいつら……早くなんとかしないと……

「喧嘩だめぇ～～～！！！どうしてそんなことするの……！！！」

「「はい……！！！」」

そこへ横からの涙目なティアの静止の声ですぐさま討論を終了するのであった……

「さて、こんなことしてないで早くやろうか……」
「……元はと言えば誰のせいですか……（ボソッ……）」
「アァン……！？」
「何でもないです……」

一瞬ヤンキー声へと変化したのを察して引きさがる事にする。

「……」
「……」

俺とヴァンはこの世界での祈り方で墓の前で黙祷し続ける。
思えば、俺は自分の両親の墓参りをしたことがない……
とはいっても……墓さえ作ってあげた事もなかった……
納めるべき亡骸は今は海の底という事もあるが……せめて形だけでも作ってあげたかった。
今となっては後の祭りだが……

「ねぇねぇ……お兄ちゃんとハイルお兄ちゃんは何をしているの？」
「あぁ……これはね、ここに眠る死んでしまった人のご冥福……つまり、空の上で幸せにやっていけますようにとお祈りしているんだよ？」
「ふぅ～ん、じゃあ、ティアもお祈りする……！！」
「そうか、ティアは優しいね……」
「えへへ……♪」

その死んだ人が君のお母さんと自覚するにはまだ早いのだろうか……

この事実を知る時、君は成長していくにつれどんな道を進む事になるのだろうか……

願わくば……幸ある道であらん事を……

――――――――――

「わざわざありがとうございました。」
「いや、此方こそ有意義な時間を過ごせたさ。」
「しかし、本当に一人で大丈夫ですか？」
「一応カンは取り戻せてるからな……アラミス湧水洞の魔物くらいはもう対抗できるさ……」

俺は今回一人で帰る事にする……

ヴァンがまだここに残るという為、俺としては立場上待つ訳にはいかないので早めのご退場という訳だ。

「じゃあ、先に失礼する。」

そして俺はユリアロードの譜陣の中へと進む。
後は起動させるだけだ……

「なぁ、ヴァン……ちょっと聞いても良いか……」
「なんでしょうか……？」
「お前は……“現在（いま）”に満足しているか、それとも“未来（これから）”に満足したいか……？」
「その質問は……」
「どちらを選んでも俺は別に諭すつもりはない……唯聞きたいだけだ……」

少し嘘をつかせてもらうぞ……ヴァン……
もし、“未来（これから）”を選ぶ場合なら……俺は……

「僕は……」

お前を……

「この先に希望を持ちたい……だから……」

力ずくでも止めなければならないかもしれない……

「“未来”を選択します……」

それが、俺にとって与えられた宿業（カルマ）なのだから……

第４３話（後書き）

＊ティアの名前の意味は捏造です……あしからず。

これはファンダムであった幼少時代の所の少し後という設定です

第４４話（前書き）

今回はちょっと短いです。

第４４話

「えーと、こいつは2の棚に入れて……んでこいつはこっちにと……」

ふぅ……カルテの整理も大変だな……

この教団は少なくとも2万以上もの人間が居るからあたりまえか。

「先生、こちらの書類に後でサインをお願いしますね。」

「あぁ、研究費用の決済とかのか……わかった、後で済ましとく。」

あ～忙しい……パソコンがあればパパッと済ませる事が出来るんだが……贅沢などいえない。

改めて文明の素晴らしさを知る事が出来た気がするわ……

「そういやアリエッタ……またなんか魔物の子供拾ってきたな……」

鳥系の魔物で藍色の毛をした雛だったんだが……ライガ達が見つけてそのまま一緒に俺の所に見せて来た。

たしかあれ、フレスベルグの雛鳥じゃないのか……？

ますますあの子の周りが魔物の強靭な防壁で囲まれつつあるな……

この頃ライガの二匹も大きくなり始めて俺の背丈の半分は成長したよ。

「なんか……寂しい感じもするな……」

けど、魔物とばかりではなく人にも触れ合ってほしいのが一番の望みなんだがな……

「まだまだ問題は山積み……か……」

あの子はもうすぐ7歳だ……

唯見守り続けるのにも限度が生じる可能性がある。

「先生、そういえば聞いた事ありますか？この頃次期導師が教団の内部を歩かれるようになられた事を……」

「次期導師……？現導師エベノスに代わる者か……」

「なんでも、まだ4歳になられる子だそうですよ」

「4歳……！？」

可笑しいだろそれ……労働基準法どころじゃねぇだろうが……

ここオールドラントで国王と同等の存在となる導師を10も満たない子供に継がせるなんて……

「ご心配は無用ですよ、その子は預言に詠まれて導師になるべくして生まれた子ですから導師としての技量は問題無いと思います。」

「……」

……なんか頭痛くなってきた……

そう詠まれてしまったその少年には哀れみが感じれるよ……

「その子の名前は……？」

「たしか……イオンという名前でしたね……」

――――――――――

Ｓｉｄｅ：イオン

――――お前は導師となるべくしてこの世に生まれ落ちたのだ――

うるさい……

――――預言に従う事が繁栄と繋がる……それがわかるかい？――

うるさい……

――――なぜこんな簡単なことができない……！！お前は導師になる人間の筈だ……！！――――――

うるさいうるさい……

――――お前の両親はお前の事を誇りに思ってるとの事だ……それに報いるよう頑張りなさい――――

うるさいうるさいうるさいうるさい……！！！！！

聞けば預言……話せば預言と邪魔なんだよ……！！

誰が頼んだんだよ……こんな事なんかしたくないよ僕は……！！

でもそんな僕の思いなんか誰も聞いちゃくれない……

だから、僕は導師になったらお前らとは違って好きな事をやってやるさ。

イオンは周りにある積み立てられた本の山を蹴り飛ばす。

生まれて間もない頃から両親に引き離された……それどころか両親はそれを当然の事だと捉えた。

ふざけるなよ……そんなことするくらいなら僕を産まないでくれよ……

今までこの禁書が収めらている部屋で長い年月を過ごし、その間で導師としての教育という名の拷問を受け続けて来た。

くそ……今でも思い出しても腹が立つ……！！

そんな事をしたあいつらに仕返しをする為、僕は預言について奥深く学び通した。

これは旨く使えば人一人の人生なんてあっという間に終わらせる事が出来る……！！

あぁ……なんて面白い物なんだろうか……預言という物は……！！

周りの奴らの中でコッソリと預言を詠んでやった中には死を詠まれている物も出たりと楽しいんだよ……？

まさに最高の“玩具”じゃないか……！！

そう言えば……僕自身の預言ってどうなってるのかな……？

ひょっとしたら最高最悪の導師になってるとか……！？

ふふふ、楽しみだなぁ……♪

イオンはフォンスロットを通して第七音素（セブンスフォニム）と取り込む。

そこから「星の記憶」を取りだし、自身の疑似神経を通して脳に

直接移しこむ。
詠むのは自身の預言……初めての体験だから期待が寄せる。

オ……マ……ヘ……

「（僕は……？）」

ハ……ジュウ……ニ……ノ……ト……シ……

「（十二歳で何か……）」

ニ……

――――――シヌ……――――――

「えっ……？」

オマエハ……ジュウニノトシニ……シヌ……

おまえは……じゅうにのとしに……しぬ……

おまえはじゅうにのとしにしぬ……

お前は十二の歳に死ぬ……

死ぬ……

しぬ……シヌ……

死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ……！！！！

「嘘……だ……」

死ぬ……誰が……僕が……？

長く生きれないって事……？

「違う……」

イオンは力が抜けるようにしてその場に座り込む。

そして、近くにあった預言に関しての本を読み漁り始める。

「違う……違うよ……こんなの違うよ……！！！」

気づいたら、目に涙が溜まり始めていた……

必死で事実を否定する為に感情が追いつかなくなり始めている。

預言は……たった今から彼にとって“玩具”ではなく、“死の宣告”と変わる瞬間であった……

―――――――――

「イオン様……失礼します。」

あの後、何十分か経った後にその部屋へヴァンが訪れて来た。
彼は失礼のないようにと形式の礼を取って部屋へと入って来た。
何故彼がこの部屋を訪れる事が出来るのかというと、始祖ユリアの子孫という事で最重要機密の関係者としての立場を持てるようになっているからだ。

「イオン様……？」

いつもなら素っ気なく返事を返す筈の子供の姿がヴァンには見当たらなかった……
もう少し奥へと入ってみると……本棚の隅にひっそりと座っているのが発見できた。

「こんな所にいたのですか……そろそろダアト式譜術の訓練が始まるので早く用意を……」

しかし、近づいてみた所で可笑しい所があるのに気付く。

何処が可笑しいかって……？

その子の右手が真っ赤だからだ……

「イオン……様……？」
「……あぁ、ヴァンか……今僕はね……とてつもなく気分が良いんだ……話は今度にしてくれない……？」
「な……に……を……」
「ふふふ、文字を書き留めていたんだ……忘れないようにと記念すべき最初の自分自身に詠んだ預言の内容をね。」

そういってイオンは傍にあったスケッチブックを持ちあげてヴァンに見せつける。
そこには……真っ赤な文字でデカデカと書かれている……

――――――お前は
十二の歳に
死ぬ……！！！――――――

あの内容が……

「これは……」
「そのまんまの意味だよ……結局僕が生まれた理由は唯導師になるという記録だけを残すだけのものだったんだ……」

イオンは笑顔でヴァンにそう話しかける。
しかし、眼は光を持たず……虚ろのままでだ。

「ヴァン、結局物であれ生き物であれ世界にとってそれらは“ガラクタ”でしかないと僕は知ったよ。いらない物なんだよ……僕達は……」

「……」

「だからさ、僕考えたよ……この世界はガラクタだらけ、だからガラクタはガラクタらしく壊した方が一番良い方法だとね。」

「貴方は……」

「んっ……？」

「貴方は……預言が憎いですか……？」

ヴァンは重い空気を纏ってイオンにそう問いかける……

「決まってるだろ……憎いなんてものじゃない……大っ嫌いだ……！！！」

密室の禁書図書館でイオンの叫び声が響き渡る。

「イオン様、では共に預言を滅ぼしませんか……？」

その誘いは此処では本来ならばやってはならない事……
しかし……

「いいね、僕が何をすればこのガラクタは壊れるのかな？」

彼はまた新しい遊びを見つけたかのようにそれを受け入れた……

そう、これは復讐だ……導師へ呪いを与えたこの世界に……

世界の全てを知ると同時に自らの命の期限を知ってしまった僕の気持ちを知らずにのうのうと暮らすガラクタ達に

――――導師からの呪いを――――

第４４話（後書き）

イオン様視点でした。

元ネタは公式外伝本のオリイオ×アリ編からです。

第４５話（前書き）

今回のは面白半分で書いた物です。

第４５話

「ほらほらほら、もっと攻めてこいやぁぁ……！！」
「うわあぁぁ……！？それはだめ……！！」
「この俺の手からは逃れられんぞ……ヴァン二郎……！！」
「いやだからヴァン二郎って……あぁまた……！？」
「ふはははは……弱い、弱すぎる……」
「くっ……負ける訳にはいかないんだ……でなければ……でなければあぁぁ――――――！！！！！」

何やら序盤から騒がしい会話で申し訳ありません。
さて、何故このような事になっているのかというと３０分前に遡る事になる。

――――――――――

チンッ……！！

「おめでとうヴァン、師団長昇進だってな……」
「ありがとうございますハイルさん、僕も正直驚いてますよ。」

俺はヴァンが第三師団長になった事を聞いてお祝いとして部屋を訪れていた。
めったに飲まないワインを開けて小さなパーティーを開く。

「しかし、クレド前師団長がいきなり軍を抜けだすとは……どういう心変わりだか……」

「あの人も何か考えた事があったんでしょうね……」
「そういう物かね……？」
「まぁ、詳しい事はいいでしょう……早く食べましょうよ。」
「大体俺が作った料理なのに自慢げにいうのは気に食わんが……今回は見逃してやるか……ほら、アリエッタ、お前も食べても良いぞ……？」
「はい……です。」

今日はアリエッタも此処に来ている。
三人ともハイルが作った料理を口に運び始める。

「んん、やっぱりうまい……！！」
「おいしい……です！！」
「そうか、作った本人も嬉しくなるねぇ……」

どうやら好評のようだ……それはよかった。
今回のは魚料理をメインでお送りしております……
煮魚のだし汁が食欲を注ぐ……！！

「そうだ、ヴァン……久しぶりにチェスをやってみないか？」
「えぇ……！！そんないきなり……」
「まぁ、五年ぶりだからな……少しは強くなったか……？」
「えぇ、その……少しは……」
「なら話は早い……食い終わったら始めようぜ。」

この部屋では娯楽として多少はそういう物ぐらいは置いてあるからな……
部屋の隅にあった前から見つけていたチェス盤を取り出す。

カラカラカラッ……

「さてと……チェス盤に駒を並べて……と……」
「ハイルさん……」
「ん……何だ、どうかしたのか？」
「アレ……」

ヴァンはハイルの後の方を指差す。
その行方を辿ってみると……

「うぅぅ～……甘く……ない……です……」

なんと、アリエッタが先ほどまで二人が飲んでいたワインを飲み始めていた。
どうやらジュースと勘違いして飲もうとしているようだった。

ガバッ……！！！

「駄目駄目駄目……！！！直ぐに口から出せアリエッタアァァァ――――――！！！！！！」

未成年の飲酒は大変危険極まり無いです。
ましてや、お子様には悪影響を及ぼすので止めさせましょう。

ガッ……！！！

「ぁ……」
「ギャウッ……！？」

あぁ……ライガ君、そんな所にいないで欲しかった……
お陰で躓くじゃないか……

「うおぁぁぁぁぁぁ――――――！！！！！」

勢いよく飛び出した為か転んだだけでは止まらず連続前転を披露する羽目になる。

「きゃあ～～～！？」

その光景にアリエッタは驚いてワインボトルを上へ高く投げ捨ててその場を退く。

ドゴオォォォンッ……！！！

そして、その後ろにあった壁に勢いよく張り付くようにぶつかるのだった……

「ゴバッ……！！！」

ドサッ……

そして、後へ仰向けになって倒れる。
しかし、そこで終わらなかった。

ガポッ……！！！

「＊％＝？＋＊＜，～～～！！！」

先ほどアリエッタが投げたワインボトルが見事にハイルの口の中

にホールインワンしたのだ。
もちろん、下を向いて……
そのままどんどんワインボトルの中身はハイルの中へと侵入する。

「だ、大丈夫ですか……！？」

さすがに危ないので助けに入る。
しかし、彼はまだ知らなかった……
ハイルの前世から受け継がれてる厄介な物を……

パシッ……

「えっ……？」

ヴァンが駆けつけるよりも早くハイルは行動に移していた。
スッポリと口に突き刺さったワインボトルを掴むと……

ピキッ……！！

なんと、握った所からヒビが入り始める。
そして、そのままハイルは口からワインボトルをゆっくりと抜く。
後にはワインボトルを部屋の隅へ勢いよく放り投げる。

「ハイル……さん……？」

ヴァンから冷や汗が流れ始める。
長年の勘が教えているのだ……ニゲロ……と。

「あの……大丈夫……」
「うるせぇ～～ぞ～～～このシスコ～～ン……！！」

「え、え、え……！？」
「お前の妹も確かにかわえぇぇがなあぁぁ～～～俺のアリエッタだってさいっこ～～にかわえええんだよおぉぉぉぉ～～～！！！」
「まさか、酔ってるん……」
「シャラアァァァ～～～ップ……！！！」
バコオォォォンッ……！！！
「ゴバアァァァッ……！！！」
不意打ちの掌打がヴァンの顎にクリティカルヒットする。
「酔ってなんかあぁぁぁ……酔ってなんかあぁぁいねえぇぇんじゃあぁぁぁ……！！！！！」
ガシッ……！！！
「あああああのちょっと何を……！？」
「バトルじゃあぁぁぁ～～！！チェスでバトるぞおぉぉヴァアアアアウゥン……！！！」
「い、いえ、ですが……」
「せ～じょ～にゃるひかりよぉぉぉ～わりぇにあだにゃす……」
「ストップ……！！ホーリーランスを詠唱しないでえぇぇぇぇ……！！！」
「じゃあ逝っくぞおぉぉぉ……イャッホオオォォォォォ……！！！」
「文字が違うぅぅぅ……！！」

そのままヴァンは引っ張られてチェス盤のあるテーブルへと向かっていく。

そう、実はハイルは酒癖がめちゃくちゃ悪いのだ。

本人はそれを自覚して一杯ぐらいなら大丈夫なようになっているが……大量ともなると別だ……

本人いわく、それをするとハイになるという訳だ……

――――――――――

そして、初めに至るという訳だ……

「Ｈｅｙ！バッツゲーム……！！バッツゲーム……！！！」

「それだけは勘弁してください……！！！」

話の中でこのチェス勝負は負けた方が罰ゲームを受けると決めてる。

その罰ゲームとは……

下を下着のみにして神託の盾騎士団（オラクル）本部を走って一周してくるというトンデモ物である。

もう、人間の尊厳も何もかも捨てるようなものである。

「ほれチェエエエック……！！！」

「うわあぁぁぁぁぁ……！！！」

ヴァン劣勢である……無理にここから逃げ出そうとしても今のこの人から逃げれる気がしないと悟っている。

そして……

「ビジョップ入ってえぇぇぇ……チェックメイトゥゥゥゥッス……！！！」

「ぎゃあぁぁぁぁぁ……！！！」

遂に負けた……ヴァンは絶望の表情する意外他ならない……

「ふはははは、さぁヴァン君……先ずは脱ぎ脱ぎしましょ～ねえぇぇぇ～♪」

「たたた助けてえぇぇぇ……！！！」

逃げようとしてもガッシリと襟締めされてるので身動きできない。

そして、徐々に禁断の蓋が開かれ始める。

「止めて、本当に止めてください……！！」

「俺に拒否などありませぇぇぇ～ん♪」

こ、こうなったら……最終手段……！！！

――――トゥエ　レイ　ズェ　クロア　リュオ　トゥエ　ズェ～♪――――

めったに使う事が無い譜歌を歌い始める。
その旋律は……誘いを施す旋律……
悪夢へと誘う眠りを生み出す……

「ありゃあぁぁぁ……」

ドサッ……

抵抗もせずにモロに聞いたハイルはすぐさま眠りに陥った。

「はぁ……はぁ……ユリアの譜歌をこんな事で歌う羽目になるなんて……」

ヴァン、何気にショックであった……

「しかし、ハイルさんがこれほどまでに酒癖が酷いとは……」

今度からは絶対酒を飲ませないようにしよう……

ヴァンは今後の為（主に自分自身）にその事を胸に深く刻んでおくのだった……

ちなみに、この事は後日ハイルはすっかりと忘れているのであった……

第４５話（後書き）

アリエッタ空気でごめんね……

次はＮＤ２００９に入ろうかと思っています。

第４６話（前書き）

実質調べてもオリジナルイオンはかなり冷酷な子だったんですよね……

第４６話

「ハ――――ハッハッハ……！！皆さん御機嫌よう……！！この私がディスト様ですよ。」

なんなんだあいつは……初めの印象はこうだった……

俺達は今、訓練場で集合しているんだが……なにやらかの有名な譜業博士がダアトへ亡命してきたらしい。

それで紹介として関係者の人達が顔合わせしているという事だ。

そこに俺達も含まれていたらしい。

「おい、あいつは何者なんだ……？」

「あの男……どうやらマルクトが誇るかの有名な譜業博士、ネイス博士なんだそうです。」

ネイス……サフィール・ワイヨン・ネイスか……！？

あのジェイド・バルフォアと対等な天才博士がなぜここに……？

しかし……

「“あれ”がか……？」

「はい、“あれ”がです……」

まさしく予想外ですね……今まで想像としてはジェイド・カーティスと同じような雰囲気の男だと思っていたんだが……

派手な服装……今だＨＡＨＡＨＡと高笑いする変な口調……

まるっきり大反対だな……

「さて……今後ネイス博士にはここダアトの開発部で活動して頂く

事になった。よって……」
「ちょっと待ちなさい……！！私はネイスなんかじゃありません……！！ディスト……ディスト様だ！！」
「では、何か質問はある者は……？」
「コラ、無視するな……！？」

その後キィ―キィー喧しくしていたが、無事終わった。
紹介じゃないくて軽いコントと化してたが……まぁ、気にしないでおこう。
集まってた奴らが自分の持ち場へ戻ろうと訓練場から離れていく。
さて、もう用は無いし俺もお暇させてもらおうか……

「嫉妬ですね……この私の頭脳が羨ましいから妬んでるんですね……！！キィ――――――！！」

……少し、黙ろうか……？

ヒュンッ……！！

プスッ・・・

「でゅお……！？」

流石になんかウザいので携帯用の麻酔入りの注射をディストの体に投げつけて強制的に黙らせる。
ここダアトでも色々と話を付けてもらって特別な許可による麻薬類の処方を取りつけた。
今の所そう言う物を扱うには俺の許可が下りないと駄目にしている。
まぁ、不法な流通対策って訳だ……

フィリスさんから昔もらった理論式を記した紙も厳重に保存してある。

「その人、配置された部屋へ適当に放り投げとけ。」
「は……はぁ……」

これで良し……！！
さてと……今日はどうするかなぁ……

――――――――――

「見て見てパパ～！！アリエッタ、飛んだ……です！！」
「お～こりゃすごいな～？」

やっぱり家族水入らずで過ごす日々が一番だ。
今アリエッタはかつて拾ってきたフレスベルグに乗って広場を地上近くで飛びまわっている。
やっぱり魔物は成長が違うな……まだ俺を乗せる事はできないがこいつはアリエッタくらいなら乗せられるくらいに成長した。
あの二匹のライガだって例外じゃない……もう全長は俺を越しそうで体も二回りは大きくなった。

あぁそうそう、魔物は大きくなりすぎて託児所へはもう預けられないらしい。
だから馬車で使われる魔物と同じ扱いとして舎に置かせてもらっている。
でもこいつ等肉食だからな……舎にいる他の魔物食っちゃわないか其処が心配だがな……

「……ぇ……す……！！」
「（何より、餌代も極力こっち持ちだし結構贅沢させる訳にはいかないんだがなぁ……）」
「パパ……！！」
「んっ……あぁ……どうかしたか？」
「むぅ……パパ、最近考えてばかりで変……です。」
「悪い悪い、で……なんだ？」
「……もういい……です。パパなんて、嫌い……です。」

う……流石にそれは答えるぞアリエッタ……
だが、其処は俺流の切り返しで……！！

「そうかぁ……じゃあパパもアリエッタの事を嫌いになっちゃうかもしれないなぁ……？」
「えっ……！？」
「だってそうだろ……？アリエッタが嫌いだと思う人がアリエッタの事を好きのままでいるかなぁ……？」
「でも……だって……」
「よ～し解った。パパこれからアリエッタの事を迎えに行かない事にするよ。」
「いや……！！そんなのいや……です……！！」
「けどなぁ……パパだってそんなアリエッタを迎えに行きたくないぞぉ？」
「だめ……だめですぅぅ……グスッ……」

やれやれ、少し苛めすぎたか……
子供への対応の仕方での程度は些か調節が難しい……
お詫びとしてハーミットはアリエッタの頭を撫でてやった。

ワシャワシャッ……

「嘘だ、お前を嫌いになるなんて誰がしてやるかってんだ……俺はお前を見捨てたりは絶対しない。なんたって俺の自慢の娘なんだからな……」

「ひくっ……ホント……えぐっ……です……か」

「約束だ……なんならこれをするか？」

そう言ってハーミットは小指を立てて突き出す。

指切りである……

「「ゆ～びき～りげ～んま～んうそつ～いた～らはりせんぼんの～ます……！！」」

血は繋がっていなくとも……彼らはそれ以上に強い繋がりを持ち続ける。

それは……家族という名の絆……

――――――――――

そんな日があってから二日が経つ。

休日は終わり、また再び仕事に取り掛かろうとした所にだ……

診察室にヴァンが訪れて来たのは……

「付き人……？」

「はい、イオン様への特別な付き人……いわば個人的な話し相手としてアリエッタに任せたいのですが……」

「そう言う事なら導師守護役（フォンマスターガーディアン）が承っているもんだろ？」
「あの者達はイオン様の生活、守護を主にしていますが……飽くまで部下としてでしか行動しないのですよ。」
「つまり、イオン様に少しは堅苦しい姿勢を崩させてやりたいって事か？」
「あの方も人の子です。すこしの安らぎぐらい無ければ持ちませんから……」
「たしか6歳になられたって聞いたな……アリエッタは8歳だ……う～む……」
「お考えになられましたか……？」
「……あの子にも人との交流の仕方を知ってもらいたい……けどな、相手が相手だ……なんたって次期導師だ……失礼が無いか……」
「それならご心配ありません。導師守護役（フォンマスターガーディアン）として活動する訳でもありませんし……それに、ご本人の方もアリエッタに興味を持たれているそうです。」

興味を持っている……まぁ、たしかにアリエッタは歩んできた人生が珍しいからな。
それに相手はあの子より2歳年下だし……別に変な事は……ないか？
実際、導師守護役（フォンマスターガーディアン）に12歳の子供もいるそうだ……
じゃあ決まりだ……

「それじゃあ、よろしくお願いしようか……？」
「本当ですか……！？」
「ちょっとした社会勉強……いやこんな事勉強で済ませれるもんじゃないな……とにかく、アリエッタには世の中という物を少しでも見せてやりたいからな。」
「では、さっそくイオン様に「ただし……！！」……！？」
「もし向こう側からアリエッタを傷つけるというなら……スリツブ

スゾ……？」

「サーイエッサアァァァ――――――！！」

ヴァン、相変わらずハイル（ハーミット）に怯えるのだった。

ハッキリ言って……師団長がそれでいいのか……？

「お前なぁ～……いい加減口調を俺に対してわざわざ丁寧にするなよ……一応お前直属ではないとはいえ俺の上司なんだし……何の為に髪束ねたり髭生やしたりしてんだよ……」

「これぱっかりはどうにも……」

「はぁ～……まぁいい、少しづつ変えていけ。」

一応気にしてたそうだ……今後に期待しよう。

――――――――――――

そして、それから3時間後……場所はとある執務室にて……

アリエッタは見慣れない場所でそわそわしていた。

ハーミットにお前に合わせたい人が居ると言われ、ヴァンについて来たのだが……

それからヴァンに待っているようにと言われ、これからどうすればいいのかと考えていた。

自分に会いたい人って誰だろう……？頭の中で別にそう考えてたりもしていて……

キィッ……

自分の左側にあるドアが開かれる。
ドアが開くとヴァンが初めに見えていたが、その後ろからもう一人出てくる。
自分と背が同じくらいで、緑色の髪を持つ少年が其処にいた……

「イオン様、こちらがアリエッタです。」

ヴァンは最初にイオンにアリエッタの事を紹介する。
それに軽く頷きイオンはニッコリと笑顔を作ってアリエッタに話し掛け始める。

「はじめまして、僕はイオンといいます。今後ともお互いに仲良くなりたいと思ってますのでよろしくお願いします。」
「ぁ……ぇ……えっと……その……」

初めて握手を求められてアリエッタは戸惑う。
今まで見て来た自分と同じくらいの子供達は自分を見ては気味がわられ、怯えられたりされてきた。　だけど、目の前の人はどちらでもない……
初めての経験にどうすればいいかわからない。

「イオン様、彼女は握手をした事がないんです……ですから……」
「……そうか、じゃあこうだね。」

ギュッ……

「……ぁ……」

イオンは自分でアリエッタの右手を自分の手に握らせる。

自ら握手の形を作らせたのだ。

「よろしくお願いしますね……？」

「……はい、よろしく……です。」

アリエッタは自分の中で違和感を感じる。

そう、彼女は照れているのだ……初めて出会ったこの少年に……

……

今までに感じた事のない気持ちにアリエッタは解らぬまま、今回の会合は終わりへと進んで行くのであった……

―――――――――――

「じゃあ、さようなら……です。」

「また来てくださいね、楽しい時間が過ごせました。」

「はい、もちろん……です！！」

家族以外にめったに見せた事のない彼女の笑顔が其処にあった。

そして、アリエッタはこの部屋から出ていく。

その姿は何やら楽しそうだ……きっとこれから皆に今日の事を話そうにしているに違いない。

バタンッ……！！

ドアが完全にしまり、執務室にはイオンとヴァンのみが残された

……

「……」

「いかがでしたか、彼女……アリエッタは……？」
「魔物に育てられた少女と聞いて違う意味で面白そうと考えてたけど……あれもなかなか楽しそうだ……」
「お気に召されましたか……？」
「彼女はいわば言葉を覚えたての赤子当然……僕より年上なのに……こっちがちゃんと教えてあげないとする事が出来ない。……逆に言えばこれから僕の言う通りの事を教えさせてあげる事が出来る。」
「……」
「最高だよヴァン……久しぶりに面白くなってきたじゃないか……これは……あぁ、小さい頃、ペットを飼いたいと思ってたりしてた時と同じ高鳴りだ。」
「では……」
「決めた、あの子は僕が勉強を教えてあげたりするよ……このまま付き人の件は通しといてね……」
「畏まりました……しかし、勉強といいましても彼女には親としての存在がいるのですが……」
「別に……何か言ってくるなら強引に黙らせてやるだけさ……」

これからの道のりはどうなるのか……それは神のみぞ知る……

……

第４６話（後書き）

なんか自分の中でダアト崩壊フラグが立ったような……うん、気のせいだよね！？

第４７話（前書き）

居合は抜く時も収める時も結構技術が必要です。
練習してても中々うまくできねぇ……

第47話

「さてと……」

俺は右手にケースを持って久々にダアトの街中を歩く。

目的地は教会の裏側にある貧困街……普通では通る事のない場所……

其処はダアトにとって影となる所だ。

「皆元気にしているかな……？」

今日は何時も着ていた白衣ではない。

黒を基本とした服装でだ。

俺はこれから会う人達の事を考えながら歩を進め続ける……

――――――――――

「ハーミット先生……！！」

「わざわざこんな所まで来てくださり……どうもありがとうございます。」

「お～い、先生が来たぞぉ～！！」

「あ～押さないで押さないで……順番は守りましょうね？」

「あ、せんせ～だぁ～！！」

「せんせぇ～またあそんでぇ～！？」

「こらこら、少し唐突すぎやしないかチビッ子達よ……！？」

俺はここダアトでの難民・貧困問題についてできるだけ支援を行

っている。
　此処の人達は今日とこれからの食事にも気を使わなければならないほど貧しい……
　そんな人達が医者に診てもらえるくらいのお金の余裕なんてあるだろうか……
　一応援助金を貰っているが……そんな物雀の涙ほどでしかない。
だから、できる限り無償で診察し治療してあげているのだ。
俺も一応軍所属で給与は貰うに貰っている。
研究費で幾分か削れる事はあるが……それでも余る事があるくらいにな……
　ちなみに、月給は９５０００Ｇ（約９５万円）と前世より少し少ないが結構貰ってる。

「此処の所、脚気になった人は……？」
「はい、先生がおっしゃられた通りにパンや豆類を食べるようにしてから極限にまで減少しました。」
「脚気はそれらに含まれるビタミンＢ１の欠乏が一番の原因です。肉類を買うのは厳しいので安い食材の方でも十分に直したり予防する事は可能ですから焦らずに……」
「先生、家のお爺ちゃんが昨日から体がだるいと訴えかけているのですけど……」
「そうですね、後ほど診にいきますのでご本人にお伝えしてください。」

　貧困は恐ろしい……滅多に掛かる筈のない病気でさえ簡単に掛かってしまうほど体が弱る事が多い。
　そうなる前には……あれをやるか……

「えー皆さん聞いてください、今後の為にもやってもらいたい事がありますので……」

―――――――――

「溜まっている泥は掻き出して、そこ……！！今、口は清潔な布で常に覆う事……！！」

「もう使う事のない古布、汚れた物……全員一か所に纏め上げました。」

「よし、細心の注意を払って火を付けて燃やしつくせ。ついでに今付けてる物もな……」

「はい……！！」

予防対策……これが一番の効果的な物だ……

要らなくなった洋服類、排水溝の清掃により病原体を死滅させる。

「ひえぇぇ～！！ネズミ～～！？」

「一匹も逃がすなよ……！！そいつら自体も病気を運ぶ元だ……！！」

「うえぇ……」

相変わらず思うが……酷いな……

援助金だけ渡したりして殆どは大した事をしてない気がするな……教団は……

今度上層部に報告書でも出してみようかな……

一応向こうもダアトの見られ方を悪くさせたくないと考えるだろうし……

やらないよりはマシだ。

「あの……先生、ちょっとよろしいでしょうか……？」

「んっ……？どうかしましたか……？」

考え事をしていると突如横から一組の男女が話し掛けて来た。

二人を見るに……夫婦か……？

「娘が４日前から熱を出して……今もまだ下がらなくてそればかりか体中が痛むと言いだしてるんです……診てもらえないでしょうか……？」

「四日前から……？」

インフルエンザの可能性もあるが……その病原体はまだ発見してないし掛かったという報告はない。

だとすると……

「ちょっと危ないかもな……」

「えっ……？」

「いえ、なんでもありません……直ぐに向かいましょう。」

先ずは診てからだ……それから判断しよう。

「お名前は……？」

「オリバーです、こちらは妻のパメラ……娘の名前はアニスといいます。」

「ではオリバーさん、パメラさん……ちょっと別の薬とかを取りに戻りに行きたいので暫く待っていてくれませんか？」

「薬……」

「あなた……どうしましょう……」

「……？」

何か問題があるのか……？

「その、先生……薬代は……必ず支払いますから……ですから……今は少し……」
「私達、今はあまり手持ちが少なくて……今薬のお金を払えるくらいあるかどうか……」
「あ～そんな事ですか……」
ちょっと嫌な事を聞いちまったなぁ……
「薬代は結構です……実質俺が今まで行ってきた治療は他ではやられて無い方法なので何というか……正規とは言い難い物ですから。」
「そうなのですか……!?そうは言っても……此処の人達は皆貴方のお陰で元気になれたといえるんですよ……!!」
「効果はちゃんとありますからね……てな訳で……薬代は無理に支払わなくても大丈夫ですよ。」
「ありがとう……ございます……」
パメラは泣きながら感謝していた。
オリバーはそれを慰めつつハーミットに礼をする。
「さて、さっそく用意するか……」
そう言ってハーミットは目的のために走り抜けていくのであった。
――――――――――
「こちらです。」
「……あの……」

「……！？……す、すみません……！！直ぐに片付けます……！！」

その後、ハーミットはタトリン達の家へ訪問したのだが……その家を見て口が塞がらなかった。

そこには……

パサッ……

「……借金の……取り立てによる物ですか……」

「お恥ずかしいかぎりです……数ヶ月前に一人の男が此処に訪れた時、その人はここの住人の名簿作成に協力してくださいと言いました。」

「それを記入してから……後日、いろんな所からの請求の紙が届くようになりまして……」

「払える訳もない金額にまで……」

掴んだ紙には罵倒や暴言が書き記されている……

それもいろんな場所からだ……

二人はそれらを家から引き剥がして行く。

「詐欺ですね……ふざけやがって……」

「心配しないでください……！きっとどうにかなりますよ……！！」

「そうです……私達は常に誠実に生きてきてますからローレライ様のお導きが私達を助けてくださいます。」

「それに……お金に固執しない方が正しく生きる事だと思います。」

この人達は……人を疑う事をしようとしてない。

いわば顔のない聖人と同じだ……

それを利用してゴミ共はうまく騙し続ける……

まさに悪循環だ……

「ささ、どうぞ中へ……娘はベッドで横になっていますので。」
「どうかアニスちゃんをお願いします……」
「わかりました……お邪魔させてもらいます。」

今はこの人達の為になにか案を出してる場合じゃない。
患者が優先だ……

ハーミットはタトリン達の家に入ると先ず思った事は質素だという事だ。
テーブルや本棚……目立つ物がそれだけしか見当たらないのだ……
その部屋を途中として次には階段を使ってこの家の二階へ向かう。
そして、其処の部屋のドアを開けると……苦しそうにベッドで寝ている少女がいた……

「アニスちゃん、もう大丈夫よ……教団のお偉いお医者様が診に来てくれたわ」
「ママ……パパ……」
「アニス……心配しなくてもいいんだよ」
「それでは、診察に入らせてもらいます。」

ハーミットはベッドの傍にあったイスを使わせてもらい、アニスをベッドから起こして診察を始めようとする。
しかし……

グッ……

アニスは弱々しい力でハーミットを押し返そうとする。

「だめ……そんな事……お医者さん……別に……いいです。」
「んっ……どうしてかな？」
「だって……お金……ないもん……」
「……」

おいおい、この子まだ5歳くらいだぞ……
お金の心配をするようになってるなんて……それでどれだけ辛い思いをしているんだよ。
この家族……このままじゃ結構危ないだろ……

「安心して、そんな心配はしなくても大丈夫だ。」
「……」
「コラコラ、子供がそういう心配する必要なんてないぞ……？」
「……ホント……」
「本当だ、嘘はつかない。」
「……」

コクッ……

解ってくれたか……さて、始めるか……

――――5分後……――――

「先生、アニスは……」
「この子は……回帰熱にかかっています。」
「かいきねつ……？」

「虱・ダニによって媒介される病原体による感染症の一種です。最大の特徴としては熱が上がったり下がったりと繰り返す物であり、他の病気を併発する可能性が多く……このまま治療を行わずにいたら……ちょっと危なかったですね……」

「アニスちゃんは……アニスちゃんは大丈夫なんですか……！？」

「この子のはまだ初期であったため、命の危険は問題ありませんでした。治療法としては抗生物質という薬を投与するか……それを足して身の回りの物を清潔に保ち、栄養をしっかりと取る事が大事です。今回は抗生物質を投与しときましたからこれからはベッドのシーツや服を日光でよく乾かしたり付着した虱やダニを叩き落しておくことが大事です。」

「はい、ありがとうございました……！！」

オリバーはハーミットの手を掴んで感謝の言葉を発する。

「いたぁ～～いぃ……」

「あははは、注射よく我慢できたね……偉いぞアニスちゃん」

「アニスちゃん、先生にお礼をいってあげてね。」

先ほどまでの緊迫感は何処に行ったのか思うくらい家の中は賑やかになり始めていた。

これでもう終わりだな……後は……

ハーミットはそう考える……が……

ドンドンドンドンッ……！！

「オリバーさあぁぁん……いらっしゃいますかぁ～？いらっしゃらないんですかあぁ～？」

何者かがこの家の前に来てる事が全員に知れた。

「……ひ……」

ガバッ……！！

「アニスちゃん……？」

ハーミットはアニスの突然の行動に疑問を持つ。

何かから怯えるようにして布団を潜るようにして深く被っているのだ。

「あなた……」

「あぁ、大丈夫だ……待ってなさい……」

「オリバーさん、まさか、奴ですか……？」

「……」

「……ここは俺に任せてくれませんか……？」

「そんな、迷惑はかけれません……！？」

「大丈夫、大丈夫……こういうのは正しいやり方で対応すればいいですから……♪」

「は……？」

「じゃ、皆さんはここで待っていてくださいね。」

そういって、ハーミットは部屋から出ていく。

後ろからオリバーとパメラが何か言っていたが気にせずに進んで行く。

階段を降り、今だ激しくドアを叩く音の方へと向かう。

「いるんでしょ～？いるならいるで直ぐ出て来てくださいよ～じゃないと……」

バンッ……！！！

「ぶっ……！！！」

「しつこいんだよ……ノックは3回とママに教わらなかったのか……？」

叩いている途中でも構わずハーミットはドアを助走を付けて思いっきり開く。

そのため、男は顔を思いっきりドアにぶつけて後ろへよろけて退く。

「何しやがるんだテメェは……！！」

「そっちこそ何してるんだ……病人がいるんだから静かに願いたいものだがなぁ～？」

「医者かお前……？じゃあタトリンを呼んで来い……俺はそっちに用がある。」

「それは何でだ……？」

「これ見ろよこれ……」

男は一枚の紙を取り出す。

それは良く見ると証文のようだった……そこにオリバーの名がハッキリと記されている。

「タトリンの借りた１００００００G……期限が今日までとなってるから今すぐ払ってもらいたいのよ。」

「それは間違いじゃないのか……？本人はお金を貢献した事はあるが借りた事は一切ないと言ってるぞ？」

「んなもんそっちの嘘に決まっているだろうが……俺はちゃんと本人が名前を書く所をこの目で見てるんだ。」

「内容を隠して何でもないようにして騙して書かせたんだろうが……」

「出鱈目言うんじゃねぇぞ……！！こっちにはちゃんと証拠が……！？」

「これの事か……？」

パシッ……！！

「て……てめぇ、返せ……！！」

「あ～、これ偽装も良い所な出来具合だな……もっとうまく作れよ……」

「このやろう……！！」

男はハーミットの顔を殴りつけようと拳を振りかぶった……

「何処へ行っても……こんな屑は居るもんだなぁ……」

ビキキッ……！！

「いぎゃあぁぁぁぁぁ――――――――！！！！！！」

ハーミットは男の手首の急所を右手で押さえつける。

余りの痛みに男は悲鳴を上げ始める。

「正直者は損をする……それは俺だって完全に否定はできないがな……」

ギリッ……！！

「嘘吐きは罰を受ける……それもありって訳だ……」

ギュルルッ……！！！

手を勢いよく振り下げて男の体を回転させて地面に叩きつける。
痛みに悶絶してる男をハーミットは冷たい目で見下ろす。

「ぐ……が……」
「来い……お前にはやってもらう事があるからな……」

そういってハーミットは襟元を掴んで引き摺り始める。
その先は路地裏へと続く……

「な……なにを……しやがる……」
「なぁに、洗いざらい喋ってもらうだけだよ。手口、真実……その他全てをな……」
「ひ……ひぃ……！！！」
「安心しろ……殺すとかそんな物騒な真似はしない。ただ、今後はこんな真似はしないようにと解らせてやるだけさ……」
「や……やめ……やめてくれぇぇ……！！！」
「お前達はそんな人達の思いを踏みにじって人を苦しめて来たんだ……報いが返ってきただけと思いな。」

そして、そのまま二人は陰に潜むかのように路地裏に入って行った……
そこで何があったのかは誰も知らない……

２０分後……

「……先生、大丈夫かしら……」
「信じるんだ……パメラ……」

二人はハーミットの無事を祈り続ける。
今まで来てたあの男は粗暴で乱暴な態度で二人を脅してくる人だ。
もしも、酷い目にあわされていたらと心配で心配でしょうがなかった。

キィッ……

「すみません、今戻りました。」

だが、二人の心配は気鬱として終わったようだ。

「先生、大丈夫でしたか……！！」
「何処か怪我は……！？」
「心配ないですよ……内密な話し合いでケリをつけましたから“暫く”はこんな事はないでしょう。」
「いいんですか……！？」
「えぇ、向こうも話の解る人でしたから。」
「先生……何から何まで……本当にすみません。」
「ですがね、二人も気を付けてくださいよ……？これからはこういう事は他の周りの人によく相談してから物事を決めてください。しつこく迫って来ても追い返すか誰かを呼んで証人になってもらうか……親の貴方達がしっかりしないで誰がアニスちゃんを支えてあげるんですか……」
「「……」」
「私が出来るのは忠告や助言ぐらいです。後は貴方達の問題です……」
「頑張ります……」

「ですが……その常に他人を思う気持ちだけは忘れないでください。思いを向ける方向を間違えない事を俺は信じています。」
「はい……」
「では、次の診察もありますので……失礼させていただきます。」

こうして、タトリン家の訪問はこれにて終了した。
彼らはこの出会いにより何を考え直すのだろうか……

それは、彼ら自身が決める物……

第４７話（後書き）

この世界の取り立てってどんなのだろうか……？
現実チックに仕上げて見ました。
タトリン夫妻の心情だけは自分にとってはなんか読みにくいですね
……

第４８話（前書き）

１２日から教習所の合宿です。
無線ＬＡＮが通れば投稿を続けていこうかと思います。
でも勉強の為可能性は低いですが……

第４８話

――――ケセドニア――――

砂漠の貿易都市として名高く、マルクトとキムラスカとの国境の境目として知られている。

ローレライ教団の元で生まれ国としてではなく自治区として存在し、無法地帯となる場ができるのが些か問題となってはいるが、他の街よりは幾分か豊かな所がある。

そこにはとある一人の薬・毒類の研究をする女性が暮らしている。

フィリス・ハ―ベルト……生涯を研究の全てに費やしてきたと断言しても良いくらいのスペシャリストだ。

「まったく、この毒草からの処方はめんどくさくて嫌になるわね。」

今日も彼女は新しく毒草からの薬作りに専念していた。

熱処理や他の薬剤を混ぜ合わせてみたりと色々しているが確実な物とまではまだ至ってない。

「ふぅ、こういう時にあの子がいてくれたらなぁ……全く、いったいどこをうろちょろしてるのかしら？」

あの子がベルケンドから姿を消して早3年……孤児院ファミリアの子供達も寂しそうでたまらない。

あの子は此処で人間以下と勝手に決められた人達にとっての希望だったのに……

生きてるからとはいえ……手紙の一つも寄こさないなんてふざけてるのかしら……

あぁもう、なんかムカついてきたわ。

次会ったら言ってやりたい事沢山言ってやる。

コンコンコン……！

「はーい、どちら様ですか～？」

ガチャッ……

「お久しぶりですフィリスさん……3年ぶりと言ったところでしょうか？」

「……あなたは？」

まさか、噂をすれば来たというの！？

青い髪、右目に縦の傷、紫の瞳……間違いない……

「ハイル君……なの？」

「失礼、ちょっと此処の憲兵に聞こえたら不味いので中に入らせてもらいます。アリエッタ、お前も中に入りなさい。」

ハイルはフィリスの家に今回訪れる事にした。

ダアトでの役柄が安定してハーミットとして名乗れるようにできたからだ。

「あなた、どうやって国境を通ったの！？」

「実はダアトへ亡命してから其処でハーミットという名で軍医として働いてるんです。そこでハイルとしてではなくハーミットという名での身分証明書をようやく発行できましてね……ケセドニアなら来れるようになれたんですよ。」

「偽装工作ね、あなた裏の手回しの仕方うまくなったわね……」

「褒めるもんじゃないですよ？」

「熱い……です。」

「ほら、水分はちゃんととって……砂はちゃんと落としてから入りなさい。」
「あら、ハイル君その子は何？……まさか新しい……」
「孤児じゃないですよ。俺の娘です。」
「な～んだ、娘さんかぁ～。」

「むすめえぇぇぇぇぇ――――――――――――！？」

「ちょっと、何時の間に子供なんて作ったのよ！？あなた結婚したの！？相手誰よ！？この３年で何があったのか包み隠さず全部喋りなさい！さぁ、Ｈｕｒｒｙ！Ｈｕｒｒｙ！Ｈｕｒｒｙ！」
「ちょ、近い近い！？いったん離れてください！」
「私への宛て付け！？２●で今だ結婚どころかデートしたこともな

い処女の私への宛て付けなのね！この裏切り者があぁぁぁぁ――――！」

「話を聞けえぇぇぇ――――！」

――――１０分後――――

「なるほどね、テオルの森で魔物に育てられた子でそれをあなたは発見してその後ダアトへの亡命の機会が回って一緒にダアトへ暮らすようになった……要するに養子ね。」

「ゼー……ハー……わ、解ってもらえたので何よりです……」

「パパ……この人誰？」

「あぁ、この人はパパの友達だよ。フィリスさんっていう人だ。挨拶しなさいアリエッタ」

「こんにちわアリエッタちゃん。それともはじめまして……かしら？」

「こんにちは……えっと……」

「フィリス“おばちゃん”」

ピキィッ……！！

砂漠の町の筈なのに一瞬雪国並の寒さがこの家に訪れた気がした。

「ア……アリエッタ……ど……どうしてフィリス“おばちゃん”なんだい……？」

ピキピキィ……！！

「パパ前に言った……です。自分より年上の人にはおじちゃんかおばちゃんを付けなさいって……」
「た……たしかにそう言ってたね……でもね……」
「ハイル……」

ゾクッ……

「イエス、マム！」

アラスカ並の極寒を持つ視線と声によりハイルは思わず敬礼のポーズを取ってしまう。
フィリスは笑顔だ……笑顔なのに目が全く笑ってない……
冷や汗と脂汗が同時にダクダクと流れてる気がした。

「こういう場合、子供に間違った事を教えた親の責任となるでしょうね♪」
「いや、その……」
「躾っていうのは大事よねぇぇぇぇ？」
「……」

逃げちゃ駄目だ逃げちゃ駄目だ逃げちゃ駄目だ逃げちゃ駄目だ逃げちゃ……！！！

暫くすると、フィリスは棚の方へ歩いていき其処から何かを取りだした。
その何かをハイルは見て顔が真っ青になる。

「なななななんですか……その蛍光塗料みたいな色した怪しい液体は……！？」
「以前失敗しちゃった物から偶然できてね……お仕置き用として取

って置いてるのよ♪」
「ち……ちなみに効果は……？」
「主に筋弛緩、自然痙攣よ♪まな板の鯉みたいにピチピチと跳ねるようになるだけだから命に別状はないから安心よ？」
「もろ第一級危険物じゃないですか！？」
「さぁ……腕を出してね……ハイル君……それとも……」
「ごめんなさい！本当にごめんなさい！許してください！見逃してください！もうしませんから！」

その後、百回ほど土下座を繰り返してなんとかお仕置きだけは免れたのだった。

――――――――――

「パパ、大丈夫……ですか？」
「アリエッタ、今ならお前が女神さまに見えるよ。」
「……？」

どこか上の空になりながらハイルはアリエッタとケセドニアを出歩いていた。
ちなみに、魔物達はダアトでお留守番中である。
今回の目的は初めはフィリスに会い、これからはダアトで鳩を通しての手紙のやり取りの約束……これで新薬作りの協力、ベルケンドへハイルの代わりにシュウ達に主旨を伝えてもらえるようにする事。
そして、もうひとつは……

「今度は何処へ行くの？」

「ちょっとした私用だ。」

目指す場所は孤児院ファミリア……ケセドニアの端でひっそりと佇む孤児院だ。

あそこには“訳あり”な子供達を引き取っている場所でもある……

５年前に初めてそこへ訪れた時にはこの世界の残酷な現実を視覚で感じた。

「ここの建物を曲がってと……あったあった……」

相変わらずボロボロだな……大丈夫なのか？

カチャッ……

ハイル達が来たのを見計らうかのようにしてドアが開かれる。

そして、ドアから１７くらいの少女が出て来た。

「～♪～～♪～♪」

鼻歌を歌いながら布団を運んで孤児院の裏側へと回って行こうとする。

まだ、ハイル達には気づいていないそうだ。

あの子は……もしかして……

「アイラ……？」

「ほぇ……？」

ハイルの声でようやく気付いたようだ。

しばらくお互いを見据える……

「お前、アイラだろ……弟のトールは元気にしているか？」
「あの……どちら様でしょうか？」
む、どうやらわからないか……
まぁ……髪も肩ぐらいに伸ばしているし、顔立ちも鏡見てみると少しは変わったと思ってるからなぁ。
「おいおい、自分の恩師の声までも聞き忘れたのか？3年前はあんなに甘えるようにしてたのによ？」
「3年前……」
アイラという少女は何かを思い出そうとして考える態勢を作る。
しばらくすると、何かが解ったように声を荒げるようにして言った。
「ハイル先生！？」
「ご名答、大きくなったな……アイラ。」
「せんせえぇぇぇ～～！」
アイラは持ってた布団を地面に放り投げてハイルの方へ走っていく。
そして、思いっきり飛びかかって来たのをハイルは受け止める。
ガバッ……！！
「おぉっと！飛びかかるとは大胆だな。」
「幽霊じゃないですよね！？本当に生きてますよね！？」
「おう、生きてる生きてる……フィリスさんからそれは違うと聞かなかったのか？」

「聞きました……けど、3年も連絡が無くて……もしかしたらと思っててすごく怖くて……」

心配掛けちゃったな……けどこっちもどうしようもなかった。
手紙のやり取りをするには送る場所で取り次ぐために一度そこへ行かなくてはならない。
この時まで指名手配者としての“ハイル”では国境は通る事は不可能だった。

「遅くなってすまなかったな……」
「せんせぇぇぇ……」

頭を軽くポンポンと叩くようにして撫でてあげるとアイラは栓が抜けたように泣き出した。
悲しい思いをさせちゃったか……

「そうだ！院長さんとニーナさんにも知らせてあげなきゃ！中に入ってください！」

そう言ってハイルから離れて孤児院の方へと走っていく。
さて、俺達も向かうとするか……

―――――――――――――

「さぁ、ゆっくりしていってくださいね？」
「いえ、これが終わったら明日までにはダアトへ戻る為に帰らなくてはなりませんから……申し訳ありません。」
「そう……ですか。ではそれまでごゆっくり……」

ハイルは院長のスヴェル、ここで共に働くニーナとテーブルで囲い合っている。
久々の対面なので積もった話もいろいろあってかはずむ。

「そうだ、此処に来たのはこれを……」

ジャラ……

「これは……」

「少しですが、運営の為に使ってください。此処は必要な場所ですから。」

ガサッ……

ニーナはテーブルに置かれた袋を紐をほどいて開けてみる。
その中には貨幣として一番高い金貨が何枚か入っていた。

「こ、こんなに!?」

「別に大丈夫ですよ?生活に困るほどお金には不自由してませんから。」

「ハイルさん……私達は贅沢がしたい訳じゃないんです。唯ここに引き取られた可哀そうな子供達に笑顔を持たせてあげたいだけなんですよ。」

「……この孤児院の子供達は身よりがいないというだけで引き取られた子ばかりじゃありません。“要らない”から捨てられたという子供も少なくありません。その子たちの心の傷はそう簡単に癒せるものではありませんから……だから、今後の為にもそれは受け取るべきです。此処があり続ける為にも貴方達はそれをする権利があるのですから。」

「……わかりました。ありがたく受け取らせていただきます。」

二人はハイルに深々と頭を下げる。

ハイルはその結果に満足した。

「けど、まさか先生がお子さんを持たれるとは……想像だにしませんでした。」

「養子ですけど……俺は本当の娘のように可愛がってますよ。」

「ふふふ、その娘さんは今や此処の人気者ですね？」

ニーナはそう言って隣の部屋の方へ顔を向ける。

それにつられて二人も顔をそちらに向けた。

そこには……

「ねぇねぇ……おねぇちゃん遊んで遊んで！」

「おねぇちゃんの髪サラサラだぁぁ……」

「いやぁぁぁ……引っ張らないでえぇぇぇ！？」

「こら、トール！アリエッタお姉さんに悪戯しちゃだめでしょ！？」

「うぅ……酷い目にあった……です。」

「おねぇちゃん次はわたしわたし～！？」

「も……もう、やめてえぇぇ～！？」

「あ～にげるなぁ～！」

「うわあぁぁぁん！パパアァァ～助けてえぇぇぇ～！？」

何かと孤児達にもみくちゃにされているアリエッタがいた。

アイラが諫めているが……間に合っていない。

「あらあら、楽しそうねぇ？」

「アリエッタ、今回は自分でなんとかしなさい。自分より年下の子供をあやすのも大事な事だ。」

「皆～！もうすぐ昼食の時間だからちゃんと準備してねぇ～？」

「「ハ～～イ……！！！」」

「パパのいじわるうぅぅぅ～！！！」

これは、そんな平和な一コマのお話……

第４８話（後書き）

次回はオリキャラ達による外伝を書こうかと思います。
内容は彼らがハイルに出会う前と出会った頃の心情です。

外伝『深淵と希望』（前書き）

今回は三人でお送りいたします。

外伝『深淵と希望』

――クロード・ラウル編――

僕は、ベルケンドで譜業に囲まれて子供時代を過ごしてきた。
父と母が同じ譜業技師であるためか……子は親に似るという事でもあったからかな？
譜業は僕にとっての最高の作品であり、人生の一部でもあった。
もちろん、その気持ちはいくつになっても衰える事はなかった。
自分の好きなように作り、人を喜ばせる為の究極の作品を目指して何時でも頑張って来た。
そんな中でも僕には仲間がいた……共に同じ志をもつ仲間達が……
皆で協力し合って……失敗したら共に反省し、成功すれば共に歓声を上げるような……
いつも一緒だった……

あの日が来るまでは……

ある時期、僕達はとある目標を目指した譜業作りに熱を入れていた。
地の……第二音素が存在する限り、動力が半無限に取り込んで動くようにする原動機と言う物を……
これが完成すれば、今まで以上に早く地上で移動する馬車に代わる乗り物が作る事が出来る。
これまでできなかった遠くへ重く、大量の物を早く運べるんだ。
いち早く完成が待ち遠しく思え、徹夜を繰り返した……その為に何度体を壊した日を過ごしただろうか……
僕らの夢は一歩また一歩と近づいていた……

けど……

そんな輝かしい夢を……

戦争が全てを持って行ってしまった……

あと一歩で完成とまでに至った時だった。
工房に突如マルクトの軍人達が攻防へ訪れて来た。
彼らは僕らの原動機に目を付けて来たんだ……
当時彼らはローテルロー橋の戦いで新しく戦争に使える技術を譜業で補う所にも力を入れていた。

だから……僕らの技術の結晶を戦艦に取り付けようと徴収しに来たんだ。

当然僕らは反対したよ……皆の生活を楽にさせる為に作って来た物が戦争の為に使われるなんて……
必死で抵抗して……原案や設計図を守ろうとした……

でも、彼らは軍としての権利で強引にもっていった……
たったの数分でだよ？数年も掛けて作り上げて来た僕らの夢がたったの数分で奪われたんだよ？

結局、それは今でもマルクトの戦艦タルタロスの一部として使われていく事になった……

僕らは悔しかった……今までの努力をコケにされたのと同じだったからだ……

そして、戦争のかた棒を担いだという理不尽な汚名を勝手に被された……

仲間達はそのショックでチリヂリになり、今では連絡をとってもいない……

僕は……譜業から一時遠ざかった……

好きだった譜業を捨てようとして……こう考えた。

音素を使わない……譜業じゃない物を作ればいいかもしれない……

でも……譜業を使わない便利な物を作るなんて、難しいこの上ない事だ……

今まで歴代の偉人が積み上げて来た譜業の理論を一切使わず、自分だけの物を作ろうなんて……一介の譜業技師である僕には無理だ。

周りの人はそんな物を作ろうと考える意欲を持っていないかもしれない……

ならば、僕一人で始めていこうと考えていた時……僕は彼と出会った。

キィッ……

「すみません、クロードさんという技師は貴方ですか？」

「あの、どちらさまでしょうか？」

工房に一人試行錯誤している時にこの人は現れた。

紹介を聞くと、どうやら新しくベルケンドの診療所に入った研修

医らしい。

「お医者様がどういったご用件で？」

「作ってもらいたい物があり他の技師達にも頼んだのですが……難しいらしくて何とかならにかと思っていた所に貴方の事を紹介されましてね、頼めないでしょうか？」

「……言っておきますが、僕は譜業を作る事を止めた人間です。ですからそんな依頼は……」

「いえ、譜業じゃないんですよ。詳しくはこれを少し見てくれませんか？」

そう言って彼はテーブルに一枚の紙を広げた。

それは……僕にとっての新たな目標と成り得るものであった。

「これは……いったい……」

「顕微鏡といいましてね……特殊な形のガラスを何枚も重ねて光を通して物を見てみるとそれが何十・何百倍の大きさにまで移して目で見る事が出来るようになる物です。」

「何百倍も……！？」

そんな物聞いたことがない！それに……この設計図を見る限り、譜業なんて一切使ってもいないじゃないか！？

すごい、こんな物があるなんて思いもしなかった！

「これは……貴方が！？」

「……そうでありそうでないと答えておきます……俺には外側の形と中身の大体までしか考える事ができませんでした。だから、もしよろしければ貴方の力を貸してくれませんか？かつて、原動機という物を作り上げた貴方になら……」

「……！？」

僕の過去を……知っているのか。

「どうして……ですか。」

「えっ……？」

「それを知っているのなら……僕に付けられた汚名も知っている筈……なのに、どうして貴方は僕の所へ……」

「……そんなのこれとは関係ないでしょう。」

「……！？」

関係……ないだって……！？

「人の過去による選りすぐりなんかしてたら進める事なんてできはしない。十分な実力があるのなら俺はその人の過去なんか気にせずに認める事もする方向ですから。」

……変な人だ。こんな時代にこんな人が居るなんて……

「それで、答えは……？」

もちろん、決まってるよ。

「……受けましょう。こんなおいしい機会……二度とない気がしませんから。」

もう一度、頑張ってみるのも悪くはないかな……

「そういえば、これ……ここらへんが物理的に間違ってますので。」

「げ……マジですか。」

――フィリス・ハ―ベルト編――

ハ―ベルト家……その言葉を聞くだけで私は昔、険悪感を抱かずにはいられなかった。

なぜなら、私はかつて３００年前……伝説の殺し屋とよばれたドルード・ハ―ベルトという男の子孫であるからだ。

ドルードという男は毒殺を主に好んで使い、その犠牲となった人間は１００人では済まされない。

その中には幼子もいたという話だ……

彼は善も悪もなく、ただ殺しを追求した毒を生涯研究し続けたとされる。

私の母はその血をひいており、むろん私にもその血は受け継がれている。

たった其れだけで……私達家族は人間以下という烙印を勝手に押された……

幼い頃、私はバチカルに住んでたそうだ。

今では思い出したくもない記憶ばかりが其処にはあった……

仲間外れにされるのは当たり前……血の事で気持ち悪いと言われるのも少なくは無かった。

しょせん人間の寛容力なんてそんな物だ……その頃から私はそう思うようにした。

当然、母にもその矛先は向かっていた。

父にはなんでそんな女と結婚したのか皮肉をいわれる仕舞だ。

私もその疑問を持った事があり……そこで母にその質問の逆を問いた事があった。

――どうして母さんは父さんと結婚したの？――

己の血を誰よりも知り、その人を不幸にすると解っていながらもなぜ？

すると、母は私にこう答えて来た。

――私を怖がらなかったのが……お父さんが初めてだったのよ――

母さんは続ける……父さんは本当に気持ちの優しい人で両親の反対を押し切ってまで一緒になりたいと言ってくれたの。

その時の彼の気持ちは一生かかっても貰えないくらいすごく大切なものになったわ……

その気持ちがあれば、いかなる不幸が立ちふさがっても、一緒に乗り越えていけると……

だから、私はあの人と結婚した事を一切後悔したことはない……て。

私は改めて解った。

二人は愛していたから……ずっと一緒にいたかったから。

だから結ばれたんだ……

それだけで十分だったんだ……

母さんは、私にも自分の人生に味方がいればどんなに心強くなれるかと教えてくれた。

また、一人の人間にあなたといて良かったと言われれば、自分の人生も報われて、こんな私でも存在意義があったのだと納得でき、自分も人を愛することのできる人間だという証明にもなるのだと……

私は、母さんと父さんの娘として生まれた事に誇りに思う。

だから、誰が何と言おうと私は自分の人生が不幸だなんて決して思わないようにしたわ。

そこで、私は毒薬について猛勉強を始めたの……

たかがこんな物でどうこう言われるのなら、これについて誰にも負けないくらいの知識を持てるようになってやると……

未だに学会とかに新しい発見とかあっても発表したりしないのはその決心からが原因だろう。

そして、両親とも離れて暮らすようになり、一人毒薬についての研究をしていた頃にだった……

あの子と出会うのは……

バタンッ……！！

「失礼します。こちらにフィリスさんと呼ばれる方がいらっしゃいませんか！？」

「……フィリスは私だけど……何か用でしょうか！？」

「お願いです。力を貸してください！患者を治す為にもとある薬が必要なんです！？」

「くすりぃぃぃ？私は毒の専門家よ。薬なんてお門違いだわ。」

「いいえ、薬は元より毒から生まれた物……毒から薬を生み出す事はできるんです！？」

何この子……いきなり熱く語っちゃって……

「……いいわ、話だけでも聞いてあげるわ。それで、どんな薬が必要なの？」

「はい、実は……」

偶々遍歴医としてここケセドニアに訪れていたこの子は今までにない薬の生成法を私に詳しく話した。
その内容の中には私が研究していた生成法も何個か入っていた時には驚いたりした。
この時思った……この子と一緒に研究すれば……すごい物が生まれるかもしれないと……

そして、治療の全てが終わったある日、私は自分についての事を暴露してみた事もあった……けど、あの子は平然としていた。
予想だにしなかった反応に私は尋ねた……恐ろしいとは思わないのかと……
けど、あの子はこう言った。

「そんな恐ろしい人がどうして人の命を助ける為に頑張る事ができるんでしょうか？それを考えること自体可笑しいじゃないですか。貴方は素晴らしい事をしたのですから……」

笑ってそう言ってのけた……

私は……その答えに笑ってしまった。
今まで見つからなかった答えがこんな所にあったのだから……

――――ゼノン・フォルト・ブリジスト編――――

俺は、ベルケンドじゃ嫌われ者とされていた。
侯爵家の子息として生まれて何不自由なく暮らしてきた俺は自分

が他の人間よりも偉い存在だと勝手に勘違いするように育ったのが原因だろう……

ゴロツキ達を金で従わせ、父親の領地であるベルケンドで好き勝手にやるのがこの頃の俺の趣味でもあった……

誰も俺のやってきた事に何も言わなかった……いや、言えなかったんだろうな……

現に人の人生なんか簡単に潰したこともある。

こうして粋がっていた俺が先生に出会ったのはとある料理店に入った事がきっかけだった……

「よぉ、親父繁盛しているかー？」

「こ、これはゼノン坊ちゃま！？何故このような所で……！？」

「いやー俺のダチが腹減っちまったて言うからさぁ……飯食わせにわざわざ食わせに来てやったって訳。」

ゼノンの後ろには街の不良として有名な人間が何人もこちらを覗っていた。

中には変な笑みを浮かべたりと店主の表情を面白がって見てたりしていた。

「じゃ、１０人分くらい作ってくれや……十分ぐらいでな……じゃなきゃ無料って事で。」

「そ、そんな！？」

「文句あるのか？じゃあそんな店いらないよな……なぁ皆？」

「そうだよなぁ～？」

「料理がお客様の言う通りに出せない所なんて必要ねぇもんなぁ～？」

店主は顔を真っ青にしていた。

このままでは商売上がったりだ……下手すれば店をたたむ事にな

るかもしれない。

そんな時に入口のドアがベルを鳴らして開くのだった。

「親父さんお久しぶりです。今日は……ん？」

この日、ハイルは久しぶりに外食をしようとこの店に偶然訪れて来たのだ。

店に入った途端、奇妙な集団が眼に入り疑問に思う。

その中、ゼノン達はハイルに詰め寄って来た。

「兄ちゃん、悪いけど今日は俺達の貸し切りなんだよねぇ～？」

「また今度にしてくれねぇかな？それとも俺達とメシを食うか？」

「そりゃあいい、じゃあ兄ちゃんの奢りって事で！」

彼らは何時も通り弱者を虐げるようにして好き勝手に言い始める。

これで何時も思い通りにしていたからだ……だが、彼の場合違った。

「そうかぁ、お前らこの頃ベルケンドで騒がしてる不良共って訳か。」

「は？それがどうかしたのか？」

「俺達不良はここにいちゃ駄目っていうのかあぁ！？」

そう言って不良の一人がハイルに手を伸ばそうとした。

ガシッ……

だが、それをハイルは掴んで止めた。

「コラコラ、いきなり暴力はダメだろ？」
「な、掴むんじゃねぇ！？」

いきなり掴まれた手を振り払った……そこで不良はその右手に違和感を感じた。
……外れていたのだ……手首が……

「うわあぁぁぁ！？なんだこりゃあぁぁぁ！？」
「あ、すまん……つい癖で関節外しちまったわ。直ぐ戻す。」

ハイルはすぐさまその男の右手を手に取り押し込むようにして関節をハメ治した。
彼らはその一連の行動に動揺を隠せなくなりつつあった……

その後はどうなったか詳しくは省かせてもらおう。
店で暴れさせぬようにハイルは外でやる事を提案し、彼らはベルケンドの近くの外でやり合うことに決めた……
そして、また一人また一人と彼の柔術と譜術で倒されていき……
2・3人ぐらいになった時であった。

「お、おまえ！？こんなことしてどうなるか解っているのか！？」
「お前らこそ何してきたかちゃんと解ってるのか？」

その中でゼノンは怯えながら少しづつ近づいてくるハイルから逃げようと後ずさりしていく。
しかし、そこで彼に悲劇が訪れる……

「……！？危ない！？」
「えっ……？」

バッ……！！

ゼノンの足元の草むらから何か飛び出して来たのだ……それは、蛇系の魔物で……毒を持つ事で知られていた。

飛び出してきた魔物はゼノンの脛の横辺りに噛みついたのだ……

「うおぉぉぉぉ――――――！？」

「た……大変だ、坊ちゃんが毒蛇に咬まれたぞ！？」

「た……助けてくれぇぇ！は……早く医者を呼んでくれぇぇ！」

「けど……」

「お～い！大変だあぁぁ！」

その途中、街の方面から男が一人走って来た。

その男は傍にいた他の仲間達に耳打ちをし始める。

「へ～……」

その話を聞き終わったと同時に彼らは微笑を浮かべ始める。

「どうしたんだ！お前ら何故助けない！！早く医者を呼んで来いって言ってるだろうが！？」

ゼノンは何もしない仲間達に叫ぶ……だが、帰って来た言葉は……

……

「無理だな……毒蛇に咬まれた奴はたとえパナシーアボトルでも助かる確率が低いんだぜ……それに……いいこと教えてやるよ。」

「お前の親父、王宮で下手こいて危い立場になっちまったんだとよ……だから、貴族とかそんな地位もう持てないかもしれないんだってな……」

「……！？」

ゼノンにとっても衝撃的な事実であった……

「大体お前良い気になりすぎなんだよ……今まで後ろにお前の親父がいたからこそ俺達もどうこうなかったけどよぉ……それがなくなっちゃお前なんか価値ないしな？」

「居なくなってせいぜいするかもな。今まで俺達の事こき使いやがって。」

「あ～疲れた。やりたい放題もこれで終わりだな。とっとと死んじまえ！」

「おい、待てよ……何処行くんだよ。おい、助けてくれよ！？助けてくれえぇぇぇ！！」

結局、彼らにとってゼノンは罪から逃れる為の隠れ蓑であり……甘い蜜をする為の道具であったのだ。

それが無くなった今、彼についていく利益はない。

彼らはゼノン自身を仲間とは思ってなかったのだ……

「いやだ、死にたくない……苦しんで死ぬのはいやだ……死にたくない……」

離れてゆく嘗ての仲間達の後ろ姿を見ながらゼノンは涙を流して地面に蹲る。

このまま彼は毒で死に導かれる運命となるのか……そう思われていた時にだった。

ザッ……

「……？」

砂利を踏む足音が響いた方へゼノンは顔を向けて見る。
そうすると共に自分の体がひっくり返される感覚に襲われる。
改めて良く見ると、傍にはハイルが此方に近づいてきていたのがわかった。
そのまま、ハイルは彼の毒蛇に咬まれた方の足を高く上げる。

「な……何しやがる！？」
「騒ぐな！騒ぐと余計に毒が回るぞ！俺に任せろ……」

それからは、今でも鮮明に覚えている……
咬まれた跡をメスと言う物で切り開いて……先生が元から持っていた液体を振りかけ……俺にはパナシーアボトルを飲ませ続ける……
その行動が一つ一つ綺麗で……いつの間にか見取れていた。
そして、先生は最後の仕上げと言わんばかりにケースから何かを取りだした。

「これはまだ試作段階の血清だが……こいつを打ってみる。うまくいけば助かるかもしれないぞ。」

そんな時、俺は今では先生にとって愚問とも言える質問をした。

「なんでだよ……」
「んっ……？」
「さっきまで、俺はアンタに酷い事をしたのに……」
「……それとこれとは関係ない。目の前に患者が居れば救うのが医者としての使命だ。それに……」

「命は尊い物だ……それはお前にも言える。未来ある存在なのだか

らな……」

今でも残る右足の傷は俺にとっての最高の宝物だ。
俺と先生が出会った証であるこの傷跡は……

俺はあの日を境に目が覚めた……
そして、一から人生を出直す事に決めたんだ。
必死に勉強して、今や親父の代理としての当主を立派に務めれるくらいだ。
けど……これは俺の終着点じゃない……

おれは……あの人のような……立派な医者になる事が夢なのだから……

外伝『深淵と希望』（後書き）

他が書けなかったのは力不足という事ですみません……
またいつか外伝を書こうかと思います。

第４９話（前書き）

ここら辺になると結構複雑に出来事が多くなってくるから目が回ります……

第４９話

「今日は……良い天気だね。窓から入ってくる木漏れ日がとても気持ちが良い。」
「……えぇ。」

ローレライ教団のとある一室で二人の人間が言葉を交わし続ける。
一人はベッドに一人横たわる白髪交じりの茶髪をした齢６０になろうかと思われる老人……
もう一人はその傍にある簡易式のイスに座って老人と目を合わせ続ける青髪の白衣の男……

老人の方は衰弱した顔つきで……白衣の男はこれ以上何も言えないと考えているような顔をしている。

「そう気を重くする事はないのだよ……君は本当に頑張った。」
「俺が貴方に施した事は……正しかったのでしょうか？」
「そうするよう選択したのは私自身だ。君が間違った事をしたとは思っていませんよ……」
「……これを限界にする事は俺自身拒み続けた……けど……もはやこれしか方法が無かったんです。」
「珍しいね……君のような人間が弱音を吐いていたなんて。」
「俺だって人間ですよ……弱音を吐く事なんて何度もあった。」

彼にとってこの老人は患者であったが……今の技術では直す事は不可能だった……
末期のすい臓癌……これがこの老人の病名だ。
前世とは違い、完全に復元しきれていない彼の医術では薬を使っての延命ぐらいしか施せなかった……

それが彼の悔しさだった……救いたいのに救えない……
一番嫌いだった事実が圧し掛かっていたのだ。

「この教団にはもう私が出来る事は何一つありませんから……」
「だから、死ぬ覚悟はできていると？」
「そう言う訳じゃないんですよ……」

老人は体を斜めにして彼の方へ向きあうようにする。
その中若干苦しそうな声が出て心配したが……なんとか持ちこたえる。

「私はこの教団で働き続け、中立の立場を貫き通してきた。己の信念に基づいて……預言についてのあり方を説いて来ました。それまで私はオールドラント中の人々を支えられた事に満足しているのですよ……しかし、導師という立場である以上……人の生死にまで関わらなくてはならなかった。」
「……辛かったですか？」
「それはもう……それに、次期導師であるイオンは預言によって詠まれた子ですが……私はあの子自身の人生を壊してしまった。私があのような預言を詠んだばっかりに……それが今私にとっての一番の心残りです。」
「イオン……その子はいったいどんな子なのですか？」

今までイオンの名を聞いたが、姿も性格も聞いたことが無かった。
この老人ならば彼の事を一番よく知っているだろう。

「あの子はきっと……自分を今のようにした原因である預言を憎んでるでしょう……けど、それと同時に誰よりも寂しがり屋なんです。だから……誰かを傷つけてそれを紛らわそうとしている。」
「傷つける……！？」

「あの子はこのままでは人としてしてはいけない事に手を出しかねません。私も何とか止めようとしましたが……あの子の心の殻を破るには力不足だったんです。」

自分にはもうできる事が無い……つまり、そう言う事か……

自分ではできないって意味なのか。

「なぜ、俺だけにこの話を？」

「今、あの子の傍には君の娘が付き人をしていると聞きましてね……最悪の場合を考えて伝えておいた方がいいかと思ったんですよ。」

「……」

つまりあれか？アリエッタが危ないかもしれないかって……？

……大げさかもしれないが、念を入れるには越した事は無い。

「だから……君に託したいんです。私が成せなかった事をあの子に近い関係を持つ者の家族である君に……」

「子供の躾治しですよね……実質それって……」

「ははは、ハッキリと言うねぇ……」

老人は彼がさらりと言った言葉に苦笑を浮かべる。

「でもそんな所がいい……私はそうしてくれる君が気に入ってた。」

「まぁ……他人が居ない時だけですけどね。」

「私も初めは孤独でした……導師としてではなく、私として見てくれた人間は３０年の間で数人ぐらいしかいませんでした……その人間も多くが先に逝ってしまった。」

「……」

「ようやく……彼らに会える……そこで、君にお願いしたいんです。」

「……なんでしょうか？」

――君は、私の死を導師エベノスとしてではなく……唯のエベノスとして悲しんでくれますか？――

「それだけを……それだけをしてくれるのなら私は生きて来た意味が解る気がするんです。」

「死は常に平等……それが遅かれ早かれ……誰かに価値を決めてもらうような軽い物じゃありません。」

「……そういう考えをしてくれる人が多くいたらこの世界は少しは良くなれるかもしれませんね。」

何処か遠い目をして窓に目を向ける。

己がしてきた事に何か想うようにしながら……

「少し……話疲れました……」

「お眠りになられますか？」

「すみませんねぇ……なんだか、目が重くなってきた感じがしまして……」

「……無理はなさらないでください。」

徐々に瞼が閉じていくのがわかる……もう、これ以上は……

その時、布団から導師エベノスは右手を出し始める。

それをハーミットは両手で握り返す。

「あの子を……できるだけ……支えてくれるように……」

「善慮します……安心して……」

その言葉に導師エベノスは微笑み、ゆっくりと頷いた。
そして、眼は完全に閉じ……右手は力を失った……
その右手をハーミットは布団に戻し、最後には綺麗に整えてあげたのだった……

「願わくば、貴方の死後が良い旅路であらん事を……おやすみなさい、エベノス様。」

――――導師エベノス：崩御――――

導師エベノスの死は迅速に世界中に知られ、誰もが彼の死を悲しんだ。
葬儀には各国の代表も訪れ、誰もが彼に黙祷を捧げた。
俺もオラクルの一員として同じようにしていた。

その二日後……新しい導師が即位する事となった。
その名はイオン・ダアト……僅か8歳という最年少の導師として知られるようになった。
初めて導師イオンを近くで見た時……俺は導師イオンが即位式で

集まった人達を見る目に違和感を覚えた。

経験からして……アレは愚者を見る目と同じ物だ……

導師エベノスの言っていた事は正しかった。

それが解ると同時に……少し怒りを感じた。

勝手に決められた人生には同情はする……だけど、俺からしてみたらそんな物など小さい……

人の全てを見極めてるかのような考えをしている事が腹立たしい……

アリエッタは前に導師イオンを良い人と話した事はあるが……それはきっと仮面だろう……

つまり……信頼できるとかそんな気持ちは持っていないのかもしれない……

そういえば、他にもいろいろあるな……

一番大きい事はヴァンが謡士に昇進したことだな……まだ２０なのに謡士とは……

他の言い方で言えば将軍の次の大将の位じゃないか。

ますます上の存在へ行くから雲の上の存在ってか？

だが、この頃ヴァンの行動が可笑しい……

執務を留める事が多くなったり本部で最近見かける事が少なくなったりと……

一体どうしたんだ？何をやってるんだ？

俺の方にも何か引っかかる……何か重要な事を忘れている感じがする……

秘預言で次に起こる事はＮＤ２０１８だ……

まだ7年の猶予がある筈なのに……

一体何を……

Ｓｉｄｅ：ヴァン

「ディスト、調子はどうだ？」
「えぇ、ばっちりですよ！まさかローレライの完全同位体のレプリカを作れる日が来るなんて夢にも思いませんでしたよ！？」

これからが始まりだ……私の世界への復讐の用意が……

「師匠！どうして……どうしてこんなことをするんですか！？」
「ルーク、これはお前の為でもあるのだ……後に預言の成就のために道具と化せられるお前の。」
「それはどういう……」
「時間がないのだ！大人しく私の言う事を聞きなさい。」

ヴァンは一人の赤髪の少年の手を強引に引いて奥にある巨大な譜業へと連れて行く。
ルークと呼ばれた少年は今だ自分の師のやる事に意味が解らないままでいる。

「貴方達、ヴァンの手助けをしてあげなさい。その少年をフォミクリー装置にさっさと寝かしつけなさい。」

ディストは傍にいた他の研究員に催促する。
数人の研究員がヴァンに代わってルークを装置の方へと連れて行く。

「放して！なにするんだよ！？」

ルークも必死に抵抗するが、子供が大人の力にかなう筈なくそのまま装置の台へと横たわらせられる。

そして、其処にあった手枷と足枷で拘束して装置から離れていく。

「さぁさぁさぁ！いきますよ！？このディスト様による奇跡の瞬間をとくと御覧なさい！」

ディストはパネルを操作して装置を徐々に起動し始める。

不気味な唸りを上げて装置へ第七音素が取り込まれていく。

「よし、レプリカ情報と混ぜ合わせてと……複製です！」

その声と共に装置の作動は始めた。

「うわあぁぁぁぁぁぁぁ――――――！！！！！！」

まずルークの居る台に眩い光が上から一直線に浴びせられる。

そして、次には下の台へと通して電気が迸るような音と共に何かが形成し始める。

それは除々に人型へと変わり始め……顔が、手が、足がと複雑な形へとさらに変わっていく。

その作業は２０秒足らずで終了した……

その場に残ったのは……

ルークと瓜二つなもう一人の【ルーク】がその場にいた……

「成功したか……」
「見てくださいよヴァン！この音素振動数を！？被験者（オリジナル）と全く変わりません！完全同位体です。」
様子を見ていた二人は別の意味でそれぞれ喜んでいた。
だが、成功したのは共通だ。
「レプリカの音素が安定するのはどれくらいだ？」
「培養液にいれてからおよそ丸２日って所ですかね？それより私は早くデータを取りたいんですからチャッチャと終わらせてくださいよ。」
「ふ……承知した。」
ヴァンは“ルーク”の居る上の台の方へと足を運ぶ。
そこには疲れ切った様子のルークが此方を薄らと見ている。
「お前は国の繁栄の為に秘預言の生贄とされるところだったのだ。『ＮＤ２０１８……ローレライの力を継ぐ若者、人々を引き連れ鉱山の街へと向かう。そこで若者は力を災いとしキムラスカの武器となって街と共に消滅す。しかる後にルグニカの大地は戦乱に包まれ、マルクトは領土を失うだろう。結果キムラスカ・ランバルディアは栄え、それが未曾有の繁栄の第一歩となる。』これがお前の来るべきだった未来だ……」
「せん……せい……？」
「私はお前を失いたくはない……だから、預言の成就にはお前のレプリカを代わりにやらせることにしたのだ……これならば預言に反する事はないのだからな……」
「……」
「今は眠るがいい……詳しい事はまた後で話そう。」

そして、ルークは完全に目を閉じた……どうやら眠ったそうだ。
ヴァンは近づいてきた研究員の指示を出す。

「この少年を地下牢へ入れてこい……絶対に出すな」

その言葉を受け取って研究員達は一度頷き、ルークを背負って行った。
下の方は他で何かしているようだが……ヴァンはそちらには行かずディストの居る方へと再び戻る。

「計画は順調だ、二日後に私はファブレ公爵家にコーラル城でルークを見つけたという情報を流す……お前はフォミクリー装置が発見されぬようちゃんと処理をしておく事だ。」
「わかってますよ。ですが、たかが二日だけしか研究する事が出来ないなんてそんなの……」

「私に口答えする気か、ディスト……」

ヴァンは己の長剣を鞘から少し抜くようにしてディストを脅した。

「～～わかりましたよ！まったく……あれがどれほどすごい事かわかってないんですから……」

ブツブツと呟きながら最後にはディストはその場から去っていく。
ヴァンはそれを見送ってから上から下の台を見下ろした……
そこには研究者達にいろいろな処置を施されているレプリカの姿が見えた。
それを見ながらヴァンは……拳を強く握りしめる……

「始まるのだ……全てが……」

狂気と言う物は……恐ろしく人を変える物だ……

第４９話（後書き）

エベノスの死とオリジナルルークの誘拐のどちらが先かは不明ですが……ただ、ファミ通小説版では誘拐直後に崩御していました。
これは誘拐されて監禁されている間にエベノスが崩御したという設定です。

第５０話（前書き）

教習所内でＬＡＮ繋いでなんとかできるようになりました。
ＭＴ車はクラッチの存在で躓くから結構嫌になりますよ……ホント……

第５０話

――訓練場――

ここオラクルでは日々一般兵から謡将まで共通の鍛錬場として設けられている。
剣術での……槍術での……譜術での等とジャンルはそんな個人個人が決めてそれらに会った方法で行われる。
また、年に一度響長への昇格審査等を行う場でもあり……上を目指して兵士達は自身の腕を磨き続ける。
そんな中にハーミットは一人隅っこで色々としていた。
彼の周りには様々な工具が散らばっており、その中心には彼の武器である狙撃譜銃が部品を少し解体された形になっている。

「たく……この頃暑かったからフレームがちょっと歪み始めたか……めんどくせぇな……」

愚痴を言いながらも彼は工具を使ったりして狙撃譜銃の手入れをしていた。
その様子を何人かその場にいた兵士達が遠くから眺めている。
大方物珍しさからだろう……

「よいしょっと……先ず一発目と。」

ドオゥゥゥゥン……！！！！！

一度試し撃ちとして彼の向く正面から約５０m離れた前世ではポピュラーな形をした的にスコープ越しに照準を合わせて的を撃つ。
しかし、中央を狙った筈だが右に二?ほどずれている為調整のや

り直しとなる。

「この……！」

キリキリキリッ……

ネジを回して固定器具を左に少しだけ変える。

それからまた試し撃ちをするが、今度は斜め左上にずれた。

二回目……三回目と続いてようやく調整が終わったのは八回目なのであった……

「さてと、ここからが本番だ……」

ハーミットは訓練場から離れていく。

周りの一般兵はこれで終わりかと思っていたが……姿を追って見ると梯子を使って上へ上へと登っていたのが見えた。

そこから察するにどうやら距離を変えることにしたようだ。

初めは５０ｍだった的が１００ｍ以上にまで離れていた。

手摺のような所で三脚を置いて固定し、そこからスコープを覗き始める。

先ほどより小さく見える的が映り、その中の中心を探し当てる。

そして、照準の十字の中心を的の中心に合わせようとして手首を繊細に曲げていく。

「Ｌｏｃｋ……」

そして、定めが決まり……トリガーに指を掛けていく。

キリキリと小さな歯車が回転していく音が静かに響き渡っていく。

そして……

「Ｆｉｒｅ「すばらしい～！？」～～！？」

発射する直前に左から何者かの声が発したため驚いて銃口が斜め上に向いた。

そこから発射音と共に譜弾が天井に穴を開けた。

「アアアァァァ――――――――！！！！？」

ハーミットはその結果に思わず叫んだ……

なんせ、天井にはダアトにとって大事な絵が描かれているので…

…そこに穴を開けてしまったから……

バレたらヒジョーに不味いのである。

訓練場にいた兵もその光景に唖然として固まっていた。

「言うなよ！？言ったら全身検査の日早めるからな！」

ザッ……

彼らはその言葉により明後日の方向へと向いた。

それもその筈、ハーミットによりここオラクルでは年に二回の全身検査……云わば人間ドックが行われているのだ。

その検査の中にはヒジョーに嫌な物も入っているのでやりたくないと思わずにはいられない物も……

それが決まりよりも早くなることなど悪夢以外他ない……

「……さてと、何か弁明はあるかおま「このフォルム、構造、譜の通し方、爆発力の促進……これこそまさに譜業の芸術！！」……

…」

なにやら目を離した隙にこの男は彼の狙撃譜銃をペタペタといじくり回していた。
まるでハーミットには眼もくれないというように……

「おい「うるさいですよ！私は今これの秘密を暴いてみたいんで」（ガシッ！！）んん～～～！？」

流石に怒りたいので右手で男の口を覆うようにして顎を掴みかかる。

「お前のせいで（ミシミシッ！！）大変な事に（ピキキッ！！）なっちまったじゃねぇか！」
「ん～！ん～～！？」

力の限り握る……この際手を傷つけないとかは無しだ……
途中で男は顎を腕から放させて口を開く。

「ま……待ちなさい！！私が何か悪い事をしたというならこの通り謝りますから「あぁん！？」ひぃ……！？」

ヤンキー化した口調のハーミットに話し合いなどあまり効果は望めない事を男はまだ知らなかった。

「……そういやあんた、何者だ？」
「よ……よくぞ聞いてくれました！この私こそ譜業の天才ディスト様です！」
「……ディスト？」

そういや顔を良く見てみれば本人だな……

む、ここは……許してやる？
いや、後でもう一度シめようそうしよう。

実はハーミット、ディストに少しばかりか借りがある。
アリエッタの誕生日のプレゼントとして動く人形が欲しいと言ってたから一度ディストの所に依頼して作ってもらった事がある。
その時研究中で後ろ姿でしか話しあってなかったから俺の顔なんて覚えてないだろうな……
それで出来上がった人形だが……

まぁねぇ……喜んでんだからいいんだが……さすがにお化けのようなのを何体も重ねて繋ぎ合わせた人形って……こいつの趣味が少しわかる気がする。
アリエッタは一緒に住んでた魔物に似ている所があるで気に入っているが……
しかもあれ……本当に動くんだぜ？ピコピコって……事情を知っている者でそれが子供なら受けるかもしれないが……それ意外なら恐怖映像以外他ないんだよ。
現に前目が覚めた時、ベットの枕元でこちらを見るように手足を動かしてた……アレはかなりビビったわ……

「チッ……今回だけは見逃してやる。邪魔する場合なら別だが？」
「邪魔はしませんよ。ですが、お互い有益な話を上げようじゃありませんか？」
「……なんだって？」
「あなた……手入れがあまり得意そうじゃありませんね……現にしている所は外側の部品だけ、譜業の類には一切手を触れていません。そんなんだと近い内お釈迦になりますよ？」
「む……」

そうだな……銃としての手入れはできるが、譜業類は専門じゃないからあまりできないからな。

「其処でこうしましょう。私にそれを整備、手入れをさせる代わりにそれの構造を一度調べさせて頂けませんか？」

「お前が手入れ？譜銃なんか使った事あるのかよ……？」

「分解して調べた事は何度もありますからパターンは頭の中に入ってますよ。」

「そうか……」

話からすれば一石二鳥だがなぁ……失敗する事は……可能性は少ないな。

この男はあのサフィール・ワイヨン・ネイスだ……

あのフォミクリー理論を譜業で完成させた１００年に一人と呼ばれたほどの天才だ。

それと同時に……変人だ……

服は派手さを求めた物だし笑い声がＨＡＨＡＨＡだったりと可笑しい所満載です。

そういやこの前譜業メカを作ったって言ったな……名前はたしかタルロウ……だっけ？

まぁ、そんな所は除いて……俺にも損じゃない話だなこれは……

「……じゃあ、頼む。下手に弄るなよ。」

「わかってますよ！さぁてとぉ～……さっそく私の研究所へ持って行きましょう。ハーハッハッハッハ！！」

そのまま笑い声を上げながら俺の狙撃譜銃を持って行った。

……よくよく考えてみたら本当にこうして良かったのか今になって不安だ。

こうなったら今日の訓練は終了させよう……午後から勤務の時間

が始まるからな、今日は。

―――――――――

そして、その１０時間後……

「……ディスト。」

「どうですこの完成度は！？今までのとは比べ物にならない性能度を誇る物と生まれ変わりましたよ！？」

……あの時の胸騒ぎはこれか。

今テーブルの上に置かれている狙撃譜銃を見てもう何も言えなくなった。

「なぁ……俺は整備と手入れを頼んだ筈だが？」

「いや～あれこれ改善している内に此処までやってしまいましてね。」

目の前には……昔の名残もなく余計に改造された俺の狙撃譜銃が置かれていた。

なんだよこれ！？こんなにデカくしやがって……これじゃあ２０ｍｍ経口のアンチ・マテリアル・ライフル並じゃねぇかよ！？

「こんな物……どう扱えっちゅうねん……」

目の前の物を見ててゲンナリした。

解体しても持ち運びしにくそうだな……完ぺき言って……

「すごいでしょう！パワーは前より3倍……回路の本数を増やして普通の譜銃並に連射率を調節できます。これぞこのディスト様の最高傑作の一品！素直に喜びなさいハーミット！！」
「あのな……俺が言いたい事はな……」
「……？」

「余計な事が多すぎるんじゃあぁぁぁぁぁぁぁぁコンのボケがあぁぁぁぁぁぁ！！！！！！」

その後、ディストはハーミットの“秘密の診断”を受けさせられる事になるのだった。

「ぎゃあぁぁぁぁぁぁ！！うわあぁぁぁ～～やめ！？ひぃぃぃそこはあぁぁぁぁ！！！たたたたすけてえぇぇぇぇぇジェイドオォォォォォォ――――――――！！！！！！」

恐らく届かぬであろう自身の親友（？）の名を叫びながら小一時間耐え続ける事となったのだ……

――――――――――――

その明日……ハーミットにまた更なる出来事が舞い降りてくる。

バンッ……！！

「どういう事だアリエッタ！？」

「お願いパパ！アリエッタ……導師守護役（フォンマスターガーディアン）になりたい、です。」
「いや、導師イオンとは付き人としての関係を持っているからそんな必要は……」
「もう、それ……できないかもしれないって……イオン様、導師になっちゃったから……お仕事の為に必要なくなるかも……って……」
「うむぅ……」

次期導師としての時では導師守護役は皆前導師エベノスに回っていたからなぁ……
今や導師となったイオン・ダアトには個人の付き合いとしての関係を持つ人とは接しにくくなりつつある立場だ。
それがアリエッタに当てはまったという訳か……

「導師守護役になる為にはアリエッタ……戦えるようになりたい、です。だから、パパ……譜術を教えて。」
「だめだ！？導師守護役になるということは自身も危険に遭遇するという事だ……それにお前はまだ９歳じゃないか……最年少でなった他の導師守護役でさえも１２歳からだぞ！？」
「アリエッタいっぱい頑張るから！！……他の導師守護役よりもできるようになるから……お願い……パパ……」
「ぐ……」

やっぱりまだ子供だ……目の前の幸福だけを望んでいるだけだ。
後からの危険や不幸について深く考えられていない……
アリエッタ、お前はそんなに導師イオンの傍に居たいのか？
俺はイオン・ダアトが導師としての仮面をかぶっているその姿を詳しく見ている訳じゃない……
お前が導師の何を気に入ったか……たぶん優しくされたとか単純な事だろう。

俺は導師イオンの本心が解らない事にどこか恐怖を感じているのかもしれない……

親として見守る以上わざわざ自分の娘を危険な目に遭遇する可能性に近づけさせる訳にはいかない。

「……この話はまた今度だ……じっくり話し合う事にしよう。」

「……じゃあ！？」

「違う……認めるとはまだ言ってない。これからその事について考えさせてくれ……」

「ぁ……」

「……仕事に行ってくる。今日は好きなようにしてなさい。」

バタンッ……！

ドアは閉まり、部屋では静寂が生まれる。

その中でアリエッタはベッドの上でお気に入りとなった自分のヌイグルミをぎゅっと抱きしめていた。

「アリエッタ……大丈夫だもん……」

その言葉は、どんな意味を含んで呟いたのか……

彼女以外知る事は無かった……

第５０話（後書き）

アリエッタはオリジナルイオンが導師になったと同時に導師守護役になったんですよね。
でもこの話では保護者がいますので……モメル予感！？

第５１話（前書き）

ようやく運転に慣れてきましたね……ですがまだ厳しい状況ですが頑張っております。

第５１話

「先生……どうかしたんですか？」
「ディノ……俺は、人生最大の選択を迫られているんだ……聞かないでくれ。」
「は……はぁ……？」

ずっと考えているんだが……良い考えが思いつきません！！
Ｈｅｌｐローレライよ……お前偶には役に立てよ……実質的に神様だろうが……しかも現実的にも存在するし……
許可するか、許可しないか……たった二択なのにすげー責任重大な気がビンビンと響きやがるぜ。
もし許可しなければ……

――――パパなんて“ダイッ”キライ、です！！――――

「ごはあぁぁぁぁ――――――――！！！」

ガシャガシャァァァ――――――ン！！！

「せ……先生！？」

まずい！想像しただけで俺の心がブロークンファンタズムとは……！？
拗ねて嫌いと言うようなのは平気だが……全否定で嫌いと言われたら俺砂と化しちゃう！！
だ……だがそんな事でＯＫを言う訳には……だが……だがあぁぁ

あぁ――――――――！！！

「うがあぁぁぁぁ――――――――！！！」
「大変だ！先生が壊れ始めたあぁぁぁ――――――――！？」

その後、数十分にも渡るハーミットの暴走を一人で抑え込もうと必死になる助手ディノ君の姿が見えたとか……

――――――――――――――――

Ｓｉｄｅ：？？？

まったく、最近の奴らは骨が無い奴らだね……
新兵の実戦訓練も務めるあたしにはこういう事態はつまらない。
導師様も最近交代して警備には力を入れとけと詠師達が喚いてくる始末さ。
さて、今日の午前の訓練は終わったから飯にしようかね……

そのままあたしは食堂に入った……だが、いつもと違う雰囲気の空気が漂っているのに気付く。

な……なんだいこの陰湿な空気は！？
此処まで気持ちが悪くなる物なんて感じた事ないよ！？
周りの人間も気不味そうな姿勢で静かにしているし……

あたしはその根源を右目で食堂を見回して探っていく。
すると、右端の席にテーブルに体ごとくっつける様にして俯いている男が居るのが見えた。

あいつが原因か……しかしなんだい、後ろに黒い影がへばり付いているように見えるのは気のせいなのか!?
……とにかく、あんな風にされてちゃあたしも飯が不味くなりそうだ……

「あんた、いったい何をそんなに落ち込んでんだい？」

とにかく根源を断ち切らせとくか……

Ｓｉｄｅ：ハーミット

「うぼあぁぁぁ……」

先ほどまで診察室で暴れたハーミットは食堂に来ていた。
食堂なので食事をするのだが……食器の乗った台を除けてテーブルに頭を付けるようにして俯き続ける。

「あんた、いったい何をそんなに落ち込んでんだい？」

あん……？誰だこいつ……こんな奴いたっけ？
いや、確か見た事あるな……えっと……

「カンタービレ響士ですっけ？」
「カンタビレだよ！伸ばさなくて良い！！」
「すみません、して何用で……」
「あんたが無意識で放出しているその真っ黒な雰囲気をすぐさま止めてくれよ……向こうの奴らも気不味くて飯が食えにくそうにしてるしさ。」
「……それはちょっと無理です……悩んでいる限りこれは延々と出

続けると思いますから。」
「悩んでるって……どうすればそんな風になるんだい！？」
「えぇ……実は……」

――――――――――

その一方、導師の執務室には二人の人間がいた。
一人は桃色の髪を持つ少女、もう一人は緑色の髪を持つ少年……
むろんアリエッタと導師イオンである。

「そうそう、そこは力を入れずに引っ掻くようにしてください。」
「はい、です。」

二人は今何をしているのかというと文字の読み書きの練習だ。
もちろん、アリエッタにイオンが教えているという形でだ。

「どうですか……？」
「う～ん、先ほどよりはうまくなりましたね。あとはもう少し力を入れずに早く書ければ合格です。」
「本当ですか！？」
「えぇ、もちろんです。」

その結果にアリエッタは満足であった。
いや、イオンに褒められたという所が一番のお陰だろう。

「……あの、イオン様……アリエッタ……お願いがある、です。」
「……どうかしましたか？」
「あのね……」

アリエッタは導師に話した……自分は導師守護役になってイオンの傍にもっと居れるようになりたい。
だけど、父親が反対してそうなれない事に不満があるのだと……

「パパ言っていたです……危ないからって……イオン様と居る事がどうして危ないのかアリエッタわからない、です。」
「ふ～ん、君のお父さんは反対かぁ……」
「だからイオン様、アリエッタ……導師守護役になるためにはどうすればいいか詳しく教えて欲しい、です。」
「……わかりました。」

その返事にアリエッタは喜んでいた……しかし、イオンは心の中ではこう思っていた。

これから面白い事になりそうだ……と……

―――――――――――

「なるほどねぇ……あんたの娘が導師守護役に……」
「まだ9歳ですし……この役職は危険が伴うような物ですから……でもどうしてもやりたいって言いますからねぇ……」
「……こういうのは他人に答えを求めるもんじゃないと思うよ、あたしは。」
「へっ……？」
「あんたにもその子にも自分にとっての『大切』って物が存在しているんだ。それに賛同するか拒否するかはあんた次第だよ。」
「『大切』……ですか。」

そうだよな……俺がアリエッタの決意を止めさせようとする事は……アリエッタの『大切』までもを踏みにじってしまう。
俺は……そこまでして自分の『大切』をアリエッタに押し付けるに値する事をしたか？
いや……まだ全然足りないだろうな……

「とにかく、娘と良く話しあえば良い。良いか悪いかお互いの所を確かめ合えばって事さ。」
「……そうだな。」

俺とした事が……基本的な事を忘れていたようだ。
結論は飽くまで最後に出す物だ……まだ時間はある。

「……ここで失礼します。良い相談をしてくれて感謝しています。」
「別にいいさ、きっちりと纏めてきな。」

ハーミットは席を立って此処から去って行った。
その後ろ姿をカンタビレはしばらく見つめる。

「やれやれ、あたしとした事が柄にない事言ったもんだい……」

苦笑しながらそう呟く。
まさか母子相談ならぬ父子相談をするようになるとは……

―――――――――――

仕事が全て終わり、ハーミットは自室へと足を進めていた。

アリエッタならもう帰ってきている頃だろう。
さて、気合いを入れていきますか！

そして、ドアを開いて中に入ると……その直ぐ先にアリエッタが立っていた。

「あれ？何して居るんだアリエッタ？」
「パパ！これ見て！？」

右手に何か紙のような物が握られていたのを差し出され……何かと思いながら受け取る。
糸で止められた所を解いて広げて見るとそこには……

――――――――――
【導師守護役任命】

アリエッタ
上の者を導師守護役として雇用することを命ずる。

ＮＤ２０１１：５２Ｄａｙ、Ｒｏｒ、Ｄｅｃａｎ　　ローレライ教団代表　導師イオン・ダアト
――――――――――

「ぶぼぉおおおお……！？」

任命状だとおぉぉぉぉ――――――！？
しかも導師自らの勅命による印まで押してやがるじゃねぇか！？
アリエッタ！？これは一体どうしたんだ！？

「イオン様に導師守護役になるにはどうしたらいいかと聞いて……

そしたらイオン様、これをお父さんに見せつければ１００％許可してくれますよ♪……て言ってこれをくれた、です。」

導師イオン……俺の先手を封じるとは……何て恐ろしい子！？

こ……これは……俺の……負け……だよね？

一応教団所属だし……これを反吐にしちゃ今度こそ俺処刑ものだよ？

腹……括るしかないのか……

「わ……分かった。認めるよ……アリエッタ、これから導師守護役として頑張りなさい……」

「本当、ですか！？」

「だけど、もしも命の危険に陥るような事になったら……直ぐに辞めてもらう……それだけが約束だ。」

「はい、です！！」

いい返事だ……けど今の言葉の主旨をちゃんと受け取れているかどうか問題だが……

それにしても導師イオンは何を考えているんだ……付き人として側にはいたが……９歳の女の子を導師守護役に任命するとは。

いや、そういや導師は５歳だったっけ……子供としての判断なら……

違う、導師としての弁えを教育されているはずだ……そんな甘い判断はあまりしないと思うが……

じゃあいったい何が何なんだ……

―――――――――

Ｓｉｄｅ：イオン

約一時間前……

「この任命状を渡した時、君はこれから導師守護役になる。」
「はい。」
「導師を守り、もしものときには命をも盾にする。」
「はい、イオン様。」
「導師守護役は取り変えの効く使い捨ての存在……わかりますか？」
「はい、その時までは……どうかアリエッタをイオン様のお側に居させてください、です。」
「……」

その笑顔にはいったい何が込められているんだい……？
僕は今君を使い捨てという存在として認識しているのを教えたという事なんだよ？
なのに……どうして……

「どうして、導師守護役になんかなろうと決意したんですか？」
「アリエッタ、イオン様が好きだから、です！」
「……！？」

好きだって……そんな事堂々と言う事なの！？
……まぁ、嘘はつかなかったからな……アリエッタは……
……なんだろう、この感じは。
なんか……気持ち悪い……

「イオン様？気分が悪い、ですか？」
「え……いや、大丈夫です……アリエッタ。」

こんなの知らない……認めたくない……
こんな感覚なんていらない！
この子は僕にとって唯の“ペット”でしかないんだ！！

だから、僕には必要ない！！

「さぁ、後はそれを君のお父さんに見せれば完璧ですね♪」

「はい！じゃあ、行ってくる、です！！」

アリエッタはイオンの執務室から出て行った。

それを見計らってイオンは傍にあったイスにドスンと寄り掛かる。

「認めるものか……」

彼は世界に絶望した……

けど……

【完全】という認識を取り消そうと心の奥底で意思が働きかけている事を……

彼はまだ知らない……

第５１話（後書き）

これにて、アリエッタは導師守護役に任命されました。
世界の修正（作者都合）はかなり強いぜハイルよ！（笑）

第５２話（前書き）

明日が仮免の試験です。
頑張ってきますね。

第52話

「ほれ、しっかり掴ってないと真っ逆さまでグチャッてなるからな？」

「やだよ～！怖いよ～！！」

「手っ取り早い手段がこれしかないんだ……文句を言うな。」

「うぅぅ……」

目の前の少年は目をギュッと瞑って震えていた。

それはなぜか……フレスベルグに乗っているからだ。

そう、このフレスベルグはあのアリエッタが拾ってきた奴が成鳥にまで成長しきった体を持つ空中移動に好都合なアリエッタのお友達である。

本来なら大人一人を制限に乗せるが……今回は片割れが子供なので体重問題には支障をきたさないから場合により二人乗りでいる。

「じゃあアリエッタ、この子を借りてくぞ……明日までには戻ってくるようにするからな。」

「いってらっしゃい、です。」

寂しそうな顔をしてこちらを見てションボリし始めている。

今度お菓子いくらか買ってあげる約束をしてるが離れるのはやはり寂しいのだろう……

「とまぁ……そろそろ出発しないとここも危ないからなぁ……行くぞ！」

「ちょっとまだ……うわぁぁぁぁ～～～！！！」

少年の制止の声を流してハーミットはフレスベルグに飛翔の合図

を送った。
それに応じてフレスベルグは大きな翼を力強く上下運動していくと除々に浮かび上がっていく。
そして、教団を囲っている壁よりも高く上がり……飛び越えていく。

「迂闊だった……この頃にヴァンがこの行動に走り始めると気づけないとは……」

その中、ハーミットは何か考えて忌々しげに歯に力を入れて軋っていた……

――――――――――

～3時間前～

Ｓｉｄｅ；???

「ハァ……ハァ……」

やっと……出れた……
あの暗い牢獄から……抜け出せたんだ……
師匠(せんせい)……
僕は何をすればいいと言うんですか……何を信じればいいと言うんですか？
時々何が何だかわからなくなる感覚がこの頃続いている。
あそこから抜け出した頃から僕は時間を忘れかけた……

「ここは……どこ？」

長い廊下が視界いっぱいに広がってどこに行けばいいのか迷ってしまう。

いや、迷っている暇はないんだ……

連れ戻されたくない……あそこは……もういやだ……

抜け出す時に持ってきた剣を抱えて最悪の結末を想像する。

日の光が届かず……自分以外の誰も居らず……冷たくジメジメしたあの牢獄に再び閉じ込められる自分を……

「……ッ！」

タッタッタッタッ……！！

出来るだけ音を出さないような小走りで廊下を駆けていく……この場所がどこなのか詳しくわからないまま出口を目指して走り出していく。

「……」

「よろしかったのですか……ヴァン謡士？」

「構わん……門番の者達には一通り話を伝えてある。このまま此処から出すようにとな……」

少年が逃げる姿を遠くから隠れて様子を窺う者達がいるとは考えもせずに……

――――――――――

Ｓｉｄｅ：ハーミット

「さてと……決済の報告書を出し終わったから戻るか……」

俺は今月分での費用等の報告書を出すために教団へと向かい、それが終了したため本部に戻る所だった。

わざわざ部下に任せたりしないのは偽造されぬような自己管理のためだ。

実はこの前、設備や薬代の報告を受け取った部下がディストの回し者でな……出費を事実より多くした偽の報告に直して次回の資金を技術部に多く回せるように工作したわけだよこれが……

それが分かった瞬間ディストの処へ殴りこみして聞き出した所……なんでもディストカイザーとかなんかって物を内緒で作り上げてたそうだ。

無駄金ＤＡ☆ＺＥ！！

すぐさま満遍なくスプラッシュを浴びさせて破壊した後、ディストに蠍固めを見事なＵの字で決めておいた。

背骨がボキボキと関節が鳴ったが……まぁ、あいつならあの程度じゃ死なないだろう……

そんな訳でキチンとした自己管理でやっていく事にした訳だ。

さて、診察室に着いたか……

ディノは今部隊の遠征に付いて行ってるから今は居ないが……一人で頑張らないとな。

そして俺は診察室のドアを開けて部屋に入る。

「……ん？」

周りを一度見回してみた所、何かがおかしい事に気付いた。
資料が何枚か床に落ちていたのだ……
可笑しい……窓を開けてないから風は入ってこない筈だ。
ならアリエッタ……いや……導師守護役としての教育を受けている時間だからここに来る事はまずない。
……誰かが此処に入ってきた？
ドアの前には外出中という札を掛けてあったから診察に来た人達ならばまだ此処に入る必要は無かった筈……
誰だ……誰が……

ガタンッ……！！

「誰だ！？」

物音が……！！まだこの部屋にいたのか！？
落ち着け、相手をしっかりと見極めるんだ。

俺は構えを解かずに襲撃に備えたままでいる。
先ほど叫んだが、答える様子は無か……
こちらから近づくか……

ゆっくりと歩数を増やしていく……音がした机の横の方へと体を向かわして行く。

「どうして此処に入った……何が狙いだ……」

手を机の上に掛けながらゆっくりと顔を目標の場所へ持っていく。
そこにいたのは……

―――――――

Ｓｉｄｅ：？？？

「（誰か来た）！？」

少し前に廊下で見つかりそうになったから此処に隠れたけど……

此処にいるのは危険だ。

机の裏側に隙間があるのを見つけて隠れてみたけど……このままじゃ逃げられないよ……

どうしよう……

キィッ……

どうやら入ってきたようだ……念のために深く潜り込もうとする。

それが仇となる事であるとは知らずに……

ガタンッ……！！

「誰だ！？」

「……！？」

机に立て掛けていた剣が微弱な振動によって一人でに床に落ちてしまったのだ。

結果、物音がして此方の居場を知らせたという訳だ。

ギシリ……ギシリ……

徐々に足音が近づいてくる……
少年は焦った……万事休すか……
いや……まだ手はある……
でも……それは……いや、迷っている暇はないんだ！！

「どうして此処に入った……何が狙いだ……」

影が見えてきたのを見計らい、手に持つ剣を鞘から抜き出す。
狙うのを首元に押しつけて脅す事……殺す事は僕にはまだできないから……

今だ……！！

即座に机の裏から飛び出して相手の右肩を掴もうとして手を伸ばした。
次は剣を……と、そう思う所で手を掴まれる感覚が襲った。
そして、勢いよく引きずり出される。

「うわあぁぁ――――！？」
「おとなしく観念しろ！！……て……子供？」

男の目の前まで引っ張り出された所で一度彼は立ち止った。
そこを逃さず少年は右手に持つ剣を己の左手を掴む腕に振り落とした。

「やあぁぁぁ――――！！」

フォンッ……！！

「うぉ、危ね……！？」

刀身は当たることなく、床を叩く事で終わる。
咄嗟に男は掴んでる腕を離して後ろへ飛んだからだ。
「く……来るな！！もし近づいたら斬るよ……！！」
「……」
今自分ができる精一杯の威嚇の言葉を絞り出して剣を向け続ける。
その様子を男は目を細めて窺っていた。
「此処は何処！？……出口を教えるんだ！！」
「……お前……ルーク・フォン・ファブレか！？」
「……！？」
僕の名前を……！！まさか……こいつ……あの研究者達の仲間なのか！？
よく見れば白衣とか着ている……間違いない！！
今こいつに捕まったら連れ戻される！！

――――――――――

Ｓｉｄｅ：ハーミット

「（何故だ……【聖なる焔の光】が何故ダアトに……ファブレの関係の者が来る事など知らせは受けてないぞ！？……いや、違う……これは……）」

――『アッシュ』とは本来『ルーク』という名であった者の事だ。
預言に死を詠まれ、あの子は【栄光を掴む者】に惑わされたために

己の分身である『ルーク』としてのレプリカを作り、己の死を逃れようとした。だが、その中騙された事に気づき、『ルーク』に戻ろうとした……だが、『ルーク』はすでに己の分身が位置していたのだった。それを見た時、【栄光を掴む者】の洗脳生活によってか『アッシュ』は『ルーク』としての居場所を奪われたと考えてしまった。……あの子はまだ立つどころか考える事も出来ない赤子当然の存在だったはずなのに……――

思い出した……ローレライと初めて会った時に説明してくれたＮＤ２０１８の預言の捻じれの根源を……

あの様子から見るに何かから逃げようとしている所だしな。

となると……レプリカはもう作り出された後ということか……

数日前、ルーク・フォン・ファブレの誘拐という情報が流れ込んだ事がある。

だが、その3日後に無事ファブレの私有地であるコーラル城で保護されたと聞いたしな。

そうだった……たしか、この時捜索隊の先頭を切っていたのがヴァンだった……

くそ、無駄に月日を過ごして来たせいで秘預言ばかりを気にしていた俺のミスだ！！

身近な奴の行動を詳しく調べられなかった俺の落ち度だ……

糞ったれ……

……とにかく、目の前にいる【ルーク】……後の【アッシュ】を何とかしなければ……

剣を構えてえらく錯乱しかけてる……このままではいかんな……

「剣を下せ……大丈夫だ……俺は何も危害を加えない。」

「う……嘘だ！！そうやって僕を騙すんだ！！」

「違う！！お前は何か誤解をしている！！さぁ、剣を下すんだ！！」
「うるさい！！」

ヒュンッ……！！

「くっ……」
「はぁ……はぁ……」

意地でも近づけさせないってことか……
仕方がない……子供だから強引な事はしたくはなかったが……
このままでは埒が明かないからな。

バサッ……！！

「……うわぁ！？」

ハーミットは白衣を投げてルークに被せるように投げつけて強引に動きを封じさせる。
大人の背丈での白衣は子供のルークをスッポリと覆い尽くす。
突然の事に驚いて白衣を退かそうともがくが……もう遅い。
その隙を突いてハーミットはルークの背後に回りながら予測を付けて白衣の上から右手を後ろに回して関節を決めて拘束した。

「まずは殺気を立てるような状況を取り下げろ。少なくとも俺はお前の味方だ……」
「モガガ……！？」
「さっきから嘘じゃないと言っているだろうが……まったく……」
「モガ……モガ……！！」

「ちょっと黙れや♪」

「（ゾクゾクゾク……！！）……！？」

シーン……

いきなりの声のトーン変化により悪寒がルークに走った。
今この男に逆らったら牢獄に閉じ込められるよりもひどい事になりそうだと本能的に感じ取ったからだ。

ゴソッ……

「あ……」
「とりあえず剣は預からせてもらう。無闇に振り回されては敵わんのでね……」

白衣ごと剣を取って遠くの棚の上に置いて行く。
次に戻ってくると椅子を二つ出して片方に先に座った。

「座れ、いろいろと話をしようか？」
「……」

もう一方の椅子を指差して座るよう催す。
その様子を見てしばらく何かを考えた後ゆっくりと椅子に腰を下ろす。

「さて……最初の質問だ。お前はルーク・フォン・ファブレで間違いないな？」
「……うん。」
「んで……なんでファブレ公爵のご子息がダアトに一人でいるんだ？」

「……」

一応主旨は知っているが、念のため一応確認だ。

「……師匠が」

「んっ……？」

「優しかった師匠が……突然……解らなくなって……」

「……」

何かを思い出して震え始める……

トラウマみたいのを植えつけられたか……

「暗くて……寒い牢に……閉じ込められて……」

「ふむ……」

「誰も……うぇっ……居なく……ひっぐ……て……ひっぐ……怖くて……」

「……」

「苦し……ぐすっ……くて……うぇっ……逃げて……」

ギュッ……

「良く……頑張ったな……辛かったんだな？」

「……うん。」

「今は泣け……思いっきり泣け……悲しい事をため込まず吐き出すんだ。」

「で……でも……ぐすっ……」

「なぁに……安心しろ。この部屋はちょっとやそっとでは音など漏れない構造になっているから大丈夫だ。」

こういう子には安心感を与えてやるのが一番の治療だ……

しかし……こんな１０歳の子供を監禁するとは……
ヴァンの奴、本当に変わっちまったんだな……
己の目的の為なら自分を慕う者でさえ簡単に犠牲にする……

これは……さすがの俺も考慮する訳にはいかないんだ。
ローレライ……お前との契約は【オールドラントの滅亡を防ぎ、『ルーク』の消滅を防ぐ事】だったな……
だが、俺はそんな一方通行な取引の結果を出すだけなんてお断りだ。
俺は俺の救いたいと思う人も全力で助けるつもりだ……
だから……俺はヴァンも救う事にする。

あいつの憎悪、悲しみ、復讐心を終わらせる。
それが、かつて親友となる時決心した意思だ。

さて、今後の目標を練り直すか……

第５２話（後書き）

ゲームではアッシュはダアトにずっと居ましたが、アニメ版では一度バチカルまで一人で戻って来たそうですね。
今回はそれをお題にしました。
次でバチカル編です……

第５３話（前書き）

俺……教習所の卒検通ったらバイト再開するんだ……

第53話

「ここからは低空飛行で頼むな？」
「クルルルル……」
「どうして？」
「バチカルには対空砲譜業兵器が設置されているからな……高く飛び続けるとレーダーに反応して狙ってくださいと言っているような状態に入るからな……」
「へ～……」
「近くの海岸で降りよう……関門通ってないから密入国って事になっているからな。」

約3時間をかけてバチカルを目指し続けていたが……その間も俺達はいろんな事を知りあった。
ルークからは自分がベルケンドで超振動の実験を受けさせられていた事、その中で誘拐されて来た事、ヴァンが自分の秘預言について明かしてくれた事……等と色々だ。
そういやベルケンドって所有権ブリジスト家からファブレに移ったって聞いたな……
今までの戦争で天秤の傾きを直す為にもマルクトからバチカルへと移されたんだな。
しかし、レプリカ研究は生体じゃないけど無機物で行われてたよなあそこ？

「ほれ、こいつを着て姿を隠しとけ。特に髪の毛はな……」
「あ……うん……」

さて、これからバチカルに入るが……さすがにルークをこのままで入らせる訳にはいかないからな。

赤髪と翡翠の眼を持つ人間はキムラスカ王国に連なる者としての象徴……

これは敵国のマルクトの子供でさえ知っている一般常識だ。

それなのにバチカルにこのまま入らせれば……言わなくてもわかるだろう……

王族が……しかもバチカルにとって繁栄の鍵とされているルークが外に居たという事がバレるととんでもない方向にまで事態が進行してしまう。

「魔物が出たら後ろに隠れてろ。」

「いや、僕も闘うよ!!」

「それは困る……仮にもお前は王族だぞ!?今は子息であっても多大な影響を及ぼす程の大物のだ……怪我したら……」

「ハーミットは魔物に生身で立ち向かえる訳じゃないんでしょ?」

「いや、譜術をうまく使っての戦いができる……それに一応武器としての物も最低限持ってきている。」

狙撃譜銃は重量オーバーの為持っていく事ができなかった。

仮に持ってきたとしてもケースがでかくて余計な注目を浴びてしまうからな……

麻酔銃にランチャー銃、そしてナイフが一本……

そうそう、ランチャー銃も攻撃の手段として使う事が出来るのは初めて語ったな……

鋼で編まれた杭付きワイヤーを突き刺すのも良し、伸ばしたワイヤーで鞭にして叩きつけるのも良し……

けど、飽くまで移動手段用だからあまり痛めたくないからそう使いたくないが……

「じゃあ……もしもだ……もしも懐を許される危機に陥った場合にだけ援護を頼めないか?」

「……うん、わかったよ……」
「よし、ならバチカルへと向かうか……此処から北東だ。」

―――――――――

それから何十分かしてようやく俺達はバチカルの大橋の上にまでたどり着いた。
途中、魔物も何度か襲ってきたがうまく対抗して退かせる事が出来た。
そこには全然ルークの手助けなど必要ないという結果だったのでどこかルークは不満気味だが……実戦経験のないルークにはまだ危険すぎる。
それよりも……王族を前衛にするような事は流石に不味いし……なんせバレたら即国際問題に発展だ。

「それにしても……変わった形をした首都だな……バチカルは。」

ここは空の譜石が落下して出来た地面の窪みに作られた街だそうだ。
音機関と精緻な細工飾りによって形作られた都市だ。
縦長の層状の構造をしており、遥か下層には工業地帯や貧民街が、天空に届くかのごとき最上層には王族や貴族が住んでいる。
中心街から港までなど各所は天空客車と呼ばれるロープウェイで結ばれ、各階層への移動は、階段の他に昇降機（エレベーター）も利用できる。
特に、バチカル城やファブレ公爵邸のある最上層へは昇降機なしでは向かえない。

「帰って……来たんだ……」

ルークは何年ぶりと感じれるような祖国の帰還のように感じていた。
監禁されてきた分、余計に心に染みる感じがするのだろう。

「さて……どうするもんかね……」
「どうかしたの？」
「いや何……最終目的地はファブレ家だが……今の俺たちじゃあ最上層へ行くのは先ず不可能に近い。」
「え……！？」

だってなぁ……最上層は国王および公爵の認証がなければその手前の昇降機にさえ近づく事が出来ないからな。
それに……

「一番の問題と言ったら……お前のレプリカが本物と認識されて屋敷に居る事だな。」
「……！？」
「赤髪と翡翠の眼を持つ者は王族の証……それに関してはレプリカの方のルークにも当てはめられる……しかし、誘拐によるショックで記憶を失ってしまったとされる子供、監禁されてそこから逃げて来たとされる子供……お前ならどっちを本物と信じる？」
「そ……それだったら……えっと……その……」
「何か引っかかるだろ？お前の父と母ならお前の方を本物と感じ取れるかもしれないが……他の人間ならどう取るか……こっちが偽物で実は何処からか送り込まれた陰謀による物だとか……そうでなくても……今は時期が不味い。」
「どういうこと……？」
「ルークという存在はキムラスカの国宝以上に重要な存在だ……なのに、前回誘拐されたという失態によりファブレは地位が危うくな

りかけたと聞いたことがある……レプリカのルークが『ルーク』として直ぐに発見された事によりその件は何とか収まったが……」

少し口を止める……近くに人が来ているのでもう少し隅に移動することにした。

そして、会話を再開する。

「そのルークが実は別人でしたと他の派閥の貴族どもにバレてみろ……『ファブレの人間は自分の子供が本物かどうかもわからない愚か者』として貴族達だけではなく、ここの国民にも指を指される事になりかねん……最悪の場合は……いや、ここからは想像する事は止めよう。」

「そ……そんな……」

「公爵であるお前の父は……しかも王族に連なる者として失敗は殆どと言って良いほどに許されない。そこを突いて他の貴族どもが引きずり落とそうと裏で何かしらやりに来るだろうな……」

「……」

想像が出来なかった……唯自分の屋敷に帰るだけの筈だったのに……そのような状況になることも予測される事になるなんて……

帰りたい……でも、帰ったら父上と母上に迷惑が……

「そう暗くなるな……飽くまでバレた場合だ……」

「え……？」

「けど、これは嘗て実際に起きた事でもある……頭の隅に入れとくだけでいいさ。」

「じゃあどうすればいいの？」

「そうそう、それを今考え中なんだが……」

さて、向こう側は『ルーク』が庶民だろうが公爵家の人間だろう

が実際どちらでもよい。
必要なのはローレライの力を継ぐ者としての『ルーク』だからな……

たしか、キムラスカは預言についてはかなり重要視されているんだっけ？
ラルゴから昔バチカルについて詳しく教えてもらった事があったが……ん？そういやラルゴって昔キムラスカに住んでたのか？
あれほど詳しいのは地元にいる人間ぐらいだが……いや、今は関係ないから止めとこう。

じゃあ、郷に入っては郷に従えて的な方法で行くか……

「ルーク……一つだけだが比較的安全な方法で最上層へ潜りこめる方法が見つかったぞ。」
「本当……！？」
「その為には……よ～く聞け……」

――――――――――

「止まれ！此処から先はバチカル城と公爵家に繋がる場所だ……関係無い者はすぐさまに立ち去れ！！」
「あの……すみませんが……私達はどうしてもこの上に行かなければならないんです。」
「……何？」

昇降機の傍には二人の兵士が見張りとして配置されていた。
案の定、近づくと静止の言葉を掛けてきたがそれに何処か悲しげ

な雰囲気で彼らは答えて来た。

「実は……この子は皮膚の難病を患っていまして……この病気を治すには預言士が言うには“キムラスカに存在する最も天空に近き場所にて夕暮れを眺めよ”という事が不可欠と詠まれてわざわざダアトからやって来たのです。」

「何……そのような事が！？」

その言葉に驚いて男の傍にいた子供に目を向けてみた。

深くローブを着ていてフードで頭を覆っている。

「いけません！！この病気は触った人にも移る可能性があります！！」

「……！？」

そう叫んで言った言葉に兵士の一人は伸ばした手を勢いよく引っ込める。

「それに……あまり素肌をさらさせたくないんですが……ルカ……少しだけ見せてあげなさい……」

「うん……」

そういうと少年は腕の所を捲って素肌を兵士達に見せてみた。

そこには……紫の斑点がいくらかと……

「も……もういい！！無理をさせるな！！」

「……ありがとうございます。」

そう言われたので少年は再び腕をローブに引っ込める。

「お願いです……どうか預言成就のため……日が暮れるまででいいんです……この上へ行かせてくださいませんか……？」
「しかしなぁ……うむむ……」

兵士は迷った……預言に詠まれた事を行おうとする彼らに否はない……

しかし、そう簡単にバチカル城や公爵家のある最上層へ一般人を連れていく訳には……

見張りとして配置されている自分達の身が危うくなるかもしれない……

だが……預言を破るなんて事をするのは……

「……私達はこれから故障中の昇降機に配置された者達の様子を見にいく事にする……だが、予備点検のため一度だけ上に移動させる機会がある。」
「君達は“荷物”として……それならば乗せる事ができる……」

兵士達は腹を決めたようだ……あえて見逃すという選択を取ったそうだ。

「良いのですか……そんな事をすれば……」
「もちろん……だが……上に向かったのは唯の誤作動という事にすれば……」
「……２０分だ……出来る限り伸ばして２０分が限界だ……それまでに此処まで戻ってこなければ……」

侵入者として扱う事にする……
そう冷たく言い放って聞かせる……
それに彼らは首を縦に振って頷いた

「本当に……どうお礼を申したらよいのか……」
「……私達は何も見てはいない……」

そう呟いたが……言葉に真髄を受けっとって昇降機に潜むように静かに乗り込む。
その次には兵士の一人が向こう側へと歩いて行った……
もう一人は彼らと共に昇降機へと入る。

「見張らせてもらう……万が一の為にだ。」
「はい……」

そして、向こう側の話し声が少し大きくなったかを見計らってスイッチを入れて動き始めた……
揺らいだ衝動で男はふらついた為、兵士はそれを抑える。

「大丈夫か……？」
「す……すみません……」

チクッ……

「……ッ……？」

その時、小さな痛みが腕に走ったように感じたが……抑える時に男も此方を掴んだ為だろうと認識したが……
それは間違いだった……

グラァァァ……

「ァ……ゥ……」

ドサッ……！！

突如と襲った睡魔に成す術もなく、何も考えれぬまま尻もちをついて地面に倒れた。

「し……死んじゃったの！？」

「違う違う……強力な麻酔の原液を針で直接投与しただけだ。」

解っていると思うだろうが……御覧の通り、二人とはハーミットとルークの事だ。

ハーミットは預言という言葉を使った偽のシナリオで何とか最上層へ侵入することに成功したのだ……

ルークが見せた時にあった紫の斑点とは絵具である……正直言って確率は低かったが……何とかして成功させる事ができたようだ……

「早くこの人何処かに隠さないと……強い衝撃で無理に起こさない限りそう簡単には起きない筈だから……」

「じゃあ……あそこの隅にある樽は……？」

「ＯＫ……そこにしまおう……」

かくして、ハーミットとルークはバチカル最上層にまで何とかたどり着く事ができた……

片割れの兵士が掲示してくれた時間は２０分間……もう片方のあの人にはすまないが……眠ってもらおう。

俺達の目的はファブレ家への潜入だ……正々堂々入れないから潜入という形になるが……

「ハーミット……僕が屋敷を抜け出す時によく使ってた道があるからそこに……」

「シッ……あまり大きな声を出すな……ここの最上層は先ほどとは

比べ物にならないほど兵士がうろついてるんだ……見つかって素性とかがバレると面倒だ……俺もお前もな……」

「……！？……うん、まかせて。」

その先にあるのは……喜びか、悲しみか……

第５３話（後書き）

ちなみに言っときますが……この話の時間帯は午後５時らへんと捉えておいてください。
現実チックに仕上げてみたらこんな形になりましたが……どうでしょうか？

第５４話（前書き）

挫けそうです……助けて……
自動車が今だ終わりません……

第５４話

「ちょ……おま、此処から壁乗り越えて抜け出していたのかよ！？」
「此処だと入る時も出る時も見えにくいから気付かれにくいよ？」

ファブレの敷地は本当にでかい……何坪あるのか今度正確に測ってみたいくらいだ。
そんな敷地にも唯一の侵入経路といったら屋敷の塀を乗り越えるしかなく、仕方無しにルークが知っている秘密の抜け穴を通っている。
ここはバチカル城とファブレの敷地が挟み合うような場所で人が一人何とか潜り抜けられるような隙間が開いている。
例えをいうと住宅街に偶にあるような子供の頃かくれんぼした場所みたいな所だ。
ルークはここから（内側は木を伝って……外側は捨てられた木箱を重ねたような所に乗って）出入りしてたそうだ。

「此処を登れば母上のお気に入りの花園に通じてるんだ。」
「そうか……おっとと……この木箱脆いな……」

ギシッ……ギシッ……

歪な悲鳴を上げるかのように木箱は彼らの重さで揺らぎだしている。
あまり負荷を掛け過ぎるのは良くなさそうだな……

「よっこいしょっと……」

ドサッ……

「よし……降りてこい……」
「うん……」
ドサッ……！！
ハーミットが先ず地面に静かに降りてその次にルークを受け止めるという効率的な降り方をした。
子供だとこのまま降りると足を壊しかねないかもしれないという配慮からだ。
「あと１０分程だ……だが……本当にいいのか？」
「……」
実は、ルークは屋敷に戻る事を渋っていた。
なぜなら、ベルケンドでの実験が関係しているからだ……
ルークの持つ超振動は研究者にとってこれ以上にない研究対象だ。
国を掲げて秘預言の成就のためにルークに超振動の実験を施させたそうだ。
中には苦痛を伴う物もって話だ……
その指示をした先頭が……実の父親であるファブレ公爵なのがこの事についての一番の理由だろう……
「父上は……僕に興味がないんだ……だから、平気で僕にあんな事を……」
「その苦しさから逃れたい為に……まだ屋敷へ戻りたくない……そういうことだな？」
「……うん。」
「そして……自分のレプリカが気になると……」
「……うん。」

ここまでの間、ヴァンがルークに諭した事……

――屋敷にはお前のレプリカを置いておいた、皆あのレプリカを疑いもせず被験者と勘違いしているそうだ……もはやあそこにはお前の居場所などない。あ奴達はお前の化け物のような力だけが必要ならしい……――

ヴァンの奴……ルークに暗示的な物を施したな……

ルークは別に秘預言に詠まれた『ルーク』であるだけでいい……

他は必要ない……だから自分は別に居なくてもいい……

おそらく、ルークが俺に合わずこのままバチカルに一人で戻ってきたとしても屋敷に戻る事を拒絶させる……そんな風になるようにと……

えげついな……

「ルーク……お前はレプリカをどう思っている？」

「……どうなんだろう……僕の代わりに勝手に屋敷で当然のように『ルーク』として立っている……なんだかこう……」

「悔しい……憎い……そう思うのか？」

「……」

話を聞いただけでまだ実際この目で見た訳じゃないから実感がわかないのか？

しかし、今回の目的は帰還じゃなくて現状を見る事に変えたからな……

レプリカの『ルーク』が屋敷でどのようにしているか……それが第一だな。

「……生体レプリカは生まれた直後、刷り込みを施さない限り産ま

れたばかりの赤ん坊と同質の存在となる。」
「えっ……？」
「うまく喋る事も出来ず、歩くことさえままならず、更には善意も悪意も持つことなど到底あり得ないそうだ。」
「で、でも……僕の居場所を奪ったという事は事実だ……」
「確かにそうかもしれないな……しかし、赤子が奪うなんて選択を一度も選んだ事はないだろ？」
「けど……あいつはレプリカで……」
「人間の母親の胎内から生まれ出てこない限り人間として認めないなんてそれは唯の傲慢だ。彼は今でも一生懸命に生きている……成長しようと必死に頑張っている……唯、体の作りが特殊なだけさ。」
「……」
「なぁルーク……あの子の存在を認めてやってくれないか……結果だけじゃなくお前がこうなり、あの子があなった過程も踏まえて……」

レプリカの『ルーク』には罪はない……あの子が偽物だなんて事は誰にも決める事は出来ない……
あの子自身が望んだ訳ではなく、第三者によって勝手に居場所を決められた哀れな存在。
その事を知らずに彼はこれからも生き続ける……秘預言という名の死の宣告を知らずに抱えさせられているとも知らずに……

「お前は自分に詠まれた秘預言について知り……自分の意思でこの屋敷に戻る事を……『ルーク』に戻ろうとする事を拒んだ。それゆえ、あの子はいずれ来る死の運命に立ち向かわなければいけない。その責務を放棄したお前があの子を責めるなんて……違くないか？」
「ぁ……ぅ……」
「おっと……話はお預けだ……いたぞ。」

話している間、植物に隠れながら移動し続けていたがようやく目的の人物達を目に入れる事が出来た。
結構遠くにいるが、これ以上近づいたら傍にいる護衛の騎士達に感づかれる可能性があるので断念する。
……俺にしたら懐かしい男だ……ファブレ公爵……
嘗て闘った時にしてた表情はどこか無くなり、なんというか……丸くなったという感じだ。
その横にいるのが公爵夫人、名前は……シュザンヌだったっけ？
そして……二人の間にいる子供が……

俺達は三人の様子を息を潜めながら眺めていた。
普通に見ても仲の良い親子三人として捉える事ができるだろうが……ここにいるルークは違う。
あの様子を眺めてて何やら震えているように見える……それに、時々手を伸ばそうとする仕草も見られていた。
今にもあの場へと走り出していきたいという感情が溢れてきているんだろう……

辛いけど……耐えてくれ……

いつか堂々と胸を張ってこの屋敷に戻って来させる為に俺も最善を尽くすから……

しばらくすると彼らはまた歩き出した。
移動するようだな……
その跡を追うかのようにルークも動こうとするが俺はルークの肩を掴んで止めさせる。
すまない……時間だ……

その意図を読み取っているにも関わらずルークは首を横に振り続

けた。
構わない……行かせてほしいと……
けどそれは出来ないと……やってはいけないと分かっているはずなのに……
薄ら涙を浮かべていたりもしてた……
すすり泣く事も許されぬままに俺達はファブレの敷地内から抜け出しに行くのだった。

――――――――――

昇降機の傍にあった樽の中に隠した兵士を起こして寝ぼけている所に暗示的な説明を聞かせて無理やりに納得させ……無事に上層部から抜け出してくる事が出来た。
その後はバチカルの大橋から外へと出て歩いてきた道を戻っていった。
もう夕暮れも終わってあたり一面暗闇に包まれかけている。

「明かりは携帯用のフォニム灯しかないか……」
「暗いね……大丈夫？」

懐中電灯のような形をしたフォニム灯の光を道に照らしながら俺達は道を進む。
月の光も手伝ってくれるかのように海から月光が反射してきながら……

ジャリッ……

「……魔物か……」
「……！？」

砂利を踏んだ音の方へと灯を向けてみると……

「ヴヴヴヴヴ……」

こいつらは……たしかライガ種の仲間ライガル！！
強さはライガ程ではないが……群れで常に行動している事で有名だ。

ジャリッ……ジャリッ……

……おいおい、何匹居るんだよ……
軽く１０匹は越えてるんじゃないのか？
不味いな……視界は暗闇……それにルークを守りながら闘うのはいささか無理があるかもしれない……
けど、やるしかない……

「絶対に離れるなよルーク……魔物にとって獲物は群れから離れた弱い奴を集中的に狙う習性がある。」
「……！？」

先ずは……先手必勝！！

「荒れ狂いし濁流よ≪スプラッシュ≫！！」

比較的使い慣れた譜術による先行で一匹を確実に仕留める。
突如襲いかかった水圧に一匹のライガルは潰れ出す。
その現象を察して他のライガル達は即座にその場から離れ、何匹

かは攻撃態勢に移る。
左右から同時に襲いかかる所をハーミットは左腕のランチャー銃を発射してルークを右腕で脇に抱えながら後ろ絵へと下がる。
もちろん、そのまま追って来たがその様子を確認してハーミットはスイッチでワイヤーを巻き戻して腕を振るう。
すると、ワイヤーは二匹のライガル達に絡まり……戻ってくる力による摩擦が皮膚を苦しめる。
苦痛の声を上げ、なんとか抜けようとしても向こうからも全力で締め上げているので中々抜け出せずにいたが……突如として締め付けが少し弱くなる。
なんと、先ほどまでいた二人が消えたのだ……二匹のライガル達は何処かと首を動かすが見つからない。

「落ちよ、光の鉄槌≪リミテッド≫！！」

上からの声に気付いたがもう遅い……一条の光に身を焼かれ、意識を失くした。

倒れたライガルをクッションにして着地したハーミット達は体制を再び整え、残りのライガル達に視線を向ける。
仲間が死んだ事により相手の力量を知ったのか威嚇をしてはいるが襲ってくる気配は無くなっていた。

「どうした、やるのかやらないのかどちらか選べ。」

少し前に出て攻撃を催促するような挑発的な言葉を投げかける。

その油断が不味かった……

「うわあぁぁぁぁぁぁ――――！！！」

「ルーク！？」

少し前に出た所を狙ってから後ろにいたルークをいつの間にか廻っていた他のライガル達に狙われたのだ。

二人の間に割り込んできたライガルはルークの方へ向いて唸り声を上げる。

獲物を決めたかのような目をして……

「この、何をして……！？」

すぐさま懐から麻酔銃を取り出して向けようとする。

ドゴッ……！！

「かはっ……！？」

無防備になったハーミットの背中を前にいたライガル達が襲いかかり、ハーミットは地に伏せられた。

何とか後ろに向き直るがその先には鋭い牙が並んだライガルの口が……

ガキィィッ……！！！

「グアゥッ……！！」

「この……やろう！！」

咄嗟に足に付けてたナイフを鞘から出してそれでライガルの咬みつきを防ぐ。

そして、素早く左手で顎を押しのけて右手でナイフを下手に持ってそれを……

ザクッ……！！

ライガルの左目に突き刺した。

「グオォォォォ――――！！！」

激しい痛みによってかライガルは咆哮を出してハーミットから意識を離す。

その隙を狙ってハーミットはナイフをあのままにしてその場から離脱する。

そして、ルークの方へ顔を向ける……かなり遠くまで行ったようだな……

頼む……無事でいてくれ……

――――――――――

Ｓｉｄｅ：ルーク

「うわあぁ……アァァァァ――――！！！」

迫りくるライガル達から逃げながらルークは剣を抜いていた。

背後からすぐ近くまで来ているという事を示している駆け音を耳に聞きながら……

そして、鞘から刀身が完全に現れ……急いで鞘を捨てると同時に剣を振り返りながら思いっ切り振る。

ザシュゥッ……！！！

その一撃はまさに飛びかかる寸前だったライガルの胴体を両断した。

しかし、安心してる場合ではなかった……もう一匹がまた目の前まで迫りかけていたのだ。

剣による重さで尻もちをついたその身を即座に起き上がらせ、剣を正眼にしてライガルに構える。

それを知らんとばかりにライガルは一気に襲いかかったが、ルークはそれを飛んで上に避ける。

その次には大きく剣を振りかぶってその背中に刃を力いっぱい振り下ろす。

ザシュゥッ……！！！

またしてもライガルの胴体は両断され、飛び込んできた勢いによって上部は少し遠くの方へと転がって行った。

ルークは上手く着地して剣を下して息を大きく吸い続ける。

「ハァッ……ハァッ……ハァッ……ハァッ……」

彼は今大きく混乱し、動揺していた。

なんせ、初めて剣を魔物といえども殺す為に使ったのだから……

屋敷にいた頃でもヴァンに剣を教えてもらってはいたが……実戦で使えるほどまでとはまだ言えない物であったからだ……

初めて知った……剣で斬ると血があんなにも噴き出してくる事を……肉を斬る感触があんなにも重い事を……

そして……初めて命を自分が奪ったという事実が出来た事を……

ルークは倒れこんでいるライガルの死体を息を荒げ、大きく目を開いたままずっと眺めていた……

もう動かない……唯の肉塊と化した魔物の姿を……

「うぁぁ……ぁ……ぁ……」

ペタリとその場に座り込んで剣を手から離し、体に付いた生温かい物を拭う。

それは……血だった……

ベットリと手にこびり付いた液体は独特の鉄の匂いが鼻に付く。

何も考えられずに居る所に……ルークの後ろにはもう一匹ライガが近づいていた。

それに気付かないままルークは今だ血の付いた手を見続けていた……

そして……そのまま背後から……

パシュッ……！！！

襲われる事は無くなった……

そのライガルの首元に小さな針付きの管が突き刺さり、一瞬の痛みを感じて跳ね上がった次にはゆっくりと横に倒れこんだのだ……

「ルーク！！無事だったか！？」

残りの何匹かをようやく片づけてハーミットはルークの元へと駆け寄って来ていた。

「ハーミット……僕……僕……」

「……ルーク、お前は自分の身を守るために剣を振るった。唯それだけだ……」

「で……でも……魔物だって……生きてる……」

「……こいつらは己に必要な糧の為に俺達を襲った……だが、俺達は死なない為に闘った。そして……こいつらは敗れた……そこにあったのは生きるか死ぬかの駆け引きのみしかないんだ。」

「……だって……だって……！！」

「納得できないか……だけどな、世の中には常に死が関わっている。もちろん人間だって生きる為に動植物を殺さなければならない……犠牲がなければその内何かが壊れ始め、全てが無くなる……完璧な不殺生なんてものは誰にも出来やしないんだ。」

「……」

「俺達はさっきまで命のやり取りをした。殺す覚悟と殺される覚悟を以てして……そして、殺した者は殺された者の分まで責任を負い続けなければならない……生という名の責任をな……」

命に色は無い……たとえ、どれほど弱い存在であろうとなかろうと……

だから、殺す時には殺すと俺は覚悟を決めているんだ。

「だけど、死を見たくも慣れたくもないのなら……災いの元である力を捨てるか……そうならない為の力を付けるか……選択しろ。」

だから、俺は柔術とかを主体にしている。

破壊ではなく屈服を目的とした武術を習ったんだ。

「力……超振動……」

ルークはブツブツと俯きながら何かを呟く。

「僕は……化け物なんかじゃない……超振動なんていらない……『ルーク』になんてもうなりたくない……！！」

「……『ルーク』を捨てる事にするのか？」

「生きる理由を勝手に決められたくないんだ！！僕は……僕なんだ！！」
「だったら決めろ……お前は何者だ？」
「ヴァン師匠が決めてくれた……あの名前を受け取るよ……」
「その名は……？」

――Ａｒｓｈ――

灰はここに今生まれた……
だけどルーク……いや、【アッシュ】よ……忘れるな……
“燃え滓”になんか成り下がるな……
新しいお前のその名はそんなチンケな意味で終わらせるな……

どうせなら……不死鳥の灰と化せ。
けっして滅びず、何度でも生まれ変わる“再生の灰”へと化せ。

第５４話（後書き）

灰って色んな意味があるんですよね。
フェニックスもその一部です。

第５５話（前書き）

ようやく卒検に扶り付けれました！（泣）

第５５話

アッシュの決意の日から数日が過ぎた。
あいつはキムラスカとの繋がりを切る為、ダアトへ再び戻る事にした。
まぁ、早い話が亡命だが……オラクルや教団にはそういう正式な知らせを送ってはいない。
そりゃそうだ、秘預言に不可欠な【聖なる焔の光】がキムラスカに黙ってダアトに匿ってるなんて見方される事間違い無しだからなぁ……
国際問題にまで発展されたくない事は当たり前という訳だ。
全てはヴァンの私兵兼部下という形で居場所を捩じり込ませたようだ。

そうそう、アッシュに助言したことがあったな……
それは髪の毛を隠す事だ。
目はまだしも、赤髪を持つ人間はキムラスカの王族に連なる者として一般的知識で誰もが知っているくらいだからだ。
だから、どうすればいいかと悩んでいたのでディストにおど……ゴホン……頼んで作った特殊な髪染めの譜術を組み込んだ譜業を渡しといてやった。
こいつは切り替え式で色を落としたり付けたりと直ぐに出来るような物だ。
よって、今のアッシュの髪の色は黒に統一させている。
これで一般兵に姿を気にせず晒せるくらいの体面を手に入れられた。

アッシュはと言うと……ヴァンの動向を探る協力者として俺と手を組んだ。

あいつにはヴァンの過去、預言に対しての想いについてを知ってもらった。

聞き終わった時には信じられないと思うかのような顔をしていたな……

そりゃそうだ……憧れの師が繁栄をもたらせるとして信じ続けられてきた預言に全てを奪われたという実体験をしているなんて思っても居なかったろうに……

そういやヴァンとアッシュに詠まれた秘預言は滅びという言葉が共通してるしな……ヴァンがホド、アッシュがアクゼリュス……

ヴァンはそれがわかっていたのだろうか……己と同質の未来を持つ少年を見て利用価値だけを見出していただけではないのかもしれない……

そうでなければ目的が世界の復讐なのに何故わざわざアッシュを使わずにレプリカである『ルーク』に代わりをさせたんだろうか……

預言に外れる事……唯一の弟子である事……利害が一致してそれを纏めて決断したのかもしれない。

あいつにもまだ人の心は残っているだろうな……でなければ妹を少ない休みを削ってまでして会いに行こうなどと決断するはずがない……

まだ望みは……あるという事か……

さて、長話をしてしまったな。

結果として俺とアッシュは診察室で会った時に互いの情報を確認し合っている。

あいつも一兵士として訓練とかをし始めたから生傷が絶えない事がしばしばある。

それを利用して診察室で問診をするようにして可能となるのだ。

そういや、今日は導師の今年のオールドラントの預言を民衆の前

で詠む日だったな……

久しぶりに導師イオンを少し近くで見れるかもしれないな……

あと、アリエッタはこの頃どうしてるかと言うと……導師守護役としての地盤を着々と固め始めている。

礼儀作法とか覚えるのが結構大変だとか勉強類は未だ苦戦しているようだが……様になってはいるようだ。

譜術の腕を磨き続けてもいるが……この前俺が手解きを施してやったらな……アリエッタの奴……リミテッドをあともう少しで使えるくらいにまで成長していたよ……

ちょっと待てと思ったよ……俺だって初級譜術のエナジーブラストができるのに1ヵ月は練習してようやくうまく使えるようになったっていうのに……あんた1週間で属性付きの譜術使えるようになるなんてどんだけハイスペックなんですか……

まぁ、野生で育ったから気配とかこう……体で力を感じるという物が得意になってたそうだな……

そん時笑顔で『褒めて褒めて～♪』って迫っていた頃の笑顔だった俺の中はひどく落ち込んでいましたとも……えぇ、落ち込んでいましたとも！！（壊）

え～……そんなこんなで相も変わらず軍医をやっていますハーミットことハイル・シュヴェールでした。

お……始まったか……

――――――――――

Ｓｉｄｅ：イオン

ダアトの行事として今年のオールドラントの行方を詠むことになな

った。
導師としてある以上僕は導師として行動しなければならない。
教会から出てくると同時に既に集まっていた民衆は一斉に歓声を叫んでいた。

嬉しそうにしてる所悪いんだけど……僕はあんた達のその行動が嫌いだ。
導師としての僕がいるから嬉しいんじゃない……どんな預言士よりも正確に当たる導師の預言が目当てなだけだと嫌というほどわかっているからだ。

「イオン様、頑張ってください……です。」
「……そんなに心配しなくても大丈夫ですよアリエッタ。」

結局……お遊び程度の付き人から導師守護役へと付いて来たアリエッタ。
よしみではなく、能力としてなら導師守護役として申し分ない子だ……
悩んだりしている時にどうしたのかと一々聞いてくるのが少し煩いけど……唯導師のご機嫌を窺うだけの他の導師守護役よりは全然マシだ。

そして、何度か立ったいつもの壇上へと立つ。
それと同時に投げかけられてくる声達が耳に嫌というほど入ってくる……

「イオン様！」
「イオン様預言を……預言を下さい！」
「ありがとうございますイオン様！」
「預言のおかげで今日も無事に過ごせます。」

預言預言……馬鹿みたい……

そんなに預言が好きなら預言と結婚でもすれば？

何も知らない奴は本当に楽でいいや……秘預言の真実を知らない奴は……

ヴァンの奴から嘗てフェンデ家が代々守り続けて来た第七譜石の真実を僕は知らされた。

笑っちゃうよ……繁栄を約束している筈が始祖ユリアは惑星オールドラントの滅亡を詠んでしまった事を……

預言を盲心的にしか見れない愚者達にはピッタリの結末かもしれないけどね。

でも僕は唯従うだけの結末は送る真似などしないさ……

そう思ってた所にヴァンは面白い提案を掛けて来たんだ。

レプリカを使って預言を歪ませてみてはどうか……と。

レプリカ……劣化複写体とも言い、被験者の持つレプリカ情報を元に作り出せる紛い物。

こんな面白い技術があるなんて早く知っておけばよかったかもしれないな。

これを使って少しは世界に一矢くらいは報いたいものだと思った。

それは、実行へと移すことに変える事となった。

実は、昔何年後かの預言を詠んだ事があってね……その中に……

――――ＮＤ２０１５　導師が病に倒れるとともに、後の導師は未来永劫生まれる事はあらず――――

つまり、僕がこの惑星オールドラントの最後の導師となる訳だ。

その預言を聞いた時あの樽豚はかなり焦ったっけ……その時の顔は傑作だったけどね。

だから、この後の導師を絶やさない為にも僕のレプリカを作らせてもらうと無理やり捩じり込んで賛同させた。

初めは難色を示していたけど、あいつだって自分は導師になるための素養が無いことぐらいわかってるし……導師の居ないローレライ教団なんて不要だから己の地位も危うくなりかねない……そう考えたそうだから最後には許可を出さざるには得ない風に踊らした。

決行の日はＮＤ２０１４に決めた。

死期から1年半くらい前からにするようだ。

さてと……これで今回の行事は終わりだね……

早くこの場から去りたいし……挨拶は簡単な物にして終わらせよう……

――――――――――

Ｓｉｄｅ：ハーミット

ふぅ……やっと終わったか……

しかし、盲心も此処まで行くと狂信者だな……

まるで麻薬だ……一度便利さを感じたら抜け出せない。

今回は治癒係は部下の方に任せている……選りすぐりの人材を導師イオンの傍に居させておいた。

俺は傍に寄るまでもないだろう……まぁ……色々と書類を纏め上げなきゃならないし……

ハーミットは導師イオンが壇上から去っていく所を眺めながらそ

う考える。
ちなみに、彼は御仁の専属とかそういった職で収めている訳ではないので導師イオンの傍に何時でも近寄れる訳ではないのだ。
大抵そこは信用が出来る彼の部下達に任せて仕事を的確に回しているのだ。
まぁ……大体大怪我するような事態など殆どと言っていいほどダアトにはないからな……
俺の仕事殆ど健康診断と化しているのが少々不満足だが……
この頃他国でダアトはオールドラント一健康な国と噂されてると流れてきてたりもしてるのだが……まぁそれはいいとして。

アリエッタは仕事ぶりからして問題はなさそうだな……
導師勅命で任命されたからその為の教養とか間に合うかどうか心配した時期があったがそれは気鬱に終わったようだな。
ふ……しっかり頑張れよ……アリエッタ……
俺は出来る限り応援してやるさ。

こうして、俺は何時もの診察室へと向かう。
そういや、アッシュは今何をしているかというと……外のお祭りで遊んでるそうです……
もちろん前文で述べたとおり黒髪にして屋台で今まで見たことない食べ物を俺が秘密裏に渡しておいた小遣いでだ。
それにしても……あいつヴァンと討論してたようだが……あぁ、そうそう……俺の事はちゃんと秘密にしてあるから暫くは怪しい動きを知られない限りバレる事はないだろう。
さっき廊下でヴァンを見かけたが……あいつ下を抑えながら無理に笑顔を作って挨拶してきた……

やられたんだな……あれを……

言葉使いも“僕”から“俺”に変えようと頑張ってるが……それは今後に任せよう。

「せんせえぇぇぇぇぇ――――――！！！」

ん、あれは……ディノじゃないか。
あんなに慌ててどうかしたのか？

「ハァ……ハァ……た……大変です先生！」
「どうした？急患か？」
「そ……そうです……けど、それが……」
「急患なんだったら早く情報を伝えろ！！！」
「ひぃ……！？」

む、つい怒鳴ってしまったが……反省している暇はない。
久々の患者となると俺もやる気をフル回転する。
走り出して後ろから何とか付いてくるディノから情報を聞く。

「急げ！そして早くしゃべろ！」
「けけけ剣で少し深めに斬られて……今の処気絶状態……急所が外れていたのが幸いとなっています！」
「ご家族とかに連絡は！」
「だから娘さんですよ！！」

「は……？」
「アリエッタちゃんが導師イオンを凶刃から身を挺して守ろうとし

たからそうなったんですよ！」

なんだと……

―――――――――

Ｓｉｄｅ：イオン

～１０分前～

「お疲れさまでした導師イオン。」

「いえ、こちらこそ態々取り決めを半ば独断にしてしまった所がありますので謙遜なさらないでください。」

「そんな事はございません！今年の預言はさぞ素敵な事が起こるとの事ですのでそれが聞けただけでも十分なのですよ。」

「そうですか……では、僕はここで。」

「はい、導師守護役達よ！イオン様をお部屋までお送りしなさい！」

「「ハイ！！！」」

素敵なことねぇ……なんで良い所だけで悪い所を想像しないのだろうかね。

お花畑でも広がってるって訳？あんたの頭の中には……まぁいいや、ようやく部屋で少しは休めるし……

「イオン様、今日はなんだかカッコ良かった……です！」

「フフ……ありがとうございますね、アリエッタ。」
「アリエッタ！軽々しく導師様に私語を投げ掛けてはだめです！」
「ご……ごめんなさい……です……」
「いえ、別に最後まで固くなる必要なありませんよ？」
「ですが、私達導師守護役は公の場でなくとも慎みを持つよう教わられてますので……」
「アリエッタはまだ任命されて2週間ほどでしかないのですから…大目に見てくださいませんか？」
「……わかりました……導師様がそうおっしゃられるのならば……」

教科書どおりに動くことしかできないようなあんた等といるより僕はよっぽどましなんだけどね……
ま……一応考えてあんた等の望む“導師様”を演じてあげてはいるけどね？

……ャ……チ……ガシャ……ガチャッ……

そんな時だった……彼らが現れたのは……
この時僕は後ろの導師守護役達に気を取られていた。
迫りくる足音……鎧や剣が振動で軋んだりする音といったものが僕の方へと向かっていたことに……

「導師様！？」
「……ッ！？」

振り返った視線の先には剣の切っ先を僕の方へと向けて突進してくるローブを着た男が……
しまったと思った……完璧な油断だ……
暗殺者が教会内に居るなんて想像していなかった。
そして、男は薙ぎの構えをし……

ブォンッ……！！

思いっ切り僕に向かって剣を振って来た。

ズシャッ……！！

その次には剣特有の衣服を……肉を切り裂く音が響き渡った。

僕の顔に血が何滴か降り掛かる。

けど……おかしいんだ……

痛みがないんだ……

じゃあこの血はいったい……

それに気付くのは考える前の空白の2秒が過ぎた時だった……

「ぁ……」

目の前に見慣れた桃色の髪が重力に従って落ちていく……

ドサッ……あまり重くは思えない何かが倒れる音……

そこには……

――除々に床に小さな血溜まりを作りながら倒れこむアリエッタの姿が……――

ぇ……なにこれ……アリエッタ何やってるの……？

なんで倒れてるの……？

冗談は流石によして欲しいんだけど……

「導師よ、あなた方が後にやろうとしている事は生命への冒涜だ……導師の複製人間を作り出すなど……！！」

あぁ……あんた達は僕がモースと話してた事を聞いて犯行に及んだという訳か……

よく見てみると向こう側からまた何人かやってきている。

おそらくこの男の仲間なんだろう……

未だ話し続ける男の声など耳に入らない……

慌てていて守ると言い難いような行動をし続ける導師守護役なんて目に入らない……

……何を掲げてあんた達はこんな事をしようと思う必要があるんだよ……

勝手な事をするんじゃないよ……

知らないくせに……

――世界の全てを知るとともに自らの命の期限をも知ってしまった僕の気持ちがガラクタなんかにわかると言うのかい――

それに……

――――僕のペット（アリエッタ）を殴っていいのは……僕だけだ！

――――

第５５話（後書き）

この頃になると想像力等をフルに活動させなきゃいけなくなるから頭が痛いです。
この作品のアッシュは少し常識化させていただきました。
正直言って……王族の証チラつかせてて良く他の人に何も言われなかったね！！（爆）

第５６話（前書き）

この頃スランプになりがちで申し訳ありません。
久々の手術シーンです。

第５６話

「担架班急げ！病室の鎮痛剤及び止血剤、増血剤は遠慮せずに使え！とにかく死なせるな！」
「腕や足が千切れている者達は！？」
「もはや消滅している方は四肢切断術を行う！綺麗に残っているのなら出来る限り四肢縫合術だ！！」
「急げ！各自係に廻れ！！」

こいつは酷い……襲われた導師よりもこいつら襲撃犯達の方を同情しちまうぜ。
俺達治癒係は導師に襲撃を掛けたという奴らを治療することになった。
だが、殆どが虫の息で助かる見込みの奴は十数人居た内２，３人しかいない。

だが、こいつらは今ここで助かったとしても導師襲撃の罪で死罪確実だろう……
此方の被害はアリエッタだけだったが……幸いにも急所を外れたので死には至らず、今はベッドで安静にして眠っている。
こいつ等にはこのまま後に苦しんで死なせるよりも今ここで心臓を止めてやりたいと変な事を考えるが、まだ生きてる以上そうはさせない。

「先生……１３番患者の心肺停止及び死亡……確定しました……」
「……死体袋を何袋か運んで来い……」
「……」

それにしても……この惨状を作り出したのが……被害者である≪

導師≫なんだよな。
俺達が現場に駆け付けた時には他の治癒係に治療されているアリエッタ、導師守護役達に先導される導師……そして、大量の血だまりの上に横たわる襲撃犯達……【の体】。

――アカシックトーメント――

導師のみに代々伝えられるダアト式譜術の一つ……
ダアト式譜術とはユリア・ジュエの弟子の一人、フランシス・ダアトにより編み出された戦闘では『特殊な譜術』と『体術』を画気的な組み合わせにして使い、惑星預言（プラネットスコア）を詠む事ができる唯一の譜術でもある。
他の譜術と違って第七音素を大量に使う為、扱いが難しく……第七音譜術士でも全く使える事が出来ない物だ。
その中で導師としての素質を持つ者だけが使える譜術なのだ。

その威力の凄まじさがこいつ等の体に直接刻みつけられたかのように重体の怪我として現れていた。
くそ、細胞組織レベルまで破損されているような傷口だな。
これは……手術しないと無理だな……

「この二人は手術室へ連れて行け。ディノ、リーシャ、ヒュー、エレナの四人は助手として着いてきてくれ。」
「「ハイ！！」」

――――――――――

手術器具良し、ライト良し、麻酔導入良し……
俺は全ての用意を確認していたのだが……

バタッ……！！

「先生！！今入った情報なんですが……」
「何があった……」
「冷凍保存させてたこの人の右腕が……」
「……何！？」

問題が起きた……片方の男の千切れた腕が感染症にかかってしまったそうだ。
なんてこった……このまま繋げても確実に壊死を起こし、合併症を併発してしまうぞ！？

やはり……無理か……四肢を繋げれる時間はマイナス温度条件でも最高６時間までだ。
四肢縫合は時間との勝負だというのに……

ちなみに知らない人には少し教えておこう。

くっつけるということは、元の状態に戻すということにはならないんだ。
切断された動脈と静脈を再建すれば切断された組織は生き残るが、いったん切断された神経は完全には元通りには戻らない……
腕には、手の動きに関係した重要な神経が３本あるが、そのうちの１本が損傷され、手術で縫合したとしても手には障害が残る。
ましてや３本とも切断されたのなら大きな障害が残る物だ。

神経の問題だけではなく、筋肉の障害も残る。
通常、筋肉組織は絶え間ない血行によって栄養が送らされているが、この血行が２時間以上、途絶されると不可逆性の変化を起こす。

こいつが一番の厄介ものでな……筋肉が萎む事により元々通ってた筈の血管と神経を圧迫してしまうからなぁ……

時間が足りない……やはり、四肢縫合は諦めるしか……

いや、そう簡単に諦めてどうする！！

不可能など滅多にしかない！！可能を不可能に簡単に変えるな！！

考えろ……感染症防ぎつつ、尚栄養を送り続けさせるには……

……

……

……

・　・　・

――別に腕は腕の部分にしか戻せないという訳ではないだろう？――

「術式変更だ！エレナ……今から言う事を他の三人にも伝えておいてくれ！！」

「やはり、四肢縫合は諦めて……」

「いや、縫合はするさ……だけどそれは今という訳じゃないという事さ。」

「え……？」

前世から引き出した興味深い術式の一つが頭に浮かんだ……

これを思いついた奴はある意味尊敬するぜ……

「良く聞け……この術式はな……」

――――――――――

フォニム灯が一台の手術台を照らしつける。
その真下には白の手術着を着た男女五人……
傍には様々な器具が並び、今かと使われる時を待ち続けている。

「今から四肢縫合術に取り掛かる。君達はこの術式は今回初めてだろうが……一つも見逃さないでほしい。助手をしつつ俺から学べ……それだけだ。」
「で……でもハーミット先生！あの方法で本当に大丈夫なんですか！？通常感染した四肢は……！！」
「だから保存するんだ……元の肉体というこれ以上にない保存場所があるのだからな。」
「……今まで貴方に驚かされてきましたがこれは無いでしょう……なんせ……」

――千切れ、感染した右腕を足の動脈、静脈を直接取り出して腕のと繋ぎ……なお且つ足自体に縫合するなんて……――

「術後はしばらく抗生物質の投与などにより感染を完全に抑制させ、その後に再び本来の四肢縫合術で腕を付ける……それじゃあ……」

――――手術（オペ）を開始する――――

「メス……」
「はい……」

狙うのは右足の股あたりから切開して動脈と静脈を取り出す。
メスの鋭い刃はスンナリと皮を、肉を切り……そこから血が流れ出す。
元よりマーカーを付けたのでその線に沿ってメスを走らせていく。
その時間約１０秒ほど……

「剪刀（クーパー）……ペンローズドレーン。」

煎刀……鋏の事を言う。
メスでは綺麗に切れない所をゆっくりと剥がすようにして切り進める。
余り深く入れると目的の血管を傷つけかねないので素早く且慎重にやる。

ペンローズドレーン……排液管であり、内腔の血を抜くためのものである。

「鉗子……3本だ。」

鉗子……代表的なものはコッヘル止血鉗子という物で血管を挟む為に使われる。
これにより余剰な出血を防ぐ。

「心拍が少し低いな……酸素導入。」

「は～い、入れま～す♪」

助手の一人、ヒューがどこか抜けた口調で酸素のバルブを開き出す。

「筋鈎……ディノ頼む。」

「解りました。」

ディノに術野の拡大を任せる。

二本のL字の形をした金属板が肉を引っ張り奥の組織を覗かせる。

「ありましたね……」

「あぁ……今からこの大ずい動脈、及び静脈を剥離して同じく剥離した腕の血管と縫合するぞ……メッツェンと洗浄の為生食を。」

ここからだ……ここが正念場だろう……

こいつを無闇に傷つけたら大出血を引き起こす。

素早く鉗子で血流を塞いで切断した後に腕のと繋ぎ合わせるぞ。

「鑷子（せっし）、ガーゼ……出血量は！！」

「今の所、８００ｍｌです！！」

「術前からの出血の為それより多い可能性大だ……A型の輸血の準備を！！」

血液型の調べ方についても述べさせてもらおう。

たとえば、A抗原を持つ赤血球（つまりA型の血液）を、ある血清に垂らすと固まる。

この血清には、A抗原を固まらせる物質「抗A抗体」が入っているのだ（抗A血清）。

逆に、固まらなかった血清には「抗B抗体」が入っている（抗B血清）。

つまり、纏めるとこういう事だ。

「抗A血清は固まり、抗B血清は固まらない→血液はA型

抗B血清は固まり、抗A血清は固まらない→血液はB型

両方固まらない→血液はO型

両方固まる→血液はAB型　　」

また、血漿の中の抗体からも調べる方法があるが……これ以上は説明しきれないのでハブらせてもらおう（それを作者の都合と言う……）。

「ふぬぐぐぐ!!!」

「ポンピング（注射器による血液の直接送入）できついだろうが頑張れよ……アルブミン（血漿タンパクの一つで、血管内に水を保持する働きを持つ）追加!!」

これで出血性ショックは心配ないな……

「よし、血管剥離完了……次は腕を……ッ!?」

「どうしたんですか?」

「見て!血管の太さが違うよ!?これじゃあちゃんと縫合できないよ〜!?」

「これは予定外だったな……けど太さが小さければ……広くすれば良い事だ!!」

バチンッ……！！

「な……腕の血管を斜めに切って幅を広げた！？」
「すごい！これなら問題無しです！！」
「私語は慎め……絹糸と縫合針」

シュッ……シュッ……

「ディノ……鉗子を……」
「了解しました……筋組織も縫合するので？」
「そうだ……できるだけ癒着を活用させて壊死を起こさせないようにだ。」
「先生、腕の切断術……大方完了です。」
「ガーゼと包帯……今回は譜術は出来るだけ使わない方向にする……余り自然治癒力のサイクルを壊したくないからな……煎刀」

パチンッ……！！

「四肢縫合術完了……ラストスパートだ、これより右腕の四肢切断術に取り掛かる……なるべく長さを残してのだ……いくぞ。」
「「はい！！」」

――――――――――

手術は無事成功した……
結局生き残ったのは二人だけだった……
もう一人の方は足をやられていて完璧に挫滅していたために四肢

切断術しか方法はなかった。
手術時間は計2時間ほどだ……俺にとっては長くも短くも感じない。
それよりも急がないと……俺は飲み水を片手に目的地へと向かう。
そう、アリエッタの所だ。

「調子はどうなっている？」
「あ……先生でしたか。今は安静にして眠っていますよ。」
「……そうか。」

その言葉を聞いてほっとした。
傷は浅いとはいえ、万が一の心配は越したことは無い。
未だベッドで眠るアリエッタの傍へと近寄って枕の隣辺りに座る。

「……無事で……本当によかった……」

俺は患者の優先順位は飽くまで重症度によって決めている。
だから、感情とかで優先順位を決めてしまっては助かる命も助からないからだ。
命の生死に携わる以上俺は……冷酷になることだって気にはしない……
けど……

「一刻も早くお前の元へ駆け寄りたかった……この気持ちは本物だ……」

家族として、父親としてアリエッタを思う気持ちに偽りはない。
それだけは知っていてくれ……
そう考えながらハーミットは眠るアリエッタの頭を優しくなで続

けるのであった……

「ハーミット先生……連絡が……」

「……言ってくれ。」

先ほどまで助手を務めていたエレナがこの病室にやって来た。

そして、治癒係の纏め役としての顔に即座に変更する。

「あの……先ほど手術を行った二人についてなぜ治療をしたのかと詠士達から何通か抗議が……」

「……やっぱり来たか。」

まぁ……そうだろうな……

俺の信念と奴らの信念は何処かと相容れない所がたくさんあるだろうしな……

罪人だから治療はさせない……そんな事は却下だ。

“生きようとしている限り”俺は治療をする。

直接患者の体に聞くからわかるのさ……

「尋問とかうんたらかんたらで誤魔化して長引かせとけ……ディノの奴得意だろ？」

「ディノ先生可哀そう……まぁそれはいいとして……」

「いいのかよ……」

少しふざけた所で……

「本命はこちらです。」

スッ……

「これは……集令か……どれどれ……ってなんだと!?」

手紙の封を見て俺はがく然した……なぜなら……

「音叉をシンボルとしたこの印は……導師のみにしか……!?」

さて、どうなるとやら……

第５６話（後書き）

薬品類とかは正確には調べれませんのでそこんところ考慮をお願いいたします。

第５７話（前書き）

そろそろ１００万ヒットですね……嬉しい限りです。
さて、それを記念して何かをしようかと考えています。
そこで、第一として小規模キャラランキングをしてみようかと思いますのでもしよろしければ感想か作者ページの“メッセージを送る”にあなたが選ぶ1～3位（ポイント制として順に5P，3P，1Pとします）のキャラを記載してください。
また、そのキャラの何がお気に入りかも書いてくださると嬉しいです。
集計数は目星として１０件～２０件としてますので……また、それ以上集まらない場合は他の事にするつもりですので……ご協力お願いします。

第57話

「どうぞ、遠慮なさらずにそこへ座ってください。」
「感謝します、導師イオン。」

とある執務室に二人の人間が椅子に腰を下していた。
物静かに常に精神の糸をピンと張り巡らせていく……

「ハーミット、僕は貴方の事を何度も聞いた事があります。なんでも……摩訶不思議な医術を以て他では治せない多くの人間を治した医者だとか……」
「そんな珍しがるものではありません。同じように技術を知ればやれる人間も多く出てくるような代物ですよ……私の医術は。」

顔には微笑を浮かべているが、所詮作り笑いでしかない。
気楽な意思ではこの人間には勝てないと考えてるからだ……
もちろん、相手も甘くはないからな……

最高の試合結果は引き分け……可もなく不可もなくだ……

「さて、前置きはここまでにして始めましょう……」
「……」

さて、これからだ……

「貴方は僕に襲撃を掛けた犯罪者達に治療を施したそうですが……ダアトに属する者である以上……ダアトで起きた事に関する処理の仕方は詠士達が完全に取り決めている事は知ってますよね？」
「たしかに、彼らは導師を害そうとした輩達です……その様な罪は

即刻死罪となり、すぐさま処刑をされる身であります。」
「よろしい……ですから、未だ生かしているとなるとそれに反するという意思を持つと思われるのですが……その事は？」
「……彼らのバックを確実に抑える為に尋問して聞き出す機会を増やしてみようかと……そう考え、延命の判断を行ったまでです。」
「なるほど……では、この後にて即急に尋問の準備に取り掛かるとしましょうか……」
「……恐れながら導師、彼らは腕や足が千切れた程の重体の身です。そんな状態で尋問などしては激痛で2分も持ちはしませんでしょう。」
「それなら、貴方が開発した痛みを感じなくさせる薬を打たせて言葉を吐かせる頭と口だけを働かせれば良いではありませんか。」
麻酔の事を知っていたか……報告書で少しだけ記述した事があったな……
しかし、完璧に詳しくは知らない筈だ……
「いえ、その薬は痛みを失くすのではなく脳を麻痺……つまり、痺れさせるものであってそうしては腕や足はもちろん、目や口さえも動かなくなってしまう為無駄になります。」
「そうですか……僕は医学についてはさほど学んでいませんので無知で申し訳ありません。」
これは8割が嘘だ……麻酔の種類は全身麻酔だけだと誤魔化している。
局所麻酔の存在をそのまま知らせないで行こう。
「それに、彼らとて覚悟を以て今回の件に及んだ筈……生半可な事では事実を喋る気にはならないでしょう。」
「つまり、確実に情報を聞き出すためにも彼らを生かす事にする…

…それが貴方の判断という訳ですか……」
「二人の内、片割れはもう足の傷は早くて何日かすれば塞がる筈です。それに……一度麻酔を掛けた以上、効果が切れない限り眠り続けますのでまだ時間が……」

本当は色々すれば数分は目覚めさせる事はできるが……それを教えはしない。
だが、あの二人はダアトで罪を犯した……理由が正しいか間違っているかはどうであれ……
その代償は払ってもらうしかない……俺は患者に人生の保証まで掛けるほど甘くは無い。
だが、俺の患者である以上最良の治療を施させてもらう。
そのためには……まだ生きてもらおうか……

これからの二人の成り行きを想像してみていた。
そこに、想像を裏切る言葉が伝えられる……

「仕方ありませんね……では先にその二人の親族の方の処刑を取り決めますか。」
「……!?」

しまった……!!法律では導師襲撃程の罪は本人だけではなく親族共々処刑対象に入るんだ!!
話をうまく本人だけの話題に持ってかれた為に意識を逸らされたか!?

「あぁ、安心してください。彼らの身元は既に判明していますので。」
「お……女子供までも処刑対象へ入れるのですか!?」
「当たり前です。彼らの犯した罪はそれほどに重い……当然の結果

です。」

俺は導師イオンの眼を見てみた。

その眼には……何の色も移していなかった……

当然だと……当たり前だと……

人の命を左右させる事に躊躇も戸惑いも何も感じてないようだった……

ダアトを治める最高指導者としての導師ならこのような事は無くてはならない心構えだとは思うには思うのだが……

この子は……普通じゃない……

何かに区切りを付けてしまっているような……不気味で仕方がない……

――あの子はきっと……自分を今のようにした原因である預言を憎んでるでしょう……けど、それと同時に誰よりも寂しがり屋なんです。だから……誰かを傷つけてそれを紛らわそうとしている――

導師エベノス……貴方が考えているよりもこの少年は厄介な事を背負っているのかもしれません。

寂しさ所じゃないですよ……

「ですが……導師イオン、一つ聞きたい事があるのですが……」

「何でしょうか……申してみてください。」

「襲撃犯達は何故貴方様を襲ってくる真似をしたのでしょうか？……何か理由がある筈です。それを教えてもらえないでしょうか……？」

これにどう出る……答えろ、導師イオン……

「残念ながら、その件は機密事項となりますのでお教えする事はできませんので……」

ほう……そう来たか。

まぁ、おおよそそう言うと予測は出来たが……

「そうですか……私としては部下達が報告した事に妙な事が出たのですが……」

「と言いますと……？」

少し此方のカードを切るか……

「導師のレプリカ……そんな言葉を襲撃犯が呟いていたのですが……」

「……ッ！？」

食い付いたか……

この話は本当だ……最初の手術をしていた時に別の部屋で治療を受けてた片割れが咄嗟に部下に話した言葉だ。

ヴァンの動向……その中には導師との密談が多くなっている事がアッシュから聞いている。

その理由がこれという訳か……

「私もレプリカという言葉には些か聞き覚えがありましてね……なんでも、音素を使って出来る姿形が本物とそっくりな劣化複写体の事を指すとか……」

「確かにそうですね……僕も一度本で読んだ事はありますから言葉の意味は知っています。」

導師イオンのレプリカを作る事は何か重大な理由がある筈だ……その関係までは深くは探れなさそうだが……上面を出せば警戒はする。

「ですが、私が変に思ったのは“導師の”という言葉の方なんですよ……」

「……」

「そういえば、レプリカは作る物で禁止された物がありますよね……生体レプリカという物が……」

「何が言いたいんですか……？」

イオンの顔から微笑が消えてきている。

俺の目的が分かってきたようだな……

「いえいえ、まさか導師イオンのような御方が禁忌に手を出すとは私には考え付きませんので……私の思い違いということで。」

ハーミットは口元を大きく変えて笑いの顔を表せる。

その顔にイオンは些か顔を固くしかけている。

「ですが不味いですねぇ……この事が噂になって教団内だけでなく、自治区の所まで流れついたら導師イオンの立場が不味い事になりますから。」

つまり、あの二人の家族の処遇を如何にかしないとこの事を噂として流してやるぞ……

それを伝えれれば完了だ。

「……わかりました。その件については僕から何とかしましょう……教えていただきありがとうございます。」

必死に抑えてても無駄だ……顔の表情に焦りが浮かんでるぞ？

俺に嘘をつくんだったら常に平常心を持つ事だったな。

「では、私はこれで……まだ彼らの治療は完了していませんので……」

「えぇ、ご苦労様です……」

――――――――――――

～診察室～

「ゼェ……ゼェ……」

「落ち着いてくださいよ先生！もう纏まったんだからいいでしょう！？」

「無理よディノ……導師様に意見するなんて事して無事に帰れた事自体奇跡に近いんだから……」

「先生すご～い～♪」

「は……ハハハ……震えが止まらねえや……」

ハーミットは診察室に戻るや一気に抑え込んでいた緊張の影響を放った。

膝は笑い、暫くまともに立つ事さえままならないくらい精神が疲労していたのだ。

「あ……そういえば先生、先ほどの二人の病室への搬送済ましときましたから。」

「そ……そうか、じゃあ俺は……悪いけど仮眠する。はっきり言ってこのままじゃヤバい！！」
「駄目でしょうが！」
「や～だや～だ！！俺は休みたいのぉ！！」
「良い大人が幼児退行しないでください！！」
「キモい……」
「ぐほっ……！！」

色々とはっちゃけ始めているハーミットなのであった……
とにかく良くやったと言えば良い……か？

―――――――――――

その後は変わりなく、兵士の軽度の怪我や診察を行っていった。
ハーミットは今日の手術の疲れもあってか眠気が出始めている。
そんな所で今日の勤務時間は終了となった……

「あぁ～疲れた……」
「では、片方の患者の抜糸は明日に行いますので……皆さんお疲れ様です。」
「お疲れ様です。」
「お疲れ～！」
「お疲れ様。」

今丁度、病室の隣の部屋の彼らの会議室では解散の号令が響いていた。
それぞれが自分の荷物を纏め、己の部屋へと帰る準備をする。

「それでは残業頑張ってくださいね～♪」
「ちくしょぉ～～！だから偉くはなりたくないんだよこれだから！！」

だが、ハーミットは他の治癒士達より仕事が多く振り分けられてるので残業確定なのであった……
ペンを出来る限り高速に走らせるようにして瞬間的に印を押す。
次の書類に取り換えてサインして印を押す。
また次……
その次……

「ぐ……今回の件の後始末的だから決算とか複雑になってて面倒すぎる……」

一応言うがこの世界にはパソコンはおろか電卓のような物は存在しない。
なので一枚づつ筆算でやっていくしかないのだ……
これがまためんどくさいという訳だ……

「うげぇ……薬代がぁ……」

どうやらかなりの痛手が入っているようだ。
ハーミットの頭を悩ませる種となっていた。

「よし、あいつ等の給金ばれない様にしてちょっとづつ減らそう！！」

……いちおう解決策を見出した……
だが、本人達が聞けばとんでもない事ではあるが……

コンコンッ……！！

「……どうぞ。」

そんな中、突如としてノックの音が部屋に鳴り響いた。
その音を聞いてハーミットは入室の許可を出す。

カチャッ……

その言葉が出たと共に……

バタンッ……！！

勢いよくドアが開かれ、顔を隠した者達が何人も部屋に侵入してくる。
そして、ハーミットに向かって何かを投げつけてくるとそれは白い煙を出し始める。

「何者だ……！？……ゲホッ……ゴホッ……！！」

声を張り上げたのがいけなかった……その反動で息を吸う為、その煙ごと肺に取り込んでしまったのだ。
その煙を吸うや息苦しさに見舞われ、喉を押さえる。
だがそれだけではない……次第に体が……頭の中が重く感じ始める。
それ故、ハーミットは忽ち沈み始める……

「く……そ……」

ドサッ……！！

完全な油断であった……最後には体をテーブルの上にのしかかる様な体制で倒れ込んだ。

「……眠ったようだな。」

「よし、連れてくぞ。運べ……」

ハーミットを襲った者達は倒れたハーミットの体を担ぐようにして運ぼうとする。

そして、体に触れようとするが……

ガバッ……！！

「な……何！？」

眠ったかと思われたハーミットの体がいきなり起き上がる。

それと同時に音素の収集が始まる……

ザバアアアッ……！！！

「ぐおぉぉぉぉ――――！？」

「離れろ……！！」

詠唱破棄のスプラッシュが発生し、一番に近づいた男を横流れに激しい水流で吹き飛ばす。

他の人間達はそれに気付いて譜術の軌道上からいち早く離れた。

「ぐ……」

「貴様……！？」

未だおぼつかない足取りで此方を睨むハーミットを警戒した。
なぜ、確実に意識を落としたかと思われたハーミットが目覚める事ができたのか……それもまた考えながら……

「う……ぁ……」
「む……！？」

ドサッ……

しかし、これ以上警戒する事は無くなった。
再びハーミットは意識を落として床に倒れ込んだのだからだ。
それにより、男はハーミットの脚に注目する……

「……たいした男だ。とっさの判断でナイフを脚に突き刺していたのか……」

だが、軍でも使われている睡眠ガスを噴出させる譜業の力の方が上だったか……
そうでなければやられてたのは俺達だったという訳か……

「……今度こそ運ぶぞ、抱えろ……」
「ハッ……」

……はたして彼らはいったい……

第57話（後書き）

次回はとある人物と戦闘編です。
これは出来るだけ長くしてみようかと我索中です。

第５８話（前書き）

ランキング継続中です。
メッセージボックスにてお待ちしております。
いや、ホントお願いしますから！！
用意が無駄になっちゃう！！！

第５８話

「……ここは……？」

今まで眠り続けていたハーミットは固い石床で横たわらせていた体を起き上がらせる。

辺りは薄暗く、今まで目を瞑って夜目になったとはいえしっかりと捉えれないでいる……

ジャラ……

「……ッ！？」

金属が擦れる音が鳴り響き、その音を探してみるとそれは自分の背中にあった。

どうやら腕を後ろに回して手枷を掛けられているようだ……

「くそ……！！」

ガンッ……ガンッ……！！

力を入れてみて如何にかしようとするがビクともしなかった……

枷自体が鉄か何かで作られているからであろうか……

「なら……譜術で……ッ！？」

バチィッ……！！

「がぁぁぁ……！！」

エナジーブラストを詠唱しようとして音素を取り込むがその瞬間激痛が走る。
まるで、譜術を使う事を拒むかのように……

「無駄ですよ、その枷は強力な譜術封じの譜陣を編み込んだ譜業仕込みの特殊な枷ですからそう簡単に外れませんよ。」
「誰だ!?」

突如暗闇の部屋の中から自分以外の声が響き渡る。
どうやら、今までずっと此方を窺っていたようだ。

「ふふ……もう僕の声を忘れたんですか?数時間程前に会ったばかりだというのに。」

そう言って、声の主は動き出す。
未だシルエットのようにしか姿は見えないが、手を見てみると何かしているのがわかる。
何をする気だ……そう考えていると次の瞬間、眩い光がこの部屋に照らし出された。
一瞬眩しさで目の筋肉が急激な収縮を始めた為、思いっ切り目を瞑ったが……徐々に慣れてくると相手の顔をしっかりと確かめようとする。

「……まさか……」
「そのまさかですよ、一応言いますが本物ですよ?」

その人物とは……

「導師……イオン……」

「正解です♪」

目の前には今まで見て来た導師イオンとしてではないイオンがいた。

髪飾りを外した髪は纏められ、白を象徴した法衣は脱いで茶色を基準とした動きやすい服を着ている。

「何故、貴方が……」

「何故……それは貴方が一番良く知っている筈ですよ？」

「……ッ！？」

その顔は薄ら冷たい笑みを浮かべてハーミットを見下ろしていた。

その表情に恐怖を感じ、思わず息をのむ……

「……ハーミット、一つ教えておきましょう……」

「……」

「僕はですね……貴方のように打算を図る様な人間は好きにはなれません。」

スタッ……スタッ……

イオンはハーミットの周りを回るようにして歩き出す。

その行方をハーミットも目で追っていく。

「しかも、今回の僕の判断にケチを付けるような真似をしましたね？」

「……その様な事など」

ガバッ……！！

「惚けるんじゃないよ、解ってるんだよ……僕を脅すような手口を使った事なんて……あんたもそれを考えてああいう風に言ったんだろ？」

イオンはハーミットが言葉を紡ぐ前にハーミットの首を掴んで強引に黙らせる。

口調が先ほどまでとは打って変わったような変化をしてだ……

その力は１２歳の子供の力とは到底思えないような代物でハーミットの気道を半分潰す。

「～！？～～～！！」

「言っとくけどね……僕は小さな物事で他人の言葉にハイそうですかと単純に耳を傾けるほど甘い奴じゃないからね。」

スッ……

「ゴホッ……ガハッ……！！」

「けど、今回は言葉の打開策は見つからない……かといって導師としての僕のプライドが許さない……それなら？」

「く……そ……が……」

「根源を潰してしまえばいい事さ。」

ゴシャッ……！！

イオンはハーミットの後頭部を思いっ切り踏みつける。

その威力に顔を苦痛に歪めていた……

「あんたってさぁ……どうしようもない偽善者だよね。赤の他人の男なのに本人はおろかその家族もできるだけ救おうとしてるなんて……高すぎるリスクの中こんな選択を選ぶなんて……ホント偽善者

としか言いようがないよ。」
「う……ぐ……」
「あんたあれ？聖人だとかになりたい訳？だったら……」
「……で……だ……」
「ん……何て言ったの？」

ハーミットは激痛に耐えながらも声を絞り出してこう言った。

「偽善者で十分だ……そうでなけりゃ人は救えないからな……」
「……何それ……？」
「人間は神にも……“本物”の聖人や英雄になんてなれやしない。だからこそ簡単になれる偽善者という名の道化だけが人を救う可能性が生まれる……俺は……偽善者である事に誇りを持ってもいいくらいだ。」

口から血を少し流しながらイオンに笑ってそう言いのけた。
その笑みは勝ち誇る様な……そんな物である……

「……ふふふ……あはははは！！！面白いねあんた！！偽善者が世界を良い方向へ導くのにふさわしいと言うのかい？」
「ま、偽善者と呼ばれるのを嫌う奴は別だと思うがね……」
「へぇ……このままあんたの存在を葬る工作でもしようかと思ったけど……気が変わったよ。僕と勝負しようよ。」
「勝負……？」
「決まってるだろ……決闘だよ。」
「そんな事して何の意味がある！！」
「賭けをしようじゃないか……あんたが勝てば僕はあんたの存在を認めよう……けど逆に僕が勝てば……」
「俺の生死をそんな物で決めるのか……」
「本音を言うと……僕はダアト式譜術を収めているけど人との実戦

で使う事は余り少ないんだよ。候補の時はこの地下訓練場で魔物相手ばかりだったからね……強いんでしょあんた……ヴァンから聞いてるよ？」

「……それなりにな……」

「拒否権は無しだよ……もしあんたが負けたら……そうだね、おまけにあんた等の大事な部下達の首もただじゃすまないって事で。」

「何……！？」

「言ってなかったけど、拘束されてるのはあんただけじゃないよ？他の四人も別の部屋で同じようにされてるさ。」

「きさまあぁぁぁぁ――――！！！」

己の部下達にも手を掛けるとなるならば黙っては居られない……怒りで暴走して強引に立ち上がるが、腕は後ろに枷を付けられて拘束されたまま……

「じゃあこれ、手枷の鍵だから……先に待ってるよ？」

チリイィン……

そう言って小さな鍵を投げつけた後は扉の向こう側へと去っていく。

それを睨み続けながらハーミットはすぐさま鍵を拾い、手枷にある鍵穴を探す。

そして、鍵穴が見つかると力任せに鍵を差し込んで思いっ切り捩じるようにして回した。

バチンッ……バチンッ……！！

ようやく手枷が外れ、少し痺れた手首を揉んで調子を調える。

それが終わるや扉の方へ走り出して脚で思いっ切り蹴る。

怒りが普通の行動をさせれなくなりつつあった……勢いの付いた蹴りは扉を強引に開く。

その次にあった部屋は先ほどとは違った広さを持つ場所であった。まるで訓練所と同等の広さを持つくらいのだ……

「じゃあ、ルールを言うよ。」

キュッ……キュッ……

イオンはサポーターの役目としてだろうか、手袋を付けている所だった。

「譜術詠唱はなし、でも治癒譜術は例外としていくらでも使って良いから。体術を使っての攻撃を基本とする事……それ以外での攻撃をした場合は即失格……わかった？」

「それだとお前が不利だと思う気がするが……？」

ハイルはこの時勘違いしていた……

導師イオンはダアト式譜術が使えるからこそ強いのだと……

でなければ１２歳の子供の体で大の大人を倒せる等と思えなかったからだ。

「そう……なら……」

ドンッ……！！！

「そのまま死んじゃえば？」

「……ッ！？」

殺気が走る……
小さな体からは考えられないような跳躍力でイオンはハーミットとの距離を高速に詰めて来た。
早すぎて身切る事は不可能だ!!防御をするしかない!!
ハーミットはボクシングのような防御体制へ即座に移りだした。
同時に……右腕を構え、脚から腰へと力を溜める姿勢を取り出し……
「くっ……!!」
腕で防御しているハーミットを上から思いっ切り殴りつける。
ドゴオォォォン……!!!
その衝撃は想像だにしないほどの物であった……
殴られても悪くてよろける程度だと考えていたが甘かった……
ハーミットは予想外にも3メートル程思いっ切り吹き飛ばされたのだ。
「がはっ……!?」
重い……あんな細い体から何故あれほどの力が……!?
まるでスイカほどの大きさの鉄球を思いっ切りぶつけられたような感触だ。
「僕を見た目で判断しない方がいいよ?ダアト式譜術が使えなくてもそれの元となる体術を徹底的に叩き込んだから格闘は朝飯前だから。」

「あ……ありえねぇだろ……なぜそんな力が……」
「あんたも体術を使うって聞いてたけど知らないのかい？拳法家はフォンスロットを使って手足を譜で直接強化するなんて常識だよ。」
「ぐ……ぅぅ……」

骨は……折れてないな……
反射的にとはいえ、咄嗟に身を少し引かなければ開放骨折だったかもしれない。
強い……今まで闘ってきたどんな奴よりも……

「敵が目の前に居るのに考え事だなんて感心しないよ？」
「……ッ！？」

ハッとして意識を即座に向けると目前にイオンの脚が迫っていた。
直前に気付いたため、左鎖骨辺りを蹴り上げるサマーソルトを掠らせながらも避ける。

「それで避けたつもりかい……≪鷹爪蹴撃≫！！」

空中でトリッキーな動きをしながら上昇した筈の脚は瞬時に方向を変え、地上へと急降下する。
あらかじめ連撃を予測していたハーミットは横へ小さく飛んで最小限の動きで避けた。

メキャァ……！！

目標を失った攻撃はそのまま地面を蹴りつけ、衝撃により亀裂が入る。
その時、バランスを少し崩したのを見逃さずハーミットはイオンの左手を背中に回して動きを抑え込む。

「離せ！！」

ゴッ……！！！

「がぁ……！！」

それに抵抗してイオンは前を向きながら背筋を使っての回転肘打ちをハーミットの顔に叩き込んだ。

咄嗟の判断で譜を込めてなかった為かそれはさほど怪我を負う程ではなかったが、拘束を外させるには十分な代物だ。

腕の力が緩むやイオンは回転蹴りをハーミットの横腹に蹴りつけた。

ドゴッ……！！！

「う……ぁ……」

モロに下部の肋骨に当たり、鈍い音を響かせる。

どうやら少しヒビが入ったようだ……

「ボサッとしてるんじゃないよ……≪双撞掌底破≫！！」

イオンは待ってはくれないようだ……

容赦なく両掌底から譜を込めた掌底波をハーミットに叩き込んだ。

体に叩き込められた譜が己の体に異常をきたし始める。

その正体は濃密な第七音素……

第七音素は一般的に再生の力と記録の力として知られてはいるが……ダアト式譜術の基礎となったイオンの体術は特別だ……

再生と記録の力である第七音素を過剰に取り込むと音素酔いという症状が起こってしまう。
再生の力も強すぎれば人間の肉体には毒となる……
異常な細胞分裂……血圧……神経……これら全てが正常な働きとして行われないのだ。

よって、ハーミットは叩きつけられた部位を抑えつけて声にならない叫び声を上げて悶絶していた。

「まだこれからだよ……立ちなよ……」

相も変わらずイオンはまるで道端の石ころを見るかのような目でハーミットを見下ろす。
その目には落胆……失望といった感情が渦巻いている……

「……ヴァンの奴、期待外れも良い所だよ……全然弱い……」

ズキッ……

「……」
「ははは……二本ぐらいしか持ってけなかったか……」

余裕の笑みだったイオンは突如走る右手の長指と人差し指の痛みで顔を少し歪める。
何時やった……その考えが頭の中を回っていく……

「双撞掌底破……だったか？指を開くのはある意味自殺行為だ……一本の指自体には手に勝る力などない……指同士閉めておくのが得策だ……」
「……ご忠告どうも……で、治ったのかい？」

「まさか……骨はまだ新しく形成したばかりだ……軟骨にも劣る……」

そう言いながらも立ち上がってハーミットは左手を胸に当て、常に第七音素を放出させて詠唱破棄のファーストエイドを掛け続けていたのだ。

ちなみに、ハーミットは先ほどイオンの左手の指を逆に曲げて脱臼に近い状態にさせていた。

「……悪かったね、少し調子に乗ってたよ……今から真剣にやらせてもらうよ……治癒師団長。」

「あ～その肩書嫌いなんだわ……俺は唯の軍医兼教官で通してるもんでな。」

イオンとハーミットは互いに治癒譜術を掛けながら小言の掛け合いをする。

そして、二人の治癒譜術が終わるや互いに構え直す。

「消えなよ……せ・ん・せ・い？」

「ガキが……大人を舐めるな。」

――――第二ラウンドの開始といこうか――――

第５８話（後書き）

イオンとシンクの体術の違いは第七音素を１００％使ってるのと代用として第二音素等を使っているという設定です。

第５９話（前書き）

一応、ランキング募集中です……これで無理なら諦めます……

第59話

「うおりゃぁぁぁ！！！」
「チィッ……！！」

ハーミットは手加減無しの背負い投げをイオンに仕掛ける。
全力で地面に叩きつけようとするその力はくらえば致命傷だろう……
だが、そうはいかない……

ギュルルッ！！！

地面に叩きつけられるかと思いきやイオンは脚を刈り取るようにしてハーミットの首に引っ掻ける。
それも譜で強化した脚力でだ……では、どうなると考えだろうか？

「らぁっ！！！」
「ぐっ……！！！」

ハーミットの投げる力が加わって首に掛かる脚の力が骨を嫌な方向へ曲げていく。
その瞬間の中イオンの目的を察したハーミットは手を離し、体を使って脚の拘束を振り払った。

「面白い技だね、僕の技を剛とすればあんたの技は柔と言う訳かい？」
「ちぃ……！！」

後ろへ半歩下がって続けて拳…蹴りの連撃を繰り出してくるのを

ハーミットは掌と脚をうまく使って逸らし、避けていく。
一つ一つがやはり強力だ……受けるという選択は無しだろう。
なら、攻めるのも必要と言う訳だ！！

「ぬんっ！！！」
「……ッ！？」

連撃を潜り抜けてイオンの懐に入ったハーミットは右腕と腰を押さえて自分ごと地面に叩き落とすような攻撃を仕掛ける。
投げても態勢を整えて避けられるくらいなら捨て身の方がましだ！！

ドンッ……！！！

「あ”あ”あ”あ”あ”！！！」
「ぐぅ……！」

背中を強く叩きつけられたイオンはたまらず悲鳴を上げ、余計に暴れ出す。
それを逃すかとばかりに体を強引に抑えつけているが、ギリギリといった所だ。

「調子に……」

スッ……

そんな時、イオンは左腕を手刀の形にして……

「乗るなあぁぁぁぁ――――！！！」

ザクッ……！！！

「ギャ

「ガアァァァァ――――！！！」

突き刺した……ハイツの右目にだ……

眼球からは鈍い音が聞こえ、ハイルは今までイオンを押さえていた腕で右目を強く押さえる。

絶叫を上げながら床を転がり回り、手の間から血が垂れてくる……

「げほ……ふぅ～……危ない危ない。」

「ぅ……ぁ……ぁぁぁ……」

小さな咳き込みをしながらイオンは立ち上がる。

その視線には憤怒の感情が現れ、未だ目を押さえているハーミットを睨む。

「どうしたの……ギブアップ？」

「ぐうぅぅぅ！！！」

その返事にハーミットは治癒譜術を目に掛けて血を止めて今すぐでも態勢を整えようと急ぐ。

この時、ハーミットの右目は角膜を傷つけられていたらしく、視る能力が削減していた。

「≪八葉連牙≫！！」

それを突いてイオンは彼の死角から攻撃を繰り出す。

譜を込めた猛撃がマシンガンのように体に突き刺さる。

吐血をして異に溜まった血を体が排出する。
籠められた第七音素が己の体で暴れ続ける。
内臓が悲鳴を上げ、意識を持っていかれそうになりだす……

「≪飛燕連天脚≫！！」

だが、彼の攻撃はまだ終わらない……
連続回し蹴りで体が浮き上がり、最後の蹴りで天井に背中が届いた……

「とどめだ……」

落ちてこようとするハーミット目掛けて腰を捻り、腕を下に向け……
譜が渦を巻きながら強烈なアッパーが放たれた。

「≪臥龍空破≫！！！」

ベキャッ……！！！

骨が拉げる音が広場に響き渡る……
イオンが先ず地上に脚が着き、その次にはハーミットの体が思いっ切り落ちて来た。
壮絶なダメージで体が震える……脂汗が大量に流れ、痛みに耐えようと踏ん張り続ける。
そこにイオンは近づいてきた……そして、うつ伏せで倒れているハーミットの体を足でひっくり返す。

「……ッ！！！」

「吠えた割には長くは持たなかったね。まぁ……そこそこ頑張ったというところかな？」

ハーミットは痛みで呼吸が荒くなりつつもイオンの小言を聞きながら治癒譜術を施し続ける。

重要なのは想像……怪我をした部分の細胞を強制分裂させ、それを繋ぐようにして傷を塞いでいく……折れた骨の個所は周りの筋肉が強制的に固定して隙間に血を貯めてそれを骨へと変換させていく。

だが、治癒譜術を使う事で色々と問題になるのが寿命を減らすという説がここ惑星オールドラントでは知られている。

その理由には細胞について知ってもらえば理解できると思えるので教えよう。

人間の基本単位とされる細胞は成長と共にそれ自体が大きくなり、細胞分裂をする役割を果たす。

でもそんな細胞にも分裂の寿命がある事を知っているだろうか？

それこそがアポトーシスという現象が深くかかわっている。

別名細胞死とも呼び、体という個体をより良い状態に保つために積極的に引き起こされているのだ。

本来なら新人代謝として少しずつ起こるものではあるが、強引に治癒譜術で細胞分裂を促進させた細胞が多すぎるとどうなると思うだろうか？

急性のアポトーシスにより体の致るところが壊死を起こし始め、その内……死へと導くのだ……

つまり、軽症ならまだしも重症を治癒譜術で治すという事はリスクが大きすぎるのだ……

「ま……まだだ……」
「そう、懲りないねぇ……」
もはやハーミットに闘う力など残されていなかった……
怪我を治すのに精いっぱい……精神力も残りわずか……
それに対してイオンは息切れさえもしていない……
圧倒的に向こうが有利の状況である。
「そういうのを何て言うか知っているかい？……往生際が悪いって言うんだよ。」
イオンは最早ハーミットに興味を失くしていた。
これ以上やっても唯の暇つぶしにもなりはしない……
だから、壊してしまおう……それで終わりにしてやろう……
「特別に僕の切り札を見せてあげるよ……だから、消えなよ……」
次の瞬間、イオンの体から音素による衝撃波が噴き出してくる。
――――オーバーリミッツ――――
究極兵装（リーサルウェポン）とも呼ばれる譜術の最終形態。
戦闘により取り込み続けた余剰音素を一気に開放し、ブースターの役割を果たす。
その効果は攻撃力、防御力ともに約三倍の底上げが可能となる。
「ぁ……ぁああ……」
その圧倒的な暴力に今度こそ覚悟した……

そして、イオンの体から噴出する音素が一束に収集されていく……
次に来る攻撃はどんな物かを悟った……あれは避けられない……
それればかりじゃない……今こうして立っていられるのがやっとな
所で更に動きを封じられている感じだった……
呑まれていた……全てが何もかも……

「ダアト式秘奥義……」

その瞬間、空間が凍結する。
音も、色も、光も、匂いも……何もかもが感じなくなる……
彼は映像の一コマ……存在がそう肯定されるような……

「≪点穴縛態≫！！！」

パアァァァァ――――――――――――ン！！！！！

音は一つだけだった筈だ……
なのに何故……体全身が攻撃されたような衝撃が……来るんだよ
……
もう……だめだ……
俺は……闘えない……
か……て……な……
ドサッ……

体中から血を流して力なく倒れていく。
今の彼には、何の意思も感じられない……
終わったのだ……

「ふぅ……結局……こんなものなんだね……」

全てを終え、イオンは己の使った服等を片づけ始める。
その後ろには、血だまりを作っていくハーミットの体が取り残されたまま……

――――点穴縛態――――

フランシス・ダアトが最後に編み出したダアト式譜術の体術での秘奥義。
第七音素の特性の一つ、≪記録≫の力を編んで作りだされ、数秒の間、相手のフォンスロットを通して時の加速を認識させる。
逆にこちらは人間の極致に陥る時に感じる時の遅延を認識する。
その現象を通してリミッター―の外れた連撃による攻撃を仕掛け、最後にはそれで生じた空を切り裂く衝撃波で止めを指す。
正に秘奥義とも言える代物だ……

「あ～ぁ……結構血が跳ねて来たなぁ……よく洗っとこ。」

……彼は本当に終わってしまったのだろうか……

―――――――――

Ｓｉｄｅ：ハーミット

寒い……暗い……何も聞こえない……
俺は……どうしてしまったのだろうか……
導師イオンと闘って……あぁそうか、負けたんだ……

此処は何処だ？俺は何処に居るんだ……？
でも、何故か懐かしい……
ずっと前に此処に来た気がする。
何処だったけなぁ……

――契約者よ、どうしたというのだ！？――

おや、この声……聞き覚えが……

――私の声をしっかりと聞くのだ！！己を忘れてはならぬ！！――

俺……俺……？
俺は……ハイル・シュヴェール……
いや、鞍馬蓮二……そうでもない……
俺は……どっち……？

――迷う暇はない！！名前に惑わされてはならぬ！！――

それよりあんた……誰だよ……

――私だ！！ローレライだ！！――

なんだよ、久しぶりだな……今地核に閉じ込められてるそうじゃないか……

――それはお前の存在してるオールドラントの方だ、私は別のオールドランドに属する者だ――

ややこしいなぁ……なぁ、ローレライ……俺、死んだのかな？

――……肉体の活動が停止している以上、人はそれを死と言うであろうな……――

そうか……どうして今まで連絡が取れなかったんだ……お前は地核に閉じ込められていない方だろ？

――平行世界の者による干渉は別の世界の異物として星が認めはしない……その存在のあり方が大きければ大きいほど反発力は強くなるであろう。お前でさえこちらの世界の私と干渉して存在を強引に留めていると言えるのだぞ？――

星のバランスを崩さない為に……て訳か。預言と言う物がある以上にそれ以上負担掛けるととんでもない事になりそうだな。

――お前の第七音素には我の一部を使っている……それのお陰で星からの影響を防ぐ事が出来ているのだ――

何……！？そうだったのか！？

――音素集合体は星の重要なパーツと言える存在だ。ゆえにその権限はいくらか抑圧できる……だが、問題が出来た、契約が果される前にお前は死を再び受け取った……――

となると、契約が反吐になってしまうな……すまないな……

――契約どころの問題ではないのだ!!あの世界はお前という存在も組み込まれて時を紡いで来た……だが、お前の死によりお前に関係のあるもの全てが歪み始めてきているのだ!!事象の矛盾が発生し始め、あの世界自体が消滅してしまうかもしれぬ……――

……なんという事だ……

――それればかりではない……私の力により曲げていた星のラインが暴走を起こし、“全て”のオールドラントにも影響が流れ始めれば≪惑星オールドラント≫は虚無の存在と化してしまう!!――

ど……どうすればいいんだ!!

――すぐにハイル・シュヴェールとしてオールドラントへ帰るのだ。しかし、その為には……――

何か問題があるのか!?

――お前の存在は混ざり合った物だった。嘗てのお前と≪本当≫のハイル・シュヴェールの存在が半分ずつある事により形を成していた。だが、今回の死により存在が半分消えた……無論、≪本当≫のハイル・シュヴェールの方が……――

……やはり、ハイル・シュヴェールは存在してたんだな……

――存在を半分失ったお前を戻すには別の何かでその存在を補わなくてはならない。私はそれをお前の前世での≪記録≫で試してみ

たのだが……――

……無理だったのか？

――いや、出来ない事ではないのだが……オールドラントと地球は時間の進みが違う事はもう解っているようだな？実は、そうするとお前の≪記録≫に異常が出るようになり、肉体までもが地球の時間経過に調節されてしまうのだ……――

……つまり、肉体の成長が2倍の早さで進行してしまうという訳か……

――正確には少し違うが……老いは起こらぬが、命の期限……寿命がお前がオールドラントで過ごす筈だった長さの半分にまで減る事になる――

……マジかよ……

――だがその分、お前の力は今まで過ごした経験の長さに比例して倍増できる……リスクは大きすぎるがその補正はそれに見合う分与えられる――

すると……５０年分の経験か……――

――すまぬ……オールドラントの人間としてある程度普通に生を授からせる事を約束したのだが……このような状況になるとは……――

お前は悪くないさ……今回の死は俺の行動が生んだ現象だ。責は此方にある……じゃあ言うまでもない、何時までも此処に居ちゃ星

の危機に繋がるんだろ？だったら選択肢は一つしかないじゃないか。

――本当にいいのか？別の方法としてお前を元の輪廻にどうにかして戻せば何とか解決もできる。契約を守る事に疲れたのなら今ここで破棄をしても……――

俺はさ……感謝してるんだよローレライ。この世界に来て初めて俺は自分の存在意義がわかったんだ……そして、今の俺には義理の娘が居て、友が居て、仲間たちがいて、守るべき者達が居る。俺は、この人達の為になら何処までも頑張れる……だから、頼む……――

――……その決意、しかと受け取った……では、契約の続行を果たすがいい。【祝福を携えしもの】よ！！――

――――――――――

Ｓｉｄｅ：イオン

さてと、こいつの部下達もどうしようかな……このまま帰してもあいつの不在に疑問を持って追及してくるかもしれないしこのまま……

ザッ……

その時、後ろから物音が聞こえた……

その音に足を止め、振り返ってみると……

――彼が立っていた――

「……へぇ、まだ生きてたんだ。てっきり死んだかと思ったよ。」

正直、少し驚きながらもイオンはハーミットに話しかける。

だが、その声には反応せずにそのまま突っ立ったままでいる……

「立つ事だけしかできないって訳？……じゃあ、今度こそ……」

ダッ……！！！

イオンは脚に譜を込めてハーミットの所へ加速していく。

次には、高く飛んで右足を前に突き出して勢いよく突っ込んで来たのだ。

飛び蹴りがそのままハーミットへ当たるかと思ったその時、

ハーミットの体から凄まじい音素の衝撃波が噴き出して来た……

「がはっ！？」

その勢いは飛び蹴りをくらわせる筈だったイオンの体を向こうの壁まで吹き飛ばす程だった。

「オーバーリミッツ！？まさか、あんたも……！？」

オーバーリミッツはそう簡単にできるものではない……よほどの技術がない限り扱う事は出来ない究極兵装≪リーサルウェポン≫だ……

それよりもイオンはそれよりも驚く事があった……

「な……なんだよ!!あり得ないじゃないかこんなの!?」

圧倒的な放出してくる音素の量だ……今まで彼から感じていた量の倍以上はあるのが感じられる。

こいつは違う!!さっきまでのあいつじゃない……!!

イオンは恐怖した……目の前の存在に……

イオンは興奮する……目の前の存在に勝ってみたいと……

「う……く……」

だが、ハーミットは何処か辛い顔を表す……

何かに耐えてるような……そんな感じだ……

実は、押さえきれていないのだ……地球の時間経過の仕方に比例した能力の向上……その一部としての音素の絶対値の底上げによる影響が……

噴き出し続ける音素は無駄の塊……早く抑えなければ次は無い……

――さぁ、見事制御してみるがいい!!そして、勝つのだ!!――

――

第５９話（後書き）

なんか、最強系に移っちゃったような気がするのですが……これでよければ続きを書かせてもらいますのでよろしくお願いします。

第６０話（前書き）

決着です……短かったような長かったような……

第６０話

ビリィィィ……！！！

「ッ……この！！」

ドガガガガッ――――！！！

「あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”～～～～～！！！」

ゴスッ……！！！

「ゲボッ……うえぇぇ……！！！」

もはや、そこに決闘という名の意味は無かった。

己の暴力のままに潰し合う死合と化している……

片方が拳を振り上げればカウンターとして蹴りが腹に入り、もう片方が蹴りを繰り出せば打撃が急所を的確に突いていく……

「あんたホント面白いよ！！初めてなのに譜を使っての強化が此処までうまいなんて！！」

「お”お”お”お”お”お”お”お”お”お”――――――！！！」

ハーミットは暴走を起こし続ける音素をフォンスロットを通して制御をし続け、たどり着いたのがイオンと同じ譜の固定化だ。

イオンは腕と脚で固定化をするが、ハーミットは脚のみの固定化を実現させたのだ。

暴れ狂う音素を脚のフォンスロットで強引に詰め込み、フォンスロットを放出する穴を塞いで維持し続ける。

これにはかなりの痛みが伴うのだ……初めての者にはなおさら……

例を上げれば血圧だろう……体に戻る方の血管に栓をして強引に血圧を上げて運動能力を上昇させる……そんな所だ。

その痛みに耐えながらハーミットは見よう見まねのイオンの使ってきた蹴りの型を模倣して攻撃を仕掛けていく。

守の態勢を主としているハーミットにとってこのスタイルは慣れない物だ……

それに、腕を攻撃に使わないのは医師としての鉄則を守り通してるからともいえる。

脚は腕の力の3倍……昔誰かがそんな事を言った気がする……

その意味が現れてるのかハーミットが仕掛け続ける蹴りは凶器へと化しつつあった。

掠れば服は破れ、皮膚は裂け……喰らえば唯では済まない……

それをイオンは譜の強化を上手く使い、ヒットアンドアウェイで闘い続けるが……良くて五分五分だ……

「≪爪竜連牙弾≫！！」

「≪爪竜連牙弾≫！！」

ズガガガガガッ――――！！！！！！

こいつ、僕の技をどんどん真似し始めてる！？

まだ技の錬度は低いけど型は狂いがない……！？

僕の攻撃を受け続けて技を覚えてきているとでも言うの！？

「≪臥龍撃≫！！」

「≪三散華≫！！」

イオンは下段蹴りを行った後、真上に向かって勢いよく蹴り上げる……

それに対し、ハーミットは譜を込めた三連続回し蹴りを放つ……

お互いの右足が打ち重なり合い……そして、止まった……

互いに脚での力比べをするかのように押し合いを続ける……

どちらとも退く気はないようだ……

「ハァ……ハァ……ハァ……」

「ぜぇ……ぜぇ……ぜぇ……」

二人に疲労の色が見え始めて来た……お互いオーバーリミッツで強引な底上げをした反動か疲れは多い。

しかし、違いはある……イオンは無駄のない音素の使い方だったが、基礎体力は子供のため普通は弱い……

ハーミットは基礎体力は高い方だが、音素の放出に無駄が大きく……余分な疲労までもが入り続けている……

「……ハーミット、質問したい事があるんだ……あんたは自分の人生で後悔した事はある？」

「……は？」

「僕は……導師として生まれた事に後悔して来た……預言で詠まれたばかりに僕は“普通”を取り上げられてきたんだ。」

イオンは何処か想う表情を浮かべて話を続けていく。

「導師になる……これはどんな人生の中でもこれほど最悪な事は無かったよ……なにせ世界の全てを知ると同時に自分の全てを知ってしまったんだから……」

「……」

「誰も“イオン”としての存在を望んじゃ居ないんだよ……預言を詠むことのできる導師イオンしかこの世界の奴らは必要としない……預言を詠まない限り僕の居場所はどこにもない……もううんざりだよ。」

その言葉には苛立ち、憤怒の想いが籠められていた……

まだ話は続いて行く……

「あんただって何かあるんだろ？後悔したことが……」

「後悔か……」

いつの間にか脚の力比べを途中で止めて脚を下していた。

ハーミットは暫く黙想をして……答えた。

「“今”の俺にはない。」

「……嘘言うなよ。」

「いや……俺の人生には多くの挫折や絶望がありはしたが、後悔した事は無かった。なぜなら、俺は俺の存在意義を自分自身で刻んできたからだ……良い所も悪い所も……」

「あんたにとって失敗はどうでもよかった物ってことかい？」

「違う、確かに……失敗をした事は何度もあったがそれを悔いた事は一度もない。次こそはと常に新しく前を見続けて来た……それが理由だ。」

俺は……過去に囚われずに精一杯生きてきた。

一分、一秒と……いつでも命がけで生きる気でいた……

だからこそ俺は今此処に居る……生きていると証明する事が出来るんだ。

「イオン、お前は言ったな？“自分の人生は最悪だ”と……俺から見てお前は全く不幸な人間とは……悪いがそうは思えない……」
「……ッ！？」
「お前は……毎日の糧に困らない事が最悪なのか？雨風をしのぐ事が出来る住む場所がある事が最悪なのか？……はっきり言ってやる……小さいんだよ……」

少しばかりの恐声で言ってやった……
俺には、本当に不幸な人間とはどんな奴かを知っている……

「導師になりたくもなかったのに導師になった？……それでお前は全てを奪われた訳ではないだろうが！！与えられた物も沢山あった筈だ！！自分が世界で一番可哀そうな人間だと自惚れるのもいい加減にしろ！！！」

ハーミットにとってイオンは唯の甘えつくされた子供にしか見えなかった……
確かに、預言で詠まれた事で家族と離れ離れにされた事とかには同情してやる……
だが、それでも少なからず感謝するべき所もある筈だ。
それを忘れている……それが許せないんだ……

「……な……」
「……何だ？」

「知った口をきくなあぁぁぁぁぁ――――――！！！」

イオンの手に膨大な第七音素が集束がしていく。
今まで使ってきた物とは比べ物にならない程の……
それを地面に掌ごと力強く叩きつけると巨大な譜陣が発生した。

「消えろおぉぉぉぉ――――！！！≪アカシックトーメント≫！！！！」

ダアト式譜術奥義、アカシックトーメントが炸裂した。

イオンには自分が決めたルールなどもう頭になかった……

唯目の前の存在を消し去る為だけに全力を込める。

「はあぁぁぁぁぁぁ――――！！！！」

その譜術の威力は彼の患者達の怪我からある程度知っていた……

だから、ハーミットは完全に避けるのは無理だと決め、自分の音素を脚に多く込めて真っ向に挑む事に決めた……

「≪鷹爪落瀑蹴≫！！！！」

その一撃は流星のごとく威力を放つ彼がイオンから見よう見まねで覚えた最高の技である。

空中から全力の音素を脚に纏って一矢の流星となってイオンの周りに発生する譜陣の中へと突っ込んでいく。

そして……互いの技が衝突した瞬間……

膨大な力の拮抗が衝撃波となって広場中を吹き飛ばしたのだ。

全てが終わった時、二人の居る床は大きなクレーターとなってそ

の中心に二人は佇んでいた……
そして、暫くの静寂が続いた後……

先に倒れたのはハーミットの方であった……

「ぐうぅぅぅ！！」
「しぶ……とい……ねぇ……」

しかし、イオンの方も膝をついて何とか今の姿を保っているような感じだ。
それでも、怪我の比率は圧倒的にハーミットの方が大きい。
先ほどの技の弊害によるためか、脚は赤黒く変色して所々出血を起こしだしている。
どうやら技の限界に肉体が付いていけなかったようだ……

「あんたには……次があるからそんな事が……言える……でも、僕には……時間がないんだよ。」
「な……に……？」
「僕はね……死ぬんだよ……病で12歳という短い生涯でさ……初めて預言が読めるようになって知った事がそれさ……」
「……ッ！？」
「僕は……別に自惚れている訳じゃない……“わかっている”からそう言えるんだよ……」

悔しそうだった……一言一言を言うたびに自分の言う言葉にどうしようもない諦めを感じていて……

「そんな僕の心中も知らずに皆は預言を必要としている姿に……怒りが芽生えたんだ……どうして僕が……って。」
「預言は……絶対じゃない！！必ず変えられる……なのに何故……」
「諦めるなとでもいう気かい？……この預言は誰が詠んだ物かを知っての事かい？」
「……」

そうだ、相手は預言について右に出る者はいないほどのスペシャリスト……
外れるという事がありえないと言えるような……
だが……

「そんな事はない……預言で死を詠まれても俺は救える事を“知っている”」
「……そういやあんた、昔ユリアシティでそんな事しでかしたって報告を昔聞いたっけ……」
「ハハハ……懐かしいな……」
「けど、あれは普通の預言士が詠んだ小さな物さ……それなら外れる可能性は現れるけど……」
「……なら、俺が治してやる。」

そこまで言うなら、医者としての俺は黙ってられない……
やっても無駄だと言い切る様な事などさせてなる物か。

「俺がお前を治してやる。たとえ他のどんな医者から見放させようとも……俺だけは絶対に諦めない。俺の全てを賭けてでも治してやる！！」
「……期待しないで待ってるよ……というかアンタ僕を治療できる立場なの？」
「そこは俺かお前の行方次第だ……」

「ふふふ……やっぱあんた面白いよ。」

イオンはよろめきながらも立ち上がり、ハーミットの方へと近づいて行く。

そして、傍によって顔を覗き込みながらこう言った。

「おめでとう、この勝負はあんたの勝ちだ。僕の反則負けという結果でね……」

「決着が付かなかったのは名残惜しいが……これ以上は壊れるからありがたく受け取っておくぞ。」

そう、イオンは禁止にしていた譜術を使った……

そのため、ルール違反としてこの勝負はハーミットの勝ちとなったのだ。

「約束は守る方だよ、部下達も解放してやる。あぁ、眠り薬でしっかりと眠ってるから事の成り立ちを知らせずに戻せると思うよ。それと、例の襲撃犯の件……猶予および彼らの家族の処分も僕が如何にかしてやる。」

「嬉しい報告をどうも……所で……」

「何？」

「……すまん、立てないんだ……助けてくれ……」

「……」

―――――――――――――

長い夜が終わった……

俺達は元の場所へと戻り、この事は無かった事にした。

部下達は自分達の部屋のベッドに戻してやって襲われたという記憶をうむやむにしてやっておいた。

その一週間後、俺は襲撃犯の四肢縫合の手術を行った……

結果は成功、以前の機能とはいかないが神経はちゃんと通って縫合できた。

でも、これからがあいつ等にとって大変な日が待っているんだろう……

罪と向き合え……俺にはそれだけだ……

まぁ、そんな訳で今日も診察室にいるんですが……

「どうして此処に居るんですか……導師イオン」

「決まってるでしょう……暇つぶしです♪」

このガキゃあッ!!一週間前俺にしたこと忘れたのか!!

「……此処は病人が入る所です……健康な人は即効お帰りください……カウンセリングは受付しておりませんので。」

「つれないですねぇ……僕とあなたの仲じゃありませんか♪」

てめぇとは仲良くした覚えなんてねぇんだよ!!

うるさいよ、黙って僕の話を聞きなよ。

おい、心で返すな……ッ!!

「オホン、それで……ご用件は?」

「脚……まだ完全とはいかないんでしょう?」

「……」

そうなのだ……あの戦いでハーミットの両足は機能が些か落ちて

いた。
歩く事には何も問題ないのだが、走る事となるとガタがつく……
「この前の謝罪も兼ねてその解決策を出させてもらおうかと思いましてね……」
「……今度は一体何を企んでるのですか？」
ジト目でイオンを見続けるが、気にした様子もなくこういった。
「単なる興味本位です♪」
「……はぁ……」
ハーミットにとって、さらなる受難の始まりだった……
「そういや、導師守護役のアリエッタは？」
「あ～たぶん僕の事探し回ってるでしょうね？」

「ふぇぇぇ～～～ん……イオンさまあぁぁぁぁぁ……」

「ありえったあぁぁぁぁぁぁぁぁぁ――――――！！！！！」

「煩いですよ、静かにしなさい親馬鹿ドクター」

ゴスッ……！！

第６０話（後書き）

アンケート続行中です。ご協力お願いします。
ハイル、イオンに興味を持たれるの回でした。

第６１話（前書き）

ＧＷ中のバイトは長くて疲れる……

第６１話

「こっちです。」
「あの、私まだ仕事が……」
「僕も今サボってるに近いんで、お互いさまって事で良いじゃないですか♪」
「尚更悪いわ！！」

俺とイオンは書物庫に居た。
突如診察室へ来て「あなたに見せたい物があります、着いて来てください。」と言ってきたのでまぁ……来た訳なんだが……

そうしている内に俺はイオンの後に続いて歩を進めていたんだが、来た場所がなぜか書物庫。
そして、とある本棚の場所へ来た所で立ち止った……

「……此処がどうかしたのか？」
「いえ、用があるのはその奥ですよ。」

そう言うとイオンは本棚の前でしゃがむと手をかざし、第七音素を放出する。
すると、彫られた模様かと思われた所からランプのように灯が付き……

ゴゴゴゴゴッ……

「な、なんだこれは！？」
「隠し扉ですよ……ここから先は導師、大詠士及びその関係者以外入れてはならない教団の最高機密ですけどね。」

「最高機密って……そんな事俺に教えていいのかよ!?」
「“貴方”だからこそなんです……この先には貴方が必要となる物が納められている……」
「……ちなみに、この先は……？」
「一つは貴方も知っているあの裏訓練場……そして、もうひとつは……」

――――禁書保管庫――――

――――――――――

その部屋の存在は圧巻させる所であった……
古く、埃や時折蜘蛛の巣が掛った本棚……
それは存在させる事を禁じられた書物達……禁書なのであった……

「さてと、目的の物を取ってくるから適当に何か読んでれば？」

そう言ってイオンは奥の本棚へと走っていく。
どうやらその目的の物は本棚の上の方にしまわれているようだ……
……だが、適当に読めと言えど何を読めばいいんだが考え付かないんだが……
……とにかく題名を見てみるか……

創世歴の真実……
セフィロト構造図……
地殻振動の謎……
ユリア・ジュエの生涯……
異教徒の歴史……

ネクロノミコン……
預言の原理……
惑星譜術……

うわ～S級の禁書ばっかだな……でもここら辺は今読んでもあまり関係のなさそうな感じが……

……そういや、なんかさっき一冊だけありえない物が混じってた気がするが……気のせいだと思っておこう。
もしあるのならあんなもん表紙見た時点でＳＡＮ値がＭＡＸになりかけん……うん……

えっと……これが良いかもしれないな……

――禁譜――

驚いたな……譜術にも葬られた物があったなんて……
ユリアシティでも外郭じゃ禁書とされるような物をいくつか見たが、ここのは桁外れだな。
イオンは今だ梯子に登って何かを探してるし……これを読んで暇でも潰しとくか。

そして、ハーミットは本を開き始める……

――――――――――――――――――――

楽園は荒らされ絶望が世界を包む
何故人は獣になりて血を浴びるか
この力もはや凶器にしか過ぎぬ
我三つの力知恵者に託す禁譜とす

銀に輝く氷塊はソイルの元眠る
其は砂漠にて輝く絶対普遍の原理
氷雪の袂にて眠る大いなる力は
荒野を抉る無慈悲なる白銀の抱擁
断罪の剣は寄せては返す南海の楔
沼地のこうげいは知の探究者を照らし
峠に七光の輝きもちて降り注ぐ
無数の星は浅い川の水面を揺らす
神秘の島にて天の力ひれ伏さん
――――――――――――――――――――

「白銀の抱擁……断罪の剣……無数の流星……この三つの禁譜は習得した物には星を滅ぼす災いと化すであろう……心せよ、これより記す言霊秘める唄を詠む者よ……己が覚悟を持たぬ者は己が力にて滅ぼされるであろう……もしこれより先へ進む勇気があるのなら生涯を以て見事制して見せよ……」

次の頁へ進む……そこには、奇妙な羅列で並べられた古代イスパニア語の唄……呪文が記されていた。
生唾を飲んで一度高鳴る心臓を抑えて古代イスパニア語を翻訳し始める……

「氷獄の河≪コキュートス≫にて眠る魔の力よ……この名を以て永遠の安らぎを与えん……永久≪とこしえ≫の氷にて眠れ……白銀の抱擁……」

――≪アブソリュート≫！！！――

……その名は絶対を意味する禁譜……
永遠に溶ける事のない水の力……

キイィィィ――――――……

「な……なんだ、この力は……！？」

その時、ハーミットのフォンスロットが活性を始める。

急激な第四音素が全身を駆け廻り、両手へと集束し始める……

「ぐうぅぅ……！？」

強制的に音素の集束を中止しようとするが、中止ができない……

次第にその力は円を成し、更に大きくなっていく……

「止まれ、止まれ止まれ止まれ止まれ止まれえぇぇぇぇ――――――！！！！」

「解放して！！あそこの本棚に投げつけるように放つんだよ！！」

イオンが此方の様子に気付いたらしく、ハーミットに指示を出す。

それを聞いて反射的にその方向へと力を解放する……

「お”お”お”お”お”お”お”お”お”――――――！！！！！」

ドシュッ……！！！！

青白い光玉は放射線を描いて吸い込まれるようにして中心の巨大な本棚へと飛んでいく……

そして……

―――――――――

「あんた馬鹿？」
「否定できないな……」

イオンとハーミットは隣り合うようにして床に腰を下していた……
その先には……

「で……何？“氷の書物庫”でも作る訳？」
「題名センスないぞ……」

見事な氷漬けの本棚が二人の目の前に形成されていた……

「禁譜唱えるなんて無茶するよ……しかも古文書の原本だし……」
「写本があるのか？」
「写本ねぇ……たしか、マルクトに秘密裏に寄付したっけ……」
「寄付って……そんな危険な物を寄付したのかよ！？」
「大丈夫……写本だったら鍵となる譜石を手に入れない限り唱えれないし、オリジナルよりは威力は落ちるから。」
「そういう問題じゃねぇぇぇ――――！！！」

ハーミットの絶叫が禁書保管庫に響き渡ったのであった……

「はい、これ……」

そんな時、イオンはハーミットにとある本を渡して来た。

「これは……」
「ダアト式譜術を文書化した理論書だよ。」

「んな……！？」

またもやとんでもない物を手渡して来た物だ……

「その中に身体強化の譜を刻む術が載ってあるから……試してみる価値あるんじゃない？」

「いやいやいや、俺ダアト式譜術使えないってば！？」

「馬鹿、別にダアト式譜術を覚えろって言ってる訳じゃないよ……その中の一部である特殊な譜陣をアンタの脚に刻んで治してみろって言ってるんだよ。」

「むぅ……」

表紙を表裏とひっくり返したりしながら本の全貌を眺めたりする。

少し古い革製の素材でできた本にしか見えない……

「言っとくけど、譜を刻む時点で激痛に耐えれるかどうかはアンタ次第だ……それでも良いっていうんなら貸してあげるけど？」

「……」

どうするか……これから始まる未来には激戦となる事が多い……

今の内に脚を治しておくべきか……しかし、リスクが高すぎる……

正に諸刃に剣だな……

「……検討しておく。有り難く貸させてもらうよ。」

「早まらないでね……もしアンタが如何にかしたら……アリエッタが悲しむ……」

「お、なんだ……心配してるのか？」

「違うよ……僕はどうでもいいけど……アリエッタはきっとそうだから忠告しているだけだよ。」

「はいはい、そうしておきますよーだ。」

「ニヤニヤするな、ウザい。」

咄嗟にイオンが軽く殴りかかって来たので右手で防ぐ。
パシンッと良い音が鳴り響いた。

――――――――――

そして、決心の日が来た……
やはり残り少ない寿命を持ったせいか、早めにするという感情が大きくなったのだろうか……
譜を刻む事に決めた……

「良いかい、本来のダアト式譜術を使う為の譜を小さい規模として刻むとはいえ……適正を持たない奴には肉体を破壊し続ける唯の毒にしかなりえない……本当にいいんだね？」
「……やってくれ。」

介錯をイオンに頼んだ俺は裏訓練場にあるテーブルに横たわる。
因みに言うが……イオンの方はまたサボりである……
ハーミットはちゃんと休みをとったの「文句ある♪」……いえ……

「いくよ……」
「……」

パチッ……パチッ……！！

素足に音素で両足同時に譜を刻み始める……
まるでタトゥーの模様のように太股から先へと向かって刻まれる……
すると、すぐに変化が現れ始める……

「〜〜〜〜ッ！？」

激痛……そんなものじゃない……

脚をマグマの中に直接入れたようなそんな感覚だ……

ガクンガクンと体が震え始め、腕や腰に巻いている拘束具が軋み始める。

イオンもたとえそんな状況であろうと途中で止める事はしなかった……

一度始めた以上、後腐れのないように……彼の覚悟に応じるように……

そして、膝の所まで作業が進んだ所……ふと見ると、脚が次第に上を向き始めてきた。

その行動が何かと解らぬまま譜を刻み続け、遂に終えた時……

上げた脚が勢いよく振り落とされ、拘束具ごとテーブルを粉砕した……

それを察したイオンはすぐさまそこから離れたため、大事には至らなかった。

勢いよく跳ねたハーミットはその衝撃で体が天井まで届く。

次に、靴底が天井に触れると同時……

ダンッ……！！

ハーミットの姿が消えた……いや、いつの間にか床にしゃがみ込んでいた……

それを目で追うが、また消える。

また見つける、消える、見つける、消える……

そう、ハーミットは今……裏訓練場の彼方此方を跳ね回ってるのだ……

肉眼でなんとか捉えれるほどの速さでだ……

その様子をイオンは暫く眺めてたが……次には数歩前に出たと思ったら……

ヒュンッ……！！ヒュンッ……！！ヒュ≪ガシッ……！！≫……

飛び回っていたハーミットの体を勘で捕まえたのだ。

「ぐご……ごぐが……！？」

「不味いね、ギリギリという所か……」

暴れまわるハーミットを譜で強化した腕で関節を極めて封じる。

そして、ハーミットの様子を何かを悟ったように観察していた。

「意識はまだあるよね……今アンタに必要なのは譜陣に慣れる事だ……だから、特別訓練といこうじゃないか。」

「がっ……！！」

極めた関節を元に戻してそこから体を向こうの方へと押し退ける。

ハーミットはそうしたイオンの方を焦点の定まらない目で見据える。

「死ぬ気で頑張りな……でないと、死ぬからね？」

「がぁぁぁぁぁ――――――――！！！！！！」

今まさに、力への試練が始まるのであった……

第６１話（後書き）

話を作る為、オリジナル設定を入れてみました。

第６２話（前書き）

今回はぼのぼのを目指してみました。

第６２話

「パパ、早く早く～♪」
「おいおい、そう急がなくても屋台は逃げないぞ？」

どうもこんにちは、ハーミットことハイル・シュヴェールです。

あの出来事から早一週間が経ちました……えぇ、本当に大変でした。

死ぬ気でフォンスロットを拡張するつもりで譜陣を体に慣らすためにイオンとガチバトルを繰り返したんですので……

全てが終わったころには暴走は収まりましたが暫く杖を突かないと立てないくらい筋肉痛等と一気に反動が帰ってきましたよ。

そんな状態でも診察室で仕事やり続けましたね……すごく痛かったです……

あぁ、そうそう……イオンから格闘技の型を徹底的に一週間で覚えさせられましたよ。

俺の場合、全てが蹴り技にして手を攻撃に使わない方向にスタイルを変える事が出来ました。

柔術と蹴術の合成にはかなりのバランス感覚が必要となりましたがね……

さて、そんな日々を過ごした俺にも癒しが必要です……

ですから、今日は始祖ユリアに関する祭りで家族水入らずで楽しみたいと思います！

あぁ、その笑顔をブ〇ーレイに納めておきたかったよアリエッタ……

今度ディストに意地でも作らせてやろうかな……？

いや、贅沢を言わずにせめてカメラの方にしたほうが……

「アリエッタ、ブドウ飴が良い、です！」

「よっしゃ、今日は無礼講じゃい！」

さて、今日は父親全開と行くとしましょうか……

――――――――――

「せ……先生、勘弁してくだせぇぇぇぇ！！！」

「おっさん……すまないがこれも俺の娘の為なんだ……」

「ま……まさか先生にこんな特技が……」

「あの店主絶対赤字だな……」

「パパ～次はあれ、です！」

今ハーミット達は射的場にいた。

譜業で動く的をバネ式の銃で当てて時間内に得点を稼ぎ、その合計点で商品が決定するという物だ。

一回３０Ｇと子供の小遣いで何回かやれるという値段だが、今のハーミットにはその常識等あってもないような物であった……

パンッ……！！

「よっしゃ、２００点ゲット！！」

「嘘！？あれ結構重い筈なのに！！」

「ぜ……全部一発で倒してるよ……」

実はハーミット……譜陣を通して銃に譜を内緒で込めているのだ……

なので、強化作用により、コルクの弾が警備専用で使われてるよ

うなゴム弾並みの威力に跳ね上がっている。
なんという才能の無駄遣い兼インチキ技であろうか……

バババァァ――――ン！！

「あ、最高点だ……」
「おっさん、賞品貰うぞ？」
「ちくしょぉぉぉ持ってけドロボオォ――――――――！！！」

てな訳で、得点分きっちりと頂いて行ったのであった……

――――――――――――

「～～～♪」
「あ～疲れた……」

それから様々な屋台を巡って何箇所か武勇伝を立ち上げてきたハーミット達は一時休憩とした。
傍には山盛りの商品で遊んでるアリエッタが居る。
流石に張り切り過ぎたのか、ハーミットはベンチに背を預けて少しぐったりとしていた。

「そういや、アッシュの奴は今どうしてるかな？」

まだ子供だから警備員としての仕事はやらない……というかヴァンがやらせないだろうな……
あいつにとってアッシュは二つの意味で大事な存在だからな……
……だからと言って甘やかして軍に所属させる真似はさせんじゃねぇぞ……
……まぁ、俺の言える事じゃないが……

「先生……？」
「ん……？」
「やっぱり先生だ！お久しぶりです！」
「あぁ、二か月ぶりだねアニスちゃん。」

目の前にはいつの間にかハーミットの前にアニスが立っていた。
どうやら、偶然見かけたから声を掛けたというところだろう。
それにしても、久しぶりだな……
何度か街の方に往診したが、最後にタトリン家の方に訪れたのは二か月ぶりと言ったところだろう。
あの後は病気になる様な事は無かったらしく、心配はもう無用だ。

「アニスちゃんもお祭り巡りかい？」
「あ……あはは、私んち……あまりお金なくてさ……」
「……ごめん、野暮な事を聞いたね……」
「だから、唯見てるだけにして気分を楽しませてるんです。」
「か……悲しい……」

ズーンと暗い影を漂わせながらポツリポツリと己の事をしゃべり続ける。
それを見てると何処か哀愁を感じさせてくれる……

「そういえば、この頃変な事は起きてないか？」
「……先生のお陰でパパとママは気持ちを入れ替えて物事に慎重に取り込んでくれるようになってから殆どないです。でも、借金がまだ５０万Ｇほど残ってるから生活が少し苦しいんですけどね……」
「チッ……あのケセドニアの商人、契約証明書上手く使いやがったか……」

アニスは笑いながら家庭の事情をハーミットに話していた。
そう、タトリン夫妻は数年前のあの時から借金返済に真剣に取り込んでいるようだ……
今は５０万Ｇとまで減ったが、もしあの時……ハーミットの助けがなければ１０００万Ｇもの巨額な負債を騙されて背負わされていた事でもあるのだ……
そう言う訳で、アニス達にとってハーミットは恩人と言う事なのだ。
そして、その恩人は何やら何かにイラついているようだが……
大方手を回したのに予想よりも借金が多い事だろう。

「アニス……大丈夫？」
「ダイジョーブだよアリエッタ！アニスちゃんが大人になったら上手い事やって借金なんてパパッと返しちゃうんだから！」
「因みにその例は？」
「え～と……玉の輿とか♪」
「……アニス、無謀……です。」
「なによ！？根暗のアンタになんか言われたかないわよ！」
「アリエッタ根暗じゃないもん！アニスの意地悪！！」

ちなみに、アリエッタとアニスは親同士の繋がりとして知り合った。
一応、アリエッタの方が2歳年上なのだが……他人から見ればどう見てもアニスの方がお姉さんとしか見えない……

「アニスのガルドの鬼～！！」
「くぉらあぁぁ誰がガルドの鬼じゃい！！」

……アニスよ、その逞しさの成長を見て俺は嬉しいのかどうかよくわからん……

「こらこら、喧嘩しない。するなら誰もいない場所にしときなさい。」
「うぅ～～～！」
「むぅ～～～！」
互いの額で力比べをするように押し合っている二人を諫めてようとする。
……というよりハーミットよ、喧嘩をする事は止めないのか？
「そういえばアニスちゃん……背中にあるその人形は？」
「あ、これですか？ママが私の為に作ってくれた人形なんですよ…ホラ、可愛いでしょ♪」
「……あぁ、そう……だね？」
……ごめん、アリエッタのもそうだが……それは少女にとって可愛いとは言えないとしか俺には思えない……
猫……熊……または何かをモチーフとした枯竹色フォルム
大雑把な継接ぎのされ方……
尺度が不規則な腕と脚……
色違いのボタンの眼……
「トクナガって名前なんです。愛嬌があるでしょ♪」
「う……うん、愛嬌がある……ね？」
「ぶ～ぶ～、先生も可愛くないって言うんですか？」
「いや、そんなことないさ！」
あ、やっぱり他の人からも俺と同じ意見なのか……
一応よかった……

「でもそれ……なんかブサイク、です。」
「なによ～！アンタもトクナガが可愛くないっていうの！」
「アニス、センスない……です。」
「あんたがいうか！お化け集合体の人形がお気に入りのあんたが！
そんなの持ってるから根暗ッタなのよ！」
「アリエッタ、根暗ッタなんて名前じゃないもん！！」

あ～……第二ラウンドが始まったか……

「ほにょおぉぉぉ～～～！！」
「ひゃあぁぁぁ～～～！！」

アニス優勢……アリエッタの頬をお餅のように引っ張り続ける。
それに負けじとアリエッタもアニスの頬を引っ張る。
だが、アニスの方が力が少し上だから苦しいな……

さすがにこりゃ……叱るか……

「いいかげんにしなさい！！」

ビクッ……！！

「周りの目も考えて行動しなさい！！恥ずかしくないのかお前たちは！！」
「だ……だってぇぇ……」
「私なんか……！」
「良い訳は無用だ！喧嘩両成敗！お互いに謝る……以上！」

流石にハーミットの怒鳴り声で冷静さを取り戻したらしく、二人

してお互いの顔、ハーミットの方と視線を移したりしながら何かと考える。
そして、互いに向き合う……

「……ごめんなさい……」
「……まぁ、私もその……悪かったよ……」

よし、これでOKだ……

「はい、よくできました。」

そう言ってハーミットは二人の頭を撫でてやった。

「ん……／／／／／」
「えへへ～～／／／／／」

二人はどうやらご満足の様子だ……

「アニス～、どこにいるんだい？」
「あ、パパ！」

その内、アニスの父親であるオリバーが向こう側からやって来た。
どうやらアニスを迎えに此処まで来たようだ。
それに気付いたアニスはオリバーの元へと走って行った。

「さようなら、今度家にも来てくださいね！」
「あぁ、いつかお邪魔させていただくよ。」
「アニス……バイバイ、です。」

こうして、一時の休日はまた過ぎていったのであった……

おまけ：

「ハーミット、貴方僕のアリエッタを無断に連れて行きましたね……」

「だれが貴方のですか導師イオン……アリエッタは私の娘ですが何か？」

トタトタトタッ……

「イオン様、付けてきた、です！」

「あ、態々ご苦労様ですアリエッタ。」

「ん、アリエッタどうし……た……？」

そう言って、ハーミットは後ろを振り返ると……

「あああああああありえった！？」

「えへへ♪……アリエッタ猫さんになった、です♪」

「さすがですアリエッタ……貴方は何を付けても可愛いですよ♪」

そこには、猫耳カチューシャと付け尻尾を付けた猫スタイルなアリエッタが存在した……

「貴方達が行って獲得してきた賞品の中に紛れ込んでたそうで……面白そうだから付けさせてみたんですよ♪」

「イオン様！次はどうすればいいですか？」

「先ほど教えたポーズをここでしてみてください♪」

「へ……ポーズ……？」

「みゃ……みゃあ……？」

その後、何があったかは三人以外誰も知る由は無い……

ただ、導師イオンの執務室で“赤いペンキ”を零したから大掃除をしてほしいと申請された日があったとか

第６２話（後書き）

イメージは橙さんをご想像してください……

ランキング続行中です……集計が指定値まで溜まったらこれよりさらにレベルアップした外伝でも作ろうかとです。

第６３話（前書き）

パソコン壊れて初期化せざるを得ない状況になりました……
俺のお宝データがあぁぁぁぁ――――！！！！
絶望した！！

第６３話

「よし、ここでいい。降ろしてくれ。」
「クルル……」

フレスベルグに乗って空中飛行をしていたハーミットはとある場所まで来ていた。
何年も変わらずにセフィロトの力により湧き出る小さな泉の前…
…ワイヨン湧水洞にあるユリアロードの前だ。

「もうヴァンは先に入ってるだろうな。」

今回ここに来たのはユリアシティに用があるからだ。
そう、年に一度のファルミリアリカの墓参りのためだ。
ハーミットはこれだけは続けてきた……あの時を忘れぬためにと半分戒めの意味でもありながら……それに、彼女の様子もついでと伺うためにだ。

「ティアちゃんも元気にしてるかな……」

何か想いながらハーミットはユリアロードの中心地へと立ち止まり、譜を通して起動し始める。
それに答えてユリアロードは光を帯びて彼の体を包み込んでいく。
そして、一条の光が天に登った時には……彼の姿は何処にもいなかった……

―――――――――

薄暗い部屋が瞳孔を少し萎ませてくる……慣れるまでの間、その

場に立ち止まって安定を待つ。
それが終わるや足を進めて出口へと向かう。

「お久しぶりです。」
「お、ハーミットさんじゃないですか？……あぁ、また一年目ですね。」
「ヴァンは自分の部屋ですか？」
「ヴァンも待ってるそうだ、早く行ったほうがいいだろう。」
「そうですか。」

顔の知った警備の人間に声を掛けてユリアシティへと出ていく。
ここにいる住民以外は何も変わらない景色がそこにある。
それを一目見渡してからハーミットはヴァン達の元へと向かう。

「待たせた、書類の後片づけをしていたから少し遅れたものでな……」
「いえ、大して変わりはありません。」

そうか？なら心配いらないが……ぉ、ティアちゃん発見だ。
そういやもうすぐ１２歳になるんだよな……子供の成長も早いものだ……

「あ、ハイルさん！！」
「やぁ、久しぶりだね。」
「はい、ハイルさんもお元気そうでなによりです。わざわざ母の墓参りの為にありがとうございます。」
「まぁまぁ、そう固い口調で話さないで……普通にしてもいいんだぞ？」
「ですけど……あなたは兄達の恩人とされてますし……兄からも失礼のないようにと。」

俺はヴァンの方へと顔を向けてみる……案の定ヴァンは顔を俺の視線から逸らした。

こいつめ……誇張させるなとあれほど言ったのに……ティアに俺の事を敬うようにと徹底させてやがるな。

別にそんなことせんでもいいのにな……俺としては普通に接してくれた方が気が楽だ。

子供に早く尊敬語を無理に覚えさせるというのは関心せんぞ？

「そうだ、今日はお土産があってね……」

そう言って、俺は懐から紙袋を取り出してティアにそれを手渡した。

「……？」

「開けてみなさい。」

「あ、はい……」

ガサガサッ……

そう言われてティアはその紙袋の封を切ると中身を取り出す……

その中には……

「！？」

「そういうの……好きだよね？最近売られたからどうかなと思って買ったんだけど……」

それは等身大チーグル人形であった。

ローレライ教団の聖獣として名高いチーグルは教団のマスコットとしてそれに関わる商品がたくさん売られている。

他の国ではペットとして飼う所もいるそうだが、ダアトじゃ飼育は禁止されている。

チーグルは教団が認めた保護動物なので乱獲などが禁止されているなどと丁重な扱いがされているからだ。

……これは余談なんだが、昔……イオンが言うには「密猟すれば最高の金づるになるんですよ♪」と嬉しそうに喋ってたことがあったな……まさかとは思うが財政それで乗り切ったことがあるんですか導師イオン……

まぁ、それは置いといてと……ティアは真面目な生活をしているが、可愛いものを見るとフラフラとそちらへ惹かれて行ってしまうと女の子らしい面を持ち合わせている。

だから、気に入ると思うのだが……

「……かわいい？」

「んっ……？」

「ありがとうございます！一生の宝にします！」

「あ……ああ……」

……どうやら気に入ってくれたそうだな……それならいいや……

その中、ティアはチーグル人形を嬉々とした表情で見つめ続けていた。

顔の前で手を振っても気づかない……どうやら自分の世界に入ってるようだ。

「テ……ティア……そろそろ始めるから……」

「兄さんは少し黙ってて。」

「……」

あ、ヴァンがｏｒｚ状態になった……わかるぜ、その気持ち……

俺もアリエッタにあんな風に言われたら凹むしかないし……
あ……なんだか涙が……

そんなこともあって、結局ファルミリアリカの墓の前に彼らが立つのはこの２０分後なのであった……

―――――――――――

さて、いろいろあったが今年の墓参りも済んだ。
俺に残っているのは外郭へと戻るのみなんだが……今回は少し違った。
なんでも、ヴァンが話があると俺に言って来たからだ。

遂にこの日が来たか……薄々もうすぐかと感じ取ってはいたが……だがヴァン、俺の決心は揺るぎはしない……いや、揺るがせるわけにはいかないんだ。
恐らく、あいつがする話とはレプリカ計画のことだろう……外郭全ての生物をレプリカに変え、７年後に迎える消滅預言を覆すというまさに劇薬としか言いようがない大胆な計画。
俺をその計画への勧誘しようという事か……同じ様に故郷を奪われた者同士、一緒に預言に復讐しようってか？
……たしかに、この世界でできた俺の両親、友人、知り合い達を殺した預言を憎くないと言えばそれはウソになるが……俺には預言を憎む必要などない。
それには、俺とヴァンの考え方の違いが関係してるんだろうが……着いたか……

そして、俺はあの部屋……ファルミリアリカの眠る墓石のある部屋の扉を開く。
その先には、窓越しで魔界を眺め続けるヴァンの姿がそこにあっ

た……

「……時間を取らせてしまった事には謝罪させてもらいます。ですが、今回お話しさせていただくことはとても大事なことですので……」

「別に気にしてはいない、幾分か余裕を持てるように調節しているからな。」

「それは助かります。」

そう言いながら俺はヴァンの隣に立つ。

窓から見る魔界はその名の通りに違わぬ風景を漂わせていた……

「ハイルさん、貴方はこの世界の事をどう思いますか？」

「……唐突な質問だな。」

「その唐突な質問を私は貴方に問うてみたかった……聞かせていただけませんか？」

「ん～そうだな……」

手に顎を付けながら色々と考える……己の持つ答えを結論を持って言うと、こうだ。

「人の大半が自らの足で歩むことを投げ出している……故に、不変を保ち続ける……奇妙な物だな。」

「そう、人々は預言という“麻薬”により己らの生を無駄にしている……ああすればこうなる、こうすればああなると……それが最良の道と決めつけて偽りの人生を歩むものばかり……」

「まるで人形、俺達の意思は何処へと行ったか？そんな事を思いもせずに世界のみが時計の針を進めていく……」

「だが、このままでいいはずがありません……預言通りに生きる事を疑いもしない人々はこのままでは「星の消滅を迎え、遂には滅び

去る」……ッ！？」

「ＮＤ２０００……」

ローレライの力を継ぐ者、キムラスカに誕生す。
其は王族に連なる赤い髪の男児なり。
名を聖なる焔の光と称す。
彼はキムラスカ・ランバルディアを新たな繁栄に導くだろう。

「ＮＤ２００２……」

栄光を掴む者、自らの生まれた島を滅ぼす。
名をホドと称す。
この後、季節が一巡りするまでキムラスカとマルクトの間に戦乱が続くであろう。

「ＮＤ２０１８……」

ローレライの力を継ぐ若者、人々を引き連れ鉱山の街へと向かう。
そこで若者は力を災いとしキムラスカの武器となって街と共に消滅す。
しかる後にルグニカの大地は戦乱に包まれ、マルクトは領土を失うだろう。
結果キムラスカ・ランバルディアは栄え、それが未曾有の繁栄の第一歩となる。
やがてそれが、オールドラントの死滅を招くことになる。

「ＮＤ２０１９……」

キムラスカ・ランバルディアの陣営は、ルグニカ平野を北上するだろう。

軍は近隣の村を蹂躙し要塞の都市を囲む。
やがて半月を要してこれを陥落したキムラスカ軍は、玉座を最後の皇帝の血で汚し、高々と勝利の雄叫びをあげるだろう。

「ND2020……」

要塞の町はうずたかく死体が積まれ、死臭と疫病に包まれる。
ここで発生する病は新たな毒を生み、人々はことごとく死に至るだろう。
これこそがマルクトの最後なり。
以後数十年に渡り栄光に包まれるキムラスカであるが、マルクトの病は勢いを増し、やがて、一人の男によって国内に持ち込まれるであろう。

かくしてオールドラントは障気によって破壊され、塵と化すであろう。
これがオールドラントの最期である。

……
……
…
・
・
・

「ハイルさん……貴方は……消滅預言までも……!?」
「あぁ、知っている……とある人物から直に教えてもらってな。」
「……」

驚いてるか……そりゃ無理もない……
これを知っているのはこの世界で数人しかいない。
それも最高機密だ……ユリアの残した最後の預言だという訳だしな。
そんな物を一介の軍医である俺が知ってる訳がないと思ってただろうが残念だったな……俺はお前が生まれる前からこれを知っているんだ。
隠す事など無意味って訳だ。

「ヴァン、お前は俺に知られずうまくやっていたと考えてるそうだがそれは違う。俺はお前の事をずっと見てきた……それ故異変に感づかない筈がないんだよ。」
「ま……まさか……」
「まったく、とんでもない計画を思いついたな……レプリカ計画だっけ？」
「……ッ！！」
「お前の目的はこのまま預言に縛られ続ければ消滅を迎えるのを防ぐために被験者達を消し、全てを預言に詠まれてないレプリカ達へと取り換える事……ディストの資料から自分で調べさせてもらったよ。」
「……そうですか。」

少し嘘だ……それは一部にすぎない。
アッシュやイオンも協力してくれてる事には今の所こいつはまだ気づいていないからそのままにしておこう。

「では、話は早い……ハイルさん、貴方も私達と共に……」
「断る。」
「……理由をお聞きしても？」
「お前の計画は確かに預言を覆すという到達点には達するだろう…

…だが、そのための犠牲が大きすぎるんだ。俺は犠牲を以て一つを成し遂げるなんて真似そう簡単に決めたくないんでな……」

「そう簡単に……ですか……私達の故郷はその簡単な意思で滅ぼされたというのにですか？」

「……」

「お忘れになられたのですか！預言によって腐りきったこの世界が私達にした仕打ちを……憎いとは思わないのですか！私同様、全てを奪われ……絶望を抱かされた事を！」

「……忘れたわけではないさヴァン……今でも……俺は時々夢を見るんだ。魔界でポツンと浮かんだ小さな大地に俺は佇んで、瘴気の泥から……今は亡き人達が俺を引きずり込もうとする夢をな……」

なぜお前だけが……
どうして私達が……
そんなの許せない……
お前も一緒に来い……
俺達と同じになろう……

――――ダカラ、コッチニコイ――――

「どれ程無念なことだったろう……夢の中の彼らの悲しみの顔が俺の胸を締め付けてくる……それを見てどうにかして彼らの仇を取ってやりたいと何度も思った。」

「なら……何故！？」

「お前の計画の到達点は彼らの願いには成りえない……そう思うからだ。」

預言を覆せたからといって本当に彼らが喜ぶと思っているのか？
もしも、彼らが俺達の事を見ているのならば……それは無駄だと言い放つ……

なぜならば、お前の理想は生者限定だ……死者の手向けになりはしない……

「ヴァン、あの悲劇を体験した俺達がこれからするべき事は確かに、この世界をどうにかして救う事は間違いじゃないかもしれない……だが、これだけははっきりと言える……お前は間違ってるとな……」

「……ッ！」

「確かに、この世界は預言で溢れている……しかし、それは全ての人間に言える事なのか？」

「何を……」

「俺は、預言を詠まなくても今を一生懸命生きる事が出来る人達を知っている。まぁ、実質は貧困により預言を詠むための金を持てない人達なんだがな……」

「それは預言を必要としないとは言えません！その者達は心の底ではどこかで預言を必要としているに決まっている！」

「そうかもな……だけどな、あいつ等はわかっているんだよ。今を精一杯生き、自分自信で未来を信じる事がどれ程楽しい事か……己の存在意義を探す事の大切さがな……」

ベルケンドの孤児達はそれができる。

夢を持つ事が出来る。

それは、預言が決めた事ではない……彼ら自身が自分で決めた事だ。

「それは預言の一言で片づけられるほど小さいものじゃない！人には元から未来を選べる権利が……生きる資格を持っている！それに気付かない人がただ単に多すぎるだけだ……まだ人には変われる猶予がある。」

「貴方こそわかってはいない！預言という者は星が生まれる前から存在し、我々個人がどういう物かと完全に決めれるほど簡単なもの

ではないのです！だからこそ、それに対抗しうるには劇薬が必要なのです！」

「それはまやかしだ！≪預言≫という物は元より存在してはいない！俺達人間が作り上げた手段の一つでしかない。」

星の未来が定められていると決め付けたのは星ではない……俺達人の方だ！

人が生み出したものだからこそ、それをどうにかできるのは人だということだ。

「ヴァン、お前は恐れ戦いている。預言という見えない幻想を前に……見えない敵を存在すると、強大な力を持つ敵だと認識し……勝つためには全てを無にするという手段を取る。恐怖を感じている証拠だ。」

「私が……預言を恐れている？」

「全てを無にしてどうする……まさか、己の過去も無に帰そうとする気か？」

「それはいったい……」

「お前は罪を消したいがためにその方法を取ったというのか……ヴァンデスデルカ」

「……ッ！？」

かつて、己の力で故郷を滅ぼした者……

名前を変え、遂には自分自身も消して罪から逃げようとする気か。

「私は……そんなことなど！」

「預言を覆したいのなら他にも方法が余るほどある筈なのに……何故その方法を執拗に選ぼうとする？」

「それは……」

「忘れたいんだろう？……己の後悔を……」

「……」
「故郷を滅ぼしたという己を消し去りたい……その欲望が知らずその方法を選ばせた。」
「……違う。」
「お前にとって、預言は恐れるものと同時に隠れ蓑となった……それのせいで故郷を滅ぼしてしまったと言い訳をするために……」
「黙れ！」
「自分から逃げるなヴァン……逃げたら負けだ……その先に待ってるのは……」
「黙れえぇぇぇ――――！！！」

ヴァンは腰の長剣を抜くや俺に振り下ろす。
その眼には焦りが芽生え、目の前にいる存在を何としてでも止めようとする。
己の全てを曝け出される前に……

ギィィィィン――――！！！

ハイルは持っていたナイフを両手を使ってヴァンの長剣を受け止める。
強度が違うためか、ナイフは歪む……だが、受け止める事には成功はした。

「……なにをやっている。」
「ぐ……！！！」
「お前はここが何処だとわかってこんな事をしたのか？」
「……ッ！？」

ここは、お前の母が眠る場所……神聖な場だ……

「そんな大切な所を……血で汚そうとしたのか貴様は……」

ハイルの目に殺気が籠る……その眼を見たヴァンは竦んでしまった……

「この……大馬鹿野郎が！！」

ドゴッ……！！！

ハイルの譜を込めた蹴りがヴァンの横腹に入る。

その威力は２m先までヴァンの体を吹き飛ばした……

しかし、それだけでは終わらなかった。

ハイルはすぐさまヴァンの傍まで駆け寄って髪の毛を鷲掴みにして引っ張る。

向かう先は墓石……そして、ハイルはヴァンを墓石の前の地面に頭を思いっきり叩きつけた。

「あ……が……」

「謝れ！お前の母上が今のお前の姿をみてどう思うか……足りない頭フル回転して考えてみやがれ！！」

「……」

「出す言葉が思いつかないなんて言ったらぶっ殺すぞ！わかってるのか！？」

この時、ハイルの大声がこの部屋の向こう側まで響いていた……

それを聞きつけてなんと、ティアが駆けつけてきたのだ。

「ハイルさん、兄さん……何をしてるの！？」

「止めないでくれティアちゃん、俺はこいつの甘ったれた思考を叩

きなおさないと気が済まないんだ。」
「止めて！喧嘩なんてしないで！」
「ティア……向こうへ行ってなさい……これは私達の問題だ……」
「どうして……どうして喧嘩なんてするの……兄さん達は友達なんでしょ……それなのに……」
その場に崩れ落ちてティアは泣いてしまった……よっぽどショックだったんだろう。
友達だからこそ喧嘩なんてする筈がないと考えているからか……それを止める手立てが思いつかない自分を責めているからなのか……
「……しかたねぇ、今回はティアちゃんの為にも止めておく。」
ハイルの方が折れたらしく、ヴァンを掴んでた手を放してやった。
「ハイルさん……貴方も時期わかる筈だ……この世界の愚かさを……それを知って後悔する事になるのを……」
ゆっくりと体を起こしながらヴァンは扉の方へと去っていくハイルへと言葉を投げかける
「世界が愚かであろうとも、俺は俺の守るべき者達のために戦う……たとえ一人になってもな。」
その言葉に彼は己の信念で向き合った。

今ここから、二人の溝ができ始めたのかもしれない……

第６３話（後書き）

そろそろアンケート集計終わりたいと思います。
ですが、あと3件ほど欲しいと思っております。
ご協力願います。

第６４話（前書き）

自身の大学のサークルの出し物で締め切りが迫っている為更新が遅くなります。
ご迷惑をおかけして申し訳ありません。

第６４話

あの日から、俺達は思想の違う者として向きあうことに決めた。
仕事上では部下と上司の立場を保ちながら関係は続けている。
唯、私語とか余計な時間を使う事が少なくなっているという事だ。

「それで、ヴァンは結局アンタ抜きで計画を進めるという訳？」

ギッ……ギッ……

「まぁそうなるな、あいつは期待できない事には無駄な労力を費やさないタイプだからな。」

ギッ……ギッ……

「あ～あ…これであいつの計画の成功率が大幅に減っちゃったって訳だね。」

ギッ……ギッ……

「こっちも宣言しちまったからには全力で阻止する方向だからな。」

ギッ……ギッ……

「あ、ちなみにあと２００回だから。」
「こら待て！何気に１００回増やそうとするな！」

ちなみに、さっきから響いているのはハーミットがイオンを肩に乗せて片足スクワットをしている音である。

場所はやっぱり裏訓練場と今じゃ二人の会合場所と化していた。
今ハーミットは強化だけでは本当の完治とはいかないので元根もしっかりと作り上げることにしているのだ。
そのために蹴技の格闘技にも手を付け始めたのだが、表の訓練所では相手になる人間がいないのだ。
師団長のラルゴやカンタビレに何度か手伝いを申し込んだが、いかんせん任務が忙しくて時間が取れないので効率が悪い。
そんな訳で、今まで一番頻度の回数が多いイオンと良くやっているそうだ。

「そういえばハーミット、近頃マルクトで大きな出来事があったのを知ってる？」
「聞いてないな…何があったのか？」
「カール五世が崩落したよ。」
「……そうか。」
「あれ、驚かないのかい？アンタが亡命することとなった直接の原因である親元が倒れたっていうのに。」
「別に、興味を持つほど覚えのあるような人間じゃなかったからな。」
「ハハハッ！アンタはそういう奴だったっけ。」

まぁ、事実もうどうでもいいことだからな。
亡命の件はもう変える気はないし……

「そして、新皇帝の発表がもうまもなく始まるらしいんだけど……四人いた子息のうちもう一人しかいないから預言のなにも関係ないね。」
「……その生き残った一人の名は？」
「ピオニー・ウパラ……預言の通り皇帝になる事を詠まれた男だよ。」

「……ピオニーか。」

懐かしいな……手紙をもらう事が出来なくなってもう数年は経つな。

ケテルブルグでの軟禁生活はもう解除されたのかな？

あの楽天家が皇帝になるとしたら……

――――皇帝勅命♪――――

うん……まちがいなく権力乱用しそうな未来が待ってそうだ……

なんかデジャウ来たなおい。

でもまぁ、悪い方向には使わないだろう……たぶん……

「どうしたの、いきなり止まって？」

「いや、昔を思い出してしまって……」

「……？まぁいいや、それでハーミット…アンタに急遽任命する事ができた。」

「…御意。」

二人は親しみある表情を止めて上司と部下の関係に一時戻る。

こんな場合は真剣身を以てやらなくてはならないからな。

「ご存知の通り、僕達ダアトは主に二国からの寄付金で賄われることにより活動しています。その中でバチカルは一番の大元でして此の国からの申し出は断る訳には参らない位です。」

「そう言うという事はバチカルから何か申請が来ているという事か？」

「その通りです。そのバチカルでの申請とは、とある貴族のご夫人のご病気を貴方直々に診てもらいたいと願い出されましてね…」

「…他の医師では手に負えない病気なのか？」

「心臓の病でして……そのご夫人は幼い頃から患って来ていたようです。専属の医師が言うにはこの病気は一生週に一度の薬の世話となるような物らしいそうです。」
「…となると、血液の流れ…いや、弁の異変か……直接眼で見なきゃ分からないな……」
「そうしてください。会合の日は5日後を予定してますので準備を出来るだけ済ませておいてください。」
「わかった、……難しい事になりそうかもな。」

此方の技術局でも未だ心電図はおろか、人工心肺も作られてない状況だ。
手術が必要となると今の段階では無理になる事確実だ。
しかも、これらの装置は譜業では作れにくい……
これらは俺の前の世界では電気で動かせたからこそ作れた物だ。
ここでは発電機どころか送電線さえもできてない。
もし譜業で動かせたとしてもその為には動力としての譜石が必要だ…それも高純度の……
あれらを動かすためには最低でも拳大の大きさがいる。
そこら辺に落ちているような石ころの大きさでも希少な存在だというのに…見つかること自体どれくらいかかる事やら……
クロードに会えていれば話は別だったんだけどなぁ……

「とにかく、まずは診てから判断しよう。それで、その貴族の名は？」
「クリムゾン・ヘアツォーク・フォン・ファブレです。」

「もっかい言ってくれないか？」
「クリムゾン・ヘアツォーク・フォン・ファブレです。」

「ファブレ公爵？」
「そのファブレ公爵ですよ。かなりの大物ですから失礼しないでくださいね。」
「……やべぇ。」
「何がやばいんですかハーミット？」
「いやその…昔ホド戦争でな…戦って…勝っちゃった♪」
「は……？」
「やべぇよイオン！当時白光騎士団の元帥だったあのファブレ公爵にラリアット極めちゃったよ！」
「はぁ……貴方は何処まで面倒起こせば気が済むんですか……」
「すまんイオン！やっぱこの任命取り消して「だめに決まってるでしょ」そこを何とか！どうか御慈悲を！」

「貴方に与えてやるような慈悲はスズメの涙もありませんよ。あったとしてもその分はアリエッタに廻しますから♪」
「ちくしょおぉぉぉぉ――――！！」

もはや診察へ行くというより処刑されに行くようなものなのであった。

頑張れ……ハーミット、負けるな……ハーミット。

――――――――――――

「てなわけでさぁ、どうにかなんねぇかアッシュ……」
「いや、俺に言われてもどう言えばいいか……」

なんとなく思いついたので子息であるアッシュの元に来ていた。

「なんでもいい、とにかく俺の命日を長引かせるための情報をプリーズだ。」
「……あるにはあるが……」
「何だ、聞かせろ。」
「父上は前から「生え際が……」と呟いていて額を良く触られていたな……そんな事を何度も見ていてその度にため息ばかりつかれていた。」
「まだあの言葉気にしていたのか……」

ファブレ公爵に“ハゲ”宣言をしてしまった……て余計に会うのがまずいだろうが！
不敬罪纏めて吹っかけられそうだ……

「というより、父上はお前の事を知ってるんじゃないのか？」

「たぶん違う、今は偽名使っているしその後で直接会った経験はないからハーミットがハイルだとは思ってもいないだろう。」
「そうか……まぁその…頑張れ。」
「その言葉は余計苦しめるからやめてくれ……」

とにかく、何か少しでも謝礼の意を示すために贈り物でもしようかな……

たとえば育毛剤とか、育毛剤とか、育毛剤とか、いくｅｔｃ（↑この時点で謝礼の誠意がない）

フィリスさんに頼んで速球に作ってもらおう…資金は多めに送らせてと。

「それよりアッシュ、ヴァンはこの頃お前にどんな事をしている？」
「今の所は訓練が中心だ。あと、レプリカを憎めと意図してるかのような発言が多い事もあるな。」
「まったく、ガキに何を教えているんだよたくっ……」
「ハイル、俺の事はガキと言うなと前から言ってるだろうが！」
「ガキだよ、俺にとっては…可愛いくらいだな。」
「誰が可愛いだ！！」
「はいはい、元気の良いことだ。」

グリグリグリ……

アッシュの頭を存分に撫でてやる。

今なら撫で技の極意を極めてるのかもしれないと時々思うハーミットであった。

「ううううう」
「う？」
「嬉しくないんだからなぁぁぁ――――！！！」

そう言ってアッシュは顔を真っ赤にしながら訓練場の彼方へと走り去っていったのであった。

「ツンデレ乙。」

―――――――――――

「ディスト、メンテナンスに来たぞ。」

「そうか来ましたか！さぁ早くそれを台に乗せなさい！」

ハーミットはケースに入れていた狙撃譜銃（改）を部品ごとに取りだしていく。

一つ一つが重い、二重ケースである為に手術道具の分の重さもプラスされてケース全体が半端ない。

「この天才ディスト様の華麗な手ほどきにより再び目覚めさせてあげましょう！」

「いや、だからメンテナンス。」

ちなみに、全体を組み合わせると全長約２ｍになり、持つためには肩で担ぎながらという形になる。

だが、その分大きさに見合う程の性能は抜群にあるからそれでいい。

メンテナンスの間はハーミットはずっとディストの手の行方を監視している。

そうしないとまた余計に改造されかねないからだ。

「なぁディスト、お前…どうしてフォミクリー技術なんて物を作りだしたんだ？」

原案したのはジェイド・バルフォアのほうだが、譜業としての技術を実案したのはディストだからな。

そこまで発展されたのにはフォミクリー技術に何か思い入れがあるのかもしれない。

「…きっかけは、私と親友であるジェイドの恩師、ネビリム先生が亡くなった事なんです。」

「……。」

「私の方は生まれがネイス子爵という男の愛人の子というある意味特殊なものでしてね…家族関係にあまり恵まれませんでした。当時、屋敷で働いていた母は私を身籠った時にネイス子爵から暇を出され、幾ばくかのお金を握らされて故郷であるケテルブルグへと送り返されましてね……その後にで私は産まれたんですよ。」

「弄んだ揚句にポイッて訳か……責任のねぇ男だ。」

「母は私を見てよく行ってましたよ……「貴方さえ身籠らなければ、私は旦那様の寵愛を受け続けれたのに…どうして」……どうしてが口癖でした、母は。ですが十歳の頃にそんな私にも母の代わりとなるような存在ができました。」

「それがネビリム先生という訳か……」

「そうです、私は当時開いていた彼女の私塾に通い、先生から学ぶ事の楽しさを教えてもらったり、人の温もりという物を始めて知らせてくれました。当時は私は弱気で人と馴染めなくて何時も譜業を弄ってましたっけ……」

「そこから譜業博士の基軸は始まってたという事か。」

二人はお互い静かに笑いながら頷く。

「ジェイドの方は……彼は私と違って昔から本当に天才でした。大人でも難しいような譜術を難なく扱い、他の子供達よりもずば抜け

た才能に満ち溢れた人でした。ですが、ある一点を除きましてですが……」

「ある一点？」

「ジェイドは人の心が分からない人間だったんです。なぜ人は悲しむのか、なぜこんなことをしてはいけないのか……小さな子供でもなんとなくわかる気がする事がジェイドには無かったんです。おそらく、当時からジェイドは物事を理論的に考えるタイプでしたからねぇ……」

ディストは傍に遭った紅茶のカップを膝の上で両手で持ちながら回想に浸る。

「そんなジェイドにも尊敬できる人ができました、それがネビリム先生です。ジェイドは……譜術の扱いに長けては居ましたがどうしてもできない事がありました。第七音素を扱えなかった事です。」

「第七音素は音素振動数が第七音素に出来るだけ近い構成の人間でないと扱えないものだからな……下手に扱うと暴走したり精神障害へと繋がる。」

「そして、ネビリム先生はその第七譜術士だったんです。最初は自分の持ってない物をもっているからというジェイドの興味から始まりましたが、次第に彼女の人間性に惹かれて行ったんでしょうね。」

「……素晴らしい人だったんだな、そのネビリム先生というのは…ぜひとも一目会ってみたかったな。」

「美人でしたよ？」

ディストは何気なくそう一言加えてみた。

だが、その次からはいささか暗い表情へと変わる。

眼鏡を直してからその手を静かにまたカップへと戻す。

「そんな日々が過ぎた少し後でした、あの事件が起こったのは……」

「……」

「ジェイドは興味を抑えれなかったんでしょうね、第七音素についての事に……彼は静まり返った私塾の中で秘密裏に第七音素の使用を試みたんです。その結果……暴走が起こり、私塾を大火事へと発展させるほどにまで変えました。」

「……ッ!?」

「着いてきた私もそれに巻き込まれましてね、火事で崩れていく私塾の中で私達は死を覚悟しましたが……その直後、なんとネビリム先生は危険を顧みずして私達を助けに燃え上がる私塾の中へと奔りこんで来てくれたんです。」

「そんなことが……」

「その結果、先生は瀕死の重傷を負ってしまいました。一緒に何とか脱出した私達二人はまず先に先生を地面へと横たわらせて……」

――ジェイド、このままじゃ先生死んじゃうよ!――

――僕の責任だ、僕が第七音素を扱おうとしたばかりに……――

――どうするの?――

――先生のレプリカを作る、そうすれば傷を治し、先生を元に戻す事が出来るかもしれない――

――う、うん!ジェイドならきっとやれるよ!――

――じゃあ、いくよ――

「それで、どうなったんだ?」

椅子に座りながらハイルは静かにそう問う。

「失敗でした……当時のジェイドの原案では先生は不完全なレプリカとして産まれ……そして……」

「……もういい、辛いのならそれ以上言うな。」

「すみません……そして、こうして私達は共同研究でネビリム先生を蘇らす為にフォミクリー研究へと打ち込みました。ですが、数年後……」

――なぜですジェイド！なぜ生体フォミクリーを禁止したのですか！？――

――サフィール…私達は今まで馬鹿な事をしてきたんです。いくら先生にそっくりなレプリカを作ってもそれは先生ではありません――

――諦めるのですか！そんなの私が認めはしません！――

――いい加減にしなさいサフィール！お前こそいい加減眼を覚ましなさい！――

――……あなたのネビリム先生への気持はその程度の物だったんですか――

「結局、私はマルクトから彼の原案を盗み出してダアトへと亡命し……今なお届かぬ理想を目指し続けるという訳ですよ。」

「届かぬ理想って……お前は……」

「結果で実感され続けているんですよ……レプリカは被験者とは姿・

形しか似る事は無い……たとえ刷り込みをしたとしても……」
「じゃあなぜ、レプリカ研究を続けるんだ？」
「諦めきれないという人間の本能と……ジェイドに振り向いて欲しかったという願望が今の私の動力源と言いますか……昔のあの輝かしい日々が忘れられないのかも知れません私は……」
「……」
「さて、長話はここまでとしまして、そろそろメンテナンスを始めましょうか！」

先ほどとは打って変ったように張り切った様子になって台へと向かっていった。

「ディスト。」
「なんですか？」
「……改造を願いたいんだが、少し頼めるか？」
「！！はい、もちろんですよ！」

今は……彼の心を折るべきではないのかもしれない……

第６４話（後書き）

次は特別編をしようと考えております。
出すまでにまだ投票したいという方はすぐさま感想へ↓

１００万Ｈｉｔ　特別編（前書き）

サークルの小説の締め切りが木曜……急げ！！
やっと企画が立ちあがりました……

１００万Ｈｉｔ　特別編

「さぁさぁ遂にやってきました！キャラクターランキングの結果発表です！」
「司会は作者Ｊｕｓｔｉｃｅと……」
「隣のイオンがお送りいたします♪」
「いやー長かったね！ここまで企画の為の要因が中々集まらないとは！？」
「おそらくこのサイトで活動する作者様にしか感想を遅れるシステムを搭載してなかったからかもね。」
「ですが、前週から一般の方々にも感想を書かせてもらえるシステムが添付されたお陰でより見方の幅が広がり感謝感激です！」
「この作品、深淵の異端者もそれに則って作者様だけでなくそうでない人も書けるように情報変更したからどうぞこれからもよろしくね。」

「では、始めましょう……前回初めに掲示した通り、第三位の方までの発表とさせていただきます。」
「それでは発表です……第三位！」

ドウルルルルルルルル――――！！！

「得点８点……獲得二票……」

「ぶりっ子満載！でも時折みせる腹黒さは被験者イオンを将来超え

るか！？」

――――アニス・タトリイィィィ――――ン！！――――

ワアァァァァ――――！！！

「今回は本人に来てもらっています！アニスさんどうぞ～！」

「は～い？アビスの皆のアイドル、アニスちゃんでぇ～す！投票してくれたライサイダーさん、アストラさん……ほんっとーにど～もありがとぉ～♪」

「でも本音は……？」

「こぅらアンタら！！なんで私が根暗ッタより順位がしたなんじゃい！！もっと票入れろや！！ぶっ殺～す！！！」

「はい、相変わらずの腹黒さをどうもありがとうございました！」

「甘いですね……貴方が僕のアリエッタを超えるなんて１００年たっても無理ですよ。」

「おっと、ここでイオンさんなんか宣言してるぞ！」

「なぜなら、貴方には本当に足りないものがあるから……」

「わ……私に足りない物……？」

「それは……」

「「それは……？」」

「“萌え”です！！！」

……
……
……
…
・　・　・
・

「「は……？」」

「貴方のキャラには癒しとしての萌えが圧倒的に少ないんです！それが出ても次には腹黒さでギャクキャラに方向転換！中途半端なんだよ！もっとキャラを磨いてから出直してきな！！」

「そ……そうだったのか……」

「おぉっと、アニスさん撃沈！ｏｒｚが妙に合っている！」

「ですから……はい、これ♪」

そう言って渡してきたのはリトルデビっ子の衣装だった。

「それを着てア○マスで貴方のコスチューム勝手に使ってて姿が似ているといわれるや●いを見返してきなさい！」

「イオンさん！ネタばれ的な危険な発言は避けてください！！」

「よ……よぉ～し！いっちょアニスちゃん頑張っちゃうから！！」

そして、アニスは明日の夕日に向かって走り去っていくのだった

……

「いやなんか違うからその表現！？」

「じゃあ次に行きましょう♪」

「スルーですかい！」

「いきます……第二位！」

ダダンダッダダン！！ダダンダッダダン！！

「得点１８点……獲得票６票……」

「アビス版もの●け姫！？内に秘める萌えパワーは強力！！魅惑のサイレントガール！！」

――――アリエッタアアアア！！――――

ワアアアア――――！！！

「それでは、ご本人の登場でございまーす♪」

グルルルルッ！！！

「……あれ、なんでライガクイーンが？」

「ママも……投票されてて……アリエッタ……一緒に出たかった……です。」

「ライガクイーンが同伴するか……たしか、第五位に入ってたよね？」

ガルッ！！！

「……ごめん、わかんないから……アリエッタよろしく。」
「え……えーと、『娘の晴れ舞台に母親が見守ってやらない訳にはいかないのでな』と……言ってる……です。」
「そうですか、いい母親を持ちましたね……アリエッタ……」
「ハイ……です！！イオン様♪」

「それにしても……結構入りましたね。さすがはアリエッタというか……」
「原作でもサブキャラでは高ランクに入るくらいでしたからね。」
「しかも、この作品では感情はそれよりややアップしててさらに可愛さもアップ！！」
「萌えは偉大なり……僕、この言葉をオールドラントに広めたらアリエッタと結婚するんだ……」
「すみませんイオンさん！なんか死亡フラグびんびんですから！原作通りになんないでくださいね！？」
「え……えっと……嬉しい……です／／／／／」
「公認ですか！？アリエッタさん！！アンタら年考えろや！！」

30分後……

「では……続きをお願いします……」↑ゲンナリ状態
「あ…はい、森羅さん、俺様参上！さん、ヨシヒロさん、湊さん、ライサンダーさん、ロムさんありがとう……です。これからもアリエッタの事……応援してください……です。」
「ありがとうございました。では、次へ行きましょう。」

「注目の第一位は！！」

キュピィィィィ――ン！！！

「得点２６点……獲得票６票……」

「もうすぐ精神年齢８０を超えます……でも体はまだまだ元気！！」

「天才外科医にしてオールドラント一の親馬鹿！！」

「ネクロマンサーが菩薩に見えるくらいだ最終鬼畜医師！！」

「産まれてきてすみません……人間と呼べるのか？ＵＳＤ（Ｕｌｔｉｍａｔｅ　Ｓａｄｉｓｔｉｃ　Ｄｏｃｔｏｒ）！！」

「「その名も……！！」」

「やかましいぃわあぁぁぁこんのボケがあぁぁぁ――――――――！！！」

バコオォォォ――ン！！！！！

「あぶろばっ！！」

「人を人害だ何かとあれこれ言いやがって……」

「鷹爪落瀑蹴をしながら登場って……過激だね……お陰さまで作者さん吹き飛んじゃったよ。」

「そこんところは反省しない方向で！」

「せんか！！」

「お、作者復活早いね？」

「良く譜を溜め込んだのに……」

「ここは俺の『世界』（作品）、故に此の中では俺は無敵だ！！」

「んなのは関係ないとして「おいこら！」……どうも、今作品オリキャラのハイル・シュヴェールこと鞍馬蓮二です。たくさんの投票をどうもありがとうございました。」

「ちなみに、ここで名前の意味をちょこっと解明させてもらいます。」

「……そういや、名前の意味って読者さんに説明してなかったっけ？」

「そういうことですので……まず『ハイル』、これはドイツ語からとっており、≪祝福≫という意味から取りました。次に『シュヴェール』ですが……これはラルゴと同じ、音楽用語からでして【曲想を表す標語】重々しく（荘重に遅く）と作品の趣向に則った意味として取らせていただいたんです。」

「“救い”が基本だからね……」

「あと、今回は皆様のイメージが崩れてしまうかもしれませんが……特別として作者がハイルのイメージ図を描かせていただきました！」

「あまり見たくないという方はここから下はスクロールしない事をお勧めいたしますので……」

「ではどうぞ。」

「本当にいいんですか？」

＞ｉ６２５９―１０１０＜

「これはテストとしてみてみんに貼った物ですのでご了承してください。」

「絵才がなくてホントすみません……なんかこの絵薄いって思う人はそこんとこ気にしないで欲しいです……」

「ちょこっと髭が生えているのがポジティブってな感じです。」

チリンチリン♪

「おっと、ここで終了のベルが鳴ってしまいましたか……」
「名残惜しいですが今回の特別編はここで終了させていただきますね♪」
「次回は２００万Ｈｉｔでまた会いましょう！！」
「それでは……」

「「「さようなら～！！！」」」

――――よ～しさっそく打ち上げ行こうぜ！――――
――――金は作者さん受け持ちでお願いしますね♪――――
――――ちょっ！今月はまずいから割り勘でさせてくれよ！――――

１００万Ｈｉｔ　特別編（後書き）

誰かもっとかっこよくハイルが描ける人がいたら描いてもらいたいですね……はい。
絵は本当に苦手なんですよ……

第６５話（前書き）

久しぶりに帰って来た！！
スランプ気味になりそうだ……

第６５話

「そうだ、死合をしよう」

皆さんお元気ですか？ファブレ家来訪まで明日と時間がなくてタミフルそうなハーミットです。緊張がもう少しでＭＡＸと危ない状況です。てな訳で、一番の発散方法が弱者いじ……ごほん、体を動かしに行きたいと思います。

「ディノ～、ちょっくら暇を潰してくるからカルテ整理頼むぞ？」
「……でしたら私の頭を強く掴むその手を退けていただけませんか？」

もはやこのような出来事に慣れてしまったディノはもうどうにでもなれと言わんばかりにスル―能力を磨きあげれていた。

―――――――――――――――――――――

「そんじゃあよろしくな♪」

笑顔で対応した結果、

「無理です！！」
「やだあぁぁぁァ！！！」
「殺されるうぅぅぅウ！！！」

一斉に訓練場にいた兵士達は真っ先に出口へと直行していった。
実はハーミット、試しに表で訓練の為に一度相手した時、相手側の結果が悲惨な目に遭わされるという惨劇を起こした過去があった。

「はぁ……あれはやりすぎたか……」

一応反省をしておこう。だが、このまま何もやらずに終わらせる訳にはいかないしな…

今日はイオンは先にバチカル行ってるからいないし……他には。

「ラルゴ……かな？」

「てな訳で、調練にてよろしく♪」

「またかハーミット…少しはこっちの身にもなってもらいたいんだが……」

「だってなぁ…俺の蹴りに耐えれる体格を持った人間なんてお前ぐらいしかいないし」

「そのおかげで俺の自慢の鎧と戦斧を修理するため給金どれほど減ったか分かっているのか！？」

「５回だな」

「数えてたのか！？」

ふ～む、ラルゴも駄目となると……残るのはあいつしかいないか。

怪我しないように手加減を頑張るとしますか。

Ｓｉｄｅ：アッシュ

「双牙斬！」

「甘いぞアッシュ！」

くっ、さすが主席総長の椅子に近いといわれている男でもある。俺の攻撃なんざカスリやしねぇ！だがまだだ、俺は強くなんなくちゃいけねぇ！世の中ってのは時に暴力が支配する場所が現れる時も稀にある。弱い奴はまず生き残れねぇ！！

「閃光…墜刃牙！」

アッシュはヴァンの隙をついて自分の持てる最高の技を叩きこもうとする…が

「読み違えたな……」

ヴァンはその行動が分かっていたといわんばかりに……

「閃空剣！！」

カマイタチを孕んだ薙ぎ払いをアッシュの閃光墜刃牙ごと体を吹き飛ばした。

「ぐあぁぁぁ！！」

突風の力に吹き飛ばされ、受身も取れぬまま地面を後ろへと転がっていく。２ｍほど離れてようやく止まったと同時に立ち上がろうとするアッシュの眼前には……

「勝負ありだ」

ヴァンの木刀の切っ先が映っていたのだった…

「くそ……ッ！！」

パチパチパチッ…！！

「中々の出来だ、１３でそこまで動ければ十分だぞ？」
「ハーミット、お前……」

いつの間にか訓練場の端の壁にもたれかかりながら此方を観戦していたハーミットがいた。ヴァンは少しため息をしながらこちらを伺う…どうやら途中で気づいていたようだ。

「ハーミット…今は遊びでやっている訳ではないのだ……邪魔をしないでもらいたい」
「いいだろ別に見ているくらい、現に手出しはしてなかったんだからな」
「……まぁいいだろう」

二人の会話には何かギスギスとした雰囲気が漂わせる。どうやら未だ二人の関係は良好という訳ではないらしい。アッシュは前から話を聞いていたがこれほどとは思っていなかったので少しばかりか冷汗が垂れる。

「それで、何用だ」
「なぁに、少しばかりか鈍った体を解しに…な」
「……私に相手をしろと？」
「話が早い、一人を除いてもうお前ぐらいしか相手にならなくてな…訓練生は逃げちまうし……」

相手にならないだと！？アッシュは驚いた。ハーミットの強さは以前魔物との戦いで知っている筈だ…だがあの時はここの他の兵達でもある程度腕がたつならどうにかなるくらいだった物だ。なのに、他の師団長が相手にならない？たかがダアトの医師であるこの男が

どれ程の力を持て余しているのか少し興味も持つ。

「……よかろう、かつて決着の着かなかったあの勝負…今ここで白黒を付けさせてやろう！」

「そうでなくては！……さて、早速始めよう…とその前に、アッシュ！」

バサッ…！！

「お…おぉ……！？」

ハーミットは着ていた白衣を豪快に脱いでそれをアッシュに投げて渡そうとする。其れをアッシュは受け止める…が、

ビタンッ…！！

「うおあぁぁぁっ…！？」

予想だにしなかった白衣の重さに耐えきれず、腕ごと地面に落してしまった。

「な…なんだこれは！？」

「ディストに作らせた防刃、防水、防火対応の特殊繊維で編まれた白衣だ。全体で約五キロある。」

「そ…それを着てて今まで仕事してたのかよ……」

アキレス腱などを伸ばしたりとストレッチをしながらヴァンの方へと向き、ルールを説明する。

「さてと、譜の使用は無し…俺は格闘、お前は剣技のスタイルで生身の試合とする……それでいいか？」

「かまわん…では……」

――――勝負！――――

最初に勝負に出たのはハーミットである。地面を蹴って一気に距離を詰めようとして速度を上げる。其れに対応してヴァンも木刀を薙ぎ払いの構えを取る…これでは迂闊に近寄れないと考え、ハーミットは左右に複雑な反復横とびをするかのように撹乱させながら少しづつ近づいていく。

「はぁっ…！！」
「むっ……！？」

ヴァンはその動きに惑わされず、ハーミットの足を狙って木刀を振るう。確かに、どれだけ姿がぶれようとも足は地面を付き続ける。それを読んでヴァンは攻撃をする。

「ちぃっ……！！」

ガギッ…！！

それをハーミットは片足を浮き上がらせて木刀の根元を思いっきり踏みつけて力のベクトルを強引に受け止めた。そして、もう片方の足でヴァンの頭を狙おうとする。

「烈波掌！！」
「……ッ！？」

ヴァンはその振り下ろされようとする脚を譜の込めてない烈波掌で弾き戻す。その勢いでグラつき、そこを狙って木刀の自由を取り

戻す。まだ態勢を整えれていないハーミットに突きで攻める。

ヒュッ…ヒュッ…ヒュッ……！！！

「おっとっと、アブねアブね…！！」

「軽口を…ッ！！」

ステップを踏むようにして後ろへ下がり、繰り出される突きを避ける。そして、やや大きめに下がったと同時に左足を大きく振り上げ、

「おらっ…！！！」

ドンッ……！！！

「ぐぅっ……！？」

強烈な踵落としがヴァンの左足を潰す。靴の上からなので直接的な傷は受けはしないが、衝撃は貫通するためヴァンはその激痛に悲鳴を洩らしかける。だが、それを覚悟に今度は強引にハーミットの懐に入ることに成功した。

「双牙斬！！」

「何……っ！？」

ハーミットは慌てて袈裟を狙う木刀の起動を掌で逸らすが、二撃目には間に合わなかった。次に放った切り上げがハーミットの逆風を捉え、体は掠っただけだが顎に大きくクリーンヒットさせる。

「がはっ……！！」

「まだだ…！！」

――――烈穿双撃破！！――――

穿衝破と烈破掌を組み合わせたヴァンの奥義が繰り出される。すぐさまガードをしたが…一撃、二撃と叩きこまれ、ハーミットはそのままの体勢で後ろへと退けられる。

「痛つつ、効いた～！！」
「冗談を…ピンピンしてるではないか……」
「いやいや、俺だって痛みは感じるさ…倒れちまいたいくらいだ」
「ならば、倒してやろう！！」

ヴァンの猛攻がまるで暴風のように繰り出されていく。普段長剣を軽々と使う腕力と膂力を持つヴァンにとって木刀などそこら辺の木の枝と大差ない。流れるような連撃がしだいにハーミットを苦しめていく……

「この、冗談きついわ！！」
「うおぉぉぉォ――――！！！！」

ガガガガガガッ――――！！！！

迫る猛攻をどうにかして弾き、逸らして防いでいくが全てとはいかず、何発か体に掠り始める。

「くそ……出来ればやりたくなかったが……許せヴァン！！」

ハーミットは怪我を覚悟で木刀を地の力で握りしめて止める。テーピングも何もしていない素手にとって木刀での衝撃は激痛を走ら

せる。だが、それはどうとなれ……そう考えて、

「風市！！」

ゴスッ……！！

「～～～～ッ！？」

「気海！！　水月！！　天突！！」

ゴスゴスゴスッ……！！！

「あびゃぁ！！……ちょお……待っ……！！」

「松風！！　人中！！　殷門！！　委中！！」

グサグサグサッ……！！！

経絡秘孔のフルコースと奔った、ちなみにこれはハーミットが針治療を前世で興味本位で学んでた時に『これで君も世紀末●王！！人体経絡秘孔マップ』という本を読んで覚えてみていたのだ。実際これは叩かれると本当に激痛が奔る位痛い物であんまり人間にやっていい物ではない。

なのにハーミットはこのままでは勝算が低いとみて重心的にそこを狙うように切り替えた。初めに脚にある秘孔を蹴られたヴァンは悶絶してその間に続けて別の秘孔を蹴り出す。

そのおかげで立っているのがやっとなくらいに痙攣しながら悶絶しつづけるヴァンの立ち姿ができあがった。なんともめちゃくちゃな裏技であろうか……

「ハ……ハイル……さん……ちょっと……た……タンマ……」

「なんか言ったか？」

ゴスッ……！！

「あおぉぉあぁぁぁァ――――！！！」

「この頃さぁ……俺不幸続きが多い気がするんだよねぇ……」

ゲシッ……ゲシッ……！！

「もう……やめ……て……！！」

「うっせぇぞ髭……今話しかけんな……」

グリュグリュ……！！

「……（泣）」

「この行き場のないイライラ感どうすればいい訳？　教えてくれないかいヴァンデス顎髭デルカよ……経費は依然として高いしさぁ……部下から愚痴を毎回聞かされるしさぁ……イオンからは腹黒さ満載で嫌味言われるしさぁ……アリエッタとはこの頃遊んでやれねぇしさぁ……聞いてるのかこの死洲痕野郎が……？」

「ちょ……漢字がちが……！？」

「それに比べてこの頃のお前は何してるんだ？　大逸れた計画上げてる割には俺の所とかから出してる申請書に毎回お前の名前だけが無いんだが……どういう意味なんだ魔挫痕野郎……？」

「いや、あの……その……」

ヴァンは倒れながらも首を１８０度回転する勢いでハーミットの方へと向けながら冷汗をかき続ける。そういえばこの頃、謡士としての仕事を参謀長や副官に任せてあったな……お陰で自分の部屋の机には山となった書類が……

「革命結構……だけどな……てめぇ俺の生活まで乱す気だというなら今ここでどうかしてやろうかあぁん！？」

笑ってない……笑顔だけど目は全然笑ってないですハイルさん！！

「お……おいハーミット……そろそろその辺に……」

「なんか文句あっかオカメインコ♪あるなら蛸壺に蛸ごと詰め込んで酢漬けして海に放り出すぞコラ♪」

「ヒィッ……！！」

アッシュ……この時点ではまだヘタレであった……

「さてと、ヴァン……勝負はまた預ける……決着はまた今度という訳だ。」

「も……もちろんです！！（早くこの場から離れたい）」

「じゃ、ライガとフレスベルグに餌やりに行ってこよっと……」

こうして、第二回ハーミットＶＳヴァンの幕は唐突に終わりを迎えた。はっきり言って後半はハーミットのリンチでしかなかったが……

「ヴァン師匠……大丈夫ですか……？」

「アッシュよ……師として警告する……もしあの人と戦うなら超振動を完璧にコントロールできて塵も残さないくらいの意気込みでかかってけ」

「あいつはベヒモスか何かですか！？」

「いや、ベヒモスを譜術で凍らせれるくらい……すさまじいのだ……」

「もはや人間じゃねぇ……！！」

もはやダアトではハーミットは“人外”のレッテルを貼られている事で定着決定ならしい……

バチカル来訪まであと一日……

第６５話（後書き）

秘孔の攻撃は作者も大きく活用しております。
ふざける奴をこれでヒィヒィと泣かした経験が小学生で……

第６６話（前書き）

疲れが中々この頃取れません。
誰か俺に癒しを……

第６６話

――たとえ人は自分が穢れようとしても必死で生きようとする――

――それを俺はとても美しい物だと思える――

――何かを守る為に人は強くなれる――

――どこまでも……――

ザザァァ――ン……

定期船が進む度に当たる漣は癒されるような音色となる。甲板でそれを俺は聞き続ける。かつて、慟哭を上げそうになった時もこれに助けられたものだ……さて、今俺はバチカルに向かっている。今回はイオンのようにインゴベルト国王との謁見は行わないのでなるべく余分な事などしないだろう。

「ツケは早めに払わないと後が困るしな……」

ファブレ公爵か……十年ぶりだな……現場は引退したが、軍の最高司令官としてはまだまだ現役だそうだ。それほど大物だという事だ……今回の相手は……

「本当に下手したらスパンと逝くわ……厄介だな」

だけど、公爵……俺はまだ死んでやる訳にはいかねえぞ？あんた

も俺に昔言ったように背負う重さを……責任を貫き通さないとならない身なのでな。

そうしていると、後ろから兵士の一人が走り寄って来た。それを振り向かないままで対応する。

「失礼、もうまもなくバチカルに到着です」

「御苦労、持ち場に戻っていていい……直ぐに用意する」

さて、大勝負と行きますか……っと！

――――――――――――――――――――――――

バチカルの港に降りると何人か白を基準としたような鎧を着込む兵士たちが敬礼のポーズを取って迎える。そして、その中から一人他の兵士とは違う雰囲気を身に纏う女性が前に現れた。

「お待ちしておりましたハーミット殿、私……今回護衛を務めさせていただくジョゼット・セシル、階級は大佐であります。」

「その心遣い、ありがたく受け取らせていただきます。」

ハーミットは形式の礼をとって足を進める。その後と前を兵士達が囲むようにしてともに付いてくる。その様子を遠くからバチカルの住民達が覗いているのがよくわかった。

「セシル大佐、私としてはあまり目立つような行動はしたくないのだが……護衛はできるだけ最低限にしてもらえないだろうか？」

「それは出来ない相談であります、貴方様は我らが元帥の大事な客人もといダアトの重要人物として導師イオンから丁重にお持て成しをするよう命じられております。その貴方様の身に何か起これば…

…」

「わかったわかった……こっちも我儘言ってすまない」

「恐縮であります……」

イオン……まさかお前、なるべく危機回避をできるよう仕向けてくれたのか？確かに、導師のお墨付きという物があれば迂闊に手出しは出せないという事もできるが……相手はお前の地位に近い王族だしな……中途半端な策は直ぐに破られるぞ？だが、礼は言っておく……ありがとうな。

そう考えながらもまた一段、二段と昇降機を使って上層部へと目指していく。昔アッシュと忍び込んだ経験が懐かしいな……それにしても、なんか重い……やっぱり俺には偉ぶる事なんか到底無理だよ……あ～ぁ……

「どうかなされましたか？」

「ん……あぁ、なんでもない」

そして、遂に上層部へとたどり着いた……目の前には壮大に広がるバチカル城があり、その隣にはそれに劣らぬほどの立派な豪邸が建てられている。前は夕暮れだったが、早朝の日で照らされた公爵の屋敷はより一層凄みが伝わってくる。改めて思う、俺は今からここへ入っていくのだと……

「ハーミット殿のご来訪だ、お通ししろ」

「ハッ……！！」

セシル大佐が門番達に一言入れると彼らは手に持つ槍の矛先を上に向け、通行許可の合図を取る。その間を通って俺はセシル大佐と共に屋敷の中へと入って行った。

「これはセシル様、御勤めご苦労様です」
「心遣い感謝いたしますラムダス殿、元帥との面会を頼めますか？」
「もちろんですとも、ささ……ハーミット様もどうぞ奥へ」
「はぁ……」

姿からしてこの屋敷の執事らしい人物、ラムダスと玄関の傍で並ぶ使用人達が二人を出迎えてくれた。財力だけで見てもさすがは公爵だと感じられる。かつて訪れたヴァンの実家もこんな風だったなぁと感傷に浸りながら進んでいくと……目の前に鎖で石壁に固定し、飾られた蒼刃の太刀が目に入る。

「……これは……」
「……どうかなさいましたか？」

セシル大佐が声を掛けてくるが耳に入ってなかった。この太刀は……どこかで見た気がする。何時だったかな……一瞬だけだった気がする……

「宝刀ガルディオス……かつてホド戦争の敵将、ガルディオス伯爵家の家宝でもあった……戦争の戦果として陛下直々に私が授かった物だ」
「公爵様！？」

目の前の太刀に見惚れていた所、奥からあの男がやって来た……年を取ってはいるが、体から湧きあがる覇気は衰えてはいない。キムラスカ公爵にして白光騎士団元帥……王族に連なりしファブレの現当主：クリムゾン・ヘアツォーク・フォン・ファブレの姿がそこ

に有った。

「わざわざダアトからの来訪に感謝する、折角だ……詳しい話は客間にて始めよう、大佐……案内したまえ」

「御意」

……気づいて……ないのか？　いやまだ安心はできない。向こうの策かもしれないからな……

ハーミットはそのまま彼らと着いていくと、とある一室へと辿り着く。どうやらここが客室という事か。

「さて、御掛けになられよ」

「どうも……」

ソファーに腰を掛け、お互い向き合う。その間、公爵は人払いの合図を出して傍に居たセシル大佐を部屋から退出させた。そして、この部屋は二人のみとなる。

「話は導師イオンから通してそなたにも伝わっていると思うが、私の妻は近親婚を繰り返した故に先天性の病気として心臓を悪くして生まれてきた……それは降嫁して今もなお続く。今の所、薬で動悸を抑えたりしてなんとか日常を暮らせてはいるが……」

「このままでは長く生きられない……専属の医師にそう言われたりしたのですか？」

「……悲しいかぎりだ……だが、そこでそなたの名を聞いた……そなたは今まで他の医師が匙を投げてた病をいくつも治してきたそうだと……特に関心を向けたのは千切れた腕を再び繋ぎ治したそうではないか……それを聞いた時は今までにない戦慄を味わったような感覚が伝わって来たぞ」

「……御贔屓をどうも……」
「そんな謙遜なさるな……そして、今この場で問いたい……妻の病気は治せる物なのか？」

公爵は最後の希望に縋るような感じで身を乗り出すように顔を近づけながら聞く。そうは言ってもねぇ……

「公爵様、医者は常に自分の腕を過信しないのも志としています。ですから即答などいたしません……まずは、患者を実際に診せていただかないと」
「……それもそうであるな……急がせて済まなかった」
「では、奥方はどちらへ？」
「案内しよう……」

その後、ハーミットと公爵は客室から出てしばらく廊下を歩き、庭へと一旦出る。この屋敷は全部で四つの建物が円に沿って北西東南に建てられている。先ほどまでは西側の建物だが、公爵夫人が居るのは東側の建物だそうだ。

そして、先ずは公爵がドアをノックする……

「シュザンヌ、私だ」
「どうぞ……用意は出来てなさいます」

中へ入ると公爵と同じ王族の証である赤髪を持つ公爵夫人、シュザンヌ・フォン・ファブレがベッドから上半身を上げながら自分達の到着を待っていた。先ずハーミットは礼を取って挨拶を始めた。

「はじめましてシュザンヌ様、私……今回貴方様の診察をさせていただくハーミットと申します、以後お見知りを……」

「態々当家までのご来訪誠に感謝いたしますわ……此の度は私共の願望をお聞きいただき嬉しく思います」
「恐縮です……では、自己紹介が終わりました所で……診断に入りましょうか」

――――――――――――――――――――

意識を集中させて聴診器から伝わってくる心音を聞き分ける。様々な心音が鼓膜を振るわせ、その中から異常を探り出す。

ザザッ……ザザザ……

……大体予想していたが……当たりだ。この人は労作性狭心症にかかっている。あぁそうそう、狭心症の代表的な発作の症状としては、胸の奥が痛い、胸がしめつけられる・押さえつけられる、胸が焼けつくような感じ、などがある。大多数は胸部の症状として現れるが、上腹部や背中の痛み、のどの痛み、歯が浮くような感じ、左肩から腕にかけての痺れ・痛みとして感じる事もあるぞ。

んで、労作性というのは歩行、階段昇降などの身体的な労作、精神的な興奮・ストレスが誘因となる物だな。安静にしたりストレスがなくなると、多くは数分で、長くとも１５分以内で症状が改善するから別に言えば良性みたいな物だ。

だが、このままじゃいけないな……下手に進行すると心筋梗塞になる……今の所夫人が服用しているルグニカ紅テングダケをベースとした薬を調べてみた。すると結果は心臓の負担を減らして血管を拡張する硝酸薬と同じ効果が期待できていた。しかし、不安定型になったらニトログリセリンでさえ効かなくなるぞ……

「あの、先生……どうでしょうか？」
「う～む……」

狭心症の治療法としては冠動脈形成術、バイパス術が有効だが……いかんせん人工心肺装置がこの世界には未だない……冠動脈形成術はカテーテルとバルーンを使っての術式で人工心肺装置はなくとも出来るには出来るが……術後、約２．３割が再狭窄となるから結局バイパス術をするしかない可能性が出てくるんだよなぁ……怪我をしない限り、今作れている抗血小板薬という血液をさらさらにする薬を使って進行を長引かせると共に対策を早めに考えつけるか……

「公爵様！　私めを奥様の専属医師の任から一時離れろとはどういう事なのですか！？」
「言葉の通りだ、今後の治療に支障をきたさない為でもある」

……外が騒がしいな。

「失礼……しばしお待ちを」
「えぇ、どうぞ」

夫人に断りを入れてから俺は入口の方へと向かい、ドアを開けてみる。すると、その先には公爵と別の医師らしき人物が向かい合うように立っていた。

「申し訳ありませんが、ここには病人がいるのでなるべく静かにしていただけませんか？」
「お……お前は！？」

ん……こいつ俺の事を知っているのか？俺は学会に行くような奴じゃないから殆どのの医師には姿を見せていない筈なんだが……

「医学界の異端児、ハイル・シュヴェール!!　何故貴様がここにいる!?」

んな!?　俺の本名を知ってる奴だったのか!?

「ハイル……シュヴェール……?」

公爵がその名を聞いて何かを考える仕草をし始める。まずい……これは本当にまずい……

「……今はハーミットだ、その名はとうに捨てた……」

「そんな事などどうでも良い!公爵様!!この者は医師の名を語ったペテン師同然のような男です!!学院に通いもしなかった平民風情の似非医師などに奥様の診察など任せてはなりません!!」

久しぶりに会ったな……こういう貴族出の医者は……

「確かに俺は学院に通わなかったが……医師の資格はちゃんと持ってるぞ?　だいたい、学院に通わなくても勉強できる奴はいるだろうが……」

「そうだとしてもお前の行ってきた治療は誰もやった事がないとされている……しかも、その治療の仕方は極悪非道と言われているのだぞ……ましてや、刃物で人間の体を切り裂くなど……!?」

「極悪非道とは失礼だな……俺の行う手術という物は……」

「とにかく、とっとと去れ!!ここはお前のような平民が来る場所ではない!!」

ブチッ……

平民平民って……そんなに貴族が偉いかよ……

「聞いているのかきさ「黙れ」……なにぃ!?」

「黙れと言っているんだヤブ野郎……貴様ごときが医者だと名乗る自体不快感極まりない」

「な……!?」

「さっきから聞いてれば平民平民とまるで平民という名詞が下民と表してるかのような言い草しやがって……」

「な……なにを……」

「命の価値を身分で決めてる時点でお前はもう医者なんかじゃない……命に色は無ぇんだよ」

ハーミットは詰め寄るかのように目の前の医師に足を進めていく。そのすさまじい剣幕に医師は次第に足を後ろへ下げていく。

「大体、今回ファブレ公爵が俺を呼んだのはお前では奥様の病気を治せないと判断したからだろ？　ま、薬だけが病気を治すと考えてる自体俺にとっては新人（ルーキー）当然だがな……」

「ぐぅ……！」

「医者は学院だとか金掛けてなったとかじゃねぇんだよ……実力でなる仕事なんだよ……分かったらさっさと荷物を畳め」

「では、貴様は治せるというのか!!　医学博士である私でさえ完治は無理に等しいと判断した奥様の病を!?」

こいつ……これでも医学博士だったのか……けど俺には関係ないが……

「治してみせるさ……その為の道具をそろえる為に……公爵様……あと1～2年程期限を下さいませんか？」

「……!?」

公爵は彼の言った言葉、治せるという意味の言葉に目を開いた。

「馬鹿馬鹿しい、治す為に期限を付けるなどホラ吹き同然ではあるまいか……公爵様、この者の言葉など「1～2年で……いいのだな」……公爵様！？」

「はい……奥様は狭心症という心臓に血液を送る血管が狭くなる病気にかかられておられます……これを治す為には……血液の流れを正常にする為の手術をしなくてはなりません……ですが、この手術をする為には心臓を止めなくてはならない為、その間で心臓の代わりとなる装置が必要となるのです」

「そのような事が……可能なのか？」

「馬鹿な……心臓を止めるなど死なせると同じではないか！？」

「ずっとじゃなければ大丈夫なんだよ、それにその為の装置が必要だって言ってるだろうが……」

「その言葉、信じていいのだな？」

「……御意」

「ならば条件を付けよう、もしも期限内に……もしくはその手術という物をしてシュザンヌを死なす羽目になれば……私自らお前の首を代価として頂こう……それで良いというならこちらもその提案を呑もう」

「……全力を、尽くします」

そしてここに……契約が交わされた……

「では、しばしの間……シュザンヌの定期診察はこの者に任せる」

「公爵様……！？」

「……博士、今日は態々ご来訪頂き誠に感謝する……だが、もう妻の診察は終わった……御帰り願おう」

「な……何を……」

「御帰り願おう……」

公爵は少しだけ覇気を纏う様にして男に脅すように言い渡した。

「くっ……どうなっても知りませんぞ！！」

そして、男はどこか尻尾を巻くようにしてその場を後にしていくのであった……

「さて、話は纏まった所で……」

「……？」

「久しぶりだ小僧、あの時の若造がここまで化けるとは思いもしなかったぞ？」

「あ……あはは……」

公爵は口元を少し笑わせてハーミットを少しじろじろと見る。

さて、どうなる……？

第６６話（後書き）

正体ばれちゃいました♪
後にこってりと絞られそうですハイルさん……

第６７話（前書き）

原作までのカウントダウンが俺の中から響き続ける……
１００話までには入ってたいですね。

第６７話

「シュ……シュザンヌ！！ま……待つん「エクスプロード！！」ぐおわあぁぁぁぁ――――！！！」

「シュザンヌ様！！　私は気にしていませんからどうか御怒りを御静めください！！」

「いいえ先生、たかが昔勝負に負けたからって脅しを使うようなその腐った愚考を持つ旦那様など燃やされて当然です」

「ちょ……怖いですシュザンヌ様！！」

「これでいいのですよ先生、我がキムラスカ王家に連なりし女系にはとある教訓があり……私はそれに載ってて事を起こしているだけなのですから」

「……教訓とは？」

「『夫は妻の枕、息子は母の座布団、弟は姉のサンドバック』と教務で学んできましたので」

「なんたる女尊男卑！！」

なぜこうなったのだろうか……

――――――――――――――――――――――――

（１０分前……）

「……という事で、今後の治療方針はこうしていきましょう」

「ふむ……」

何だかんだであの後一悶着あった所でようやく今後の方針を決めれそうだ。再び二人はシュザンヌの部屋に来ていた。

「胸を……切り開く……ですか……」
「あぁ、傷等の事はご心配なく……譜術での治癒と縫合によって殆ど気にしないくらい残りませんから」
「なるほど……大凡考えが付いた」

これで説明は終了とするかな……？　なんかどっと疲れたな……

「そういえば、先生はこれからどうなさるおつもりで？」
「診察が終わりましたらどこか適当な宿を取って明日にもすぐさまダアトへ戻りますね」
「……旦那様」
「うむ……ハーミット殿、今宵は我が屋敷にて御泊りになられるがよい……今まで見通しのはっきりとしなかったシュザンヌの病気に関しての良診の結果の礼として」

滅多に無い待遇だろう……だがしかし……

「申し訳ありませんがお断りさせてもらいます、この病気は時間との勝負ですので術式の決断をあまり長引くような行動は控えたいので……」
「ほぅ……そうは言っても本心では安心できぬからであろう？」
「いえいえ、そこは御想像にお任せいたしますよ」
「小癪な……私がそなたの首を取ろうなど口にしたのを気にしてい「……旦那様、それはいったいどういう意味でなさいますか？」ぁ……いや、シュザンヌ……？」

……なんだか周りの空気が一、二度下がった気がするんだが……ってそれよりシュザンヌ様……後ろで揺らめく黒い炎は一体何なのですか……それに凄い笑顔ですが絶対心では笑ってませんよね……？

「たとえ公爵という身分であっても私情を混ぜて判断をすることなどは禁止している筈なのですが……」

「だ……だがシュザンヌ！この者とはホド戦争で幾ばくか因縁があるような者なのだ！！私とて貴族としての建前があってな「そんな1ガルドにもならない安っぽい事で人様の命運を勝手にお決めになさらないでください！！」……はぃ……」

シュザンヌ様つえぇ！？　もしかしてファブレ家の一番って本当は……

「先生、先ずは旦那様に代わってこの私めから謝罪を申させていただきますわ……」

「いえいえいえいえ！！！　そんなけったいな！？」

王族に頭下げさせるなんて国際問題云々どころじゃねぇから本当に！？　こんな情報、城の方へ持ってかれたらダアトがめちゃくちゃ立場上危うくなるからね！！

「折角ですので、旦那様が貴方に申したそのお話を詳しくお聞かせいただきませんか？」

「いえ……あの……その……」

「聞かせてくださいますね♪」

左肩が痛いですシュザンヌ様！病弱と聞いてるのに俺の方に乗せているその右手からどれ程力籠めてるんですか！！　そして公爵よ……後ろで『頼む！！　喋らないでくれ！！』と必死にジェスチャーしている所悪いんだが……

断ったら俺が酷い目に会う気がするからさっきのし返しかねてバラさせていただきます！！

そして、最初に戻るという事だ……流石王家の血……譜術の才能も半端ありませんでしたね、はい……そんな訳で俺は公爵の悲鳴をBGMとしながら夫人の部屋を後にするのであった……

「さらば、カリスマ溢れてた若き頃の公爵よ……」

――――――――――――――――――――――――

未だ奥から響いてくる小さな爆音を気にしない方向にしてようやく屋敷の庭へとハーミットは出て来ていた。自家水路のある広い庭は見ているだけでも飽きない物で、しばらく柵にもたれかかって眺めていた。すると、その一角で誰かがしゃがんでゴソゴソとしているのが見えた。

「……ここの庭師か？」

そういえば、この屋敷に来てからまだ5人くらいしか話をしていなかったな……そう考えて何か気を紛らわすためにその老年の庭師の傍へと近付いていく。すると、足音で気付いたのか右手にスコップを持ちながらこちらに振り返って来た。

「どうしましたかな、私に何か御用で？」

「あ……いえ、大した事では無いのですが少し貴方とお話……を……」

その姿を見た瞬間、何かが俺の頭の中を横切った……古く忘れかけていた記憶が再び奔り始める。

「おぉ、公爵様のご客人でいらっしゃいましたか……私めのような

しがない使用人に御声を掛けていただけるなど光栄でなさいますよ」

今は眼鏡を掛け、屈強だった腕の筋肉は少し痩せ、髪はもう白く変化し終えた姿となった……

――ガルディオスの盾がそこに居た――

「花を……植えてたんですか？」

「はい、今週は季節変わりとして新しい花を入荷したばかりでして」

「……私の母も良く言ってたものだ、花が好きな人間は心がきれいな人間だと……」

「それはそれは、良い御母上でいらっしゃる……」

隣同士でしゃがむ様にして座り続ける二人は他から見ればなんの他愛もないような言葉を交え続ける。そこでハーミットはふと小さな声でその老人に流すようにして聴かせる。

「盾は……未だ健全ですか？」

「……！？」

「思い出したくないですが……あれは本当に悪夢でしたね……」

「……そうでしたね……全てが消えてしまったのですから……」

老人は彼の正体に気づき、少しばかりか動揺したが……直ぐに落ち着きを取り戻して静かに話すべき事を会話に混ぜて話し続ける。

「……剣とは再び見えれましたか？」

「……はい、ルーク坊ちゃまの剣術指南として訪れた時から……」

ヴァンとは先に再会できてたってことか……

「領主の形見は……何処へ？」
「……」

伯爵の娘と息子はどこにいるのか……それを聞くと老人は黙ってしまった……何かまずい事があったのか？　そう考えていた所……

「ぺ～～るぅ～～！！」
「ル……ルーク坊ちゃま！？」

いつの間にか赤髪の少年が傍に近寄って来ていた。少年：ルークはペールと呼ばれた老人の元へと少しおぼつかない足取りで駆けながら勢いよく寄りかかって来た。

「ど……どうなさったのですか！？」
「がいがぁ～……」

少し嫌そうな顔をしてペールに何か訴えるかのような事を口にし始める、と……そんな所に……

「ル……ルークさまあぁぁ――――ー！？」

息を荒げてフラフラになりながら此方へと歩みよって来る金髪の青年が現れた。

「だ……だめですよ、いくら人参が嫌いだからといって食事中に逃げ出すのは……」
「だっておれ、にんじんきらいだもん……」
「残したら食後のデザートは出しませんよ……」
「や～～！！」
「でしたら食べてください……でないと俺も公爵様に叱られますの

で……」

どうやらこの事態はルークの好き嫌いが引き起こした問題のようだ……それよりも……あの青年……ガイといったな……まさか、いや……だとしても何故この屋敷に……

「あれ？　ペール……この人はいったい？」

はは……昔会ったと言ってもまだ子供だったからな。覚えている訳ないか俺の事なんざ……

「シュザンヌ様のご病気を診察しに態々ダアトから遥々いらっしゃられたハーミット様ですぞガイ……失礼のないようにしなさい」

「そんな固くしないでくださいペールさん、身分としては“今の”貴方と同じですから普通に接してもらう方が楽ですから」

「……さいですか」

言葉の意を受け取ってペールは軽く頷いた。義理固い性格は年を取っても変わらないという訳か……

「ガイ！！何をこんな所で油売っているんですか！！」

「げっ……姉さん！！」

「まりぃ～♪」

ルークはガイの傍から離れて後から来たマリィと呼ばれるメイド服の使用人の方へとまた駆けて行った……ちょっと待て、さっきマリィって呼ばなかったか？　つまり、あの人は……

「失礼いたしましたハーミット様、弟が何か失礼な事を致しませんでしたか……？」

「いえ、私は唯見て居ただけだ……彼には何の否は無いからあまり怒らないでやってくれ」
「ありがたき御言葉をいただき感謝します……ほら、ガイ！！　直ぐに持ち場へ戻りなさい！！」
「わ、分かった！！　さぁ、ルーク様！！　行きましょう！？」
「やだー！」
「そんなこと言わないで下さいよぉ……（泣）」

未だ駄々をこねるルークを諌めながらガイはルークを連れて屋敷へと戻って行った。そして、その場には三人が残った……

「では……私めも仕事へ戻らせていただきます」
「……いや、少し時間を貰えないだろうか？」
「えっ……？」

ハーミットはマリィの傍へと近寄り、対峙し合う……その間、ハーミットは小さく呟く。

「生きて再び出会え、光栄です……マリィベル様……」
「……ッ！？」
「ですが、何故ですか……何故貴方方が仇でもあるファブレ家にて使用人を……」
「……」

おそらく……そのような存在の近くに居る目的は唯一つ……

――――復讐――――

「嘗ての領民として忠告させて貰います……こんな事は無意味です……」

「……なにを……」

「貴方方には他にやるべき事があった筈です……ホドの領主であられたガルディオス伯爵の意思を継ぎ、ホド戦争で溢れた難民達の為にもお家を復興して救済を施すべきでした……」

「……」

「前皇帝はもはや亡くなった身……恐れる心配は無い筈です……でも「苦しいのです……」……？」

「私達の全てを奪ったファブレが憎くて仕方がないのです……たとえ行動が無意味だとしても……私とガイの心はこの事を抑えきれはしません……」

「さらなる喪失を生むとしてもですか……？」

「ガルディオスはもう存在しません……ここに居るのはしがない庭師のペール……そして、ファブレの使用人として働く唯のマリィ・セシル、ガイ・セシルという仮面を被った復讐者でしかないのですから……」

この人は……幸せを望んではいない……ナイフを片手に隠しながら持ち、今かと復讐の機会を待ち続ける復讐者（アヴェンジャー）でしかないというのか……

「……それが貴方方の決断というのなら何も言いません……ですがこれだけは覚えていただきたい……貴方の判断によって救えた筈の命があったという事を……」

「……謹んで……その罪を背負わせていただきます」

「……では、さようなら……マリィベル・ラダン・ガルディオス様」

そして、何事もなかったかのようにその場を通り過ぎていく……俺には人の人生を決める程にまで資格など持ちえていない……医者は人間の命運を決めれるような存在とされるが……人が人の人生を勝手に決めるなどおこがましい事この上ないからだ……

―――――――――――――――――――――

ようやく屋敷の外へと出て、後は泊まる宿を探す事となった……
出てきた屋敷を振り返って見てみる……

「何を……どう間違えたというのか……彼らは……」

人は……何かを失った時、自身もまたその数だけ失う物が存在する……
それは怒りか……喜びか……悲しみか……
条件は何時だって虚無の中にて漂い続ける……

「だが、本当に彼らを狂わせたのはファブレ公爵……か？」

マルクトは超振動の実験資料隠蔽の為ホドを見捨てた……預言はホドを滅ぼす為の過程を作り上げた……いったい何が真実で何が正解なのか分からない……

「嫌な世界だよ……まったく……」

その言葉は夕日の沈む光景が映る海からの潮風と共に消えていく……

第67話（後書き）

ナッちゃんは今回出ませんでした……ナタリアファンの皆様申し訳ありません。

第６８話（前書き）

疲れがヤバい……背中が固くなりそうだ……

第６８話

暗く、冷えた石牢にて一筋の光が差し込み続ける……それを『彼』は掴み取ろうとして手を伸ばし続ける。それが無駄な事だとはよく分かりはせずに……伸ばした手は暗闇の中では映らずに途方に暮れる……

ガチャンッ……

その時、奥の頑丈な扉が開かれる……そこから二つの人影が近付いてくる。

「こちらです、導師イオン」
「ご苦労様です」

一人は白衣を着た男、そしてもう一人はあの導師イオンであった……

「こちらの一番ですが……失敗です、ダアト式譜術を扱える要素まで受け継いでおりません」
「……そうですか……」

『彼』は彼らの会話に耳を傾け続けるが全く意味が分からない……そう、『彼』はまだそれを“知らない”からだ。

「どうしますか導師イオン、必要のないレプリカなど邪魔以外他ありません……ですから、」

――――すぐさま処分いたしましょうか？――――

ショブン……ショブンって何？

「……仕方がありませんよ、処分いたします……ですが、その処分方法は僕に決めさせてください」

「ですが導師……」

「心配しないでください」

――――跡方もなく消しておきますから……――――

そして、白衣の男の方はこの石牢から出て行った。そこには二人だけが残る……顔の瓜二つな存在が……

「それにしても、見れば見るほど……そっくりに見えるね……お前というレプリカは」

レプリカ……それは僕の事？

「お前は僕の代わりとして生きるべくして作られた存在“だった”……けど、残念ながら不合格という訳だ」

イオンは手に第七音素を溜めていく。それは次第に光球と化して納まっていく……

「悪く思わないでね……目的に必要のない存在である以上、お前は消えなければならない」

そして、掌が彼の方へと向けられ……

「さよなら……」

まばゆい光が放たれた……

――――――――――――――――――――

おびただしい熱が石牢に籠る……石が焼け、煙を上げているからだ。その中にて……

――――彼らは存在して居た――――

「声を出すな……」

イオンは先ほど譜術を放った場所の横に居る『彼』の口を右手で塞いでいた。『彼』は何が起こったのか良く分からなかった。唯々おびえ続ける……

「さっきので導師イオンとして生きる為のお前は消えた……だから、お前はもう何でもない……」

ゆっくりと塞いでいた口から手を離し、立ち上がりだす。その次には右手を差し伸べる。

「来るんだ、お前の居場所を見つけてくれる人間に会わせてやる」

何を言われているのか全く分からない状態であったが……これだけは感じていた。

――――自分は生きていいのだと……――――

――――――――――――――――――――――――

「てな訳でよろしくお願いしますね♪」
「何がよろしくだこの緑頭……」

所変わって此処はハーミットの診察室である。そこにハーミットと導師イオン、そしてレプリカイオンが中に居た。

「アンタが援助している孤児院も問題ありな孤児達を引き取ってる場所じゃん、一人や二人増えたって変わらないでしょう？」
「その問題が大きすぎなんだよこのアンポンタンが！！」

ハーミットは頭をガリガリと掻きながら叫ぶ。そりゃそうだ、生体レプリカとしてのレオプリカイオンなど世間に見つかったらどんな事になるか嫌でも見当がつく。その為の対策を立てる為にどれ程時間を費やせばいいのやら……

「あ～、そろそろ執務の時間だから後頼むね♪」
「おいコラ逃げんな、イオン！！」

バタンッ――――！！

「この……良心の欠片もねぇ……」
「あ……あの……」

険悪気味なハーミットにレプリカイオンは恐る恐る声を掛ける。

「あ、すまんすまん……何か質問か？」
「実験の時間……そろそろ始まるけど……いいの？」
「……」
この子は……未だ自分が自由だとは実感してない……
だから、何をするのかは自分で決めずに他人が決めた事しかやろうとしない……
一種の洗脳だな……こりゃあ……
「ちゃんとやらないと……怒られちゃうよ……そんなの嫌だ……」
「……どんな風に怒られてたんだ？」
「前、おじさんと同じ白衣の人がやる事が出来ないと顔を……叩いてくる……」
「……そうか」
よく見れば、所々に傷や痣が見えている……余程酷い目に遭わされたんだな……体が今にも震えそうになってるじゃないか……
「よ～く聞け、君はもう前からやってた事なんてしなくていいんだ……」
「……どうして？」
「君はこれから新しくなるんだ……今までやって来た事なんて忘れて別の楽しみを見つけなければならない」
「たの……しみ？」
「あぁ、だから……いいか？君は『イオン』ではない……そうだな……」
そういや、さっきから君じゃ不便だな……だったら……
「『アクセル』なんてのはどうだ？」

「アク……セル……？」
「古代イスパニア語で「歩み出す者」を表す言葉だ、新しく生まれ変わる君に私から送る新しい名前だよ」
「僕の……名前……」
「もう一度言う、君はもうイオンじゃない……君として、『アクセル』として新しい生を歩み始めなさい……君にはその権利があるのだからな……」

――――だから、君を縛り付ける鎖など引きちぎろう――――

――――――――――――――――――――――――

それから3日後、アクセルはケセドニアの孤児院ファミリアへと送ってやった。7年の付き合いもあるその孤児院では院長のスヴェルさんも黙秘を約束してアクセルの正体を隠すという条件と共に引き取ってくれた。二ーナさんはまた新しい息子が……今年20になったアイラももう一人弟ができたようで嬉しそうだった。
アクセルの性格は内気で控えめな大人しい子だ……彼の持つ知識はレプリカ特有の刷り込みによって得られたものでしかない……心までは同じとはいかないからな……そして、アクセルには得意技があるそうだ……それは、記憶力が抜群に良いって所だ。孤児院の皆の名前も半日で覚えるという離れ業をやってのけたと届いた手紙に書いてあったな……そういや、髪もオレンジに染めて長さを短めに整えてみたって最近届いたっけなぁ……

「しかし、早くも始まっていたか……レプリカ作成が……」

実質、ダアトの権威は導師という存在があるからこそ強固になれる。だが、今後導師はイオンで最後と詠まれているから……しかもあと数年で……導師の居ないダアトなど玉のない鈴当然だ……必要

がなくなる……

「その為には導師イオンは“存在”しなくてはならない……」

だからこそのレプリカ作成ってな訳だな……倫理も人道もなにも関係ないってこった……今の導師イオンもダアトにとってなくてはならないが、一部では自分達の都合のよい導師イオンを作り出そうという魂胆もあるかもな。

「だけど思えば馬鹿な奴らだと思えるかもな……踊らせようとしている存在に実は踊らされ始めていると気づかないなんて」

だから、あいつは俺にアクセルを託してきた……己の導師としての地位を……いや、導師という存在をこの世から無くすために……あの子の存在はあいつにとってある意味切り札の一つとなりえるだろう……

さて、鬼札（ジョーカー）は逆転狙いの為に大人しくしてますかっと……

――――――――――――――――――――――――

「ですからであって、我々ローレライ教団は始祖ユリアの教えの元にて集い、努めていき続けたのです……そして……」

「長ぇ……帰りてぇ……」

「先生我儘言わないで下さいよ……一応これからオラクル騎士団の各代表として貴方もお言葉を出さなきゃならないんですから」

やぁ、元気にやってるか？あれからしばらくして第２５６回の新人生入団式を行う事になった。詠士の一人が長ったらしいどこぞや

の校長みたいなスピーチが延々と続いてるのが辛いとです……

「そういや今年は治癒士が少ないそうですよ先生、段取りとかどうしていきますか？」

「まぁ、そうだな……先ずは希望の科をアンケートで分別していくか」

ディノと今後の活動の予定を放してると、詠士がこちらを向く。

「では、治癒師団長ハーミット……新しく教団の門を叩く彼らに激励の言葉を」

「あ～、はい……」

短い階段を上り、教壇の場所へたったハーミットは何を話すかを少し考え、それから口を開き出す。

「え～治癒師団の顧問であり教官を務めるハーミットだ……此の教団へ君達が何を胸に秘めて入ったかはこれからもはっきりとさせて居て欲しい……これからの時代は激しい時期になるかもしれない……その変化に取り残されたら終わりとなる。だから、志を抱き続けろ……もしも道を間違えたなら自分で気づくか他人が気づかせてくれるかを進むか待つかどちらか選べ……そして、生き急ぐことはやらないように……世界は自分の為には動いてはくれない……ならば、お前達が世界を動かすくらい強くなれ！！」

パチパチパチパチッ！！！

……こんなもんでいいかな……激励ってのは？

「あ……ありがとうございました……では次は……」

―――――――――――――――――――――

そんな中、執務室ではイオンが唸りを上げるかのように書類を眺め続けていた。机に肘を付け、悩み続ける……

「こんの……預言盲信者共めが……」

それは、オラクル騎士団へのキムラスカからの戦争の介入を求める申し出であった……兵の数がマルクトより少ない為、その分を補おうと支援金を払ってるのをいい事に命令的な提案を出してきたのだ……

「ダアトは傭兵ギルドか？……ふざけないでよ……」

場所はケセドニア北部……マルクトはあの懐刀、死霊使いと名高いジェイド・カーティスも参加するとされている。至急要望に応えたり……

「……まずい時期でこんなの送りやがって……」

けど……断る訳にもいかない……ダアトの責任者として……最低限の犠牲でダアトを運営出来るようにしなければならない……

「……ふん」

ダンッ！！

勢いよく印を押して決断する……この時期で出しても帰ってこれそうな部隊といえば……

「借りは作る気は無いけど……ヴァンに任せるしかないか……」

その決断が、後の“彼女”の大切な存在を奪う事になろうとは…

…此の時イオンは忘れていた……

第６８話（後書き）

一番目レプリカイオンを今回は生かしました。原作ではオリジナルイオンが自ら処分して殺したそうですね……ちなみに、名前の意味は捏造ですのであしからず……

第６９話（前書き）

この頃雑になってきていますね。
早くなんとかせねば！！

第69話

ケセドニア北部にて戦争が勃発した……その情報で俺は焦った。なんせ、ケセドニアは俺の家族達が住む町だ、その近くの地域で戦争をやるという事は火種が飛び散るという事だ……

「イオン、キムラスカ側はなんて言ってるんだ？」
「要約すれば“感謝する”だってさ……攻め込む気満載だよあの国は……」
「その取り決めはインゴベルト王が全て担ってるんだよな……」
「……いや、大抵がモースの預言進言で事を進めてるって感じだよ……あの豚何やってんだよ……内部干渉上等って訳？」
「国が国だから仕方ない気がするが……諸悪の根源が奴でもあるから余計太刀が悪い」

イオンとハーミットは互いに向き合ってこの戦争についての議論を述べ合う。この戦争をいかに早く終わらせるかの利害の一致でこうしているという事である。

「そういやさ……キムラスカ側ではナタリア王女が慰問しに来たって情報が入ってるけど、あの女王様やってる事が少し違うでしょ……」
「まぁ、本人は民の為としてやってる考えは分からなくもないが効果は結果として唯名を広めるだけにしかならないんだよなぁ……」
「どうせなら内政で活躍しろって……とはいっても、王位継承権を持ってる人間だとしても本格的な行政に入らせてもらえるかどうかわからないね」
「そこんところ、あそこの国王が余計なおせっかいで遠ざけてるのかもな？」

本人達からすれば聞かれるとまずい話も混ざってたりもした……

「けどね、たぶんこの戦争マルクトに軍旗上がるね、なんせ死霊使いジェイドが出陣してるし……」

「……あれに勝てるのはオールドラント上数えるくらいしかいないからな……」

「「かったるい……」」

二人揃って深い溜息を吐く。まだまだ前途多難になりそうだ……

「……ねぇハーミット、実はマルクトに軍旗が上がるって言ったのにはもう一つ理由があるんだけど知っておく？一応国家機密だけど……」

「……預言か？」

「見当はついてたようだね……秘預言としてこの戦争がキムラスカの負け戦だと詠まれているんだ……しかも、今回投入されたダアトの兵が全滅だというのもおまけにしてね」

「何……！？」

「たぶん心配ない、あいつはそう簡単にくたばる奴じゃないさ……一応教えておいたからうまく回避する所はする筈だし」

「けど、何人かは犠牲者は出るんだろ……？」

「否定できない……」

念のため、あいつの無事を祈っておこう……しかし、こうもたやすく預言は入りこむな、大きな出来事には特に……

「それじゃあ今度は俺から話をしよう、秘密裏にしたお前の健康診断の結果だが……」

「……」

「残念ながら、“黒”だ……しかも腎臓の部分だ」

「……改めて聞くと気が滅入るよ本当に……」

実は、前から何回かイオンの体を調べてきたんだがＮＤ２０１５になって遂に変化が起きた。腎不全が左腎に起こり始めている……ちなみに、腎不全とは腎臓のはたらきが正常の３０％以下になり、体内の老廃物や余分な水分を排泄できない状態を言う。その結果、それらが毒として体に溜まり、様々な障害が生じてくる。

こいつを治すには透析か腎移植が必要だが……あいにく人工透析機などまだ開発できてないし、腎移植もドナーという医療体制も作られていない。だからといってお手上げと行ったらお終いだぞ？結論として、片側だけ悪いのだからそれを摘出すればいいのだ。腎臓は一つだけでも十分に機能するからな……

「この頃お●っこが出なくて不安だったから原因が分かればいくらか和らいだよ」

「なぜ伏字にするかは置いといてと……手術日は預言で詠まれた本当の日付よりも早い２ヶ月前にて行う」

「ちょっと待ってよ……やる場所はどうするんだい？　まさかダアトでやるって訳にはいかないよね？」

「そこん所は当日のお楽しみだ、用意は万端にしてあるさ」

「……まぁ、信じてるよ……」

さて、一通り話が済んだ所で……

「やるか……」

「やろうか……」

「「いざ、樽豚に仕返しを――――！！！」」

その後、自分の部屋に帰って来たモースが突如として起こった爆発により全治1週間の怪我とアフロ姿になって発見されたとか……

――――――――――――――――――――

それから俺は色々あって表の訓練所に出ていた。今回も銃の手入れと射撃訓練である。この頃さらにでかくなった狙撃譜銃が訓練所の片隅をテリトリーとして占拠してますね、はい……しかも煩い、一発撃つ度鼓膜が痛いですよ……その為耳栓をこの頃付けるようになりましたね……

「見敵及び（サーチアンド）……」

ズドオォォン――――！！！

「破壊（デストロイ）！！！」

どこぞやの褐色の王立騎士団の当主の命令言語が様になってきています……おかしいな、これは何かの陰謀か……？とにかく、改造されにされ尽くした狙撃譜銃の威力は狙われた的の中心を射るどころか木端微塵に吹っ飛んだ。

「あ……あの、先生……」

「なんだ……？」

「お願いですから別の所で訓練してくださいよ……毎回耳が痛くて此方がやってられませんから……」

兵士の一人がハーミットの狙撃譜銃の音に苦情が来る事も毎回でもあるが……

「別にいいが……その結果ダアトの外にある木々とかが穴だらけになる可能性大だが？」
「なんという環境破壊者！？」

突っ込みどころ満載な男なのは相変わらずであった……

「あ、センセ～！！」
「んっ……？」

その時、何処からか自分を呼ぶ声が奥から響いてくる。声からしてどこか聞き覚えのある声ではあるが……どこからだ？

「こっちですよこっち！！」
「ん……あら……えぇ！？」

よく見ると、訓練場で集まっている新兵の中でピョンピョンと跳ねている少女が目立って見えていた。そして、その正体がなんとアニスだったのだ。

「え……アニスちゃん！？」
「は～い？アニスちゃんでぇ～す！！」
「ちょっと！！なんでそこに居るんだい！？」
「私、実は今月から神託の盾騎士団に入団することにしたんですよぅ！！パパとママの生活の助けになるためにもね！！」

えぇ子や……ホンマえぇ子やよ……
しみじみと彼女の優しさに心打たれるハーミットであった……

「また困った事があったら診察室で相談しに来なさい、何時でも待

ってるからな～！」
「は～い！！」

それからアニスは教官に少々慎むよう注意されてから自分の持ち場へと戻って行った……これからの彼女の成長に期待しておこう……

――――――――――――――――――――――――

そして、教団に夜が訪れた……殆どの者は家か寮に戻って心身を思いっきり休める時間帯である。そんな時にて此の二人は自重をしないという訳だ……

「うぅぅ～メリルウゥゥゥ――――――――！！！」
「うっしえぇ～ラルゴ～！！！今日はおたぎゃいのまにゃ娘のはにゃしに花をさかせようじゃにぇーか！！！あっひゃっひゃっひゃっひゃっひゃ！！！」

「待て！！ラルゴ、ハーミット！！何故俺が付き会わなきゃならねぇんだ！！」

ちなみに、前回はディストだったが今回はアッシュが絡まれていた。

「アッシュウゥゥゥ～～～！！！貴様俺の娘の婚約者だと言い張るそうだなあぁ～～～！？」
「あ……いや、王族としてそうなっているが……」
「うおぉぉぉ～～～！！！認めん！！認めんぞおォォ～～～！！こんなデコッパチ小僧なんぞに俺の大事な大事な大事な（ｒｙ）メリルは渡さあぁぁぁん！！！」
「誰がデコッパチだ！！この屑があぁぁぁ～～～！！！」

アッシュは酔っぱらったラルゴに一発喰らわせようとするがその手を後ろからハーミットに関節をきめられる。

「あだだだ――――！！！ハーミット！！何しやがる！！」
「ほらほらそんにゃ目くじら立てるなよ～♪ついでぇだからおみゃえも飲みぇ～～！！！」
「や……やめろ！！俺は酒なんか――ガボガボガボ！！！」
「はっはっはっは！！！いいぞいいぞ～！！一気だ～♪」

ちなみにこの時アッシュに飲ませたのはウォッカである……よって、アッシュ……

「がぼっ……！！！」

見事に撃沈である……

「よえ～よえ～！！！そんなんじゃこの先やってけねぇぞ～！！！」
「ハーミット！！まだまだ夜は長い！！ならば……」

「「勝負じゃ～～！！！」」

翌日、教団内の酒場にてワイン樽が二つ空となって転がっていたとか……

こうして、またしても教団の伝説が一つ増えたという事だ……

「ふぬおぉおぉおぉ～～～……」

「先生、早く仕事終わらせてくださいよ」

「ま……待てディノ、せめてこの二日酔いが鎮まるまで少し「駄目に決まってるでしょ」……（泣）」

後にて、二日酔いに悩まされるのはお都合兼自業自得なのであった……

第６９話（後書き）

アニスは自分から教団で働くようになりました。理由は……皆様のご想像で♪
次はリグレット来襲です。

第７０話（前書き）

英検が迫ってきています……二次試験受かるといいとです……

第７０話

戦争が終わった……

セシル将軍率いるキムラスカ軍とカーティス大佐率いるマルクト軍との戦績はキムラスカ軍の壊滅的状態というマルクトの勝利で終わった……

介入した神託の盾騎士団は１００人も居たのが１０人しか残らなかった……だが、生きて帰って来たとしてもその何人かも今後剣を握れるかどうかの状態も怪しい。

もちろん、その中にはヴァンも居た……体中傷だらけにし、治療はしたが大きな傷跡が痛々しいくらいに残っている。

「戦争は……奪う事しか出来ないのですね……」

「そうだな……たとえ戦いで得た物などいずれ更なる強者が現れて再び奪われる……」

その間、二人で戦争時について静かに語り合っていた……お互いかつて奪われた者だ……なのに今度はヴァンが奪う者に廻る事になるとはな……

「今は眠れ……鎮痛剤で痛みをしばらくは和らげてくれる」

「申し訳ありません……」

この戦争も預言として教団も関わり、ヴァンの戦争行きを勧めた。イオンは色々思う所があったが、殆どの詠士がそれを当然だばかりと好き勝手言ってたそうだ……そして、見事預言成就を果たしたヴァンには謡将の地位を授けると勝手に決定したそうだ。

冗談じゃねぇよ……そんな物貰う為にヴァン達は死に掛けてまで戦争に介入してたわけじゃないんだよ……それに、俺の団員も死んでるんだぞ！！

人の命が消えたというのに公に偉い偉い！と言ってると同じだ！侮辱してる事にしかならん！！

……取り乱したようだな、とにかく……ヴァンは謡将としての地位を上手く使ってやれる事も幅広くなったことでもある。でも……仕事を中途半端にしかしないのは相変わらずなんだがな……（怒）

そして、２週間後……とある事件が起こる……

――――――――――――――――――――――

Ｓｉｄｅ：ヴァン

不本意だが、謡将となった今私は別にやる事も増えてきた。表面上軍の最高司令官としてのモースに代わって権限により裏で出来なかった事もだ。調錬へ行ける回数も度々減ってきている気がするが……まぁ仕方あるまい。あと三年で全てが始まる……時間はまだあるのだから……

ヴァンは教団へ詠士としての会議に出席するべく道を歩き続ける。周りにいる教団関係者や兵士達は彼の姿を見るや頭を下げたり敬礼の形を取ったりと様々であった。

だが、そんな周りの風景とは合わない人影が後ろから近づいてくる……麻布のローブを着込んだ金髪の女性がゆっくりとヴァンへと除々に……

「……私に何か用かな？」

その気配を前々から感じ取っていたヴァンは人目が無くなる場所へ入ったのを見計らって振り向かずに声を掛ける。いきなりの声に多少驚いたが女性は平常心を取り戻して手をローブの内側に潜り込める。

「ヴァン・グランツだな……」

「いかにも……殺気を漂わせながら私の跡を着けてくるのは何故だ？」

その瞬間、ヴァンは剣を抜く……それと同時に女性も懐から何かを取り出してそれをヴァンに向ける……それは譜銃だった。

ドンッ――――！！！

「……初対面の相手に譜銃を撃ち込むなど関心せぬな。」

「弟、マルセルの仇！！今ここで取らせてもらうぞ！！」

しかし、それに慌てた様子もなくヴァンは剣で譜弾を弾く。それに舌打ちをして女性は譜銃を撃ち続けながらヴァンへと迫っていく。

「やあぁぁぁぁ――――！！！」

「……マルセル？」

ヴァンはマルセルという名に覚えがあった……たしか、入団したての頃から師団で己を崇拝してた騎士団員がいた……その団員もあの戦争について来ていた筈だ……私は教団からの秘預言の為か不本意にも彼に話した言葉がある。

――この戦いに参加すれば教団を改革できる――

彼は幼い頃両親を亡くし親代わりだった姉に恩返しするべくして教団に入ったと言っていた。だが、今の教団には何か引っかかる所があり……それを鬱れていた筈だ。そこを利用して私はこの戦争は部隊が全滅しなければならないという預言にこの後の計画の為表面上成就させるべくして彼の心を突いた……

よって、彼は戦場にて散った……

ガキィィィンッ――――!!!

いつの間にか女性はヴァンの近くまで迫っており譜弾ではなく譜銃に付いている銃剣でヴァンの首元を狙おうとしたが、長剣の一撃によってそれは叶わなかった……その衝撃は女性を道端まで譜銃ごと吹き飛ばす……しょせん女性の力では大の男には敵わないという事だ。

「きゃあっ……!」

「少しは武器の使い方を心得ているようだが……そのような実力で私を殺そうなど甘く見られた物だな。」

「くっ……!」

女性は吹き飛ばされてもなおヴァンの方に顔を向けて睨み続ける。ヴァンは大方予想はついていたが、女性に何故襲って来たのかを聞く。

「お前は……預言の事実を知っててもなお弟を死地へ送った!!全滅するという預言をしってても……!」

「……一応聞かせてもらうが、それをどこで聞いた?一介の教団兵

が秘預言を調べるのは死罪に相当するぞ？」

「だから何だっ……私の元へ送られて来たマルセルの形見である日記にお前の事が書かれていた……弟は知っていたのよ！！ヴァン、お前が自分達を殺す為当然に戦争へ来たのを……！これは私は独自で調べ上げ辿り着いた答えだ」

「……そうか。」

納得した……なるほど、日記か……たしかあの男は日記を書くのが習慣であったな。それに私の事が真実と共に書き記されていたという訳か……

「日記の最後には……弟の最後の願いが記されていたわ……「死にたくない」……血で滲んだ文字で……」

「……」

「私は預言が憎い……だが、弟が死んだ羽目にさせたお前の方が余程憎い……！」

「預言が憎いか……」

女性は再び譜銃を構え、引き金を引こうとする。だが、今度はヴァンは剣を下ろしたままであった……

「……！！なぜ構えない！！」

「無駄だ、お前に私は殺せない……人を憎みはしても、殺す覚悟を持たぬ身ではな……」

「黙れ……！！」

現に女性の手は震えていた……最初の初撃は引き金を引いたが実際それは急所等狙っていなかった……精々怪我をさせてやるぐらいしか考えてなかったに等しかったからだ。

「それに、もし引き金を引くのなら覚悟を決めるが良い……お前は何時だって“狙われている”」

「う……ぁ……あああああああ――――！！！」

そして、譜銃の引き金は……

ズドォォォウゥン――――！！！！！

引かずに終わった……いや……

――――引かさせずに終わった――――

「ぐぅぅぅ……！？」

女性は右手を抑えて悶絶する……正体不明の衝撃により持っていた譜銃が遠くへ飛ばされ、その余波で手を怪我したそうだ……おそらく指の骨を1，2本は折られただろう……

そして、ヴァンは傍へとよって女性の首を掴んで静かに語りかける……

「はな……せ……！」

「私が……預言が憎いか……？」

「……ッ！！」

「私とて預言は憎い……だが、なぜその教団へ所属しているかは理由があるのだ。」

「何……を……」

「預言の消滅……」

「……！？」

「その為に私はここで死ぬわけにはいかぬ……だが、今回は貴様の意思を尊重させてやろう……私の元に付くが良い」

「なっ……！？」
「つまり、いつでも貴様は私を殺す機会を持てるという事だ……これ以上にない提案であろう？」
「……後悔するぞ？……私は……貴様を必ず討つ」
その顔には涙が浮かんでいた……悔しい……今の私にはこの男には敵わないのだと……敵とみなされてもいないのだという事実によって……
「お前が私を消すのが先か、私が預言を消すのが先か……実に面白い賭けだ」
ヴァンは女性を折れてない手の方を掴んで起こす。
「お前、名は……？」
「……ジゼル……ジゼル・オスロ――……」
「ならばこれからは『リグレット』と名乗るが良い……痛恨の意味を冠するその名を以て私を殺しに来るが良い……何度でも私はお前を待っているぞ……」
そう言って、ヴァンはジゼル……いや、リグレットの元へと去っていこうとする。
「……ではリグレットよ、最初の命令だ……先ずはその手を治療してこい」
「……！？」
「私を殺す人間が怪我持ちなどと無様なままでは私が困る……何、心配するな」
――ここには世界最高の名医がいるのだからな――

「まったく、無茶をしたな君は……」
「……」
そして今、リグレットはハーミットの診察室を訪れている。彼も責任があって丁重に彼女を治療することに専念している。
そう、最後に彼女を襲った衝撃はハーミットの狙撃によるものだったからだ……彼は銃だけを弾く為に診察室の窓から狙撃をしていたのだ……それをヴァンはいち早く気づき、彼に背中を任していたという訳だ。
「あの時俺が止めてなきゃ君、死んでたかもなぁ……ま、あいつの事だから何もしなくてもお前を生かしていたかもしれないが……」
喋りながらも的確な治癒譜術でリグレットの指の骨をつなぎ合わせている。
「よし、これでいい筈だ……半日はむやみに動かすなよ？」
「……」
治療が終わっても何も言葉を発せず、リグレットは席を立って部屋から出て行こうとする。
「そして、また再び挑んでくる……か」
「……ッ！？」
「やめとけ、今の君なんかじゃあの男に傷一つつけられやしないさ……出直してくるんだな」

そういいながらハーミットは診断表にペンを走らせて必要記述を施していく。

「……貴方には関係ない」

「い～や、関係あるさ……あいつとは友人だからな、その友を殺そうとするのなら……」

――――黙っちゃいないぜ？――――

ゾワッ……

「……ッ！！」

突如として発した殺気による目を見開く。リグレットはその場に硬直してしまった……

「君、弟の為にアイツを殺すなんかほざいてるけどさぁ……」

その時、リグレットには何が起こらなかったか分からなかった……目の前の男が一瞬消えたかと思ったらいつの間にか体に強い衝撃を受けて己がうつ伏せにされているのだ。

「あがっ……！？」

「誰かの為だとか悲劇のヒロインでもなるつもりか……誤魔化すな、結局はお前は自分の為にしか動いていないんだよ……自分が耐えきれないから態々理由を作ってその元へ立ち向かう……ほぅ、大した覚悟なもんだ……」

その眼は冷たく、何処までも深くリグレットを見据えていた……

「アイツを討つだと……？ふざけるな……」
「うる……さい……」
「いいや、言わせてもらうね……アイツはお前以上に失った物があるからこそ強くなったんだ……“たかが一人”失ったお前にアイツと対峙しあえる資格など無い！」

リグレットは“たかが一人”という言葉に反応してもがき始めるがいかんせんビクともしない……

「……お前はまだ幸せだよ、“誰かのせい”で家族を失ったんだからな……」

アイツは……“自分のせい”で全てを失ったに等しかったのだから……

「たった……だったのよ……」
「んっ……？」
「たった一人の家族だったのよ！！マルセルが死んだ私にはもう何も残ってないのよ！！寂しく生きていくなんて……そんなの……」
「……」

リグレットは泣き続ける……それは家族の死を悲しみ続ける……唯の一人の人間だった……

「だったら強くなれ、誰にも文句を……否定されても堂々と胸を張って誇れる己になるがいいさ……」

ハーミットは抑えていた体から手を離す。だが、未だリグレットは泣き続けていた……抑えようとしても零れてくる涙とともに声を

上げて……

「そうすればアイツは初めてお前と対峙してくれる……ま、俺としてはアイツが認めようが認めまいが勝手にもぎ取ってやればいいと思うが……」

そして、ハーミットは診察室から出て行った……

あの子に必要なのは……どうする事か……その方向をはっきりさせる決断だ……

だから……今は悩め……

時間はたっぷりあるのだからな……

第７０話（後書き）

リグレット頑張れ……彼は心のそこでは君を応援しているよ……

第７１話（前書き）

英検、全問答えられた……これで２級勝つる！！

第71話

今日もまたダアトに日が昇り始める。それぞれが起床し、持ち場へとすぐさま付くように厳守されている此処にとっては遅刻など愚の骨頂であろう……しかし、そんな立場に当てはまらない人物も早く起きる事がある。

「どうしよう……」

いつもより早く起きたこの人物は目の前の光景を見て愕然としてベッドの上に座っていた。

布のシーツが敷かれたベッドの上に出来た模様のようなシミ……それはしっとりとしていて……生乾きに近い……

「アリエッタ……やっちゃった……です」

そう……“おねしょ”であった……

彼女は導師守護役となってからはハーミットの部屋で一緒に寝るのは止め、自分の個室を配置された為に基本一人生活で活動している。

まぁ、それが幸いとなって未だ誰にもバレてないのだが……

「うぅぅ……」

若干涙目になりつつあるアリエッタ、嘗て……こんな事があってハーミットにバレた時の記憶が思い出される。

《……あれほど寝る前はジュース飲むなといっただろ?》
《はい……》
《約束破って漏らしたお仕置きだ……罰として……》
《ゴクリ……》
《此のおねしょシーツを旗代わりにして旗立てに飾る様にして干す事にしよう、もちろん街中で♪》
《いやあぁぁぁ――――!!!》

悪夢だった……あれは本当に悪夢だった……何旗かあるダアトの国旗の中に一つだけ何かの染みが付いた白いシーツがヒラヒラと……あの時だけは己の父親が悪魔以外に思えない日々が続いた。
まぁ、そのお陰でそうなる事は無くなったと思ってたのに……再降臨という訳だ。
とにかくこれをどうにかして証拠隠滅を図らないと……

「えぇっと、それなら……」

――――――――――――――――――――――――――――――

「アニス、手伝って……です」
「なんでじゃいワレ!!」

当然怒りだすアニスであった……ここは少し離れた一般兵士の寮の一室である。導師守護役より品は落ちるが暮らすには十分である。

「だってぇ~……!」
「一応言っておくけどアンタ立場私より上だよ? なのに……なんで“おねしょ”?」
「うぅぅ~~!!!」

アリエッタ、アニスとは個人的には友人関係で通っているが此処ダアトではそんな理屈は通す訳にはいかない……一応先輩にあたるアリエッタが後輩のアニスに自分の失態を隠蔽するべく訪れる。なにかとシュールである……

「パパにバレたら恐ろしい事が起きるです！！」

「え～……娘を溺愛することで有名なあの先生がアンタを叱るなんて考えれないんだけど……」

アニス、確かに間違っちゃいないが……あのＵＳＤはただ単に叱る頻度が少ないだけで叱り方のレベルが反比例して高いのだ。一応義父として彼もそれなりに躾は大事にしているぞ？

「でもぉ～！！」

「あ～わかったわかった！！全体で洗濯物を纏めて洗う場所があるからそこ放り込みなよ！」

「でも……シーツは申し出なきゃ配給してくれないもん……その生活用品の流れを管理してる大本……パパだもん……」

「……だめじゃん」

そうである……一番の問題がそこである。一応言うが全ての管理をあの男は律義に最終チェックをするような奴である。なので一つでも間違いがあればそこを調べに来るだろう。

「……よし、じゃあこうしようか？」

「えっ……？」

「パクっちゃおうよ♪」

―――――――――――――――――――――――――――

Ｓｉｄｅ：ハーミット

「ディスト、どうにかなんない？」
「あ～な～た～は！！まったくなんで何時も何時も厄介な大事を持ってくるんですか！！」

やぁ、皆元気か？ハーミットだよ！今ディストと相談してシュザンヌ夫人の為による人工心肺を譜業応用で作れないか相談してる所だ。

「音素の出力は場所によって異なりますからねぇ……この機材はこうするとけっこう喰いますし……一定の圧を加えて流れを作るにしてもそんな複雑なデータなんてどうやって手に入れるんですか……」
「……じゃあ心電図という物を作ってみるか……」
「しんでんず……？何ですかそれは？」
「人間の体には微弱ながらも電気を以て機能が働くように出来てるんだ、それは心臓にも言える事でその電気の発生頻度を音の波として表して心拍を調べるっていうものなんだが……」
「その音の波をどう表すかが問題ですねぇ……」

そうだ、モニターという物を開発しなければ心電図は完成しない……今までは酸素の濃度による血の濃さ、瞳孔の見開き方、手探りでの心音でやってきたが……それにも限界がある……

「くそ……こんな時にアイツがいてくれたらなぁ……」
「誰ですか……あいつって？」
「クロード・ラウル……物理学と工学を用いて音素を使わずに動かせる道具を生みだそうとしている周りの譜業技師からみれば変わり者とされるやつだ……」
「譜業技師なのに譜業を作らないというんですか！？」

「……だが、優秀な技師だ……タルタロスに付けられてる原動機……あれは昔アイツが発明したんだぞ？」
「んな……！？」

ディストにとっては驚きだ……タルタロスは彼にとって譜業の宝庫と呼べるくらい最新型の物が搭載されてるのだから……その中でも最も重要な原動機を作った人物となると彼にも興味が湧く。

「すばらしい！！あの画期的な譜業を作った人物は私も会ってみたいですよ！！」
「けど……アイツはそれを自分の罪として悔いている……」
「……は？」
「あれは元より一般人の移動手段として頼もしい活躍を担う発明であるべきだったものだ……それをマルクトは軍事転用して使った……本人の主張も無視してな……」
「……」
「そんな事もあってかアイツは譜業から手を引いた……それで今に至るという訳だ」
「それは……辛いものですね……」

ディストにもそれは共感できた……向かう信念の為に発明した自分の息子ともいえる発明が全く違った方向で扱われる事になるなんて……自暴自棄になるのも仕方がない。

「俺がアイツに顕微鏡の開発の依頼をしたのももう一度アイツに生き甲斐を見出してほしかったからだ……まぁ、才能があるから頼んだのも事実だがな……」
「……あなたは本当にすごいですよ……」
「……なんだ急にあらたまって？」
「あなたは体だけを治す訳ではありません……心も治してしまうん

ですから……」

「……心は俺が治したんじゃないさ……彼ら自身が治したんだ……“自分は何をすればいい？、自分はどうしたい？”ともう一度己自身を見つめ直してもらうようその手伝いを俺はしたにすぎない」

「でも、そんな風にさせるからあなたは凄いんです……」

「よせ、過剰評価だ……人間は元より強い、それに殆どの人間は気づいていないだけなんだ……ただそれだけだ……」

ディストはハーミットの器の大きさに関心していた……このような事が言える人間が他に何人いるだろうか……私も、こんな男のように胸を張って生きる事ができるだろうか……いや、ようするに胸を張って生きろ……彼ならこう言うだろう……

「よし！では続行です！このディスト様の華麗な頭脳で直ぐにもあなたの望みを叶えてあげましょう、ハーッハッハッハッハ！！」

――――――――――――――――――――

Ｓｉｄｅ：リグレット

「失礼します、閣下……」

「うむ、入りたまえ」

私はこの男の副官として下に付く事になった。周りの話を聞くにどうやら強引に席を埋め込んだそうだ……

「これからの予定ですが……まず遠征派遣に関しての……」

この男は私をどうするつもりなのか？殺す？いや、だったらこんなまどろっこしいことをする必要は無い……ならば、私を引き込もうとするか……

「ならばカイツールではラルゴの団員を廻そう……そしてケセドニアでは……」

あの医者は言った……お前はまだ“興味の対象”でしかない……故に、敵にはならない……だからといって味方にも……ようするに覚悟を示せと言った。

「……ット」

マルセル、私はこの男を最終的に殺してもあなたの為になるのかしら……この頃分からなくなってきてしまった……何を目指せばいいのか……

「おい、リグレット……」

人生の目標は命の期限がギリギリになる時に果たせる物がいい……彼はそう言ったが……では私はこの男が死ぬまで憎み続ければいいというの？良く考えてみるとそれは矛盾してるのかもしれない……人は最初に意識を向けた物以外に向ける物が出来ればそれは次第に薄れていくと……

「リグレット！！」

「……！！……ハイ！」

「どうしたのだ……先ほどから黙って……どこか調子が悪いのか？」

「い、いえ……なんでもありません、失礼しました……」

だが……私はこの男を許す訳にはいかない……誰がどう言おうとも……

Ｓｉｄｅ：アッシュ

「ふっ……！！」

黒髪の男が訓練場で剣を振り続けている……朝早く誰もいない訓練場を独占して……

「……こんなんじゃねぇ」

こんな物ではヴァンには敵わねぇ……俺は強くならなきゃいけねぇんだ……キムラスカからの義務から逃げ出した以上……俺は責任を取らなきゃいけねぇ……

「俺は……アッシュだ……」

アイツは言った……燃えカスというチンケな意味の名で生涯を終えるなと……ルークを捨ててゼロから始めた時、俺は俺としての生き様を世界に刻んでやろうと……

レプリカは……アイツには重荷を背負わせるかもしれない……だが許してくれ……来る時が来たらお前は何者かを知る事になるが……その時は……

「アッシュか……朝から精が出るな」

「……ラルゴか」

奥の通路から少しラフな服装をしたラルゴが現れた……おそらくこれから兵装をしに行くのだろう……

「お前がそんな服装をするなんて珍しいな……どこか行ってきたの

か？」
「……ちょっと……海へな……」
「海……？」
「シルヴィアの墓がバチカルにある以上、俺はアイツが亡くなった場所である海でしか墓参り出来ぬ身なのでな……」
「……すまねぇ……無粋な事を聞いた」
「いや、いいんだ……」

ラルゴはバチカルを追放された身だ……故に、妻の墓へ直接バチカルへ墓参りすることなど許されない……ごく稀にバチカルへ任務として行く事があるが……忙しい為に墓地の所まで行く時間を取れないのが殆どだ……なので、ラルゴとしてではなく“バタック”として墓へ赴いた経験が皆無に等しいのだ。

「ラルゴ……聞いていいか？」
「なんだ……？」
「ナタリアに……会った事があるか？」
「……」

アッシュはナタリアが本物のナタリアではなく、ラルゴの実の娘であるメリルであると知っている。妻と死別し、娘とも引き離されたラルゴだが……彼女の方は今も生きている。

「メリル……いや、ナタリア姫が人前で姿を見せるのは慈善活動として下町に赴く時か……祭り等の式典で城から手を振るような時ぐらいしかないからな……未だ一目見た事もない……」

ラルゴはメリルとの“これから”をヴァンの同志になった時に捨てた……未練がないと言えば嘘になるが……なるべくメリルの事を想わないように心を固くしてもいた。

「だが、あの子はナタリア姫として生きてきている……過去の亡霊が口を出す訳にもいくまい……」
「本当に……それでいいのか？」
「くどいぞ……アッシュ……」

アッシュは悟った……ラルゴは……ヴァンの計画の為に全てを捨てる気でいる……その意思を俺のような半端物がどうこう言えるようなものではないのだと……

「……久しぶりに試合、頼めるか？」
「……そうだな、お前がどれ程上達したか気になるな……よし、用意してこよう」

黒き獅子は今は静かに……吠える時が来るまでは……

「だが、仮に全てを捨てても貴様とメリルの婚約は認めん！！」
「うるせえぇぇぇ――――この屑があぁぁ～～～～！！！」

後に、訓練場で嵐のような試合をしている二人組であったが……

ちなみにあの二人だが……

「ふんぎゃあぁぁぁ――――！！！」

バシンッ！！バシンッ！！バシンッ！！バシンッ！！

「アニスちゃん……君だけは信じてたのに……」

「悲しむんでしたらカルテ板でアニスちゃんのお尻を叩くのは「バシンッ！！」ふぎゃうっ！！！」

あの後、偶々洗濯場にいたディノに“おねしょ”の件がばれ……即効ハーミットに通報されてしまったのだ……ハーミットが治癒師団長として所属しているのは知っていたが、まだその部下であるディノについて覚えがなかったアニスの落ち度である。まぁ、アニスの方はとばっちりだが……

「おのれぇぇぇ――――この脇役助手！２Ｐ医師めえぇぇぇ――――！！！」

「先生、あと２０回追加しといてください」
「ラジャー」
「ごめんなさい！！だからもう尻叩きはらめえぇぇぇぇ――――！！！」

そして、もう一方は……

「ひぐっ……もう無理です……」
「だめ、食べなきゃ罰にならないでしょ……ハーミット先生からの伝言なんだから」
「うぅぅ～～パパのばかあぁぁぁ～～～～～！！！」
「……悪口いったら追加するよう言われてるから……ブロッコリー追加ね……」
「わあぁぁぁ～～～ん！！！」

アリエッタは自分の嫌いな野菜によるフルコース（大盛り）をじっくりと味あわされていた……しかも、監査付きで……

一応言うが……

治癒師団……鬼畜が多すぎませんか……？

第７１話（後書き）

ぼのぼの感がこの頃足りない感じがしたのでこんな話になりました。

第７２話（前書き）

ぼのぼの第二弾です。

第72話

「いやぁ、久しぶりだな此処に来るのも」
「お仕事がお忙しいそうですが……大丈夫なのですか？」
「そこん所は心配ないさ、部下の奴らも俺の技術についてき始めてきたから交代制でも安心して任せられる」
「へぇ～～」

今回は孤児院ファミリアに訪れていたハーミット……思えば年を随分と取ったものだ。
子供だった子達も成人となり、自立して行った者もいて……随分と変わった……
今の所大きな戦争は無いが、それでもこの孤児院では新たな入院者が現れる。だがな……その中にもふざけた親の決断で入院した子もいるんだよ。この孤児院、俺が支援金を出していてそれなりに手持ちがあるからといって赤ん坊ごと入口の前に捨ててやがった事もある。自分達には子を養う蓄えがなく、自分達の明日の食事を繋ぐだけでも精一杯だからと……ここなら問題ないと言ってるかのように堂々と捨てて行きやがった……
ふざけるな……子を捨てる親の気持ちが分かるかともし聞かれたら逆に問いただしてやりたい……捨てられた子の気持ちがお前らに分かるのかと……

「先生……？」
「ん……？あぁ、すまんすまん……少し考えごとをしていた」
「先生ってそういえば考えごとをしている事が結構多いですよね、いったい何を考えているんですか？」
「おいおい、聞いても別につまらない事だぞ？」

つまらないというか……聞かれると世界規模にまずい事な物がたくさんですが……

「そういやトールはどうしているんだ？」

「へ……？トールですか……そうですね……孤児院のムードメーカーって感じですよ」

その時、二人は気づかなかった……後ろにその当の本人が忍び足で近付いていた事を……

「おっ姉ちゃ～～～ん♪」

ガバッ――――！！！

「きゃあぁぁぁぁぁ――――――――！！！」

一瞬何が起こったかハーミットには分からなかった……なんせ……

「お、今日は縞々かぁ～～～♪」

「こ、コラアァァァ――――！！！トオォォォルウゥゥゥ――――！！！」

アイラのスカートが思いっきり捲りあげられたなんて予想だにしなかったからだ……

「せんせ～、お姉ちゃんね……今日先生が来るからって少しおめかししてきてたんだよ♪」

「な、何を言ってるの！！それより早く、は・な・し・な・さ・い！」

ゴンッ――――！！！

「いってえぇぇ――――！！！何すんだよお姉ちゃん！！！」

「黙らっしゃい！人様のスカートを勝手に捲りあげる人がいますか！？」

「お……おい……」

か……活発すぎるだろ……トール君……

「ぁ……すみません！！このおバカはちゃんと躾けておきますから！」

「あはは……元気があるのはいい事だ……」

「でしょ……！？先生もわかってるぅ～～～♪」

「調子に乗るな！」

ゴンッ――――！！！

二度目の拳骨がトールの頭に降り注いだ。二つ乗りのアイスクリームみたいなたんこぶができる……シュールだ……

「ねぇねぇ先生……前から聞きたかったんだけどさぁ……」

「なんだトール？」

「先生ってどうして結婚しないの？」

「……は？」

「だってさぁ、先生みたいな男の人をほっとくような人なんていないと思うけどなぁ……カッコいいし、優しいし、頼りがいがあるし、それに何よりダアトの師団長でそれなりに地位が高い方でもあるんでしょ？」

「あー……なんというか……その……」

「じゃあさ！家のお姉ちゃんなんかどう？」

「ふぇっ……！？／／／／／」
「結構いい線言ってると思うよ～？甲斐性あるし、家事もしっかりできるし、美人だし、２０歳で少し遅いと思うけど好条件だよ？」
「ちょちょちょちょっと何をいってるのよ！？／／／／／」

＊この世界の平均的結婚年齢は女性は１６歳です

「ははは……気持ちはありがたく受け取っておくよ……でも、さすがに俺も３０と歳くってるから１０歳も離れた夫婦はさすがになぁ……」
「え～歳の離れた夫婦なんて貴族とかじゃ当たり前にやってる……」
「いい加減にして！どこからそんな知識持ってきてるのよ貴方は！！」
「向こうの裏通りに住んでるお姉ちゃんたち♪」
「あいつらあぁぁ――――！！！」

なるほど、色街の娼婦の皆からですか……そういう類はプロフェッショナルと言っていいくらい詳しいからなぁ……そういや言ってなかったが……アイラ達の過去について今ここで話しておく。

この子達はホド戦争と同時期で起こった戦争孤児だった……両親は戦火に巻き込まれて死に別れ、親戚と呼べる者はおらず、生きていけるかどうか怪しい物だった……当時二歳だった弟のトールを養うためにもレイラは働き場所を必死に探した。だが、孤児であるということだけで回ってくるのは雑用ばかり……とても二人で食っていける金を掴むことなどできはしない……では、そんな金額を一気に掴める仕事と言えば……？

それが娼婦だった……

時折貴族相手で抱かれればその分だけ相手の気分で高額な金を出してくれる……当時十三歳だったアイラは女としての誇りも何もかも捨てて生きるために齧り付いた……幼い子供という事で寄ってきた変態共は彼女の身も心もバラバラにしていく……アイラはそれでも弟の為に必至に耐えた……だけど、彼女は3年後……運悪く客の子供を孕んでしまった……当然、娼婦達の世界では子を孕むことは禁句でもあり、娼婦としての死をも意味していた。彼女はその子供を堕ろす事で仕事を続けれるようにと考えてこの世界での中条流……云わば堕胎業者に子を堕ろす事を頼んだ……だが、その後が不味かった……

彼女は敗血症を患ってしまったのだ……結局、彼女はこれ以上娼婦として仕事をすることもできず、当時は治療法もない病気によりこのまま死んでいくのかと誰もがそう思われた。

そんな時に、当時遍歴医としてケセドニアに訪れていた俺はフィリスさんと共に治療薬を作り上げ、彼女を死の底から救い上げることができた……あの時は本当に大変な時期だったものだ……

だけどな……彼女を完全に保護しようと考えたのは彼女が務めていた店のオーナーが病室に来た時だったな……あの糞婆、アイラが病気を患ったからとすぐさま店から追い出した身でありながらレイラに店に戻って来いとほざきやがった……彼女は店での金づる同然な存在だからと……当然、怒ったな……うるさいあの婆をスプラッシュで水攻めしながら追い出したのも良い思い出？だ……

そして、彼女に出会うその前から交流があった孤児院ファミリアへと弟のトールと一緒に保護した。その中、また向こう側がやかましく吠えていたが……雇用契約をそっちから破棄したという事を執拗に攻め立ててやったら大人しく黙ったな。

まぁ、そんなところだ……彼女達の過去は……今でも昔の仕事仲間としての色街の皆はアイラと仲良く話し相手としてうまくやっている。彼女達にも娼婦を止めてこっちへどうか？と誘ってみたけど

断固首を縦に振らなかったな……私達には私達の生き方があるから……と、そう言って。

人間にとって一番大切なのは力の強さでも頭の良さでも何でもない……志の高さだと俺は思う。彼女達は魂の輝きが一層と輝いて見えるよ本当に……

だけど、弟のトールまでもが彼女達と仲良くなってるとはそこは考えもしなかったな……

「トール、罰として今日の勉強は1時間追加よ！」
「げぇ！それだけは勘弁してよお姉ちゃん！？」
「問答無用！そこに立ち直りなさい！！」
「お断り～！！」
「あ、こら……待ちなさい！！」

トールはアイラの手を掻い潜って孤児院の中へといそいそと入って行ってしまった。

「まったく、すっかり悪ガキに育っちゃって……」
「いいさ別に、子供は元気が一番だ」

二人はベンチに座ったまま静かになる……しばらくしてから最初にアイラが口を開いた。

「あの、先生……」
「んっ……？」
「さっきの事は……忘れてください」
「……どうしてだい？」
「私は……昔は色街で生きてきた身です……だから、そんな私が女としての幸せなんて……」

ペチンッ……！！

「いったあぁぁぁ～～～！！！」

「アイラ、自分を卑下するような発言は言って良い物じゃないぞ？」

ハーミットはアイラの額をしっぺで少し強めに叩いた。

「昔がこうだったから？これ以上の幸せはいらない？……そんな物は真に人生を決めつける事象にはなりえはしないんだ……大切なのは前を向いて精一杯生きていく事だ」

「……はい」

「お前はまだ始まったばかりじゃないか……幸せを見つけるために生きるための人生を始めたばかりだろ？過去に縛られて暗く生きていくのは自分を戒めるものじゃない……ただの臆病者がすることだ……忘れるな、自分の事を決めるのは自分自身しかいないんだと……」

「……」

可能性は決して少なくは無い……その中からなるべく良い結果を引き出せるよう頑張ればいいさ……人生は長いんだからな……

「では……その……もしもですよ……もしよければ……」

「うん……？」

「わ……私を……も……もらっ／／／／／」

ジイィィ――――――……

……なんだろう、なんか大量の視線を感じるんだが……

「青春だねぇ……」
「青春ですね……」
「アイラお姉ちゃんお顔真っ赤～」
「ラブラブだぁ～」
「あわわわわ／／／／／」

……孤児院の皆さん……ドアからひょっこりと顔出して何していらっしゃるんですか……

「院長～ニーナさあぁぁ～～～ん――――――！！！」
「おやおや照れちゃって♪皆逃げろ～♪」
「わあぁぁぁ～～～～～！！！」

アイラは居たたまれなくなって彼らの元へと突っ込んでいったのだった……

「……ありがとう、アイラ……」

こんな俺に好意を寄せてくれて……だけど、駄目なんだ……俺は愛される訳にはいかないんだ……

誓約による代償により、俺はこの世界での寿命の半分までしか生きられる事ができないこの身では俺は誰かを一生懸けて幸せにする力など残されてはいまい……

この世界での男子の平均寿命は約７０歳……それに、俺は治癒譜術による無理な細胞活性により体の内側は実はもうガタガタだ……つまり、俺は最低３５歳までしか生きられないとされている。

死が近い事には不思議と恐怖を感じない……前世ではすでに“死人”となった事による影響ゆえか……命が失われるという感覚を一度体験してしまった故か……

それに俺はこの世界にとって本来ならば異物としての存在だ……

本当に必要な事意外俺は残すつもりはない……

この命果てるまで……いったい幾つこの世界に残せる物があるだろうか……

それだけはたとえ預言で詠んでもらっても知ってみたかったかもしれない……

おまけ：（アクセルとフィリス）

記憶力の良いアクセル君……その才能にフィリス・ハーベルトは目を付けた……

時折彼は彼女の助手を務めるようになったとしたら……

「もっとよ！もっと温度をカモン！！」

「押忍！先生！！」

「そしてそのまま濃度の高い硫酸と硝酸をぶちまけて～！」

「ぶちまけてぇ～♪」

「そこにグリセリンを投入でＧＯ！！」

「ＧＯ～！！」

「あとはフラスコに詰め込んだら……」
「投げる！！」

ドゴオォォ――――――――――――――――ウウゥン！！！！！

「これで完成、フィ●●ボム！！」
「上手にできました～♪」

「なにヤバい物作ってんですかあぁぁぁぁ――――――――――――――――！！！！！」

イオン様からのアクセルの黒さとフィリスの猟奇性が混ざり合って心臓用のニトログリセリン作らせてみた結果がこれだよ！！

第７２話（後書き）

ハイルが嫁さん取らないのはこういう理由なんですよ……

ちなみに言っときますが、彼……モテます。

第７３話（前書き）

後半はなんかカオスに仕上がってしまった……だが反省はしない！

第７３話

「導師が倒れかけたと……？」
「はい、幸い……見ていたのは付き添っていた導師守護役の三名のみです」
「始まったか……ユリアの意思による導師の結末が……」
「……」

大詠士モースとヴァン謡将は静かにその末端を思い浮かべる……
あの導師はもう長くはない……良くて後二、三ヵ月が限界だろう……

「導師のレプリカはどうなっている？」
「六番まで刷り込みを仕上げましたが……導師として出すにはどれも不完全な者ばかりです、候補として出た四番目と六番目も片方は体力に問題ありませんが第七音素の保有率が少ないです……もう一方は第七音素の保有率は必要量よりやや高いのですが……感情の劣化により暴走を引き起こしやすい体質でした……」
「態々献金を多めに横領してまでやらせておるのにまだ仕上がらんのか！？」
「……もうしわけありません、ですが、レプリカは不安定な物です……そう易々と」
「いい訳などよい！導師が死ぬまでに代わりとなるレプリカを一刻も早く仕上げるのだ！」
「……畏まりました」

そうして、ヴァンは大詠士の部屋から出て行った……その場に静寂が訪れ始める。

「ふん……しかし、導師を取りかえる以上……あやつの周りもその

ままという訳にはいくまい……」

何かを思ったのか、モースは机に座ると即座に書類を書き始める。

「今の導師守護役を解任させるしかあるまい……これもダアトを維持させるためにも必要な犠牲なのだよ……」

では、次は新しい導師守護役を選ばなくてはなるまい……そう考えてモースは一般兵の書類から選別をし始める。その中にて……とある女性兵士の書類が目に入った……

「……まだ幼いが……何だこの経歴は……いや待てよ？……此処を上手く使えば……」

――――――――――――――――――――――――

「よう、元気にしてるか？」

「……それ嫌味で言ってる訳？」

所変わって、今ハーミットはイオンの私室を訪れていた……検診である。

「病気になるって結構大変なものだね……風邪を引いた事もなかったから驚いたよ」

「ふふ……経験しとけしとけ、体の辛さを覚えるのもまた一興じゃないか」

「いや、それ医者が言っていい言葉じゃないだろ」

他愛ない会話が相変わらずこの二人の間で行われる……しかし、

今はイオンがベッドに入っているという状況でだが……

「アリエッタ心配してるぞ？具合が悪いと聞いてオロオロしたりもしてたぞ？」

「あはは……後で謝っとこうか」

「……それより、俺の判断としてはこれ以上は限界だ……瀉血や薬で体の毒素となる物を吸収するのを今は抑えているが……これ以上ダアトで表面上の治療を続けていけば……死ぬぞ？」

「一刻も早く、アンタの手術が必要って訳か……」

彼らはヴァンやモース達を欺くために完全な治療を施さないようにしていた……預言でイオンは死ぬという状況を見せつけなくては意味がない……直ぐに治しては意味がないのだ……

「ケセドニアで用意する物は出来る限りそろえた……協力者もな……」

「アイツ……僕の為だからと即決で協力を請け負ったんでしょ？」

「ははは……アクセルはお前の事をお兄ちゃんとして随分と慕ってるようだ」

「やれやれ、弟に助けられる兄ってのはなんか情けない気がするよ……」

今回彼らが計画した事はこうだ……

・手術場所はケセドニアにする。

・本格的治療の間は導師の代わりをアクセルに任せる（アクセルは刷り込みにより仕事の仕方等は覚えさせられている。）

・治療が終わったら再び戻り、未だ病気のふりをして生活し続ける。

・預言の日となったら死んだふりをしてモース達の目を欺かせる（その際、フィリス特製仮死薬を飲んでもらう）

・全てが終わったら墓からイオンを蘇生しつつ救出し、姿を変えてケセドニアへ保護する。

「それにしても、アンタん所は本当にありえない技術を持った知り合いがいるもんだね……仮死状態にする薬か……」

「徐々に心肺停止していく代物に作り上げたからな……だがここが問題だ……蘇生が出来るのは約６０％の確率だ……失敗したら後は無い……」

「いいよ、どうせこれを断っても後が無いのは変わりないんだから……」

ダッダッダッダッダ――――！！！

バタンッ――――！！！

「イオン様！」

突如として、イオンの私室のドアを開ける者がいた……

「おや、アリエッタじゃありませんか？どうかしましたか……？」

「イオン様……」

何か様子がおかしかった……どこか悲しそうな雰囲気を漂わせていたからだ。

「アリエッタ、何かあったのか……？」

「イオン様……アリエッタ、もうイオン様と一緒に居られないんですか？」

「「……は？」」

突然何を言い出すのかと思ったら意味が分からないことであった……

「あの……アリエッタ、それはどういう事ですか？」

「……これ、です……」

アリエッタの手には一枚の紙が握られていた……差し伸べられたそれをハーミットが代わりにとって見てみた所……

「……イオン……これはどういう事だか俺も聞きたいのだが？」

そう言ってハーミットはイオンにその紙を渡してやる。それをイオンが見た所……

「……これは、導師守護役の解任状……！？」

「……はい」

何故こんな物が……！？こんな書類は作った覚えがないぞ！？

「……これ、誰が貴方に渡したんですか？」

「それは……」

ガチャッ……

「これはこれは導師、ご報告と違い元気そうでなによりでございますな……」

―――――――――――――――――――――――――

Ｓｉｄｅ：イオン

「わざわざお見舞いに来てくださったのですかモース、感謝します」
「いえいえ、それほどでもありません」

イオンは首だけを少し振って二人に退出するよう促す。その意思を感じ取ったハーミットはアリエッタを引き連れてドアの方へと向かっていく。途中で「あっ……」とアリエッタが声を零した気もしたが、残念ながら今は構ってやれる時間はない……そして、完全にドアが閉まった所でイオンは導師としての顔を表す……

「何の用だい……モース？」
「はい、今作られているレプリカに関しての報告に参りましてな……」

モースはここに来るまでにヴァンと話していた事をイオンに包み隠さず話す。全てを聞き終えたイオンは何か難しい顔をして考えに深ける。

「じゃあ、七番目を作ればいい……僕のレプリカ情報はまだ残っている筈だろ？」
「しかしそれでは予算が……」
「予算……？献金の事など気にしなくていいよ……どうせ勝つ戦争だと信じて疑わないで金を無駄に使うキムラスカに秘預言を詠んでやった御礼と考えればいいさ」
「……」

無駄に国庫は広いからね……あそこの国は……

「しかし、何としても成功してもらいたいものですなぁ……ダアト

存命の為にも導師の代えは必要ですからな」

ダアトの為じゃないだろ……アンタの地位の為にも……だろ？

「そういえば、あの男はなんと診断なされましたかな？」

「……治る見込みは低いって」

「やはりそうですか……しかしあの男も困ったものですな、勝手に費用として出された献金を無駄に使って下層街で好き勝手にしてる物ですから……」

好き勝手……？アンタ達がアイツのやってる事を好き勝手というならアンタらの無駄な行動で使われるよりマシなんじゃないかい？少なくとも僕はそう思うんだけど？

「それより……これはどういう事だい？」

イオンは未だ持っていたアリエッタの解任状をモースに見せつけた。それを見たモースは「あぁ……」と何か納得したかのような様子に変わる。

「導師よ、預言により死ぬ運命の貴方の続きを任せるレプリカには生まれる前の記憶までは刷り込みなどできないのです……そんな状態のレプリカが貴方の代から付き添っている導師守護役達等が唐突な事を言ってそれを覚えていないと申しますと……？」

「……偽物だと疑われる可能性が大って事か……」

「そういう訳です、ですから勝手ながらも処理をさせていただきました……あぁ、彼女達には辻褄の合う理由を申しておきますのでご心配なく……」

「そう、分かった……じゃあ下がっていいよ」

「失礼いたします……」

そして、モースは部屋から出て行った……しばらく足音が離れていくのを聞き、完璧に聞こえなくなった所で……

ビリッ――――！！！

手に持っていた解任状を破り捨てた……それもかなり強く力を込めてだ……

「まったくもって反吐が出るよ……遠回りに僕に死ねっていうのかい？あの樽豚が……」

愚痴を零し、そのまま書類を丸めてゴミ箱へとホールインワンする。すると、暫くしてからドアが再び開かれる……

「お疲れさん……」

「どうも……」

先ほど出て行ったハーミットとアリエッタが入って来る。アリエッタの方は今だ何が何だか分からずにしていた。

「詳しい事は本人が聞かせるのが一番だろ？」

「それもそうだね……」

ハーミットはアリエッタの背中を押してイオンと向き合わせる。イオンを近くにしてアリエッタはたじたじとなってしまう。

「ぁ……あの……イオン様……」

「心配いりませんよアリエッタ、確かに……貴方は導師守護役を辞めなければいけなくはなりますが……僕と二度と会えなくなる訳じ

ゃないんですよ」
「……ぇ……？」
「今度から僕の弟と呼べる子が僕の代わりに導師をする事になるんですよ……だから、導師イオンとしての僕の守護役をイオンとしての守護役になってほしい……そう言いたいんです」
「じゃあ……アリエッタ……イオン様の傍に居られるの？」
「もちろんですよ、だから心配しなくてもいいんです♪」
「……ッ！！はい！！」

ようやくアリエッタは満面の笑みを浮かべるようになったのだ…彼、イオンは実質上導師を辞めるという形になる……だけど、アリエッタも共に……

「……イオン、良い場面の所悪いが……お前の言い方……なんかプロポーズみたいだな……」
「……いいですね、じゃあ今ここで夫婦の誓いでもしましょうか…アリエッタ♪」
「ぇ……ぁ……はい……／／／／／」

トンでも発言をする１２歳……やはり侮れん……始祖緑っ子よ……

ガシッ……！！

「誰に断ってんなふざけた事ヌかすかな……この餓鬼は♪」

ゲシッ……！！

「いい加減子離れして欲しいものですね……この親馬鹿は♪」

ギリリリリ……！！！

グリグリグリ……！！！

「「ふふふふふ……♪」」

「「殺――――！！」」

その後、導師の私室で何があったのか言葉にする事はできまい…

…病に伏している筈の導師が一人の医者と元気よく？取っ組み合い

をしている様子が窓から見られたとか……とある一般兵の証言より

……

「原子力アンマァァァ――――！！！」

「あだだだだ――――！！！ちょ……いきなり病人相手にそれ！？」

「フランケンシュタイナアァァァ――――！！！」

「ぎゃあぁぁぁ首が、首がアァァァ――――！！！」

「愛の説教パートツウゥゥゥ――――！！！」

「アッ――――――！！！」

「ゆっくりはずしていってね♪」

「UZEEEEEEEEEEEEEEEEEEEE――――！！！！！」

……本当に壮絶な戦いだったと此処に記しておこう……もはや何も言うまい……

第７３話（後書き）

日本文学館から次の題である長編系の小説を書いてくれるかの催促の電話が掛かってきました……あれ、これってすごくね？

第７４話（前書き）

夏休みがまもなく始まります……試験が終わってホント楽になりました。

第７４話

「よし、治癒師団の偽造遠征手続きは出し終わったことだし……行くぞてめぇら！」
「うわぁ……私達って結構危ない橋渡ってますよね？」
「わ～い、導師様の治療だ～♪」
「ど……導師様！な……なにとぞよろしくお願いいたします！」
「……よろしくお願いします」

馬舎にて五名の男女が集合していた。ちなみに、上から順番にハーミット、ディノ、リーシャ、エレナ、ヒューである。その中心にはフード付きの頭を隠せるように作られた服を着込んだイオンが佇む。

そういや、こいつらの紹介がまだ済んでなかったな……せっかくだから此処でさせてもらおう。

ディノ・クリスト……ハーミットの助手を務める眼鏡を掛けた青年。２７歳で嘗てはバチカルの貴族御用達の医者として活動していたらしいが、平民と貴族だとか身分で一方的に治療を優先するようなバチカルの医学界に幻滅し、ダアトへやって来た。そこでボランティア治療をしていたハーミットと出合い、彼の医術を学び今は彼の右腕とされるほどに成長した。だが、上司であるハーミットの暴走を止めるべく、日々苦労する苦労人でもある。ちなみに、彼の家は爵位持ちだったが、ダアトへ行く時に両親に勘当されている。

リーシャ・フーリエ……治癒師団員の一人。（禁則事項～♪）歳で旧治癒師団の所属でもあり、純粋の治癒士として昔からダアトに居た。何時ものほほんとしていてまるで雲のようなフワフワした語尾

を伸ばす口調が特徴。貧民街の出身でもあり、貧しさを知る彼女は自分の家族や周りの友人にも優しさを振る舞う事が多い。その姿から「天使」と称される事がしばしばあり、他の師団員からの人気もある。彼女はハーミットの前世でいう看護婦に近い役目を果たしており、病室にいる患者の点滴や世話などを彼女が筆頭として行っている。手術の時でも血を見ても全く平気と意外に根性のある女性でもある。

エレナ・シィエラ……治癒師団員の一人。（セクハラです！）歳で医者になるべくして勉学に励んでいたが、医学院に入学するためのお金どころか授業料も支払えない為に諦めていた所でハーミットについての事を聞いて治癒師団員の門を叩いた女性。この世界では見れる事など無かったハーミットの医術に自分の運命を感じ、日々熱心に彼の実技訓練（普通は戦闘だったが、ハーミットの案により解剖や実施訓練としての手術も含む）を一言も聞き逃さずにしている。真面目を固めた性格なのでハーミットやディノといった上司や先輩には軍人並みの敬意を払ったりと色々だが、師団長レベル（ハーミットは慣れた）以上に声を掛けられたりすると緊張状態へと急変する体質を持ってもいる。手術では麻酔医として麻酔導入や輸血といった重要な役割を果たしている。

ヒュー・ベルン……治癒師団員の一人。２２歳で他の三人の中で一番遅く入団した団員、彼の場合、普通に第七音素使いとしてダアト騎士団に治癒士として入団してきた。物静かで常に落ち着いている。手紙を良くどこかへ出していたりとする姿がよく見られるが、家族や友人の所へと答えている。元は医学会の出身らしいが、彼が抜け出したのは彼曰く「愛想が尽きた」らしい……手術では補助器具の操作を一任されており、酸素導入時の量や患者のデータを手術の為に計算して麻酔の量を決めたりと手術の記録係として活躍している。

まぁ、こんな所だな……皆一つや二つ難癖がありそうというかまぁ……俺も人の事言えたもんじゃないか。

「じゃあアリエッタ、イオンのことをよろしく頼むな？」

「もちろん、です……パパ」

今回の移動手段に馬車は使わない……飽くまで内々で行う計画の為他人に極力見られる訳にいかない為にアリエッタの魔物達を使う事にした。

まず、イオンは隠密にケセドニアへ送る為にフレスベルグによる空行でアリエッタと共に言ってもらう。そして、俺達治癒師団はダアト港で船に乗ったという既成事実を残す為にライガ達に乗っていく。こいつらは馬車よりも早いし魔物に襲われるような心配はない。なんたって魔物の上位種だからな……

「（アクセルはイオンから借りた導師服を着て執務室に座っている……この後の経過はアイツ次第だが……なんとかしてくれるだろう）よし、出発！」

ハーミットの掛け声と共にフレスベルグが翼を羽ばたかせ、ライガ達が足に力を込めて走り出す。

「お前達の背中に乗るのも久しぶりだな……よろしくな？」

「ガルル……」

久々の乗馬？になるが勘は鈍ってはいない筈だ……上下運動に合わせて足腰を動かし、力を逃がす。

「痛ッ！あだだっ！股間が、股間がつぶれる！」

「あうぅぅ〜〜〜！！！」
「割れちゃう！割れちゃうから！！」
「あばばばばば――――！！！」

……慣れてない奴にとっては地獄のロデオマシンでしかないのがこの移動手段の問題点ではあるがな……

――――――――――――――――――――――――

６０キロはありそうなライガ達の全速力移動により、十分はかからないでダアト港へと辿り着いた俺達はそれぞれの荷物を縛り付けておいたライガの体から外していく。

「し……死ぬ……」
「あがぁ〜〜……」
「男は……辛いです……」

その間、内股状態で小刻みに歩いてくる四人がいるのはお約束だ。

「だらしないぞお前ら、手術で最高八時間は立ち続けたりしてるのにこういう所で鈍りが現れるなんて……」
「破天荒な人生送ってる貴方と私達を一緒にしないでくださいよ……」
「……すまん、無理を言った」

……じゃ、船に乗るとしますか……

「すみません、予約をしていたダアトの者ですが……」
「手紙から承っております。さぁ、どうぞ中へ」

船員は船内へと案内をするべく、それぞれ用意を施し始める。瀕死状態の者達に若干引きながらもいるが……

「じゃあ各自用意された部屋で、到着するまで自由行動！……けどヒューは調節についての会議をするから俺の所に来い」
「はい……」
「私もイメージトレーニングはしときませんとね……」
「ゆっくりいこ～？」
「さーて、忙しくなるわ！」

自由行動とはいっても手術の為の用意で休むなんて選択ないんだがね……俺達にはとっては。
ハーミットとヒューは客室へと向かっていく中会話をし続ける。

「長い付き合いだがお前達もさすがにある意味こんな大手術するなんて予想だにもしなかっただろ？」
「はっきり言うなよ、気にしてるんだからな？」
「しかし、そんな所が貴方の良い所ですしね……」
「あはは……なんか喜べんな……」

ほとんどが他愛もない会話……だけど、そろそろ話すべき事がある。

「……ヒュー、聞いていいか？」
「はい……？」
「手紙の受け取り主はヴァン総長か？」
「……！？」

こう言う事を聞くのは少し嫌になるんだがなぁ……

「お前がダアトに来た経緯の中に当時謡士だったヴァン・グランツとの関わりがある事が秘密裏に調べて分かった事があった……」
「違います！確かにヴァン総長はダアトへ貴方の所へとお誘いになられましたが貴方の所で密行しろとは……！？」
「……言葉を違えたなヒュー、確かに俺はお前が手紙を送っていると指摘したが……スパイをしているなとは聞いていないぞ？」
「……ッ！？」

この情報の元はイオンの執務室から拝借した履歴書だ……偽装なしの真っ白な事が書いてある物でヴァンに関しての情報が書かれていたからな……

「大方俺の行動を見張れと言われたんだろう……何か事を起こしたらすぐさま知らせろと……」
「それは……」
「……残念だが、今回ばかりは勝手が悪い……計画を話した日からお前が送っていた手紙は鳩を撃ち落として回収し、偽の手紙を流してあるから今頃問題なしな内容の手紙をヴァンは読んでいるだろうよ……」
「あ……」
「なんでだ……なんでこんな事を請け負った？」

今回はそれが一番の重要なことだろう。

「……私にはね、恋人がいたんです……」

船に付いた手摺に腕を組んだまま置いて海の方を向いたままヒューは語り始める。

「将来結婚を誓いあったりもしていました……家族も友人も誰もが祝ってくれて……これから私達の幸せが始まるんだと嬉々としてました……だけど、3年前……たった一つの事で全てが壊れてしまったんです……」

いつの間にか手は手摺を軋みを上げるほどにまで握りしめていた……

「あと二日で結婚式を上げる予定でしたが……その日に私達は預言士に預言を詠んでもらう事にしたんです……これからの幸せを祈ってという各目で……だけど、あの預言士は……ッ！！」

「……」

「結婚するべきでないと預言に詠んだんです！もし結婚すれば私に不幸が降りかかると……当初聞いた時では何を言われたが全く頭に入りませんでした……」

「……そうだったのか」

「だけど、私はそんな事よりもふざけるなと思った事があるんです！預言を詠むまで祝福してくれていた家族も友人達も結婚を止めろと脅すかの様に言って来たんです！あんな簡単に掌を返される想いをしたのは初めてですよ……」

もはやその顔には落ち着きは見られない……憤怒を表す表情にしか見えなかった……

「当然私は反対しました……だけど、それが却って物事を悪くしました……預言を否定した者として教会は結婚式を上げてもらえず、両親達とは絶縁を突き付けられました……周りの人からは冷ややかな目で見られるようにもなって……」

「……歪んでるな、こういう事ってのは……」

「だけど……それで……彼女は……」

「……？」

今度は悲しみの顔と変わり始める……床に座り込む様に壁に手を付けながらしゃがみこんでいた。

「自分のせいで私を不幸にしてしまったと……感じなくてもいい負い目を背負って……彼女は服毒自殺を図ったんです……一命を取り留めましたが……彼女はもう二度と……」

「三年前……服毒自殺……一命を取り留めた……まさか、第三号室にいる植物状態の患者は！？」

「えぇ……そのまさかです……」

あの女性がヒューの婚約者だったのか……そういや良くこいつはあそこの病室を訪れていたっけ……

「預言を激しく憎んでました……そんな時、ヴァン総長にその事を聞かれて……」

「あいつの計画に乗ったという訳か……」

「ですが、総長にとってあなたは計画の壁害となる存在、医学者であり、第七音素使いでもあった私は総長の命により治癒師団へと潜り込んだのです……」

「……」

「先生……知られた以上、私は抵抗しません……貴方の好きなように私を処分していてください……それが私の運命ですから……」

「……運命ねぇ……」

ハーミットは数歩歩きながらそう呟く……何度か廊下を回る様に歩き、止まる……

「もしもだ、アイツの計画通りにこの世界で預言が無くなったとし

よう……そこにお前と彼女はいるのか？」
「いえ……私はこの世界で生きようとは思いません……彼女が生きる屍同然と化した以上……私の人生はそこで終わってしまった」
「……な～に諦めてんのか……」
「……え？」
「お前は彼女が二度と目覚めない存在だと確信してるのか？……だとしたら、お前は預言通りに不幸になったという訳だ……別に結婚は式を上げなくても出来るようなものだからな……」
「……何を……言っているのですか？」
「あ～ぁ……彼女にとっては本当に結婚しなくてもよかったかもな……こんな“腰抜け”と結ばれるくらいなら……」
「……ッ！？」
「運命……人生が終わった……不幸になった……そんな言葉を使う人間ほど弱い者は無いんだよ……」
「黙って……ください……」
「なんで嫌がる？……事実を言われたのがそんなに悔しいのか？……受け入れたくせに……」
「うわあぁぁぁぁ――――――！！！！！」

ヒューはハーミットに飛びかかる……許せない、目の前に居るこいつを今すぐ消してしまいたいと考え……

「まったく……」

その様子に何も動揺せず、ハーミットは向かってくるヒューの足を足払いして体を地に着かせる。

「ゲホッ……！？」
「お前な……一つ忘れていないか……一番大事な事を……？」
「うぐぅ……」

「彼女はまだ終わってないだろ……目を覚ましても……声を掛けても……体が動いても無くても……まだ命の灯はまだ燃えている！」
「……」
「俺達は医者だ！そんな患者達を治す為に存在している！なのに、お前にとっての一番大切な存在をそのお前が全て諦めてどうする！」
「……ぁ」
「お前は預言を無くすという行動で他にやるべき事を投げ出してしまっているんだ！」

彼にとって、預言は憎むべき物……だが、それで大事な事を忘れてはならない……

「お前は考えないのか……自分がどれ程の者に必要とされているのかを……」
「え……？」
「お前のお陰で命を助けられた人間が……お前のお陰で命を助けられる人間が居るってことをな……」
「私が……必要……」

思い出せ……病気が治ると知る事が出来た人の顔を……病気を治せた時に言ってくれた人の言葉を……

「いいかヒュー、預言を憎むなとは言わん……だが、そのせいで何か失ってはならない事を覚えていておけ……」
「……」
「それに、俺は部下を……いや、“仲間”を切り捨てたりは絶対しない……俺や仲間達にとっての大切な物や人を傷つけない限りな……」

私を……赦してくれるんですか……？

「だから、戻ってこい……いつものお前に……」

その途中、奥から何人かがやって来ていた。大方野次馬か何かだろうが、その中にはディノ達の姿も居た。

「先生！ヒュー！何してんですか！？」
「大きな声だったよ～？」
「大丈夫ですか！？」

さてと、これ以上は面倒沙汰になるから……

「はいはい解散解散！……お前ら戻ってろ！」
「え～何があったんですか～？」
「ちょっと喝を入れてただけだ！」
「威張ったようにして言わんで下さい！」

うっせぇな……それよりも……と

「ほら、ヒュー行くぞ？」
「え……？」
「術式用の計算とか会議終わってないだろ？だから早くしろ」
「は……はい……！！」

やれやれ、本当に……“難癖”がある仲間だよ……お前は……

だけど、それを克服させるのも俺の仕事なのかもな……？

第７４話（後書き）

熱い……厚い……篤い……暑い……Ａ☆ＴＵ☆Ｉ！！

ホント暑すぎますよ……この季節は……

第７５話（前書き）

手術場面を書いていくのが段々ハードになって来た……
でもめげないもん！

第７５話

Ｓｉｄｅ：イオン

「イオン様、平気ですか？」
「心配しないでくださいアリエッタ、僕は全然平気ですよ」

ハーミットは船に乗り込んだ所だろう……僕達の方が早く着けるから時間の差があるのは仕方がない。フレスベルグでの移動は何時乗っても快適な物だ……

「此処で東北……所謂斜め右方向に進んでいってください、しばらく進めば砂漠が見えてくる筈です」
「はい……です」

ケセドニアで僕の未来が決まる……預言に消されるか……預言を打ち消すか……

意外と不安ではない……何故だろうか……僕はアイツを信頼してるからなのだろうか？

思えば、随分と丸くなってしまった気がする……自分以外の人間を下らないと思い、自分もまたどうでも良くなっていた筈だった僕も心の底から楽しいと思える事がたくさん増えた。

導師として堅苦しい態度をとる事を止めてハーミットとアリエッタを中心とした奴らで馬鹿をやってみる。それがどんなに面白いと思って来たか考えきれない……預言で決められた人生なんて糞くらえな態度を取って本来なら導師として有るまじきな事をしたり……ひょっとしたらこれは僕自身なのかもしれない……導師としてでもイオンとしてでもなく……裸のままの僕が求めていた事なのだろうか。

「ありのままの自分で居る事……」
「……イオン様？」
「あ、いえ……なんでもありませんよ」

今だからこそ、僕はこう言いたい……もっと生きたい……と
それにしても……少し息が苦しいな……この頃激しく動いて
なかったから肺が少し縮んだかな？

―――――――――――――――――――――

Ｓｉｄｅ：ハーミット

船による移動もようやく終了した。後は当初から計画しておいた場所に行けばそこからイオンの手術が始まる。アイツの片方の腎臓は腎不全に陥っている。機能しない腎臓は体にあるままだと循環上無毒に出来なかった老廃物などが吸収されやすくされてしまう……ならば、その腎臓を切除して老廃物などをもう片方の腎臓で働かせれるような内臓の構造にしなくてはいけない。

「暑～～い！！」
「ここまでとは……」

そういやエレナとリーシャはケセドニアに訪れるのは初めてだったな……砂漠地帯は初心者にはちときついか……

「もはや摂氏４０℃超えてますね……相変わらず……」
「そりゃそうだ、砂漠には水と名のつく物は砂によって地底深くまで流れて行ってしまう、その為雲も出来やしないし、ましてや日光を遮る植物もないから熱は籠る……まさにダブルパンチだな……」

「エレナさんとリーシャさんは日除けの布着けときますか？」
「お、お願いしますぅ〜！」
インド系のターバンを思わせるかのような布着を二人は顔に巻きつける。服を重ねたら暑くなるのでは？と思う人もいそうだが……実際は汗で体を冷やすのに効率が良かったりもする。
「先生！！」
用意をしていた所にふと大声を上げて此方を呼ぶ声が聞こえる。そちらへ視線を向けてみると見慣れた姿の者がいた……
「アイラ！……どうしたんだ？」
「イオ……あの子が！！」
アイラは計画の協力者の一人だ……その事を知っている。しかし、今イオンと言いかけたな……人がいる所でその名前は禁句だ。とっさの判断で言い変えたが、イオンがどうかしたのか？
「とにかく急いでください！」
「お、おい！！」
アイラはそのまま向こうへと走って行った。行先は分かっている……孤児院だ、そこにあいつらもいる筈だからだ。詳しい話も聞けないまま一先ず俺は彼女の跡を着けて行った。
――――――――――――――――――――
「げほっ！げほっ！！」
「イオン様！？」

「しっかりしなさい！落ち着いて呼吸をして！」

孤児院の一室ではイオン、アリエッタ、フィリスが居た。だが、イオンの方だけが様子がおかしい……呼吸をするのが苦しくなっているのだ。

「どうして！？まだ尿毒症になるには早い筈なのに……」

尿毒症……血中に含まれる尿素や老廃物により引き起こされる腎不全の合併症である。毒素は血液の赤血球を溶解させ、また血小板の異常な減少も引き起こさせる。

「何が……何か変わった事は……！？」

少し考えた所でフィリスはある事に気がついた。

「ねぇアリエッタちゃん、もしかして貴方達……空を飛んで此処まで来なかった？」

「え……どうして知ってる……ですか？」

「やっぱりそれよ！」

フィリスは思い出した……血圧の変化による臓器の影響をだ……

……

高い所では人間は気圧の問題により血圧が上がる……所謂高血圧になるという訳だ。

高血圧がつづくと細い血管がせまくなって腎硬化症といわれる状態となり、腎臓の働きが落ちて逐には腎不全（尿毒症）になることもある。

そこに今回は当てはまったという訳だ……

「盲点だったわ……余計に悪化させただけじゃないの！」
「イオン様！イオンさまあぁぁぁ……」

バンッ――――！！！

「何があったんだ！」

「ハイル！？」
「パパ……」

ようやく孤児院にハーミットが到着した……彼の姿を見てみると息切れていて汗も滝のように流れている……余程急いで来たようだ……

「がはっ……」

ベチャッ……

「イオン！？」

それと同時にイオンは何かを吐きだした……血だ……
消化器系までも尿毒症に影響されてきているようだ……これはまずい！

「話す暇なんてない！――――緊急オペだ――――！！！」

のんびりしてはいられない……命を救え……

――――――――――――――――――――――――――――

「クレアチニン導入！」
「はい！」
「まだ初期になったばかりの尿毒症だ！早めの対処が肝心となるぞ！気を引き締めろお前ら！！」
「「了解！！」」

簡単な担架を使って孤児院の中に前から作って置いた速式手術室へとイオンを運んでいく。地下室だが無菌性で明かりも十分にあるので活用は問題なしだ。

「イオン様！」

後ろからアリエッタが走ってきて傍に寄って来る。担架で運ばれているイオンは相変わらず苦しそうな表情でいる……

「大丈夫だアリエッタ……安心して待っていなさい……必ずイオンは戻って来るさ」
「パパ……イオン様……死んじゃわないよね……絶対助かるよね……」
「心配するな……」

――俺達を信じろ――

バタンッ……！！！

そして、手術室のドアは閉じられる……ここからはハーミット達の闘いだ……

アリエッタとフィリスは静かにその場で待つしかない……それが彼女達にとっての最善方法なのだから……

「麻酔導入完了……では、これより右腎の片側完全腎切除術及びに腹腔での透析液による手動透析術を始めます……よろしくお願いします」

「「よろしくお願いします！」」

「メス……」

「はい……」

先ずは胸部と肋骨に沿った開腹……皮膚、脂肪、筋肉の順と刃を進めていく。特有の線を描く執刀で腹部は破れた布のような形となる。

「筋鉤……患部の洗浄を行います、生食」

「はい……」

次は吸引機で溜まる血を吸い上げて視野をはっきりさせる。出血部位の大きい所は縫合並びにガーゼによる止血を施す。

「脂肪吸引、カニューラを……」

右腎と腎周囲の脂肪及び副腎とを分離し、失血による腎重量の変化を防ぐ目的で腎血管及び尿管を二重結紮し、右腎を摘出する。測定していた右腎の湿重量を左腎を切除する際の基本重量とする。切開した腹壁及び皮膚を縫合する。

此処が勝負時だ……一つ一つの血管を素早く結紮しつつ切断して

縫合する。完全に分離するように血管の流れを作り変えなければいけない……

「鉗子……鋏を……」

瞬き一つせずに集中し続ける。周りのメンバーもそれに合わせてペースを合わせて行く。チームワークの合った作業が迅速に手術を進めて行く……

「エレナ……汗を……」

「あ、はい」

しかし、地下といえどもやはり砂漠地帯では少し暑い……長時間の手術は俺達にも危険かもしれない。

「ディノ、絹糸を……」

「わかりました」

結紮を任せてハーミットは切除と縫合のサイクルの繰り返す……太い方、細い方全てを一つ一つと吻合する。

「これで……全て、と」

パチンッ……

縫合糸が切られてそれと同時に白く変色した塊がイオンの腹から出てきた……そう、これこそが腎不全になった彼の右腎である。白いのは壊死を起こしている証拠だ……これは根本的に取り除かないと後が怖い。

「うわ……見事に真っ白ですね……」
「細胞がちゃんと栄養補給されてない証拠だわ……」
「……ホルマリンにでもなんでも漬けてこい」

少しばかり冗談をいう余裕も幾らか出てきているようだ。

「じゃあ、腎動脈にはさんである鉗子を取り外すぞ……」

ここからだ……血液の流れの変化により全体の血圧も変わってくる。その拍子にショックを起こす可能性がある……これを防ぐ手立てはない……

カチッ……

そして、鉗子を外す……新しい血液が流れ出し、血管が脈動し始める。

ドクンッ……

「ごくっ……」
「……」

ドクンッ……ドクンッ……ドクンッ……

ビィ――――!!

「先生！心拍が……！？」

何……！？下がっているだと……まさか、新しい血液が入って来た際に出たショックか！

ちなみに、先ほどの音はディスト製の心拍のみを測る事が出来る簡易式心電図だ……まだ十分とは言えないが、無いよりはマシだろう……とにかくまずい！

「先生、心停止（アレスト）！！」

「（心室細動か……！！）キシロカイン５０？静注！！」

まだ終わらせてたまるか……！！

「ヒュー、カウンターショック！！」

「はい！」

脳の障害が出る可能性が高い時間は約３分後……それまでに何とかしなければ！

「離れろ！！」

バンッ――――！！！

強力な電流がイオンの胸に打ち込まれる……心電図の波が揺れ出すが……それは先ほどの電流の影響でしかない……彼自身の鼓動はまだ動き出してはいない！

「中心静脈からボスミン1アンプル！！」
「はい！！」

＊ボスミン……心臓においては、洞房結節の刺激発生のペースを速めて心拍数を増加させ、心筋の収縮力を強め、心拍出漁を増大するので強心作用を現す。

「もう一度、カウンターショック！！」

バンッ――――！！！！

「心拍戻りません！！」
「くっ……酸素ボンベ、アンビューバック、心マ開始！！」

少しでも脳に酸素を送るべく空気を送る為の処置を施し、加圧による心臓マッサージを始める。

「イオン、しっかりしろ！！」

グッグッグッグッ――――！！！！

「息をするんだ！！」

グッグッグッグッ――――！！！！

ハーミットは心マをしながらも意識の無いイオンに呼びかけ続ける……だが、心拍は戻らない……

そして、次第に制限時間が過ぎ出す……ディノはこの時ふいに考えてしまった……もうこれ以上は……

「どうした！手を止めるな！！」

「すみません！！」

ハーミットの叱咤により我を取り戻し、再開を始める事ができた……

「……四分経過です、先生……」

「諦めるな！！」

……約束したんだ、必ず治してやるって……

「……もっと生きたかったんじゃないのか……」

――――不本意だけど……信じてるからね――――

「まだまだやり残した事があるんだろ……」

――――あんたは最高の医者だよ、僕が認めてるんだ……自信持ちなよ――――

「イオン！！起きろ！！」

お前はこんな所で死ぬ奴じゃないだろうが！！

「早く起きろ！！」
「先生……」
「大丈夫、助かる！」
「もう……」
「放せ！」
「でも……」
「うあぁぁぁぁ――――！！！」

ドン――――！！！ドン――――！！！ドン――――！！！

この時、奇跡が起きた……渾身の力で振り上げた拳により心臓マッサージにより、一つの小さな灯が……

ピッ……ピッ……ピッ……

「嘘……」
「奇跡だ……」
「せ……先生！心拍再開しました！！」

「はぁ……はぁ……」

再び燃え上がり始めた……

「こいつめ……何処までも面倒掛ける奴だ……」

その顔には笑みが現れ始めていた……しかし、まだ油断はできない。再び止まらぬようにも処置を施さなくてはいけない……

「エピネフリン静注！！」

＊エピネフリン……アドレナリンとも呼ばれ、血中に放出されると心拍数や血圧を上げ、瞳孔を開きブドウ糖の血中濃度（血糖値）を上げる作用などがある。

そして、全てが安定する……

「じゃあ次だ……透析液の準備を……」

これは前世の俺でも経験がない……透析液による浸透圧の変化を上手く使って毒素を体から出させる方法だ。さてと、腹部を閉腹して透析液バックを腹膜にと……

「もう少しだ……頑張れよイオン……」

―――――――――――――――――――

Ｓｉｄｅ：アリエッタ

「遅い……です」

「仕方ないわアリエッタちゃん……導師様の手術は最低でも４・５時間は掛かるのよ……」

早く会いたいです……イオン様……

でも、パパならきっとイオン様の病気は治してくれるもん……

パパは約束は破った事はなかった……です……

何時もアリエッタの事……ちゃんと考えてくれてた……

だから、今回も……

バタンッ……！！

その時、ちょうど手術室からストレッチャーが出てきた。その上には、マスクを付け……ゆっくりと眠っているイオンの姿があった……

「イオン様！！」

アリエッタはその姿を見てすぐさま駆け寄った。声に反応してはくれなかったが、その姿を見れただけでも彼女には十分だった。

「病巣は完全に切除しました……後は血液透析を一日中取り換えながら行えば大丈夫でしょう、傷口は譜術で塞いでますので痛みもしばらくすれば直ぐに引く筈です……」

「もうイオン様大丈夫、ですか！？」

「えぇ……もちろん」

「ただ……」

ディノは何かを言いかけたが……口を閉じた。その様子にフィリスは可笑しく思う。

「ただ……？」

「その……」

「心停止が長かったから脳に障害が出るかもしれない……」

「先生！？」

「ディノ……今ここで隠していても仕方がない」

手術は成功した……だが、その代償は……どうだろうか？

「脳に障害……それは本当なの……？」
「今はどうかわかりません……本人が起きてから調べないとどうか……」
「……どうなっちゃう、ですか？」
「おそらく……麻痺……」
「「……」」
ハーミットは考えてた……死ぬ運命は回避した……だが、これからの運命は保障してくれてなかったのかもしれない……
「クソッたれ……」
今はただ、愚痴を零すことでしか……そのやるせなさを堪える事ができなかった……

第７５話（後書き）

脳が酸素なしで生きていられる時間はわずか３～４分とされています。
皆さんもしっかりと応急処置の正しい知識は持ち合わせておきましょう。
きっと役に立ちますので……

第７６話（前書き）

バイトがこの頃辛いです……休みが欲しい……

第７６話

ケセドニアの朝は冷たい冷気が漂う極寒世界に砂漠の向こう側から出てくる太陽が照らし始めることから始まる。そこから熱が生まれ始め、猛暑漂う砂漠へと早変わりして行くのだ……

そんなケセドニアにある一軒の孤児院に一人の女性が扉を開け、朝の準備に取り掛かりだす。何十人もいる孤児達の服やシーツ、そして彼らの食事の用意も彼女がこの頃請け負っている。もはやここでは無くてはならない存在であるに違いない……

キィ……キィ……

「おはようございます」

「あら、随分と早起きなんですねイオン君は」

「教団に居た頃は当たり前ですからね……生活習慣として慣れてるんですよ」

その後ろに一人の少年が近付いて来ていた。そう、イオンだ……あの手術から早数ヵ月が経った。ダアトでは秘密裏に死亡と判断された導師は今やここファミリアの一員として静かに暮らしている。

「それよりも一人で大丈夫なの？起き上がるのに手伝ってもらわなくていいの？」

「上半身は自由に動けますから手を上手く使って乗るのにもさほど苦労しなくなりましたよ」

「でも苦しかったら何時でも言ってね、無理はしちゃダメよ？」

彼の病は完治した……だが、下半身麻痺という結果を残してだ……

イオンは歩く事ばかりか、立つ事も困難な状態になっている為に移動手段として車椅子を用いるようになった。だが、彼の診断の結果によりリハビリを続けて行けば杖を使って歩ける事も望みはあるという話も出ている。

「こんな事、辛いとは思いはしませんよ……死ぬ運命に抗った代償と考えれば安い物です」

「でも先生……イオン君の事ずっと謝ってた……」

「まったく、本人が気にしてないと言っているんだから素直に受け取ればいいのに……変な所で責任感が強いんだよね……アイツは……」

ハーミットはイオンに謝罪をし続けていた。普段は大人のプライドとして子供に頭を下げるような男ではないが……今回ばかりは土下座までもしてイオンに謝り続けた……

だけどイオンはそんな彼を憎むどころか怨む事など微塵もなかった……今まで絶対だと考えてた預言がこうも簡単に目の前の男によって覆されたという結果により興奮が収まっていなかったからかもしれない……

「驕りって物を持たない性格だからねアイツ……だから油断も隙も殆どない」

「そうだよねぇ……」

「え……？」

「だけどそんな性格だからこそアンタはそのままでいいのかい？」

「アイツの事……惚れてるんじゃないの？」

「……／／／／／」

アイラは頬を染めながらもイオンの言葉を肯定づけるように首を縦に一回振る。

「アイツには安らげる場所が必要だ……自分自身を委ねられる存在がね……自分の幸せを置いてきたようなもんだから……」
「幸せ……？先生は今でも十分幸せそうな感じだと思うけど……」
「表面上はね……でも中身はどうだと思う？真に帰るべき故郷であるフェレス島はもはや存在せず、心を許せる両親とも死に別れ……他を上げたら切りがないくらい失った物が多い」
「……」
「“誰かの為に”その志はアイツにとっての枷となり、外れる事はない……だから、休ませる“場所”が必要なんだ……その候補としてアンタ……そういう訳」
「でも……」
「あぁもう、とにかく……アイツの事を想うんだったら行動へ移すなりなんなりとすればって言ってるんだよ！」
「……もしかしてイオン君、先生の事心配だからそう言ってるの？」
「はぁ……！？」

いきなり何を言い出すのかと慌てたように疑問の声をイオンは上げた。

「私の為みたいに言ってるけど、実質イオン君もやっぱり心配なんだね先生の事が♪」
「ちょっ……勝手な想像しないでくれる！別に僕はアンタの事を想って！」
「はいは～い♪そうしておきます……と♪」
「おいこら！絶対勘違いしてるでしょ！違うからね！絶対アンタが想っているようなことじゃないからね！」
「さてと！朝食の準備に入りましょうか♪」
「話を聞けぇぇぇ――――――――！！！！！」

イオン、この頃イビられつつある年頃なのであった……

―――――――――――――――――――――

Ｓｉｄｅ：ハーミット

この頃、ハーミットはディストの研究室を訪れていた。彼とディストはお互いの知識の交換し合いで色々と親しくなっている。だが、今回はそんな空気ではなかった……お互いが真剣に向き合っている。

「ディスト、頼む……」

「こればかりはいけません……貴方にこの事を話せば私は裏切り者として直ちに粛清されますから」

「アイツの意思だ、何としてでも助けなければならないんだ……」

「はぁ……」

ちなみに、ディストには被験者のイオンが死んでいない事は聞かしていない。まだ仲間ではなく、相利の関係としてなので騙し騙されの状態を保ちつつあった。

「レプリカ達の廃棄日を教えろだなんて……こればっかりはどうも……」

「お前の事は他言無用にしておく……だから……」

「いいですかハーミット、貴方は私達の仲間でない以上本来ならば話し合いをする余裕など持てないものなんですよ？」

「……」

その通りだ……それでも話を聞いてくれるのは友人として認めてくれるからだ。ディストは一般的に変態と呼ばれる種類だが……話が分からない人間ではない。

「ですから、無理な物は無理なんですよ……」
「……わかった……今は退こう……」

こいつも自分の命が惜しくなる位当り前な事だ……無理にしたってそう簡単に話そうとはしないだろう……

「……じゃあこれだけは教えてくれ……」

――――レプリカ達はどうやって廃棄されるんだ？――――

ハーミットは実験動物のような扱いを受ける彼らの末路については詳しく調べた事はなかった……薬物投与での物とかそんなくらいの認識である。

「……ザレッホ火山の溶岩の中へ放り込むそうです……その方が証拠もなくなって手っ取り早いんですよ……」
「……ディスト、その方法を当り前のように考えてるのか……お前を含め、部下達も……」
「私達研究者は“実験道具”に情を掛けるほど優しくできてません……そうしなければやってられなくなるんですからね」
「……ッ！？」

ハーミットはディストの胸倉を掴み上げる……先ほどの言葉にはさすがに考慮しがたいからだ……

「私を殴りますか……？それで気が済むというのならどうぞご勝手に……」
「……」
「貴方も医学の為に実験動物を何度も使っているじゃないですか…

…それで死んだ動物達の事を何時でも忘れないでいるとか……たとえ貴方でもそんな事は不可能です」

そう、ハーミットは臨床の為に実験として動物を使う事は一度や二度ではない……

人間は結局自分勝手な生き物だ……己の徳の為に殺した相手を想うなど聖人でもない限り無理だ……所謂どうでもいいと考えているだろう。

「あのレプリカ達は失敗作という結果により生まれた存在です……研究者にとって失敗作は無用な存在以外ありえないんですよ……」

「あの子達は……失敗作なんて物じゃない……ちゃんと熱を持っていて、呼吸をしている……唯の人間だろ？」

「そうもいきません……あの子達は導師イオンのレプリカなんですよ……たとえ普通に生活させようとしても世間一般が黙っている訳がありません……それとも一生隠れる身として生き続けさせるのですか？」

「……」

「だからこそ、廃棄するのはある意味彼らにとっての慈悲なんです……苦しんで生きていくよりも……無に還る方が幸せだと思います。まぁ、私達の何人かはそう思わないですけどね……」

ディストの言葉で想い返した。アクセルもイオンも……これから偽りの名や姿を以てこれからの生を歩んでいかなければならない……そう考えるとなんだか申し訳なく思える。彼らの存在の尊重など何処にもないではないか……

「……だけどな、ディスト……これは俺の勝手な想いだが……」

「……なんですか？」

「そんな運命を持つ子達だからこそ、まず彼らには生きる楽しさを

知ってもらいたいと思うんだ……自分の知らない事を探して、自分だけの物を手にしてと……死ぬのはそうしてからにしてもらいたい……」

「……」

「誰かが決める生や死などあってはいけない……俺達医者だって生死を左右する事に何度も向き合ってはいるが……これだけは患者に考えさせてはならない掟がある……」

「なんですかそれは？」

“死にたい”それだけは考えさせてはならないんだ……」

その眼はどこか遠くを眺めるかのようで……少し寂しげな感じがした……

「だからこそ、彼らを救いたい……けど、お前に協力を求められなかったのが今回は残念だ……」

「……」

「邪魔したな……」

そう言って、ハーミットはディストの研究室から出ようとする。だが……

「待ちなさいハーミット」

ディストはそう言ってハーミットを呼びとめる。

「良く聞きなさい……これから言う事は私の独り言として片づけてください……」

「……？」

「知ってますかハーミット、私の部下の研究報告は赤色のファイルで纏められているんですよ？今まで研究してきた物が何百とです」

「……！？」

「ちょっとこれから用を足していきますので……あぁ、そこの本棚には絶対触らないでくださいね、絶対ですよ！」

わざと強く怒鳴るかのようにそう言いながらドアの方へ近づいてハーミットに言い聞かせる。だが、その行動がどういう事か良く分かった。

そして、扉が閉まると同時にディストの研究室はハーミット一人となった。

「感謝するぜ……ディスト！」

顔に笑みを浮かべながら先ほどの言葉とは反対の行動を取り始める。本棚を漁り、目的の物を取り出し始めた……

その間、研究室の外で口笛を吹きながら扉の傍に何処吹かぬ顔で立っているディストがいたとか……

―――――――――――――――――――――

Ｓｉｄｅ：？？？

「時間だ、出ろ」

白衣の男達が檻に居る僕達へと声を掛ける。その声と共に僕達は立ち上がり、開かれた檻の扉へと向かっていく。

「早くしろ！」

その内一人が遅れた為に男が強引に引き摺って檻から出す。そこには何の感情も見られない……

「聞け、導師イオンの代わりは七番目に決まった……よって出来そこないであるお前達は生きているだけ邪魔な存在だ……お前達を廃棄する事が決まった」

ハイキ……ハイキってどういう意味？うろ覚え的な記憶からその言葉の意味を探し出す。そして、頭から引きだされたその意味により彼はようやくこの状況を理解した。

あぁ……ようやく死ねるんだ……

導師の代わりとして作られ……適性がないと判断された僕に残っていたのは意味のない……唯呼吸をするだけの生の時間だけであった。

先に死ねた一番目が羨ましいなぁ……僕達がこれまで殺されなかったのは成功作が生まれない場合での検討によるものだった。だから、成功作が生まれた以上僕に与えられる時間はもう無い。

暗い通路を足枷を付けられながら歩いていく……横には白衣の男達が傍に居る。たとえ逃げようとしてもレプリカである僕達の体力なんて底が知れている……逃げる……どこに逃げるって言うんだ？

こうして、何十分経っただろうか……気づけば足元が岩場のような場所になっている事に気がついた。周りには真っ赤に燃える熱い溶岩……ここが火山である事がわかった……

「よし、行くんだ」

僕達は男の言われるがままに足を進めて行く……盛り上がった坂道のような道を進んでいく……途中他のレプリカが転ぶがそれでも強引に立ち上がらせて再び歩かせる。岩で足を怪我して「もう歩き

たくない……」と訴えても無理やりに歩かせ続けた……

そして、遂に終着点へと辿り着く……

「此処でいいな……」

「そこに並べ……順番にだ」

生まれた順番は関係なく、僕は一番右端に並んだ。そうしてから彼らは先ず一番左のレプリカの手を引っ張り出す。

「降りろ」

その言葉が引き金となった……彼は自ら高台から飛び降りたのだ……その先は溶岩の溜まり場であるというのに……いや、自分のしている事に疑問を持っていないんだろう。だからあんな事が平気に出来るんだ……

「次……」

また一人、また一人と高台から飛び降りて行く……その様子を見ていた白衣の男達はどこか……

――楽しそうな顔をしていた……――

その顔に彼はどこか恐怖を感じた。それと同時に、自分の隣のレプリカが呼ばれた……

そして、先ほどと同じ言葉を紡ぐと同時に……飛び降りた。

「こいつで最後か……」

「すげぇな、たとえレプリカっていっても人の形をした物が溶岩の

中に入る様子ってのは……そうお目に掛かれるもんじゃねぇよ」
「そんな事を言ってないで早く終わらせるぞ、時間の無駄だ」
「じゃあ次」

その言葉が紡がれた……その言葉に反応するかのように僕の体は彼らの方へと向かっていく……所謂刷り込みによる物なのだろう、逆らえる事なんてできやしない……別に逆らうつもりはない。どうせ直ぐに終わるんだから……

「降り……イ”ッ！！」

その言葉に反応して飛び降りようとした……だけど、突然自分の横に居た男が倒れ込んだ。今まで無かった様子に彼は困惑した……

「どうした！なに……ガッ！！」
「お、おい！！」

言葉の最後に奇異な声を出しながら次々と倒れて行く白衣の男達……どういう事……いったい何が起こっているの……？

こうしている内に全ての男達が倒れ込んだ……そこに立っているのは僕だけだった……
しばらくすると、ローブを着た何者かが岩陰から現れる……手に何かを持って……たぶんあれで男達に何かやったんだろう……そんな気がした……

「間に合わなかった……のか……」

目の前の人物は悲しそうな声を出していた。僕は彼が何故悲しいのか分からない……

だけど、そんな事どうでもいい……

僕は廃棄されなければいけない存在なんだから……

「おい、待て！」

後ろから声が聞こえる……だけど、どうでもいい……僕にはやらなければいけない事があるんだから……

そして、遂に彼は……

「やめろおぉぉぉ――――――！！！！！」

そこから飛び降りた……

重力に引っ張られて落ちて行く体、段々近づいていく熱の感触……落ちたらすごく熱いだろうなぁ……だけど、直ぐに終わる……気にする事はない。僕は目を瞑ってそのまま流れに身を任せて行く……そう、このまま……

ガシィッ……！！！

だけど、突然の感触に目を大きく開いた。目の前には誰もいない……後ろに誰かいる……

誰かが僕を抱きしめた……

バシュッ……！！！

視界に映った誰かの左腕から紐のような物が伸び始める……それは僕が飛び込んだ場所の岩へと突き刺さり、伸びた紐は次第に張り始める。

だけど、もうすぐ溶岩に着く……このままだと僕もろともこの人は……

「うがあぁぁぁぁ――――――――!!!!!」

ズジャジャジャジャッ――――――――!!!!!

そんな時に僕はとんでもない物を見た……何と、彼は僕を抱きしめた右腕もろとも紐を右手で掴み上げたのだ……当然落下速度から発生した衝撃は生身の人間の体には耐えきれず、摩擦により彼の右手は皮を破り、血を流させていく……それでも止まらないと判断して今度は体を大きく揺らすと共に僕達は絶壁の岩の方へと振り子の動きで向かっていく。

ダダダッ……!!!

彼の足が岩に着くと同時に力強く踏み込んで力のベクトルが下から上へと強引に転換させた。それを何度も繰り返し、突起の多い岩場を段々と駆け上がっていく。そしてついにその力の奔流は立ち止まった。斜めに広がった突起場所が見つかり、最終的にそこへ着地したからだ。

男は息を上げながら僕をそこへ横に寝かせる……そして手をかざすと同時に淡い光が流れ込んでいく……それはとても心地よかった。

「すまない……お前だけしか……助けられなかった……」

彼のその言葉は僕にはもう届いてなかった……緊張と疲労のあまりかそこで気絶してたらしい。だけど最後に見た光景は……

自分の事を心配そうに見つめる蒼髪と紫の瞳を持つ男の姿であった……

第７６話（後書き）

やっと六神将全員集合です……ホント長かった（泣）

第７７話（前書き）

ちょっと別件の小説執筆で更新が遅れています。
更新待ちの読者様にはご迷惑をおかけします。

第７７話

彼が目覚めたのはベッドの上であった……いつもと違う、真っ平らな板の上に唯シーツを被せて作られたような簡易なベッドとはかけ離れた柔らかい心地がするベッドであった。

とりあえず彼が先ずした事はそこから起き上がる事であった。だが、体を起こそうとする度に全身から針を突き付けられているような微痛が奔り出す。体をよく確かめてみると包帯を巻き付けられており、体中何かを塗りたぐられた様な感触がある。

ガタンッ……！！

「……！？」

「……ｚｚｚ」

突如横から物音がしたので驚きながら首を音の方へ向けてみると、そこには椅子に座りながら眠り続ける男がいた。余程疲れているのだろうか、不安定な姿勢で眠っているにも関わらず起きる様子が一向にない。

声を掛けてみようと考えはしたが、男の姿を見て戸惑っていた。彼が見る度に嫌な気分になるような白い服……白衣を纏っているからだ。もしや、この男もあの研究員達の仲間では……そう考えていると……

「ン……んんぅ……」

傾けた首を起こし始め、徐々に目を開きだし始めたのだ。いきなりの出来事に彼も驚き、そのままベッドから体を起こした状態のまま固まっていた。

「ふあぁぁぁ……」

大きな口を開きながら欠伸をして男は首を鳴らす。固くなった首の筋がゴキンと音を出した。背中の筋も腕を大きく伸ばしてコリを解し始める。そして、ようやく意識が覚醒したところで……

「目が覚めたか……どこか痛い所とかフラフラするとか無いか？」

「ぇ……無い……よ……？」

「そうか……なら良い」

男は椅子から立ち上がり、部屋にある別室へと入って行った……しばらくすると、少しばかり大きなパンやスープ、水が入ったコップを乗せた台を持ってきて彼の横にあったテーブルの上に乗せる。

「スープは少し冷めちまったが、食えない事はないな……とにかく食べろ、今のお前には栄養をとるのが一番だ」

目の前にあるのは彼にとって御馳走と呼べるような食事であった……実験生活で食べていた食事と言えば味もそっけない冷えたドロドロな物、むしろ残飯の方がマシと呼べるようなものだったからだ。

だけど、まず彼がしたかったのは食事ではなかった。

「アンタ、誰だ？」

「おいおい、初対面な人間には敬語を使うって教わったりしなかったのか？いや、元がアイツだからこうなのかもな……？」

「質問を質問で返さないでよ……」

彼は少し呆れつつも真偽を問い続ける。

「まぁいいか、俺の名前はハーミットだ……ここダアトでは軍医をしている者といえば……わかるか？」
「……」
「だんまりかよ、まぁ……どうして自分が此処に居るのか自体分かってなさそうだからな」
「……ッ！？」

そうだ、僕は廃棄されるべくしてザレッホ火山に投げ込まれて……あれ、それは違ったっけ……？でも、確かに落ちた筈だ……じゃあどうして僕はまだ生きているんだ？

――誰かに助けられ……た……？――

彼の頭からあの時の記憶が鮮明に蘇ってくる。熱く真っ赤に煮えたぐる溶岩の川……鼻を突くような刺激臭を含んだ空気……誰かに抱きしめられた感触……悲しそうな顔……顔……蒼髪の男！！

「アンタは……！？」
「ようやく分かったって感じだな、いきなり飛び込んだから流石の俺も焦ったぜぇ～？右手怪我してまでお前を掴み上げたからねぇ……」

ホレッ……と言いながらハーミットは自分の右手の掌を彼の方へ向ける。そこには深く抉れたような跡が新しく出来た皮膚で傷跡として残っていた。

「聞きたい事はまだたくさんあるだろうが、お前はまずは体を休める事が先決だ……自分の体が求めている事をやる事が一番大事だ」
「……」

「……どうした？」

ハーミットは良く見てみると、彼が顔を俯けて無言のままである事に疑問を持ち、声を再び掛けてみる。

「……して……」

「ん……？」

「どうして助けたりなんかしたんだよ！！」

何かが弾けたように彼は叫ぶ。その表情には怒りを含んでいて、どこか悲しそうな顔であった。

「僕は……僕は死にたかったのに……」

「どんな命であってもそれを粗末にはしてはいけない……」

その言葉にどこか妙に気に障り、ハーミットの胸倉を掴み上げる。

「どんな命であってもだって？お前なんかに、僕の……レプリカの気持ちなんかわかってたまるか！！」

そうだ、分かる筈がない……レプリカではないこの男に僕達レプリカの気持なんか……

「……わかってたまるか……か……じゃあ、わかったとしてもそれはそれでお前はどうされたいんだ……？」

「えっ……？」

「同情でもされたいのか？『自分はレプリカです、可愛そうな人間です』ってアピールされたいとでも言うのか？」

「それは……！？」

そんなことなんかじゃない！！じゃあ、僕は……どうしたいんだ……？

「それにお前、死にたいって言ったな……それは、本当か？」

「そ……そうだ！！僕はレプリカだ！！人間に混じって生きて行く事なんて夢物語なんだよ！！虐げられ、軽蔑されるだけさ！！そんなのがどう生きていけっていうんだ！！」

この時、僕はこの時だけ己の言葉を後悔した……彼の逆鱗に触れるという愚行をした事を……

「お前、自分がこの世界で要らない人間だと言いたいってことか？」

「当たり前だろ！？どうせ……」

ガシッ……！！！

「むぐっ……！？」

彼がそれ以上の言葉を紡ぐ事は無かった……口の上からハーミットが掴み上げたからだ。わずか１０歳程度の体重でしかない彼の重さなどハーミットにとっては少し重い物でしかない為に持ち上げる事が出来た。

「ん――――！！！ん――――！！！」

「暴れるなよ……」

どれ程暴れようとも、ハーミットの手は離す気配など微塵もなかった……そのまま彼を引き摺り、窓の近くへ来ると次には左手で窓を開ける。そして……

――次の瞬間、彼を掴み上げた右手ごと窓の外へと出した――

「んん――――!!!」

この行動から彼はハーミットが何をする気か分かった。とっさにハーミットの右腕にしがみ付きながら手を口から振りほどこうとする。

「何してるんだ……暴れるなと言ってるだろうが……」

グイッ……!!!

しかし、非常にもハーミットはさらに外へと自分ごと身を窓から乗り出して来た。完璧に腕だけに支えされて注吊りの状態と化した。窓の外はかなり高い所だ……約三階の高さはあるだろう……ここから落ちれば人間の体などひとたまりもないに違いない……

もちろん、彼も例外ではなかった……

「あの時みたいに溶岩の中に突っ込まないから一瞬で逝く事はできないかもしれないが、十分に死ねる高さからの衝撃だ……代わりには充分だろ?」

「んんん――――――!!?」

「お前が死にたいって言ったんだ、だから俺はお前の手助けをする……別に可笑しい事はないだろう?」

何をしてるんだこいつは!?頭のネジが何本かイカれているのか!?

その姿に彼は恐怖し、さらに必死に手をハーミットの右腕にしがみ付ける

「しがみ付くな……必要ない……」

だが、冷酷にもハーミットは左手でその手を振り払う。重力が顎のみに掛かるようになるとますます恐怖を駆り立てる。

どうしてこうなったんだ……僕はただ、死にたいと言っただけなのに……なのになんでだよ……こんなの違うよぉ……

いやだ……いやだ……いやだ……いやだ!!!

死にたくない……

死にたくない――――!!!

彼は悲しくなった……本能のまま、今自分が望む事を……頭の中で生を渇望した。その思いによって目からは涙が溢れてくる……その様子を見たハーミットは暫く数秒眺めた後……

――――彼を部屋の中へと戻していった――――

ボスンッ……!!!

そして、ベッドの上に横たわせる様に置いてやった。次の瞬間、すすり泣く声が彼から出てくる……

「う……うぇ……ひぐっ……ぐすっ」

「本心を隠してばかりでは本当にしたい事も見つからない……嘘を付くのは止めろ」

「死にたくない……よぉ!!生ぎ……だい……よぉ!!」

「そうだ、それでいいんだ……」

ハーミットは彼の頭に手を置いてやった。そして、優しく撫でて

やって落ち着かせてやる。

「生きたいって思える事、それはレプリカも被験者も関係ないんだ……己が人間であるって証拠だ」

「人……間……」

「だいたいなぁ……お前がレプリカだとかそう言うのは正直いって馬鹿にされない人間などいないっていう事みたいな物だ、大した事など無い」

「……」

「まだお前は産まれたばかりの赤子同然だ……空っぽなのは当たり前だ、だから生きてみろ……どんな形であっても生まれてきたからには、一生懸命生きないといけない……それが人間の“義務”って奴だ」

「でも……僕は……」

どんなに言葉を飾ったって、結局はレプリカイオンの出来そこないだ……

トンッ……

そう考えていると、彼の胸当たりにハーミットが指を指してこう言った。

「お前はお前だ、それ以外の何物でもない」

「……！？」

初めてだった……実験場に居た頃は誰も僕の事を認めてくれはしなかった……でも、この人は自分は自分だと……そう言ってくれた。

「そう言えばさっきからお前としか呼んでないな……名前は何がいいか……」

ハーミットは考え始める。レプリカ達は名前など付けはしない……だから自分の名前など無いに違いない。そう考えていたが、彼の場合は違った。

「……シンク」
「んっ……？」
「シンクでいい」
「へぇ、名前があったのか？」
「違う、僕が付けたんだ……前、研究員の一人が僕の前で『同位数値［シンクロレベル］が問題だったな』って呟いていたから……その言葉の一部から……ね」
「そうか……」

ハーミットは、シンクに生きる希望を持って欲しい……そう願った。

「よろしくだシンク、そして……初めまして……かな？」

生まれてきた事を憎んで欲しくない為にも……彼の為に役に立ちたいと、そう思った。

第７７話（後書き）

次は２００万Ｈｉｔ記念小説です。

２００万Ｈｉｔ　特別編（前書き）

＊殆どカオスな内容です。
時は本編約２ヵ月前の設定です。

２００万Ｈｉｔ　特別編

「え～……今回集まって貰ったのには重要な話がある」

ダアトの一室である会議室には治癒師団達の重役と言える者たちが今回集まっていた。

もちろんその筆頭はあの医学界の異端児と呼ばれ、貴族医師達に忌み嫌われているハイル・シュヴェール兼ハーミット師団長である。

「ディノが付けてきたダアトでの経理による貸借対照表や損益計算表から出てきた問題なんだが……」

そう言って一言止めて、決意して語る……

「ぶっちゃけ患者が少なくなりすぎて経費が回ってきません！」

「「良くも悪くもアンタの責任だろうが！！！」」

誰もがハーミットに向かってそう叫んだ……それもそうだ。

診察室に行けば人間として終わる。薬で眠らされて解剖されかける。魔改造される可能性大……等などともはや恐怖の象徴としてしか神託の盾騎士団（オラクル）達に見られていないこの頃である。殆どの噂の元が彼による物だが……

その為に誰もが必死に病室という名のある意味拷問室に入るのが怖い彼らは必死に健康に気遣って、怪我以外で入る人数が少なくなっていた。

「というより、他の所で何者かが勝手に俺達ん所の経費くすねているという情報が流れているのも報告がある……ヒュー」

「はい……私が他の師団員達から噂から始まって集めた情報なんですが……」
「何か問題があるのか……？」

「その原因が全部、師団長達の“趣味”による無駄遣いなんですよ」
「「死刑！！」」

「早いね審判の時間が……！？」

自分達の師団長の行動結果はともかく、そんなふざけたことで自分達の給金が減ってるなんて知った団員は怒りの声を張り上げて彼らの運命を定めた。

「それじゃあ続き頼むわ……」
「あ、はい……え～まず……ラルゴ師団長ですが……」
「え、ラルゴ……？」

「教団服のお洒落に気遣って何十着とバラエティ溢れる物集めて来ています」
「「マジですか！！」」

「そういや気になってたんですけどラルゴ師団長の襟部分にあるあの飾り、何なんですか！？」
「ヤマアラシ！きっとそれを意識して作ったんだと思うよ！？」
「いや、それなら総長の方が負けてないぞ！実質あれってエリマキトカゲじゃなくね？」

酷い言われようである……会議室では怒涛の討論が飛び回っていた。

「え～続けます……次にシンク師団長……」

「訳ありな仮面コレクションを部屋に飾るほど買い漁ってました」

「「何故に訳あり!?」」

アイツか、アイツの影響なのか!?……すっかり暗黒面では磨きが掛かっちゃったんだね!?

「そういやこの前オークション広場へ行って落札してきたって聞いたな……」

「なんでもとある反英雄が被っていた恐竜の頭蓋骨みたいな仮面だっけ……」

「ちなみに落札値段は……？」

「７５０００Ｇです」

「うわぁ……俺のこの前の給金と大体一緒だ……」

シンクの奴……軍事で顔を見せる時での仮面から始めたんだな……そういやあの仮面ちゃんと前見えてんのか？ますます謎だ……

「そして三人目ですが……先生、貴方の娘さんです……」

ギロッ――――!!!

「あー……その……すまん……」

とりあえず謝っておいた……アリエッタ、お前もか……

「アリエッタちゃんはというと……ライガ達のおやつで“特大ウェディングケーキ”を注文したことからです」

「「ケーキの用途が違うだろ！！」」

そ……そういやこの頃馬小屋近くに住んでるライガ達の胴回りが太くなった気がしてたが……やっぱり太ってたのか！？運動不足だと思ってたが、それが原因だったのか……

「そ……そして、残るはリグレット師団長と……総長なんですが……」

「どうした……」

「これ、言っていいのか正直迷います……」

あー……そりゃオラクルの実質的ナンバー1と2までもが金パクってるなんて報告はしぶるだろうが……此処は勇気を出せ、ヒューよ。

「別に良い。続けろ……」

「では、リグレット師団長ですが……」

「内容がベーコンレタスな自筆の本を自費出版しています……」

「「腐女子かい！！！」」

あれなのか！！リグレットはＢＬが好きなのか！？ＢＬはリグレットなのかあぁぁぁ――――！！！！！

「タイトルは『剣とメス』……とある医師と騎士団長を主人公とした青少年のお互いを想い続ける想いと本音を物語が進むにつれて曝け出していき、最後には「ア――――ッ！！」をしてＨＡＰＰＹＥＮＤな一部の女子のファンからは人気なＢＬ小説です」

「……内容的な物とあの人の周り的存在からしてモデルって……」

団員全員がハーミットに視線を向ける……やめて！俺をそんな生ごみを見るような目で見ないで！！俺は正常よ――――！！！

「ち……ちなみに著者名は……？」

「ジゼル・オスローです」

うおいいいぃ――――！！！いくらダアトで本名伏せてるからってそれは無いでしょそれはリグレットさあぁぁぁ――――――ん！！！！！

「止めだ止め！！次々次々！！」

「はい！！最後に総長ですが……この方が……一番の浪費です」

「何やってるんだあの髭は！！」

「自室に“メシュティアリカコレクションルーム”なる改装及びその収集の為に掛かる経費です」

「あのシスコン変態パイナップルボンバアァァァ――――があぁぁぁぁ――――――！！！！！」

あの野郎、より一層悪くなってるじゃねぇか！？自室をその為に態々改装って何よ！？てめぇ主席総長ナメてんのかあぁん！！

「実は、今回はその証拠となる映像を第二師団より拝借した映写機なるものを使って捉えたんですが……どうぞ」

カラカラカラカラ……

映写機のフィルムが回り始める……その一齣が一つの映像として連続してまた次へと移って形を成していく。音も次第に聞こえ始める。

「お……映った映った……どれどれ？」

――今帰ったぞ☆――

ピシピシィッ……！！！

映像からの声が響いた瞬間、会議室にいた全ての人間が硬直した。

何故って……？

そりゃあ大の大人が甘い口調で発生させた声を聞くなど誰が想像しただろうか……

しかもその相手がヴァン総長……

しばらく固まりつつも、映像を彼らは眺め続けていた……が……

……

「いやあぁぁぁぁ――――――！！！！！」

「ぎゃあぁぁぁぁ――――――！！！！！」

「きもっ！！これ以上見てられねぇ――――――！！！！！」

「オウマイガアァァァットオォォォ――――――――！！！！！」

突然の阿鼻叫喚な状況へと即変化した……なんせ……

“ヴァンが妹の姿をプリントアウトしたピンクのパジャマを着た姿”など誰が見たいとおもうだろうか……そして、その次には彼お気に入りのメシュティアリカ人形（スケール二分の一）を抱いて……

――――さぁ、今日も一緒にお兄ちゃんと寝ようかメシュティアリカ♪――――

「あぁ、ヒュー先生が口から泡を！？」

「メディ――――ック！！！」

「いや、俺ら医者じゃん！！」

「くあせｃふぉいかなヴぁｖ；ふじこ！！！！！！」

「ディノ先生！！最後の良心が壊れたアァァァ――――――――！！！！！」

もはや事態は収拾着かなくなりつつあった……カオスはこのまま……

ドゴオォォォォ――――――――ンッ！！！！！

終わらないかに思えた……突如の爆発音が発生すると騒いでいた師団員達は石像へ早変わりしたかのように硬直する。そして、その音の発信源を視線で探ってみた所……

「……♪」

シュウゥゥゥ……

無言のまま笑顔でいるハーミットが居た……しかも、彼が座っていた机を己の右手で二つにへし折ってだ……

「エレナ……」

「は、はい！！なんでしょうか！！！」

何時ものんびり口調なエレナもさすがのハーミットの雰囲気に気圧され、軍人的な喋り方に変化する。

「問題です、病原菌はどうすれば死滅させるのに効率がよいでしょう」

「え、えっと……しょ……消毒です！！」

「うん正解♪それより思うんだよねぇ……」

次の言葉で治癒師団員達は改めて我らの団長が恐ろしい存在か知ることとなった。

「この馬鹿共……特に髭……消毒しにいっていいか♪」

「「え”……！？」」

「ラルゴは皮膚を『ゴゴオォォォゥン！！』してその上に『ドシュ

ッ！！』とやってやるのはいいしさ……シンクは一度手袋した手で後ろの『グシュッ！！』から突っ込んで『デリュゥッ！！』を出してもいいよね……アリエッタは……拳骨5回ね……んでリグレットは一度見た事あるバチカルのゲイバーに放り込んで『ドルルルルルッ！！！』な事を従業員達に頼んで『バキュウゥゥゥゥ――ン！！！』してやればいいし……そして最後にあの変態だが、まず奴の『パオォォォ――ン！！！』を去勢して後ろの『ひぎぃっ！！』を杭で串刺しして火であぶって街中に晒してやるとするか……」

「（ひいぃぃぃぃ――――――！！！）」

久々に見てしまった……彼の……ＵＳＤ，Ｖｅｒを……

聞くに堪えない伏字をしないとアウトな言葉が雪崩のように無表情のまま紡がれていく。

そして、遂に座っていた席から立ち上がる……

「ちょっと一日留守にするわ……その間仕事少しよろしくね♪」

「Ｓｉｒ，ｙｅｓ　ｓｉｒ！！」

ここオールドランドで知る筈のない英語を紡げたのは彼らの危機感が天元突破したからに違いない……

真実は誰にも知らないが……別にどうだっていいだろう……

――――――――――――――――――――――――――――

≪翌朝……≫

そんでもって彼が宣言した時間が過ぎ去った……

この日は全体的なオラクル騎士団の全体集礼だったのだが、第六師団長カンタビレは疑問に感じていた……なぜなら、師団長の半数

が来てなかったからだ。

「まったく、総長までなにやってんだか……もうすぐ始まっちまうというのにね」

彼女も彼女なりに上に立つ者としての心構えを示す事は重要な事として認識しているからだ。

「アッシュ、アンタ総長の事知らないかい？朝から全然姿が見えないんだけど……」

「……カンタビレ」

ガシッ……！！

アッシュはカンタビレの両肩をいきなり掴んで正面に向き合った。

「な、なんだい！？」

「悪い事は言わねえ……今はヴァンの事は考えなくていい……いや、考えるな！！」

「う……うぇ！？」

「シンクも、ラルゴも、リグレットも……お、俺は何も見てねぇ――――！！！俺は悪くねぇ――――！！！」

そう叫ぶとアッシュはすぐさま集合場所へと戻って行った。そういや、今奴の隣にいるアリエッタは涙目でぐずりながら立ち並んでるのが見える……良く見ると、頭に五段重ねの大きなタンコブが出来ている……

「……いったい何がなんだってんだい……」

―――――――――――――――――――――

≪その頃、哀れな被害者たちは……≫

「あははは……僕はもうお終いなんだ、空っぽなんだ……」

「背中がアァァァ――――俺の背中がアァァァ――――――！！！」

「いやあぁぁぁぁぁ許してマルセルウゥゥゥ――――！！！お姉ちゃん謝るからアァァァ――――――！！！！！」

「な……ない！！私の……『ピ――――』が……無いぃぃぃぃ――――――！！！！！！」

精神危険度Ｌｅｖｅｌ５までと一時的になり、幻覚をみたり、錯乱したりと夢の中でも地獄を味わっていたとか……

ちなみに、今回ディストはハーミットの忠告を聞いて余計な出費をしなかった為に彼のＯＳＨＩＯＫＩは免れたそうな……彼曰く、「命あってこそです……嫌ですからね！！あんな目に会うなんて！！」と必死に防衛術を身に付けれていたそうな……

２００万Ｈｉｔ　特別編（後書き）

ヒャッハ―！！汚物は消毒だ！！

……すみません、調子扱きました……ハイ……

第７８話（前書き）

あと４・５話くらいで本編に進めるかもです……よくここまで続けれたと自分を褒めたい位ですね……

第７８話

『やぁ、元気でやってるシンク？
君がダアトへと行っちゃってから孤児院の皆も寂しくしてるものさ
という訳で、その分だけ僕の時間が減ったって事を覚えといてね
（怒）♪
ハーミットの所で何か役に立てる事はないかと言い出した時はア
クセル共々驚いたよ。
そんな訳で君の立場を上手く利用してダアトに潜り込む為の工作
を一緒に考えてあげた
事には感謝してよね？
というか、実質ヴァン用の心理作戦だし……簡単だよね♪
これからもシンクは兵士としてダアトでスタートを切るだろうけ
ど……さっさと出世し
ておいてね、じゃないと僕達が楽し……手伝えないんだからね？
数カ月とはいえ、僕直々に兵法と拳法を叩きこんだんだから……
半端なのは勘弁してね♪
それじゃあ頑張ってね♪

ＰＳ：もしも僕のアリエッタ苛めたりしたら帰って来た時にＯＨ
ＡＮＡＳＨＩだよ☆』

ビリィィィ――――！！！

「ふ・ざ・け・ん・な！！」

何が言い出しただよ！アンタが強引に言わせたんだろうが！！
それに、楽し……って何書こうとした！？楽しめないって書こう
としたでしょ！！

拳法はともかく、兵法は強引に叩きこんだ方じゃないか！！

――――――――――――――――――――――――

《一か月前……》

「山岳での盗賊討伐による任務でだ、山で戦うにはどんな方法が効率いい？」

「各部隊による譜術中心の戦法で戦い、最終的には武器を行使しての……」

「馬鹿ですか？」

ピシィッ……！！（鞭で叩いた音）

「～～～～～！？」

「山岳では地形が荒いし木々も多いよね？そんな所で譜術やってちゃ木々が邪魔でしかたない……力の無駄遣いだって事、わかる？」

「いや、僕この問題初めてだから分かる訳ないだろ！」

「分かる分からないの問題ではありませんよ、叩きこみなさい……正解は部隊ごとではなく何層かの包囲陣を作って高地や渓谷へと追い込んでいくんです。最初から攻撃に転じてしまっては能率が悪いし、時と場所を考えてやった方が断然と楽でしょ？」

「そんなことより、なんで正座でアンタの講義聴かなきゃいけないんだよ！」

「終わるまでし続ける事ですよ？その体勢を崩したければ一秒でも早く問題を解くだけですよ♪簡単じゃないですか♪」

「うぐっ……」

「あぁそうそう、勝手に正座は崩したらダアト式譜術の上にプラス十問ですからね……ハイ、頑張りましょうね♪」

「ちくしょおぉぉぉ――――――！！！！！」

――――――――――――――――――――――――

苦しかった……思えば、アイツに出合った時点で僕の人生は不幸方面へと変換したのかもしれない……まぁ、お陰で参謀長の地位をヴァンの計らいで貰う事が出来たんだし……複雑だ。

「というか、車椅子のまま使える格闘技ってなんだよ……卑怯じゃないか、ぶんまわしなんて……」

孤児院に居る頃、何度かイオンと手合わせしたけど……あれは凶悪だった……

譜で強化した身体で車椅子の上で飛燕連脚モドキをしたり、車椅子自体を使って攻撃してきたりと……怪我人かよ!?と突っ込みたくなる戦法を目の当たりにしてこいつにそっくりなレプリカなんて本当は生まれない方がよかったんじゃないか?と自分自身を納得させたりもした事があった。

「そういえば、ハーミットも言ってた事があったっけ……」

――本当にかなり忙しくなるから……薬ぐらい出しとくから……まぁ頑張れ――

「あれってどういう意味だったんだ?」

ガチャッ……

「シンク響士、今月分の資料持ってきました」

「あぁ、そこに置いとき……」

ドサッ……

「いや～重かった……」
「ちょっと待て！何この三段弁当箱くらい分厚い書類の量は！」
「その、ヴァン総長が別件にて先行している仕事があるようでして……その為にあの方の分がシンク響士に回って来るという流れな物で……」
「……全部……やれっていうわけ……？」
「はい、ちなみに……今日以内に終わらせなければ減俸らしいです」
「ふざけんなぁ～～～！！！」

シンク、ダアトにて始まったオラクルでの仕事は大量の書類仕事であった……
頑張れ参謀長！負けるな参謀長！！
明日があるさ……たぶん……

―――――――――――――――――――――

Ｓｉｄｅ：リグレット

「訓練指南ですか？」
「うむ、とある人物をお前自らの手で訓練を施してもらいたいのだ」
「そんなこと言われましても、私にも公務という物が……」
「その事は心配しなくても良い、カンタビレとアッシュに調練や任務などを廻してお前の分を援護してもらう事にする」
「……失礼ながらお聞きしても……閣下」
「なんだ？」

この男の元に付いてもう一年が立つ……全ては復讐の為に牙を研ぎ続けてきた。
再び何度か奇襲をしかけたりもしたが、どれも全て失敗に終わってしまった。

ヴァンは自分を殺そうとした者であるにも拘らず私を副官として扱っている……なぜこうも私に執着するのかが未だ分からない……

「ふ……突然何を言い出すのかといえばそんな事か」

「……？」

「私はお前の人間としての面を気に入っているのだ……この世界の殆どの人間は抗う事の意味を忘れている……そんな中、お前という存在は私にとって必要不可欠な存在だ……お互い痛みを知る者同士だからこそ、この計画にとってはな……」

「つまり、閣下は私が裏切らないとでも……？」

「さてな……そこはお前自身の判断に任せるとしようではないか」

私はこの男が未だわからない……今口にしている言葉さえ本心なのか怪しい。

反対に、私の方が曝け出されようとされる感覚が何度も襲いかかるのだ……

「では命じよう、リグレット奏手……今からお前をティア・グランツの訓練指南役へ任命する」

私に、この男を“知る”日は来るのだろうか……

―――――――――――――――――――――

Ｓｉｄｅ：ディスト

「まったく、相変わらず此処の食堂は不味いですね……」

こんなのでは研究をする為の糧になるか分からないもんですよ…

…まぁ、殆ど籠りっきりな私が言うのもなんですが……さすがにこの味はありませんね……

これじゃあハーミットが偶に作ったリゾットの方が断然マシですよ。

それにしても、何で相変わらず私が座る席の周りは人が居なくなるんですか？

苛めですか！？それとも不快とも言うんですか貴方達は！？

この天才ディスト様と食事を一緒にとれる事を光栄に思わないとはとんだ不届き者ですよ！

……別に、寂しいと思ってるんじゃないんですからね……クスン……

「あれぇ～ディストじゃん！？」

……誰ですか、私の名前を呼ぶのは……？

「なんですか？お子様がこの私にいったい何のようです？」

「ぶーぶー！！アニスちゃんはお子ちゃまじゃありませんよ～だ！！」

それにしてもこの子馴れ馴れしいですね……仮にも一個師団を率いる者ですよ私は……？

敬語を使いなさい敬語を……！！

「なんかディストすんごく寂しそうな感じだもん、友達居ないの？」

ピシィッ……！！

この時、ディストの中の何かが弾け散って行った……

「いいい居ますよ！！友達なんて一人や二人……」

そう言いながらもそれに値した気がする人物を思い出していく……

――――何してるんですかハナたれ、さっさと来なさい――――

とある眼鏡さんには囮として扱われて酷い目に会ったり……

――――よし、サフィール……今日も楽しく冒険だぜ！！――――

とある皇太子にはそのお陰で氷の張った湖に落ちる羽目になったり……

――――ディスト、お前健康診断受けたか？――――

とある医者にはその後、拷問張りの検査を受けさせられたり……

あれ、これって友達っていうの？

なんか楽しかった頃の思い出が殆どない気がするのですが……

「……」

「どうしたの？」

「いえ、人生を振り返ってみたんですが……」

「はぁ……？」

なんか妙に悲しくなってきた、重く暗い空気が漂い始める。

「え～と……その、元気だしなよ？」

「すみません……なんか」

その雰囲気を察してアニスはディストを気遣い始めた……

「……一緒に食べていい？」

「……えっ！？」

その言葉にディストはあからさまに驚いてアニスに不審の目を向けた。そして、しばらく沈黙し続け、このままでは埒が明かないのでアニスはやや乱暴な口調で言い始める。

「あー！だから一緒にご飯食べてもい～い？って聞いてんの！！」

「いぃっ、……いいですよ……？」

ディストはうろたえながらその言葉に応えた。けど、その顔はどこか嬉しそうで……でもその顔を隠そうとしたりもしていた。

しかし、ここで再び直面すべき問題があった……お互い特に話題が無いのだ……確かに、今まで面識がなかったのも理由ではあるが……

「「……」」

沈黙が痛いくらいに続く……

なんとか会話をしようとアニスが先に口を開こうとする。

「あ～……そういやディストって六神将でどうしてんの？」

「どうしてるといいますと？」

「六神将って良く戦闘する任務多いじゃん、ディストは何やってんの？」

そう説明すると、ディストは「あぁ……」と手を打つ。

「もちろん！私は譜業の天才ですからね！自分から戦うなんてそんな真似しませんよ」

「（おい、自分で天才なんて言うなよ……恥ずかしいだろうが）」

アニスは心の中で呆れながらそう突っ込んだ……

「そういえば先ほどから貴方の名前を聞いてませんが……誰なんですか？」

「ふふ～ん！よくぞ聞いてくれました！この美少女の正体はなんと、導師守護役所属、アニス・タトリン！！気軽にアニスちゃんって呼んでもいいよ♪」

「（自分で美少女っていいますか、自分で……）」

オウム返しの如く、ディストは心の中で突っ込んだ。

そんな中、ディストはアニスの顔をよく見てみた……すると、ある物が見つかる。

「おや、アニス……頬を怪我してますよ？」

「ほぇ？あ、ホントだ。午前中は訓練だったからかな？」

「訓練って……小さな体でよく頑張りますね？」

「うん、私の戦闘手段は譜術なんだ……でもあんま大したこと出来ないんだよねぇ……それにホントは導師守護役だから前衛タイプじゃないとまずいじゃん？けど私ちっちゃいし、パワー無いから……実は困ってたり？」

「それで傷を作ったって訳ですか……」

「あはは……」

アニスは誤魔化すように笑った。

それを見ながらディストは何か考え始めていた……そう思考に耽っているとアニスの背中にある物に目が入った。

「アニス、一日だけ背中の人形を貸していただけませんでしょうか？」

「え、トクナガの事？」

「はい、ちょっと面白い事を思いついた物でしてね……」

ディストは顔を二や付かせながら眼鏡を治してそう言った。

「……別にいいけど、変な事しないでよね？」

「ありがとうございます！それではまた明日！！」

楽しそうに縫いぐるみを抱えて駆けて行く……いや、（椅子で）飛んで行くディストであった。

「（超変な奴……）」

それが後に、ダアト初の人形使い（パペット）の誕生であったとは……このとき、誰も知らなかった。

――――――――――――――――――――

Ｓｉｄｅ：ハーミット

「いだだだ――――！！」

「こら暴れるな、消毒できないだろうが」

「痛ッ……沁みるね……」

今日の診察室はカンタビレが来ていた……どうやら訓練で刃引きした模擬剣で腕を怪我したらしい。

「無茶すんなよ、一気に１００人を相手での訓練なんていくらお前でも無謀だ」
「まぁ、やりすぎたと思ってるよ……」
そうしつつも、包帯を巻き終えた……そして、テープで固定してこれで終了っと……
「ほらよ、終わったぞ」
「すまないね、ありがとう」
カンタビレは怪我をした方の腕を上下に動かして機能を調べる。
満足そうな顔をしてるという事は、どうやら大丈夫なようだ。
「しかし、譜術で治さずに自然治癒に任せるとは珍しいな？」
「いいんだよ、何でもかんでも早く治っちゃ痛みになれないもんだからね」
「ふーん、兵士も大変なんだな……」
兵士の仕事は基本戦いだ……大きな傷を負うことだって一度や二度だけではない。
「……この頃ダアトでの内部がキナ臭くなってきてるもんだよ、何でも導師派と大詠士派といった派閥が現れて冷戦的な意識が現れ始めたもんだからねぇ……」
「預言についての意見分かれだろ？……よくやるもんだ全く……」
「ハーミット、アンタはどっちに付く気だい？アタシは導師派に付く気なんだけど」
「無駄な事はしたくない、トリトハイム氏と同じような中立に位置しておこうと考えておくさ」

「そういう立場ってのは案外一番風当たりが酷いもんだよ……それでもいいのかい？」
「博打モドキでここでの立場を賭けるくらいならんなモンいくらだって受けてやるさ」
ハーミットはそっけなくそう返した……カンタビレはこれ以上言う事は無いという様に会話を引き上げる。
「ま、もしも大詠士派が迫ってきたりするならあたし等第六師団にいっときな……警護くらいは付けておくよ。とはいっても、お前ほどの腕なら必要はないか」
「いや、もしよければその話乗らせてもらうよ。俺はともかく、団員達にまで危険が及ぶなんて団長失格だからな……」
「そうかい……じゃ、お邪魔したよ」
そして、カンタビレは診察室から出て行く。その後もハーミットはカルテを作成しながら思考を巡らせていく。
「おそらく、あの“イオン”を改革派の筆頭にする行動を起こしたのはヴァンに違いない……」
そうすれば、自分の行動を誤魔化す為の隠れ蓑にできるからな……アイツらしいやり方だ……
「……さてと、そろそろ準備を整えなくてはいけないか……アリエッタとシンクとアッシュは六神将としてヴァン達の行動を探ってくれる。俺も直接的な行動を起こさないでいる訳にはいかないか……」
ならば、やるべき事は二つある……

「キムラスカにはファブレ公爵の所で“爆弾”を仕掛けておこう……彼らなら話をわかってくれるかもしれない……モースをどうにかする為には少なくとも王族に連なる意見力のある人間が必要だ」

そのために、公爵夫人のバイパス手術の日程を利用するとするか……

「そして、マルクトなら……アイツに頼んでみるか……上手く潜り込んで“アイツ”にパイプ役を頼めればかなり戦力になりうる」

久々の帰国をするとしようか……密入国だがな……

「後約二年、何処まで力を伸ばせるか……やるしかないな……」

隠れての行動はいったん止める事にしよう……久々に激しくやってみるか……

……そして、舞台はＮＤ２０１７へと進んでいく……

オマケ：

「ねぇ、シンク」
「……なんだよ……」
「シンクって……歳……幾つ、ですか？」
「……12だよ……（精神年齢は本当は1歳である）」
「アリエッタ、14歳、です……つまり、お姉ちゃん」
「……だからなんだよ！」
「シンク、アリエッタの事……お姉ちゃんって呼ぶ、です♪」
「どうしてそんなことしなきゃいけないのさ！」
「……お姉ちゃんって……呼んでくれない、ですか？（泣）」
「いや……その……（汗）」
「アリエッタ……シンクよりも年上……なのに……（泣）」
「あぁもう！わかったわかった！だから泣くなってば！後でハーミットに怒られるの僕なんだからね！？」
「ホント……！？」

「お……ぉ……おぉ……」

「（ワクワク……）♪」

「お……お……おねぇ……おねぇ……／／／／／」

「（ワクワク……）♪」

「うわあぁぁぁ～～～～ぁぁぁぁぅん！！！コンチクショ――――――！！！」↑顔真っ赤

シンクは逃げ出した……
アリエッタは勝利した……

「シンク……ヘタレ……です」

そんな日常があったとか……

第７８話（後書き）

シン×アリも結構いける口ですよ、作者は……（笑）

第７９話（前書き）

もうすぐ大学始まります……長かった夏休みもこれで終了……バイトばっかでしたけどね……

第７９話

ベルケンド港では殆どが譜業用の部品を作る為の材料がマルクト中の街やキムラスカからの輸入品として送られてくる場所として有名だ。一部として生活用品も入っている事もある。そんな港にて一艇の船が入港してきた事により、船員やベルケンドからの技師達が大急ぎで荷物の取り出しを行い始める。

「そいつは壊れやすい物だから注意しとけよ？」
「よいしょっと……りょうか～い！」

台座で何組かの荷物を往復しながら馬車に乗せて行く。これだけでも相当な力仕事だ。

「うくっ……これだけ異様に重いな……」
「何注文したんだか……」

ガタッ……

「「うおぉぉぉ――――！？」」

二人が持っていた木箱がいきなり動き出した。その為、驚いてそれを地面に放り投げてしまった。

「い……今動かなかったか？」
「ま……まさか！譜業の部品だぞ注文票の記載によると……」

ガタンガタンッ！！！

そんな事も露知らず、さらに木箱は暴れ出す。その光景に周りの人間は恐怖し始めた。だが、しばらくするとその振動も止まりだす……終わったのかと思ったが……

ベキベキベキッ――――！！！

なんと、木箱から“足”が生えて来たのだ！それは木箱を破壊しつつ徐々に外へと出ようとしていた。一種なホラーな光景により、半径一メートル以内に入る物など誰もいなくなった。

バキャンッ！！

そして、ついに木箱が粉砕しながら弾け飛ばされた所に中身が現れた。黒いコートを着て、直径一メートルはあろうアタッシュケースを左手に持ち、何処からと吹いてくる風に蒼髪を棚引かせる……

「ふあぁぁぁ……よく寝た……」

神出鬼没、どうも、我らが主人公ハイル君のお目覚めなのであった……

さて、何故彼がこんな事をしてるかというとそれは六時間前に遡る……

――――――――――――――――――――――――――――――

《六時間前……》

「えぇ！？魔物を借りれないのか！？」

「ごめんなさい……アリエッタ、任務だから……」

当初はフレスベルグに乗っていく計画を練ってはいたが……予想

外の事で辻褄が合わなくなってしまっていた。

「ロニール雪山か……そうなるとベルケンドへ寄らないし……困ったな……」

「総長の命令だから……お友達、皆で行く……です」

アリエッタは今や神託の盾騎士団第三師団師団長としての役職を身に着けていた。導師守護役を解任された身である彼女ではあるが、魔物を操る能力を惜しまれたが故に埋め合わせ的に師団長の地位をヴァンは与えた。彼女の役割は移動手段や魔物によるゲリラ的戦法を担う団として名を広め始めている。もともと第三師団は魔物を従わせる師団ではあったが、それは良くて調教の形であったため、アリエッタが師団長となってからは効率的には段違いに跳ね上がったのだ。

だが……俺として心配な事があるんだ……アリエッタの団員なんだが……他は２０００や４０００といった大所帯な人数であるのに……なんと百人も満たないんだぜ？これで師団として活動できるのか？と疑問に思っていたが、十分に活動出来ていた。だがそれはいい……その団員達は表の顔は第三師団員……だが、裏の顔はアリエッタ目当てで近付いてきたファンが多かった……別名『アリエッタを守り隊』……そんなかんなで何人かそのメンバーが俺ん所に訪れに来たんだが、なんと……その時の第一声が……

『『お義父さん！！娘さんを僕達にください！！』』

『だ・れ・がお義父さんだ！ぶるうぁぁぁぁぁ――――！！！！！！』

久々に暴れたね……あの時は……でも再び何度か挑んで来てたし……

最近はさすがにないが、侮れん……イオンだけでも大変だっていうのに、たくっ……おぉっと、話が逸れたな……そんなかんなで、移動手段を一つ潰された俺は別の方法を考えたのだ。そこで思いついたのが“潜入”である。

「つー訳で……書類偽装よろしく頼むわ♪」

「いやいやいや!!無理あるからね!?それ絶対無理だからね!!」

人間としてどうかと思ったシンクに大いに突っ込まれた。

「なんでわざわざそんな方法選ぶんだよ!」

「だって俺マルクトからの亡命者だし……たとえ偽造でも入国記録は残したくないんだよ」

「だからと言って……あぁもう!分かったよ!!どうせ言っても聞かないんでしょ……」

「もちろんだ!」

「威張るな!!」

シンクの書類手続きを通してまんまと荷物に紛れてダアトからベルケンド行きの船へ乗り込んだという訳だ。木箱には空気穴をあけたりと色々用意してやったから何とか乗り越えたが、さすがに六時間は疲れた。そのお陰で眠ってしまい、冒頭へ戻るという訳だ。

「おい、見せ物じゃねえぞ……」

その言葉によって周りの人間は一目散に散っていく。暫くすると、ゴーストタウンのような静けさが訪れ、風がヒュゥ―と寂しく吹いて行った。

「……さてと、行くか」

それを無視してハイルは進んでいく。我が道を行くな感覚でだ…
…そうして辿り着いた先は……あの懐かしい場所だった……

―――――――――――――――――――――

Ｓｉｄｅ：シュウ

「だいぶ良くなりましたね、今日から薬の服用を減らしていきましょう」
「本当ですか！？」

この診療所を開いてもう何十年になるだろうか。私の医師としての立場はベルケンドに定着したも当然な年数が過ぎたに違いない。

「もう少しです、お互い頑張りましょう」
「はい！ありがとうございます！！」

若き頃の患者は老い、また新たな命が私の患者としてこの診療所を訪れて行った。時には別れに立ちあう事も一度や二度ではなかった……だが、それは悲しむことではない……なぜなら、彼らの顔は最後まで笑顔であり続けていたからだ。
嘗ての“彼”の言葉にはこんな事があった物だ……

『医者にとって一番大事なのは知識でも技量でもありません、心なんですよ……自分が患者を救おうとする勇気が備わってこそ、ようやくなんです……』
『医者は何も体を治す事が出来なくとも、心を救う事はできます…
…だから、投げ出してはだめなんですよ……』

その言葉があったからこそ、私は私としてやっていけたのだろう。

あの子は本当に素晴らしい人間だった……もしも、今でもこの診療所で働いてくれていたら……

シュウはたとえ過ぎた事とはいえ、それは今なお強い願望……云わば願いとして昇華していた。思い浮かべてみる……自分と彼が協力し合って救った患者達の笑顔や感謝の言葉をくれる光景を……

「先生、そろそろ休憩の時間です」

「そうですか、では一休みと行きましょう」

シュウは白衣を脱いで動かしてなかった肩を回してコリをほぐした。問診や検診ばかりで激しく動かないので仕方がない事であろう。

「さてと……食事でも取りに行きましょうか……」

そして、シュウは部屋のドアへと手を伸ばし、外へと出る。この先は待合室となっているので、次はどんな患者が入るか一目でわかる。だが、そんな待合室に……一人異様な空気を発している男がいた。

「……ッ！！」

シュウはその男が何者か一目でわかった……青年じみた雰囲気はもはやなく、大人と呼べる体格をしてはいるが、顔までは完全に変わる事は無かった。

蒼髪、右目部分に縦一文字の傷、冷静さを包んだ紫の瞳……

かつて、ここベルケンドの診療所にて己の助手として居たハイル・シュヴェールその人の姿が居た……

「お久しぶりですシュウ先生……お互い歳を取りましたね……」

「……ハイル……君……」

シュウは驚いていたが、意外と冷静なままであった……いきなり十年以上も行方不明だった彼が突如目の前に現れたがためにどう反応すればよいかわからないからに違いない。

「時間がありません……手短に用件を伝えに来ました……これを……」

そう言って、ハイルは二通の手紙を渡した。

「これは……？」

「一通はブリジスト侯爵へ、そしてもう一通は前者の彼を通してとある“お方”へ……」

「内容はどんな物だい？」

「すみません、ダアトにとっても最重要機密でもある事が書かれています……中身を知れば貴方にまで危険が及ぶ可能性がありますから封はそのままで……」

「……」

ハイルはシュウにパイプ役を頼んだのだ……来るべき秘預言についての全貌を一気に記したこの手紙を王宮で意見力のあるゼノン・フォルト・ブリジスト侯爵の力を借りて“彼”へ届ける為に……

この手紙の内容を信じてくれるかは“彼”次第だ……アクゼリュスへの救援措置に対しての意識を深めて欲しい……アクゼリュスはマルクトにとって貴重な鉱石を産出する場故に採掘を止めるのは経済的にまずい……このまま知らずに危険な状態になってから採掘を止めてすぐさま救援という訳にはいかない……その理由は王宮の議会の決定、そのための人件費、等とｅｔｃ……

だから、早めの対策が一番だ……青臭い言い方かもしれないが、ここはアイツの言う友情に賭けてみるしかないのだ。

「ふふふ……」
「どうしたんですか？」
「あいかわらず、君は私が驚くような事しかしないんだなと思い返してしまってね……」
「……まぁ、自分も色々危険な橋を渡ってきましたから……慣れですね」

世間話でも暇つぶしの会話でもないのに、二人は何処か楽しそうな顔をしていた。

「わかりました、君の決意……無駄にはしません……」
「すみません、出会って早々にこんなこと頼んでしまって……」
「いや、君にとってこれは正しい判断だと思いますよ？」
「そう言ってもらい、感謝します」

互いに握手をし、此処に小さな契約がなされた事が証明された……

「ところで、これからどうするつもりだい？港の船はあと三時間しなければ戻ってこない筈ですが？」
「いえ、船では帰りません……別の当てがありますからそこを訪ねようかと……」
「……もしかして……」
「えぇ、そのもしかしてです……」

―――――――――――――――――――――

Ｓｉｄｅ：クロード

「こっちです、先生……」

まったく、久しぶりに出会ったと思ったら唐突すぎますよ……例の“アレ”を貸してくれだなんて……アレとは、僕が昔作った原動機を使っての試作品だ……けど、本来は馬車とかの大きな乗り物系に付ける物だったんだけど、乗り物としては小さく作りすぎてしまってパワーが強力になりすぎちゃった所謂失敗作……

「もう十年近くは経つが……大丈夫なのか？」

「心配いりませんよ、保存はしっかりしましたし……何より、軍とかの目には入れないよう外へ出した経験なんて殆ど皆無ですから」

けど、先生のアイディアでフォルムや機能の追尾性、新しい装置を作り治した……だけど、それでも人一人では余る代物だよ……

「あ、今すぐに灯りを付けます」

そして、僕はフォニム灯のスイッチを押した……その瞬間、それらは“アレ”を激しく照らし出し始めた。

「……（ピュ～♪）」

「もう一つの案として“スクーター”という機能を追加して陸海両面の移動を可能にさせた僕の今までの中で最高傑作とも呼べる物……《ゲリュオン》です」

「（ばけもの）……か、実際こいつの性能はそうとしか呼べないからな……」

その形はハイルの前世でいう“バイク”と呼ぶものであった。その姿は大型自動二輪車程に力強く、正しく異型と呼べる存在である。

「燃料は陸では第二音素を、海・川では第四音素を動力源として原動機を回すように出来ています」

「前は陸だけだったのに……お前ホントすごいな……」
「いえいえ、先生のアイディアで此処まで改良できたんですよ」
ハイルは手をゲリュオンに触れてみる……ゴッツリとした感触が伝わって来る。クロードの技師としての想いが籠っているのに違いない。
「表面の装甲はエンシェント鏡石を使っていますから多少の衝撃や譜術にも耐えられるように出来てますよ？」
「おいおいおい！それじゃあ戦車だろ！！」
「いや～つい張り切りすぎて♪」
訂正、やっぱりこいつ兵器開発者に向いてね？
「じゃあ、早速動かしますか……はい、これ鍵（キー）です」
「お……おぅ……」
大きめの特殊な形をした鍵がハイルの手に収まる。手のひらサイズのやや円盤の形をした物に彫り込まれたようだ。そして、そのまま鍵口に差し込み、回す……
――その瞬間、周りの空気が震え始めた――
周りの第二音素を根こそぎ吸いつくしていく……その姿はもはや暴君……
これはもはや、乗り物という枠に収まる物ではない……一つの怪物だ……
しばらくして、ある程度の充電が過ぎた所でハイルは座席に座り込み……アクセルをふかした。

ブルウゥウオォォウン――――！！！！！！

今にも暴走しそうな様子だ……その間にクロードは目の前の車庫を開いていく。やや暗かった視界が一気に眩しくなる。

「じゃあ先生、そいつを使いこなせる事を願っています……どうかお気をつけて……」

「……上等だ」

そして、また二回ほどふかした後……一気にアクセルを踏み込む！！

ギュルルルルゥウウウ――――！！！！！！

車輪が高速回転し、一気にその巨大な車体を前へと進め……遂にクロードの工房から抜けて行った。その姿をクロードはじっと見つめて行った。

「元気にやれよ、ゲリュオン……」

その姿は、我が息子を見送るかのような……

こうして、時代は更なる激戦へと幕を開けて行った……

第７９話（後書き）

ハイルさん専用移動手段ゲットですよ！
ますます強力になっていってる気がする……でも止めはせん！！

第８０話（前書き）

今日から大学です……長い夏休みもこれで終了です……

第８０話

キムラスカ首都バチカルには国立病院が存在する。そこではキムラスカにとっての先端医療が揃った場所として名高い。ちなみに、かつてハーミットの助手ディノが所属していた場所でもあった……

そんな病院の一室にて異様な雰囲気を出し続ける場所が存在した。周りにはこの病院の医師達が口々に自分の論議を行い続けていた。

「何故こんな事を……」

「これによりシュザンヌ様の命が危うくなされたら……」

「だから地位もしっかりしないあんな小僧にまかせるなど……！」

それは険悪極まりない愚痴という種類の他無かった……誰もがこの一室の先にある扉を睨みつけていた……いや、正確にはその扉の向こうの“者達”を……

「元帥……」

「かまわん、好きに言わせておけ……」

そして、その中でセシル少将を護衛として椅子に座り続けてこの結果を待ち望むファブレ公爵がいた。そう、今日がシュザンヌ公爵夫人のバイパス手術であったのだ……手術場所として出来るだけ適合な場所を選んだ結果、此処という訳となったが……ハーミット達と“今”のオールドラントの医学界は云わば犬猿の仲、ファブレ公爵の指示でなければ即座に一気触発という状況に陥っていただろう。

「頼むぞ……ハイル……」

クリムゾンは嘗ての敵でありながら、それと同時に信頼できる男

へ祈りを託す……そこに居るのは、白光騎士団の元帥でも……キムラスカ公爵でもなく……愛する妻の無事を祈り続ける一人の夫の姿であった。

――――――――――――――――――――

「縫合糸ください……グラフト縫着完了」

その一方、ハーミット率いる治癒師団のメンバー達は手術の終盤へと迫っていた。冠動脈バイパス手術を新しくディストの手とクロードの理論によって発明された人工心肺のお陰で問題なく進める事が出来ていたのだ。

「あとは右室流出路を再建して手術終了となります、リーシャ……メス、メッツェン」

「はい！」

「もうすぐだぞ……お前ら、頑張れよ」

そして、再建を終える……

「再建終了。ヒュー、脱血を緩めてくれ」

「送血量、下げます！」

人工心肺装置を操作して、圧を調節し始める……この次には、心拍が戻ってくれる筈……そう信じながら彼らは待つ。シュザンヌの心臓が動き出すのを……

「どうした……戻ってこい……」

他のメンバーが唾を呑む中、ハーミットだけは瞬きせずその瞬間

を待ち続ける。心電図の心肺停止を告げる音が手術室に響く中、彼らは待ち続ける……そしてついに……

ドクンッ！！ドクンッ！！

「ようし来た！！」
「やった！！やりましたよ先生！！」
「ディノ、手術はまだ終わってないぞ……はしゃぐのは後にしろ」
「ぇ……ぁ……すみません……」
「では、心肺離脱を始めるぞ……ディノ、エレナ、リーシャ、ヒュー……各自役割を果たせ」
「「はい！！」」

――――ありがとよ、これも皆お前らのお陰だ……――――

――――――――――――――――――――――――――――――

キィッ……

突如として手術室のドアが開かれた。そこから治癒師団員達が手術着の姿で出て来る……その現象に周りの人間達は驚いたような様子となるが、ハーミットはすぐさまファブレ公爵の元へと向かった。その姿を見て、公爵は勢いよく立ちあがってハーミットに詰め寄る。

「どういう事だ……手術には六時間ほどかかると言った筈だが、まだ三時間しか立ってはおらぬではないか……」

その言葉は暗にシュザンヌはどうしたのかと問いていた。その言葉に対し、ハーミットは……

「……」

グッ……！！

満面の笑みを浮かべて公爵にグッジョブという意味で親指を立てた。その意味は大成功を表していた。

「麻酔はまだ効いていますが、会ってあげてください」

「うむ……」

クリムゾンは先ほどの結果に対して相変わらず無表情のままではあったが、何処か震えていた。恐らく、今ここで喜びを体で表したい位に嬉しいのだろう……そのままクリムゾンは手術室へと入って行ったのだった。

「病室の手配をお願いします。集中治療室として絶対安静、２４時間体制で診続けていてください」

「……わかった、指示に従おう」

ハーミットは此処の病院の代表の一人にそう告げてこの場を去ろうとした。

「待て！本当にシュザンヌ様の御病気を治したというのか！！」

「そんな訳があるまい！何十年掛けても完治は不可能とされていた筈なのに……」

「大方、嘘に決まっておる！治療をしたふりをして本当は……」

「黙ってろ、無能共」

ゾワッ……！！！

彼らからは後ろ姿といえどもその一言で殆どの人間が黙った。殺気という物をぶつけられてどうにか立っているという感じだ。

「できない……治せない……手前等にはそれしか言えないのか？そんなんだから、何時まで経っても進歩が無いんだよ……別に威張る訳ではないが、もう少し“世界”という物を見てみたらどうなんだ？」

殻の中で活動し続けるような医者は外で同じ様に活動できるとは考えない……

「お前達の医学は一方通行だ……こうだからこうする、ああだからああする……だけど、医者はそんな簡単なものじゃない……病気や怪我だけを診ているんじゃ話にならない」

「だからと言って、病人を一人づつ丁重に扱っていたらキリがないではないか！？」

「だからこそ、俺達は成長しつづけなければいけないんだ……ある意味何でも屋にならなければいけないし、患者のその人となりを知らないと十分な治療は行えない」

「私達に医学を説くつもりか……？」

「医学……？別に医学を説いてるつもりじゃないね……医者としての基本となる志を述べているだけさ」

「……ふん」

ハーミット達はその場へと離れて行く。その始終周りから嫌な視線を当てられ続けてはいたが、堂々と誇って通路を歩いて行くのだった……

その後、シュザンヌは病室へと移され、今も眠り続けている。口や鼻に酸素マスクやチューブを入れたままの姿でだ……傷口はもう塞がり、あとはもう起きるだけの処置となっている。

「……冷たい手だな」

クリムゾンはそんな妻の手を握り続けていた。他の治癒師団員からすると、そろそろ目覚める筈だと言われていたからだ。そして、その言葉通り……シュザンヌは目を開け始めた。

「起きたか、手術は大成功だそうだ……」

クリムゾンは先ず第一に云った言葉がこうだった。妻に己の現状を……嬉しい結果を伝えたいがために……その言葉により、シュザンヌは涙を流しながら握られている手を握り返す。

「私はこれから色々と処理する事がある。何……直ぐ戻って来る」

そう告げてクリムゾンはそこから離れようとしたが、右手の強い力によってそれは拒まれる。

「ふっ……そう心配せずとも直ぐに戻って来る……」

だが、離される事はなかった。まるで子供のようにそれは強く握りしめられていた……

「しょうがない……もうしばらくだぞ……」

それに折れたのか、クリムゾンは暫くこの場に留まる事にした。そして、今度はその手を両手で包むように握り返したのだった。

「今日このような日が来るとは……どれほど夢に思っただろうか……」

妻の病気は運命だと考えていた……だが、それは間違いであった……

「よかった……本当に……よかった……」

病室ではファブレ夫妻が揃って涙する姿が見られていた。もっとも、その姿を見る事が出来たのはこっそり覗いたセシル少将のみであったが……

――――――――――――――――――――――――

「手前らお疲れ様だゴルアァァァ――――！！！」

「「お疲れさまでした！！」」

とある最下層の酒場にて彼らは宴会をしていた……なんという早い用意だと思われるが、周りの国立病院の医師達や集まっていた貴族達にどうこう追及される前にここに集まっていたという訳だ。それを世間一般で逃げという……

「あそこん所には居づらいんだよな……俺達ダアトはキムラスカから多額の寄付金貰ってるから強く言えないのも一つだけどな……」

「昔あそこで私達の医学の知識を提供しろだとか完璧に命令で言って来た事もありますし……」

「ふざけてるのかしら……たとえ公式に認められない物だとしても、

私達にも誇りくらいあるわよ……」
「ですけど～、導師様の口添えのお陰で流出を防いだのもありますよね～♪」
「アイツのお陰で下手すれば国際沙汰にするぞと暗に脅し掛けといた話か……アレには感謝だな……」
「ちょっ先生！！導師イオンをアイツ呼ばわりって！！」
「いいんだよ、今アイツはフリーダムな生活で導師もなにもへったくれもないんだしさぁ」
「いや、確かにそうですけど……それでもさすがに不味いんじゃあ……」

キムラスカには結構いい印象持たないんだよな……俺達治癒師団は……述べたとおり、昔俺達の医学を提供しろと命令してきた事があるが、導師が俺達の医学はダアトにとっての財産という取り決めで境界を付けてくれたおかげで強く言えないように昔施してくれたんだ。

いまではもし俺達の医学が知りたければ、ダアトで学びに留学して来いという風に言ってはいるが……あの選民意識が強いキムラスカだ……何人来るだろうか？今の所十数人だがな……

「じゃあ飲むか……今日は俺の驕りだ！」
「ゴチになります先生！」
「あの、私お酒あまり強くないからジュースを……」
「楽しみ～♪」
「今回も騒がしくなりそうだな……」

そして、このまま宴会へと突入するかと思えた時にだった……

「あの、ダアトのお医者様方……申し訳ながらお願いがあります！」
「ん……誰ですか貴方達は？」

「私達はこの最下層へ住む住民です……今回参られたのは個人的なものです」
「この地区では病人が多くおりまして……もしよければ貴方様方に診ていただけないでしょうか？」
「え……ここでのお医者さんはどうしたの？」
「とんでもない！私達の稼ぎではどう掛かってもあの病院で診ていただけるほどの余裕などございません！」
「ナタリア殿下のお陰で診療所や療養所を立てて下さったりしてはおりますが……まだ不安定で人数も足りないのです」

彼らは訴えた……その姿に彼らは……

「やれやれ、お前らどうする？」

めんどくさがる様な仕草をしているが、その口には笑みを浮かべていた。

「そりゃあ……ねぇ？」
「異議なしです」
「私もだよ～♪」
「もちろんですよ」

「わかりました……その要望、受けて立ちましょう」
「あ……ありがとうございます！！」

宴（パーティ）は一時中止という訳だ……俺達は年中無休で医者であるという訳だ……

困っている病人が居るとほっとけないという事さ……

「じゃあ行きますよ～先生」

それでは、またの話を……お楽しみに……

第８０話（後書き）

この頃バイパスも人工心肺無しで手術出来るようになったって話があります。医学の進歩は何処まで行くんでしょうか……現実的に期待です。

第８１話（前書き）

あと二話くらいです……原作入ったら文字数限度解放して一気に畳み掛けようかと検討中です。

第８１話

「そうですか……そんな事を考えてなさったのですね……兄上とあの人は……」
「はい、その通りです！」

どうも今日は、初めての人は初めまして……ハイルです。
今日ほど生きて来てこれほどまでに恐ろしい女性を見た事などありませんでした……はい……
シュザンヌ様……心臓が治ってからより一層行動力がお盛んになったとファブレ公爵からの手紙で知らされてはいましたが……ここまでとは予想Ｇｕｙです。
なぜかって……？秘預言喋らされました……後ろの黒い瘴気が揺らめいた姿で目が笑ってない顔で「ひょっとして、何か知っておられるのですか？」と聞かれると喋らない訳にはいかないのです……
事の発展はルークの記憶障害について問いてきたことからでした……何故記憶を失ったのかと俺的理論で嘘を混ぜて説明してたんですが……この女傑様には嘘など通用しませんでした。
怪しい所があれば矛盾を探る質問を何度も何度もと……これどんな拷問ですか……？
最後には根負けしてしまったんですよ……

「なにとぞ！なにとぞダアトに猶予を！！」
「ふふふ……どういたしましょうか？」

ヴァンの野郎……なんで俺がこんな目に会わねばならんのだ！！
手前が事の全ての元凶じゃねえかよ！！

「まぁ、キムラスカにもあんな下らない物に頼ろうとした否があり

ますし……いくらか考えておきましょう」
「あ……ありがとうございます！！」

先ずはこの今にも爆発しそうで殴っ血Ｋｉｌｌ！！と叫びそうなお方の機嫌をどうにかおさめなくては……俺の命どころかダアトの存在全てが危ういわ……一気に宣戦布告されそうで怖すぎる……

「それで、ルーク……いえ、今はアッシュでしたね……あの子は今どうしていますか？」
「ヴァンによって特務師団長というそれなりの地位を得て、暮らすには十分な状態です」
「……何という事ですか、つまり……ヴァン総長の行動に関係なく、あの子はキムラスカの王族の責務を自ら捨てたという事ですか？」
「そう言う訳ではありません！あの子は……超振動の実験により心も体も不安定な状態だったんです……あの様子からして彼はその責務という物を捨てざるを得ないに等しかったんです」
「……実験？どういうことですか？」
「ご存じないのですか……キムラスカはあの子に物凄い激痛を伴うような大人でも耐えかねない実験を受け続けてきたんです」

「どういう事ですか……旦那様♪」

ガタガタガシャァァァ――ン！！！

「そそそれは、お前に余計な心配をさせまい「私の心配などこの際どうでもいいです……何故ルークにそんな事をさせたのですか？」国の為だったのだ！私とて国に使える臣下として私情を入れる訳にはいかぬ……繁栄の為にはルークを……！！」
「ふざけないでくださいませ！！！」

公爵……本気でビビってるな……今日この日でこうなったのが運のつきだ……諦めたまえ。シュザンヌ様の威圧もさらにレベルアップですよ……どうするんですか一体？

「貴方は公爵であると同時に一人の父親でありませんか！！子を殺す親が存在して良いとそんな馬鹿な事をおっしゃると言うなら……私は一生貴方を軽蔑し続けますよ！？」

「だだだだだが……！！！」

ズイズイと公爵に歩み寄って詰めて行きますシュザンヌ様……これが母は強しという現れなんですね……ですがすみませんシュザンヌ様……公爵のライフはもう０ですよ……？

「しかもその繁栄など数十年にも満たない泡銭にも劣る様な物と来ました！こんな物の為に息子を生贄にしようとする兄上と貴方は人間として屑です！！ゴミです！！塵です！！」

襟元をギリギリと掴まれて……あぁ！クリムゾンの口から出てはいけない物がアァァァ――――！！！

「……ちなみに、先ほど話した預言は導師イオンのお墨付きです……“本物の”ですが……」

「その言葉、もしや今のダアトにいる導師はもしや……あの子と一緒という訳なのですか？」

「……恐れながら……」

この際、嘘は止めとこう……ダアトがキムラスカにやってきた預言を通じての内部干渉は俺としても目に余る……キムラスカは預言政策として承諾してるから異議なしの状態だが、本来ならば国際問題物だ……この人はそこん所がよく分かっているよ……しかもその

弱点としての突き方もな……

「レプリカですか……世の中にはこんな不思議な物が出回っているとは……」

「……あの、お聞きしてもいいでしょうか？」

「どうぞ……？」

「あの子の……ルークの正体が分かった以上、あの子をどうするおつもりですか？」

そこん所が一番心配だ……母親としての強い意志を持つ以上に固い規律を背負うお方だ……

「どうするもなにも……たとえ私がお腹を痛めて産んだ子でなかろうと……私にとってあの子はもう一人の息子です！誰が言おうと私はあの子を見捨てたりはしません！」

「……その言葉、信じていいんですか？」

「もちろん、アッシュであるルークも……今の“ルーク”も私の息子達です」

……それはよかった……本当に……

「して、公爵様は？」

「……」

返事がない……どうやらただの屍のようだ……

「もちろんそうですよね……ア・ナ・タ♪」

ガバッ――――！！！

「もももももちろんだとも！！そうだとも！！」

生きる事に必死になってますね……公爵……

「では、詳しい話を……私は今からダアトでの機密情報を話させていただきます。それと同じく貴方様方も対等な情報を……」

「等価対価ですね……ふふふ……これから楽しくなりそうね……」

「あははは……いやいや、忙しくなるの間違いじゃないですか？」

「うふふふふ……」

「あはははは……」

「私は何も見ていない何も見ていない何も見ていない何も……！！！」

こうして、第一回ファブレ家裏会談は終わりを迎えた。

ヴァンとモースの行動、今後の対策、強固なパイプの作成といったこれからに向けての重要な話をたくさんしていった。

なかでも、ルークとアッシュの問題では大いに頑張ったぞ？アッシュはダアトに居るのは実質亡命という形になっているが……俺に協力しているから諜報員として潜入したと後から書類を修正して何とか誤魔化していけばいいし、ルークはＮＤ２０１８まで何も知らずに頑張って貰い、時が来た時にはアグゼリュスでの秘預言回避の対策を練って実行して行くなどと……とにかく色々だ。

今日は一段と疲れましたよ……本当に……ただ公爵夫人の診断をしに来ただけだったはずなのに……なぜこんな目に……

―――――――――――――――――――――――――――

そんな心が草臥れそうな私ですが、そのあとにやっておくべきことがあるんです……書類手続き、決算の承諾、診察、重役会議……

ｅｔｃとダアトに帰ってきた後でも休む暇がない。
もうシンクと同じくらい働いていると思うよ……どこかの髭と違って……
そんでもって、なぜかシンクの奴……俺に調練を任せるとかあり得ない手続き下しやがってさらにいそがしいし……「髭がサボってる以上、それに匹敵する戦力であるあんた適任だし……」と涼しく言いやがった。
あれか……この前またひそかに買ってきた仮面コレクション売り払ったのを根に持っているのか？
自業自得じゃねえか……ったく……
そんなこんなで調練を行ってるんだが……俺の場合指示や訓練方法を伝えたりとする側に回っているから実質楽だからいい。
けど、その訓練を受けている奴らにはそうもいかないのだ……なぜなら……

「このクズども！！チンタラ走るんじゃないッ！！その汚い尻で俺を誘惑してるのかッ！！」

訓練場には第二師団を初めとするハーミット達の姿が見えた。
アリエッタを除いた副師団を始めとするメンバー達は、野戦服みたいな姿で丸太を担いでいる。

「なんてザマだ！！貴様等はこの世界で、最も下劣な生き物だ！！便所の糞にも劣る！！」

彼らを罵倒するのはハーミットである。随分とストレスがたまっていたために彼らにハートマン式を行っていたのだ。

「いいかよく聞け糞野郎共！！俺の楽しみは貴様等が苦しむところを見る事だ。爺の「バキュウゥゥ――――ン！！」みたいにひいひい

言いやがって、みっともないと思わねぇのか！この「ジュルッ！！」病もちの「ピ――――」漏野郎！！尻の穴に「ヒギィッ！！」を突っ込まれたいのかッ！！「ゴンッ！！」の「ゴッスン！！」を「パオォォォ――――ン！！」したいなら、この場で自分の「ホイホイチャーハン☆」を「ア――――！！」いてみろ！！小「ズドンッ！！」垂れ流すんじゃないッ糞共ッ！！」

ハーミットお得意の『教育上不適切な言葉』がマシンガンのように乱射されていく。

師団員は汗水を滝のように流しながらフラフラになりつつもひたすら丸太を担ぎながら訓練場の周りを走っていた。

「は……ハーミット……いささいかやり過ぎじゃないのか……？」

「安心しろ、本当にやばくなればドクターストップかけるから」

「いや、そういう意味ではないと思うのだが……」

隣で見ていたラルゴもさすがに目の前で起きている現状に冷や汗をかきまくっている。

改めてＵＳＤ（Ｕｌｔｉｍａｔｅｄ　Ｓａｄｉｓｔｉｃ　Ｄｏｃｔｏｒ）の恐ろしさをこの場で体感したのであった……

――――――――――――――――――――――――――――――

さて、話題を一つ変えてみよう。

ハーミットの診察室には様々な人間が来る……人数は少ないが……

兵士はもちろん、詠士や師団長とバラエティが富んでいるのだ。

そこで兵士の中で来る人は子供のころから知っている子も来ている。

一人がアニス・タトリン……この頃人形師（パペッター）となって訓練も円滑になってきたそうだが、その激しさゆえに生傷も絶えないことがしば

しばある。たまに両親に関しての相談役も承っているぞ？
そんでもって、もう一人だが……

「……ッ！！」
「ほらほら、軍人となったんだから消毒液の沁みる痛みくらい我慢しなさい」
「ご……ごめんなさいハイルさん、今だ慣れなくて……」
「こら、ダアト内といえども……本当の名で呼ぶことは禁止だと前に言っただろ？」
「……はい」
「……何か悩みでもあるのかい、‘ティア’ちゃん？」

ティア・グランツ……そう、あのヴァンの妹であるティアがダアトに来ていたのだ。
初めに新人の入団式で見かけたときには吃驚したぜ……まさかあのティアが軍人になるなんてな……想像だにしなかった。
再会した当初では尊敬の眼差しで見てきて大きく挨拶してきたっけ？その様子に何人か周りの兵士も驚いていたな……

「なんでもないです……」
「本当かな……初めのころは訓練も順調だったそうだけど……この頃成績も芳しくないそうじゃないか？」
「それは……ただ単に私の実力が弱いから……」
「己の力を認めることは良いことだが、心の弱さまでを隠してはそうは言えないぞ？」

この子はヴァンがリグレットに直でユリアシティで個人訓練を施されたということで一時有名だったらしい……だけど、それを妬ましく思う奴もあって総長の妹だから贔屓されてるくせにいい気になるなと時折、苛めにあって孤立させられてた時期もある。

そんな時はヴァンがそういう奴らを解雇したり左遷したりと処理したそうだが、それが余計に彼女の周りを苦しめることになったこともあった。

確かに、実際ティアの兵士としての能力値は高くないと仕方がない事だが……それに付け込んで「総長とは大違いだ」とか「甘やかされた似非兵士」とかと無慈悲な烙印を押された事もある。

だけど、俺はティアをそうだとは思わない……確かに、リグレットという師団長自らの個人訓練を受けたりと特別な立場ではあったが、俺は知っている。

今年行った墓参りの時、ダアトシティの端でひたすらに訓練し続けるあの子の姿を俺は見た……何かのために必死に課題をこなそうとするあの勇ましさを……

「カンタビレ教官も言ってました……『お前は軍人という者をまったくわかっちゃいない』って……」

「ふむ……」

「私は軍人としては甘すぎるんだとおもいます……兄さんや教官みたいに飛びぬけた才能もありません……先生みたいに飛びきり頭が良いというわけでもありません……唯一誇れるのは、リグレット教官から教えてもらったナイフ投げくらいなんです」

「いや、そういう意味でカンタビレは行ったんではないと思うぞ？」

「えっ……？」

「君は軍人としては弱すぎるという意味ではなく、軍人の心得をまったく知ってはいないと言ったんだ」

「軍人の……心得」

「さて問題、軍は何のために存在する？」

「……それは、国を守るため……」

「正解、その軍の一部である兵士もその使命を受ける存在だ……おそらく、ティアちゃんはその‘守る’物を間違えているからカンタビレは忠告しているんだ」

「……」

「君は昔言ったね、兄さんを支えてあげるような存在になりたいって……けどそれは軍にとっては私情に分類される。つまり、兵士の使命と私情を履き違えるなと伝えたかったんだと思う」

「けど……」

「もちろん、誰かのために頑張るってのは良い事だ……だけど、時と場合として優先順位を変えなければならないことが多いんだ……軍人というのはな……」

軍人は時として非情にならなければならない……害を成すものが例え肉親であったとしてもだ。

「……先生、そうだとしたら……私は非情にならなければいけないんでしょうか？」

「んっ……？」

「実は……」

ティアは自分の知っている全ての事を告白した。それはかつて、ティアが外郭大地へ行く前に珍しくヴァンが街へ帰って来た時のことだった。

『――アッシュが何かに勘付いているようです』

セレニアの花の群れ咲く中庭で、背を向けて立つヴァンにリグレットが告げていた。

『アッシュは妙なところで潔癖だ。この計画が外殻の住人を消滅させると知れば、大人しくはしていまい』

『シンクを監視につけましょうか』
『そうだな』

この様子を、ティアは見ていた。――会話を聞いてしまった。

「この時、勘付きました……兄さんは何かとてつもない事を企んでるんじゃないかって……少なくとも、人がたくさん死ぬ……そんなのは許せないんです」
「だから、刺し違えても殺そうと……そう考えているのかい？」
「……」

ヴァンめ……実の妹になんつー悩みを抱えさせるんだか……それより、アッシュの奴何処かでヘマ起こして勘付かれたのか……そこでシンクに監視をつけるようだが……残念だが無意味になるぜ……それはな。

「……話はよく分かった。じゃあ、先生に任せておきなさい」
「えっ……！？」
「アイツの企みはティアちゃんが勘付くより前に“俺達”も察していたからね……大方用意は出来ている……」
「それって……」
「ティアちゃん、一人で何もかも解決しようとは思わない事だ……誰かに頼ってみるくらいしてみなさい」

ハーミットは笑みを浮かべながらそう告げる。

「大丈夫、君は“一人”じゃない……」
「……ッ！！」

ティアは奮い上がる……やっぱりこの人に相談して良かったと……ようやく安堵感を得る事が出来た事に……

「まぁ、手伝ってもらいたい時にはそこもお願いするけど……良いかな？」

「もちろんです！よろしくお願いしますハイルさん！」

「こらまた……まぁ今回はいいか……」

ヴァン、知らないとは思うが俺の世界にはこんな諺があるんだぜ？

将を射んと欲すれば、まずは馬を射よ……

悪いが今度からは優しさなんて掛けるほど俺は甘くは無いぞ……徹底的に畳み掛けるように行動させてもらおうか……

覚悟しとけ……

第８１話（後書き）

大学授業再開です……留学支援の授業とったから平日週四日は６時まで大学ですよ……正直しんどいです。

第８２話（前書き）

ようやく次から原作です。どう書いていこうかな……？

第８２話

遂にこの日がやって来た……ＮＤ２０１８の日が……この年に全てが始まる。

この日を待っていたとばかりに運命も螺旋を始めて行く。

思えばここまで来るまで本当に永い時間を掛けてきたものだ……惑星オールドラントに生まれ落ちて３２年……地球の時間に換算すれば６４年間の時を経てここまでやって来た。

元より破綻したこの身であるが故に、年数など気にする事は無い……さらなる高みを目指すと同時に人生を奔り続けてきた。

だが、少なくとも今俺は幸せかと問われたら、即座にＹｅｓと答えれる自信がある。嘗てなら在り得なかった守るべき存在達を背負うという存在理由（レゾンデートル）を持つこの身でならば……

それ故に、今回の勝負は負ける訳にはいかない。たとえ最終目的の信念が偽物であろうとも、俺自身で掴み取った掛け替えのない家族達は“本物”だ。

「マルクトの軍艦がダアト港に停泊してるだと？」

「表向きは物資補給……けど、マルクトに潜らせておいた諜報員によれば和平として平和条約締結を提案した親書をキムラスカに送る為にダアトに協力を求めてきたそうだよ」

「……ちょっと待て、その為に何故軍艦などというある意味国の最高軍事力を持ってくる？」

「そうだよね……マルクトの使者って和平と宣誓布告を何か勘違いしてる訳？」

「こういう場合、なんて言えばいいんでしょうか……シンク参謀長」

「こういう場合、こう言えばいいと思うよ……ハーミット治癒師団長」

「「馬鹿じゃねーの……！？」」

鋭い突っ込みが二人の間で入った。

「まさかこんなありえない和平を仲介するためにダアトも協力を要請されたって訳？」

「そういえば、この前マルクトの使者が導師にお会いしたいと教団の前に訪れたって聞いたよな？」

「……あいつか……」

「シンク、ため息をつくんじゃない……禿げるぞ？」

「禿げるか！！」

シンクにとって七番目のイオンはもはやどうでも良い。

自分も被験者イオンのレプリカとして生を受けた存在だが、七番目と違って欠陥品と認識されて破棄されかけた。その中で見出したのは憎悪・嫉妬に近い感情であった。

だが、今となってはそんな感情など消え失せ、代わりに七番目に対する感情は哀れみに等しい物であった。“個”として存在する事を決めたシンクにとって、導師イオンという名の“椅子”は馬鹿馬鹿しいこの上ない存在だ。あそこにあるのは栄誉でも……希望でもない。

ただの絶望しかなかったのだから……なにより被験者自信もあの椅子を嫌っていたし、事実あの地位について待っているのはダアトにとって都合の良い人形同然の扱いに変わりないのだから……そんな穴に埋められてしまった七番目を「五番目」は哀れんでいた。

――――あんた、僕達の中で自分だけ生きられたと思ってるようだけど……実際はまだ人形のままで『生きてはいない』と気づいてないのかい？――――

「そういや、どうして今の導師イオンとは接触しないのかい？」
「……あの子は優しすぎる……十の内切り捨てなければならない一を切り捨てはしまい……絶対結果を公平にして解決しようと考えるからだ」
「……それに、ヴァンにアンタが導師と接触していると聞いたら何か勘付かれるかもしれないからね……」
「だから《灯台日のもと暗し》だ……まさか絶対信頼のおける自分の部下が実は敵だとは思うまい」

シンクはヴァンにとって預言を忌み嫌い、憎悪を浮かべるレプリカだと認識している。
だから、自分の計画を否定することなどあり得ないといった自信を感じているのだ。
……レプリカだからそう単純な思考だと思ってるつもりか……ヴァン……下手してると足元を掬われるぜ？

「それより、ヴァンの妹は何してるの？」
「カンタビレに頼んで大詠師モース旗下情報部第一小隊に配属させた……これで色々と動きやすい立場になったという訳だ。けど、その代わりにあの樽豚がカンタビレを長期遠征に赴かせるのは誤算だったが……デオ山脈あたりだったのが幸いだ」
「結構アグゼリュスに近いね……あの樽豚、良くばカンタビレもろとも崩落に巻き込もうって腹だね」
「現地での連携ほど手強いパイプはないからな。そうなる前に遠征を強制停止するように言っておいた」
「手のお早い事で……」
「それに、ティアちゃんには一発“花火”を打ち上げてもらおうと考えてるんでな……」
「……花火？」
「それは当日のお楽しみだ……さて、まだ作戦の調整は終わらない

ぞ……次はアッシュとアリエッタだ……あいつらには……」

ハーミットはシンクと共に計画を練り続けて行く。より完璧に、より正確に……１００％の結果を目指すのではなく、９９．９％の結果を目指す為に……

「ヴァンは様々な所に拠点を持っているからその点も考慮しておかないとな……隠れ家を潰しておくのも一種の策だ」

「ヴァンに付いたのはラルゴとリグレット……ディストは……条件が良ければどちらにもつくような蝙蝠の感じだよ」

「まぁ、あいつらしい……」

延々と作戦会議が続いていく……だが俺はこの時知らなかった。まさかこの後、あんな事が起きようとは……

――――――――――――――――――――――――

「大変だハーミット！不味い事になったぞ！」

「なんだアッシュ、部屋に入る時ぐらいはノックぐらいしろ」

「そんなこと言ってる場合じゃねぇ！」

まったくなんだ？そんなに慌てて……

「導師がいなくなった！！」

……

……

……

…

・

・　・
・

「ハハハ……アッシュ、駄目だぞ？そんな見えすいた嘘ツイチャッタラ……」

「馬鹿！本当だ！昨日の深夜、マルクトの使者が侵入して導師を連れて行ったらしい！」

「なんですとおぉぉぉぉ――――――！！！！！」

ちょっと待て！まさかあの例の使者か！？アポイント取れないからってごり押し戦法ですか！？

「おまけにあの導師守護役も一緒だ……くそ！あの餓鬼何で止めなかったんだ！！」

「あ……アニスちゃん……」

ハーミットはｏｒｚの状態になって絶望状態に陥った……まずいよ……これどうすんの？あの計画の中にはティアちゃんに頼んでおいたヤバい物も入ってるんだぞ……これ以上ダアトに被害が加わったら本当に終わるぞ……

「今すぐアリエッタのフレスベルグ飛ばしてティアちゃんストップさせてくれ！」

「無理だ！アリエッタは導師を奪還するべくモースの命令で全部の飛行系魔物を去った戦艦の方へと廻されちまった！しかもモースは導師を取り戻す為にマルクトの兵も皆殺しをしろと命令しやがった！」

「■■■■■■■■――――――！！！」

人間の物ではない叫び声が奔った。もはや国際問題とかそんなチャチなレベルに収まらない気がしてきた。

「ヴァンはどうしてるんだ！軍の責任者として今そいつら率いてるのか！？」

「俺の家でレプリカに剣術指南しにいってんだよこの屑があぁぁぁぁぁ――――――！！！」

本当にダアトって何？非常識の塊ですか？……総長のいない軍ってふざけてるの？なぁ……教えてくれよローレライ。

「緊急会議だ！シンクはまだ任務に赴いてないだろうからすぐさま呼んでこい！あとカンタビレには事の連絡を手紙で送れ！アッシュ、お前は先に出発したラルゴとリグレットの元へ全速力でいそげ！あいつらダアトの事などどうでもいいと考えてるから樽豚の命令をそのまま受け入れかねん！！」

「了解した！！」

――――――――――――――――――――――――――――――

最悪の条件下な中、彼らは其々の役割を分担して行く。今回、抗議の立案者としてマルクトへ赴くのはシンクへ……キムラスカへの事の伝令ついでに髭もといヴァンを連れ戻しに行く事はハーミットに決まった。今ダアトは人材不足の為に専門といった事をどうこう言っている暇はないのだ。

「どいつもこいつも面倒ばかり引き起こしやがって。だいたいさ、上の人間がこうも度々ダアトを離れていると示しがつかないんだよ。導師が誘拐されて、ついでに大詠師もおらず、しまいには主席総長までダアトにいないだなんて――」

「落ち着けシンク、起こりたいのは俺だって一緒なんだよ……くそ、あの髭今度ばかりはむしりちぎってやろうかこら……」

ハーミットとシンクはそれぞれに呪詛を投げていたが、一番に怒ってやりたいのはマルクトの行動であった。

最近、キムラスカとマルクトの二国間の緊張は高まっている。小競り合いが続き全面戦争は秒読み開始といったところだ。国境付近は何かと理由を付けて陸艦がうろついているらしく、どちらも開戦の理由を模索している段階である。

そんな最中に宗教自治区の長である導師に手を出す馬鹿は普通いない。よく言われているように、戦争を始めるのは簡単だが終わらせるのは難しい。過去にその実績を持つ導師がいなくなれば、行き着く先は泥沼の総力戦である。

それに導師を害した事実が発覚すれば、中立であるダアトを敵に回すことになる。そしてその信者も……それは自国の国民にもそっぽ向かれてしまうことを意味する。この両国の力が均衡している情勢を考えるとあり得ないことなのだが、現に導師はいない。

「じゃあ、マルクトからきっちりと絞り取って来るから……アンタも上手くやってよね？」

「今の所、情報部のお陰で情報が漏れちゃいないが時間の問題だからな……直ぐに向かうとするさ」

そして、シンクはグランコクマ経由の連絡船に……ハーミットは愛車のゲリュオンに跨って目的地を出発し始めるのだった。

その一方、キムラスカの首都バチカルではある人物が上層部へと進んで来ていた。

「ここね……」

黒いローブで身を隠した人間が一目に付かぬようにファブレ公爵へと身を潜めながら近付いていく。手には自分の協力者からもらった情報が記された紙を持って……

「それにしても、ハイルさんも大雑把なお願いをするものね……」

彼女の目的は自分の兄を立場的に不味くする事であった。

この屋敷にいる人物に自分がヴァン・グランツを殺す目的で侵入してきたとわざと知らせるようにして行動し、ヴァンのダアトの立場を失脚させる原因を作り上げるためだ。

その為にはヴァンがこの屋敷に居た為にキムラスカが損害を与えられたという事実が必要だ……たとえば、ファブレ公爵やその家族に刃を向けられたとか……

もちろん本当に向ける訳ではない……飽くまで振りである。

実は、この演技を考えたのは他ならぬシュザンヌ公爵夫人なのである……理由は堂々と我が家にズケズケと入りこんでくるヴァンがうざくなったという物であるが……

だから、大事なのは顔を見られたり素性を知られたりしない事だ……自分がダアト関係者だとバレると後が怖い。だから決して戦闘用として着ていたダアトの軍服などに着替えてはいない……

「あるお方から許可もらってるから派手にやりなさいって言ってたけど……あるお方って誰かしら？」

もちろんシュザンヌ様です……

「じゃあ、始めるわ……」

「それでは最後に技の訓練に移る。ルーク、準備はいいか？」
「待ってました！　いつでも行けます」
「お前に教えた技は『双牙斬』だ。覚えているな？」
「はい！師匠！」
「よし、では早速やってみなさい」

ルークは譜業人形に駆け寄る。まず刃を振り下ろし、即座に勢いをつけて体ごと斬り上げた。一瞬で二撃を与える技だ。

「よし、いいぞ。よく体得したな。既にその技はお前のものだ」

ヴァンが笑う。照れ臭さと誇らしさで胸を一杯にして、ルークは「……へへ！　師匠ありがとう！」と笑った。

――その時――

（……なんだ？　何かが来る？）

その時ルークが感じた物。それは不思議な共鳴だった……“例”の頭痛に少し似ている。だが、痛みや幻聴はない。

トゥエ　レィ　ズェ　クロア　リュオ　トゥエ　ズェ……

歌声が聞こえた。聴いたことのない、けれど美しい声。

「この声は……！？」

ヴァンが呻いて、その場にがくりと座り込む。ルークは驚いたが、すぐに自分の全身も鉛のように重くなった。

「体が動かない……！」

「これは譜歌じゃ！　お屋敷に第七音譜術士（セブンスフォニマー）が入り込んだか！？」

倒れこみながらペールが叫ぶ。ガイが、崩れ落ちそうな身体を必死に支えながら「くそ……、眠気が襲ってくる。何をやってるんだ、警備兵たちは！」と唸った。

だが、屋敷を厳重に警護していた白光の騎士たちは、その全員が床に崩れ落ち、眠りについていた。この、屋敷に響く透き通った歌声のために。

その時、ブーツの踵を鳴らして、小さな影が中庭に現われた。

「……」

無言で彼女は歩み寄る。一歩一歩踏みしめながら、まるで最後の時を惜しむようにゆっくりとした歩調で彼女はヴァンに近づいていき、彼のすぐ前で立ち止まった。

「なぜだ……なぜお前が……」

譜歌の影響で立つこともままならなく、剣を杖にしながら膝を地面に付けるヴァンは目の前の人物に理解を求める。その言葉はまるで目の前の存在を知ってるかのようで……

だが、その問いに答えはせず、『彼女』はナイフを取り出し右手に握りしめる。その姿を見てヴァンをどうする気かと今まで何とか傍観していたルークは片膝をつく足を無理やりに立ち上がらせ、先ほどまで練習用として使っていた木刀を『彼女』に投げつける

凄まじい風切り音と共に木刀が飛来し、ナイフを弾き飛ばした。

投げられた勢いのまま地面に突き刺さる木刀。宙へと弾かれたナイフが弧を描き、頭上の太陽の光を反射する。

ナイフを目で追い、その反射光に一瞬目を細めるが、視界の端で踊った朱色に彼女は本能的に飛びのいた。ルークはその間に腰に横向けに背負う鞘から愛用のカトラスを抜き放つ

「何なんだよ、お前はぁっ！」

このままじゃ師匠がヤバい。そう思った時、ルークの全身が淡い金色に輝いた。ふっと体が軽くなる。くびきから解き放たれたかのように飛び出して、ルークは女めがけてカトラスを振るっていた。

この時、避けるタイミングを逃した『彼女』にできたのはロッドを両手で握り締め防御に徹することだけだった。

「いかん、やめろ！」

ヴァンが叫ぶ。『彼女』は杖を出してルークのカトラスを受け止めた。ガァン、と打ち合う音と衝撃がやけに大きく体に響く。

数瞬、ルークと『彼女』は互いの武器を打ち付けあったまま睨み合い――しかし、すぐにハッとした。二人の武器がぶつかり合ったところから不思議な振動が起こり、やがて白い光が溢れ出す。

――――響け……ローレライの意思よ、届け……開くのだ！――――

いつも頭痛と共に聞こえていた幻聴が、明瞭にルークの脳裏に響き渡った。

「また変な声が……！？」
「これは、第七音素（セブンスフォニム）！？」

『彼女』が何か言いかけ、「しまった……第七音素が反応しあったか！」とヴァンが叫ぶのが聞こえる。だが次の瞬間全てが白光に包まれ、吹き飛ばされるような衝撃を感じてルークの意識は途切れていた。

今ここに、全ての役者がそろった……物語の開幕である……

第８２話（後書き）

しばらく約二週間大学祭の出し物の為更新がストップします。楽しみに待たれておられる読者様方には多大なご迷惑をおかけいたします。

予告章（原作編）（前書き）

なんとなく作ってみました。

予告章（原作編）

時は来た……
今ここに旋律を奏でようではないか……

「申し訳ありませんが……他人の事を知ろうとなさらなければ己の事もまた知られる事はないと思われますが……」
「うるせーな！そんなの俺の勝手だろ！？」

他人に心を開けなくなった公爵子息は「　」に心を説かれ……

「何時もそんな重い物背負ってちゃだめじゃないか。忘れないで、君は一人じゃないんだから……」
「ですけど、皆を巻き込む訳には……」

肉親を敵に持ったユリアの子孫は「　」に協力を説かれ……

「忘れるな、もしお前が何かを壊す時……お前の中の何かもまた壊れ始める事を……」
「それでも、俺は止める訳にはいかないんだ……」

家族を殺された使用人は「　」に復讐を説かれ……

「違うじゃないか！君は本当に大切な物は何かと既に分かっている筈だ！」

「でも、それを守るためにはこうするしかないの！」

幸せを望んだ導師守護役は「　」に大切を説かれ……

「後悔してる暇があるなら目を背けるな、“それ”を知るからこそ答えが見つかるんだ」

「そう簡単に見つかる物なんですかねぇ……？」

罪を背負う大佐は「　」に贖罪を説かれ……

「良く見てみろ……君自身を見てくれている人がどれだけいるかを……」

「私は……弱かったのですね……一人で強いと思っていなさっただけでしたのですね……」

使命に燃えた偽の王女は「　」に本物を説かれ……

彼らは次第に知っていく……『生きる』という事を……

「人は過ちを繰り返す……だけど、やり直すことだって何度でもできるんだ」

「面倒な事は嫌いなタイプだが、困っている人が居るとどうも放って置けなくてな……変な奴だろ？」

「人生は楽しくやれなければつまらないぞ？そうなりたくなければ馬鹿をやった方がマシって物だ」

彼の在り方は多くの人々を救って来た……

「アリエッタ……父さんが一番幸せだった時なのはな、お前と出会えた事だ」

「シンク、家族を持てる以上この俺は世界最強にだってなれるんだぜ？」

「意地張るなよアッシュ、子供は子供らしく親に甘えてみろってんだ！」

「お前ほど憎たらしいと同時に愛おしいと思える子供はお前ぐらいだ、イオン」

彼の守るべき者達に……

「君の事は好きだ……けど、愛する訳にはいかないんだ……それが俺の運命だから……」

「その娘を殺そうと言うなら先ず俺から殺せ！愛すると誓った人間

が死ぬくらいなら俺が死んでやる！」

「こんな俺にも愛する事が出来るなんてな……」

愛を知ると共に己の宿命を嘆く……

「確かに、全ての人間が幸せであり続ける世の中などありはしない……だが、私はそのわずかな幸せを踏みつぶす定められた世界など認めはしない！」

「だが、俺達はその幸せを増やす為にも明日を生きなければならない！世界を0にすれば2度と増える事は無くなってしまう！」

「貴方はやはりわかっておられない……救うべき者が居ればその逆、救うべきではない者も現れる……貴方は犠牲の意味をまるで理解してはいない！」

「間違えたらまた正す！その者が答えを見つけるまで俺は諦めはしない！それが俺の生き方だ！」

「そのような理想、不可能だとまだわからぬか！」

「お前こそわかってねぇな！不可能があり続けること自体、不可能なんだよ！」

友との決着を付けるべく、「　」は手にメスでなく、武器を持つ。

そして……

「なんでだよ……こんなことってあるかよ！」
「仕方がないんだ『　』……俺は元よりこの世界の住人ではない…
…あるべき所へ帰るのは当たり前なんだ……ま、帰っても肉体など
もはや存在しないがな……元に戻るだけなんだ……“流れ”も“記
憶”も何もかも……」
「アンタはそれでいいのか！？世界を救うほどの大業を成し遂げた
っていうのに……誰も「　」達が英雄だとされているのしか知らな
いっていうのに……アンタの事、語り継ぐ事すらできないんだよ！
それでいいの！？自分が生きてきた証さえ消えちまうんだよ！？」
「……俺が生きた証は消えないさ、『　』」
「……え？」
「なぜならな……」

――――お前達が生きる未来が俺の生きた、存在した証だ――――

別れの日々は、やってくる……

これは正史では絶対に語られなかったＩＦの物語……

この世界を愛し、守り通したもう一人の英雄の物語なのである……

――Ｔａｌｅｓ　ｏｆ　ｔｈｅ　Ａｂｙｓｓ　深淵の異端者――

……絶賛連載中……

「人は一人じゃ生きられない……だからこそ群れを作ろうとする…
…『家族』という深い絆を持ったこの世で一番強い集団を……」

――だからこそ……――

――お互いを許し合えるそんな家族が俺は欲しかった……ばらばらより一緒の方が強くなれるから……――

原作編　第一話（前書き）

にじファンよ！　私は帰ってきた！！
やっと用意と片付けが終わった！！
……疲れました。

原作編　第一話

今公爵家は混乱に包まれていた。メイドや使用人のルークを呼ぶ声が飛び交い、白光騎士団が不審の跡を調査している。

総出での探索が行われるが成果はほとんど見られず、時間が経つにつれ夫妻の顔は険しく青褪めていった。

ルークの失踪からすでに二時間が経過していた。

異変は前触れもなく起こった。いつものように朝が始まり、いつものように昼を周った頃。ようやく起きてきたルークがヴァンの来訪に呼ばれ、応接室で両親と師に会ったのが約二時間前……その後ヴァンとの稽古のため中庭へ向かい、ラムダスと会話したのを最後に、ルークは忽然と屋敷から姿を消した。

「ルークは……ルークはいったい何処へ……」

クリムゾンはシュザンヌのその姿を見て痛々しく思えた。何処で計画を違えたというのだろうか？　本当ならば、ルークが居なくなるという現象はあり得ない筈であった筈なのに……

公爵夫妻が立ち尽くしていると、屋敷の外を捜索していたガイが帰ってきた。バチカル中を走り回ったのか汗だくの表情で息を荒げている。

震える妻に胸を貸しながら、その姿を見つけたクリムゾンが視線で成果を問う。が、返ってきた答えは沈痛な面持ちで首を振るものだった。

顔を顰めてクリムゾンが目を伏せたのを確認してから、ガイは離れたところで腕を組み、捜索の様子を見守るヴァンへと近寄る。

「やはり見つからなかったか」

「ああ、いったい何がどうなってる？　警備に隙はなかった。誰に

も見つからずに人一人誘拐するなんて不可能なはずだ」

冷静な口調の問いに答えて、ガイは苛立たしげに拳を壁に叩きつけた。単なる貴族の家の使用人とローレライ教団を守る騎士団の長にしては不自然な会話。だが小声でなされたその対等な口調の会話は誰にも聞かれることなく、そのまま続けられた。

実際、警備に隙を作ったのはわざとだが、事を知らない二人にはあり得ない事として片づけられているそうだ。

「公爵様、失礼ですがよろしいでしょうか？」

「許す、申してみろ」

一人の使用人、マリィが前に出始める。

「ルーク様が誘拐される前、他の使用人達からの証言の所……何やら不思議な歌を聴いたとの事です」

「歌……？」

澄んだ歌声が響きだしたと思った次の瞬間、意識が無くなり気が付けば床に倒れていた者が大半であった……

「歌……唯の歌でそのような事が起きると申すのか？」

「……一つだけございます」

自然界には様々な音が散在している。水の流れる音、風が吹く音、葉のざわめきに、虫や鳥などの生物の鳴き声。それらの音は日常に溢れ、常に人と接しているため耳に届こうが聞き流してしまう場合がある。だがそのような物であろうと音は音。組み合わさればリズムが生じ、旋律が描かれ、和声が連なったある種の『音楽』となる。

しかし、その音律を組み合わせる事によって生まれた術、それこ

そが……

「譜歌でございます」

譜歌……譜術における詠唱部分だけを使って旋律と組みあわせた術、譜術ほどの力はない……“ただ”の譜歌ならば……

「馬鹿な……譜歌でそのような芸当が……」

「理屈では可能でございます……ですが、その分神がかりな技術を用しますが……」

戸惑ったような呟きにマリィは肯定となる理論を述べる。

だが、その時……ヴァンの顔が苦虫を噛み潰したように顰められていた。

それを間近で見ていたガイだけが訝しむほどに……

「……心当たりがあるのか？」

「いえ……」

「……」

押し黙ってしまったヴァンを怒りすら含んだ目で睨むガイ。だが、答えそうにないと判断するやいなやヴァンに背中を向け、ガイは『命令した』。

「今の話を伝えて郊外への捜索隊を組むよう提案する。貴様は俺をそのメンバーへ含めるよう公爵に進言しろ。いいな」

「……待て」

公爵がいる方向へと足を進めようとしたガイをヴァンの静かな制止が阻んだ。

顔を振り向けようとせず、無言でいる彼の背中へ顔を向けてヴァンは口を開き、冷淡な声を出す。

「一つ聞きたい……貴公は『どちら』の行方に対して焦っているのだ」

ピクリ……とガイの肩が動く。

暗号のような問いかけにじっと沈黙した彼は数秒後苛ついた声で答えた。

「決まってる――――――両方だ！」

離れていくガイの背中にヴァンは小さく溜息をついた。

バタンッ――――！！

「公爵様！！」

突如として、その場に少し似つかわしくない様子である慌てような兵士がこの場へと入って来た。

「なんだ！　私は今他の事に構っている暇などないのだ！！」

「ご無礼を働いた事はお詫び申し上げます……ですが、早急に公爵様に御取次を願いたいとダアトの者が上層部手前まで近付いておられます」

「この非常時にダアトの人間がなぜやって来る！！」

クリムゾンは大方、秘預言に関してルークがキムラスカからいなくなったからこれはどういう事かと調査しに来たのかと考えていた。

この事は政務に関わる人間にしか知られていないので一兵士にはそ

の意味を知らないかのように振る舞った。

「なんでも、公爵様の御屋敷にいるヴァン総長を連れ戻しに参られたと……」

「……何？」

「私の事……か？」

ルークの事ではないだと……？　じゃあ、一体“誰”が来たんだ……？

「その者の名前は分からぬのか？」

「いえ、御取次を願われる時に名乗り出ました……確か、」

――――オラクル騎士団治癒師団長　ハーミット――――

「と名乗られておられます」

「ぶぼっ……！！」

「んなっ――――！！」

「あら、早急にこの場まで丁重に御迎えなさい♪」

ヴァンは思わず吹き込んだ。クリムゾンは驚愕に満ちた。シュザンヌはニコニコと笑顔でそう言った……

シュザンヌに言われた兵士はすぐさまこの場から立ち去っていく。そして、この場に残るのはやや静寂な状況であった……

「ヴァン総長、そう言えば気になっておられたのですが……ダアトでは導師が誘拐なされてたのですよね？」

「は……はい！！　ですが目星は付いております。マルクトによる

……」

「あら、そこでそのような問題発言を申したらどうなるか……お分かりですよね？」

ゾクゥッ――――！！！

「いえ、あの……それは……」

「さっきから疑問に思ってなさいました……なぜダアトの一大事に“わざわざ”主席総長がキムラスカに入り浸りしておられるのかしら♪」

ゾクゾクゾクッ――――！！！

「どうやら、ヴァン総長はやはり早急に御戻りになられた方がよろしいようで……」

「し……しかし……」

バシュッ――――！！！

その時、いつの間にか少し開かれていた扉からワイヤー付きのフックが伸びていき、巧みな方向変換を経て……

「なっ……ぼ……ぶぅ……が……！？」

ヴァンの体を幾重にとグルグルに拘束する。

「それでは、またのお越しをお待ちしておりますわ♪」

ギュィィィィ――――！！！

「ちょっ……ま……いやあぁぁぁぁ――――――――！！」

女の叫び声みたいな声を上げてヴァンは引き摺られていった。その顔は絶望に染まって……そして、ヴァンがちょうどこの部屋から出て行ったと同時に扉が大きく閉められ……その場には一通の手紙が床に残された。

「シュ……シュザンヌ……先ほどのはいったい……」
「きっとダアト限定のスキンシップなんですわ……旦那様♪」

――――――やめてくださいハイルさん！！　そんな蛍光塗料みたいな色した薬剤なんか注射するなんッてでビュビャバババババババ！！！！！！――――――（４８話参照）

「「……」」
「では、そちらに置かれた手紙を拝見いたしましょう」
「「（無視した！？）」」

シュザンヌ様……元気になってから黒さに一層磨きが掛かっております！！

ようやく床の手紙に手を付けたクリムゾン一行はじっくりとその内容を見てみた。最初は形式的な挨拶からの文の始まりであったが、途中からが問題であった……

そして、紙面には限りがありますので、簡潔に書かせて頂きます。
導師が“何者”かに誘拐された今、ダアトは立場上に危うい状態であるのは確かなのですが……それなのに家の早ろ『消去されました』が何やらほっつき歩いてファブレの方々にご迷惑をおかけいたしまして誠に申し訳ありません。
この童て『消去されました』にはきちんと後始末の処理を致しますので何とぞファブレ公爵様の寛大な御心で一時御怒りを御静めくださいませ。
さて、もう一つの問題であるルーク様誘拐事件ですが、此方の調査でも判明した所……“誘拐犯”との接触により起こった疑似超振動が原因とのことです。
その行方を探った所、何とマルクトにて第七音素集束記録が発生したとの情報が伝わりましたので、ダアト側も独自にマルクトへ入国許可を取ってルーク様の探索へ参加させていただきます。
この事は、この手紙の内容からインゴベルト国王陛下へ伝手を願いたくいただきます。
今回、ファブレ公爵様と御顔も会わせれず此方の勝手な判断を起こしてしまい誠に申し訳ありませんが、ダアトも何かと問題であるため……ご了承を願います。
そして最後に一言、

滅べマル（此処から先は抉られたように書かれている為、解読できない）

――――――――――――――――――――

「……今回は早く解決できそうだな……シュザンヌ」

「そうですわね……先生とまたお会いする時が楽しみですわ♪」

何かと不適切な言葉が入っていた手紙を読んで何かを悟ったクリムゾンとシュザンヌなのであった。

――――――――――――――――――――

Ｓｉｄｅ：ルーク

――――……きて……君……起きて、……――――

誰かが呼んでいる……意識がゆっくりと覚醒し、ルークは目を開いた。そんな中で、自分を心配そうに覗きこんでいる青い目があった。

「う……ここは……？」

「よかった……無事みたいね……」

安堵の顔で微笑う女の顔をぼんやりと見つめて、ルークは疑問を口に出した。

「君は……誰だ……？」

「私はティア、この渓谷に偶々来ていたのだけど……貴方は何故こ

こで寝ていたの？」

しんしんと虫の声が聞こえる。辺りは真っ暗で、丈の長い花が青白く風に揺れていた。

暗くてよく見渡せないが、初めて見る景色だ。少なくとも、屋敷ではない。見慣れた物も人も、何一つ発見できない。

「けい……こく……俺は、屋敷に居た筈じゃ……そうだ！あの黒づくめの野郎！！」

ルークは何かを思い出すと勢い良く起き上がり、その事に憤慨の表情を表す。

だが、突然体中に走る痛みにより悲鳴を軽く上げる。

「っ……！？」

「怪我をしているの！？　大丈夫？　急に動いたりしては駄目よ」

気遣う声をかけてくるティアを振り切って飛び離れ、ルークは動揺しながら次々と疑問をぶつけた。

「どうしてこんな所にいるんだ……師匠を助ける為にアイツに飛びかかって……その時に変な光が出て来て……くそ、いったい何がどうなってんのか良くわかんねぇ！！」

「落ち着いて！　何か事情があるようだけどそんなに慌ててはいけないわ」

ティアは頭を押さえて苦悩するルークを落ち着かせるように宥めて行く。それのお陰で荒くなっていたルークの呼吸は回復し始め、改めて向き合った。

「……わりぃ、だけどよ……本当に何が何だか……」
「じゃあ一からゆっくりと話してみて……それから判断してみるわ」

そして、ルークはティアに自分の今知っている事を順に話していった……

自分の名前はルークである事、キムラスカにある屋敷で済んでいた事、ヴァン師匠と剣の稽古をしていた事、不思議な歌が聞こえてきて、その後に何者かが屋敷に侵入した事、その者が師匠を殺そうとしていて、自分はソイツを倒そうとした事……そして今に至るという事……

「剣を襲撃犯にぶつけた時……不思議な光が発生……もしかすると、それは“疑似超振動”が起こったからに違いないわ」
「ちょうしんどう……なんだそりゃ？」
「同位体による共鳴現象の事よ」
「……さっぱりわかんねぇ」

ルークにとって初めて聞くその言葉はただルークを困惑させるだけであった。

「分からない事だったら無理に考えなくてもいいわ、今はそういう事を聞く場合ではないかもしれないから……」
「……どういうことだ？」
「なんでもないわ……それより、よく疑似超振動に巻き込まれて無事で済んだわね」
「へっ……？」

ルークは疑似超振動についての説明を簡易的に受けた。
ちなみに、超振動とは同一の音素振動数を持つ音素同士が干渉し

合うことで起こる、ありとあらゆる物質を分解し再構築する現象である……通常、別々の物質の音素の振動数は一致しないため、発生する可能性は無いに等しい。

超振動と第七音素は密接な関係にあり、第七音素を媒体とすれば超振動の規模を拡大することが出来る。また、第七音素同士が干渉すると、超振動に似た現象が発生することもある。これが「擬似超振動」と呼ばれ、その威力は通常の超振動の6割減とされるが、物質を消滅させるには充分な威力を持つ。

今回ルークに起こった疑似超振動は分解から再構築へと行程を結びつけられた物ではあるが……

「普通、超振動の制御はよほど正確な力の操作をしない限り成功確率は上がらないの。だからもし、今回の疑似超振動の手加減が何か一つでも誤っていたら……」

「と……言うと……？」

「……見るに堪えない姿となって……最悪死んでたかもしれないわ……」

「うえぇぇぇ……」

ルークは失敗例の結末を想像して思わず気持ち悪くなってしまった。

「だから正直驚いてるのよ……それより、貴方をこのまま此処に居させる訳にはいかないわ……」

「へっ……？」

「そんな事情を持つ貴方を見つけた以上、私にも責任はあるの……だから、貴方をバチカルの屋敷まで責任を持って送っていくわ」

「け……けどよ、此処が何処だか俺わからねぇんだぞ！？」

「……耳を澄ませて……水音がするわ。川があるのよ……川沿いを下っていけば海に出られるはずよ。とりあえず、この渓谷を抜けて

海岸線を目指しましょう。街道に出られれば辻馬車もあるだろうし、帰る方法も見つかるはずだわ」

「……へぇ、そういうモンなのか」

そんなこと、初めて聞いた。感心するルークは、「向こうに海が見えるでしょう」というティアの言葉に目を瞠った。青白く揺れる花々の彼方に見える、時折きらめきながら黒々と横たわるもの……それが、

「あれが……海なのか」

「……海を見た事が無いの？」

「あぁ……ずっと屋敷で軟禁されていたから……海を見た事なんてなかった……」

「……そう」

初めての海にルークは感動していた。このままずっと眺めていたい気がしていたが……そうもいかない。

「さぁ、行きましょう」

自分の帰る場所へと目指すべく、ルークは歩み始めるのだった……

―――――――――――――――――――――――――

Ｓｉｄｅ：ティア

「（ごめんなさい……騙してしまって……）」

ティアはルークに嘘を混ぜて説明していた。あの襲撃犯は自分である事……だが、極力自分の正体をバラさないようになっているため、教える訳にはいかない。辻褄を合わせる為、飽くまでティアは

偶々ルークを此処で見つけた一般人を装わなければいけなかった。
実際、今の服だって自分が私服として着る数少ない服でもあった。
“あの時”来ていた黒いローブは渓谷から見える海目掛けて投げ捨ててていた。
今回は疑似超振動という予定外な事が起きてしまった為にティアもどちらかと言うと困惑している。それなのにあえて平然を装ってなんとか行動してると言える。
それに、ルークからはバチカルの屋敷に住んでいるとは伝えられたが、それがファブレの屋敷とは伝えてもらっていない。そして一度もファブレの名を口にしていない……調べた情報によると、平民の間ではルークの名は伝わってない所が多い。約十年前の誘拐により軟禁されてた為にその事を口にしないよう、あえてルークについての話題は話されぬよう王家が手を廻していたそうだ。その結果、ルークの名は平民の間ではやや忘れかけられているとのことだ。
だが、バチカルにとって王族を示す赤髪と翡翠の瞳を持つ事ばかりは完璧に隠す事はできないだろう……これについては後に検討しなければ……

ガサッ……！！！

その時、道を歩き始めた途端、近くの草むらがガサリと揺れた。
ルークにしてみれば風で揺れたのか、と思う程度のことだったが、ティアははっと足を止め、緊張を含んだ声で言った。

「隠れて、魔物よ！！」
「魔物……！？」

ルークはきょろきょろとして周囲を見渡すがまだ見つけられない。

「来るわ……！！」

ティアは即座に太腿に付けてあったガーターベルトからナイフを抜いてルークを背に構えた。

「じょ、冗談だろ！　魔物って……」

「私が引き付けているから、ルークは離れていて！！」

「えっ……あ……おぃ……！？」

ルークはうろたえる。魔物なんて、話や本でしか知らないおとぎ話のような遠い存在だった。それが、こんなに簡単に……唸りと共に、暗い茂みの中から一頭の獣が飛び出してくる。

「うわぁっ……！！」

「やぁっ――――！！」

みっともなく悲鳴をあげて後ろに転びそうになったルークの傍から、ティアが素早く踏み出してナイフを投げ放った。イノシシのような姿のその魔物は少し怯んだが、倒せたわけではない。突き出た牙を誇示しながらティアに向かっていく。

「く……くそおぉぉぉ――――！！！」

その時、ルークはカトラスを抜き、それを魔物目掛けて走る。

「でやあぁぁぁぁ――――！！！」

カトラスは魔物の脳天目掛けて振り下ろされる。ルークは手応えを感じた……が、魔物はまだ止まらなかった。この時、ルークの今の力では魔物の頭の皮肉を斬る事はできたが、頭骨を割って脳にまで達する事はできなかったのだ。

「うわっ！？」

ルークの攻撃で魔物はさらに怒り、今度はルーク目掛けて突進してくる。それをルークはなんとかして避けた。

「そこっ！！」

そこへ突進が終わった瞬間をねらってティアは魔物に再びナイフを放つ。すると、それは見事に魔物の左目に吸い込まれ、魔物は激痛で地面に倒れ込んだ。

「怪我は無いルーク！？」

「お……おぅ……」

ティアは慌てながらルークに安否を問う。もしも彼に怪我などさせたらハイル曰く、大変な事になるからだ。

「駄目よ実戦経験のない人間がむやみに魔物と戦っては……！！下手をすれば死んでしまうかもしれないのよ！？」

「け……けどよ、俺だって師匠に剣を習ってて腕に自信が……」

「それなのに魔物相手にはかなり動揺してたじゃないの」

「ぅ……」

「“軍人”として私は民間人である貴方を守らなければいけない立場なのだから、お願いだから魔物からは出来るだけ離れて」

「へ……？　お前、軍人だったのか？」

「……っ！！」

ティアは思わず手で口を塞いだ。余計な事は言わないようにする筈なのに思わず洩らしてしまったようだ。やってしまった事は仕方

がない為、自分の情報をルークに少し教える事にした。

「……えぇ、私はオラクル騎士団大詠師モース旗下情報部第一小隊所属……ティア・グランツ……ルークの言うとおり、軍人よ……」

「へぇーダアトの軍人なのか……ってグランツ……？　どっかで聞いたような……」

「……っ！！」

またもや失敗した……軍人としての階級の名乗り方の拍子で名前まで全て言ってしまった……これじゃあまずい……そう考えていた所、

ガサガサガサッ……！！！！！

先ほどよりも大きく草むらが揺れる音が聞こえたかと思うと次の瞬間、魔物が一気に三・四匹は現れてきた。

「な……なんだこいつら！？」

「……さっきの魔物の血の臭いを辿って来たって訳ね……」

ティアは忌々しそうに呟くと、ロッドとナイフを構える。此方は人を守りながら……対して相手は多数……圧倒的に不利だ……

「なぁ、俺も戦う！！」

「だめよ、貴方が怪我でもしたら大変なんだから！！」

「さっきから駄目駄目うっせーな！！　俺も守られてるばかりじゃ嫌だってーの！！」

「そう言う事じゃないのよ！　なんていったって貴方はお……」

ティアはまたしてもしまったと考えた。

「……お？」

ルークは先ほどティアから出かかった言葉に疑問を持ち始める。

不味い……これは不味いわティア……なんとか解決策を考えるのよ！！

これ以上の失敗は出来ないので咄嗟に思いついた答えを出した。

「お……“おしゃれな人”だからよ！！」

……

……

……

…

・　・　・

「おしゃれ……俺がか？」

「そ……そうよ、貴方はおしゃれな格好をしているから汚れたりしたら大変だわ！！　だから戦いは私に任せて！！」

もはや自分が何を言っているのか分からなくなっていた。ティアは後にて羞恥心でいっぱいになるであろうと覚悟しながら言葉を紡いだ。さすがにこれには呆れられるかと思った……が、

「……そっか、俺おしゃれなんだ……」
「えっ……？」
「だよなぁ！！　屋敷では俺のファッションを皆ちらほら見てたし、ラムダスやガイも褒めてくれた事があったし……やっぱり俺の服装は間違ってなかったんだ！！」
「えっ……あの……」

なんか自分が考えていた方向とは違う方に言った事でティアは困惑し始めた。それに、ルークの服装はへそ出しである。腹筋もまる出しと……これを一般的に御洒落と言うかと問えばなんて大半は答えるだろうか……
答えは断じて否！　であろう……私はノーマル……私はノーマルなのよ……ティア・グランツ！！
このままではこの公爵子息、唐突もないことを起こしかねない……そう考えて次を実行するのは早かった。

――――トゥエ　レイ　ズェ　クロア　リュオ　トゥエ　ズェ――――

ティアは兄から授かった譜歌を歌い始める。その譜歌に込められた意味は深淵へといざなう旋律……名を『ナイトメア』と呼ぶ。
譜歌が発動し始めると魔物達は動きが緩慢となり始めた。この譜歌の効果は謂わば催眠……強制的に眠りへと誘うのだ。

「今よ、一気に走り抜けるわ！　走って！！」
「お……おい、待てよ！！」

ティアはルークの左手を無理やりながらも引っ張ってこの場から一気に退散する。いきなり手を握られたことによりルークは驚いたが、その次にはいきなり走りだしたので己もそれに合わせて行動を

共にすることにした。

――――――――――――――――――――

どのくらい走ったのだろうか……

決して後ろを振り返らずに真っ黒な山道を進んで約数分は経っていた。

「はぁ……はぁ……ここまでくれば安心かしら……」

「ゼー……ゼー……もうむ……り……ちょっと……きゅう……けい……！！」

軍人として訓練を受けていたティアは息は少しだけ荒くしていた方であったが、ルークは違った。

住んでいた屋敷は広い方ではあったが、全力で走り回るという行動をするには少し違った場所であったのでめったに走らなかったルークは息をかなり荒くして上下に激しく肩を動かしていた。

「見て、出口よ！」

しかし、その対価は見合ったものであった。草が生い茂るばかりで獣道だけだった道がなくなり、人が歩くような道がようやく見つかったのだ。

いい加減ヘトヘトになって歩いていたルークも、ティアのその言葉を聞いて安堵の息を吐いた。

「ようやくここから出られるのかよ。もう土くせぇ場所はうんざりだ」

走り詰めた足は痛くなり、真っ暗な山道がどこまで続くのか見当

もつかず、もしや永遠に歩かされるのだろうかとルークはゾッとしていたところだったのだ。
二人はホッとしてそこへ向かおうとしたところ……

ガサッ……！！！

下草をかき分ける音が聞こえてきた。またしても魔物かと一瞬構えたが、その影を見て違うことに気付いた。人間だ。思わずルークが走り出ると、人影は「うわっ！」と悲鳴をあげて足を止めた。

「あ……あんた達、まさか、『漆黒の翼』か！？
「……漆黒の翼？」
「盗賊団だよ。ここいら辺りを荒らしている男女三人組……ってお前たちは二人連れか……」

不思議そうに問い返したティアにそう答えて、人影は声音を落ち着かせた。月明かりで姿が見える。中年の男性だ。

「……フン、俺をケチな盗賊野郎と一緒にすんじゃねぇ」

不快に思ったのか、ルークは男が言った言葉に反論を唱えた。
そこにティアが前に歩み寄って声をかける。

「あの……私達は道に迷ってここに来た者です。貴方は？」
「俺は辻馬車の駅者だよ。この近くで馬車の車輪がいかれちまってね。水瓶が倒れて飲み水がなくなったんで、ここまで汲みに来たのさ」
「馬車か！　助かった！」

ルークは顔を綻ばせる。ティアが駅者に尋ねた。

「その馬車は首都まで行きますか？」
「ああ、終点は首都だよ」
「乗せてもらおうぜ！　もう歩いたり走ったりするのはうんざりだ」
「そうね……私達土地勘がないし……お願いできますか？」
「そうだな、首都までとなると……一人１２０００Ｇになるが、手持ちはあるかい？」
「……高い」

愕然としてティアが呟いた。しかしルークは暢気に笑う。

「そうか？　安いじゃん。首都に着いたら親父が払うよ」
「そうはいかないよ。前払いじゃないとね」

ルークは貴族としての生活をしていたために金銭感覚が疎かった。お金に直に触れたわけではないが、屋敷にある物の金額を何度か聞いたことがあり、それよりも百分の一ほどの金額であったのでルークにとってその金額は安いと思ったのだ。
対して、ティアは駅者はなんとか安くできないかと交渉していたが、金額を変える気がないと悟り、数瞬の躊躇の後、ティアは首に大事そうに下げていたペンダントを外して駅者に渡した。

「これを……」
「ふむ……これは大した宝石だな。よし、乗ってきな」

駅者は顔を綻ばせながら宝石を手に持って馬車の前の席に乗りこんでいった。

「……なぁ、あれ……大事なものなんじゃないか？」
「……いいのよ、それより早く乗りましょう？　」

「……」

ルークはどこか引っかかっていた。あれがティアの手から離れた時、彼女が悲しそうな目をしていたのを見たからだ。あれはたぶん、彼女の傍から離れてはいけない物だ……ルークは物の価値はまだ良く分からないが……人が大事にしている物という事での“大切な物・掛け替えの無い物”といった事は何処か分かっていた。……その例としてはガイが部屋で大事にしていた譜業を誤って壊してしまった事だ……あの時はガイが「仕方ないから気にするな」といってくれたが、しばらくの間……元気がなさそうにしていたことがあった。

だからこそ、ルークは“待った”を掛けた……

「なぁおっさん！　ホントに前払いじゃなきゃいけねぇのか？」

「ルーク……！？」

「ん……まぁそうだな……それが商売なもんでね」

「頼むよ！　それなんかティアが大事そうにしてるモンらしいからそれで金払うのは待ってくんねぇかな！？」

「ちょっと何言ってるのルーク！　別にいいって言ったじゃないの！！」

「そうは言ってもなぁ……なら他に料金に見合うものを出せるんなら……ん？」

駄者はルークの相談に一時考えていたが、ある所に視線を向けると何かに気づいたように顔をそこに近付けた。

「こりゃあ驚いた！　坊主、お前の着ているその服にあるボタン……金銀の彫金細工が施されてるモンじゃないか！！」

「へっ……ボタン？」

「あぁそうだよ！　それだったら二個くらいくれるんだったら考えてもいいぞ？」

「そうか、じゃあ！」

ブチブチッ……！！！

ルークは躊躇なく袖の方のボタンを引きちぎった。その様子にティアは「あっ……」と言葉を漏らすが……その間に二人は独自に交渉をしていった。

「ほらよ、これでいいんだろ！？」

「よし、ならこいつは返してやろう」

ルークは駅者から先ほどのペンダントを受け取った。大きなアメジストの宝石を中心としてさがねに彫金が施されていてずっしりと重いものだった。

そして、それを右手と共にティアに差し出した。

「ほらよ、これでいいんだろ？」

「……ありがとう」

ティアはそれを愛おしく手に持って静かながらも微笑んだ。その笑顔をみたルークは何処か恥ずかしくなったのか……先に馬車へと乗り込もうとしていた。

「お……おい！　早く乗らねえとお前置いてくかんな！！」

「っ……わかったわ！！」

こうして、ようやく二人を乗せた馬車はタタル渓谷から出発したのであった。

――ティア、今日はお前の16歳の誕生日だ……今年はこれをやろう――

――これは……兄さん？――

――私とお前の母さんの形見だ……大事にしなさい……――

――母さんの……――

――きっと、お前を見守ってくれているはずだ……無くすんじゃないぞ――

――えぇ、ありがとう……兄さん……――

運命は詠［うた］い……紡がれていく……

原作編　第一話（後書き）

今回から原作編です……頑張ります。

原作編　第二話（前書き）

寝不足三昧万々歳なこの頃です……だったら寝ろと兄に突っ込まれましたＪａｓｔｉｃｅとです。

原作編　第二話

マルクト帝国の首都、グランコクマは水の都と呼ばれている。
街のいたる所にある噴水や観光名所ともなっている水道橋と、水との関係は切っても切れないものだ。
張り巡らされた水路は街の隅々まで行き渡り、平時には憩いを齎し戦時下には強固な防衛線になる。
グランコクマは大陸の西端の、さらに海に突き出ている位置にあり、その背後は豊かな天然の森、テオルの森が守っている。
戦時下になると貿易で賑わう港を封鎖し、堅牢な要塞ともなる。
そのグランコクマの宮殿は、大量の水をたたえた水路で街と一線を画していた。

クモの巣のような水路の源、マルクト帝国の中枢、グランコクマの宮殿にシンクはいた。
ハイルから報告書を渡されたシンクは、事の顛末の落とし所を探りに来た。ダアトにいては疲れるだけだと悟ったとも言う。
一段高いところにある玉座には、5年前に即位したピオニーが座っている。
浅黒い肌に輝く金髪。その見た目に反せず、シンクがお決まりの挨拶をすると快活に笑った。
ありきたりだが、太陽のようなという形容詞はこういう人間に適用されるのだろうとシンクは思った。
だが、その皇帝の人と形はシンクの要件に関係ない。かすりはするかもしれないが重要ではなかった。

シンクは時間の浪費としか思えないような遣り取りをした後、本題に入る。

「つきましては陛下、導師を浚ったそちら側の真意を問わせていただきたい」
「分かっている……だが、誤解しないで頂きたい。我らマルクトは真にキムラスカとの和平を望んでいる。故に、ダアトと事を構えるつもりは無かった」
「でしたら、何故定理に沿った手続きをなさらなかったのですか？」
「……此方の部下の勝手な判断によるものだ……誠に申し訳ない……しかし、此方の報告書によれば、導師は和平に協力する事を知らす書置きを残されたと申されている。自筆のサインも添えられてる所……それは事実だと判断している」
「書置き……？　そのような物……導師の部屋を調査した時でも見つかられませんでしたが……？」
「なにぃ――――！？」

ピオニーは事実とは違う事が起きている事に驚愕する。これはどういう事かと頭で必死に答えを探し始める。

「ですが、そのような事実……今この場で発表されましても導師の探索は最重要機密である事には変わりありません……早急にそちら側の判断をいただきたい」
「……了解した。ダアト所属、オラクル騎士団員の入国を導師探索の為に許可しよう」
「して……部下からの報告でさらに重大な事が伝わってきておりますので……マルクトに存在する第七音素探知装置にてでも急速な第七音素収集が感知されたのを知らされて居られますでしょうか？」
「確かに……まさか……その正体がダアトでは判明したのか！？」
「はい……実は……キムラスカではこんな事が起きたとの事です……キムラスカ公爵家王位継承権第三位……ルーク・フォン・ファブレ様が正体不明の賊に疑似超振動によって何処か消え去られたとか……しかも、その時刻がそちらマルクトの探知装置が感知した時刻

とほぼ同時刻であるとの事です」

「……」

「なんだってえぇぇぇぇ――――――！！！！！」

ピオニー・ウパラ・マルクト9世……正直この国もうだめじゃね？

と思った瞬間であった……

――――――――――――――――――――――

「ったく、あの馬鹿はなにやってんだ」

ピオニーはシンクが扉の向こうに消えると独り言を呟いた。

ジェイドは誰にも相談せずに突っ走って何かを仕出かす。その過程はアレでも、結果だけは出す。それでいて喜びもしない。

きっと今、ジェイドは自分の行動が引き起こしたことを理解して後悔しながらも、虚勢を張って皮肉を言っているだろう。

自分でも分かるのに、当の本人はその自覚がないのだから筋金入りだ。――ネビリム先生が死んだときもそうだった。

ピオニーが大きな譜力に気がついて駆けつけたときには全て終わっていた。

純白の雪を真っ赤に染めている恩師に座り込み泣いているサフィール。それに呆然と立ち尽くしているジェイド。

その眼だけはギラギラと光り、どう見ても慕っていた先生の遺体

を前にした光景には相応しくなかった。
ネビリム先生の死はピオニーの子供時代の終わりを意味していた。仲が良かった４人はばらばらになり、この有様である。

ジェイドは未だにネビリムの死から立ち直っていない。
死を理解できないと口にしているが、ピオニーに言わせればジェイドは死を理解することを恐れているのだ。
あれだけレプリカでネビリム先生を生き返らせることに固執したのも、そうすることで彼女の命を奪ったことを無かったことにしたかったのだろう。
それを実行できるだけの才覚があったことがジェイドの不幸かもしれない。
天才でなければ、素養がないにも関わらず無理して第七音素を操ろうともしなかったはずだ。
自分に無いものを持っていた彼女に彼が執着することも、教えがいのある生徒である彼を彼女が特別扱いすることもなかった。
二人の関係はどこか歪だった。それにどうにか加わろうとしていたサフィールは、ピオニーより先にそれを察知していたのかもしれない。

ジェイドは天才であるが故に前代未聞のことをやってのけ、不可能を可能にしてしまう。ジェイドは常にピオニーの斜め上を行く。ジェイドを使者に抜擢したのは、彼なら何か予想もつかない解決策を出してくれるかもと、ピオニーが無意識のうちに頼っていたからかもしれない

「あぁもう！　“アイツ”からの願いによるアグゼリュス対策だけでさえ忙しい時期だって言うのにたくっ……！！」
「陛下、そんなに頭をカッカとすると破裂しますよ？」
「アスラン……お前この事分かってて俺に言ってなくないか？」

「ええもちろんです♪　いつも政務ばかりサボっている陛下にとって再び賢帝の名を示すには相応しい働きをしてもらえそうですからね」

てめぇが頑張らねえとマルクトがまじぃんだよ！　だからとっとと働きやがれ！！

アスランの顔にはそんな風に言ってるかのような笑顔が張り付いていた。青筋を立てて……

「うぅ……こんな事になるなら使者をおまえにしときゃよかった……」

「過ぎたものは仕方ありません……さぁ、さっさと働いてください」

「仮にも俺皇帝なんだよォォォ――――！！！」

ピオニーは何時もより冷たい部下の対応に泣きながら印とペンを手に取り始めた。

頑張れピオニー、マルクトの命運は君に掛かっている！

しかし、彼は知らない……これがまだ序の口であったなどと……

――――――――――――――――――――――――

Ｓｉｄｅ：ルーク

二人は、馬車に揺られながらその一夜を過ごした。

やがて馬車は海峡をつなぐ長大な石橋を渡る。その頃は既に日が高くなっていたが、ルークはまだ座席で眠っていた。が、突然響いてきた轟音に、その意識は覚まされる。

「……な、なんだ！？」

「ようやくお目覚めのようね」というティアの声も構わずに、ルークは馬車の窓に飛びついて外を覗き見た。

一台の馬車が、猛烈な勢いで辻馬車の隣をすれ違っていった。たった今辻馬車が渡って来た石橋の方に。それを追って、巨大な陸上装甲艦が砲台を撃ち鳴らし、地を走ってきている。

「お、おい！　あの馬車、攻撃されてるぞ」

「軍が盗賊を追ってるんだ！　ほら、あんたたちと勘違いした漆黒の翼だよ！」

御者台から馭者の声が聞こえる。

『そこの辻馬車！　道を空けなさい！　巻き込まれますよ！』

陸艦からアナウンスが聞こえた。避けて急停止した辻馬車の脇を轟音を立てて走り抜けていく。

――――――――――――――――――――

陸艦の艦橋では、席に着いた乗組員たちが緊張した声で艦長席に立つ人物に報告の声をかけていた。

「師団長！　敵がローテルロー橋を渡り終え、橋に爆薬を放出しています！」

「おやおや。橋を落として逃げるつもりですか」

ズボンの両ポケットに手を突っ込んだまま、師団長と呼ばれた男が呆れた声を上げる。乗組員たちの声が響いた。

「フォンスロット起動確認！」

「敵は第五音素による譜術を発動させました！　橋が爆発します！」

艦長席に立つ男が命じる。

「タルタロス、停止せよ。譜術障壁起動」

「了解！　タルタロス停止！」

「譜術障壁起動！」

――――――――――――――――――――

ドゴオォォォォ――――――――ゥゥゥン！！！！！

次の瞬間、逃げていく馬車の後ろで、石橋は爆炎を噴き上げて崩れ落ちた。そこに向かう陸艦は慣性で地を滑ったものの危うく停止して、舳先に譜術障壁を展開してその爆炎に耐えた。

「すっげぇ！　迫力～っ！」

小さな子供のように窓から身を乗り出してはしゃぐルークを、ティアが「危ないわ」と座席に引き戻した。

「驚いた！　ありゃあマルクト軍の最新型陸上装甲艦タルタロスだよ！」

興奮した駁者の声が聞こえた。ルークはぎょっとする。

「マ、マルクト軍!?　どうしてマルクト軍がこんなところをうろついてるんだ」

「当たり前さ。何しろキムラスカの奴らが戦争を仕掛けてくるって噂が絶えないんで、この辺りは警備が厳重になってるからな」

ティアが青い目を見開いた。

「……ちょっと待って？　ここはキムラスカ王国じゃないの？」

「何言ってんだ。ここはマルクト帝国だよ。マルクトの西ルグニカ平野さ」

「じょ、冗談じゃねーぞ！　この馬車は首都バチカルに向かってるんじゃなかったのか！？」

思わず席を立って叫んだルークに、馭者の誇らしげな声が掛けられた。

「向かってるのはマルクト帝国の首都、偉大なピオニー九世陛下のおわすグランコクマだ」

「……間違えたわ」

静かに言って、やってしまった……と思っているのを表すかのようにティアが顔を伏せた。

「冷静に言うなっつーの！　なんで間違えるんだよ」

「ごめんなさい……私本当に土地勘無いから……」

すまなそうに謝るティアの姿を見て怒りがぐっと詰まり、ルークは座席に座ると腕を組んだ。

「いや、別にいい……俺も軟禁されてたんだ……外に出たことねーんだから分かるわけないしよぉ」

「……なんか変だな。あんたらキムラスカ人なのか？」

駁者の声が不審げになる。慌ててティアが弁解した。

「い、いえ。マルクト人です。訳あってキムラスカのバチカルへ向かう途中だったの」

駁者が気の毒そうな声を出した。

「それじゃあ反対だったなぁ。キムラスカへ行くならローテルロー橋を渡らずに、街道を南へ下って行けばよかったんだ。もっとも、橋が落ちちまっちゃあ戻るに戻れんが……」

「マジかよ。どーすんだおい……」

「俺たちは東のエンゲーブを経由してグランコクマへ向かうが、あんたたちはどうする？」

「さすがにグランコクマまで行くと遠くなるわ。エンゲーブでキムラスカへ戻る方法を考えるしかないわね……」

ティアは言う。こうして、二人はルグニカ平野にある村、エンゲーブに降りることになった。

その頃、先ほどタルタルスからの追跡を上手く捲いた漆黒の翼は森の木々が生い茂った所を上手く活用して、馬車を一時休憩させる為に隠れていた。

「よーし！　5分ほど休憩させたらまた出発するよ！　わかったかい、ヨーク、ウルシー！？」

「「へい、ノワール姐さん！！」」

ノワールと呼ばれた露出度の高い赤い服を着た女は馬車の手綱役をしていた海賊のような格好をした男ヨーク、ずんぐりとしたハゲ頭に髭を生やした男ウルシーに激を飛ばす。

「それにしても、今回はちょっと派手にやり過ぎたかね……？」

今回はエンゲーブにて競りに出される前の食糧を何度かかすめた程度だったのだが、まさか軍艦がこんな小さな田舎村に停泊しているだろうとは思いもしなかった。

不審人物として職務質問のような事をされた時はさすがに不味いと感じた為に強引に逃げた……軍といった最高戦力に漆黒の翼のもう一つの名でもある『暗闇の夢』としての正体を教える訳にはいかない。もし後から漆黒の翼としての正体と照らし合わされたら一気に検挙され、『暗闇の夢』と『漆黒の翼』は同時に終わってしまうからだ……

「姐御、そういやさっき壊したローテルロー橋って……キムラスカとマルクトを陸地で繋ぐ唯一の道じゃなかったっけ？」

「確か……そうだったね……それがどうかしたかい？」

「交易ルートを俺達が潰したって事になるよな……国際問題的に不味くね？」

「……あ……」

ノワールはここでうっかりをした事に気が付いた。世界中を轟かせるとされる盗賊団・漆黒の翼はある意味有名だが……それは飽くまで盗みの範疇での事だ。だが、彼らのモットーは悪徳貴族や無駄に金を溜め込む商人などの所しか盗みを働かない事で決めてもあり、裏では平民達にとっての義賊としても有名であった。

なのに、これでは晴れて世界を轟かした『犯罪者』に仲間入りしたという結果が出たという訳だ。

「やっぱ……」
「だ……大丈夫でガスよ！　案外バレない事が多かったこともあったし……今回もきっと……」
「ウルシー、そんな気楽な考えで盗賊団がやっていけると思ってるのかい！？」
「す……すみませんでガス……」

ノワールは責任の重さに少し無頓着気味だったウルシーに激を入れる。

「アタシ達が終わるってことは“皆”の終わりも意味するんだよ！　それだけは何としてでも避けなきゃいけないんだよ！　わかったかい！？」
「はいでガス！！」

ノワールは盗賊の頭領、サーカス団の団長……そして、もう一つの顔がある。
潮の流れが激しく、天候差の激しい地形にて佇む一つの島……ナム孤島の管理を担う管理者としての顔が……
その孤島にはかつて“十六年前の惨劇”にて生き残った者達をノワール達が探し集め、今日の今まで必死に守り続けてきた彼らの同郷人達が居る。
あの惨劇の後にて始まった地獄の日々を……苦楽を共にした人達が居る。
ある者は孤児として彷徨い、またある者はどんな雑用であろうとも生きる為に必死に働き、はたまたある者は娼婦や裏の世界の住人として生きざるを得なくなった者が……
そんな人間達の最後の希望として必死にお金を稼ぎ、あの島を作り上げた。

「だからこそ、アタシ達は盗賊をしてまでも頑張らなきゃいけないんだよ……今はもういない“アイツ”に笑われないくらいにアタシ達は……」

「姐御……」

ノワールは何処か遠い目をしながら呟く……まだ若かった頃、輝かしかったあの頃を思い出しながら……

――――――――――――――――――――――――――――

思えば、アイツの事を気にし始めたのは初めて悪戯を仕掛けた時だった……

フェレス島では街道の長い所が多く、子供だった自分達は走りまわったりして遊んでいた。だけど、その中で一人だけ自分達の輪に極力入ろうとして居なかった人間がいた。

何度も話しかけたけど、「今いい所だから邪魔するな」とか「面倒だから別にいい」と一緒に遊ぶ事は殆どなかった……何時も何か難しい本を読んでたりしていた……

当時のアタシはそれが気に食わなくて、なめてるのかと怒ったりもしたけど依然と態度を変えはしなかった……

その時から悪戯でもふっかけてりして強引に相手をさせたりしたけど、やってやりかえされてとイタチゴッコが長く続いてたりもしたなぁ……

だけど……

――――や～い！　ここまで来なバ～カ！！――――

――――てんめえぇぇぇ――――ノワアァァァ――――ルウゥゥゥ――

――――――！！！！！――――

いつもの如く、鬼ごっこという名の逃走をしていた日だった。今回も逃げ切るか捕まるかというデスゲームを行っていたけど、違う事があった。

――まだまだ甘いよ本の虫のハ……ィッ！？――

この日、アタシは道の窪みに足を運悪く躓かせ、そのまま転がる様に倒れて行ってしまった。

――みぎゃあぁぁぁぁ――――――！！！！！――――

――あ～……馬鹿……――――

その時に足を強く打って擦りむいたりと子供では耐えきれない怪我をしてしまったっけ……

――うぅぅ……いだいよおぉぉぉ……――――

――あちゃぁ……血が出てるじゃねえか……――――

怪我の部分を抑えて痛みに堪えようと必死になったが、想像以上に痛くて泣きだしたりもした。

――ぐすっ……ふえぇぇぇ――――――ん！！！！！！――――

――あ……泣くな泣くな……まったく、だから嫌なんだよ……――――

目の前の少年はどこか呆れたように様子を見ていたが、突然……

背中を此方に向けた。

――ほら乗れ、家まではおぶってやるよ……――

――ひぐっ……うぇ……――

今でも覚えている……面倒くさそうにしながらも、苦しくならないように優しくおんぶして運んでくれたアイツの背中を……歳が近いのに、周りと比べて大人に見えたアイツの姿を……

――これに懲りたらさっさとこんなことするのは止めろ。却って俺が迷惑だ――

――や……だ……もん……ぐすっ……だって……だってぇぇ……――

……勝手にしろ……――

けど、アイツはもういない……

アイツの情報を聞いたのはアタシ達三人が約五年前、当時の『暗闇の夢』の団長に世話になりだし、ようやく順調になって来た時の事だった、

その時はマルクトで公演をするため、入国した私達に速達な情報が待ち構えていたかのように耳に入りこんできた……

『ハイル・シュヴェール：皇帝の命に逆らい、国家反逆罪にて処刑』

信じたくなかった……行方不明になってもはや踏み切りを付けたアイツがまだ生きていて……だけど本当に死んだなんて……

何時の日かグランコクマで公演をしに行った時、休憩時間を省いてその事の真偽を確かめた……けど、結果は変わる事は無かった。

――――――――――――――――――――

「思えば、あれがアタシの最初にして最後の恋だったのかもしれない……今でもそう思うのさ」

「……ハイルの奴は自分にとっての余計な事が嫌いだった……けどよ、俺達を本心から邪見に思って相手にしてきた事はなかった」

「……今でも生きてたら……会ってみたいでガス……」

三人は其々、空の彼方にある音地帯にいるであろうハイルに想いを募らせていた……

「……さて！　休憩終了だよ。とっとと出発しようじゃないか」

「へい、それじゃあ行くぜ……やぁっ！！」

ヨークは手綱で馬車の魔物を刺激して発進の合図を送り、主の命令を待っていたかのように魔物達はその胴体を動かし始める。

「今後を考えて次の目的地はケセドニアにしとくよ。あそこは下手に目立たなきゃいくらか融通は効く……」

「ありゃ……あれはなんでガスか？」

道に沿って馬車を走らせていると、向こうから高速で走ってくる物体が見えてくる。見た事もない譜業だ……そこに人が一人ハンドルのような物を握って乗っているのが分かる。

「変な譜業だねぇ……見る限り、向こうから偶々来たってようだし……ヨーク、避けてやりな。あのスピードじゃ向こう側も急な方向変換は効きにくそうだしねぇ……」
「あぁ、いいぜ」
馬車を道端にまで寄せ、向こう側の為に道を開けてやる。そして、雷鳴のような風切り音とエンジンの音を響かせながら譜業はノワール達のやって来た道を進んでいった。
「物騒な乗り物だねぇ……よし、それじゃあ改めて出発だよ！」
「へい！　姐御！！」

―――――――――――――――
Ｓｉｄｅ；ハーミット

「まったく、ようやく収拾が着いた……」
ゲリュオンを走らせながらハーミットは呟いた。ファブレ家に赴いたらすぐさまヴァンをダアトに簀巻きにして送り返し、第七音素集束地を目指して此処まで来たが……タタル渓谷には誰もいなかった。調査をしていた時、目にナイフが刺さって死んでいた魔物を発見して、そのナイフがティアの物だと確認したが……道なりにキムラスカを目指していたら此処まで一本道だったのですれ違うはずだった。だが、実際は会う事はなかった……
そこから考えて、ティアは反対の道を意図的に進んだか……あるいは間違えたかと判断した。ならば、ここから近い人里といえばエンゲーブだ……向かうならそこしかない。
「ルーク・フォン・ファブレもおそらく一緒だろう……しかし、マ

ルクトという敵側の領地にいる以上……面倒事に巻き込まれかねん……早急に見つけんと……ってうおぉぉぉ――――!?」

ギャギャギャァァァ――――――!!!!!

ハーミットは咄嗟の判断でゲリュオンにブレーキを掛けた。なぜならば、目の前のローテルロー橋が見事に大破していたからだ。破損部から覗く河が深い所から見えている。

「ど……どこのどいつだ!!　ここの橋壊した奴は!?」

二国の貿易関係にて重要な役割を担うこの橋を壊した奴はよっぽどの後先考え無しな奴に違いない……そう考えて、ハーミットはどうするか対策を練る。

「下の河を目指すにも崖だからこの譜業には不向きだし……目の前の橋は壊れている……どないせいっちゅーねん……」

万事急すかと誰もがそうは考えるが、この男は問屋が行かない。

「……やるか」

そう言って、ハーミットは元来た道を幾らか戻りだし、橋まで２００ｍという距離まで開けた所……

「あ～ぁ……燃料勿体ねぇ……」

その場から発進すると共に左ハンドル近くにある赤いボタンをぽちっとな♪という感じで押す。

ドルルルルン――――――！！！！！

後ろの噴出口みたいなパイプから青い炎を出してまるでジェット機のように噴射し出す。

実はこれ、ハーミットがリドリーに彼の前世にあったロケットの技術を面白半分に話した所、第五音素の結晶である火石を使ってのバースト機能である。

しかし、使い勝手が悪く……燃料である火石を一回ごとに一々取り換えなくてはいけないという制限付きな為、ハーミットにとってはあまり使いたくない物なのだ。金が掛かるし……（１５００００Ｇ程です……）

だが、その分機能性の向上は抜群に上がる。なんせ、約三秒ほどで二百キロ以上ものスピードをほんの少しとはいえ、生み出すのだから……

「アーイ……」

そして、そのまま威力に乗ったまま……

「キャーン……」

ハーミットは……橋を目指して見事に……

「フラアァァァ――――アァァィィィィ！！！！！」

大ジャンプをやってのけたのであった……補助なしのスタントである。

観客が見ていたら拍手喝さい、及び驚愕物である……

この世界では普通にありえない事なのに……平然とやってのけるハイルさん……

そこに痺れる！　憧れるうぅぅ――――！！！

そんなこんなで、今ここに……ダアト一の厄介者がマルクトに入国した瞬間であった。

原作編　第二話（後書き）

主人公のパラメータでも載せてみようか考え中です。

主人公パラメーター（前書き）

作ってみました。

主人公パラメーター

・主人公パラメーター（敵側Ｖｅｒ）

ハーミット『手加減』
ＨＰ　６５０００
物理攻撃　９８６
物理防御　９５４
譜術攻撃　６６０
譜術防御　５３８
弱点属性　闇
耐性属性　水、光

ハーミット『普通』
ＨＰ１５３０００
物理攻撃　２６４８
物理防御　２６２５
譜術攻撃　１５３９
譜術防御　１４３６
弱点属性　闇
耐性属性　水、光

ハイル『本気』
ＨＰ６２５０００
物理攻撃　４８９６

物理防御　４４６２
譜術攻撃　３７３２
譜術防御　３１２０
弱点属性　闇
耐性属性　水、光

・技、譜術

臥龍撃……下段蹴りを行った後、真上に向かって勢いよく蹴り上げる特技

爪竜連牙弾……蹴りの連打の後に回し蹴りで敵を後退させる奥義

三散華……譜を込めた三連続回し蹴りを行う特技

飛燕連天脚……ジャンプしながら３連続で回し蹴りを行った後、真下に向かって勢いよく蹴りあげる特技

三華猛襲脚……軽く跳躍して蹴りを放った後、回し蹴りを３連続で繰り出す奥義

鷹爪落瀑蹴……蹴りの譜弾を空中から二発、そして譜を纏いながら落下して蹴る奥義

―――――――――――――――――――――

フォニムバレット……狙撃譜銃の基本的な攻撃

フリージングバレット……麻酔弾を発射して攻撃する。５０％の確立でピヨリ状態を起こす。

グラップルショット……ランチャーガンを射出し、敵を攻撃する。敵を自分側に引き寄せる事が出来る

スパイダーショット……ランチャーガンを後ろ天井へ射出し、空中へ逃げながら譜銃で攻撃する。大幅な後退が出来る。

カタストロフバレット……狙撃譜銃を溜めて発射し攻撃する。動作に三秒はど要するが、喰らうと防御不可能の一撃となる。

――――――――――――――――――――――――

エナジ―ブラスト……対象となる敵の位置に小規模な爆発を発生させ攻撃する下級譜術　属性：無　（詠唱）【炸裂する力よ】

スプラッシュ……対象となる敵の上空から連続で水流を地面に叩きつける中級譜術　属性：水　（詠唱）【荒れ狂いし濁流よ】

エクレールラルム……十字の印しを焼き付ける中級譜術。紋章の上に立つ者にダメージを与える　属性：光　（詠唱）【我に仇なす者よ、その身に聖印を刻め】

セイントバブル……対象となる敵の地面から無数の泡を発生させ破裂させることにより攻撃する上級譜術　属性：水　（詠唱）【具現せよ、敵を滅ぼす神の雫よ】

＊第二回戦目以降使用

ホーリーランス……対象となる敵を聖なる槍で貫く上級譜術　属性：光　（詠唱）【清浄なる光よ、邪悪を滅ぼす槍と化せ】
＊第二回戦目以降使用

アブソリュート……対象となる敵を超低音で凝固させる禁呪上級譜術　属性：水　（詠唱）【氷獄の河≪コキュートス≫にて眠る魔の力よ……この名を以て永遠の安らぎを与えん……永久≪とこしえ≫の氷にて眠れ……白銀の抱擁……】
＊第三回戦目に使用

プリズムソード……光の洗礼を受けた剣が降り注ぐ禁呪上級譜術
属性：光　（詠唱）【剣に秘められし七色の大罪……我にあだなす者に裁きを下せ……降り注げ……断罪の剣……】
＊第三回戦目に使用

ファーストエイド……味方一人のＨＰを少し回復させる下級譜術
属性：無　（詠唱）【癒しの力よ】

ヒール……対象となる味方一人のＨＰを中程度回復させる中級譜術
属性：無　（詠唱）【大いなる癒しを】

キュア……対象となる味方一人のＨＰを大幅に回復させる上級譜術
属性：無　（詠唱）【命を司りし女神の抱擁を】
＊第二回戦目以降使用

レイズデッド……対象となる味方一人を戦闘不能状態から復活させる上級譜術　属性：光　（詠唱）【かの者を死の淵より呼び戻せ、甦れ】
＊第二回戦目以降使用（ただし、使用される事は滅多にない。）

――――――――――――――――――――――――

オーロラルフリーズ……第四音素と第六音素を合成し、冷気の光を自分を中心に解放して浴びせる秘奥義。その姿はオーロラのごとし。

氷魔猛乱舞……第四音素と第七音素を合成し、それを全身に纏って蹴りの乱舞を浴びせる秘奥義

＊第二回戦目以降使用

――――――――――――――――――――――――

特殊：防御を取っている時に攻撃すると、１０％の確立でカウンターを仕掛けてくる。アーマーブレイク系

・セリフ集

攻撃１……ハァッ！！

攻撃２……てやぁっ！！

防御１……無駄だ！！

防御２……返してやろう

技１……そこだ！！

技２……耐えて見せるか！？

技３……飛燕連天脚！

技４……三華猛襲脚！

技５……鷹爪……落瀑蹴！！

技６……眠りの時間だ

技７……こっちだ

技８……避けた方がいいぞ？

ダメージ1……ちぃ……！！
ダメージ2……がはっ……！！
死亡1……こんな筈が……
死亡2……合格……だ……
死亡3……強く……なったな……
蘇生……逝っちまうかと思ったぜ……
敗北……この程度だったのか、お前達の覚悟は……？
秘奥義1……冷気の芸術に抱かれて眠るがいいさ……オーロラルフリーズ！！
秘奥義2……リミッター―を外させてもらうぞ！！　氷魔……猛乱舞！！

オラクル騎士団治癒師団長、ユリアと同じローレライの契約者。嘗て異世界に居た存在をローレライが己の目的の為に惑星オールドラントに引き込んだ男。軍医でありながら戦略の練法が達人の域を超える。兵士間では『蒼鷹のハーミット』と二つ名で呼ばれている。

主人公パラメーター（後書き）

どうでしょうか。ステータスはアンノウン設定で作っています

原作編　第三話

辻馬車は平野の中に見えてきた村に到着した。周囲には田畑が広がり、大きな風車が回っている。そこかしこにある囲いの中では白いニワトリが走り回り、丸々と肥えた長い耳のブウサギがぶうぶうと鼻を鳴らしていた。

「ここがエンゲーブだ。キムラスカへ向かうならここから南にあるカイツールの検問所へ向かうといい。気をつけてな」

そう言うと、駁者は馬車を走らせて去っていった。

「検問所か……旅券がないと通れないわね。困ったな……」

ティアは片頬に手を当てて考え込んでいる。

「大丈夫だろ？　ファブレ公爵の息子だって言えば、すぐ通してくれるって」

ルークは暢気な声音で言って、辺りを見回して呟いた。

「なんか、貧乏くせぇとこだなぁ」

「……どこが貧乏くさいの？」

ティアが眉根を寄せる。少し聞き捨てにならない言葉が出たからだ。

「屋敷なんかないし、小屋に毛が生えたような建物ばっかじゃんかよ。それに、動物とかうじゃうじゃいて……うざくね？」

「ここは農作物の栽培や家畜の飼育をしている村なのよ。村の人たちはみんな活き活きしているし、貧乏には見えないわよ」

どこか反論するその声には気付かずに、ティアの言葉を聞いてぱっとルークは笑った。

「あ、そうか。奴ら庭師って訳じゃないんだな。なーんか変だと思ったんだ。第一次産業とかいうのをやってる奴らだよな」

「……まあ、そういうことね」

「へ、つまらなそうな仕事だな」

ティアはむっつりと黙り込んだ。ルークはといえば、ウキウキとした表情を浮かべている。

「それより村を探検しようぜ。俺、街に出るのって初めてなんだ！」

「……探検はともかく、出発前の準備は必要ね。今日はここに泊まりましょう」

二人は村の中を歩き始めた。ルークは子供のように落ち着きなく辺りを見回している。

「しっかし、なんつー田舎だ。これじゃ宿屋も期待できねーんじゃねぇ？」

「ルーク。あなた文句ばかりね」

ついに、ティアがはっきりと声に怒りを乗せた。ルークはむっとむくれる。

「まともなベッドや飯が欲しいだけだっつの。ったく。屋敷にいた時はこんなこと考えもしなかったてのに」

「ローテルロー橋を渡れない以上、すぐにバチカルには戻れないわ。あなたが欲しいと思っているような食事は、当分とれないかもしれない」
「あーあ。食い飽きた屋敷の料理が恋しくなるなんてな～」

がっくりとルークは肩を落とした。エンゲーブに到着する前、数日がかりの馬車の旅の中で、川辺に辻馬車を停めて休憩を取ったことがあったのだが、その時にティアが作った料理というのが『おにぎり』だったのだ。今まで食べ物にこだわったことなどなかったが、流石にあれはこたえた。それは飛ばされた翌日の昼で、考えてみれば丸一日以上飲まず食わずだったのに、それで得た食事が『おにぎり一人一個に川の水』だとは。エンゲーブに着けばマトモな食事がとれるのかもしれないと期待していただけに、肩透かしを食らった気分だった。ついでに言えば、しばらく馬車の座席で眠っていたせいか背中も痛い。今晩こそは柔らかいマトモな寝床に転がりたい。

「ここの宿屋が嫌なら、無理に行かなくてもいいわよ。すぐに出発して、日が暮れてから野宿でも私は構わないわ」
「じょ、冗談！　どんな宿でも野宿よりは万倍マシ。もう文句言わねーって」
「そう。じゃあ行きましょ」

すげなく言って、ティアはさっさと歩いていく。みるみる遠ざかって行く背中を見るうちに、ルークは何故だか、じわりと暗い気分になった。

「はぁ……早く帰りてぇ……」

溜息を落とす。毎日出て行きたいとばかり思っていたのに、あの退屈な屋敷がこんなにも懐かしくなるなんて。

村の広場には市場が開かれていて、多くの露店が軒を連ねていた。飛び交う売り声、山と積まれた食料品にルークの目が丸くなる。

「へぇ、美味そうなリンゴだな」

その中のリンゴを一つ取って、ポンと手の中で弾ませると一口かじり、そのまま歩き去ろうとした。

「お客さん！　お金！」

慌てた店の主人の声に、ルークはキョトンとする。

「なんで俺が払うんだ？」

「決まってるでしょう！　お店の品物を勝手に取ったら駄目なのよ」

後から近付いてそれに気付いたティアが肩を怒らせる。

「だって屋敷からまとめて支払いされるはずだろ。……って、そうか。ここはマルクトだったな」

「マルクトでもキムラスカでも、普通はお店で買い物をする時はその場でお金を払うものよ」

「金なんて持ってねぇよ」

「魔物を倒して稼いだお金があるでしょ……」

「ああそうか。金貨じゃねーから忘れてた」

ティアとそんな言い合いをしている間に、店の主人は焦れて激昂していた。

「おい！　金を払わないなら警備軍に突き出すぞ！」
「払わねぇとは言ってねぇだろ！　……で、どうしたらいいんだ？」
「……じゃあ、買い物の仕方を教えるわ」

期待の目でこちらを見るルークに答えながら、ティアは内心で大きく溜息をついた。

「（買い物の仕組みも知らないなんて……流石に世間知らずにも程があるわよ……）」

――――――――――――――――――――

村でただ一軒の宿屋は、広場に隣接して建てられていた。

「なんだ……？」

宿の前に人だかりがしている。それは村の男たちで、誰も彼もが渋い顔をしていた。

「何かあったみたいね」
「これじゃ中に入れないじゃん」

ルークがそう言った時、宿の扉が開いて、いかつい大男が歩み出てきた。

「駄目だ……。食料庫のものは根こそぎ盗まれてる」

男は暗い顔で肩を落とした。周囲の村人たちが口々に喋りだす。

「ケリーさんのところもか」
「北の方で火事があってからずっと続いてるな。まさかあの辺に脱走兵でも隠れてて、食うに困って……」
「いや、漆黒の翼の仕業ってことも考えられるぞ」
聞き覚えのある名前を聞いて、ルークは思わず疑問の声をあげた。
「漆黒の翼って奴らは、食べ物なんか盗むのか？」
「食べ物なんかとはなんだ！」
振り向いた男たちの顔は殺気立っている。
「この村じゃ食料が一番価値のある物なんだぞ！」
「何セコいこと言ってんの。盗まれたんならまた買えばいいじゃん」
どうして怒っているのか理解できない。可笑しそうにルークが笑うと、ますます男たちの目が吊りあがった。
「何！　俺たちが一年間どんな思いで畑を耕してると思ってる！！」
その時、広場の方からもう一人村人がやって来た。
「なあ、ケリーさんのところにも食料泥棒が来たって？」
そう言って、立っているルークを視界に入れるなり、サッと顔色を変えて大声で怒鳴った。
「お前！　俺のところで盗んだだけじゃなくて、ここでもやらかしたのか！」

男は例の露店の店主だ。たちまち、場の険悪さが最高になった。

「何だと……。まさかあんたが、うちの食料庫を荒らしたのか！」

いかつい男が叫び、他の男が「泥棒は現場に戻るって言うしな」と剣呑な目で睨む。

「俺が泥棒だって言うのかよ！」

「うちの店先からリンゴを盗もうとしただろうが！」

露店の店主が怒鳴り返し、いかつい男が「よし！」と唸った。

「お前を役人に突き出してやる！」

村人たちはルークに掴みかかった。

「あいてて！　放せよ！　なにすんだ、俺は泥棒じゃねぇー！　おいティア、なんとか言えよ！」

腰の木刀を奪われ、腕や髪を掴まれて、ルークはどこかへ引っ立てられていく。

「（このまま捕まった方がルークのためかしら……）」

それを見送るティアはそんな風に思い、あえてその場では口ぞえをしなかったのである。

――――――――――――――――――――

「ローズさん、大変だ！！」

「こら！　今は軍のお偉いさんが来てるんだから大人しくおしよ！」
「大人しくなんかしてられねぇ！　食糧泥棒を捕まえたんだ！」

村人の一人がルークの服を背中から掴み上げて前に出す。

「違うって言ってるだろーが！」
「ローズさん！　こいつ漆黒の翼かもしれねぇ！」
「きっとこの所続いている食糧泥棒もこいつの仕業だ！」

ルークは否定するが、村人たちは次々とルークを食糧泥棒だと決め付けるよう宣言して行った。ルークも何時までぶら下げられてる訳にもいかないので掴まれている腕を叩いて降り出す。

「俺は泥棒なんかじゃねぇっつってんだろ！　食いモンに困る様な生活は送ってねーからな！」

それからルークと村人はお互い負けじとにらみ合いに走りだす。

「おやおや、威勢がいい坊やだねぇ。とにかく皆落ち着いとくれ」
「そうですよ、皆さん」

そこに、今まで黙っていた青い軍服……マルクト軍の軍服を来た長身の濃い茶色の長髪を持つ男が寄って来る。

「大佐……」
「ローズ夫人、これを……」

大佐と呼ばれた男はローズに何かを渡した後、ルークの傍に寄って来る。

「なんだよ、あんた……」
「私はマルクト帝国軍第三師団所属ジェイド・カーティス大佐です。あなたは？」
「ルークだ。ルーク・フォン「ルーク！！」……な、なんだよ……」
ルークが名前を言い終わる前にティアはそれにストップを掛ける。そして、この家の隅まで連れて来た後、自分の口にルークの耳を近づけた。
「……（ここは敵国なのよ？　貴方の“本名”はここでは名乗ったら目の仇にされるほど危険なの……だから、迂闊に名乗らないで」
「……（へ、そうなのか？）」
「……（そうよ、特に貴方の“お父様”は此処では悪い意味で有名なの……）」
「……（親父が！？　どうしてだよ！）」
「……（それは……）」
「どうかしましたか？」
その途中、後ろからジェイドの声が聞こえた。
「……（ここは私に任せておいて……もし、何か聞かれてもあまり正直に答えてはだめよ）」
「……（あ、あぁ……）」
内緒話をいったん切り替え、ティアはルークを隅に居させたままジェイドに近付いて行った。
「失礼しました大佐。彼はルーク、私はティア……私達はケセドニ

アに行く途中でしたが、辻馬車を乗り間違えてここまで来ました」
「おや、では貴方も漆黒の翼だと疑われている彼の仲間ですか？」
「私達は漆黒の翼ではありません。本物の漆黒の翼は、マルクト軍がローテルロー橋の向こうへ追いつめていた筈ですが……」
「あぁ……なるほど。先ほどの辻馬車に貴方達も乗っていたんですね」

「どういう事ですか大佐？」

ローズが話の内容がいまいち分からないので質問してくる。

「いえ、ティアさんが仰った通り、漆黒の翼らしき盗賊はキムラスカ王国の方へ逃走しました。彼らは漆黒の翼ではないと思いますよ。私が保証します」

「唯の食糧泥棒でもなさそうですね」

そこに少年らしき声が聞こえてくる。誰もがその声の主の方へ向くと、入口に一般とは違ったダアトの教団服を着た緑髪の少年が現れた。

「イオン様……」
「少し気になったので、食糧庫を調べさせて頂きました。すると、部屋の隅にこんな物が落ちていましたよ」

イオンはその握っていた物をローズに手渡す。その物体をローズは確認すると、驚いた顔をした。

「こいつは！！……聖獣チーグルの抜け毛だねぇ」
「えぇ、恐らくチーグルが食糧庫を荒らしたのでしょう」

「ほら見ろ！　だから食糧泥棒じゃねぇっつったんだよ！」

その事実がわかると、ルークは自分を食糧泥棒だと言ってきた村人たちにジト目で睨む。その視線を見て、村人はすまなそうな顔をしてルークに謝ったりしていた。

「けどルーク、お金を払わずにリンゴを勝手に食べたのは事実でしょ……それこそ泥棒っていうのよ？」

「ぅ……仕方ねぇだろ。金払うなんて知らなかったんだから」

実質、事の発展で二番目に悪いのはルークなのは変わりなかった

……

「どうやら一件落着のようだね。あんたたち、この坊や達に言う事があるんじゃないのかい？」

「……すまない、このところ盗難騒ぎが続いて気が立っててな」

「疑って悪かった」

「騒ぎを大きくした事は謝るよ」

「よろしい！　坊や達もそれで許してくれるかい？」

「俺は坊やじゃない」

「あぁ、ごめんよルークさん。どうだい、水に流してくれるかねぇ」

「……別にどうでもいいさ」

「そいつはよかった！　さて、あたしは大佐と話がある。チーグルの事は何らかの防衛手段を考えてみるから今日の所は皆帰っとくれ」

ローズがそういうと、周りの村人達もこの家から出て行った。ルーク達も再び宿屋を探す為に此処を出る事にする。

―――――――――――――――――――――――――

Ｓｉｄｅ：アニス

「すみません！　この辺りに緑髪の１２歳ぐらいの男の子を見かけませんでしたか！？」

「さぁ、見てないねぇ……」

うぅ……イオン様ってば何処にいるのぉ……物資補給の為に待っていてくださいって言ったのにぃ……マルクトの兵隊さんの目までも潜り抜けて……

「ホントどうしよぉ……」

アニスは導師守護役である。入隊してから約二年後、とある人物からイオンお付きの導師守護役を推薦されたが為に今の地位にいる。今回、彼女がイオンと一緒にいるのは彼の方に理由がある。

「なんで……なんで勝手にマルクト軍へ付いて行っちゃったんだろう……イオン様」

実は、今回の和平の協力はイオン自らの申し出の受け入れによる物であった。突如、執務室に侵入してきたあのカーティス大佐が和平の協力を申し出ると二つ返事で了承した。今の時期にダアトで導師が居なくなるとはどういう意味かわかってんのかあの能天気が……

「モグぞ……ハッ……！！　いけないいけない！」

思わず言葉遣いが粗暴になりかけて慌てて意識を戻し始める。

「しょうがないなぁ……もっと良く探すしか……」

キキキィィィィ――――――――！！！！！！

「ほぎゃあぁぁぁぁ――――――――！！！！！！」

下を向いてたのがいけなかったのだろう……前から来ていた何かの音で吃驚して奇声を出しながら後ろへ飛び去った。

「あぁ、悪い悪い……驚かせちゃったかな？」

「何やらかしとんじゃこのボケナス！！」

アニスは再び粗暴な言葉に変えて原因となる目の前の人間に激を投げた。

「ハハハ……相変わらず、偶にするその言葉遣いにはこっちもビックリするよ」

「ほぇ……！？」

だが、その声にはどこか聞きおぼえがあった……だが、目の前の奇妙な譜業に乗った人間は頭にメットを、目にはゴーグルをしていた為に顔が良く分からなかった。

「あの～どちらさまでしょうか……このアニスちゃんを知っている貴方は？」

「おっと……顔が隠れているから無理もないか……」

そう言って男はゴーグルとメットに手を掛け、それを外した。

「……ぇ……えぇぇぇぇ――――――！？」

「おや、俺が此処にいるのは意外だったかな……アニスちゃん？」

「ちょっ……な……なんで……何で此処に先生が居る訳エェェ――――

―――!!!」

静かなエンゲ―ブにアニスの叫び声が響き渡ったのだった……

―――30分後―――

「という訳だ。わかったか？」

「はい……」

ハーミットは今のダアトの現状について詳しくアニスに伝え終えた。

「あの……ごめんなさい。イオン様の事、私じゃ止められなかった……」

「別にアニスちゃんを怒っている訳じゃないんだ。ただ何で導師イオンがこのような判断をしたかが一番の問題で……」

キイィィィ……

「すみません、今戻りました」

その時、タイミングのいい所にイオンがこの宿屋の部屋に戻って来た。

「あーイオン様!!　何処に行ってたんですか!!　心配していたんですよ!?」

「すみませんアニス……少々調べ物をしていまして……」

「……導師イオン」

「あなたは……」

ハーミットは態度を正し、一師団長としての面構えに変えてイオンと向き合い始める。

「オラクル騎士団治癒師団所属ハーミット響士であります」

「あなたが……あの有名な……」

このイオンは俺と直接話をするのは初めてだ。モースが被験者イオンと関わりのある奴はなるべく近付かせないよう手を廻したから俺を知らないのは当たり前……か。

「イオン様、今回何故にてダアトを出踪なされるような真似をなされたのですか……その為に今ダアトは大混乱へと発展しかけております。今は情報部の者達によって何とか抑えておりますが、それも時間の問題でございましょう……」

「……勝手にダアトを抜けた事は謝ります。ですが……事の詳細を伝える為の手紙を置いておいたはずなのですが……」

「……それに関してはいまだ発見されてはおりません……しかし、そんな事はどうでも良いのです」

「ぇ……ぁ……？」

イオンは自分がしておいた筈の事、それが本質的に意味が無い事だと知らされて戸惑い始める。

「今の二国の緊迫状態はご存じでございましょう……それに、私達ダアトは中立……正式な手続きならばともかく、マルクトの強引ともいえる願い出を貴方様……つまり導師イオンが自ら望まれたような決断が問題なのです」

「そんな！？　和平の申し出を協力する事がどうして駄目なのです

か！！」

「和平に関しての事は問題ないのです……過程が過程です……下手な見方をされるとこの一連の行動、ダアトはマルクトを贔屓していると捉えられても仕方がない様な物なのですよ……」

「ぁ……」

「今は誘拐という事で事件として捉えられてはおられますが、キムラスカ側に事実が知られれば……非常に不味い事になります。良くて献金を減らされるか……悪くてダアトはキムラスカに敵対しているとして宣戦布告をされかねないのです……」

「そんな……そんなつもりじゃ……」

イオンは自分の行動の浅はかさにようやく気が付いた。自分のせいでダアトが明日をも知れぬ運命に変わるのだと……倒れるかのようにベッドに腰を下ろした。

「……僕は、結局何もすることは出来ないんですね……」

「イオン様……？」

「僕は、導師としてダアトの最高権力者とされていますが……それは実際は唯のお飾りでしかないんです……ダアトの実権は全て大詠士モースが全て握り、好き勝手にされているに近い。それに比べ、僕はただ預言を読むだけしか……本当に必要とされていない……」

「……」

「だから、カーティス大佐からの和平協力はそんな僕にとって渡りに船でした。この大業を成し遂げれるなら、僕は僕として……誰かに認めてくれるかと……そう思ったんです」

何処までも悲しい目をしていた。その目はかつての被験者イオンがしていた物と酷似していた。

「……貴方はお優しい方だ。ですが、貴方は導師という立場を理解

しておられなかった……それが原因でしょう」
「どうして、導師になんかなったのでしょう……僕なんかが……」
「……」

狂い始めたこの星に腐らされた人間達……その害意はいつだってこんな少年に向けられる。それは許せる物ではない……

「さてと、現在でもオラクルの者達が貴方を探しにマルクトへ入国してはいますが……どうしますか？」
「どうしますかとは……？」
「ダアトへ戻り導師として戦い続けるか……このまま和平協力へ向かい“イオン”として戦い続けるか……ご選択を……」
「……僕は……」

答えを聞くのには……そう時間はかからなかった……

―――――――――――――――――――――――――

Ｓｉｄｅ；ルーク

二人にあてがわれたのは一室だった。先ほどの謝罪として無料にしてもらったからという無配慮なのか、逆に余計な気を回されたからなのかは分からない。

「明日はカイツールの検問所へ向かいましょう。ローテルロー橋が落ちた状態では、そこからしかバチカルには帰れないわ。後は旅券をどうするかね……」

生真面目に明日からの旅程について考えを巡らせていたティアは、ルークがやけに静かなことに気付いて首を傾げた。彼はベッドの縁

に腰掛けて、広げた小さな帳面［ノート］にペンを走らせている。

「……あら、何してるの？」

覗き込むと、彼は慌ててそれを隠した。

「み、見んなよ！」

「ごめんなさい。でも帳面［ノート］なんて出して……」

「うるせーな。日課なんだよ」

舌打ちして、ルークは決まり悪そうに目を逸らす。

「日課？」

「うん、笑うんじゃねーぞっ！　……日記だ」

「あら、いいことじゃない」

微笑むと、おそるおそるといった風に見返してきた。

「わ……笑わないのか？」

「どうして？　別におかしくはないけど。……でもそうね、あなたが日記をつけるとは思わなかったわ」

僅かに苦笑してみせると、ルークはふてくされた声を出した。

「……ふん、俺だってつけたくてつけてるんじゃねぇよ」

「じゃあ何故つけているの？」

「……記憶障害が再発した時に困らないようにつけろって、医者に言われてんだよ」

「……」

「……な、なんだよ」
「……あなた、記憶がないの？」
ティアは訊ねた。声も態度も大きいこのルークが、そんな障害を抱えていたとは夢にも思わなかったのだ。
「十歳から前のことは、スッパリな。マルクトの奴らに誘拐されたからだっつーけど」
「そう……」
「だから、なんだよ」
じっと見つめていたらしい。不機嫌そうな目で睨まれて、ティアは慌てて首を振った。
「ううん、何でもないわ。頑張って」
「けっ、同情なんかされたくねーっつーの」
帳面を閉じて、ルークはそれをポケットに突っ込んだ。
「……なんか腹の虫がおさまらねぇ」
無性にむしゃくしゃしてきて、赤い髪を両手でぐしゃぐしゃとかきむしる。
「なぁ、お前、チーグルの棲む森ってのはエンゲーブから北だって言ってたよな」
「ええ……」
「明日になったらその森に行く」
「行ってどうするの」
「そいつらが泥棒だって証拠を探すんだよ。このままじゃ帰るに帰

れねぇ！」

立ち上がってルークは言った。

「ひょっとして……まだ怒ってるの？」

「当たり前だろ。泥棒呼ばわりされたんだからな！」

「無駄だと思うけど」

「うるせぇな。もう決めたんだ！」

「……」

ティアは溜息をついたが、それ以上は反論しなかった。これまでから考えて、ルークのワガママを止めるのは至難の業だと、この数日で気付いたのだろう。

―――――――――――――――――――

Ｓｉｄｅ：ハーミット

―――――――――――――――――――

もう辺りは暗くなり始め、家からは何処からともなく灯りが漏れ始めてくる。そんな村の外でハーミットは聞き込みをしていた。

「すみませんが、この辺りで赤色の髪の少年と栗色の髪の少女を見かけませんでしたか？」

「もしかして、今朝がた食糧泥棒に間違われたあの子達かもしんねぇなぁ……それなら、あの宿屋に入ってったのを見かけたよ」

「そうですか、ありがとうございました」

ルーク・フォン・ファブレの捜索は基本内密に行う物となった。これはファブレ家たっての願いにつながっていた。

あの子には……ルークにはせめて外の世界を見させてあげたいと……楽しそうにしていたら暫くはそっとしてあげておいてほしいと

……

情報からすれば、ティアはしっかりと護衛の役割を果たしているそうだ。まぁ、自分が疑似超振動で屋敷から連れ出してしまった事に責任を感じてるかもしれないからな。

こっちの件は俺の独断だ……導師イオンに話すには俺的に少し問題がある。まだ事を裏付ける確証たる物が揃っていないのも理由の一つだ。

「あの宿屋へ行って確認をしてはいたが、しばらくは大丈夫そうだな……ティアが居る限り、余程無理な事はさせないようにするだろう……しかし、」

少し可笑しな事を聞いた。この村の食糧泥棒についてもそうだが……それが“北の森”で火事が起こってからという事だ。北の森といえばテオルの森の事ではないか……あそこにはアリエッタの家族が……俺の兄弟達がいた……

そして、食糧泥棒の犯人は聖獣チーグルの可能性……可笑しい、チーグルの森で火事が起こった訳ではないから草食である彼らにとっての食糧は豊富にある筈だ……なのになぜ、食べ物を盗む必要が……

「何の目的の為……か……明日の朝方までには戻るとして、調べてみる可能性があるな」

本来なら、この問題はマルクトの問題として片づけなければならないが……何かやな予感が感じる。ひょっとすると、この事件にはライガ達も何か関わっているのかもしれないからだ。

「あぁちょっとそこの人、チーグルの森はここから北へ向かった方向にあるんだな？」

「えっ……ぁ、あぁ……そうだが……まさかアンタ今からそこへ行く気かい？」
「気になる事があるんでね……」
「やめときな、夜の森は魔物の活動場だ……下手をしたらアンタ……」
「心配ない、それくらいでくたばるほど“永く”は生きちゃいないさ」
「おいアンタ……！？」

そのまま村人の制止の言葉を聞かずにハーミットはゲリュオンに乗ってチーグルの森を目指していった。

「あの男……もしや、十一年前の……」

――夜空に浮かぶ、金色の月だけが真相を知るのか――

ルーク達は早朝、ローズ夫人宅を訪れていた。昨日この場に訪れた導師イオンに会えるかどうか検討していたからだ。ティアはルークから導師が誘拐されたという情報が伝わっている事を聞き、それに疑問を持っていたからだ。自分がダアトを発った間、ダアトに何が起こったのかと心配していたからだ。オラクル騎士団の一員としてイオンは重要な存在であると教え込まれている為でもある。

「イオン様？　そういや今朝はお見かけしてないねぇ……ここで大事なものを受け取られる予定だそうだから、いずれ戻られると思うけどね」

「そうですか……教えていただきありがとうございます」

ローズから事情を聞いたティアは待っていたルークの元へ戻っていく。

「じゃあ、チーグルの森へ行って戻って来た時に話が聞けるかもしれねーな」

「……昨日は言わなかったけど、ルーク……チーグルの森までどう行くつもりかわかってるの？」

「もちろん歩いていくに決まってんだろーが。あたりめーだろ」

「魔物が出てくる道を私達二人だけでかしら？」

「……へ？」

ルークは忘れていた。自分達がエンゲーブに来れたのは一重に馬車に乗って来ていたからだ。魔物の足では馬車の魔物の早さには大抵ついてこれないから逃げ切れるため、乗っている限り安全が保障されていた。だが、今回は馬車など何処にもない……ましてや、た

った二人だけでどうその道を進んでいけばいいか此方が答えを求めたい。

「私達の目的は飽くまでバチカルへの帰還よ？　チーグルの森へ行くのは無駄以外の何物でもないわ……それに怪我をする可能性も高い……それでも行きたい？」

「ぅ……けどよぉ……バカにされたまま放っておけるかよ！？」

「誰も馬鹿にしてはいないと思うけど……」

口の中で呟いて、ティアは理屈でたしなめようとする。

「とにかく、チーグルの森へ行く事は私は認めないわ……早くカイツールを目指しましょ？　マルクト軍の人達に何か尋ねられる前に」

「マルクトの奴らが……どうしてだ？」

「おそらく、昨日会ったカーティス大佐は……」

「ここに居たか！？」

「早くお連れ戻さないと……！！」

その時、向こう側からマルクト軍の兵士が二人ほど走って来るので見えてきた。ティアは慌てて家屋の物陰にルークを引っ張って隠れ始める。

「いてて……！！　なんだよお「シッ……！！」……」

口を押さえてこれ以上声を出させないようにして静かにするよう促した。

「アニス殿の話によると、今朝から見掛けられていないとのことだ！！」

「もしや……導師イオンは何者かに誘拐されたのでは……」
「すぐにカーティス大佐に通告しろ！！」
「了解！」

しばらくして、兵士達は何処かへと走り去っていった……

「行ったわね……もう大丈夫よ……」
「ぶはっ！！　ぜぇ……ぜぇ……い、いきなり口抑えんじゃねーよ！！」
「悪かったわ……導師イオンが失踪……なんて事なの……」

導師イオンはマルクトによって厳重に警護されていたようらしい……けど、それでも見失ったという事は……誘拐か……それとも……

「そのイオンって奴また居なくなったのか？」
「そのようね……それとルーク、導師イオンを公共といえども呼び捨ては駄目よ。一種の人間はそれで怒りだす事も偶にあるわ」
「ごちゃごちゃうっせーな！！　お前は俺の使用人かっつーの！」
「……もういいわ」

彼女が怒ったらしいことを感じた……だがそこに、ルークは重要な事を呟いた。

「そういや、二時間前……宿屋の窓でそのイオンって奴と同じ髪色した奴が北の方へ歩いて行ったのを見かけたな……」
「……ッ！？　どうしてそれを早く言わないのよ！！」
「うぉわ！！　いきなり怒鳴んなよ！」
「どうしよう、マルクト軍に報告を……けどそれじゃあ事情徴収を……あぁもう……どうしてこうも問題が発生するのよ！」
「あっちってチーグルの森ってとこだろ！？　そこにイオンが行っ

たって事はアイツを探す為に其処へ行けばいいんじゃねーのか？」
「……腹、決めるわ」

結局、彼らのチーグルの森行きは強制的に決まってしまった。ティアのオラクル騎士団としての最低限の義務である為に裏事情と混じってこうするしかなかったという訳であった。

―――――――――――――――

Ｓｉｄｅ：ハーミット

「これは……」

彼は目の前にある光景に唖然としていた……嘗て、森で住んでいた時に釣りをしていた河の向こう側にある森林の木々達が、見るも無残な姿になっていたからだ……

「だめだな、完全に燃え尽きているな」

その一つを手で触れると、煤と共に燃えカスがボロボロと崩れ落ちて行く。

「そうだ、皆は……皆はどうなっているんだ？」

ハーミットは急ぐようにゲリュオンに跨って、嘗ての記憶を辿りにライガクイーンの巣へと向かっていった。その途中でみる焼けた森は彼らの末路を想定させてしまうほどに酷い物であった。

「……骨だ」

そこには動物の炭化した骨も落ちていた……少し小さな狼の類の

魔物であっただろうか……それが仲間らしき者達の亡骸とともに散らばっていた。

「誰がこんな事を……」

火という物は少なくとも、魔物が使える物ではない。なぜならば、魔物は本能から火の恐ろしさを知っている筈だからだ。だから、人間による何者かの仕業でないかと推理し始めた。

「だが、もしやってもそれは相当の大馬鹿野郎だ……」

もしも、魔物の一掃駆除による物だったりしたらそれは逆効果になる。人間より魔物が森の地形に詳しい者等存在しないからだ。何処へ逃げれば安全か……少なくともその結論には自信がある……人里に近い所だ。人間も自分の住む場所が火事になるのを阻止するべく知恵を使う。火事を消化するために魔物が考えつかないような方法で……それを魔物は利用する事がある。

キキィッ……

「着いたな……」

久しぶりに帰る仮初の家（洞窟）は入口が焦げた倒木によって入口が塞がれていた。其処へ思いっきりハーミットは譜を込めた蹴りの連撃を喰らわせる。

「爪竜連牙弾！！」

ドガガガガガッ――――！！！！！

まるでハンマーで叩かれたのように倒木に徐々に罅が入り始めて行く。そして、最後の回し蹴りにより、二つに割れてようやく洞窟の入り口が正体を現した。

「……この中は比較的無事なようだな」

入口付近は焦げてはいたが、中は殆ど無事であった……敷き詰められている干し草も焦げ目等殆どついてはいない。しかし、そこに彼らはいなかった……

「あ……」

コトッ……

ハーミットは足元に落ちていた“ソレ”を拾った。無骨な形をしているが、それはまさしく木で作られた容器という物であった。そこには、小さな字で『アリエッタ』と彫られていた。

「懐かしいな……」

良く見ると、他にも鍋やコップみたいな木の器も其処らに落ちていた……ハーミットはその場に座って手に持つ容器を眺めていた。

「こいつは……そうだな……アリエッタの為にナイフで下手ながらもくり抜くように作ったっけ……」

当時はそれでものすごく喜んでくれていた……彼女にとって初めて見るそれは宝物であった。その顔が喜ぶ度に何度も違う物を作ってやったりしていた。

「……少し、許せねぇな……」

こんな事態を引き起こした犯人を今すぐにも捕まえてやりたいが……先ずはライガクイーン達の安全を確認したい。アイツらが死んだらアリエッタが悲しむんだ……彼女にとってのたった一人の母親と兄弟たちなんだからな……

「さて、推測するに……ひょっとしたらチーグルの森へ移動したのかもしれん。少し捜索範囲を広めにして……」

ゴオォォォォォ――――！！！！！

「何……ッ！？」

突如として響き渡る轟音がハーミットの緩んだ意識を張り巡らし始めた。音がした方へ顔を向けた所、ちょうど其処から光の筋のような物が天へと伸びて行く光景が見えた。だが、しばらくするとそれは徐々に小さくなって直ぐに消えて行った。

「あれは……まさか……嘘だろ！？」

しかし、ハーミットはあの光に見覚えがあった。その予測が最悪の結果として頭に浮かび出す。

「じっとしてろっていった筈だろ！！　あんの馬鹿たれ！」

急いでゲリュオンに跨り、エンジンを起動し始める。先ほどの光が伸びて行った場所は結構遠い……この木々が並ぶ森林を出来るだけ早く抜ける事を決断したのだった……

Ｓｉｄｅ：ルーク

「おい、大丈夫か」
「だ、大丈夫です。少しダアト式譜術を使いすぎただけで……」
イオンは目を開き、抱くティアの手を拒むように身を起こす。
「あなた方は、確か昨日エンゲーブにいらした……」
「ルークだ」
「ルーク……。古代イスパニア語で『聖なる焔の光』という意味ですね。いい名前です」
微笑むイオンに、ティアがかしこまった様子で続ける。
「私は神託の盾［オラクル］騎士団モース大詠師旗下情報部第一小隊所属、ティア・グランツ響長であります」
イオンが目を見開いた。
「あなたがヴァンの妹ですか。噂は聞いています。お会いするのは初めてですね」
「はぁ！？　お前が師匠の妹！？」
ルークは目を剥いた。渓谷でティアの名前を聞いた時、何か引っかかる事があったが此処になってようやく真実を掴めた。
「まじかよ！　師匠に妹が居たなんて聞いてねぇーぞ！？　それもお前が？」
「そんな事は後にして……導師イオン、よくぞご無事で」

すると、彼らが話している間に森の奥の小道を、耳の長い小さな影がチョコチョコと横切った。

「チーグルです！」

ハッとしてイオンが叫ぶ。

「ンのヤロー！　やっぱりこの辺に住み着いてたんだな！　追いかけるぞ！」

叫ぶと、ルークはもう駆け出していた。ティアが「ルーク、待って！！」と言って静止の声を掛けるがそのまま進んでいく。

「おい！　見失っちまう！」

森の奥からルークが怒鳴ってくる。

「行きましょう！」

「え？　あ、はい！」

ルークを追うイオンに付いて、ティアも森の奥へ歩き始めた。

「あーっ！　ホラ見ろ！　お前らがノロノロしてっから逃げられちまった！」

ルークは辺りを見回しながら唇を尖らせていた。そこでゆっくりと近付いてくるイオンの青白い顔を目にして、眉根を寄せる。

「……ったく。ろくに戦えないくせに、こんなところに来るんじゃ

ねーよ」
「すみません。――チーグルの巣は、この先に行けばあるはずですよ」
「なんでンなこと、知ってんだよ」
「あ、はい……実はエンゲーブでの盗難事件が気になって、ちょっと調べていたんです」
「はあ？　何言ってんのお前？　お前には関係ないじゃんかよ」
「ですが、聖獣と言われるチーグルが人に害をなすなんて、何か事情があるはずです。チーグルは魔物の中でも賢くて大人しい。人間の食べ物を盗むなんて、おかしいんです。チーグルに縁がある者としては、見過ごせません」
「魔物のことなんて、放っときゃいいだろ」
「そうですね。僕は変わり者かもしれません」

イオンは少し傷ついたように声を固くした。だがそれは一瞬で、もう柔らかな微笑みが表面を覆い隠す。

「とにかく、チーグルと接触できれば、真相が分かると思います」
「……ふん。だったら目的地は一緒って訳か」

ルークは鼻を鳴らした。え、とイオンが目を瞬かせる。

「では、お二人もチーグルのことを調べにいらしたんですか」
「濡れ衣着せられて大人しくできるかっつーの」

吐き捨てて、ふうとルークは息をついた。碧の目でイオンを見やる。

「仕方ねぇ。お前も付いて来い」
「え、よろしいんですか？」

「何を言ってるの！　イオン様を危険な場所にお連れするなんて！」

ティアが非難の声をあげたが、ルークは言い返した。

「だったらこいつをどーすんだ。村に送って行ったトコで、また一人でノコノコ森へ来るに決まってる」

「……はい、すみません。どうしても今回の騒ぎの真相が知りたいのです。チーグルは我が教団の聖獣ですし」

「ほれ見ろ。それにこんな青白い顔で今にもぶっ倒れそうな奴、ほっとく訳にもいかねーだろーが」

ティアは息を呑んだ。まさか、あのルークがこんなことを言おうとは思いもしなかったからだ。

「あ、ありがとうございます！」

次の瞬間、大きな声をイオンは出していた。その表情は明るく輝いている。

「ルーク殿は優しい方なんですね！」

かあーっとルークの顔が赤くなっていくのをティアは見た。

「だ、誰が優しいんだ！　ア、アホなこと言ってないで大人しく付いてくればいいんだよ！」

「はい！」

「あ。あと、あの変な術は使うなよ。お前、それでぶっ倒れたんだろ。魔物と戦うのはこっちでやる」

「守って下さるんですか。感激です！　ルーク殿」

ルークの顔が更に紅潮する。

「ちっ、ちげーよ！　足手まといだっつってんだよっ！　大げさに騒ぐなっ！　それと、俺のことは呼び捨てでいいからなっ！　行くぞ！」

「はい！　ルーク！」

全身に喜びをみなぎらせて、イオンは逃げるように駆け去ったルークの背を追っていく。こうなっては仕方がない。ティアもその後を追った。

森の奥には大木が立っていた。周囲にはエンゲーブの焼印の入ったリンゴが数個、転がっている。頭悪ぃ魔物だなぁ、とルークが呟いた。

「やっぱりコイツらが犯人か！」

「この木の中から獣の気配がするわ……」

「チーグルは木の幹を住処にしていますから」

そう言うと、イオンは無造作に大木の幹に開いたうろの中へ踏み込んでいく。

「導師イオン！　危険です！」

「しょうがねぇガキだな……」

ティアが慌てて駆け込んでいき、息をついて、ルークも歩いて中へ入った。

果たして、木の中の広大な空間には沢山のチーグルが群れ集まっていた。大きな耳に真ん丸い目、小さな足でチョコチョコと二足歩行して「みゅう、みゅう」と鳴いている。

「……くわ～～！　なっ、なんかコイツらウゼー！　むかつく！」

「……かわいい？」

「は？　今なんつった、ティア？」

「……な、なんでもないわ！」

何故か慌てて姿勢を正すティアを他所に、イオンは「通して下さい」と群れて壁を作るチーグルたちに呼びかけていた。

「魔物に言葉なんか通じるのかよ」

「チーグルは教団の始祖であるユリア・ジュエと契約し、力を貸したと聞いていますが……」

イオンがそう言った時だった。奥から「……みゅみゅーみゅうみゅう」としわがれた声がして、それまで行く手を阻んでいたチーグルたちがさっと左右に分かれて道を空けた。

ルークたちの前に、見るからに老いた様子のチーグルが現われた。両手に大きな輪――ちょうど人間の腕輪サイズのものを一つ抱えている。

「……ユリア・ジュエの縁者か？」

ルークたちはハッと息を呑んだ。

「おい、魔物が喋ったぞ！？」

「ユリアとの契約で与えられたリングの力だ」

老チーグルは人語で続けた。

「お前たちはユリアの縁者か？」

「はい。僕はローレライ教団の導師イオンと申します」

イオンが進み出た。護るように、ティアが傍に従っている。

「あなたはチーグル族の長［おさ］とお見受けしましたが」

「いかにも」

「おい、魔物。お前ら、エンゲーブで食べ物を盗んだだろ」

ルークもイオンに並んで言った。

「なるほど。それで我らを退治に来たという訳か」

「へっ、盗んだことは否定しないのか」

「チーグルは草食でしたね。何故人間の食べ物を盗む必要があるのです？」

「……チーグル族を存続させるためだ」

チーグルの長老は言った。ティアが首を捻る。

「食べ物が足りない訳ではなさそうね。この森には緑が沢山あるわ」

「我らの仲間が北の地で火事を起こしてしまった。その結果、北の一帯を住み処としていた『ライガ』が、この森に移動してきたのだ。我らを餌とするためにな」

「では村の食料を奪ったのは、仲間がライガに食べられないようにするためなんですね」

「……そうだ。定期的に食料を届けぬと、奴らは我らの仲間をさらって喰らう」

「ひどい……」

イオンが呟いた。だが、ルークは荒々しく吐き捨てる。

「ふん、知ったことか。弱いモンが食われるのは当たり前だろ。しかも縄張り燃やされりゃ頭にも来るだろーよ」

「確かにそうかもしれませんが、本来の食物連鎖の形とは言えません」

そう訴えるイオンの向こうから、厳しい目でティアが問うた。

「ルーク。犯人はチーグルと判明したけど、あなたはこの後どうしたいの？」

「どうって……こいつらを村に突き出して……」

「でもそうしたら今度は、餌を求めてライガがエンゲーブを襲うでしょうね」

ティアの声音には責めるような含みがある。

「あんな村どうなろうと知ったことか」

「そうは行きません」

キッと振り返り、イオンが頑とした声を発した。

「エンゲーブの食料は、このマルクト帝国だけでなく世界中に出荷されています。あの村を失うわけにはいかない」

「じゃあ、どうするんだよ」

「ライガと交渉しましょう」

「魔物と……ですか？」

流石に、ティアが戸惑った声を出した。

「そのライガってのも喋れるのか？」

「僕たちでは無理ですが、チーグル族を一人連れて行って訳してもらえば……」

「……では、通訳の者にわしのソーサラーリングを貸し与えよう」

長老が呼びかけると、チーグルの群れの中から青い毛並みをした一匹がぴょこんと飛び出してきた。一回り体が小さい。まだ子供のようだ。

「なんだぁ？」

「この仔供が北の地で火事を起こした我が同胞だ。これを連れて行って欲しい」

仔チーグルはソーサラーリングを頭から被ろうとして失敗し（何しろチーグルは頭でっかちなのだ）、結局足から穿いてベルトのように腰に装着すると（ただしリングが大きいため両手で支えている）、おずおずとルークたちを見上げて口を開いた。

「ボクはミュウですの。宜しくお願いするですの♪」

「……おい。なんかムカつくぞ、こいつ」

「ごめんなさいですの！　ごめんなさいですの！」

「だーっ！　てめぇ、ムカつくんだよっ！　焼いて食うぞ、オラァ！」

「みゅうぅぅぅ～～～～！！」

何か、小動物の動きはよほどルークのカンに触るらしい。理不尽な理由で拳を固めて威嚇している。

「（あんなに可愛いのに……）」

顔を背け、ティアは大きく溜息をついた。

―――――――――――――――――――――

Ｓｉｄｅ：ハーミット

「こいつは厄介な……」

ハーミットは森林の中で高台となる場所に居た。そこで谷の下に見える物を見て顔を顰める。

戦艦タルタロスだ……これがここにあるということはマルクトも導師イオンの痕跡を辿ってきたというわけだ。

「おや、あれは……アニスちゃん！？」

タルタロスの周りには何人かマルクト兵が立ち並んでいたが、その中にアニスが居たことに目を見開く。遠くから様子を見るに何か喋っているようだ……ハーミットは神経を集中させ、耳を澄まして彼らの会話を聞きとろうとする。

『――――で――――イオ――――してくれま――――』

『大佐――――捜――――向かい――――東へ――――』

『あなたは――――書――――受け取――――』

『そんな――――られ――――――よ！』

少しではあるが聞こえた。どうやらこの戦艦の司令官が直々に導師イオンを探しに行ったそうだ。方向からするに東とのことだ……導師イオンが何故このチーグルの森へやって来たかは大方見当が付いている。食糧泥棒のことが気になって自分から調査しにいったの

だろう。たしかチ―グルは聖獣として崇められているからそれが害を成しているとなると教会の沽券に関わることもあるからな……

あの導師らしい考え方だ……やはり、まだ甘い……

ドオォォォ――――――ン……

今、轟音が微かだが鳴り響いた！！　向こうか！

ハーミットは急いで再びゲリュオンに跨って音のする方向へと走らせる。

譜の振動を感じるべく嘗て森で生活していた時の勘を張り巡らせていく。

目的地へは結構奥深くに存在しているな……なんとか間に合うか？

「まったく、ダアトってのは面倒事に恵まれてでもいるのかねぇ！」

悪態を吐きながらも進んでいった。去りゆく木々の景色を潜り抜け、感じてくる譜の力の元へと急ぐ……

「この振動……雷に近い……第二音素か！？　まさか、戦っているのはライガクイーンなのか？」

誰が戦っているんだ……導師イオンならそんなことはできないはずだ……彼は体力の劣化を患っているから走ることさえつらそうなはずなのに……

「む……他にもう二つ……弱い力だが……第七音素の力を感じる……」

強さからして導師イオンのではない……別の誰かかもしれん……

「おぃ、――――効いて――――ぞ!?」
「まず――――こちら――――――わ」

人の声だ！　誰かがライガクイーンと戦っている！　まて、戦うな!!

ゾクッ……

その直後、悪寒がハーミットに襲い始めた……先ほどの二人よりもさらに強い譜の力が感じ始めている。その者は何やら第四音素を収束し始めているのが感じれた。

「なんだこの譜力は！　並みの譜術士が内包できる譜力じゃないぞ!!」

どこの手だれだ！　こんな威力で攻撃されたらいくらあのライガクイーンでもただでは済まないぞ!?

「しかたあるまい！　“イオン”、封印指定を食らった【アレ】を使うことを許せよ!?」

そろそろ到着するのを推定して、ハーミットは譜を練り始める。そして、ゲリュオンを走らせながら詠唱を始める……

「【氷獄の河≪コキュートス≫にて眠る魔の力よ……】」

これは、禁呪として扱われた今では使われぬ第四音素の上級譜術……

「【この名を以て永遠の安らぎを与えん……】」

嘗て初めて使用したときには禁書図書館の本棚の一つを氷のオブジェへと変えてしまうほどの脅威を持つ。

「【永久≪とこしえ≫の氷にて眠れ……】」

ハーミットの体から余剰な譜が冷気となって漂い始める……

「【白銀の抱擁！】」

「【荒れ狂う流れよ……】」

詠唱が終わるのは同時であった。ハーミットとライガクイーンに向けて放とうとした男の譜術の譜陣は互いにライガクイーンの頭上に出現する。

「【アブソリュート！！】」

「【スプラッシュ！！】」

ハーミットの手から放たれた白銀の光球はライガクイーンに当たろうとした滝のような水の急流へと当たり、信じられない光景へと変化した。

なんと、その光球は水圧からライガクイーンを守るように流れを阻害し、水は逸れながら地面へと落ちていく。だが、落ちて行きながらその水は凍りついていく……やがて、術の拮抗がようやく終わったときにはライガクイーンの頭上にはまるで氷のヴェールのようなオブジェがライガクイーンを囲うように形成されていた……

「す……すっげぇ……」

「これは……」

「私の譜術を……ッ！？」

「……ッ！？」

向こう側に居た四人はその光景にそれぞれの心層を口に出していた。

ある者は術の威力に驚き……

またある者は予想と違ったことが起きたことに驚き……

それぞれが信じられないという表情を浮かべていた……

「この戦闘、少し待った！！」

ハーミットはメットとゴーグルを脱いで戦う者達に止まるよう制止の言葉を叫んだ。

「先生！？」

「誰だ……おっさん？」

「やはり、生きていたのですね……」

「ハーミット……ッ！？」

今ここに、世界を左右する者達は契約者に出会うこととなる……

原作編　第五話（前書き）

エンドルフィン流さないとやっていけないかもしれないＪａｓｔｉｃｅです。
疲れを吹き飛ばしたいとです。

原作編　第五話

「お久しぶりです、ライガクイーン」
『久しいな、わが友よ』

説得の末、四人からライガクイーンの交渉を任させてもらったハーミットはライガクイーンと相談することになった。この時、彼らの傍に居たチーグルが持っていたソーサラーリングを見たハーミットはそれを貸してもらい、一時ライガクイーンと人語で話し合う事が可能となったのだ。

「十年ぶりですね、この頃調子はどうでしょうか？」
『どうもなにも、あそこにいるチーグルの子供に森を焼かれ、我らライガは日々餌を探し求めるのに苦労している。チーグルには償いをしろと申したが、我らライガがあ奴らが持ってくる食べ物で腹を満たす事などたかが知れておる』
「ということは、殆ど食べ物はこの森で獲っているんですか？」
『いかにも……』

ライガクイーンは凛とした王者の威風堂々とした姿をしてハーミットの質問に応えて行く。

「ちょっと待ってください！！　ならどうしてチーグル達に食糧を持って来させていたのですか！？」
『聞いてなかったのか人の子よ、我らは償いをしろと言っただけで別に食糧を持ってこいと言った訳ではない。償いの手段はあ奴らチーグルが自分で考えた方法なのだ』
「そうか、チーグル個人でできる事は限られている。だから、食糧という方法を選んだのか」

『その通りだ、しかし……我らとしてもチーグルの贖罪に関心など持たなかった。卵が孵り、新しい森場を見つけられれば此処から去るつもりであったが、どうも長く居すぎたようだな』

だから、人間が此処にやって来る事になったという事だ。

「そんな、それじゃあチーグルが可哀想だわ！　彼らは彼らなりに一生懸命頑張っていたというのに！？」

『我ら魔物に誠意など関係も必要もあらぬ！！　我らの世界は弱肉強食、弱き者は強き者に従うのみ世界だ！！　人間が我らの事に容易く異議を唱えるな！！』

「ですが、貴方達ライガは私達人間にとっては排除しなくてはならない存在ですよ？」

ジェイドはライガクイーンの言葉に少々反論してみた。

「たしかに、ライガ達は人間には危険極まりない存在だろう。だが、原点を考えてみよう。この問題は元より人間が関与する必要などない問題なんだ。俺達が勝手にやっている事に等しい」

「ですが、チーグルは教団の聖獣で……」

「そこなのですよ、導師イオン」

ハーミットはため息をつく。

「人間が魔物を特別扱いすること自体可笑しいんですよ。昔、始祖ユリアと協力したから、聖獣と指定されたからと、確かにダアトの決まりではチーグルを疎かにしてはいけないと決められていますが、野生としての彼ら自身が起こした問題は別です。これは彼ら自信が解決しなければいけない物なのですよ」

「だけど先生、チーグルは魔物の中で力が弱くて……」

「そのかわり、ソーサラーリングという大層な物を持っていて知恵も持っている。ならば、ライガ達の為の新しい土地を探し出してやればよかったのじゃないのか？」
「みゅうぅぅぅ……」
ミュウはしょんぼりとして落ち込んだ。
「お、おい……じゃあどうすりゃいいんだよ？」
「いささか、難しい問題になりますが……」
「そ、そうだ！　お前、お母さんなんだろ！？　子ども死んじゃったら悲しいだろ！　この森からもっと違うところに行って、そんでもって、人間から追っかけられないように大事に育ててやれよ！」
ルークはオドオドとしながらそう言った。彼はライガクイーンを退治する事には反対していた身でもあったからだ。
「そうですね……ライガクイーン、どうか今回は私からの頼みとしてでもあり、この辺りの森を移動してもらえませんでしょうか？」
『しかし……』
「このまま居ても何れは人間達の討伐隊が此処へ押し入る事になるでしょう。私としては貴方には死んで欲しくないんです。これは“貴方の娘”からの願いでもありますから」
『……わかった、今回は我が友に免じて願いを受けよう。だが、そこのチーグルよ。お前の仲間達にも伝えておくが良い。我らライガはお前達を許した訳ではないとな。』
「みゅうみゅう、みゅうぅぅぅ……」
ライガクイーンは嘗て共に暮らした愛しき人間の娘の為にも身の安全を第一としてこの森を離れることにした。その答えにミュウはすまなそうに謝る様に鳴いた。

「では、お元気で」
「グルウゥゥゥ――」
首に布で保護しながら捲かれた卵の籠を持ってライガクイーンはその言葉に応えた。今はもうソーサラーリングを外している為、人語は話せなくなっていた。
「此処から北西に向かって山を越えればキノコロードという人間の手が入らない場所に辿りつく筈です。そこなら近くの森に食糧としての魔物も多くいるので餌には困らないでしょう。おい、そこのチーグル、そう伝えとけ」
「わ、わかったですの！　みゅう！　みゅみゅうみゅうみゅう！　みゅみゅう！！」
ミュウは一生懸命通訳してライガクイーンに伝えて行く。それを聞いたライガクイーンは雄叫びを上げ始める。すると、遠くから同じ様に雄叫びが聞こえてきた。どうやら他のライガ達にこの連絡を伝えているようだ。そして、ライガクイーンは此方に背を向け、この場から去っていった。
「子供達が生まれたら伝えてくださいね！　お祝いくらいは送りますから！！」
その言葉に一度振り返った後、また足を進めて行ったのであった。
「さて、これでいいですかね？　導師イオン」
「え、ぁ……はい！」

「ですが、その前に何か言う事があるのではないですか？」

ハーミットはイオンに歩み寄って目線を同じ高さにした。此方から見れば一見笑顔だが、その顔は目が笑ってない事を表していた。

「……ハーミット。すみません、勝手な事をしてしまって」

「貴方は自分の立場を本当に理解していらっしゃるのですか？　貴方の身に何かあったらダアトは滅びるのと意義同音なのですよ？」

「チーグルは始祖ユリアと共にローレライ教団の礎。彼らの不始末は僕が……」

「それはですから……いえ、この話はもう止めましょう。ですが、此処まで来るためにダアト式譜術を使いましたね？　私の部下からも使用は抑えるよう言われていた筈です」

「……すみません」

「そして、関係の無い者達まで巻き込んだ」

だが、その声は叱るというよりはあまりに優しかった。しかし、イオンは以前と目を伏せている。

「……おい、謝ってんだろそいつ。いつまでもネチネチ言ってねえで許してやれよ。おっさん」

ルークはその様子に何処か居心地が悪くなったためそう言った。

「そうでしたね。では、この件はもう終了といたしましょう。これでよろしいでしょうか？　ルーク様」

「へっ……？　なんで俺の名前知ってんだ？」

ルークは今まで一度もこの男に名前を教えていない筈であった。

「実は私、貴方様の御母上の主治医を務めた経験がありましてね。何度か貴方様の御屋敷に訪れた事があるのですよ。ですから貴方様のお名前は何度か耳にお入れになられて居ります。」
「母上の！？」

ルークにとって意外な事実が明かされ、驚いた。

「確か、キムラスカ公爵家ファブレ夫人の心臓の病をダアトの者が完治なされたことが有名になりました。やはり、貴方がそうでしたか。」
「おや、マルクトにも結構有名所として伝わってるんですね、その情報。それに、カーティス大佐……貴公はやはりルーク様の正体を知っておられるようで」
「えぇ、情報も此方から伝えられていますので」

ハーミットはジェイドに耳打ちするように伝え始める。

「ならば話は早い。キムラスカからルーク様の捜索願いを出されている事はご承知の筈です。マルクトも外交上の手続きで許可を得ていますから、ルーク様の保護を発見次第行う事も伝えられてくる筈です」
「そうでしたか……では、その意を受け取りましょう」

シンクからの情報によればそうなる。だから、これからする事は分かってる筈だ。

「大佐～～～！！！」

その時、向こうから誰かが走って来た。近付くにつれその正体を確かめてみると、それはアニスであった。

「アニス、ちょうどいい所に来ましたね」
「えっ、アニスちゃん超必要とされてましたかぁ～？　ってアレ！？　先生じゃないですか！！」
「また再びってところだねアニスちゃん、結構大変だったでしょ？　それから」
「そうなんですよぉ～！　も～イオン様！！　二度とこんな事しないでくださいよ！！　アニスちゃんもう心配で心労になっても知りませんからね！？」

アニスは冗談を言う様にして、イオンのした事を叱った。

「すみません、アニス」
「ハイ、そう言うなら許してあげますよ」
「アニス、タルタロスをチーグルの森出口に配置するよう伝えてください。もう此処には用はありませんので」
「えと……分かりました。その代わりイオン様をちゃんと見張ってて下さいね♪」

そう言って可愛らしく身をくねらすと、洞窟の外へ小走りに出て行った。

「まあ時間もありませんし、これぐらいにしておきましょうか」
「親書が届いたのですね？」

イオンが顔を上げた。

「そういうことです。さあ、とにかく森を出ましょう」
「駄目ですの。長老に報告するですの」

ミュウがルークの頭の上に飛び乗って訴えた。
「こらてめ！　勝手に俺の頭の上に乗んじゃねー！」
「みゅうぅぅぅ～～～！！！」
頭を土足で踏まれたルークは、ミュウを叩き落してぐりぐり踏みにじる刑に処した。
「それよりジェイド、ハーミット、一度チーグルの住み処へ寄ってもらえませんか」
「分かりました。ですが、あまり時間がないことをお忘れにならないで下さい」
「……それぐらいでしたら」
ジェイドとハーミットの承諾を受けて、イオンはルークに声を掛けた。
「ルーク。さっきはありがとう。あと少しだけお付き合い下さい」
「しゃーねぇな。乗りかかった船だ」
踏みにじっていたミュウを蹴飛ばして、ルークは大儀そうに息を吐いた。

彼らはチーグルの木まで来た道を戻っていた。その中にハーミットも居り、彼はゲリュオンを手押しで出来るだけ進ませるようにして歩いていた。道中、ジェイドやルークからゲリュオンの事を根掘り聞かれてきたが、答えられる範囲で説明してやった。
道を進み続けていたが、いやに早足になっているルークを疑問に

思い、ティアはこう言った。

「ルーク、もう少しゆっくり歩かない？　ミュウが可哀想よ」

小さなミュウは存外に足が速いが、それでも忙しなく足を動かし続ける様は、傍目に辛そうに見える。

「フン！　なんで俺らがそいつに歩く速さを合わせてやらないといけねーんだよ」

ルークはまるで悪びれていなかった。

「ティアさん。大丈夫ですの。ちゃんとついて行くですの」

「ほらな、こいつもこう言ってんじゃねえか」

「どうしてそんなに意地悪なの？　ちゃんとミュウも仲間として接してあげるべきだと思うわ」

「しょうがねぇだろ！　こいつ、ウゼーんだから！」

「喧嘩しないでくださいですの～」

泣きそうなミュウの声が響いた刹那、ルークは爆発したように怒鳴り散らしていた。

「るせーっつーの！　大体お前がライガの住処を火事になんかしなけりゃ、こんなことにはならなかったんだろーが！　ライガの女王だってちゃんと人に迷惑かけずに暮らしていけたってのに、全部上手くいってたかもしれねーんだぞ！　あぁ？　分かってんのか？」

「みゅう……」

ミュウは小さく縮こまる。

「まぁまぁ、それぐらいでもういいじゃありませんか？」
「ルーク、もうミュウの事は許してあげましょ？」
イオンとティアは宥めるように取り成していった。
「ちっ……わーったよ」
一応それで収める事にルークはした。
「けど、ルークさんとハーミットさんは僕達チーグルの恩人ですの！」
「あん？　別にお前の為にやったんじゃねーぞ？　イオンが言うから俺は仕方なくやっただけだからな」
「ですが、その志は良い物です。立派だと私は思いますよ？」
「ば、馬鹿！！　何言ってんだよ！」
ルークは照れくさそうに自分の白い頬を指先で掻いた。それから視線を逸らし、ぼそぼそと言葉を紡ぐ。
「……母上、俺がいなくなったりするとすっげえ悲しんでたって、ラムダスやガイからよく聞かされててさ。あのライガも母上と同じ思いすることになったら、辛いだろうなって」
「やさしいのね……」
ティアが傍でそう呟いた。
１０歳でさらわれて、全てを失って帰ってきた子ども。
ハーミットが知るルークの母・シュザンヌは、そういった過去もあってかルークには大層甘く、優しい母親だった。それは、ルークがさらわれた『ルーク』ではない、と判明してからもずっとそのま

まで。2人の『ルーク』を同じく我が子として慈しむことの出来る母親の愛は、ルークを優しい子に育て上げていたのだ。

「けど、その優しさをもっと他にも出して欲しいわ」

「ハンッ……！　言っとくが、お前なんかには絶対出さないかんな！」

どうやら、この二人は些か仲が悪いようで……

「お二人とも、これから道中共にするのにこのような状況はいただけないですよ？」

「すみません、先生……」

「ふんっ……」

ティアは早くに謝ったが、ルークはどこか不服ならしい。

「ルーク様、彼女も、ティアも別に貴方様を馬鹿にするつもりで言ってた訳ではないのですからどうか彼女と向き合っていただけませんか？」

「やだね……」

何やらルークは拗ねているようだ。

「申し訳ありませんが……他人の事を知ろうとなさらなければ己の事もまた知られる事はないと思われますが……」

「うるせーな！そんなの俺の勝手だろ！？」

彼にとっても譲れない所があるらしく、反発する。

「……そうですね、貴方が決めることです。勝手なのは当たり前で

しょうね、なので、私自身が決める事も勝手な事という事でよろしいですね？」

ハーミットはオウム返しの如く、その言葉の反対を取ってそう答えたのだった。

「こいつ……」

怒りと呆れが半ばして、ルークは絶句する。

「見えてきました！」

そこに、イオンがチーグルの住み処へ辿りついてきた事を述べたのだった。

チーグルの木のうろに入ると、待っていた長老にミュウはみゅうみゅうと語りかけた。「こうして魔物たちの会話を聞いているのも面白い絵面ですね」とは、ジェイドの弁である。暫く「みゅう、みゅう」の応酬が続いた後、長老はリングを持ってルークたちに体を向けた。

「話はミュウから聞いた。随分と危険な目に遭われたようだな。二千年を経てなお約束を果たしてくれたこと、感謝している」

「チーグルに助力することはユリアの遺言ですから、当然です」

イオンが答える。

「しかし元はといえば、ミュウがライガの住み処を燃やしてしまっ

たことが原因。そこでミュウには償いをしてもらう」
「どうするつもりですか？」
ティアが訊ねた。
「ミュウを我が一族から追放する」
長老は告げた。「それはあんまりです」と、イオンが強い声を出す。
「無論、永久という訳ではない。聞けばミュウはルーク殿に命を救われたとか。チーグルは恩を忘れぬ。ミュウは季節が一巡りするまでの間、ルーク殿にお仕えする」
「俺は関係ないだろ」
「ミュウはルーク殿について行くと言って聞かぬ。処遇はお任せする」
「連れて行ってあげたら？」
ティアが言った。何故なのか、珍しく声が活き活きしている。
「俺はペットなんかいらねっつーの」
「チーグルはローレライ教団の聖獣です。きっとご自宅では可愛がられますよ」
イオンにまで勧められて、ルークは「うー」と唸った。
「なら、ガイたちへの土産ってことにでもするか……」
片手で髪をかきあげて不承不承言うと、ミュウは感激の面持ちでルークを見上げて、可愛らしい声でこう言った。

「お役に立てるように頑張るですの。よろしくですの、ご主人様♪」
「……っか～～！　やっぱムカつくんだよな、こいつ」
「まぁまだ子供ですから、そこは考慮してもらえればよろしいかと」
「ちっ……と言うかさっきからおっさん、その堅苦しい敬語で話掛けんのは止めろって！！　なんかムズ痒くなってきて我慢できねぇし気持ち悪いっつーの！！」
「いえ、これが礼儀ですので」
「んな礼儀なんて要らねえって！」

ルークは自分が貴族だと知って仰々しい態度でおもねる人間は信用しないことにしてる。そのせいもあってか、堅苦しい言葉で話しかけて来られる事が大の苦手なのだ。

「……では、公式の場以外では本来の口調に戻させていただきましょう。『これでいいか、ルーク？』」
「！？……お、おう」

先ほどとは打って変わった変化にルークは戸惑いを隠せなかった。ハーミットもこうしてようやく本来の口調に戻せて少し肩の荷が下りていたりもした。

「それじゃあ戻りましょうか、タルタロスまで案内します」
「すまない、カーティス大佐……私は少しチーグル達と話したい事がある。先に行っててはくれないか？」

全てが終わったかと思いきや、ハーミットから個人の願いが出された。

「時間がありません。これ以上は」

「心配ない。二・三分あれば直ぐに終わる物だ」
「……ではいいでしょう。私達は先に行きます」
「先生、いったい何を話す気ですか？」
「まぁ何、ちょっと聞きたい事がある物でね……」

―――――――――――――――――――――

Ｓｉｄｅ：ハーミット

「話はミュウから聞いておる。そなたもルーク殿と同じ我らチーグルの恩人だ。感謝を「そんな事は別にいい、質問だけに応えろ」……わかった」

ハーミットはチーグルに冷たい視線を向け始めた。何故そうされるのかチーグルの長は不思議に思いながらも話を進めて行く。ミュウからソーサラーリングを一時借り、再び長に付けて貰っている。

「お前達、この問題……俺達人間を“使おう”としたな？」
「……それはどういうことだ？」
「とぼけるな、お前達はライガが肉食の魔物と言う事も知っていてなお且つ、木の実や果物を食べる方ではないと知っていただろう。大体可笑しいと思っていたんだ、態々エンゲーブまでの魔物が出る道を弱い種属とされるチーグルが通ってまでエンゲーブまで盗みを働きに来るなんて。下手をすれば自分達が駆除される可能性があったがそれはなかった……それは何故か？　俺が代わりに答えてやろう」
「……」
「お前達は“聖獣”と持て囃されており、保護されるべき立場とされているからだ。駆除できる訳が無い……しかもそれを使って上手く事情をこの森に来た人間に知らせ、本当は人間の討伐隊をライガに向けるようにと計画していたんじゃないのか？」

「……もしそれが本当だとしたら、そなたはどうするつもりじゃ？」
「別にどうにもしない。この件はもう終わったからな。それに、人間が裁く事が出来るのは人間だけだ。魔物を裁く権利は無いからな」
ハーミットは目を瞑って呼吸を落ち着かせる。
「だがしかし、やり過ぎだ。その頼んだ相手は俺達人間にとってお前達チーグルの長以上に大切な方だったんだ。怪我をしたり死んでしまったりしたらどう責任をとるつもりだったんだ？　まさかそれを考慮していなかった訳ではないよな？」
「……」
「だんまりか、まぁいいだろう。俺はチーグルが特別だとかどうとか知らんが、お前達、今回の問題をあのミュウと言う子供に全て押しつけようとしただろう？」
「……否定はしない」
「子供を身を張って守り抜くのが大人の役目だろうが。それともお前達チーグルは責任を全て子供に押し付けるのが当たり前なのか？　仮にもミュウに火の危険さを十分に教えてなかったお前達にも責は十分にあると俺は考えているが？」
そう言い終わった後、暫くしてからその場から動いてこの住み処から出て行こうとした。
「一応言っておく。俺はな、本心で責任の取れない奴ってのが一番大嫌いなんだよ。お前達チーグルはもはや魔物としての尊厳を失った哀れな生き物でしか俺には評価できないがな……」
人間に縋り、全として十分に動けない群れ……魔物として失格だな。

そう言って、ハーミットはチーグルの住み処から出て行った。その後ろからは、チーグル達の寂しげで悲しそうな鳴き声が聞こえて来ていたのだった。

――――――――――――――――――――

Ｓｉｄｅ：ルーク

「遅いですね、もう時間は過ぎてる筈なんですが」
「……仕方ありません。彼は置いていく事にしましょう。彼の譜業なら後からでも追い付く事は可能だと思います」
「な、なぁ……もうちょっと待ってみねぇか？」
「おや？　貴方がそう言うなんて珍しいですね」
「んだとっ――――！！」
「ルーク、やめなさい！」

少し小馬鹿にしたように聞こえたジェイドの声に反応するが、ティアに静止を掛けられ、留まった。

「……別に、ただアイツ、悪い奴じゃないなと思ってよ……」
「あ～その言葉って結構正解に近いですよ？　ル～ク様」
「それってどういう意味だ？」
「ん～とね～、ハーミット先生はダアトじゃ……」

「お――――――い！！　待たせて悪い！！」

そこへ、ちょうどハーミットが戻って来たのであった。

「ハーミット！！　間に合ってよかったです」
「予想より少しオーバーしてしまいました。申し訳ありません」

「いえ、無事に全員集合出来てよかったです」
「それなのですが、導師イオン……」
その時、ハーミットの一言でイオンの予想図がすぐさま壊れる事になる。
「私は貴方方と共に同行する訳には参りません」
そこには、ある理由があった……

原作編　第五話（後書き）

結構、政治概念とかを考えて小説書くのは疲れます。
けど頑張って続けて行きたいと思います。

外伝『砂漠の緑・橙爆弾』（前書き）

何気なく作ってみました。
時期は外郭大地降下から数か月後……

外伝『砂漠の緑・橙爆弾』

＞ダアト＜

「ハーミット、入るよ？」

ダアトの診察室に一人の少年が入室する。緑髪で常に仮面を付けているという事で有名な師団長兼参謀長官：シンクがその人である。

「ん……どうした。何か用か？」

「別に、ファミリアから手紙来てないか確認しに来ただけだから」

孤児院ファミリアから送られてくる手紙は全てハーミット専用の手紙鳩に回されている。盗み見とかを防ぐためでもあるが、優先して届くように設定している事もある。

送り主はそこの子供達を含めたアクセル、イオン、アイラがほぼ占めている。

「なんだ、そうことなら、ほれ」

そう言ってハーミットは手紙を円盤投げのようにシンクへと投げる。それをシンクは指を使って上手くキャッチした。

「なんて書いてるんだ？」

「相変わらずだよ、イオンはアリエッタは元気かでアクセルはファミリアで仲良くやってるでアイラは「アイラさんと呼べ」……アイラさんはアンタと僕は体壊してないかとか大体そんな感じ」

「そうか、“今のところは”か……」

クシャッ……

その時、シンクは見逃さなかった。ハーミットが後にある机で何かを握りつぶしたのを……

「何それ？」

「んっ？　別に何も持ってないぞ？」

「誤魔化さないでよ、アンタの後ろに回した右手に持ってるその紙だよ」

「お前には関係の無い事だ、それに、お前がどうこうしたって変わりなんてない」

「ふざけないでよ、見せろって言ったら素直に見せろよ。一応、地位はアンタより上だけど？」

「……変な所で頭回るなお前」

「褒め言葉として受け取っておくよ、で？」

「……いいだろう」

そう言ってハーミットは丸めたそれをシンクに投げる。それもシンクは片手でキャッチして丸められたそれを拡げてみてみた。すると、

「……これ」

「考えてる通りだ」

「完璧に脅迫状だよね……どうして隠してたの？」

「言った筈だ、お前には関係の無い事だ」

それは、匿名からによる脅迫文であった。内容はこうだ……

薬品の輸入ルートを明け渡せ、さもなくば、貴様の大切な者達の命は無いと……

「俺のルートはフィリスさんの仲介を通してやってる物だ。それに、“向こう側”じゃ作るのが難しい効力の薬が安く買える。やれやれ、このままじゃフィリスさんにもこんな文送ってそうだな」
「何呑気に言ってるんだよ！　下手をすればファミリアの皆にも危険が及ぶって事がわからないの！？」
「……まいったなぁ」
「まいった？　こんな大事事をまいったの一言で済ませる気！？ふざけ「あーシンク？　なんか勘違いしているようだが」……は？」
「『アイツら』が派手に問題起こさないかどうか心配なんだよ。二日前に一応ケセドニアに事の詳細を手紙で送ったから『アイツら』絶対面白がって対策考えてるぜ？」
「どういう事……？」
「それはだな……」

――――――――――――――――――――――――

＞ケセドニア＜

同時刻、ケセドニアには建物の影で隠れながらこそこそと何か作戦会議をしているらしき人物らが存在していた。

「いいか、依頼主からはあの孤児院にいる人間を一人残らず拉致しろとの事だ」
「隠す場所は話した通りの所で集合するぞ」
「よし、散開！」

彼らはケセドニアの一般市民に紛れるように気配を馴染ませて目的地へと一人一人進んでいた。このような特技を行える所、この手の仕事のプロと言ってもいい腕前を持っている。

「目的地へ着いたぞ、おそらく中に子供やその関係者が全員いる。

絶対に一人残らず取り逃がすな」
「確か、どうしても捕まえられない場合は殺しをも厭わないと」
「へッ……腕が鳴るぜ！」

彼らはどうやら自分達が成功する事になんの疑いもない様だ。
その時、突如孤児院のドアが開き始めた。金具の軋む音に反応して彼らは次々と隠れ始める。様子を見ていると、二人の少年が出てきた。一人は緑色の髪をしていて車椅子に乗った少年、もう一人はオレンジ色の髪をしていてバッグを片手に持つ少年が……

「それじゃあ今日もフィリス先生の所へ行って来るね、兄さん」
「うん、出来るだけ早く切り上げてきな。今日は」
「大丈夫だよ、自分の事は自分で何とかするよ」
「ふーん、ならいいけど？」

二人は何か話をしているそうだが、内容までは全てはっきりとまではいかなかった。
そして、片方が孤児院から離れ、もう片方が孤児院の中へと戻っていった。そのタイミングを見計らって彼らは動き出したのだった……

――――――――――――――――――――

「まずイオンだが、アイツは下半身麻痺で足が不自由になってしまったのは知ってるな？」
「いや、あれを不自由というなら世界中のブレイクダンサーはきっと不自由だと思うよ」
「メタな発言はやめい！　とにかく、アイツは診断の結果はそうだとしても……実際はそんなもんじゃない。ダアト式譜術による筋力の底上げでしっかりと杖を突きながらも歩けるようになってきてん

だ」
「一応完全じゃないんだね？」
「あぁ、譜術による強化だから譜力が無くなればたちまち立てなくなるから時間制と言った方が早いだろう」
「じゃあ不利なのは変わんないね」
「不利……シンク、それは本気で言っているのか？」
「……ごめん、前言撤回させてもらうよ」
「なんせな……」

――――――――――――――――――――――――

その頃、先に孤児院に侵入した謎の人物らは……誰もが予想通りに……

「ぶごおぁぁぁ――――！！！」
「ぎゃあぁぁぁぁ――――！！！」

死にかけていた……

「な、何だこのガキは！？」
「こんな奴がいるなんて聞いてねぇぞ！？」

「ふん、リハビリにもならないね」

イオンは右手で杖を突きながら舞を舞うかのように手足に譜を込めて循環させていく。
それによりある者は肋骨を粉砕され、足や手の骨を折られたりと行動不能な状態に陥らされていた。

「ま、アイツとの約束だからね……無闇に殺したりはしないよ」

「ふざけやがって、だが強がっていられるのも今の内だ」
「何……？」
「先ほどから別のチームがお前の方割れを浚うように指示してあるからな。此方に連れて来られるのも時間の問題だ。つまり、あのガキの命は俺達に掛かっているという訳だ」
男達は自分が有利になったから立場が逆転した……そう思っていた筈だった。
「ふーん、そうなの……で？」
だが、イオンは興味無さげに答える。
「分からなかったか？　俺達はあのガキを何時でも殺せ「アンタら馬鹿じゃないの？」……何だと！！」
変わらずイオンは男達を馬鹿にする態度を取り下げはしなかった。
彼らはそれを強がりと考えていたが違った。
「あのさ……僕達が何時でも平和気分で暮らしていてこうゆう状況の対策を何もしてなかったと思ってんの？」
「……！？」
「ま、しばらくすればわかるか……」
その言葉の意味はイオンだけにしか分からなかった。
――――――――――――――――――――――――
「けどハーミット、イオンは良いとして、アクセルはどうすんだよ？　アイツは体力は僕より弱い奴だから体術なんてできないよ？」

「確かにそうだろうが、アイツにはアイツなりの対処方法をイオンと一緒に叩きこんだ」
「……えげつない事になりそうだな」
「イオンは兵法、そして俺は……罠の作り方だな」

――――――――――――――――――――

「いたぞ……」

他のグループは陽気に歩き続けるアクセルの後ろを追い続けていた。
足音に気付かれないよう、ゆっくりとこの道特有の技術をフルに使ってだ。
なるべく一目につかない所で拉致を行うのが鉄則であり、だからこそアクセルがそこへ入るのを待ち続けていた。

「どうやらあの民家に入っていくらしいな」
「飛んで火に入る夏の虫っていうんだよな、ホドでの諺じゃ」

そして、完全にそのドアが閉まった所、彼らは動き出した。

「いくぞ」
「「了解！」」

すばやく民家へと近付いていく。次第に周りを囲むように陣を作り出していく。
だが、それはこの時起こった……

「うおぉぉぉぉ――――――！！！！！」
「うわあぁぁぁぁ――――――！！！！！」

突如、何人かが消えたのだ……いや、【落ちた】と言った方が正しいだろう。
彼らが立っていた場所にはなんと、落とし穴が掘られていたのだ。

「大丈夫か！？」
「ぎゃあぁぁぁ――――！！！　気持ち悪いいぃぃ――――――――！！！！」
「出してくれえぇぇぇ――――――！！！！！」

深く掘られた穴の下から断末魔のような悲鳴が響いてくる。一体この中に何があったというのだろうか……

「くそ、ふざけた真似しやがって！！」
「こら、まて！！」

その時、一人がズシズシと前に進んでいく。子供に此処までコケにされた事に頭に来た為だろうか。
だが、【彼】の罠はあれで終わらない……

スコンッ――――！！！

足元から何かが勢いよく抜けるような音が響き渡った。それが何かと探している時に……なんと、丸太が横から何本も転がって来た。

「ぐぼっ――――！！！」
「がっ――――！！！」

勢いのついた丸太は再び何人かにぶつかり、悶絶し始める。だが、それでも【彼】の罠は終わらなかった。

ウイィィィ――――ン……

先ほどの場所から長い筒状の物が伸びてくる。その次には、勢いよく水を噴射していく。

それぐらいはどうって事ない……そう考えている時点で彼らの負けは決まった。

「な……なん……だ……これ？」

「痒い痒い痒い痒い痒いいいいぃぃ～～～！！！」

実はこの液体、ラジオラ高原にて獲れるとある毛虫の分泌物と同じ成分を合成したものであった。一たび液に触れればその部分は漆のようにかぶれて行くというトンデモ効果付きだ。

「た、退却！！　退却だ！！！！！」

結果として、彼らの作戦は失敗に終わった。

――――――――――――――――――――――――

そんな状況の中、ファミリアの住人は何処に避難してるかと言うと、例の色街であった。

「ごめんねカレン、また厄介になっちゃって」

「良いって良いって、先生には随分とお世話になってるからそのお礼も兼ねてって所よ」

この場所を知っているアイラだからこそ、避難場所をハーミットと共に決めてこうして事あるごとに厄介になっているのだ。

娼婦たちも子を成す事を禁じられている身であるため、子供達の触れ合いを楽しみに待つ者もいる。
ハーミットのパイプのお陰で昔とは断然違った生活を送る様にはなったが、彼らには笑顔が戻っている。

「それよりアイラ」
「何？」
「もう先生とは寝たの？」

「ブブウゥゥゥ――――！！！」

アイラは口に含んでいた水を噴き出した。この砂漠地帯では水を無駄にする事はどれ程罰あたりであるかと教わってはいるが、仕方ないと言える。

「なななななあぁぁぁぁぁ――――！！！！！／／／／／／／／」
「あちゃー、その様子だとまだってとこだね」
「変な事言わないでよカレン！　私が先生とね……ね……ハウゥゥゥ……／／／／／」

アイラは顔を真っ赤にして自分の妄想によって悶え始めた。

「あんな人滅多にいないよ？　先生みたいな人と既成事実作れれば将来安定間違い無しよ！」
「そんな、でも！　でも！」
「ふ～ん、アイラは諦めるんだ。なんならアタシがアタックしちゃおうかなぁ♪」
「！？」
「この色街じゃ先生に気がある人は一人や二人じゃないって話だよ。早くしないと取られちゃうかもね。主に私が♪」

「だめだめだめぇ～！！　そんなの私が許さないわ！」
「あれえぇ～、さっき変な事言うなっていったよねぇ～？　それってアイラは先生なんか興味無いって意味じゃな～い？」
「あうぅぅぅ……」
「みんな～、次先生が来たら一気に襲っちゃおうよ！　先生、女性には手を出さない方だから可能性高いし」
「「賛成～♪」」
「わあぁぁぁぁ～～～ん！！　皆の馬鹿あぁぁぁ～～～～～！！！」
そんな事が避難中の色街で起きていたとか……

そして、その三日後……
「何！？　失敗しただと！」
「依頼先ではそう告げており、依頼料は全額返品させていただくと言う事です」
「ふざけるな！　何のために態々頼んだと思っている！！」
とあるマルクト：首都グランコクマの一角にある屋敷にて一人の男が執事に怒鳴り散らしていた。彼の名はシュタインメッツ伯爵……この所、現皇帝に反旗を覆そうと計画していると噂される男だ。
「くそ、あのルートはあの計画の為の金を稼ぐにはちょうど良い場所だったというのに！！」
彼の中の計画が狂い始めたという事もあって、苛々が収まらなく

なっていた。伯爵はテーブルにあるワインをグラスに注ぎ足し、籠に入った葡萄を一枝摘む。

「あの成り上がりの平民医師が……この私を侮るとどういう目に遭うか分からせてやろうか」

ハーミットへの敵意を顔に露わにしながらグラスに入った揺らめくワインをその口に含み、舌で味わう。そして、そのまま喉へ通っていく……

パリィィィンッ――――!!!

筈であった……

「うおぉぉぉ――――!!?」

いきなり割れたワイングラスに驚き、伯爵はソファーに倒れ込む。しかし、勢いが強すぎて伯爵はソファーごと床に倒れこんでしまった。

「シュタインメッツ様!?」

先ほどの音を聞き、執事らしき人間がこの部屋に入って来る。そして、倒れている伯爵を起こしてやる。

「なにが、起こったのだ?」

「分かりかねます……おや、窓に穴が?」

執事は窓に開いた不自然な穴を見つけた。それは溶かしながら強引に入って来たというような穴の後であった。

「おそらく、犯人は何らかの方法で此処からシュタインメッツ様を狙ったかと……」
「ぬうぅぅ……だがしかし、三流を雇ったようだな。狙いを外して誤って私の持ったワイングラスに当たった。」
伯爵は落ちていた葡萄を掴み上げる。
「所詮、下の者は下の者しか……」
バチュッ――――!!!!
「ヒッ……!?」
バチュッ――――!!!!
バチュッ――――!!!!
バチュッ――――!!!!
バチュッ――――!!!!
その瞬間であった。なんと、伯爵が持った葡萄が枝に付いた物全てが破裂したのだ。いや、一瞬だが見えた。譜弾によって葡萄は今狙撃されたのだ!!
「……」
「シュタインメッツ様!!」
伯爵は呆然としていた。それと同時に今起きた現象の意味を考えていた。
「(何故だ、これ程の腕ならば何故最初の一撃で私をしとめなかっ

たのだ!?　……いや、初めから私を殺すつもりがなかったのだ!!）」

伯爵は震え始める。

「（これは“警告”だ!!　次は無いと向こう側から宣言してきたのだ!!）」

伯爵はこの時初めて知った。己はいかに強大な勢力と戦おうとして居たのかを……

そして、その日から彼はこの件から一切身を引くことにしたのであった……

――――――――――――――――――――

その同時刻、グランコクマから1?離れたテオルの森にある大樹の頂点にて佇むハーミットの姿が居た。

「これで仕事は終了……と。たく、ピオニーからの願いついでにやる事だったから別にいいけどよ、俺をどっかの殺し屋と勘違いしてないかアイツは?」

自分の概念がこの頃分からなくなっているこの頃であった。

「さて、帰ろうか。グランコクマで限定菓子を買ったからアリエッタも喜ぶかな?」

真実は森のざわめきと共に去っていく……

――蒼鷹は獲物を捕えた後は己の巣に帰るのみ――

外伝『砂漠の緑・橙爆弾』（後書き）

ちょっとしたアンケートにご協力を。
今までの話の中で心に残ったハイルの言葉を教えてください。
また、ハイルについての質問も感想板にて受け付けております。
返答は３００万Ｈｉｔ編にてお教えする予定です。

３００万Ｈｉｔ　特別編（前書き）

今回はぼのぼのに収めてみました。

３００万Ｈｉｔ　特別編

――――パンッ！　パンッ！　パンッ！――――

「実質まだ早いけど、３００万Ｈｉｔ　特別編を開催いたします！」
「司会はお馴染み作者Ｊａｓｔｉｃｅと……」
「主人公ハーミット兼ハイルがお送りいたします！」
「いやー本当は四捨五入して３００万Ｈｉｔなんすけど待ちきれなくて出しちゃいましたね！？」
「そんな事より本編書いてくれの願望が読者様から殺到しているが？」
「すみません！　本編書いてるんですが忙しくて少しずつしか進まなくて、その間に３００万Ｈｉｔにまで来ちゃったって感じなんです！！」
「明日には本当に３００万Ｈｉｔになるからな……間に合わないと言えば本当になるかもしれん」
「そんじゃ本題に入ろうか。今回の特別編はなんと、ハーミットとアリエッタのダアトで暮らし始めていた初期の様子、所謂ハーミットの独白になります！」
「よっしゃ来た！　これで勝つる！！」
「それでは、どうぞ！！」

「隣、いいか？」
「ラルゴか、別にいいぞ」

ダアト内にある酒場、そこでは仕事の終わりに酒で心を休める為に存在する。
そんな場所にて、この二人：ラルゴとハーミットは座っていた。

「調練ちゃんとやれてるか？」
「そうだな、ヴァン総長が来なくなった分、俺の方に廻ってるからな。だが部下達も覚えが良い奴ばかりで鍛えがいがあると言う物だ」
「まぁ、お疲れさん」
「お前こそな」

――――キンッ！――――

互いのグラスを打ち合い、言葉以外での意思疎通を取って行ったりもした。

「師団もだいぶ変わったものだ。俺は古く第一師団を纏めているが、かつて第三までが第六まで増える事になるとは……」
「使える所は使うってことだよ、ヴァンは」
「ふっ、確かにな……現に今の六神将は全員ヴァンに何処かしら関係を持った人間ばかりだからな」

「……」

お互いとも顔で向き合わず、カウンターに腕を立てながら座って話を続けていく。

「そういえばハーミット、アリエッタの例の件については結局どうなったんだ？」

「あぁあれか、結果は……まぁなんだ、思った通り良くなかったよ」

「……そうか」

アリエッタはこれまで身元が分からなかったが、この時期になりようやく尻尾がつかめてきた。調査によると、なんとアリエッタは俺と同じフェレス島出身者であったのだ。こんなにも身近な存在が目の前に居たなんて思いもしてなかったさ。

けど、家族の生死を確認してみた所、本当の両親は死亡していた。遺体が現に難民者用として使われた墓地にある墓に収められているとの事だ。

親戚も調べてみたが、殆ど手がかりが無い為に見つけられる事はできなく、調査は中止する事となってしまった。

「しかし、アリエッタの魔物を操る能力は素晴らしい物だ。今や軍の物資搬送等では欠かせない存在となっている」

「でも、その任されている師団の奴らが暴走しなきゃいいがな……」

「それは、まぁなんだ……」

アイツら下手するとアリエッタの為なら爆弾を腰に巻いて本拠まで突進して行きそうだしな。そして、今だアリエッタは“俺達の嫁”発言は解せぬ……今度イオン連れて本格的にＯＨＡＮＡＳＨＩしなければいかんかもしれん。

「あの子の才能は産まれ持っての天性としか言いようがあるまい」
「それは違うさ、ラルゴ」
「何……？」
「あの子が今日今まで来れたのは、天性という言葉だけでは片づけられはしない……」

その時、グラスの氷がカランと音を立てて崩れたのだった。

―――――――――――――――――――――

初めから全てが上手く行っていた訳ではない。もう十年以上も前の事だ。

アリエッタは当時、まだ“人間”と言う物を上手く知っていなかった。なぜ言葉を話すのか、何故こうしなければならないのかと知らない事が沢山だった。

「ぁぅ……ぅ……」
「そうだ！　ゆっくりだ！　ゆっくりと足に力を入れてみるんだ」

先ず始めさせたのは歩かせることだった。獣として生きて来たアリエッタは立つ事を四足で行うという先入観が支配していた。二足で立った事が無かった。

「ひぁぁ……！！」

コテンッ――――！！！

「がぅぁぅ……」

アリエッタはベッドのシーツを使って再び足だけで立ってみよう

とするが出来ないでいた。彼女にとって、二足だけで立つ事はかなりの負担で、初めての経験の為に重心がしっかりとせず、常にグラグラとしていた。骨がまっすぐ育ってないからだ。

「うぅぅぅ……」

ゴンッ――――！！！

「いあぁぁぁ！！！」

今度は背中から崩れ落ちて床に寝転がった。頭を軽く打ったりもしていた。

「ひぅぅぅぅ……」

「……」

膝を付き、シーツを掴みながらアリエッタは涙目でハーミットの方へ向いた。助けて欲しいと……そう望んでいた。だが、

「駄目だ、助けてもらおうなんて考えるな」

ハーミットはあえて冷たく言い放つ。ここで甘やかしては二度と変えれないかもしれないと考えたからだ。

そう言われたアリエッタは遂に泣きだしてしまった。すすり泣く音が響いてくる。

だが、その光景を見ているハーミットが本当は一番辛いのだ。今にでも慰めてやりたい気持ちを無理に抑えつけ、その場を動かず何とか立ち続けているのが事実だ。

何分経っただろうか……ようやく泣き終えたアリエッタはハーミ

ットを暫く見つめながらも、再び立ち上がる事に挑戦し始めたのだ。

「……ッ！？」

「ぎ……いぃ……」

この時、アリエッタはベッドから手をゆっくりと放していた。そう、この時、初めて“立った”のだ！　左右にユラユラとしながらも、顔を真っ赤にしながら力を振り絞ってバランスをとり続ける。

「そうだ！　それでいい！　こっちに来てみろ！！」

「ひぃ……ひぃ……ひぁぃ……」

歩いた。この光景を見てハーミットは漸く堅くした表情を和らげて喜んだ。まだ摺り足のような進み方でゆっくりと歩くアリエッタを迎え入れるかのように、両手を広げて待ち続けた。

「ふぁ……ぁ……ぎゃん！！」

ゴンッ――――！！！

だが、最後までとはいかなかった……またしても途中で転んでしまった。次は真正面から倒れ込んだ。ハーミットはまた泣いてしまうと不安に思いながらも、アリエッタに近づこうとしたが、彼女がそれを許さないかのように動き出した。体を震わせながらも、泣くのを堪えて、今度は屈む様に立って進み出す。四足歩行と二足歩行の中間みたいな歩き方だが、立っているのには変わりない。また再びゆっくりと……またゆっくりとハーミットの元へと進んで行ったのだ。

「あぃ――――！！」

ガシッ……

「……おめでとう」

そして、ついに辿りついた。手でハーミットのズボンを掴みながら徐々に立ち上がり始める。なんとか形にしたアリエッタはその達成感から笑顔になり始めていた。それをハーミットは何も言わず、ただ頭を撫でてあげるのであった……

―――――――――――――――――――――

「次の患者の予定日は？」

「レムガーデンの初日に基本予定されてます」

「そうか、それならばA室の患者は……」

「ハーミットさん！！」

こんなこともあった。ある日、俺は何時も通り仕事をしていた時、孤児を引き取り、面倒を看る所からそこの職員が良く訪れた事があった。

「今度は……なんですか？」

「あの……アリエッタちゃんが孤児達と、ケンカをしたんです」

「……すみませんがそれくらいは貴方方も対処してくれませんか？」

「ですが、ケンカした他の孤児達は……大怪我をしました……」

「何ッ！？」

俺は急ぎでその場へと行った。すると、そこには……

「痛いよおぉぉ～～～～！！！」
「ひぐっ……えぐっ……」
「わあぁぁぁ～～～ん！！！」

五人ほどの子供が血を流してたり、痣を創ってたりと痛々しい光景が広がっていた。

「ど、どうしたんだこれは！？」
「アリエッタちゃんが自分で遊んでいた玩具をこの子達が奪おうとして……それからアリエッタちゃんが噛みついたり引っ掻いたりとしたそうなんです」
「そうなんですか？」

野生では自分の獲物は奪われたら激しく闘って取り戻したりする。その経験を此処で使ってしまったというのか。

「あの、アリエッタは何処に？」
「他の部屋で別の職員が面倒を見ています。東側の三番室にいます」
「すみません！」

ハーミットは駆け足になりながらその目的の場へと急いで行った。基本、教団の中では下手に騒がない限り急ぐ為に走ったりしては良い。

「何をしているの貴方は！！」
「ちがうもん！！　ありえったわるくないもん！！」

目的の場所まであと少しという所で部屋の中から声が聞こえてきた。ハーミットはそのドアを勢いよく開けて中へと入って行った。

「失礼します！」

急いでいた為に息を切らして肩を上下に揺らす。汗も幾分かかき始めていた。

「ハーミット先生！　これ以上私達はこの子の面倒を見切れません！！」

「本当に申し訳ない！」

「その言葉を何度聞かされましたか分かるのですか！」

ハーミットは頭を下げて職員に謝り続ける。子自身の問題は親の責任として扱われなければいけないからだ。

「とにかく、もうこれ以上は入出禁止となる事も検討していただく事になります！　失礼します！！」

最後にそう言い残して、職員はこの部屋から出て行った。そして、残ったのはアリエッタとハーミットだけであった……

「アリエッタ……」

「……（ぷいっ！）」

ハーミットが呼びかけてみても、アリエッタは背中を向けて何も言おうとはしなかった。ゆっくりと近付いてみて再度呼びかける。

「聞いたぞ、玩具を取り返そうとしてお友達を傷つけたって……どうしてそんな風にしたんだ？」

「あんなの、ありえったのともだちじゃない、です！」

怒りながらアリエッタは小さくそう叫ぶ。

「確かにアリエッタが使っていた物を強引に奪おうとしたかもしれない。けど、それで人を傷つけちゃいけないって前にも言っただろ？」

「そんなの、しらないもん……」

ハーミットはため息を付く。なるほど、これは難しくなりそうだ……

「それじゃ駄目なんだよ、いいかい？　アリエッタはこれから“人”として暮らしていく事になったんだ。その為にはルールを守らなければいけないんだ」

「……」

アリエッタは膝を抱えて蹲る。

「ママに、あいたい、です……」

「……そうだよな」

森が未だに恋しいのだろう。今までの生活をいきなり変えろと言われても数カ月で変えられるほどこれは簡単な問題じゃない。だが……

「まだ遭う事はできない……いや、遭わせる訳にはいかない」

「どうして、ですか？」

「ライガクイーンに、アリエッタのママと約束したんだお父さんは。お前を人として生きていかせて欲しいと……」

「……」

だから、まだ遭わせる訳にはいかないんだ……

「それをどうにか分かって欲しい」
「……」
「先ずはケンカした子達に謝って来なさい」
「……やです」
「駄目だ、行かなくちゃこの問題は終わりとはならない」
「いやです！」
「甘えるな――――！！！！！」

ビクッ――――！！！！

ハーミットはついアリエッタを怒鳴ってしまった。いきなりの変貌にアリエッタはビクついて、遂には泣きだしてしまう。

「ひぐっ……うえぇぇぇ～～～～ん！！！！！」
「あぁ、ごめんな！？　いきなり怒鳴ったりしてすまなかった！！」

ハーミットはさすがに言いすぎたと思い、慰めるようにしてアリエッタに謝っていく。

「だってぇ、だってみんな、アリエッタにひどいことといったもん！」
「……何？」
「アリエッタのこと、【にせもののこども】っていったもん！　アリエッタ、ママとパパのほんとうのおやこじゃないっていったもん！！」
「……」

そうか、そんな事を言ったのか……確かにそれは事実だろうよ。
だがなぁ……

「アリエッタ、それは違う」
「ふぇ……？」
「お父さんはな、アリエッタをお父さんの娘だと思っているよ。それとも、アリエッタはお父さんを“お父さん”と思っていないのかい？」
「そんなこと、ない、です……」
「そう思うならそのままでいいんだ。だったらな、アリエッタ……それを違うと言う人間が言うならこう言ってやれ。『それがどうした？』ってな」

血が繋がっていない……それがどうした？
本当の両親を知らない……それがどうした？
本当の名前も良く分かっていない……それがどうした？

「アリエッタ……父さんが一番幸せだった時なのはな、お前と出会えた事だ」

だから、お前は俺の娘で居ていいんだ……

「顔を洗ってきなさい……」
「はい、です」

そして、そのまま向こうへと歩いて行った。アリエッタの顔は、涙で目を腫らしながらも、笑顔であった。

――――――――――――――――――――――――――――――

「文字を覚え始めたり、人と触れ合う事ができ始めたり……此処まで来るのに本当に時間が掛かったんだ」
「確かに、永かったんだな」

もう、グラスの氷は溶け終えていた。結構時間が掛かっていたようだ……

「俺もそんな家族を持ちたかったな。だが、今となっては……」

「それはわからんさラルゴ、人生が大きく変わる日ってのは唐突に訪れる物だ」

「……メリル」

ラルゴはロケットを開けて、中の絵を見つめる。その様子をしばらく見て、ハーミットは一気にグラスの酒を煽った。

「ごちそうさん、御代は此処に置いとくぜ」

幾らかガルドをカウンターに置いて、ハーミットはこの場から離れていく。

「ハーミット、教えてくれ」

「何だ？」

「もしもの事だ……俺は、“まだ”間に合う事が出来るか？」

運命は本当に気まぐれだ……

「自分で考えろ。決断はお前次第だ」

人生という旅路を少し変えるだけで即座に大変化を起こしうる。

「はい、＞蒼鷹と妖獣＜でした！」
「んでもって、この後はちょっとしたオマケだ。作者が絵を久々に描いてみたんで載させてもらう事にしたぞ？」
「ちなみに、もしも主人公のイメージが崩れるのはやだと言う方はスクロールせずにそのままお帰りする事を推奨致します」
「それでは……どうぞ……」

「本当にいいのか？」

＞i152755—1010＜

「正直、作者は絵を描くが大の苦手です。そこん所了承しておいてください」
「それでは、次の４００万Ｈｉｔにて再び出会いましょう！」

「「さようならぁぁぁ～～～！！！！！」」

『ねぇ、僕とアリエッタの絵も描いてみてよ？』
『アリエッタ姉さんだけずるいよ。僕も描かれてみたい！』
『勘弁してください！　絵を描く為に半月分の精神力を要する位きついんです！！　俺にとって絵を描く事は！！』
『やれやれ、またお疲れ様会は荒れそうだな……』

３００万Ｈｉｔ　特別編（後書き）

色鉛筆は余計だったかもしれませんが、何とか頑張りました……

原作編　第六話（前書き）

久しぶりに投稿できました。振り絞りきった感じです……

原作編　第六話

Ｓｉｄｅ：シンク

「遅い……」

マルクト帝国セントビナー駐留軍基地、そして観光名所としてのソイルの木がある場所として有名なセントビナーにて腕を組みながら何かを待ち続けるシンクが居た。五時間前までは首都のグランコクマにてマルクト皇帝と謁見をしたばかりで休まずにこのまま一直線に向かってきたのだ。

「シンク謡士、中へはお戻りになられないのですか？」
「大人しくしている暇がないんだよ。休んでられないよ」

マルクトの許可を受けて、オラクル騎士団は第一、第三、第四から捜索隊を編成した。先ほど声を掛けて来た人間もその一人だ。セントビナーにて導師を迎える為に門で待ち続ける。

「シンク謡士！」
「何？」
「アッシュ響士から速達です！　『導師を発見した』との事です」
「よし！！」

シンクは軽くガッツポーズをした。先ずは第一段階はクリアしたという訳だ。

「ちゃんと上手く纏めればいいけど……まぁ万が一はアリエッタが魔物を使えないように操ってくれるし」

けど、まだ逆となってマルクトと共に和平協力しそうなんだけどね……アイツは。

「ハーハッハッハ！！　お待たせしましたシンク！　この薔薇のディスト様が朗報をお持ちしてきましたよ！？」

「何、アンタが言う朗報は別の意味じゃないの？　死神ディスト」

「薔薇だバ・ラ！！　この美し～い私が、どうして薔薇でなく死神なんですかっ！」

「んな事は別にいいよ。んで、その朗報をとっとと聞かせなよ？」

「キィィィ――――！！！！　相変わらず生意気な態度ですね！！　そういうならこれを見て言ってみなさい！」

バサッ……

ディストは譜業椅子の後ろから何やら証書のような物を取り出してシンクに見せる。それをシンクは呆然にひったくるようにとった。

「……ふ～ん」

「な、なんですかそのリアクションの薄さは！？　せっかくこの私が此処まで届けに来たっていうのに」

「でもさぁ、今頃って感じなんだよね……」

それは、ダアトの大詠士を筆頭とした詠士達のダアトの和平への協力を受託したという証書であった。一応、これが出されたという事はマルクトに対しても、ダアトに対しても公式に和平協力の契約が申請されたという大義名分を持てるが……キムラスカ側としてはあまり効果なさそうだとシンクは考えていた。

「無いよりはましじゃないですか！　さぁ、ありがたく受け取りな

さい！」
「まぁ一応礼は言っておくから。じゃあ任務の邪魔だからアンタはもうどっか行ってよ」
「キィィィ――――！！！　もう許しませんよ！　この事はきっちりと私の復讐日記に……」
キキィィィ――――――――！！！！！
ゴンッ――――！！！
「ぎゃあぁぁぁぁぁぁ――――――――！！！！！」
突如としてディストは飛び込む様に吹っ飛んだ。譜業椅子の後から何かが勢いよくぶつかった為だ。
「うぉ！　何でこんな所に椅子が！？　ってかディストお前か！！」
「遅いよハーミット、１０分遅刻」
「あー悪い悪い、フ―ブラス河まで迂回してこっちまで来たから結構時間掛かった」
「こ……腰……私の腰がアァァァ……」
「ディスト―、後で治療してやっから待ってろよー？」
同僚の場合、死なない限り、余計な心配を掛けないのがハーミットクオリティーである。
「そういや遭った？　導師イオンに」
「あぁ、遭った。チーグルの森行ってライガをどうにかして欲しいというチーグルの願いを聞き入れていたよ」
「……それで」
「ファブレ公爵子息巻き込んでた」

「……」

シンクは顔を抑えた。何してんだあの馬鹿……と仮面越しから頭を悩ませている姿が透視出来た。

「しかたないから実質俺が解決したよ。ライガとはアリエッタの繋がりで知り合っているからな。薬の原材地として有名なキノコロード近くの森に移って貰った」

「そう、アリエッタにも伝えておかないと……」

「和平の一団はタルタロスに乗ってキムラスカに向かい続けるそうだ。俺も同行を願われたが……まぁなんだ、断った」

「それは正解だろうね」

ハーミットは軍医であると同時に響士でもある。今現在、ダアトの公務は他の団員が出払っている為、機能しているかどうかも怪しいのだ。しかも、その問題を謡将であるヴァンではなく、参謀長のシンクと世界的パイプを幾らか持つハーミットが出回って、キムラスカ側とマルクト側からの様々な申請を遣り繰りしているから現状維持が出来ていると言えて良い。

「ダアトの為を考えるならもっと他の事を考えろって……」

「それくらいにしとけよシンク。これは導師の初の勝負事だからな……できるだけ最高権威の導師のやる事を支持するのが少なくともダアトの人間の意思だ」

「そんな甘い事ばっかじゃ変になるよ？」

「まぁ、別に俺の考えを押し付けようとしてる訳じゃない。お前はお前の考えを持てばいい」

そして、話は纏まったところで……

「後は、他の四人を待つだけだな」
「今頃タルタロスで交渉取引してるかもね？　一応証書でたから実質意味ないけど」
「ヴァン、偶には役に立ったか」
後はラルゴ、リグレット、アリエッタ、アッシュが集まれば六神将が全員集合となる。全員の最終報告を待つのみだ。
「た、助けて……くれませんか……ホント？」
その後ろでディストが這いながら手を伸ばしていたが……

＞タルタロス＜

「導師、貴方はこのままキムラスカへ向かうというのですか？」
「はい、請け負った以上、最後まで僕はマルクトとの和平協力を続行し続けます」
「ダアトの今の現状を承知の上で……？」
「……後悔はするつもりはありません」

タルタロスの艦内の客室では、イオンとリグレットがソファーに座って向かい合う。それぞれの傍ではラルゴ、アリエッタ……もう片方はジェイド、ティア、アニスが居た。

「……結構。貴方の意思を尊重することにいたしましょう。大詠士派の者達にも話は直に着く筈ですので」
「それはどういうことですか？」
「閣下が直々に今回の和平に関しての正式な証書の発行を求めることにいたしました。閣下ならうまく纏め上げられる筈です」

「ヴァン……！？」

閣下という言葉にティアは小さく口を漏らす。自信の兄の名を……

「カーティス大佐殿、貴公はどのようにしてキムラスカへ入国するおつもりでいる」

「一度、セントビナーへ寄りマグガヴァン将軍に直報告を行い、そこでタルタロスを停艦させて、そこからは軍事専用の馬車に乗り換えてカイツールへ向かうつもりです」

「左様か……」

ラルゴは質問を一度となえた後、再び黙り始める。

「でしたら、余計な人員はダアトへ戻すことにします。ラルゴ、第一師団に帰還命令を！」

「了解だ」

そう答えると、ラルゴはこの部屋から出ていく。待機している兵に事を伝えに向かったのだろう。

「では、これで話は終わりにしましょう。リグレット、わざわざ来てくださりありがとうございました」

「……いえ」

リグレットはそれ以上は何も言わず、静かに礼をしてソファーから立ちあがった。アリエッタも不器用ながらもお辞儀をしてリグレットについていく。

そして、完全にダアトの師団達が部屋から出ていくと、先ほどまで緊迫した空気は一掃されることになる。

「あー、息苦しかったっつーの！」
「ははは、アニスお疲れ様です」
「ぜーんぜん♪　気にしなくても大丈夫ですよぅイオン様！」

ラフになったアニスの声でティアもジェイドも気分を緩ませるようになった。

「そういえばルークは？」
「彼なら艦内を見学してもらっている所です。まぁ、機密となる場所はさすがにつれてはいけませんが」
「大佐、なぜルークはこの場には呼ばなかったのですか？」
「ティア、もしこの場にルークがいたらどうなるか予想してみなさい……」
「……すみません、軽率でした」

『何を話してんのかさっぱりだっつーの！！』
『なぁ、いい加減終わりにしねぇか？』

……と、このような事を言って暴走しかねない。ある意味ジェイドの選択は正解だったといえよう。

その頃、リグレット、ラルゴ、アリエッタは艦内の通路を歩いていた。甲板にいるオラクルの師団員達に交渉の結果を伝えるためでもあるが、もうひとつもある。

「そういえば、アッシュはどこへ行った？」

「アッシュ、自分は甲板にいる、って言ってた、です」
「……たしかに、アッシュは姿を他国の兵に見せるのは得策ではないと考えられるわ」
「だが、あの部屋には“奴”が居なかったぞ？」
「偶然が重なりあわなければいいのだけれど……」

もしも今、二人が出会うと、自分達の計画に支障をきたすかもしれない……ラルゴとリグレットは頭の中でそう考えていた。
だが、その別アリエッタはケセドニアにいるイオンを想っていた。
今度はいつ会えるかと、導師の姿を見て意欲がわき始めていた。

――――――――――――――――――――

Ｓｉｄｅ：ルーク

「此方が簡易式ですが、私達の食堂です」
「ふ～ん……」

ルークはジェイドの副官マルコに連れられてタルタロス艦内を見学していた。だが、ルークはどこか満更としない様子である。

「やっぱりつまらないでしょうか？」
「まぁ、此処がどうだとか、これが何だとか言われてもすげぇのか良くわかんねーからな」
「先ほどまで案内した部屋では見所のある特徴などほとんど無いですからね。機関室へ行ければ音機関があるので話は別なのですが……なにぶん機密なものでして」
「あ～いや、いいや。音機関見てもさっぱりだろうし」

ガイなら喜ぶだろうけどな、とルークは呟く。

「じゃあ結局そこいらブラブラできるだけってか？　あーあ、しょーがねーな……」

ルークはがくりとうな垂れる。

「では、次は私達兵士が寝る部屋です」

そう言って、マルコが一室の扉を開けた。ルークたちが拘束されていたのとさして変わらない構造の部屋で、備え付けの二段ベッドがあり、中央には無骨なテーブルセットが置かれている。その向こうにマルクト兵士が一人立っていて、ドヤドヤと入ってきたルークたちに驚いたようにビクリと体を震わせた。途端に、構えていた彼の両手の間でボン、と何かが破裂し、もやもやと煙が上がる。

「トニーニ二等兵、またやったのか！？」

「す、すみません！」

慌てて素直に謝る若者に、「何してたんだ？」とルークは訊ねた。

「譜術士になりたくて譜術の練習をしていたんです。うちは譜術が盛んな国ですから、譜術の使えない軍人は肩身が狭くって……」

（そういえばティアもジェイドも、イオンもそれを使ってたよな）

「譜術ってどうやって使うんだ？　俺でも使えるのか？」

「音譜帯から音素を体内に取り込んで、互いの振動数をぶつけ合うことで特殊な力を発生させるんです」

トニーの説明を聞いて、ルークは不得要領な顔になる。知らない単語ばかりでちんぷんかんぷんだ。

「とても難しいんですよ。ジェイド大佐はこれを苦もなく使いこなすのですから、全く天才です……」

トニーは息をついて、再びブツブツと『譜』を唱え始めた。

「天才ねぇ……」

「ではルーク様、次は甲板へとご案内いたしましょう」

その場を離れて、ルークはマルコ副官と共に再び進み始める。そして階段を上り、甲板へと出た。そこには多くの兵士が居た。青い鎧を着たマルクト兵と、白銀の鎧を着たオラクル兵であった。

「あれ、鎧の違う奴らが居るぞ？」

「あれはオラクル騎士団の兵達です。導師イオンの捜索により態々ダアトから此処タルタロスにやって来た者達です」

「オラクル……それってティアと同じ所の……」

「次、来い！」

「宜しくお願いします！！」

ルークが考えに耽っている所、突如大きな声が響き渡る。二人は驚きながらも、その声の方へ視線を向けてみると、人だかりとなった場所が出来ていた。マルコは一番近くにいたマルクト兵に聞いてみる。

「お前達、何をやっている？」

「マルコ副官！　じつは、一部のマルクト兵がオラクル騎士団、六神将の一人、鮮血のアッシュと名高いアッシュ殿と剣の手合わせを願いたいと……」

「馬鹿者！　他国の兵とそんな勝手に剣を交えて良いと思っているのか！？」
「も、申し訳ありません！　しかし、その後が問題でした……もちろんアッシュ殿は一度断ったのですが、うちの者達が挑発的な発言をして……その……」
「何やってんだ……」

マルコは頭を抑え始める。そうしている間もアッシュは次々とマルクト兵を倒していく。

「『双牙斬』！」
「へっ……？」

その時、ルークはその言葉に驚いた。凄く聞きなれた言葉が出たからだ……

「目障りだ、『烈破掌』！」

一瞬光が発したと思った所、人だかりが崩れて一人のオラクル兵が吹き飛んできた。

「ぁ、がぁぁ……」
「ふん、こんなモノか。わざわざ8対1で勝負してやったというのになんて様だ」
「つ、強い！」
「これが、鮮血のアッシュ……」

その割れ目から一人の青年が出てくる。歳はルークとさほど変わらなそうに見え、黒い長髪を風になびかせ、威風堂々と佇む姿がそこに居た。

「アッシュ殿！　なにもここまでやらぬとも！？」
「そちらが大口を叩いたんだ。それに見合う分の授業料を渡してやったにすぎん」

アッシュは剣を鞘に収める。マルコからの苦情を気にしないかのようにそのまま事を進める。

「だが、勝手な事をしたのは此方も事実。それは謝罪する」
「それは、ですが……」

「おい、お前！！」

その時、突如ルークはアッシュに向かって大声を上げた。

―――――――――――――――――――――

Ｓｉｄｅ：アッシュ

少し、やり過ぎたか……いささか血が頭に上り過ぎたようだ。軽い挑発でここまでやるとは何か大人げねぇな。

「だが、勝手な事をしたのは此方も事実。それは謝罪する」
「それは、ですが……」

反省はしよう。これ以上は勝手な事はできねぇからな。

「おい、お前！！」

ん、この声は……って何いぃ！？

アッシュはその声の主を見て驚愕した。

赤く、金のグランデーションがかかった長髪、自分と同じ翡翠の目……自分の半身と言える存在がそこに居た。

待て、何で此処にレプリカが居る！？　確か報告によるとヴァンの妹によってマルクトに飛ばされたとは聞いたが、タルタロスに乗っているとは聞いてねぇぞ！！

「今の……今のはヴァン師匠の技だ！　どうしてそれをお前が使えるんだ！」

とにかく、こいつとは二つの意味で遭いたくは無かったのに！

くそ、どうにかしてこの場から離れんと！

「決まっている、同じ流派だからだ」

「まさか、お前も俺と同じようにヴァン先生から……」

「そうだ、俺はヴァンからこの剣を学んだ」

「……ッ！！」

ルークは推測が事実とわかり、そして顔を少しゆがめた。いうなれば嫉妬に近いのかもしれない。自分もヴァンから剣を学んでいたが、ヴァンには「私の弟子はお前だけだ」と言われたりして居た事もあって、外の世界を知らないルークはヴァンが他にも剣を教えていた人間が居るとは考えられなかったのだ。

「話はそれだけか。だったら俺は行かせてもらう」

「お、おい！　待ちやがれ！！」

ルークはアッシュの肩を慌てて掴み、歩みを止まらせる。

「なんだ……」

「お前、ヴァン先生とはどんな関係なんだ！」

「……上司と部下だ。それ以外の何者でもねぇ」

「……ッ！！」

自分の納得のいく答えがなかなか出ず、ルークはイライラしてくる。

「そんなはずねぇ！　ヴァン先生に剣を教われるってことはヴァン先生がお前を気に入ってるってことだ！！」

「そうかもな。だが、俺はあんな奴に気に入られるなどこっちからお断りだ！」

「なんだと！？」

ヴァンはルークがただ一人尊敬する人間だ。先ほどの言葉はまるでヴァンを蔑ろにしているような言葉だったことにルークは怒った。

「師匠の事を悪く言うんじゃねぇ！」

「ふん、ヴァンは剣の腕は一流だが、オラクル騎士団としては二流の奴だ」

「アッシュ、何をやっている！？」

その時、甲板の出入り口からリグレットが入って来ていた。大声を上げた後、リグレットはアッシュの傍に近寄った。

「閣下から無駄な行動は避けるよう言われている筈だ」
「……ちっ」

アッシュはリグレットから一睨みされ、仕方なくといった風にこの場へと離れようとした。それに続いてリグレットもこちらに一礼をしてその後を付いて行った。

「おい手前！！　待てっつってんだろうが！！」
「ルーク様！　お静まりください！！」
「あんの野郎ー！！　次遭ったらぜってー師匠馬鹿にした事後悔させてやる！！」

ルークは地団駄を踏み、歯ぎしりをしながら精一杯の呪詛を吐き続けるのであった……

「ふん、なかなか元気にやってるじゃねぇか」

アッシュは言葉の言い方はどこか侮蔑するような物ではあったが、何処か嬉しそうであった。

「あの“人形”との接触はお前自身も嫌っている筈だが……どういう風の吹きまわしだ？」
「あのレプリカから近付いてきたんだ。俺の意思なんざ関係ねぇよ」
「……そうか」

アッシュは周りにはレプリカを憎む様にヴァンに施されたとされているが、実際は違う。欺く為の演技にすぎない。

「シンクからの情報によれば向こうには三人集まっているらしい。私達はこれからカイツールに向かう事にする」
「アリエッタとラルゴはどうしてる」
「ラルゴはまだタルタロスの中に居る。だが、直ぐに出発する予定だ。アリエッタは私情により一足早くセントビナーへ向かったわ」
二人は用意されていたグリフォンの背に乗ろうとする。
「第三師団は私に続け！　目的はセントビナー！　遅れる事は許さない！！」
「「はっ！！」」
周りに居たオラクルの兵士達は敬礼をし、飛び立つ二匹のグリフォンを見送った。
空中に移動した為に気圧や気温が変化し、一時体を強張らせるが、徐々に馴らしてから方の力を抜いて体をグリフォンの背に任せる。
「そういえば聞いていいかしら。アッシュ」
「なんだ？」
「貴方の元々の髪は赤色でしょ？　だから『鮮血』のアッシュと二つ名を与えられているのかと考えたのだけど……違ったの。貴方は髪の色を戻した事は一度たりとも無い筈なのに……どうして『鮮血』だなんて赤々しい二つ名になっているのかしら？」
「……別に話してもいいが、誰にも言うんじゃねぇぞ」
アッシュは失笑しながら言葉を紡ぎ始めた。
「三ヵ月前にな、その日はすごい大雨だった。任務は大量に繁殖した魔物の駆除で、任務を進めていく内にとある不具合が起きた」

「不具合？」

「俺の染色は譜業を使った特殊な音素を纏って色を付ける物だ。だが、その日の大雨でその譜業がイかれちまって髪の色が元に戻っちまったんだ」

「まさか、それを特務の者達に見られたのか？」

「おそらく……その時は俺が一人で大量に魔物を駆除した後だったからそれを返り血だと勘違いした奴が始まりだ……」

「そうか……案外あっけない物だな」

「だが……」

「だが……？」

アッシュは何故が汗を顔に滲みだし始めた。

「その事がハーミットにバレて『なにやってんだこのオカメインコ！！』って罵られてうわやめろやめろ俺が謝るから俺の手に負えるモノではないだから引っ込めろハーミットうわやめろなにをする！！」

辛い過去を思い出したのか、その場にうずくまってガタガタブルブル震えだすアッシュ。

彼が前回の任務で髪の色がバレて、ハーミットにされた事で何があったのか。

敢えてリグレットは聞かない事にした。

――――――――――――――――――――――――

「そろそろ時間だな……」

シンクは予定の時間まであと少しと言う所になった所で再びセントビナーの外に出ていた。先ほど先にアリエッタが到着し、今では

ハーミットの所で一緒に休憩している。

――ギャアアアアア――――――!!!!!!――――

「……まだやってんのかよ」

シンクはため息をつきながら再び向こうへと視線を向きなおした。

――死ぬ死ぬ死ぬ!!　ハーミットそこは構造的に曲がりませんってば!!――――

――こんなのまだ軽い方だ。黙っていろ――

――黙っていられる……ぎぇえええええ!!――――

先ほどからハーミットがディストにやっているのは整体である。曲がった骨を矯正している所である。

「あれは整体か……それとも拷問なのか？」

シンクはふとした疑問を洩らしてみた。だが、誰もその答えを言う者はいなかった。

「……っと、そんなこと言っている間に……来たか」

空の向こう側からグリフォンの群れがやって来る。ようやく間に合ったという事だ。

「これ以上何も問題起きなきゃいいんだけどね……」

参謀長シンク謡士

正直、これ以上仕事を増やさないで欲しいと願うこの頃なのであった……

だが、その願いが叶うかは……可能性は高くないに違いない……

なんせ“あの”六神将メンバーなのだから……

原作編　第六話（後書き）

前回の絵の評価が酷い。なんか口の部分変じゃないかなと感じていたが、まぁいいかと思って出したのが仇になった。　ｏｒｚ

原作編　第七話（前書き）

明けましておめでとうございます。今年も今後ともよろしくお願いいたします。てなわけで、今年の初投稿です。

「へー、此処がセントビナーか」

ルーク達はタルタロスから出て、目の前にある街の門に立っていた。

「では、私はマグガヴァン将軍への会合の手続きを取りに行きますので、皆さんはマルコ副官の後をついてしばらく自由にしていてください」

「後はお任せを、カーティス大佐」

ジェイドは後を部下に一先ず任せて、自分が今やる事をしに行った。

ルークは街の中を見回した。街を見るのは二度目だが、エンゲーブとはかなり違う。建物は石造りだし、道は全て石畳で覆われている。あちこちに花壇があるのは屋敷の中庭を思い出させたが、なによりも人がやたらと多かった。

こんなに沢山の人間を見たのは初めてかもしれない。建物の立ち並ぶ道はどこまでも続いていて、視線で辿っていくと、ずっと向こうにこんもりとした緑が頭を突き出しているのが見えた。

「なんだあれ……でっかい木だなー」

「あれはソイルの木ですよ。樹齢はなんと二千年とも言われていて街の象徴にもなっているんです」

思わず落したルークの呟きにイオンが答えた。

「二千年!?　まじかよ」

「それに、あの木には不思議な現象が起きる事でも有名なんです。なんでも、随分前にこの木が枯れかけた時、他の草花まで全滅しかかったこともあったそうなんです」
「はい、ですからマルクトではソイルの木と街の草花の因果関係も研究対象となっておられるんです」
イオンの説明にマルコは補足的に付け加える。
「ふーん。そんなことわざわざ調べてるんだな。物好きっつーか……」
「そうは言いますけど。この街で育つ草花は他の地域では育たないんです。そうなるとやっぱり不思議だと思いませんか？」
そうイオンが言うと、ティアが考え深げに言った。
「それならこの街は、ソイルの木のおかげで発展しているのかもしれないわね」
「なんだそれ」
首を捻るルークに、再びイオンが教える。
「この街は今は城砦都市としても知られていますが、元々は薬品の製造で有名なんです。グミやボトルも、この街の花から作られています」
「へえ……」
あまりピンとこずに曖昧に頷いていると、足元でミュウが言った。
「あの大きな木、ボクたちの家と同じ匂いがするですの」
「はぁ？　チーグルんトコの木とあの木が同じ種類だっつーのかよ」

気になって問いかけるも、ミュウは誇らしげにその小さい身体で胸を張って、ルークの問い掛けとは的外れの答えを返す。

「でも、この木よりミュウのお家の方が大きいですの～」

「確かに大きかったわね」

「そうですの、ミュウのお家の方が大きいから勝ちですの～！」

「そうね」

微笑ましそうにミュウに答えるティアを余所に、俺はぼそりとつぶやく。

「勝ち負けの問題か……？」

しかし、そんな素朴な疑問の言葉は誰も拾う事は無かった……

「ちなみに、此処の薬品はダアトでも重要視されていて依頼が多く来るんです」

「どうしてですか？」

ティアがマルコに尋ねる。

「あの医術の天才として有名なハーミット師団長直々の依頼による物だからです」

「やっぱそうだよねー。アニスちゃん最初の事で大体予想付いてました！！」

「先生、ここで薬品を補給してたのね」

ティアとアニスは納得した様子でお互いに頷いた。

「なぁ、ハーミットって前にあったあのおっさんだよな？　あのおっさんって一体何者なんだ？」
「えー！？　ハーミット先生の事知らないんですかルーク様！？」
アニスは意外というような顔でルークの事を見た。
「彼は大詠士モースの管轄である六神将とは別として行動する治癒師団の長です。そして、ダアトが誇る医学者でもあるんですよ」
「今まで不治とされた病気の治療法を発見した回数は数え切れないほど！　オールドラントで初めて外科手術という治療法を定立させた人なんですよぅ！」
イオンとアニスは彼の凄さをルークに説いた。
「ふーん、そんなにすごいのか？」
だが、世間を知らないルークにとってそれをどれくらい凄い物か理解できなかった。
「忘れたの？　大佐が言ったじゃない。貴方のお母様のご病気を治された人でもあるのよ」
「あっ……！」
その一言でルークは漸く考えが付いた。
「ってことは……結構すげーじゃん！！　あのおっさん！！」
「そう言う事よ」
ティアは少しやれやれといった表情でルークを見ていた。
ちょうどその時、ジェイドが此方に近付いて来ていた。マルコは

敬礼のポーズをとって彼を迎えた。

「お待たせしました。少々慌ただしい様子となっているそうですが、一先ず行きましょう」

――――――――――――――――――――

マルクト帝国セントビナー駐留軍基地は、花咲き乱れる美しい庭園を持っていた。元々は個人の邸宅だったものを軍に供出したのだという。この基地の責任者、グレン・マクガヴァン将軍こそが、邸宅の本来の持ち主だった。――正確には、彼の父のマクガヴァン元元帥がそうしたのだが。

「ですから、父上。オラクル騎士団は建前上、預言士なのです。彼らの行動を制限するには皇帝陛下の勅命が……」

「黙らんか！　奴らの介入によってホド戦争がどれほど悲惨な戦争になったか、お前も知っとろうが！」

会議室を兼ねた執務室に通されると、今しも、グレン・マクガヴァンが父である老マクガヴァンと舌峰をぶつけ合っているところだった。

「お取り込み中、失礼します」

ジェイドが声を掛けると、父子はハッと息を呑んだ。その後の表情はそれぞれ違っていたが。

「死霊使いジェイド……」

グレンは僅かに眉根を寄せる。老マクガヴァンは「おお！　ジェ

イド坊やか！」と顔を明るくした。

「ご無沙汰しています。マクガヴァン元帥」

「わしはもう退役したんじゃ。そんな風に呼んでくれるな。お前さんこそ、そろそろ昇進を受け入れたらどうかね。本当ならその若さで大将にまでなっているだろうに」

「どうでしょう。大佐で充分身に余ると思っていますが」

「それにしても……」

老マグガヴァンはジェイドの後ろに居たメンバーに視線を向ける。

「ジェイド坊やの連れにしては珍しい集まりじゃのう」

そういい、少し不思議そうな顔をした。

「そうだ。お前さんは陛下の幼なじみだったな。陛下に頼んでオラクル騎士団を何とかしてくれんか？」

「彼らの目的は私達です。私たちが街を離れれば彼らも立ち去るでしょう」

「どういうことじゃ？」

「陛下の勅命ですので、詳しいことはお話できないのですよ。すみません」

オホン、と咳払いが聞こえた。グレンがムッとした顔でジェイドを見ている。

「カーティス大佐。御用向きは？」

この基地の責任者は彼だった。だが、ジェイドはこの部屋に入って以来、グレンに話しかけるどころか挨拶すらしていない。

「ああ、失礼。今回は此方の馬車を何両か貸していただきたいんです」
「馬車を……タルタロスを持っているのになぜ必要なのだ？」
マグガヴァン将軍は移動手段を持っている筈のジェイドの申し出に対し、疑問に思った。
「これから我々はカイツールへ向かうつもりです。そのため、タルタロスなどという大型戦艦でキムラスカとの国境に向かうなんて真似はしませんので」
「カイツールへ……それは陛下の勅命と関係があるという事なのか？」
「ご想像にお任せ致します」
ジェイドは笑顔でマグガヴァン将軍にそう返した。その間、嫌そうな顔をしてマグガヴァン将軍は一旦言葉を止める。
「カイツールへ向かうとなると、フーブラス橋を渡り、デオ峠を超える必要があるの。じゃがしかし……」
「何か問題でも？」
「うむ、実はの……何日か前の大水でやられたそうなんじゃ。となると馬車での通過は無理かもしれん」
「橋が落ちたのは厄介だわ……どうしましょうか。大佐」
「そうですね。橋の辺りは流れが急です。確か、少し迂回した所に浅瀬があった筈ですが……」
ジェイドは思考に深く入り始める。その時、この部屋に一人のマルクト兵が入って来た。

「報告します。オラクル騎士団の者達がこれから帰還するとの事です」
「やっと奴ら側の用は済んだという事かの。御苦労」
「はっ！！」
そう言って、マルクト兵はこの部屋から出ようとした。
「ちょっと待ちなさい」
だが、その所をジェイドによって呼び止められた。
―――――――――――――――――――――
その頃、セントビナーの街の外では六神将が集合していた。
「導師イオンがセントビナーに着いた事は確認したか？」
そう訊ねたのは、金髪を結い上げた黒衣の女――リグレットだった。
「はい、無事一行全員こちらに訪れています」
兵が答える。
「あの人達、嫌いです。アリエッタのママ……殺そうとした……」
たどたどしく呟くアリエッタの前で、シンクが鷹揚に兵に訊ねた。
「ヴァン謡将から何か連絡は？」
「現在、キムラスカからの要望より和平一団をカイツールにて迎え

るそうです」
「ヴァン謡将とは我々も一度キムラスカにて落ち合う予定だ。俺はいち早く先にカイツールで待ち受ける事にする」
「カイツールでどう待ち受けるか……ね。一度ダアトに戻って検討しましょう」

リグレットが言うと、ラルゴが兵に向かって命じた。

「伝令だ！　第一師団！　撤退！」
「了解！」

門を挟んで周辺に散らばっていた兵たちが集まり、素早く街道を去っていく。

「アッシュとディストはどうしてる？」
「ディストは負傷中により来れない。アッシュはハーミットに報告をしてるよ」
「ダアトにいる詠士達の様子は？」
「今の所、怪しい様子はみられてないそうだ」

ふと、声をした方へ彼らは向けてみると蒼髪の男――ハーミットがそこに居た。

「とにかく、これまでに穏便に済ませる余裕が出来てきて安心した」
「一時はどうなるかと思ったけど、流れはだいぶ安定してきたからね」
「あと一歩ってとこだな。導師イオンがキムラスカに辿りつくには」

シンクとハーミットは互いの頑張りを確認し合うように言葉を交

わした。

「そういえば、アッシュはどうしている？」
「ヴァンから呼び出しが来たから先にグリフォンでカイツールへ向かったよ」
「そうか、なら私達も本来の配置にそろそろ戻る事にするわ」

彼らのこれからの予定が組まれていく。すると、そこへ一人のオラクル兵がやって来る。

「失礼します。今お時間はよろしいでしょうか、ハーミット響士」
「どうした！」
「マルクト軍所属ジェイド・カーティス大佐が貴方と面会したいそうなのですが……」
「何……？」

ハーミットはいきなりの事に眉を顰める。

「死霊使いが会いたいって、アンタ何かやったの？」
「いや、別に何も」

本当に知らないとジェスチャーも加えて表す。

「ま、とりあえずは試しに会って来るとするさ」
「……アリエッタも行く、です」
「なんでそこでアリエッタも着いていく必要があるのさ？」

シンクはアリエッタの唐突な意見に疑問を持った。

「アリエッタ、あの人達にママに謝って欲しい、です。だから……

お願いしにいくの」
「そんなの別に後でもいいでしょ。お前はまず任務に忠実になりなよ」

シンクは少し呆れながらそう言う。

「……それいいかもな」
「……はっ？」
「ひょっとすると、何かしら要件とか出してきそうだからなあの男は。だからその交換条件としてでやらせてみるとするか」
「ちょっちょっちょっと！！　んな事で仮にも師団長を抜こうとするな！！」
「なんだよシンク、わざわざ軍事に関係ない俺が出向いてやってきたんだから少しぐらいいいだろ」
「それとこれとは話が違うよ！！」

シンクは若干怒り気味になりながら叫んだ。

「よっしゃ！　アリエッタ、誠意を持った謝り方と言えば？」
「えーと……地べたに這いつくばって額をグリグリしながら土下座？」
「なんか違う！　合ってるけど何か違うよ！！」
「おしいな。本気の土下座は焼いた鉄板の上で１０秒額を付けての土下座だ」
「怖ッ！？　何！？　アンタまさか誰かにやらせた事あんの！？」
「……ないぞ」
「その間はなんだその間は！！　すんごく怪しいんですけど！？」

もはや突っ込みきれないレベルにまで会話が発展して行った。

「あの……面会の件は？」
「あーすまん、直ぐに向かう」

――――――――――――――――――――

「大佐ーどうして先生に会おうと決めたんですかぁー？」
「彼に関しての情報によると、彼はあの妖獣のアリエッタの義父であるそうなんです。ですから、彼を通してアリエッタに頼んでダアトで移動手段として使われている魔物を貸してもらおうと思いましてね……」
「ですがジェイド、ハーミットはそういった交渉には気難しい人間として有名です。許可していただけるか分かりませんよ？」

基地の一室にてルーク達は彼を待ち続けていた。

ガチャッ……

すると、突如ドアが開き最初にオラクル兵が入って来た後、その後ろからハーミット、アリエッタが現れる。

「お待たせしました。では、話を聞かせていただけましょう」

そして、ジェイドは事の事情をハーミットに話していった。
話を進める度、ハーミットはそれに相槌を打ったり、少々の質問をしたりするだけだった。話が終わると、ハーミットは結論を言う。

「……話はわかりました。ですが、条件があります」
「どういったもので？」
「覚えておりますかカーティス大佐。貴方はチーグルの森でライガクイーンを駆除するべく殺そうとしましたね」

「それはどういった関係が」
「ライガクイーンはアリエッタにとっての母親なんですよ。そのままの意味で……ですが」
「「！？」」
一同は驚愕した。ジェイドはその中、静かにしていたアリエッタをよく見てみる。見ると、アリエッタは何処か睨むような目をしており、なるほどとジェイドは納得していた。
「どういう事だ？」
「彼女はホド戦争で両親を失って、魔物に育てられたんです。魔物と会話できる力を買われてオラクル騎士団に入隊しました」
「じゃあ、俺達が殺そうとしたライガが……」
「それがアリエッタのママ……！　貴方達のこと、アリエッタはゆるさない、です！！」
より一層強くぬいぐるみを抱きしめながらそう言った。
「アリエッタ、落ち着きなさい」
「……でも」
前にのめり出ようとしたアリエッタをハーミットは制止した。
「貴方方が言うに、魔物を借りるには書類上にしてもアリエッタの許可が必要となりますが……本人が不本意である為にこの件はお受けできない……と言いたいところですが」
「それがその条件と言う訳ですか」
「その通りです。此方の条件は……アリエッタに誠意を以ての謝罪

をしてもらいたい。それで手を打たせていただきましょう」

たかが謝罪と思っているのならば直ぐにこの件は無しにするつもりでハーミットは答えた。その言葉に、ジェイドは「そう言う事でしたら……」と言いかけた時であった。後ろからイオンが前にやって来たのである。

「イオン様!?」

「……ライガの件は全て僕の責任です。僕の勝手な判断により、ライガクイーンを殺しかねない羽目にしたも同然です」

「だけど、イオン様は何もしてないじゃないですか!?」

「でも、もしも僕がチーグルの森へ行かなければこのような事態にはならなかったのは事実です」

アニスに自分の意見を述べた後、イオンはアリエッタに向き合った。

「イオン……様」

「僕の……いえ、僕達のした事は貴方にとってとても許せる物ではない事は十分に承知の上です。アリエッタ……」

そして、イオンは深々と頭を下げたのだ。

「申し訳ありませんでした」

そんな状況に誰もが驚愕した。なにせ、ダアトの最高責任者が直々に頭を下げるという本来なら会ってはならない事例が生じたからであった。

「あ、頭を上げてくださいイオン様！　アリエッタ、イオン様には

怒ってない……です。アリエッタが怒っているのは……」

そういって、横目でアリエッタはジェイドを見る。

「……私ですか」

「まぁ確かにそうですね。カーティス大佐が結論的にはとどめをさす手前の事をしましたから」

ハーミットは静かにそう呟く。

「……わかりました」

ジェイドはそう言うと、膝を床に付けて独特なポーズを取る。

「妖獣のアリエッタ殿のご家族に手を出し、誠に失礼いたしました。もしも許しを乞えれるのならば、どうか貴方のお力をお貸しいただけませんか？」

「……」

アリエッタは暫く黙りだす。そして、少し考えた後に出入り口の方へと向かった。

「アリエッタのお友達、貸してやる……です」

「本当ですか！？」

イオンはアリエッタの答えに満面の笑みを浮かべながらそう言った。

「でも、今回だけ……です」

そして、アリエッタはそのまま外へ出て行った。

――――――――――――――――――――

交渉が成立した後、ルーク達は最後の準備に取り掛かっていた。
必要な物を補給したりと色々とする。
その時、主なグループとしてルーク、ティア、ジェイド　ハーミット……イオン、アニス、マルコ、アリエッタと別れてだ。

「先生、一つ聞いていいですか」
「なんだい、ティアちゃん？」

道具屋にいた所、ティアが聞いてくる。

「秘密裏に先生はマルクト出身と聞きました。ですけど、なぜダアトへ亡命したんですか？」
「あぁ……ちょっと、それは……まぁ……」

何やら不味い感じにして答えるのに少々渋る。

「んっ……亡命って何の事だ？」
「亡命とは、国からの弾圧や圧迫から逃れるために他国へ庇護を求める……つまり、私はこの国の人間として暮らしたくないという意味としてやる逃亡行為のことですよ」

ルークは亡命の意味をジェイドに尋ね、それを分かりやすく説明してやる。

「まぁ、彼の場合は今では罪の判定が曖昧な為に保留となっている状態なんですがね」

「罪……大佐、先生はいったい何をしたんですか？」
「カーティス大佐……すまないがその事には「国家反逆罪です♪」ってうぉい！！」

ハーミットの制止空しくジェイドは喋り出した。

「嘗て彼はカール陛下……まぁ前皇帝といいますか。その御方の勅命を蔑ろにして宮廷で直接拒否したんです。ですが、一番の問題は」

「カーティス大佐！！！！！」

ハーミットは少し殺気を込めるような感じで再び制止を掛ける。

「おや、何か気になる事でも？」
「いえいえ、それ以上話すと、そちら側の機密情報にも触れるのでは？」
「……！？　……失礼」

少しからかう感じで話していたが、ハーミットのオウム返しな意見に自分が失態を仕掛ける事に気付き、口を留まらせる。

「とにかく、人には知られたくない過去が一つや二つあるって事ですよ。すまないけどティアちゃん。この話は無しにしといてくれないかい？」
「……えぇ、わかりました」

ハーミットの気持ちをくみ取って、ティアはこれ以上聞くのは止めておく事にした。

「ちょっとカーティス大佐、こちらへ……」

「……いいですよ」

この事に関して少し決着を付ける為、ハーミットとジェイドは二人から離れて二人だけで話す事にする。

「少なくとも、ホドやフェレス島に関しての事は話さないで頂きたい。それだけは約束してもらいたい」
「何故知られたくないと思うのですか？」
「私もそうだが、“彼女”にはこの真実はまだ早すぎるからです」
「……そう言う事ですか」

ジェイドはハーミットが言いたい事をなんとなく察した。

「これは個人的な質問ですが、良いですか？」
「……必要範囲内までならば」
「なぜ、“あの”勅命を断ったのですか？　貴方の技術の中には“例のアレ”を可能に出来た物がいくつかあった筈です。ですが、貴方は選ばなかった……それはどうしてですか？」
「野暮な事を聞くな。カーティス大佐……」

ハーミットは一息ついてから、こう言った。

「私の仕事は人間を死なせなくする事じゃない。人間を『治す』事が私の仕事だからだ」

「……どちらも同じだと私は考えられますが」
「そうでもない。貴方もこの言葉に意味が分かる日が来るかもしれませんよ？」

そして、ハーミットはこの話は終わりだと言わんばかりに離れよ

うとした。すると、その後ろからジェイドがこう言う。

「ジェイドと呼んでください」
「はっ……？」
「私のことはジェイドと呼んで下さい。ファミリーネームの方には、あまり馴染みがないものですから」
「……検討しておきましょう」

次の舞台はカイツール……そこで彼らを待ちうける物は一体どのような運命か……

原作編　第七話（後書き）

まだ作品は続きますが、他の長編小説を書いてみようかどうかこの頃考え中です。

原作編　第八話（前書き）

親せき回り→大学レポート地獄→インフルエンザ→試験期間……
地獄を見ました……遅くなってすみません。

「た、たっけぇ――――！！！」
「しっかり掴まってルーク、もしも落ちたら助けられないわよ？」
「ぅ……おう」

ルーク達はグリフォン達に乗って上空を移動していた。その高度は５０ｍと半ば低空でなるべく風の影響を与えないようにする為だ。

「この様子なら、一時間も経たないうちにカイツールへ辿りつけますね」
「空の旅ってなんかアニスちゃん感激ですぅ～♪」
「こんな体験、僕には初めてです」

ダアト以外では陸上用の魔物を扱う事はあるが、空を飛ぶ魔物を扱う事は全くと言っていいほどない。その類の魔物の性質による為だとか何か言われているが、一番の原因は振り落とされたらかなり危険な為だ。魔物の心や言葉が分かるアリエッタだからこそ扱える移動手段である。
導師イオンやアニスも役職柄でこのような移動をする事が無かったので今回が初めてである。

「今、フ―ブラス川の上空です。一先ずそこで休憩する事にしましょう」

アリエッタと共にフレスベルグに乗っていたハーミットは前方からそう言ってくる。その言葉に反応して和平一団の先導であるジェイドに了解を取ってから彼らは徐々に高度を下げて行く。
そして、近くにあった広めな高丘の場所へと降り立った。

「少し遅めですが、食事にするとしましょう」
「もー、アニスちゃんお腹ぺこぺこですよぅ～♪」
「ですが大佐……」
張り切ってる所を申し訳なさそうにティアが聞いてきた。それにジェイドは「なんです？」と尋ねる。
「誰が今回食事を作るんですか？」
「「あ……」」
何処となく冷たい風が吹いて行った……
「お、俺はぜってー作んねぇかんな！　料理なんかしたことねぇんだ」
「あの、私もどちらかと言うと得意な方では」
「私は一応作れますが、面倒くさいですね♪」
「僕も……残念ながら……」
「イオン様は別に気にしなくていいですよぅ！　それじゃあ……」
――カタンカタンッ――
「あれ、そう言えば先生とアリエッタは？」
「何か音がしますが、なんでしょう……グリフォン達が集まってて隠れて良く見えません」
――ジュウゥゥゥ――
「ん、なんか良い匂いして来たぞ！？」

「ひょっとして……」

そうティアが何か言おうとする前に、グリフォンの群れの中心から勢い良く何かが飛んで行った。その次の瞬間、グリフォン達は一斉に飛び上がり、それ目掛けて飛んでいく。

「もう一回、です」

「そらきた！」

更にもう一度、手に持っていたフライパンを大きく上へと振ると、再度飛んできた物を上手く嘴で捕えて美味しそうに啄み始める。

「何をしてらっしゃるんですか」

「ん？　餌やりだが」

ジェイドが近付いて良く見てみると、彼の手にはウィンナーの入ったフライパンが握られていた。何時の間にと言いたい位の手際のよさである。

「皆頑張ったからご褒美、です」

「てな訳だ。本来なら休ませる日程だったが無理をして飛ばせたからな。奮発でもしてやらなきゃこいつらも参るって訳だ」

「は、はぁ……」

ダアトでは一体どのような魔物の扱い方をしてるのか少し疑問に思えたジェイドであった。

バサバサバサッ――――！！！

「や、止めろ―！！　放してくれー！！　あぁいや放すな―！！」

そんな時、何処からか誰かの叫び声が聞こえてきた。声の発信源を全員で探ってみると、一匹のグリフォンが誰かを脚で掴みながら頭を突き続けていた。

「おや、この川を渡ろうとする人間が居たのか。おーい！　そいつは餌じゃないから喰うんじゃないぞー！？」

『クァ――――！！！』

とにかく、誤って襲ってしまった人間を助けるべくその場へと急ごうとハーミットは準備し始めたが、ルークがふとした事に気付いた。

「ん……？　あの姿、どっかで見た事があんだよな」

「抜ける抜ける！！　ハゲになるから！！　ファブレ公爵の生え際みたいに俺はなりたくない！！」

「ブブゥゥゥ――――！！！！！」

ルークは突如噴き出した。そんな悪口を言う人間を七年の内で一人しか思いつかなかったからだ。

「ガ……ガイィィィィ――――――――！！！！！」

「知り合いなの？」

「アイツ、家の使用人のガイだよ！！　何だってこんな所に居んだ！？」

「と、とにかく早く彼を助けましょう！！　これ以上は危険です！」

「あっ！　降りて来た」

しばらくすると、グリフォンはガイを未だ掴みながら翼を羽ばた

かせてゆっくりと降下してきたのであった。改めてガイの様子を見てみると、頭から少々血を流していてグリフォンの唾液でベタベタとなっていた。

「どうしてこの人襲った、ですか？」

『クァ――――！！！』

「……どうやらこの人の頭の上にウィンナーが落っこちたからそれを拾おうとしただけだって」

「あの時か……まぁ、すまんかった」

「うぅ……（泣）」

ガイ、本名は３Ｇと訳せてしまうほど単純で屋敷で共に働く姉によってほぼ毎日扱かれる日々を過ごす何かと残念な使用人であった。

（ガイという言葉の使い方：例）

き●ガイ、疎ガイ、被ガイ、人ガイ、災ガイ、ｅｔｃ

「ちょっとこら、メタ的な発言は控えろって！」

すんませんでした……

――――――――――――――――――――――――――――――

「いやー、フ―ブラス川を態々歩いていたらこんな目に遭うとはな……世の中分からないもんだぜ」

「よぉガイ、久しぶりだな！」

「やー、捜したぜぇ。こんな所にいやがるとはなー」

懐かしい笑顔だ。見飽きていたはずのそれを見て、ルークは久し

ぶりに顔を明るく綻ばせた。屋敷を出て以来ずっと腹の底にあった重い石が消えている。目の奥がつんと熱くなって、ルークは慌てて瞼を伏せた。まだ十日ほども屋敷を離れていないのに、こんなに嬉しくなるなんてカッコ悪過ぎる。

「なんだか大変なことになってたみたいだな。ルーク」
「……ああ。ったく、屋敷を出てからロクな事がねーぜ」
「はっはっは。屋敷を出てから大冒険！　ってか？」
「あのな。笑い事じゃねーっての……」

実際、それどころではなかった。泥棒扱いされて蹴り飛ばされるわ、変なチーグルを押し付けられるわ、眼鏡野郎には嫌味を言われるわで……。

拗ねた顔で睨み付けると、こっちの気も知らないガイは可笑しそうに笑う。

「ははは、まぁまぁ。事件はだいたい解決したんだろ？　じきにバチカルに帰れるさ」
「だと良いんだけどなー」

お互い今後の目標について二人だけで肯定し合う。

「ところで、あなたは……」

イオンが、ガイに物問いたげな視線を向ける。

「そういや自己紹介がまだだっけな。俺はガイ。ファブレ公爵のところでお世話になってる使用人だ」

立てた親指で自らを指してそう言うと、ガイは笑顔でイオン、ジ

エイド、アニスそしてティアと握手を交わした。

「ファブレ公爵の使用人ならキムラスカ人ですね。ルークを捜しに来たのですか？」

「ああ。旦那様から命じられてな。マルクトの領土に消えてったのは分かってたから。俺は陸伝いにケセドニアから、グランツ閣下は海を渡ってカイツールから捜索してたんだ」

チラリと現れた名前に敏感に反応したのは、ルークとティアだった。

「ヴァン師匠も捜してくれてるのか！」

ルークは顔を明るく輝かせている。

「……兄さん」

ティアの方は苦しげに呟いていた。聞きとがめたガイが怪訝に眉根を寄せる。

「兄さん？　兄さんって……」

「お～い、飯が出来たぞ」

ガイがその呟きの真髄を探ろうとした所、ハーミットがそう言った。実は、先ほどから彼は食事の用意をしていたのであった。

「お、やっとできたか！　早く食おうぜ！」

「そうですね、一先ず食事を優先する事にしましょう」

ルークはもちろん、ジェイドもそう言うので全員食事にすること

が決まった。

「……ごめんなさい、先ほどの事はいつかにしてちょうだい」
「……いいだろう」

時と場合を考えた結果、今回は止めることにした。

――――――――――――――――――――

「うんめえぇぇぇ――――!?」
「おや、これはなかなか……」
「やっぱり何回食べても美味しいわ。先生の料理って……」
「ご主人さま！　ミュウもこんなご飯食べた事がないですの!!」

評価は上々ならしい。精神約九十年の経験は伊達ではなく、彼の料理の腕まで上達させていた。

「もー、アリエッタってばずるい！　大抵は先生の手料理食べられるんでしょ？」
「アリエッタ、それが一番の楽しみ、です」

ちなみに、今回のメニューはチャーハンである。上手く卵を絡めさせていて甘みが脂と合って絶妙のうまさが香ってくるのだ。

「ところで、この肉は何を使っているんですか？　アクが無くて鶏肉のようですが何処か違うような……」

「蛇だ」

「ゴフッ――――!!!」

「ブッ――――！！！」
「うっ……」
「みゅっ！？」

いきなりのトンデモ発言に全員が噴き出した。しかし、アリエッタだけが黙々と食べ続けられている。これこそが野生少女の力だというのだろうか？

「冗談だ。本当はそこいらにいた野兎の肉だ。だから安心しろ」
「う……ウサギ……」

安心しろと言われてもティアにとってはあの可愛いウサギが今日の献立に入ったと聞いて何処かショックであった。

「……手を付けた以上ちゃんと食べなさいティアちゃん」
「え……あの……」

その表情を読み取ってかハーミットは釘を指すようにそう言った。

「生き物は生きる為に常に何かを犠牲にする。これは摂理でもあり、避けられない事だ。それなのに、折角死んだこの兎の命を無駄にするつもりかい？」
「……ごめんなさい」

ティアは先ほどまで手を止めようと考えた自分を恥じながら謝る。

「そう謝る事は無いさ。そんな思いも大切になることだってある」

そう言って、ハーミットは口にチャーハンを運び続ける。

「哲学者みたいですね。ハーミットの考えは」
「いえ、そのような大層な物ではありませんよ」
イオンに関心されながらも謙遜の言葉を返す。
「……ちょっといいか？」
「なんだ？」
そんな時、ガイが突如話しかけてくる。何かと思いながら返事を返してやる。
「アンタ……いや、ひょっとすると俺は……前に会った事がないか？」
「どうしてそんなことを？」
「昔、何処かで見た事がある気がしてな……人違いじゃなきゃいいんだが」
そう言うガイの顔をよく見てみる。正確にはその瞳だ。その奥には何か強い物を感じられる。もしや、“あの時”の事を覚えているのか？
可能性は高いな。嘗て、この男の姉にも自分の事を確認して覚えていた。となると、自分の事をこの男にも話している可能性があるはずだ。
だが、今は肯定しておく訳にはいかない。どちらにせよ……俺がこいつに会ったという実証はこいつの正体に繋がる可能性が大きい。しかも、この場にはマルクト軍所属の大佐が居ることだってある。
「俺は記憶にないな。お前のような人間には会った事が無い」
「……そうか」

これ以上はガイは何も聞かなかった。だが、最後まで疑う素振りは止めてはいなかった。

「さて、ゲリュオンはどう回収しておくかな。また戻るとするか」
「えっ、一緒に着いて行ってはくださらないんですか？」
「本来、私が譜業バイクで進む筈だった道は此処じゃないから此処まで走らせる訳にはいかなかったんです。ですが、今回は場合の為に一旦置いてグリフォンで道案内をする役割が目的でしたからね……此処からはアリエッタに任せる事にします」
「えぇー、また先生とお別れですかー？」
「仕方がないんだよ。俺も本来の動きに戻らないと……」

――ゴゴゴゴゴゴゴ――

「うぉわ！　じ……地震か！？」
「気を付けて！！　かなり大きいわ！？」

唐突に大地が鳴動した。下の大地に亀裂が走り、紫色の蒸気のようなものが噴き上げる。

「おい、この蒸気みたいなのは……」

周囲を見回すガイの声に、ティアが鋭い声で答えた。

「障気だわ……！」
「いけません！　障気は猛毒です！」

イオンが叫ぶ。　かつてユリアが地の底に封じたとされる障気。
ルークが焦った声をあげる。

「吸い込んだら死んじまうのか！？」
「長時間、大量に吸い込まなければ大丈夫。とにかくここから離れないと」
「早くグリフォンへ！！」

それぞれグリフォンに乗ってこの場から離れる。幸い、高丘に休憩していたから逃げ場を失う事は無かった。

「危なかった。もしも河を渡って横断しようとして居たら……」
「瘴気に呑まれていたかもしれませんね」

自分達のもう一つの可能性を想像してみると、ぞっとする。

「しかし、瘴気が噴き出してくるとは……何か此処の大地に異常が出ているのかもしれませんね」
「こりゃあ暫くは此処に近付く事はできなくなったな」

ハーミットは下の様子をしばらく眺めながらグリフォンに跨り続ける。そして、唐突に後ろを向いてルーク達に言う。

「それでは、私の役目は此処までです。後はアリエッタに着いて行ってください」
「ご苦労様です。貴方の御心に感謝します」
「強引の間違いじゃないのか？」
「いえいえ、そんな事は一切♪」

ジェイドとハーミットは互いに刺を含めたような言い方をして会話をし合う。

「なんかあの二人仲良くね？」

「さぁ、どっちかというと違うんじゃないのか？」

ルークとガイはひそひそとこの状況をお互いで分析し合っていた。

「では、これで」

そう言って、グリフォンは翼を羽ばたかせて方向転換をしてルーク達の進行方向と反対の道を戻って行くのであった。

―――――――――――――――――――――――――

＞セントビナー＜

「あの方はもう行ってしまわれたのか！？」

「いえ、ハーミット響士殿は自身の取り物を回収するべくもう一度戻って来るといわれていますが……」

「私は彼に会う為態々グランコクマからやって来たのだぞ！　無駄足だなんて真似にしてたまるものか！！」

「私にそう言われましても……」

老齢の男性がマルクト軍の一人に突っかかるようにして叫び続ける。兵士は困ったような顔をしてどうにか彼の対応をしていた。

「フォッグ殿、そう荒げられても我々ではダアトの行動をどうこうする権利など持ち得ぬ。しばし待たれよ」

「マグガヴァン将軍、ですがのぉ……」

この場に入って来た将軍に静められ、気を落ち着け始める。

「おい、グリフォンだ！」

「よかった。戻ってこられたんだ！！」

その時、兵士達が何かを見つけたらしく、若干嬉しそうな顔をしてそこへ指を指していた。しばらく待っていると、グリフォンはセントビナー―の門の前で着陸し、乗っていた人物も共に脚を地面に付けた。

そう、彼こそ先ほどまで案内をしていたハーミットであった。

「戻っていいぞ」

『クァッ――――!!!!』

ハーミットは手を使って行くようグリフォンに促した。その動作に伴って、グリフォンもハーミットを残して何処か飛び去って行った。

「ハーミット響士殿～!!」

「んっ……？」

そんな時、何人かの兵士が大急ぎで此方に向かって来ていた。何処か尋常ではない様子でだ。

「何か用か？」

「時間が間に合ってよかった！　実は、貴方にお会いしたいという人物が此処セントビナー―に参られたんです」

「何と、首都グランコクマに存在する【マルクト国立医学院】の学院長“フォッグ・ジョシュア・フォールミア”氏ですよ!!」

「学院長……マルクトの……」

そう呟きながら街門の向こう側を見てみると、髭を生やし、細目の顔をした老齢の老人が杖を付きながら佇んでいた。

「貴方のような立派な御方に出合えるとは、この老いぼれ……光栄ですじゃ」
「いえそんな、マルクトの医学界で名高いフォッグ氏がわざわざ私に会う為ここまで」
ハーミットは内科的な旧医学の医師達と対立している身ではあるが、全てを知らない訳ではない。重要な発見をした人物などは顔を知らねども名だけでも知っている事にしている。
「私はもはや前線を引いた身です。今は唯、学園長の椅子に収まっているだけの唯の老人ですじゃ」
「ですが、貴方の功績は素晴らしい。貴方は医学界に無くてはならない存在だ」
「ホッホッホ……貴方にそう言われるとは、嬉しい事です」
お互い握手をして、互いを褒め合う会話をしていく。どうやら彼は人間の価値を身分で決め付けるような人間ではないようだ。
実質、ハーミットはたいていの貴族医師達には邪魔な存在極まりない人間ではあるが、本質を見ている医師には尊敬される存在でもある。その例としては、ハーミットの医学を学びにダアトへ留学しにくる医者とかだ。
「で、この度は何用で？」
「……」
そう聞くと、フォッグは唐突に黙り始めた。杖を付きながらため息を吐いてさえいる。

「お恥ずかしいかぎり、マルクトでの医学はまだまだ発展途中ですじゃ……治療のハッキリしない病気も星の数ほど存在する」
「……ええぇ」
「たとえダアトへ留学し、戻って来た医師達もまだまだ本格的な実用へ至ってはおらず、技術も経験も足りません」

彼から語られるのは、現代のマルクトの医学界に対する憂いであった。病気をみて人をみずや患者を選び、難しい病気はすぐ他へ任せるようになったなどと色々だ。

「そこで今回参られたのは、ハーミット殿……いや、ハイル・シュヴェール殿」
「……ッ！？」

いきなり本名を言われた事にハーミットは驚いた。

「貴方に“帰国”してもらいたくお願いに来たのです」

そう言い、次にはフォッグは席を立ち、テーブルに手を付きながらハーミットに頭を下げた。ハーミットは唖然としていた。

「今まで私の元で卒業してきた医師達の素行、彼らに変わってお詫びさせていただきます」
「止めていただきたい！　私はそのようにされる資格などない！！」
「それは亡命のことですな……実は、その件をピオニー陛下に直接直訴させていただきました」
「なっ……！？」

皇帝に直訴をするとは下手をすれば一族朗々に破滅へと導かれた

りする事がある。それなのに、この男は自分の為にそこまでした。その事実にハーミットは息を呑んだ。

「すると、なんと陛下は嬉々としたご決断で貴方の罪を許されたのです！　おかげで貴方の亡命記録は白紙にすると申されたのですじゃ！！」

もはや空いた口が塞がらなかった……

「そして、これが一番言いたかった事です。お願いですじゃ！　どうか、マルクトで教鞭を振るって欲しい！！　貴方の素晴らしい医学を我々にも学ばせて欲しい！！」

「いえ、ですが私の名は未だ悪い意味で……」

「それが何ですか！　学院内でも貴方への理解を示している人間は多くいる。そんな彼らの為にもどうか今一度帰国を！！　その為ならこのフォッグ、学院長の椅子を明け渡しても良い想いです」

「いや、そこまでされても……その……」

ハーミットはその勢いに幾らか呑まれていた。反論をまるで許さないかのような勢いでだ。

「もちろん、ダアトでの活動は続けて貰ってもよろしい。今の立場を無理に変えようとする気が無ければその条件を呑ませていただきます」

「ですが何故、なぜそこまで私なんかに尽くそうとするのですか。貴方のような方が！？」

そう、そこが疑問だ。ハーミットはフォッグとは何の接点もない。顔を合わせたのも今回が初めてである。

「……二年前、とある少女を手術しなさった事、御覚えですかな？」
「二年前……」
ハーミットはニ年前の事を頭の底から探り始める。
――――――――――――――――――――
＞二年前＜
その時は、シュウ先生との密談の為に秘密裏にベルケンドに訪れていた。そして、譜業バイク【ゲリュオン】を受け取ってマルクト領から出るところだった。その途中の街で、馬車に跳ねられ、両足を複雑骨折した女の子に会った。
その時は偶々見つけた為に直ぐに病院へと運ばれたが、何か気になった俺は病院へと着いて行く事にした。
そして、病院内ではその子の父親らしき人物と医師が何か言い合っていた。
「娘は、娘はどうなんですか！？」
「……娘さんは両足の骨や筋肉が滅茶苦茶です。このままでは命の支障があるため……切断するしかありません」
「き……切る……あの子の、足を……」
「命と引き換えです……」
「そんな……そんな……」
傍にいた母親は泣き崩れ、それを父親が慰めようとする。医師は残念そうにその様子を見ていた。
「今の医学の技術では、娘さんの足を残す事は……」

「だったらその患者、私が治療しよう」

その時、ハーミットはその少女の治療を名乗り出た。

色々と身元を聞かれたが、何かと誤魔化してただダアトの医師だという事を名乗って渋られながらもなんとか手術へと持ってくる事が出来た。

そして、病院の一室ではハーミットが常時持ち続けているケースの中の道具の一つ、テント型無菌室を使って手術が行われようとしていた。

「本当にやるのですか？　治癒譜術では筋肉を修復できても神経や骨はそうはいかない。それでも手術で元通りにできるかどうか……」

手術着を着た医師や看護婦達はあり得ないという目でハーミットを見る。彼の正体を知らず、外科手術と言う物の本質を対して知らない人間だからこその反応だ

「患部を切開、砕けた骨を整復した後、切れた神経を繋ぎ、切れた腱、筋肉も縫合して繋ぐ」

「ほ……本当に切断せずに残すつもりなのですか？」

「通常ならば切断する判断が正しい。普通の医者ならば手術中に空気塞栓を起こすからな……」

そして、彼らは奇跡を見た――正確なメス捌き、緻密な縫合術、的確な判断……どれをとってもそれは彼らの知る一流とは遥かに超えた技術を目のあたりにした。それは、もはや手術という言葉で収まる物ではない。敢えて言うなら……

――命の芸術であった――

――――――――――――――――――――

「たしかに、そのような手術をした覚えがあります」

「おぉ、思い出していただけましたか」

それこそが重大な事だと言わんばかりにその言葉を喜んだ。

「実は……その少女こそが、私の親戚の孫娘なのです」

「そうなのですか」

意外な事実にハーミットは冷静な態度で反応する。

「私は孫娘の命ばかりか、今後の人生も救ってくださったその医者を探しまわりました。立ち会った医師からその特徴、正体全てを聞きだし、ようやくそれが貴方だと知った時には……私の立場としてもそう簡単に会える事ができないという事実で残念に感じました」

そうだよな、国立医学院の学園長が俺みたいなオールドラントの医学界の爪弾きと会ってちゃ色々と変な事になるからな……

「だからちょくちょくと貴方に会う為の準備を秘密裏に用意してたのです。そして、その成果が今……」

「その、お疲れ様です」

一応そう言っておくべきかと思い、そう口にした。

「で、御答えをお聞かせくださいませんか？」

フォッグは嬉々とした顔でそう尋ねてくる。しかし……

「申し訳ありませんが、亡命記録を白紙にするとかの話は無しにしてください」

「……！？」

自分が想像した答えとは裏腹な物が出て来て驚く。

「そこまでして自分の“傷”を消そうとはしたくはありません。自分の尻拭いは自分でします。それに、私は余計な肩書きなどは嫌いな物でしてね……今の状態が一番気に入っているのですよ」

もしもマルクトで名を広めても実質、彼にとって邪魔でしかない。なぜなら、彼は“そういう”人間だからだ。

「私には、今を支えてくれる仲間や家族がいる。マルクトへ戻る事は、今までの関係を続けれなくなる可能性がある……」

どこか悲しそうな顔をしてハーミットはそう言った。その表情を読み取って、フォッグは静かに席を立つ。

「……どうやら貴方の決意はお固い様だ。今回は退かせていただきましょう」

「……折角の御好意、申し訳ありません」

「ですが、亡命記録の件は意地でも通させていただきますぞ。後々に役に立つかもしれませんからの」

「……」

ハーミットはこれ以上は言わなかった。この人には何を言っても

無駄だろうと判断したからだ。

この時、彼とは後々に何度か会う事を、彼は知らなかった……

「そうじゃ、もしよろしければ孫娘を嫁にどうかの？　あの日以来貴方を慕っておるとの事じゃ」

「いえ、結構です」

「そう言わさんな。今年で１６の初々しい娘じゃぞ♪」

「……貴方は俺を“ロリコン”にする気ですか（怒）」

ハーミットは笑窪をひきつらせながらそう云い放った。

正直言って、親馬鹿がそう否定しても意味がな――――――

ｙ＝ー（　。д。）・∵；；

＊放送事故が発生しました。暫くお待ちください……

原作編　第九話（前書き）

ただいま……にじファンの皆さん……

だが、現実ではそろそろ就職活動の時期へと突っ込むこの頃です。
ホント、半年ぶりです。
色々と吹っ切れたので、『深淵の異端者』再開させていただきます。

原作編　第九話

国境の砦カイツール。検問所を挟んでマルクト軍とキムラスカ軍が駐留している国境地帯だ。小規模ながら宿泊施設や売店も存在するため、『カイツールの街』という呼ばれ方をすることもある。

「この辺りが国境か……」

ルークたちが足を踏み入れたのはマルクト側の入口だった。マルクトの軍服を着たジェイドがいるからなのか、まるで咎め立てされることはなかったが、それでも張り詰めた気配がピリピリと肌を刺してくる感じがする。

「流石に、空気が緊張しているような気がするわ」
「この辺りには、豊富な資源を誇るアクゼリュス鉱山があります。両軍にとって重要拠点なんですよ」

そう説明したジェイドに、ガイが顔を向けた。

「それでも以前は貴族の別荘地だったよな」
「そのようですね。海岸線の美しさでは定評がありますから」
「流石にこの緊張状態では……」

普段から硬い表情を更に強張らせて、ティアは言葉を飲み込む。
ガイが後を継いだ。

「廃棄されてるよ。こんなとこに遊びに来る馬鹿はそうそういない。俺たち以外にはな」
「……俺だって来たくて来た訳じゃねぇぞ！」

自分が馬鹿にされたような気がして、ルークはムッと唇を尖らせた。

バチカルへ帰るには、国境を通ってキムラスカ側へ出ねばならない。今のピリピリした気配は少々我慢しなければならないだろう。

「では旅券を、まず私とアニス、イオン様の分がここに」
「旅券……そういやヴァン謡将が持ってくると伝えられてるんだが」
「ヴァン師匠が来るのか？」

ルークはガイの口からヴァンの名前が出ると忽ち嬉しそうな顔をする。

「あぁ、ヴァン謡将がルークとティアの分の旅券を持ってくる手筈にしているからな」
「ヴァン……」

ティアはその名を聞くと、どこか訝しむような目をして険しい表情を作り出す。

そんな時、ルーク達の後ろで何やら騒がしい音が響いてくる。それに気がついた彼らは全員後ろを振り返ってみると、そこには数時間前に見慣れた鎧を着込んだ兵士達が列を成して進んでくる。

「オラクル騎士団ですね、どうやら彼らもこの国境を通る見通しのようだ」
「ホントだ～！！　あ、見てみて！！　六神将も来ているよ！？」

師団の兵士に囲まれるように列の前方、後方、中心に一人づつ程、他の兵士とは違った服装と装備をする六神将達が存在していた。

～黒獅子のラルゴ～

～魔弾のリグレット～

～烈風のシンク～

ルーク達の方にもその一人、～妖獣のアリエッタ～が居るが、それとは違った覇気を漂わせた人物の一人一人が目の前にいる。その事実はダアトの軍事を知る者にとっては息を飲む程に珍しい光景であった。

ちなみに、～死神ディスト～はというと、【件】の事故により痛む腰を抑えながら譜業椅子でキムラスカへいち早く渡海中である。

「全兵、止まれ！！」

そんな時、いきなり前方にいたリグレットが号令を投げかけ、全兵士がその場へ立ち止まった。そして、次にはそれぞれの位置にいた六神将達に目配せし、配置していた場所から離れて三人全員が道端に止まっているルーク達一向の方へと向かっていく。

「これはこれはルーク様、カーティス殿、それに皆様……またこうして出会えるのは奇遇でな事です」

「いえ、こちらこそ全くの偶然で……」

「貴殿らもこれから国境を超える予定のようだ」

ジェイドを筆頭として、ルーク達は六神将達と何気ない会話を交わし始める。周りでは、カイツールを守るマルクト兵達がちらちらとこちらの様子を伺っていた。

暫くしていると、話をしていた一人：リグレットが急遽視線を右へと向けたのだ。

「閣下！！」

「お前達・・・どうやら、事は済んだようだな」

リグレットは此方に一礼した後、ヴァンの方へと向かっていく。何やらダアトでの成果の報告をしているようだ。それに何度かうなづいた後、リグレットは下がっていく。そして、ヴァンは次にはルーク達の方へと歩み寄っていく。

「久しぶりだルーク。長旅であったにもかかわらず息災で何よりだ」

「ヴァン師匠！！」

ルークは憧れの師と久々に会話できた事で満面の笑みを浮かべ上げる。

「色々と苦労したようだが・・・ルーク、しかし、よく頑張った。流石は我が弟子だ」

「へ……へへ！」

誇らしさと照れ臭さでいっぱいになって、ルークは笑う。

「ティア、お前も元気そうで何よりだ」

「・・・ご無沙汰しております。ヴァン総長」

ティアの方にも声を掛けたが、ティアは敢えて一兵士としての礼儀を以って対応する。それはティアにとっての小さな犯行なのか、ダアト兵としての義務であるかは不確かなものである。

「それよりティア、お前は休暇届を出してのキムラスカでの旅行中だと聞いたが・・・何故此処にいる？」

「成り行きです、それ以上の事は今回の和平に関する問題に関わると判断するため話せません」

「・・・そうか、まあいい」

ヴァンは“あの時”の光景で見た黒ローブの人物の事を思い出していた。あの時、ファブレ家へ襲撃してきた謎の人物、歌われた譜歌・・・これだけでその人物を特定するのには時間は掛からなかった。そして、今その人物が目の前にいることに……

だが、ヴァンはその人物についての事をキムラスカで簡易的に受けた事情聴取の時では、はぐらかして言うことはなかった。

やはり、彼にはまだ何処かで【非情さ】を捨てきれていないのだ……

「ヴァン謡将、旅券の方は？」

そんな時、ガイがふと思い出したかのようにヴァンに話す。それに気づいたヴァンはそうだったと言うかのように懐を探り出す。

「あぁ、ファブレ公爵より臨時の旅券を預かっている。念のため持って来た予備も合わせれば、ちょうどお前達三人数分になろう」

懐から取り出したそれを、ヴァンはルークに渡した。

「これで国境を越えられるんだな」

「ここの宿屋で休んでから行くがいい。私は先に国境を越えて船の手配をしておく」

「カイツール軍港で落ち合うってことですね」

「そうだ。国境を越えて海沿いに歩けばすぐにある。道に迷うなよ」

これで彼らのやるべきことは全て終わった。後はそれぞれの行動に沿ってこの問題を解決すればいい・・・誰もがそう考えていた時だった。

「おい、向こう側から何やら土煙を上げて近づいてくる物体があるぞ!?」

「あれは・・・譜業？　いや、人が乗っているぞ」

何人かのマルクト兵が何やら慌てたような様子をし始める。その様子を何処かおかしいと感じたルーク達はその問題の事がある方向へと視線を向けてみる。

カイツールの門の周りにある柵越しから見えてくる土煙の中をよく見てみると、この中の誰もが見知った顔を持つ人物が譜業に乗って物凄いスピードで此方に向かってくるのだ。

それは此方側に向かっており、そのまま突っ込むかと思いきや、見事なドリフトをして地面の摩擦を大きく使ったブレーキを掛けて彼らの目前近くで止まったのだ。

キキィィィィー！！！！！

「ヴァアアアアン！！！！！」

ハーミットはゲリュオンから降りるや物凄い剣幕でヴァンの元へと歩みよってくる。その姿にヴァンや六神将達、ルーク達も顔が引きつっていた。意識を向けられているヴァンはその中でも気が気じゃないくらい青ざめた顔をして近寄って来るハーミットを見ていた。

そして、遂にハーミットはヴァンの直ぐ傍に立つとまず一言が……

「こんの、大馬鹿ちんがあぁぁぁ――――！！！！！」

スパアアアア――――――ン！！！！！

「ぶるうあぁぁぁ――――――――！！！！！」

強烈な張り手がヴァンの右頬に炸裂し、左回転を二回してその場に地面へと倒れ込んだ。この時、アナゴの様な悲鳴を上げてしまったのはしょうが無い気がするが……うん、しょうがない。

しかし、それでハーミットのターンは終わりを迎えることはない。うつ伏せにに倒れ込んでいるヴァンを髪の結び目から引っこ抜くように持って体ごと持ち上げたのだ。もしこのとき胴体以下がなければ、嘗ての戦国時代お馴染みな『首獲ったり！！』な形に出来上が

っていただろう。

「お前はダアトに戻るなり、なんで手始めにあの“樽豚”の派閥を抑えることに専念してんだこのアホんだらが!!　そんなことよりもキムラスカの公爵子息のダアトによる誘拐疑惑を晴らすようにあのアホ共にその重要さ伝えこんどけって言っただろうがこの【ピ――!!】」

「い、いえですが……導師イオンはダアトにとって最重要人物ですのでそう簡単にほっとくわけには……」

「あぁわかっとるわ、んな事!!　どこぞやのマルクトの『バキュゥゥン!!!』が手を抜いた手続き同然な真似したおかげでわざわざマルクトに形式的な真意の問いかけする訪問をシンクにわざわざ行かせたりと、本来なら主席総長であるお前がやらなきゃなんねぇ事をなんで一介の医者である俺が手を回さなきゃなんなくなるのか教えてくれよあぁん!?」

こんな大事をここまで治める為に俺がどれだけ人脈を回ってきたと思ってやがる!!

“預言消滅”を仮にも目標にしてる癖に最低でもやんなきゃなんねぇ事を放ったらかしにするとはどうゆう了見してんだコラ!!

あれか？　戦争起こして国滅ぼして直接・間接共々で“預言消滅”を成したいっていうんかい!?

「死ね!!　一片死んで音譜帯にいるテメェのパパさんママさんに謝ってこいや!!」

「ごぶふぉぁ!!!!　死ぬ!!　洒落にならなくて本当に死ぬぅぅぅ――――!!!!!!」

いつの間にかハーミットはヴァンにコブラツイストを仕掛けて上半身を破壊する意図を以って締め付けていた。ミシミシと歪な音を

響かせてヴァンは苦悶の叫び声を上げる。

「ハ、ハイルさん！！　これ以上したら兄さんが死んじゃいます！！」

秘預言に関することで危うい計画を企ててもいる、己の兄であるヴァンとは心情、敵対状態としているティアもさすがに不味いと考え、助け舟を出すようハーミットを止めようとする。それを切欠に他の六神将のラルゴやリグレット、シンクも全力でハーミットを羽交い締めしたりしてヴァンを救い出していく。

「落ち着けハーミット！！　お前の怒りも何かと解る。だから耐えろ！！」

「くぅ、なんて力だ！！」

「しっかり抑えなよ！！　油断してかかるとコッチがやられる可能性あるからね！！」

「ぶるうぅぅぅぁぁぁぁぁあああああ――――――――！！！！！！」

「ひいぃぃぃぃぃ――――――――！！！！！！」

ヴァンはハーミットが押さえ込まれている間に情けなく四つん這いになりながらもこの場から離れていく。ハーミットの方はこの頃のストレスやフラストレーションが溜まりに溜まってアナゴモードへと、どこぞ屋のデビルハンターのデビルトリガーみたいにＯｎ・Ｏｆｆと激しく切り替えが起き出していた。

「なにやってやがるんだテメェらは！！」

そんな時、どこからと何者かの怒号が響きわたる。その声にその場にいた全員がその声の主へと視線を向けると、そこには呆れつつも米神を抑えるアッシュがいた。

「あー！！　お前タルタロスん時の！？」

アッシュを再び見たルークは指を指して、唐突に声を上げた。それはそうだ。あの時、一番聞きたかった事を結局聞けずに別れたのだから。

「お前は！？」

しかし、アッシュの方も意外だという表情をしていた。本来なら六神将との待ち合わせとして此処カイツールで待機していたのだが、二組同時ではち合わせるなどとは考えていなかった。もとより、此処の宿屋を集合場所としていたのだが、なにやら外が騒がしいので出てきてみたらこうだったと言う訳だ。

「ア、アッシュ・・・丁度いいところに来てくれた！！」

「一体何がどうなってやがんだヴァン？」

「後は任せたぞ、私はいち早くバチカルへ向かわなければならぬ事情があるのでな」

そう言って、ヴァンはアッシュの右肩にポンと軽く手を乗せた後、早歩きで関所の方へと向かっていった。そして、そのまま逃げるかのように長い石橋を渡っていくのであった。

「あ、待ちやがれ！！」

そんな理不尽な後始末を任されるアッシュはたまったものではないそうで、慌ててヴァンを引き止めようとする。だが、既に時は遅く、ヴァンはもうキムラスカ側の方面まで歩いて行ってしまっていた。

「駄目だ、もう抑えられない！！」
「ここまでか・・・！！」

その後ろでは、そろそろハーミットを抑えるのに限界となりつつあるシンク達が居た。ハーミットは脚に刻まれているダアト式譜術の劣化版譜陣から音素を大量に取り込んで、今にもその場から全速力で飛び出していきそうな形をしていた。

「パパ、いい加減にしないとアリエッタ……怒る……です！！」
「ぐぬぬぬぬ……！！！！」

けれども、愛娘：アリエッタのそんな一言で少しずつ怒りを下げていく。

『グルルゥゥゥ――――！！！！！！』
『クルルルル――――！！！！！！』

共にいたライガやフレスベルグもそろそろいい加減にしてくれよと、まるで訴えかけるかのように吠えてきた。

流石のハーミットも家族の願いを無垢に扱うわけにはいかない。だから、今回もこのやり場のない怒りをどうにか飲み込んで抑える方向にするしかないというわけだ。

「・・・わかった、おいアッシュ、もしヴァンに会うことになったら伝えとけ……『次はないぞ』とな」

「わ、わかった……」

アッシュは内心、汗をかきつつもその要件を平常心であるような顔でうなづいた。それはそうだ、ダアトにいる以上、彼の恐ろしさを直に味わってきた経験者だからこそできる表情だ。

「リグレット、ラルゴ、シンク・・・お前達は一旦ダアトに戻るそうだな？」

「あ、あぁ・・・これから私達は大詠師モース以下に事の詳細を直接伝えるつもりだからな」

「そうか・・・しっかりやってこい」

「ＯＫ」

そう言って、シンクにハイタッチをして手同士を叩き合わせる。スパーンといい音が響く。シンクとハーミットはダアトでは、実質的な執務の実力者でもある。あと一息張り切れば苦難は乗り切れる・・・そう分かっているからこそ、偶にはこんな仕草もやってみる。

今度は、ハーミットはルーク達の方へと向かう。近くまで歩み寄った所、その場で一礼をして話し出す。

「セントビナー以降ですね、皆さん」

「パパ！！」

登場初期はすさまじい入り方ではあったが、心を鎮めて本来の表情に戻った己の父親にアリエッタはルーク達の所から駆け足となって、ハーミットの腰当たりに抱きついた。

「ありがとなアリエッタ、態々別件で用事を任せたのを受けてくれて」

そう言って、ハーミットはアリエッタの頭を優しくグリグリと撫でてやる。そうすると、和やかな笑顔をして気持ちよさそうな顔をアリエッタはしていた。例え師団長という地位に就いているとしても、彼女はまだまだ子供だ。親に甘えるのはしょうがないと言えるようなものだ。

「おやおや、ダアトでは【白衣の悪魔】、【蒼鷹】と医学会、戦士共々の間で恐れられているハーミット師団長もやはり人の親と言いますか」

「ふむ、それは詭弁だなカーティス殿・・・私とて一人の人間ですよ。貴方方が私の事を如何にどう言おうとも、“こんな”私にも家族はいるのですよ」

途中、ジェイドから茶化すような言葉を投げかけられるが、少し心外だと言うように言葉を返す。

「ハーミット、貴方には感謝しきれません。ダアト内の件といい、和平での間接的なご協力に改めて敬意を表します」

「ありがたく、そのお言葉を頂戴致します。導師イオン」

イオンからは賛辞の言葉を頂く。それに伴って、導師に頭を垂れる。

「ちくしょー!!　あの野郎またすぐに何処か行きやがった!!」

「おいおいルーク落ち着け!!　アチラさんは仮にもダアトのお偉いさんだぞ」

「そ～ですよぅ、なんだか今、ダアトは今回の事で結構忙しいそうで、上の人達が休めないくらいにマジヤバなんですよぅ!!」

しかし、そんな中でルークはこの場に合っていないような事で喚いていた。それをガイやアニスが宥めようとするが、さすがお坊っちゃまというのか、中々機嫌を直してくれなかった。

「て言うか、おいおっさん!!　さっきヴァン師匠になんて事しやがる!!　俺知ってるぜ、師匠はしゅせきそうちょうっていうかなり偉い人なんだろ!?　そんな師匠に部下のおっさんが手を出していいのかよ!!」

ふと、その矛先がハーミットの方へといきなり向いた。そんな様子にハーミットは心の奥で感心するかのように「ほぅ……」と小さく呟く。シュザンヌ夫人の話越しで、ルークは十分な教育を与えないようにと、バチカルの貴族院がファブレ公爵経由で決定していたはずだ。話によれば、彼は日常会話などを覚えるのが一番労力を費やしたと聞いていたはずだが、どうやら自己流で知識を身につける事には身につける事を努力していたようだ。

「なぜ部下の私が上司であるヴァン総長にあんなことをしたかと聞きたい……そういうことですね、ルーク様?」
「あたりめーだ!!　って、だからその敬語はやめろっていってんだろーが!!」
「ゴホン、じゃあ……教えよう……それは……【大人の事情】と言うものなのだよ」
「はぁっ!?」

現時点にて、ヴァンがハーミットにどうこう処分を下せられるかと聞かれれば、答えはＮｏだ。今や、彼はジェイドやディストに並ぶ、いや……それ以上の世界的権威な医学分野の博士とも呼べる存在だ（実際は博士号などを取ろうとせず、偶に論文を提出する程度だが……それでもかなりの評価をされている）。

実際なら軍法会議ものな問題だが、ダアトは彼ほど敵に回したくないものだと所属させている時期からかなり分かっている。

かつて、詠師の一人がハーミットの下町への往診にて、とある患者の治療を行なっているとき、その詠師が「こんな事預言に詠まれてはいない！！」と口出しをしてきたことがあり、初めはハーミットが「では、俺が“今日ここに往診しない”という預言が詠まれているのか？」と逆の言葉を取って追い返したが、その後も事あるごとに邪魔してきたので、その詠師を集中して、預言を使ったお付箋の横領などの証拠を放り投げてやったところ、面白いように慌てだし、己に突っかかる真似をしなくなった。

だが、それで許すというわけにもいかないハーミットは他の詠師達の悪行もちょくちょくと散らかして、間接的に最初の詠師を辞任させた。

そうなのだ……ハーミットは初代導師イオンが認めるほどの腹の探り合いや裏読みが長けたシンクのもう一人の参謀の師でもあるのだ。ちなみに、トラップ作りもお得意である。

「む、少し時間が……失礼、ある方との約束の時間が迫っているから俺は此処で失礼します」

「おいおい、だから【大人の事情】ってどういうことだよ！？」

「すまないルーク、この話はまた次に出会った時でお願いする」

「そりゃ何時の話だっつーの！！」

「ルーク！！　先生もお忙しいの……あまり自分の侭で困らせるようなことは」

「……ふん！！」

ティアの言葉でようやく突っかかる事を止める事にした。そして、ハーミットは再び彼らに礼をしたところでゲリュオンに跨り、譜業

エンジンを起動させて関所の方へと走っていった。

「だ――――！！！　さっきから何も分からなくてイライラする！！」
「まぁまぁ、あまりカッカとせずゆっくりとやっていきましょうよルーク」
「そうですのご主人様！！　ミュウもイオンさんに賛成ですの！！」
「お前が調子こくなっつーのブタザル！！」
「みゅうぅぅぅぅ――――！！！！！　ごめんなさいですの――――！！！！！！」

ルークは八つ当たりとして、ミュウの事を踏みつけ始める。そんなルークをティアが諌めたりとやはりチグハグな状態となって纏まりがなかった。

「さて、遥々カイツールまでの長旅でしたことですし……そろそろ宿屋へ向かうとしましょうか」
「そうだな、後は港へ向かうだけだとしても疲れは今ここでとっておくべきだろうな」

それを遠目で見ながら、ジェイドとガイは次にすることについて相談し合っていた。

―目指すバチカルまであと少し・・・―

：おまけ

「どうすればいい……ハイルさんは完全に頭に来ている」

ルーク達がマルクト側のカイツールの宿屋に入っている頃、ヴァンはいち早くカイツール港へと進んでいった。

キムラスカ側のカイツールに他の六神将が滞在しているが、ヴァンは事が事の為にカイツールから退去していた。人、それを【逃亡】というが……

蛇服のような整備された道を辿りつつ、悪戯がバレたかもしれないと慌てる子供のように不安を隠せないでいる。

「と、とにかく、先にバチカルへ向かっていればハイルさんと言えども、さすがにそう簡単に手出しはできないかもしれない」

実は、ヴァンはカイツール港からの船をルーク達と同じ連絡船に乗ることを予定としていた。だが、ハーミット（ハイル）が直々に

ここまで何時の間にかやってきたために、大幅な計画修正を行わざるを得なくなってしまった。

―ブオォォォォォ――――――ン！！！！！―

だが、彼の悲劇はまだ終わらなかった。

後ろから激しいエンジン音を響かせてこちらへとやってくる存在に気がついた。

この音を忘れるわけがない……

ヴァンは壊れたブリキ人形のようにギギギ・・・と首を後ろに振り返ると……

――――――――――――――――――――――――

＞とある盗賊達＜

「おい、噂で聞いたんだが……近くダアトの軍がここを通る予定らしいぜ？」

「まじかよ、それが本当なら俺達の身があぶねぇな」

彼らはカイツール付近を通る旅行者の略奪を生業としている盗賊であった。

旅行者ともなると、所持金をたんまりと持っていたりとするため、良いカモだからだ。

しかし、風の噂で聞いたところ、軍隊が此処を通るという事を盗賊団の一人が嗅ぎつけていた。

「さすがに軍隊相手に張るわけにはいかねぇしな……」
「奴らが通り過ぎるまで身を隠したほうがいいよな」

だが、ここらは魔物が出没する土地柄のため、森の中で隠れるというのは危険が伴う。
どうするべきかと全員で相談していた。

そんな時であった……

「ギャアァァァァァァァァァ――――！！！！！！」

突然の悲鳴に盗賊達は何事かと一斉にその悲鳴の方向へと視線を向けた。
すると、そこには……

「ふはははは！！！！！　どうしたどうしたヴァン次郎！！　そんなチンタラ駆け足だと直ぐ様追いついちまうぞ！！！」
「ごめんなさい！！　本当に調子こいてすいませんでしたハイルさん！！！　だから、私を轢き殺そうとしないでください！！！！！」
「安心しろ！！　もし轢くとして当たりどころが良い所を狙ってやる！！！　だが、それでもかなり痛いがな」
「許してください！！　今度から仕事ちゃんとしますから！！！ちゃんと書類処理しますから！！！」
「許してもらいたけりゃ誠意を込めてカイツール港まで俺に轢かれずダッシュだ！！　Ｈｅｙ　ｂｏｙ！！　もっとスピード上げな！

！！」

ドゴオォォォォォン――――！！！！！！

何時の間にか構えていた狙撃譜銃が音素を吹き出し、大口径の譜弾がヴァンのすぐ後ろの地面を激しく抉った。それに伴ってヴァンの速度も上がるという、まるで騎馬の鞭を扱うかのように刺激を与える。

「譜銃は洒落になりませんから！！　ハイルさんの譜銃に当たったら風穴開けるだけじゃすみませんよ！！！！！！」

「ＨＡＨＡＨＡ！！！！！　死ぬ気で走らなきゃお前の後ろの“処女”を的にしてクリーンヒット兼『バキュゥゥン！！！』してやんぜ！！！」

「いやあぁぁぁぁぁぁぁ――――――――！！！！！！」

二人は凄まじい速度で盗賊団の前を遠くで横切っていく。ヴァンと呼ばれた男を追いかけるハイルと呼ばれた男はそれはもう、悪魔も泣き出すような笑顔で譜業らしきもので追いかけながら大きな譜銃を撃ち回している。

そんな珍百景に認定されるような光景を盗賊達は唖然とした顔をして眺めているのであった。

原作編　第九話（後書き）

最後のおまけが何これ？な感じになったが、後悔はしない……うん
近々に今更と言えますが、４００万Ｈｉｔ記念の回をやらせていた
だきます。

お題は大体決まっていますが、もし良ければ読者の皆様から下記の
選択の内で、リクエストも聞かせて頂きたく思います。一定量貯ま
ったら決めさせていただきます。

1、ダアト組海水浴
2、ハイルとアイラの出会い
3、ケテルブルグ旅行
4、オリキャラ勢との温泉旅行

これらからどうぞ。

原作編　第十話

カイツール軍港はカイツールの街の程近く、ルグニカ大陸の南端に近い位置にある。国境間際の港で、キムラスカの軍事拠点の一つだ。此処からはキムラスカとダアトを中心とした旅行者が多く入港し、マルクトへ向かう為の最初の入口だ。

もう一つの入口は、“とある”理由により使えなくなっている今、この場所のみが重視されている。

「ふぅ、これでやっとバチカルへ帰れるんだな」

「そうだな、だけど、『帰るまでが遠足』だぜルーク？」

「こんなヤバイ遠足、もう勘弁って感じだけどな」

ガイの陽気な一言にルークは笑って返す。

「いやーキムラスカに来たのは久しぶりですねぇ」

ジェイドは何度かキムラスカに来た経験がある。まぁ、主に“戦争”関係でだったが……懐かしいという雰囲気を出しながら、ジェイドはカイツール港をチラチラと見ていた。

ルークの方は、初めてま近で見る定期船に目を奪われていた。本の中でしか見たことがなかった譜業の一つ、それが今目の前にあると思えば何処か興奮してくる。タルタロスも圧巻な代物ではあったが、これはこれで見るところがあるのだろう。

そんな時、向こうから刈り込んだ黒髪に長いもみあげの、なかなか強面の男がやってくる。彼の名はアルマンダイン伯爵・・・カイツール方面司令官兼大将の座に就くキムラスカの重鎮の一人だ。

「これはこれは、ルーク様」

姿を見るなり親しげに声を掛けて来たので、ルークは目を瞬かせる。

「覚えておられませんか。幼い頃一度、バチカルのお屋敷でお目にかかりましたアルマンダインにございます」

「覚えてねぇや……」

「ルーク様はまだお小さかったですからな。仕方ありません」

決まり悪そうなルークを取り成すように彼は笑う。

「そうだ。伯爵から親父に伝令を出せないか？」

ふと思いついて、ルークは言った。

「ご伝言ですか？　伝書鳩ならバチカルご到着前にお伝えできるかと思いますが」

「それでいい。これから導師イオンとマルクト軍のジェイド・カーティス大佐を連れてくって……」

「……ルーク。あなたは思慮がなさ過ぎますね」

ジェイドの硬い声が落ちる。ハッと身を引いて、アルマンダインがジェイドを睨みつけた。

「……カーティス大佐とは、死霊使い（ネクロマンサー）のことか」

「その通り。ご挨拶もせず大変失礼致しました。マルクト帝国皇帝ピオニー九世陛下の名代として和平の親書を預かっております」

とたんにアルマンダインとジェイドの間に不穏な空気が漂い始め

る。それはそうだ……なんせ、キムラスカにとっては『あの』死霊使い（ネクロマンサー）だ。嘗てのローテルロー橋の戦いで彼に大きな痛手を負わされたという忘がたい結果を残されたのだから。

「それにしましても、ずいぶん貧相な使節団ですな……」

「セントビナーまでは一個師団で参りましたが、途中ダアトのオラクル騎士団の協力により、カイツールからは最低限の人数にさせていただきました」

さすがに『死霊使い（ネクロマンサー）』という大事を抱えているマルクト側でもあるので、言い方は悪くなるが“余分”な荷物は減らしておきたいのだ。導師イオン・ルークというキムラスカへの通行証をこちらで所有しているかぎり、さすがにキムラスカも下手な手出しは行わないはずだ。

「……わかりました。取り急ぎ本国に鳩を飛ばしてみましょう。船もすぐに出航できる準備が出来てるゆえ、一先ずこの港でお休みください」

「お世話になります」

イオンが謝辞の言葉を述べる。そして、そのままルーク達はカイツール港の休憩所へと入っていった。

――――――――――――――――――――――――――――――

「あ～もぅちょー疲れたあぁぁぁ――――！！！！！」

「アニス、だらしがないですよ」

あと一息というカイツール港までの道を歩いてきたルーク達は、休憩所に設置されていた椅子などに座って、重くなった足を休ませる。

「しかし、なんか話とは違ったなぁ・・・ルグニカ大陸といえば」
「何か気になることがあるの？」
「いやな……ここらへんは傭兵くずれの盗賊団がいて、よく頻繁にカイツールを通る旅行者達を狙う事件が多いって聞いたんだがな？」
「へっ、そうなのか！？　けど今まで出会ったのは魔物ぐらいだったよな？」

話が何処か違うという感じの考えを頭に置いて、ルーク・ティア・ガイは何故と頭の上ではてなマークを浮かべていた。

「そういえば、此処までの道……以前見たよりかなり乱雑に荒れてましたね」
「あの……これはリグレットに聞いた話なんですが……」

イオンが言いたいことがあると、手を上げながら詳しく言う。

「ヴァン謡将が彼らより早く出発していて、その跡をハーミットが出発していったそうなんです。けど、シンクから聞いたんですが……ハーミットが『あの髭パイナップルぶっ血ＫＩＬＬ！！』ってキムラスカ側で叫んでいたのを何人か目撃しているそうです」

「「……」」

イオンが顔に似合わない言葉を叫んだことも驚きだが、その内容

でもかなりのものだ。
つまり、あの道の破壊痕はまさか……

「（総長マジヤバかも……）」
「（さよなら・・・大好きだった兄さん）」

ハーミットの事をよく知っているダアト所属のアニスとティアはヴァンの結末を簡単に予想できた。その内、ティアは現時点では言ってはならぬセリフが出てきてしまっているが・・・気にしないでおこう。

「つまり、その二人はもしや・・・」

ジェイドは何か気がついた目をして、視線を休憩所のドアの方へと向けていた。いや、正確にはドアの向こう側だろう。しかし、しばらく向けた後は直ぐ様視線を戻した。世の中には知らない方が良い事もあるのだから……

―――――――――――――――――――――

その後、それぞれ別々の部屋に別れた所、その一人ルークは荷物袋から一冊のノートを取り出す。それは日記帳であった・・・ルークは七年前までの記憶が無い。いや、実際はレプリカとして作られた為に七年間の記憶しか持っていない。
だが、そんな事は露知らず、記憶障害の再発を恐れたファブレ公爵・夫人他、関係者は予防策として、ルークに日記を書かせる事を提案した。最初はめんどくさいとルークは考えてもいたが、毎日言われて書かされていく内に毎日の日課ともなっていたのだ。

サラサラとペンが紙の上を走る音が聞こえていく。

「ご主人様、今日も日記をつけてるですの？」

机についてノートに書き込んでいるルークの手元を、ミュウが覗き込んできた。

「……んー。めんどくせぇけど、やらねぇと母上たちが心配すっからな」

「ミュウもお手伝いをするですの！」

「はあ？　何言ってんだ、このブタザル」

「ミュウ、フォニック文字書けるですの」

「……じゃあ、書いてみろよ」

「うーんとうーんと……」

ペンを両腕で抱きかかえるようにして、小さなチーグルは紙面いっぱいに文字を書き始める。

『きょうは、ごしゅじんさまにさんじゅうはちかい、ぶたざるといわれたですの』

「……つーか、数えてんじゃねーよっ、このブタザルが！」

「みゅうううぅ。３９回目ですの……」

怒鳴られて、ミュウは悲しげに耳を垂らした。

それと同時に、ドアにノックの音が響きわたる。

「入れ」

ルークはそれに屋敷で対応していた返事で同じように答えた。彼にとってはこれしか知らない・・・態度がでかいとも考えられるが、これがルークにとっての『当たり前』でもあるのだ。

ドアが開かれると、そこには一人のキムラスカ兵が立っており、敬礼して喋る。

「失礼、出航の準備が完了いたしました。これから出発の用意をとお伺いに参りました」

「そうか、ご苦労・・・下がっていいぞ」

「ありがとうございます」

キムラスカ兵は一礼すると、部屋のドアを静かに閉める。準備は整った・・・ルークは小さな荷物袋を腰に掛けると、ベッドの上で寝転んでいたミュウを手で鷲掴みして連れていく。

「ほら、さっさといくぞブタザル」

「ハイですの！！」

少し、初対面の人間が見れば動物虐待に見えかねない光景だが、彼らにとってこれも当たり前の光景となっていた。

部屋から出て休憩所の出口であろう場所へと廊下を歩いていく。今は誰もいないので少し静かだ・・・そんな時であった。

ギギィ……

唐突に少し遠くの部屋のドアが開いたのだ。その瞬間、ゾアッという感じな空気が部屋から漏れてくるような感触が伝わってくる。まるで瘴気そのものな感じだ

「へっ……？」

何故そんな風になっているのか分からずにいるルークは一旦立ち止まって様子を伺ってみる。すると、突然開いたドアにガシッ！！としがみつく腕が出てくる。変に軋む音を響かせながら“ソレ”は全貌を明らかにしていき……そこには……

「あひぃぃぃ～～～！！！」

「えっ……せ、師匠？」

なんと、ヴァンが凄く青ざめた顔をして部屋から這い出でてくるかのように出てきたのだ。ヴァンの足はもはや生まれたての子鹿のようにガクガクと震えている。

「ふぅ、こんなもんか・・・」

その次には、右手に持った鉗子をシャキンシャキンと動かしながら、一仕事終えたかのような清々しい表情をして出てくるハーミットの姿が・・・顔に少し赤い『ナニカ』が付いているが気にしないでおこう。

「ヴァン師匠！？　何があったんですか！？」

「お、おぉ・・・ルーク・・・か」

ルークはヴァンの変わり果てた姿を見るや、急いで駆け寄り崩れ落ちそうな彼の体に肩を貸してあげた。ハーミットの方は今此処にルークがいるのに考えられなかったというような、少し驚いた顔をする。

「結構早い到着だな、ルーク」

「おいオッサン！！　ヴァン師匠に何しやがった！！！」

「何って・・・ＯＨＡＮＡＳＨＩだな……」
「はぁっ・・・？」

ハーミットは正直なことは省いた言い回しで説明しておいた。詳しく喋るとマズイ言葉がマシンガンのように出てきてしまうのでＲ指定規制を掛けるのがお約束である。

「ルーク、ここにいるの・・・ね？」

そこへ、少し遅く来たティアが廊下の曲がり角から現れてくる。そして、そこに居た三人の姿をみるや、なんと表現していいかわからない顔をして固まった。

「せ、先生・・・兄さん・・・」
「おや、ティアちゃんも居たか。まぁいいか、そろそろ船も出発するし俺も用意するとしよう……おいヴァン、お前も用意しな」
「は、はいぃぃぃ――――！！！！！」

ハーミットに話しかけられるやヴァンは怯えた声をして部屋へと急いで戻っていった。先程まで行われていたＯＨＡＮＡＳＨＩがかなり堪えたようだ。

「じゃ、また後でな」

そう言って、ハーミットは出てきた部屋へと再び入ってドアを閉める。その場に残るのはわずかな沈黙のみである。

「おいティア！！　お前ってダアトの人間だよな？　あのオッサンとヴァン師匠ってどんな関係かわかるか？」
「・・・先生と兄さんは子供の頃からの親友だそうよ。先生の方が

五歳年上だけど……私も小さい頃に時々会って遊んで貰ったり世話をしていただいた事もある人。私達家族にとっても大恩ある御方なの」

「ヴァン師匠の親友!?　マジかよ!!!」

ルークは己の憧れの師の親友でもあったというハーミットの事実に目を開いた。

「けど、なんでオッサンはヴァン師匠を虐めてんだよ!!　親友だったらもっとこう・・・仲が良いとかなんか……」

「・・・ルーク、兄さんと先生を私達の常識で図るのは間違いだと一応言っておくわ。　ちなみに、先生が兄さんを怒る理由は『謡将のくせしてロクな仕事をしない』からだそうよ」

「ぁ、で……でもよ!!　ヴァン師匠も他の事で結構忙しくて自分の事に手が回らないって言ってたしよ……だからじゃねぇか?」

ルークは少しだけヴァンを擁護する発言をするが、次のティアの言葉で一気に息をつめらせる。

「甘いわ・・・先生は兄さんの仕事の最高約四倍は処理しているそうよ」

「う……」

「その中には本来兄さんがやるべきものだった物も含まれているって噂だけど」

「……」

なんか、事情を聴けば聴くほど、ヴァンの事がなんか情けなく感じかけていたルークであった。

ちなみに、ハーミットの仕事内容はというと……医学研究・外科手術・医学＋治癒士講習（＋実施訓練）・書類決算・診察・手術依

頼地への赴任・ｅｔｃ・・・・・・
そこに他の人間の仕事も勝手に加えられては普通の人間もふざけるなと怒り叫ぶくらいにハードなスケヂュールを持っている。

――――――――――――――――――――

集合場所である連絡船の前にルークたちは並んでいた。アルマンダインが兵を伴って見送りに来ている。

「お世話になりました」
「よい旅を！！」

代表して謝辞を述べたイオンにアルマンダインが声を返すと、兵たちがサッと敬礼した。
空は晴れている。その色を映したように、海は澄んで青い色をしていた。船のタラップに足をかけると、フワフワとどこか頼りない感触があって、ルークは驚いて身を硬くする。
こんなに間近に海を見たのは初めてだった。無論、船に乗るのも。もしかしたら記憶を失う前に経験があるのかもしれなかったが、覚えていないのだからカウントはできない。

「やーっと帰れるか。何気に大変だったな」
「いや、航路の都合で途中ケセドニアに立ち寄るけどな」

ガイが言った。

「マルクト側の領海を通ることになるが、陛下の取り計らいで特別に通行を許可されたんだ」
「ふーん。なんかめんどくせーけど、ま、旅もいいかな」

「お前、ヴァン謡将がいるとご機嫌だなー」

ガイは苦笑している。「へへ」と笑い返した視線の向こうを、鼻歌を歌いながらピンクの軍服の少女が横切っていった。背中には不気味可愛いヌイグルミが揺れている。

「……なあ、ティア、聞いていいか？」
「なにかしら？」
「あのさ、なんかみんな普通にしてるから聞きにくかったんだけど……。アニスの人形って、どうして動いてるんだ？　譜術か？」
「……さあ」
「さあって……」
「俺も気になってたんだ。おい、ルーク。聞いて来いよ」

ガイが声を潜めて命じてくる。

「俺が？　んなのガイの仕事だろっつーの」

ルークは眉を上げたが、「頼むよ」とガイにお願いされるような感じで言われてしかたなくアニスに近付き、コホンと咳払いをして話しかける。

「アニス、ちょっと聞いていいか？　そのヌイグルミ……」
「トクナガのことですかぁ？」
「……トクナガ、ね。とにかくそれって、何ででかくなるんだ？」
「それはですねぇ。乙女の秘密です☆」
「はあ？」
「譜業の一種なんですけど、詳しいことはローレライ教団の秘密です。だから乙女の秘密なのです」
「……ってことらしいけど、ティア？」

救いを求めるような目をルークは向けたのだが、ティアの反応は冷たかった。

「……私は人形士（パペッター）じゃないもの。分からないわ」

当然ながらガイにも分かるはずがない。訊いたところで謎は謎のままだった。とりあえず、アニスのような戦い方をする者を『人形士（パペッター）』と呼ぶことだけは分かったが。

「……うーん。気になるぞ、くそ！」

外の世界にはあまりに謎が多い。そしてその多くは究明されることすらないのだった。

余談だが、トクナガを作ったのはディストであり……その中には最高峰の譜業技術が組め込まれており、他の譜業士が知れば土下座をしてでも解体して調べてみたいと言うほどだとはこの中では誰も知る由もない。

もし、アニスがこのことを知ったのなら、トクナガを餌にして調査料を高く搾り取ること間違いなしであろう。

長い長い航路によって海は既に夜の闇に包まれ、月の光だけが照らしていた。

連絡船は夜の波の上で揺れながら進路を続ける。

その船のとある一室、小さな明かりを灯してベッドに座り、瞑想をするかのように静かにしているイオンの姿があった。

コンコンッ！！！

そこへ、ノックの音が響きわたり、イオンは「どうぞ」と一言言って来客を迎え入れた。

ドアが開いたその先にはジェイドが佇んでいた。

「イオン様、お休みにならないのですか？」

「・・・少し、考え事をしていたんです――これからの事を」

「えぇ、バチカルに着いてからが、ようやくの本題ですからねぇ」

そうだ、肝心の和平が成立できなければ意味がない。気を引き締めて行かなければならない。

「ルークの力を借りれば陛下には謁見できると思いますが、不安が消えないのです」

「六神将、グランツ謡将、そして私たち……。役者は揃ってきましたが、重要な役者がまだ袖から出てきていませんからねぇ」

「モース……ですね」

大詠師モース・・・今回の和平でもっとも問題となる存在だ。預言に忠実なあの男のことだ。彼らの和平に異を唱え、後ろから邪魔をしてくる可能性もある。現にモースは今キムラスカに赴いており、キムラスカ国王インゴベルトにも預言がらみで直接の意見を言うことも出来る立場ともなっている。

「ダアトでも、モースは強い発言力を持っています。それに比べ……僕はお飾り程度な地位の導師という椅子に座った子供。派閥を作って改革派の頂点であろうと、実質的な活動は下の者達がやっています」

「えぇ……」

「だからこそ、今回の和平でマルクトとキムラスカの関係を必ずや纏め上げてみせます。いつまでもモースの思い通りにするわけにもいきません」

イオンは決意の眼差しをジェイドに向ける。その瞳の奥に宿る強い意思はジェイドの心を少し揺さぶる。

「ジェイド、この“勝負”……絶対に勝ちましょう」
「……初めて会われた時と比べ、強くなられましたね」
「えっ……？」
「正直申しますと、貴方と初めてお会いしたときは『非力な子供だ、導師としての力をうまく扱えるのだろうか？』と考えてました。ですが、今は違う・・・今なら『立派な意義を持つ一人の人間：イオン』として見ることが出来ます」
「ふふふ・・・ジェイドにそう言って貰えるなら心強い」

二人はしばらくの間、楽しそうな顔をして笑っていた。

一方、甲鈑ではハーミットが手すりの台に座りながら月に照らされ、ユラユラと波を打ち続ける海を見続けていた。
彼にはまだまだやるべきことが多くある。その一つとして、ルークに関してだ……
今回の誘拐事件の問題は事実で言えば、こちらのミスであった。まさか、擬似超振動を起こしてしまうなどとは予想できなかった。そのことは共に計画を提案していたファブレ家側も理解はしているだろうが、事が事だ……不本意であるとはいえ、ルークをマルクト側へと飛ばしてしまった。
しかし、目撃者がファブレの邸宅内にまったくと言っていいほど居なかったのが幸いだった。もし、ヴァンやペール達以外でティア

の正体を知っている部外者が出ていようものなら、これはダアトの問題としてキムラスカから抗議の文が送られていたことだろう。

そうなると、　キムラスカ→ダアト→マルクト　な抗議の送り先のアローダイアグラム的な図が出来上がっていただろう。

「ルークを無事保護してバチカルへ返せるとはいえ、シュザンヌ様・・・ぜってー怒ってるだろうな」

ハーミットの脳内には豪鞭を振り回し、エクスプロードのような上級譜術を放って“制裁”してくる笑顔のシュザンヌが浮かび上がってくる。

やべ、一瞬考えただけでも鳥肌が……

「手紙もカンタビレの方に届いたかな」

現在、デオ山脈近くの土地に遠征として赴いているカンタビレには今回の件を伝えておいたし、いざというとき……アグゼリュスの住人を軍事違法とはいえ、避難させてもらうよう頼みを記しておいた。

普通、他国の者が危険であったとはいえ、災害の避難などの行為を無断に斡旋して行うと、下手すれば国家問題に発展する事もある。ローレライから唯一受け取った秘預言の内容にある『アグゼリュスの崩壊』……これを知っているのはキムラスカ上層部以上、ダアト詠師以上、俺、ヴァン、ユリアシティの住人・・・ごく一部の人間にしか知らされていない。俺から教えたアッシュやシンクだとかは別だが……マルクトはダアトの事をピオニーの代に変わってから懇意にしなくなったから受けが悪く、秘預言についての事を教えられなかっただろうな。

「ま、懇意であろうがなかろうが、その国の街の崩壊をダアトがわざわざその国に言うわけないだろうしな」

ダアトとはそういうところだ。預言を成就させるためならどんなことだってする。しかし、アグゼリュスか・・・今現在でも瘴気問題の影響を受けている住人は五万といる。カンタビレ達が一々非難指導をしていては、崩壊範囲から全員を避難させることなんざ、秘預言に記されているルークがアグゼリュスに来る日時になっても間に合わないだろう。

「だが、マルクトはイオン誘拐での『借り』を作ってある……」

それをちらつかせて『アレ』を借りることが可能となるなら……

「先生……」
「んっ……？」

物思いに老けていた所、唐突にハーミットに声をかけてきた人物がいた。

瞑っていた目を開いて視線を左に向けると、そこにはティアが居た。

「おぅ、どうしたんだいティアちゃん」
「あの、少し眠れなくて夜風に当たってこようとしたんですけど……」
「そうか、で……なにか用かい？」

ハーミットはティアに何か聞きたいことがあるか聞いてみる。

偶々遭遇したことだし、今ここで彼女から何かを知らせておくのもいいだろう。

「明日到着するケセドニアで思い出したことがあるんです。先生はそこにある孤児院の支援を行なっていると聞きました」
「あぁ、ファミリアの事か」
「孤児達には親がいないって事で思いついたのですが……私、自分の父や母の事を兄さんから詳しく聞いたことがなかったんです」
「……」

ティアはヴァンから自分達の父親と母親はお前が赤ん坊の時で亡くなったと聞いている。兄から自分の父と母の偶像を口伝で知らされていようと、完璧には理解することは出来ない。

「先生は私達の父と母を知っているんですよね・・・先生からみて二人はどんな人だったのですか？」
「そうだな……」

ハーミットはティアに15年前で記憶されたフェンデ当主とファルミリアリカの姿を伝えていく。出会いはヴァンがぶつかってきたのが切欠であったとか、ティアを身篭った事を伝えるとかなり喜んでいたとか・・・今ではもはや、『取り返す事も過去でしかない』思い出を語っていく。

「そんな人だったんですね……兄さん以外から二人の事を聞くなんて初めてです」
「……思えば、あの頃は一番楽しかったなぁ」
「あ、そういえば先生のご両親は今どうなさっているんですか？お住まいは？」
「……」

この時、ティアは見逃さなかった。ハーミットの顔が一瞬悲しそ

うな顔をしたのを……

「……ぁ、あの……もしや、失礼な事を……」

「……死んだよ。ホドの崩落で発生した津波に住んでたフェレス島共々巻き込まれてな……」

「……ッ！？　ごめんなさい！！」

「気にすることはない」

ティアは人の古傷を抉るような真似などしたくはない。だからこそ、これ以上は聞こうとはしなかった。

「当時、ホドに居た俺やヴァンは崩落から逃れられず・・・ヴァンが譜歌を歌ってくれたおかげで無事なまま魔界（クリフォト）へと降り立った。そこへ調査しにやってきたユリアシティの住人によって助けられたんだ」

「……」

ハーミットはホドの崩落がヴァンに行われたマルクトの超振動の実験の失敗によるものだとは、彼女が生きてきた１６年間の間、ずっと明かすことはなかった。あれはヴァンの“闇”そのもの……肉親であろうと、無闇に伝えてヴァンの傷を掘り返すような真似などしたくはなかったからだ。それに、当時幼かったティアに余計な心配を掛けてもらいたくなかったヴァンからの要望でもある。

「そこからはティアちゃんが生まれてから覚えている通りのことだ」

「兄さん……」

「ティアちゃん、色々とヴァンと対立しているけど、辛くはないかい？」

ハーミットはティアの事を心配する。肉親を敵にするということ

は、どれほどの負担となるか……それは想像しきれるものではない。いくら軍属でそんなものは私情だと言われて捨てるべきだと教えられても、そんなことを完全にやって退けるのはロボットに近いような心を持つ僅かな人間だけでしかない。

「何時もそんな重い物背負ってちゃだめじゃないか。忘れないで、君は一人じゃないんだから……」

「ですけど、皆を巻き込む訳には……」

これは自分とヴァンの問題……解決できる範囲である以上は自分がその責を背負うべき……

「誰かに頼るっていう『正直さ』もまた【強さ】なんじゃないかな？」

「……はい」

夜の海は静かに波打っていく……それはまるで心臓の鼓動のように――――

原作編　第十話（後書き）

リクエストまだ承っています。
知らぬ方は前話の後書きにて……お待ちしております。

原作編　第十一話（前書き）

リクエストアンケート続行中です。
おそらく今回が最後となり、次話で始めたいと考えています。

原作編　第十一話

この二ヶ月ほどの旅はルグニカ大陸をひたすら南に下るものだったが、カイツール軍港を出港したキャツベルトと呼ばれる連絡船は海路を北上していた。なんのことはない、これから行くケセドニアは最初に飛ばされたタタル渓谷のごく間近にあるのだと聞いて、ルークは口をあんぐりと開けてしまったものである。

「これまで散々苦労して歩いたのは何だったんだよ！！」
「ローテルロー橋が落ちちまってるからなぁ……おかげで俺も苦労したし」

ガイは顎に手を当てて困った顔をしている。そうだ、あの橋が壊されるのを目の前で見たんだった、とルークは思い出した。土地勘の無さでうっかり橋を渡ってしまったために、こんなややこしいことになってしまったのだ。

「そういやお前、橋が落ちてんのに、どうやって俺を捜しに来れたんだ？」
「まあ、色々とな」

ガイは笑って答える。
その時、船室の扉がノックされた。赤い鎧のキムラスカ兵が入ってきて敬礼する。

「ルーク様。グランツ謡将がお呼びです。甲板でお待ち下さいとのことですが」
「ヴァン師匠が？　分かった」

兵士は再び敬礼して去って行った。

「じゃ、俺ちょっと行って来るわ」

そう言って、ルークは扉に手を掛けた。「なあルーク」と背中に声が掛かる。

「お前、俺と初めて会った時のこと、覚えてるか？」

「だから覚えてねぇっつーの。誘拐される前じゃんか」

「……そうだよな。うん。お前、全然違うもんな」

「……はぁ？」

「いや、お前がお前でよかったってことだよ」

ガイは笑って言葉を切った。「ヘンな奴」と苦笑してルークは扉を押し開ける。

廊下は薄暗かったが、小さな窓からは青い海が見えた。――が。しばらく歩いたところで、ルークは突然頭を押さえてうずくまる。

「ご主人様！？」

ミュウが駆け寄ってきたのが分かったが、それ以上に大きく、頭の中に声が響いていた。

「（またかよ……っ！）」

――目覚めよ……早く……我が声に……――

「いてぇっ！！！」

いつものアレだ。幻聴と痛みは暫く続いたが、キーーンと響く共鳴音が引いていくと共に嘘の様に消えていった。

「くそ、折角の船なのに、頭痛とかきやがるし、ったく……」

悪態を吐きながらルークは立ち上がる。ふと、窓の外の海に目を奪われた。

「ま、でも、悪くないかもな。海も……」

既に船旅を始めて数日を経ている。その間、様々な海を見た。朝の海、昼の海、夕の海、夜の海。凪いでいる時、荒れ気味な時。面白いほどに相が違ったが、どれも……。

「海はすごいですの～！！　周りみんな水だけですの～！！」

足下のミュウが騒ぎ、ルークは緩めかけた頬を引きつらせた。

「ウゼー！！　いちいちはしゃぐんじゃねぇ！！！」
「みゅう……ボク、海は初めてなんですの。びっくりしたんですの」
「ったく。海ったって大したことねーじゃねーか。やることもねーし、飽きちまったっつーの」
「でも、ご主人様さっき『海も悪くない』って言ってたですの」
「ば、バカ！！　このブタザル！！　俺が喜んでるってのか！？あん――――！？」
「みゅ、みゅぅ……」

その頃、甲板ではイオンとアニスが並んで潮風を浴びていた。
普段、ダアトで住む二人にとっては潮風は珍しい物だ。独特の香りを漂わせる匂いは鼻を良い方向で刺激してくれる。

「やっぱり海はいいですねぇ、イオン様」
「えぇ、僕も仕事以外で航海することはなかったので久しぶりです」

強い日差しは相変わらずと言える程、甲板と一緒に二人も照らしていた。

―チャポンッ!!―

静かな風景の中、ふと一つの水音が響く。
イオンとアニスは何だろうかと思いつつ、その音がした方へと向いてみた。
そこには、釣竿を海に向けて糸を垂らし、のんびりとその場に座るハーミットの姿があった。

「あ、先生!!」
「ん？　あぁ、こんにちわお二人方」
「何をなさっているんですか？」
「何って……釣りですが？」

「つり・・・つりってなんですか？」
「「はっ・・・？」」

イオンは本当に知らないと言わんばかりにキョトンとした表情で聞いてくる。そんな問いかけにアニスとハーミットは思わず唖然とした声を出してしまった。

“今”の導師イオンはフォミクリーで作られたレプリカだ……彼には刷り込みの記憶と二年分の培った記憶した残っていないのだ。刷り込みでは導師としての最低限の知識しかなく、二年間の記憶では、世俗の知識など与えてもらう事もなかった彼にとっては、『釣り』とは未知な存在以外ほかならない。

「あ～イオン様、釣りといいますのは専用の道具を使って魚とかを捕まえる一種の娯楽のことなんですよ」
「そうなんですか。すみません、僕は世俗にはあまり詳しくないものでして・・・」

イオンはシュンとしつつ、恥ずかしそうな顔をして謝った。

「本当なら湖や沼地でやるものなんですがね……連絡船でさりげなく置かれていた物を借りたんですよ」
「ですがハーミット、そうして座っていては釣りという事を出来ないのではないですか？」
「ははは、此処にある釣竿を持つのは魚が掛かった時だけです。じっと持っているのもいいですが・・・生憎めんどくさいもんで」

釣りは根気強さが執拗な娯楽だ。釣る側と釣られる側の我慢勝負とも言える。

「……試しにやってみますか？」

「え、いいんですか？」
「道具はまだ予備でありますからね……」

イオンは興味津々という感じで差し出された釣竿を受け取った。既に組み立て、釣り糸、釣り針は装着済みだ。後は餌を付けるだけである。

「ぶ～ぶ～、なんだかアニスちゃん置いてけぼりって感じ」
「あぁ、悪い悪い」
「うんと……こうで……あれ？」
「導師イオン、餌は摘むように持っては針にさせませんよ」
「結構、難しいですね」

アニスが不満を漏らし始めているが、イオンはまず餌を針に着ける所から始めており、ハーミットはそれを指導している。

「あ、アニス。折角ですから貴方もやってみませんか？」
「ふ～ん、釣りかぁ……でも折角だから私もやってみよ～っと♪」

そう言って、アニスが同意の言葉を送られたので、イオンは振り向いて竿と餌を持ったまま近付く。

だが、そこが不味かった……

「あ、もし良ければ一緒に針に餌を付けるのを手伝って……」
「アンギャァァァァァァァァァ――――――！！！！！！」

イオンが振り向いたと同時に、アニスは絶叫を上げた。そして、そのまま素早く後ろへ後ずさっていく。
何故アニスが絶叫を上げていたか・・・それはイオンの右手に答

えがあった。

――――ウネウネウネウネッ！！！！！！――――

「ど、どうしたんですかアニス！！！！！！」

スタタタタッ――――！！！！

「ひいぃぃぃぃ！！！！　来るな！！！　来んじゃねぇぇぇぇぇ――――――！！！！！！　ぶ＞放送できないよ！！＜」

実は、イオンは今、釣り餌として定番な『ミミズ（種名：ルグニカオオミミズ）』を手掴みしている。虫は女性にとっては大抵、苦手な物だ・・・それはアニスにも当てはまる。

「導師イオン・・・手の物を放していただかれては……」

「え、あ・・・はい」

ハーミットが助言を施してあげた所で漸くイオンは手に持っていたミミズを放す。床に落ちたミミズは未だウネウネと元気に這い回っていた。

「アニスちゃん、事が事でも流石に導師に向かってぶ『表示できないよ！！』は言っては駄目だからね」

「すすすみませんイオン様！！！」
「いえいえ、ですけど・・・アニスもあんな風に怒鳴るもんなんですね」
「いや、割とやってますよ。この前は『月夜ばかりと思うなよ』とか『調子こいてんじゃねーぞこの【アウト！！】』とか『奥歯をガタガタ言わせたろーか【きゅっぷい！！！】』だとか幅広い啖呵が……」
「先生！！！　なんでバラすんですか――――！！！！！」

アニスは怒ってハーミットを睨みつけ、そんな姿をイオンとハーミットは笑って微笑ましそうに見ていた。

そんな時、釣竿がギギィッとしなり始めていた。どうやら獲物が掛かったようだ。

「おし、キタキタキタアァァァ――――――！！！！！」

ハーミットは急いで釣竿を手に持ち、竿を巧みに使って海中で暴れる獲物を引っ張りあげようとする。力の加え方をタイミング毎に変え、釣り糸を切らぬようにと慎重に引いていく。

「頑張ってくださいハーミット！！」
「いけ～！！！」

後ろから二人の声援も聞こえ、ますます気合を入れていく。

ザパアァァァ――――ン！！！！！！

そして、遂に獲物が引き上がる。

さぁ、待望の獲物よ！！　努力という名の喜びを与え……

『キシャアァァァァァ――――――！！！！！』

「……」

「……」

「」

むしろ、絶望しかなかった。

釣り上げたのは魚ではなく、下半身は魚類だが、上半身は得体のしれない生物となった魔物であった。

「……釣りって結構エキサイティングな遊びなんですね」

「イオン様、それなんか合ってるようで間違っているような」

「・・・海へ帰れ！！！」

『シャギイィィィィ――――――！！！！！』

二人は若干現実逃避しかけ、ハーミットは甲板に吊り上げられた未確認生物（ＵＭＡ）を思いっきり蹴り上げ、見事無事（？）にリリースしてやったのであった。

そんな出来事が数分前にあったのを知らず、ルークは今は誰も居ない甲板へとやって来た。いや、誰も・・・というのは間違いだ。何者かが海を眺めているのを見つける。

「お、ティアじゃん」

「ルーク？」

ティアは突然の来訪者に若干、目を大きくするが、それが知っている顔の人間でもあることにより、直ぐ様表情を元に戻す。

「そこでボゥッとして突っ立ってっけど何してんだ？」

「別に、海を眺めているだけよ。特に意味はないわ」

「ふ～ん・・・」

ルークはそれを聞くと、後は興味なさそうにして手すりに腰掛けてその場に座る。

すると、その場には静寂さが漂い、やや気まずい感じになっていた。両者とも、ウズウズとしてこの居心地の悪さに少しづつ耐えれなくなりつつある。

それを考慮してか、ティアが話を立ち上げて来る。

「大佐から聞いたわ。貴方、正式な第七音譜術士じゃなかったのね」

「あぁ、お前、そういや前も第七音譜術士がどうとか言ってたな。それって結局何なんだ？」

「……お屋敷の家庭教師に習わなかった？」

「しらねーよ。記憶がねーんだもん」

「記憶障害を起こしてるのは七年前までしょ？　その後は勉強しなかったの？」

「……」

ルークは黙って甲板の手すりまで歩いた。そこからなら、空がよく見える。

「他に覚えることが山ほどあったからな。――親の顔とかさ……」

あの頃、満足に出来ることといえば窓から空を見上げることくらいだった。

家族の顔を見分けることも、言葉を操ることも、歩き方すら忘れていた。――知らなかった。真っ白になっていた自分だったから。習う機会がなかったわけじゃない。習ったのかもしれない。けれど、他に覚えることがあまりに多すぎて、世界のことにまで気が回らなかったのだ。

ティアは、しばらくの間押し黙っていた。やがて背を向け、喋りだす。

「……全ての物質には音素が含まれていて、音素は六つの属性に分かれているの」

「な、なんだよ。教える気になったのか？」

「この音素を星の地核にある記憶粒子（セルパーティクル）と結合させると、膨大な燃料になる。だから記憶粒子を上空の音譜帯に通して、世界中に燃料を供給する半永久機関を作ったの。これが、プラネットストーム」

「難しいな。……それで？」

「ところが、プラネットストームは六属性の音素と記憶粒子の突然変異を引き起こしたの。

そうして誕生したのが七番目の音素。これが、第七音素。これを用いて譜術を操るのが第七音譜術士」

「なんだか途方もない話だな。でも俺は譜術士じゃねぇぞ」

「だけど貴方は擬似超振動を起こした。第七音素を使う素養があるんだわ。これだけは先天的な素質だから」

「そういや、ジェイドは使えないもんな。第七音素」

「ええ。第七音譜術士は数が少ないの。預言を詠む預言士、それに治癒術師も第七音譜術士ね」

要するに、特別な音素を使える特別な譜術士ってことか……と、ルークは理解する。

「……ごめんなさい」

不意に、ティアが謝った。

「な、なんだよ。どうしたんだよ、急に？」

「私……貴方の記憶障害のこと、軽く考えていたみたい。今まで私、何度か貴方に意地の悪いことばかり言っていたわ。自分が恥ずかしい……」

「べ、別に、そんな……」

「本当にごめんなさい」

そう言うと、ティアは走り去った。

一通り甲板を見て回ったが、ヴァンはまだ来ていないようだった。

疲れたらしく、ミュウは片隅で眠っている。ぼんやりと海を見つめていた時――また、いつもの頭痛が襲った。

「……ってぇ……いてぇ……っ！」

あまりの痛みに悲鳴を上げ、膝が砕けてしまう。――と。

異変が起こった。ルークの体は独りでに立ち上がり、両腕が前に伸べられていく。

「（体が勝手に……動く……！？）」

「な……なんで勝手に動くんだよ……」

声だけは絞り出せた。だが、それ以外は全く自由にならない。異様な事態に、恐怖に襲われる。

――ようやく捉えた……――

頭の中に声が響いた。

「だ、誰だ！」

――我と同じ力、見せてみよ……――

差し伸べた両腕の先に白光が凝り始める。空気が震えて、髪や上着がヒラヒラと揺れ動いた。何かが……溢れ出そうとしている。

「お前が俺を操ってるのか!?　お前何なんだ！　やっぱり幻聴じゃ……」

ルークは呼びかけたが、声は応えようとしない。

共鳴音が頭の中にガンガンと響いた。白光は少しずつ大きくなる。それに気付いて、ルークは目を剥いた。光に飲み込まれた手すりが、

消滅していく。跡形もなく。

「な、なんだよこれ……！　イヤだ、やめろぉ！」

「ルーク！　落ち着け！」

パニックを起こしかけたとき、耳に馴染んだ声が聞こえて、後ろから抱きしめられた。ルークの強張った両腕に手を添える。

「落ち着いて深呼吸しろ」

「ヴァン、師匠……っ」

どうにか視線を動かして確認し、ルークは一気に安堵する。ふう、と息がつけた。

「……そうだ。そのままゆっくり意識を両手の先に持っていけ」

言われたとおりに意識を集中していく。反対に、頭の芯はぼんやりしていくような気がした。あまりに頭痛と共鳴音が酷すぎるせいかもしれない。

「ルーク。私の声に耳を傾けろ。力を抜いてそのまま……」

共鳴音は更に酷くなっていく。優しく耳に囁かれるヴァンの声を

聞きながら、ルークはがくりと全身の力をなくし、気を失った。

――――――――――――――――――――

「ふぅ、久々に釣りをしてみたが、やっぱり久々となると感覚が鈍って良いようにできないか」

ハーミットはさっきまで使っていた釣具を返し、部屋へと戻る所であった。

今回、釣りをしてみたのは本当に偶々だった。何となく目に入ったから……それが一番の理由でもある。

ハーミット……ハイル・シュヴェールは元は漁師を父と持つ一人の人間だった。彼と永遠の別れになるまでは、よく漁業の手伝いをして共に家族の生計を立てていた。

釣りもその一介だ。網漁を基本としたが、年に何度か大物が採れる日は釣竿を使った一本釣りに変更していた。

あの頃はこんな大きな船ではなく、小さな小舟を使って毎日海へ出ていたものだ。

偶に一人で船を出して遭難しかかった事があったが、案の定怒られた。それも父が漁師仲間を駆り出して全力で探してきたからだ。

あれには流石の俺も反省したな。母も大泣きしていたし……

「しかし、釣れたのが“アレ”では今までの感傷はどうなるんだよ……」

そこんところは誰かから教えてもらいたい気がしていた。

――ゾワッ……――

「……ッ！？」

その時、一瞬この場の空気が・・・この辺の空気が変わった気がした。

なんだこれは……今まで『乱れ』は感じてきたが、これ程までの『違和感』は初めてだぞ！？

――……く……え……――

「ぐ……がぁ……！！！」

何かが頭の中に響くと共に激しい頭痛が俺を襲う。

すると、俺の中の第七音素が体から溢れ出すように放出していく。

「第七……音素が……なに……が――――！！！」

体から虚脱感が一気に襲いかかるような感じだ。

一体何が起きている！？　そんな事を考えている間にも第七音素は体から抜け出ていく。

音素の流れが治癒譜術を使うときのような……いや、それよりももっと強力な感じだ。

まるで、強大な力の行使の為に他から持っていかれている……なんだこれは！？

―我……なじ……せて……―

今でも謎の言葉は頭の中で響きわたっていく。だが、言葉がとぎれとぎれで聞き取るのがやっとな感じだ。

俺の中の第七音素……フォンスロットを閉じて漏出を防ごうとするが、強引に開かれて防ぎようがない。まるで『本来の持ち主』に帰っていくかのような……本来の持ち主？

ローレライか――――！！！！！

「あんの糞音素集合体が――――！！！」

だが、ローレライと言えども……俺に干渉をするのは『全ての』惑星オールドラントに歪みをもたらせてしまうため、禁止することを話した筈だ。

しかし、現に奴の影響をこの身に受けている。

まさか、『この世界』のローレライが干渉しかかっていると言うのか！？

それはありえる、俺の体を構成している音素の一部である第七音素はローレライから授かった『ローレライ自身』でもある。

それなら大いに要因が組み合わさっているからな。

「まず……い、ちから……が……」

既に限界であった……虚脱感はハーミットの限界を超えており、抗う程の力はもはや残されていなかった。

そのままゆっくりと膝を付いて、床へと倒れていった。

「……」

虚ろな目が徐々に閉じられていく。視界に闇が被っていく。

彼が最後に見たものは……遠くで何者かが部屋のドアを開けて出てくる瞬間だけであった。

――――――――――――――――――――

「ルーク、大丈夫か」

気がつくと、ルークは甲板に横たわっていた。側にヴァンが立っている。

「俺……一体何が……」

「超振動が発動したのだろう」

「超振動……？　タタル渓谷に吹き飛ばされた時の……？」

「確かにあの力の正体も超振動だ。不完全ではあるがな」

ルークは立ち上がった。

「師匠……。俺どうなっちまったんだ……？」

恐ろしかった。自分が自分でないような恐怖。そして、異様なあの力……。

「お前は、自分が誘拐され七年間も軟禁されていたことを疑問に思ったことはないか？」

「え……？」

返ってきたのは、思いがけない問いかけだった。

「それは……父上たちが心配して……」

「違う。世界でただ一人、単独で超振動を起こせるお前を、キムラスカで飼い殺しにするためだ」

ヴァンは言った。――飼い殺し。聞き慣れない言葉を聞いて、ルークは狼狽する。

「師匠、待ってくれよ。何がなんだか……。だいたい超振動って……？」

「超振動は第七音素同士が干渉し合って発生する力だ。あらゆる物質を破壊し、再構成する。本来は特殊な条件の下、第七音譜術士が二人いて初めて発生する」

「それを俺は一人で起こせる？　今みたいに……？」

「そうだ。訓練すれば自在に使える。それは戦争に有利に働くだろう。お前の父も国王もそれを知っている。……だからマルクトもお前を欲した」

父も国王も知っている。

戦争に有利に。

ヴァンの言葉がガンガンと響いた。頭痛は治まったはずなのに、まだ痛む気がする。

「じゃあ俺は……、兵器として軟禁されてたってのか!?」

そして気付いた。

「……まさか一生このまま!?」

二十歳の成人の儀を迎えたら、軟禁は解かれる。自由になれるのだと、そればかりを聞かされて七年間を過ごした。けれど、兵器として利用するために閉じ込められていたのだとしたら。

「ナタリア王女と婚約しているのだから、軟禁場所が城に変わるだけだろう」

「――そんなのごめんだ！　確かに外は面倒なことが多いけど、ずっと家に閉じ込められて、戦争になったら働けなんて……」

「（兵器として。俺に、……人間を殺せって言うのか!?）」

「落ち着きなさい、ルーク」

俯いたルークの肩に、ヴァンの手が優しく置かれた。

「まずは戦争を回避するのだ。そしてその功を内外に知らしめる。そうなれば平和を守った英雄として、お前の地位は確立される。少なくとも、理不尽な軟禁からは解放されよう」

ルークはヴァンを見上げる。暗闇の中で縋るものを見つけたように瞳を揺らして。

「……そうかな。師匠、本当にそうなるかな」

「大丈夫だ。自信を持て。お前は選ばれたのだ。超振動という力がお前を英雄にしてくれる」

「英雄……俺が英雄……」

汽笛が響いた。

「着いたようだな。ここでバチカル行きの船に乗り換えだ」

ヴァンは顔を上げ、近付く港を見やった。

バチカルに戻れば。屋敷に帰れれば、外に出て以来降りかかってきた全ての厄介ごとから解放されるのだと思っていた。

「（だけど、そうじゃなかった……！？）」

よく知っていたはずの自分を取り巻く環境が、にわかに悪意を滲ませて迫ってきて、ルークは苦しげに顔を伏せる。

「……元気を出せ、ルーク。未来の英雄が暗い顔をしていては、様にならないぞ」

その様子に気付いて、ヴァンが安心させるように微笑みかけた。

誰よりも頼りになる、敬愛してきた師の顔。

（――大丈夫だ。師匠が自信を持てって言ってくれた。俺は英雄になれるって。師匠がそう言うんだから、大丈夫なんだ）

スッと気が楽になった。

「（大丈夫。大丈夫だ）」

「……はい！」

ヴァンを見上げ、ルークは明るく頷く。

船は、汽笛を響かせながらケセドニアの港に入っていった。

Ｓｉｄｅ：？？？

何者か……我と同じ一部を携える者……

我が生みし「聖なる焔の光」とは似て異なる存在……

調べる必要があるようだが……我は【此処】から出ることは能わず……

待つしかあるまい……なに、時など我にとっては無価値……

何れ機は訪れる――

原作編　第十一話（後書き）

久しぶりに書いたもんだからハーミットの設定が合っているかどうか、作者も少し不安に考える今日この頃です。

４００万Ｈｉｔ　特別編（前書き）

今更ながらの記念編です。
ちなみに、今回の話は本編と何ら関わりのない物です。
〇〇ってこうじゃなかったっけ？　という疑問は無しの方向でこの話をお読み頂ければ幸いです。
ではどうぞ……

４００万Ｈｉｔ　特別編

「温泉？」
「あぁ、此処から近くにあるザレッホ火山から湧き出た温泉だ」
ダアトでの騒動が漸く収まり、オラクル騎士団の纏まりも順調に再構成されつつあったこの時期、何時もどうりこのワーカーホリック気味な二人が共に居る時、ハーミットから一つの提案が出された。
なんでも、ケセドニアからの商業者がその例の場所で湧き出ていた温泉に目を付け、ここ最近、温泉旅館を建設したそうなのだ。今や、そこは一部の者にとっては秘境とされ、お忍びで来る者も少なくないと言う話だ。

「んで、その温泉がどうかしたの？」
「いやさ・・・俺達ってここ最近机に向いっきりだろ。そうしなければいけない理由もあるんだが、ウチの部下達が『お願いですから休んでください！！　貴方が倒れたらダアトはどうなるんですか！？』と懇願されちまってな……」
「それで休みを取ったって訳？」
「元より、有給なんて片手で数える程度にしか使ってなかったからな。十年間以上の間で」

そこでだ、折角だから色々と誰かを誘ってその温泉旅館に行ってみようではないか、というわけだ。

「それにしても、ここ最近そんな話なんて聞かなかったけど、それってケセドニアで情報仕入れたの？」
「いや、仕入れたって意味では間違ってはいないんだが・・・」
「どういうことさ？」

「だって、あそこの土地所有者って『イオン』だぞ？」
「……うそ」
シンクは一瞬、ハーミットの口から何を言われたか理解するまでに唖然とする。
「え、ちょっと待てよ……アイツは約二年間ずっとダアトは疎か、付近に近づいた事無かったよね？　それなのにアイツが土地の所有者ってのは」
いろいろ考えるとそうだ。何かとつじづまが合わない。
「実はな、その温泉の源泉……掘り当てたの俺とイオンとアリエッタなんだ」
「アンタら何してた訳！？」
「あれは本当に偶然だった……」
そう言って、ハーミットは昔話を始める。それは、今からおよそ四年ほど前のことであった……

――――――――――――――――――――――――

（四年前）
「イオン様、パパ、こっち……です！！」
「こらこら、そう急ぐな急ぐな」
「そうですよ、時間は簡単に逃げたりはしないんですから」
この日、俺とアリエッタとイオンはピクニックがてらにザレッホ火山近くの高台に登ることにした。この時期はまだそんなに世界規

模で忙しくなかったから定期的な休日も取れていた。そこで、久々に親子水入らずで何処かに行こうと計画し、アリエッタの提案でザレッホ火山近くにある高台でお友達（ライガやフレスベルグ達）と一緒にピクニックへ行きたい、という言葉で俺は実行した。

「（なんでお前が着いてきてんだよ……政務はどうした政務は）」
「（そんなの早めに終わらせたに決まってるじゃないですか♪）」
「（それでも導師サマにはお誘いした覚えはないんですがねぇ～）」
「（甘いですね、アリエッタ居るところに僕アリですよ）」

アリエッタが先行して前へと進んでいる間、ハーミットとイオンは無言の往来で闘い合っていた。二人とも次第に顔が歪んで米神に青筋が浮かびつつあった。

「もう！！　パパもイオン様も変な顔！！　もっと楽しんで！！」
「ははは、やだなぁアリエッタ。父さんは十分に楽しんでいるぞ～♪」
「そうですよ！！　ほら、僕達もこんなにウキウキした気分でいるんですから」

アリエッタに頬を膨らまして不満気味な事を言われた瞬間、二人は直ぐ様笑顔になり、互いに腕を組み合ってホップステップな感じにする。だが、そんな彼らの後ろでは、後ろに回した手で互いに相手の脇の肉を抓ったりと地味な闘いが繰り広げられているとはアリエッタは知らずに……

そんなこんなで、しばらく歩いて目的地にたどり着いた後は、ダアト内ではあまり大きく動き回る事の出来なかったライガやフレスベルグ達を放り出し、自由にさせてやる。
それをアリエッタは追いかけたり、ライガに三人で乗ったりと十

分楽しんだ。

そして、この次にて事件は起きたのだ……今回、特別に持ってきた弁当。その中にはこの日の為にとアリエッタ自身が一生懸命作ったサンドウィッチが主食としたものだった。アリエッタは日頃のお礼を込めてと二人の為に作ったというサンドウィッチは、二人が若干目頭を熱くさせながら食べ、大満足かと思っていた所に問題が発生した。

サンドウィッチは“五個”あったのだ……

無論、サンドウィッチはハーミットとイオンの為に作った物だ。だから、アリエッタは他に持ってきた食べ物でお腹は満腹にさせてしまった。

だから、一つ一つと食べていけば……当然、一つ余るのだ……

弁当箱に余ったサンドウィッチを二人はほぼ同時に凄まじい速さで掴み、握りつぶさずなお頂こうと互いの手と共に引っ張り合いをしていた。

ギギギギギギ……

「いやいや、イオン様。私は大人な物で胃袋も大きいもんですからもっとサンドウィッチは食べたいんですよ」

ギギギギギギ……

「なにいってんですか、僕だって育ち盛りの子供なんですよ。もっと食べてみたいって考えます」

二人共、物凄く笑顔なのに口元が全然笑っていないという矛盾した表情を作り、関節が偶に鳴ったりしつつ引っ張り合いを続ける。そして、暫くの硬直状態が続いた後、互いにサンドウィッチを持った手を勢い良く上に振り、空高くへと飛ばした。

「うらあぁぁぁぁ――――！！！！！」
「てやあぁぁぁぁ――――！！！！！」

次に、拳と掌打と蹴りの攻め合いが始まる。当時はまだ現役であったイオンの格闘技は天武の才でハーミットは勝つことは出来なかったが、持ちこたえるまでの技量は習得していた。この勝負は闘いに勝つことではない・・・どちらが先に“頂ける”かだ。

医者の誇りとして、拳を握った攻撃を使わず、相手の力を利用して攻撃する“柔”のハーミット。

ダアト式譜術の使い手として、外側から内部全てを破壊し尽くす攻撃“剛”のイオン。

唯一つ同じ攻撃法は蹴り技だが、主体の攻撃法は表裏一体といったところであろう。

そろそろ、空に上げたサンドウィッチが落ちて来るころだろう…
…そう考えた二人は今できる大技で一気に勝負を掛ける。

「「鷹爪落瀑蹴――――！！！！！」」

なんと、互いに同じ技が繰り出された。譜を込めた隕石のごとく下蹴りは衝突し合い、地面を大きく抉ってすり鉢状に広がっていく。脚同士が拮抗し、互いに睨み合って次の行動に移そうとしたとき、瞬時に右側からの視線に二人は気がついた。

「なんてこと・・・するん……ですか」

アリエッタは怒っていたのだ……折角のピクニックで楽しい時間を過ごす筈だったのに、今ではこの辺りの自然が破壊され尽くされ、連れてきた魔物達も二人に怯えていた。

この様子を理解した二人はまずったと心で汗を掻きながら呟き、目の前で膨大な譜の力を貯め続けていくアリエッタに焦り始める。

「す、すまんアリエッタ！！　父さんがやりすぎた！！　だから抑えてくれ！！！」

「まずいってアリエッタ！！　流石にこんな至近距離でそんな物発動されちゃ流石の僕もヤバイよ！？」

「パパと……イオン様の……バカアァァァァァ――――――――！！！！！」

――ビックバン！！！！！！！――

「「イ゛ェアアアアアアアアアアアアアアアアアアア――――――――!!!!!」」

この日、二人は某ゲームのリアルゲームオーバーを体験したのであった。

――――――――――――――――――

「んで、アリエッタのビッグバンが先に開けた穴を更に深く削り、見事に源泉を一発当てたんだ」

「あのさぁ、アンタら軍止めて温泉採掘者になれば? 経費ほぼ0ガルドで金稼げるし」

ハーミットの昔話にヤレヤレとシンクは呆れ果てていた。

「初めは三人だけの秘密の場所として小さく溜められる形の温泉にしといたんだが……この頃あの野郎、ケセドニアの商人と仲良くなったりして今じゃ裏も表も多大な影響力を持ってんだよ」

「ねぇ、アイツ隠れるつもりないよね……隠居してんのになにやってんのさ」

「ずっと前に少しばかり金入れて新しい口座(偽名)作って渡してやったんだがよ、数ヶ月経ってから様子見たら初めにあった金額の数十倍も増えてるという摩訶不思議な現象が起きていたし……」

「なにそれコワイ」

「駄目だ、アイツ……例として孤島に放り込んでも元気な姿で帰ってくる姿しか思いつかん」

空には元気に笑って手を振るイオンの姿がサムズアップで写っていた気がした。

「あーもうイオンの話は一旦無しだ。改めて温泉の話へと移ろうか」
「予定は何時にしてんのさ？」
「三日後、せっかくだからケセドニアにいるファミリアの皆やフィリスさん、ベルケントにいるラウルやシュウ先生、あとダアトでのお前を含めた知り合いを誘うことにするよ」
「……そのメンバーで疲れが取れるのか増えるのかどっちかわからない」

こうして、急遽、温泉旅行が決まり、ハーミットは色々な人間の元に手紙を送った。
ダアトでは直接伝えに行ったりと用意は万全にこなしていった。
そして、遂に当日がやって来て、今彼らは例の温泉旅館の前に立っていた。

「ほー、結構大きいもんだな」
「当たり前ですよ、僕が色々と投資しておいたんですからこれくらいしておかなきゃ文句言うところです」
「お風呂……楽しみ……です」
「温泉！！　ケテルブルグのスパもいいけどやっぱり天然物もいいよね～ティア♪」

「私も外でお風呂に入るのは初めてだわ……すこし、興味はあるし」
「……なんでアンタも来んのさアッシュ」
「うっせぇ、半ば強引に連れてこられたんだよ……」

ダアト組はほぼ見知いった顔が並んでいた。初めて来た温泉旅館に十人十色の意見が出される。イオンは昔、ケセドニアから来たこの旅館を任されている商人達によっていくらか知らされているらしいのであまり驚かなかった。

「おんせんおんせん～♪」
「こらこら、無闇にはしゃぎ回ってはいけませんよ」
「先生と、旅行、温泉……エヘヘ」
「姉ちゃん、ガンバ……」
「さぁアクセル！！　今回のテーマは温泉成分の解明よ！！！」
「はい、フィリス先生！！！」
「郊外の温泉かぁ……」

手紙を受け取って聞きつけたケセドニア組はそれぞれの思想を胸に来るべき興奮を押さえ込んでいた。ちなみに、ベルケント組のラウルとシュウ先生は別件により来れなかったようだ。う～ん残念。

気を取り直し、全員は温泉旅館へと入っていく。中はハーミットの感性で見れば和風と洋風が混ざり合ったという感じだが、悪くはなく。

「いらっしゃいませ、ご予約されていたシオン様でございますね」
「そうです。荷物を先に部屋へお願いします」
「畏まりました」

この店のオーナーらしき人物がイオンの前に立つと、畏まった状

態でイオンに話してきた。ちなみに、イオンの偽名はシオンだ。このご時世、一文字変えただけでも案外バレない事が多いのさ。

「うわ～広ーい！！！　まさに高級旅館って感じがします！！」
「そうだね！！　ケセドニアんところの宿とはゼッテー比べもんになんねぇや」

イオンの車椅子を押していたアイラや隣にいるトールは普段の生活ではまったく見られなかった光景に目を始終輝かせる。

「此処の宿の造りは何処の建物をモチーフにしているんだ？」
「あ、実を言いますと、今は失われたホド島の建築文化を見よう見まねで再現したんです」

そういや、ホド島って何処か日本を思わせるような所が幾つかあったな。
現に武器として太刀を作っていたしな。

「此処がお部屋となっております」
「へぇ、見たことない部屋の様式だね」

部屋は何処ぞやの温泉宿を思わせる畳や襖が使われていた。
ホド文化……侮れん。

ちなみに、部屋割りはこうなっている。

1：ハーミット・シオン・スヴェル
2：アッシュ・シンク・トール
3：アクセル・フィリス・アイラ

4：ティア・アニス・アリエッタ・ちびっ子ズ

うーむ、なんとも癖のありそうなメンバーだな……

「てかなんでこのメンバーにしたんだ？」

「そこは作者の都合ですよ」

「アウト！！」

色々と障害はあったが、漸く入浴する準備は整った。しばらく待機していた間ではこんな事が起きていた事を表記しておこう。

＞ハーミット組＜

「敷き布団を敷くなんて何時ごろだろうな……」

「イオン君、こんな素晴らしい旅行を私達にプレゼントしてくれてありがとう」

「いえいえ、ファミリアの一員である以上当然ですよ」

「スヴェルさんも高齢になるのに本当によく頑張りますからね」

＞アッシュ組＜

「シンク兄ちゃん、荷物そこ違うよ！！」

「あ？　別にどこに置こうが関係ないだろ」

「駄目駄目！！　整理はきちんとするもんだと姉ちゃんからも昔言われたじゃないか」

「さわぐなうっせぇ！！　もっと静かにやりやがれ！！」

＞アクセル組＜

「遠心分離機オーケー？」
「サンプル採取管オーケー？」
「成分指標表オーケー？」
「ペーパークラフトオーケー？」
「うぅぅ、二人とも何やってるのかわからないよ……」

＞ティア組＜

「アニスお姉ちゃん、アリエッタお姉ちゃん、ティアお姉ちゃん！！」
「遊んで遊んで～！！！」
「ちょ、髪ひっぱんなっつーの！！」
「やあぁぁぁ――――！！！！！　もういやあぁぁぁぁ――――！！！！！」
「……子供って、やっぱり可愛い？」

――――――――――――――――――――――――――――――

＞男湯＜

遂に入浴タイムとなり、入浴場へ男組はやってきた。岩づくりの広い露天風呂が目の前で白色の湯を広大に張り巡らされている。

「よっしゃいっちば～ん！！！」

ザパ――――ン！！！

「僕も～！！」
「トール兄ちゃんずる～い！！！」

ザパザパ――ン！！！

トールを皮切りに他の子供達も次々と温泉に飛び込んでいく。そんな彼らをハーミット達が諫めたりと色々と忙しい。それが終わってから漸く彼らが入る番となる。

「ふぃ～、今までの疲れが一気に取れるぜ」
「ぁ”ぁ”ぁ”ぁ”生き返るぅぅぅ……」

「完璧オッサンだな……」
「だね……」

ダアトでの苦労人であるハーミットとシンクのリラックス気分への開放した声は彼らの今までの疲れの大きさを物語っていた。

「くらえ、水鉄砲！！」
「あ～やったな～！！」
「お前らはしゃがない！！　風呂は静かに入るものだって院でも言ってるだろ！！！」
「「は～～～い」」

周りではトールが相変わらず子供達の面倒を見ていたり、アクセルが機材を持ってきて何やら調べていたり、イオンとアッシュは足湯をしてのんびりしていたりと各自自由に行なっていた。

『きゃ～あつ～～い！！！』
『結構広いのね』
『あぅぅ……ちょっと緊張します……』

そんな時、壁越しから女性達の声が聞こえてくる。向こう側は女湯だ……

「おーおー、やってるやってる」

「まったく、少しは静かに入れないのかい？」

「仕方ないですよ。彼女らにとっても温泉は初体験だそうですし」

「……ふん」

そんな騒ぎ声を耳にしつつも、男性陣はゆったりと温泉を楽しむ。

『……やっぱりティアってば大きい……です』

『えっ……いえ、その……他の人とは比べたりしたことなかったから……』

『そうよね～何したらそんな大きくなるのかしら……そりゃ！！』

『きゃあ！！！　フ、フィリスさん何するんですか！？』

『そらそら！！　この我侭ボディめ～♪』

「「「……」」」

『アイラさんやフィリスさんも結構良いスタイルだとアニスちゃん思うな～』

『あ、ありがとうアニスちゃん』

『ふふふ、ケセドニアではアイラとフィリスさんは綺麗な人として結構有名なんですよ』

『そ、そんなスヴェルさん……美人だなんて……』

『むむむ……アニスちゃんも将来皆さんを目標にしますよ～だ』

『アニス……今はちっぱい……』

『あ”ぁ”ん！！　誰がちっぱいじゃいこの根暗ちっぱいが！！！』

『アリエッタ根暗じゃないもん！！　アニスのバカバカバカァァァ

～～～！！！！！』

『ちっぱいは否定しないのね……』

「「「……」」」

なんというトークであろうか……聞いているこちら側がまいりそうだ。

二人は顔を赤く染め、もう二人は目元を暗くした表情にして顔を下に向けていた。

「本音を言うと、疲れを癒すのが先だ」

「アリエッタ以外興味ありません」

「くっ、俺にはナタリアが――――！！！！！」

「女・・・女性の体がなんなのさ」

そんな中、ただ一人・・・そろそろと女湯方面の壁へと向かう勇者が居た。

アイラの弟：トールその人だ。

「馬鹿！？　死にに逝く気か！！」

「ごめん、シンク兄ちゃん……嘗て僕の人生の師匠とも呼べる人からこう言われたんだ」

――覗かずして何故男であろうか！？――

「僕は逝く、この向こう側の桃源郷……いや、理想郷（アヴァロン）へと！！　乳

が僕を待っている」
「駄目だ、完璧に死亡フラグだから！！」
トールは逝く。後ろからの必死の静止の声（微弱）を背中に……
初めによく見渡してみると、壁のある一部に崩れかけて極微小な穴が都合良く空いている場所が発見した。
トールはそこに目を光らせ、恐る恐ると壁に手を付け、右目を穴に添えようとする……
すると……
ズガンッ――――！！！！！！
「あぶっ・・・！？」
スコ――――ンッ！！！！！！
「そげぶ！！」
一瞬の出来事であった……

覗き穴からナイフが飛び出てきて、後ろへ下がったトールの頭から頑丈な風呂桶が降ってきた。自分でも何を言っているのか解らねえが、もっと恐ろしい物の片鱗を味わったぜ。

「無茶しやがって……」

「その勇気にはある意味賞賛しますが、アリエッタの裸を覗こうとしたその腐った根性は後で叩き直しときましょうか♪」

「その前にアイツ介抱しといてやれよ」

分かりきっていた結果を見てトールの安否について少々心配しているのはアッシュだけだった。

「それにしても、胸が大きい小さいの比較してそんな楽しいモンかねぇ……」

「枯れてますねハーミット、男にとって胸とは浪漫と夢と希望に満ち溢れているって色街に通う男客もよく言ってるんですよ」

「僕の被験者であるアンタは何を覚えてきてんのさ……」

シンクのツッコミは華麗にスルーされる。

「だってな……胸なんて中身みたら乳腺と脂肪細胞の塊だぜ？　俺にしてみたら体脂肪が多いか少ないの問題みたいなもんだぞ？」

「俺が言える義理じゃないが……お前全国の巨乳同盟みたいなヤツラに数秒で喧嘩売ったぞ」

「う――ん……ずっと前に頭蓋陥没して事故死した女性の死体も巨乳だったが、解剖しつつみてても性的興奮なんて湧かないんだが……」

「いやそれアンタだけだからね！！　何気に恐ろしい会話しようとしてんじゃないよ！？」

医者として、教学の為に解剖を何度も行い続けているハーミットにとって、裸など男も女も関係ない。ある意味男として終わっているが、別に性欲が無いわけではない。その条件はいずれ語るとしておこうか。

「ちなみに、ティアちゃんの比喩はメロンだが、リグレットは『核弾頭』らしいぞ？」

「もはや何も言わないよ・・・」

―――――――――――――――――――――――――

さて、疲れを癒せる入浴タイムも終了となり、お次の楽しみは夕食である。

ホド文化を再現した菜食あふれる料理は見る者の食欲を唆る。

それは勿論、彼らにも言える。

「アッシュの天ぷら頂きです！！」

「てめぇイオン！！　返しやがれ！！」

「アンタ達は黙って食えないのか黙って！？」

「ふむ、上手い……」

「栄養配慮が良い料理ね……保存食でもこれを保つ保存剤ができれば……」

「高級料理ってアニスちゃん、ちょ～感激～♪」

「むぐむぐ・・・」

「あれ、あれ・・・うぅ、おはしって使いづらいです」

「若いねぇ……」

ちなみに、トールは度重なるイオンのＯＳＨＩＯＫＩにより、ハーミットからのドクターストップを掛けられ、部屋にて撃沈中であ

る。

「はい、ティアお姉ちゃんあ～ん！！」
「ネネもネネも！！　あ～ん♪」
「あ、あ～ん／／／／／（幸せだわ・・・）」

一部、幸せの絶頂に居る者も居れば……

「機材が……壊れた……（泣）」

絶望真っただ中な者もいるという所だ。

「ん・・・おーい酒足んねぇぞ！！　早く持ってこーい！！！」
「……あ、あの・・・もし良ければ私の分を。お酒なんてあまり飲まないものですから……」
「おぉ、ありがとうアイラ！！」
「は、はい――――！！！」

ハーミットはアイラからホド文化でのお酒の容器である徳利からおチョコで酒を注いでもらう。そして、満タンに注がれた酒を一気に飲み干した。

「ぷはー！！！　こりゃ上手い！！！」

皆さんもご存知かもしれないが、ハーミットの本来の精神年齢は９０歳近くである。その為、オッサンっぽいのはご愛嬌と言うものだと認識していただきたい。

そして、覚えているだろうか……

「失礼します。お酒の追加をお持ちいたしました。徳利を少々お借りいたします」

此処の従業員が大きな酒瓶に入った酒を持ってきて、ハーミットの徳利に手を掛けようとしたとき……

「あぁ!?　そんなちょびちょびと飲んでられっか!!!　それごと寄越しな!!!」

ハーミットはつぎ足し用の酒瓶を奪い取ってそのまま喇叭飲みし始める。

「お、お客様!?」

そんな様子を見ていたイオンは顔を青くして、直ぐに他の全員に叫び出す。

「やべ……総員退避!!!　急げ!!!」
「お、俺はこんな所で死にたくねぇぇぇ――――!!!!!」
「馬鹿!!!　邪魔すんじゃないよ!!!」

その後の展開が読める者は直ぐ様その場から大急ぎで立ち去ろうとするが……

スコオォォォ――――ン!!!!!

「おわいッ！！！」
「アッシュウゥゥゥ――――！！！！！！」

アッシュの後頭部にあの酒瓶が投げつけられ、見事にクリーンヒットしてその場へ倒れ込んだ。

「うあぁぁぁ……終わりだ。おしまいだ……」
「誰だハーミットに酒を沢山勧めた奴は！！」
「も、もしかして……私、何かまずいことを？」
「退避、たいひぃぃぃぃ――――！！！！　子供たちだけでもここから逃がすんだぁァァァ――――！！！！！！」

そうなのだ……

ハーミットはむちゃくちゃと言っていいほどに……

「ヒャッハアァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァ――――――！！！！！！！！！！」

酒癖が悪いのだ……

＊ここから先の惨劇は音声のみでお楽しみください

「ぎゃあぁぁぁぁぁ！！！！！　関節が！！　関節が！！」

「や、やめろ！！　それ以上俺に近づくな！！！　うあぁぁぁぁぁ――――――！！！！」

「ひゃあぁぁぁぁぁぁ！！！　先生！！　そんなにしたら私、私は――――！！！」

「いやあぁぁぁ！！　もう尻叩きはやめてぇぇぇぇぇ―――――――！！！！！」

「ふあぁぁぁぁ～～～～～ん！！！！！」

「おぼっ！！　げぼっ！！　ふひのなはふめほまはいへぇぇぇぇぇ――――――！！！！！」

――南無三――

そして、次の朝……ハーミットは昨日の事を覚えておらず、帰りの入口前で集まった所で全員に怯えられ、聞こうとしてもまるでトラウマを思い出したかのように発狂寸前に叫び出す者が出たりする始末もあり、結局事の真相は闇の中へと葬りさられた。

なお、以後、この温泉旅館では『酒癖の悪い方お断り』と注意書きが添えられておったそうな……

――おわれ――

４００万Ｈｉｔ　特別編（後書き）

なんかグタグタですみません（笑）

原作編　第十二話（前書き）

暑いですね……

原作編　第十二話

ケセドニアに降り立って、まずルークが不満の声を上げたのは、ヴァンがここで一行から離脱すると告げたからだった。

「えー！！　師匠も一緒に行こうぜ」

「後から私もバチカルへ行く。我侭ばかり言うものではない」

「だってよぉ……」

優しくたしなめられて、ルークは小さな子供のように唇を尖らせた。そんな二人の様子を、ティアは少し驚いた顔で眺めている。

「乗り換えの船はキムラスカ側の港から出る。キムラスカの領事館で聞くといい。では、またバチカルでな」

ヴァンは言い、最後に妹に優しい目を向けた。

「ティアも、ルークを頼んだぞ」

「あ……はい！　兄さん……」

そうして、ヴァンはマルクト領事館へ入って行った。ここからダアトへ向かうための手配をするのだろう。

ケセドニアは砂漠に面した街である。商人ギルドによる自治権を有した、世界の流通の拠点だ。街の中央を、大きな通りが南北一直線に貫いていた。北部はマルクト領、南部はキムラスカ領ということ

になっているが、街の中ならば自在に行き来できる。旅券が必要になるのは街から外に出る時だけで、その際には各国の領事館で手続きを踏む必要があった。

「ご主人様、新しい街ですのっ！　砂だらけですのっ！」

ミュウは飛び跳ねてはしゃいでいる。例によって「うるせぇ、ブタザル」とルークに罵られていたが、興奮は治まらないようだ。あちこちに天幕を張った露店が並び、それぞれが手を打ち鳴らしハンドベルを揺らしながら売り声を響かせていた。

「見てって、見てって。この街には何でもあるよ」
「豊富な薬品はうちだけだよ。さあ、買った買った」
「いらっしゃい！　いらっしゃい！　船旅のお供に冷凍リンゴはいかがー？」

エンゲーブやセントビナーで見た市場や露店とは活気がまるで違っている。砂埃が舞う中、様々な服装の人々が歩き、覗き込み、声を張り上げて、忙しなく行き交う。

「はぁ……なんだか、ごちゃごちゃすげぇ街」

「まあな。世界中のものが集まるって言われてるからな。マルクトからキムラスカへ輸出される農作物や薬草は、必ずケセドニアの領事館で監査を受けるんだよ。当然、キムラスカから輸出される物も同じ手続きをしているな」
「あなたが口にしていたものの殆どは、こうしてバチカルに流通していたのよ」
「へぇ、随分長い旅をしてきてるんだなぁ……」

ガイとティアの説明を聞いて、ルークは素直に感心した。なにしろ、実際にその道を自分の足で歩いてきたのだ。実感もひとしおである。

「後は領事館に行って船に乗るだけだね～」

雑踏を潜りながらアニスが言う。キムラスカ領事館は大通りを南へ行ったところで、そう遠くはない。キムラスカ側の港も隣接していたはずだ。

「ルークの大冒険もひとまず終了か～」

冗談めかして笑うガイを、ルークは心外だと言いたげな目で見やった。

「おいおい、大冒険じゃねーっつの。それに、イオンやジェイドにはバチカルに着いてもまだ終わりじゃねぇぜ」

「そうそう、大佐やイオン様にはバチカルに着いてもまだ重大な任務が！」

「そうだな……しかし、キムラスカ側がマルクトの和平の意を受け取ってくれるか……」

「陛下への取り次ぎを貰えなければ和平云々の問題どころではないのよね」

その通り、今回の和平は事前通達などを行わず、マルクト側が独断で行なった和平に等しい。運良くも、ルークの保護というキムラスカ側へのキーを手に入れたマルクトにはその御陰で、キムラスカへの入国を可能とさせる大義名分を見い出せた。

しかし、首都バチカルへ来るとなると話は別だ。ルークを屋敷まで送り届けるという依頼を遂行し終えると、後はマルクトだけの問

題となる。一応言っておくが、保護と人質は同じではないのだ。そして、今キムラスカとマルクトの関係は一触即発な状態……下手な要求の仕方などすれば、忽ちそれは戦争への片道切符へと早変わりだ。飽く迄対等な立場として取り次がなければいけない。

「困りました・・・このような話はジェイドが得意なのですが……」
「そういえば、大佐ってば何してんですか？」
「わかりません、どういう訳か・・・理由を教えずに『先に待っていてください』と言っただけです」

―――――――――――――――――――――

Ｓｉｄｅ：ハイル

意識を覚醒させた後に待っていたのは、激しい虚脱感の後遺症であった。
体中の軋みは痛感を通して痛みとなり、少し動かしただけでもまるで電気が走ったかのように痺れが残っていた。

「っ……！」

どうやらベッドに横たわっていたようだ。しかし、どうして……最後の記憶によれば、俺は廊下で倒れたはずだが。

「お目覚めですか」
「……！？」

そんな時、突如として響く声に一瞬、気を逆立たせる。声のした方に素早く首を向けると、そこには簡易なパイプ椅子に腰下ろして何やら本を読み続けるジェイドが居た。

「驚きましたよ。部屋を出たとたんに貴方を倒れているのを私は発見したんですから」
「アンタが……運んでくれたのか」
「おや、私とて目の前に病人がいたらどうにか安全な場所へと移してやる良心は持ち得ていますとも」

ジェイドは心外だというように、両手を広げて上に掌を向けるジェスチャーを行う。

「よっと、痛つつ……」
「もう大丈夫なんですか？」
「俺は医者だ。自分がどうなったかぐらい予想は付いている。おそらく過度の過労による影響だ」

本当は嘘だ。あれは過労だなんて小さな事で纏められるものではない。

―音素欠乏症―

音素（フォニム）は此処惑星オールドラントでは生物の細胞の結合は疎か、血液の流動・心臓の鼓動・脳波の活動・ｅｔｃと多くの事に関わっており、これが減少すると、体の恒常バランスが一気に崩れさってしまう。

本来なら、この症状は日常生活では滅多に起きないのだが、戦闘を行う者が譜術を限界を超えるまで扱うと発症するケースが多いとされている。

俺の中の第七音素が異様な減少をみせたその理由は現時点では詳しく解明できないが、唯一つ分かっているのは、『向こう』も動き出しているということだ。

預言という星が定めたシステムが稼働をし始める。

ＮＤ２０１８

ローレライの力を継ぐ若者、人々を引き連れ鉱山の街へと向かう。
そこで若者は力を災いとしキムラスカの武器となって街と共に消滅す。
しかる後にルグニカの大地は戦乱に包まれ、マルクトは領土を失うだろう。
結果キムラスカ・ランバルディアは栄え、それが未曾有の繁栄の第一歩となる。
やがてそれが、オールドラントの死滅を招くことになる。

俺がこの世界に生れ落ちる時に手にいれた唯一の鍵……秘預言。
これはこの星の未来であってそうではない１と０の存在。
云わば、虚無の確立方程式……そこにあってそこにないものを求める。

「さて、少しばかり私も休息は取るとしようか」
「……貴方は嘘をつくのはいささか苦手のようだ」

……色々と誤魔化していたが、やっぱり駄目か。この男相手にはな……

「あからさまにあの症状は音素欠乏症の一環です」
「おや、ジェイドには医学知識がお有りで？」
「一応医師免許はとっていますが、忘れてませんか？　私の本分は譜術専門です。人間の音素に関することには幅広い知識を持ってい

ると自負できますからね」

うぅむ、流石に博士号を持っているだけのことはある・・・か。こういう人間には誤魔化しってのは効かないからな。

「済まないが、余計な事は探索しないでくれ。あまり知られると此方にとっては良くないものなのでね」

「……いいでしょう。貴方の身に何か危険な事が有ると聞かされれば、今やマルクトは総出で貴方の身柄を保護しようと躍起になるかもしれませんからね」

「頼む……貸しでいいからよ」

「おや、『蒼鷹』に借りを返して貰えるとは・・・私は相当の幸運をどうやらお持ちのようだ」

ちくしょう、世界レベルでの影響力を持つ俺だ……そういう場合、どうこき使おうとするか考えそうだこいつは。

「……一応言うが、和平に関しての協力はパスだぞ？　ダアト側は導師イオンの仲介でもう十分だろ？」

「そうは言いましてもねぇ～、私としては背中を守りながらバチカルへ入っていくなんてことはご勘弁願いたいんですよ♪」

こいつ、絶対俺の医学技術を一部提供という餌を使わせてインゴベルト国王へ取り次ぐ策をさっきまで考えていたな。まぁ、ダアトの医学はもはや他の首領国二国を抜きん出てるからな……手術法の特許問題でも千万ガルドは超えるくらい莫大な金が放り込まれるまでに。

最先端を担っているのは飽く迄ダアト、他国であるキムラスカとマルクトはどうしても遅れが生じてしまうのは必然だ。医学でも、政治でもどちらの意味でもおいしいこの提案はキムラスカにとって

も“金のなる木”そのものだろう。

しかし、基本ダアトは医学技術に関してはオープンだが、悪用して金を毟りとるだけに扱う事をしないよう、それを扱う資格制度も前代イオンが手を回してくれて確立したんだよな。それに、医学は見て聴いて覚えてで扱える代物じゃない……真剣に向き合わないで扱おうとする馬鹿には医者を名乗る資格などこの俺が認めやしないさ。

「さて、私はそろそろ御暇させていただきます。皆さんを待たせている身なので」

「暫しの看護、感謝します」

そう言って、ジェイドは船室から出ていく。壁越しからコツコツと彼のブーツの音が遠ざかって行くのがわかる。

「……」

ドサッ――――！！！

「ぅぷ……あと少し留まっていたら危なかった……」

実を言うと、ハーミットの気分は底辺と言っていいくらいに最悪の状態であった。

未だに体の中をぐちゃぐちゃに掻き回されるような感じが続いている。

どうにかして平気な顔を見せてはいたが、ジェイドにそんな事をしてもバレていそうだ。

「ぐぅ……一先ず応急処置くらいを……」

ハーミットは譜術を使う容量で音素を取り込んでいく。だが、譜術を普通に使うこととは違い、ゆっくりと馴染ませる感じでだ。そして、扱う譜術の選択は治癒譜術……第七音素が欠乏しているという結論上、第七音素を取り込む方法を使えばいい。

「き……つぅ……！！」

だが、それはかなりの荒業だ。普通、音素はフォンスロットを通して取り込んでも体の一部になることは全くない。それを例えで言うと、絶対零度の氷を自らの手で直接触り、じわじわと水に戻していく様なものだ。無論、その行為はその例である手のように……かなりの苦痛とストレスがのしかかる。

体中がガリガリと削られるような痛みに耐え、少しずつ第七音素を体の一部として取り込んでいく。もう一度言うが、これは応急処置だ……完全に治す為の処置ではない。

とは言っても、大抵の人間なら痛みに参ってこんな事などやれはしないが……

「が……！！　ぜぇ・・・ぜぇ・・・なんとか、成功……したか」

先ほどより、不調による気だるさ等は収まっていた。これぐらいなら歩くのにも支障はきたさない筈だ。

「ぜぇ・・・ぜぇ・・・ふぅ……折角ケセドニアに来たんだ」

『まだ』、大丈夫……

その頃、ルーク達は船から出てきたジェイドを再びパーティーに迎え、次の場所へと来ていた。

領事館である……此処こそバチカルを通るための最後の関所とも言って良い。

だが、アルマンダイン伯爵の計らいだろう……領事館に既に話は通っていた。

「ルーク様と使者の皆様ですね。ご苦労様です」

小柄で鼻髭を生やした領事は、立ち上がって一行を労ってくる。

「バチカルへの船は？」

ジェイドが訊ねた。

「ただいま準備を進めております。お時間まで街を観光されてはいかがでしょうか」

「そうだな。折角だから、少し買い物していかないか？　ここは流通の拠点だ。面白いものがありそうだぜ？」

ガイが口を挟んでくる。

「あーそれもいいな。見てみるか」

満面の笑みをルークは浮かべた。本当は、今まで通り過ぎてきた

露店の数々が気になって仕方がなかったのだ。

ケセドニアの街の中では国境に意味はないが、各国の影響が皆無だというわけではない。マルクトに属する北部の市場［バザール］では薬品や食材が多く売られ、キムラスカに属する南部の市場には武器防具や装備品が多い。それぞれの国の特色が確かに現われているのだった。

「音機関の部品はあまりいいものが無いな……。シェリダン製の方がずっといい」

店頭のガラクタ（にしか、ルークには見えない）を掻き回して、ガイはそんなことを言っている。ルークはあちらの店こちらの店とうろうろしていたが、向こうから腰を揺らして歩いてきた美女が不意に絡みついてきたので、かなり驚いた。

「あらん、この辺りには似つかわしくない品のいいお方……？」

「あ？　な、なんだよ」

ムチムチと肉付きのいい胸に腰。胴はきゅっとくびれている。……とはいえ初対面の人間なわけで、ルークは怪訝顔をするほかない。

「せっかくお美しいお顔立ちですのに　そんな風に眉間にしわを寄せられては……ダ・イ・ナ・シですわヨ」

女はルークの顔を覗き込み、手は彼の腹や胸の辺りを馴れ馴れし

く撫で回している。

「きゃぅ……アニスのルーク様が年増にぃ……」

頭を抱えてアニスが苦悩の声を上げた。

「あら～ん。ごめんなさいネ。お嬢ちゃん……。お邪魔みたいだから行くわネ」

年増、という単語に反応したのか、一瞬ピクリと青筋を浮かべたものの、女はそれ以上絡むことなくルークから離れていく。

「待ちなさい」

ティアが立ち塞がった。

「あらん？」

「……盗ったものを返しなさい」

「へ？　あーっ！　財布がねーっ!?」

ルークが叫んだ。持たされていた個人用の財布、見事にすられていたらしい。

「……はん。ぼんくらばかりじゃなかったか。ヨーク！　後は任せた！　ずらかるよ、ウルシー！」

女は声音をきついものに変えると、周囲にいた二人の男に声をかけた。やせた男がヨーク、いかつい小男がウルシーというらしい。三人とも、海賊めいた、やけに派手な服装をしている。

女はルークからすった財布をヨークに投げ、自分はウルシーと共に反対方向に駆け去った。ルークは、咄嗟にどちらを追えばいいのか迷ってしまう。が、ティアに迷いはなかった。財布を持って逃げようとしたヨークの足元に、ティアの投げたナイフが突き刺さる。転んだヨークが起き上がろうとした時、もうその首筋にはティアのナイフが当てられていた。

「動かないで。盗ったものを返せば無傷で解放するわ」

ヨークは無言でティアに財布を渡す。ティアは受け取ってナイフを引いた。転がるようにヨークは逃げていく。

しかし、彼らはそのまま逃げ去りはしなかった。間もなく、少し離れた宿屋の屋根の上に彼ら三人の姿が並ぶ。

「……俺たち『漆黒の翼』を敵に回すたぁ、いい度胸だ。覚えてろよ」

まるで芝居か何かのようだ。見栄を切り、やっと姿を消した。

「あいつらが漆黒の翼か！」

ルークはハッとした。

「（そうだ。最初に馬車に乗ろうとした時も、エンゲーブで泥棒騒ぎがあった時も。いちいち漆黒の翼と間違われてひでー目に遭ったんじゃねぇか。そもそも、屋敷に帰るのにこんなに苦労してるのも、あいつらが橋を爆破したからだっ）」

「知ってりゃもう、ぎったぎたにしてやったのにぃ！」

「あら、財布をすられた人の発言とは思えないわね」

可笑しそうなティアのツッコミが落ちて、ルークは思わず黙り込んだ。次いで、ティアは不満げにジェイドを睨む。

「ところで、大佐はどうしてルークが財布をすられるのを黙って見逃したんですか」

「やー、ばれてましたか。面白そうだったので、つい」

「……教えろよバカヤロー！」

ルークは喚き立てた。憤懣やる方ない思いでむっつりと口を閉じた時、「やあ、あんたたちか！」と呼びかけてくる声が聞こえた。笑いながら人ごみを掻き分けて現われた男には見覚えがある。

「おじさん……確か、辻馬車の」

タタル渓谷からエンゲーブまで乗せてくれた、辻馬車の駅者だった。

「こんな所で会えるとは奇遇だよなぁー。丁度いい。あんたたちに礼が言いたかったんだ」

「何がだ？」

「ローテルロー橋が壊れて陸路で帰れなかったんだが、あの時のボタンを換金したら船代に釣りが来るほどの金が手に入ってね」

「へー、よかったじゃん」

「ああ。ホントにありがとな。またいつでも馬車を利用してくれ。ま、橋が直ってからだがな」

笑顔で去っていく男をルークは眺めていたが、ふと隣からの視線を感じ、顔を向けてみると、ティアがルークの顔を見ていた。

「ん？　どうした？」
「う、ううん……なんでもないわ」
「ふーん？」

ルークは彼女の行動に疑問を持たず、なんの追求もせず何処かへと歩いていく。
そんなルークの背中をティアはどこか思う感じで眺めているのであった……

所変わって、イオンを含めた他のメンバーは今後の旅に備えたグミや食材などを買っていた。そこでアニスが商人相手に値切りを始めたり、ジェイドが怪しい物品を少々興味本位で調べてたりと色々だ。

そんな時、二人の買い物を近くで見守っていたイオンに一人の男性が声を掛けてきた。

「これはこれは。イオン様ではございませんか！！」
「あなたは、アスター！？」

アスターと呼ばれた男は小柄な人物だった。鉤のように曲がった大きな鼻は赤く、鼻髭がピンと左右に伸びている。頭髪はターバンで隠されていた。もしかしたら無いのかもしれない。眉は濃く、意志の強さと隙のなさを窺わせた。

彼こそがアスター……ケセドニア商人ギルドの第一人者である。アスターはこの街一番の富豪で、裸一貫、一代でその財を築き上げた人物だ。国境際の小さな村だったケセドニアをこれほどの街に変

えた功労者であり、街の代表者でもある。

また、ケセドニアの商会ギルドはダアトに多大な献金をしており、その見返りで教団はケセドニアは自治区として認めているのだ。

「いやはや、前もってお知らせいただければ盛大にお迎えさせていただきましたものを……」

「よいのです。お忍びですから」

そう言って、イオンは穏やかに微笑みを返す。

「そんな事言わさるな。私どもは導師のお力で、国境上にこうして流通拠点を設けることができたのでございますよ」

「いえそんな、そのお気持ちだけでも結構ですよ」

そんなイオンの謙虚さにアスターは「ヒヒヒ」と悪人じみた声色で笑った。

「そういえば……ふむ……」

ふと、アスターは何か疑問に感じているような顔をしてイオンの顔を凝視していた。

「どうかなされたのですか？」

「いえ何・・・この頃偶に見かける孤児院にいる子供でイオン様と似ている子がいるのを思い出しましてな」

「え……」

「この街の西方に建てられている『ファミリア』という孤児院なのですが、そこには顔がそっくりな三人の兄弟が居ましてね、昔露天の街道を歩いている所を私も何度か見かけましたが……その子達の

顔が何処か貴方と似ていた気がするのですよ」
「そう……なんですか」

まさか……いや、そんな有り得ない！！

イオンはアスターの言葉に同様を隠せないでいた……
自分と同じ、仲間達（レプリカ）……彼らは僕のように導師の資質が無かったが為に廃棄処分させられてしまった……火山へ直接放り込まれるという残虐極まりない方法で。

ヴァンとモースから彼らの結末を詳しく知った僕は、酷く後悔し、そして悔やんだ。

自分が導師にならなければ、彼らの命はまだあったかもしれない……
自分が導師になったせいで、彼らの命は終わってしまった……

云わば、僕が彼らを殺したようなものだから……

「そういえば、話で聞くに三人はそれぞれ孤児院の為に一人はダアトへ出稼ぎへ行き、また一人は此処に住む薬学研究科のフィリスさんの下で助手を勤め、最後の一人はここ最近商会を騒がせる最年少のやり手商人として活動しているそうですな」
「あの……その人達の名前は知ってますか？」
「そうですな……確かアクセル、シオン……残りの一人は余り聞いたことがありませんのでわかりません」
「そうですか……ありがとうございます。お世話になりました」
「またケセドニアへ何かご入り用の節には、いつでもこの私にお申し付け下さい」

そして、アスターはこの場から去っていった。
イオンはその場へ呆然と立ち尽くしていた。

「イオン様～どうしたんですかぁ～？」

そこへ、買い物を終えたアニスとジェイドが戻ってきた。
しかし、アニスの呼び声にイオンは全く反応しない。

「イ～オ～ン～様！！！」
「……！！　あ、はい！！」

アニスの手が肩に軽く触れた事で、漸くイオンは我を取り戻す。

「ぼ～っとしてどうしたんですか？　暑すぎて体の何処か悪いんですか？」
「そ、そんなことないです！！　全然問題ありません！！」

あからさまに何かに動揺している様子ではあったが、何故そうしているのかわからないと二人は首を傾げるのみであった・

――教えてください――

――貴方達は僕を怨みますか？――

――居場所どころか存在価値までを奪い、平穏な生活をしているこの僕を――

――教えてください――

――僕はどうすればいいのですか？――

――こんなにも苦しむのなら……――

――導師になんて、ならなければよかったのに・・・

彼はまだ知らない……哀れみを受けるのは、どちらの方であるのかを・・・

原作編　第十三話（前書き）

今後から被験者イオンのことは『シオン』と表記していくことをお伝えいたします。

原作編　第十三話

ケセドニアには朝と夜の二つの顔が存在する。

朝といえば、表に出ている露天や貿易商達の商売交渉の姿があちらこちらと見られるような街……

そして、夜となれば、酒・薬・女とこれら三種を主とした営いが小さな明かりの中にて始まる街……

夜の住人らに会うのならば、出来るだけ仕事の邪魔とならない陽の出てる刻にて会うことをお薦めしておこう。彼等にとって闇は自分達の不安を隠せる一種の衣となっている。ならば、取り払え……優位の立場になるにはそれがひとつだ。

ブルルゥゥゥン――――――！！！！！

一軒の酒場の前に一台の譜業バイクが止められる。その次に持ち主は安全装置を掛け、ドアへと入るべく、小さな木製の上り階段を上がっていく。

チリンチリン――――！！！！！

ドアに仕掛けられていた呼び鈴が彼の来店を知らせ、中に静かに行動していた者達の意識を一瞬向ける。そんな視線を物ともせず、彼はテーブル沿いで並べられている椅子達の一つへと腰掛ける。

「……ご注文は？」

屈強な体格をした酒場の店長はコップを拭きつつ、目の前の客に何時もどおりな言葉を投げつけるかのように言う。

「ラム酒をロックの水割りで……」

その答えを店長に渡し、彼は待つべきものを待つ事にする。

周りではポーカーで賭け事をしたり、小さな皿に白い粉を乗せ、それを炙って吸う輩がいたりと、普通で見ても禄な連中ではないと確定づけられる。おまけに店の裏口へと続く通路からは男の喧噪と女の媚声が壁越しで微かに聞こえてくる始末だ。

そんなことを横目で確認していると、店長がグラスを一つ持ってきて彼の座る前方、テーブルに置き、そのままその場から離れてグラスを拭き始める。

「こいつでどうだ！　フルハウスだぜ！？」
「へへ……喜んでてわりぃがよぉ……」
「スペードのストレートフラッシュだ」

「んだと!!　くそったれめ!!」

後ろのテーブルにいる連中はポーカーで決着が着いたようだ。四人の中の内一人が嬉々とした顔で真ん中に置かれたガルドの山を抱えるように自分の方へと持っていく。

そんな様子を彼は薄ら笑いを浮かべながら頬杖を付いて見ていたが、そんな様子に気づいたゴロツキの一人がこちらへと向いた。

「なんだアンタ？　俺達に何か用あんのか？」
「いや、別に傍観しているだけさ・・・少なくとも意味はない」
「ちっ……うざってーな……用がねぇんなら大人しく向こう側向いて座ってろ!!」
「失礼……それと、其処のお前」
「あん？」
「カードを気づかれずに出し入れするなら袖口のボタンは付けるべきだぜ？」
「――!?」

先ほど勝ったポーカーの男は自分のイカサマを唐突にばらされたせいで驚愕した。その言葉を皮切りに、どんどんと他の三人が男へと詰め寄っていく。そして、激しい打撃音が彼の後ろから伝わっていく。

そんな様子を一見した後、再びテーブルへと向き直り、置かれたグラスの中にあるラム酒を口にする。だが、彼には休まる時間をこの店では与えてくれなさそうだ。何時の間にか何人かの男たちが彼の後ろを囲うようにして集まっていた。

「おいおい、こまるんだよなぁ……勝手な事されちゃぁよ」
「知ってるかアンタ、ここじゃあ黒い事も白と通さなきゃいけねえ

場合もあんのよ」
「なのに、無駄な正義感ぶってイカサマを指摘するのはちといただけねぇなぁ～」
男達はここはお前が来るような場所ではないんだと言わんばかりに威圧をかけて彼を睨む。
「無駄な正義感？　やれやれ、俺は唯袖口のボタンは付けておいた方がいいと言っていただけでイカサマをやめろなんて一言も言った覚えはないのだがな？」
「はぁ？　何恍けた事喋ってんだ？」
「少なくとも、薬のやりすぎでアーパーになってるようなお前らよりは考えた言い方をしている筈だが？」
「んだとぉテメェ――――！！」
自分らを馬鹿にする物言いに一斉に男達は憤怒を浮かべる。だが、それにも動じず彼は酒を口に含む。
「はぁ、しかたねぇな……言って分からねえんじゃ・・・体で分からしてやんねぇと――――！！！！！」
ブシュゥッ――――！！！！！
そう言って彼の服に掴みかかろうとした一人の顔に何かが吹き付けられる。それは彼が先ほどまで口にしていたラム酒であった。ちなみに、アルコールには脱水作用があり、皮膚に付けると乾燥を促す効果がある。皆も注射前や理科の実験で触ったアルコールによる

感触を覚えている筈だ。スゥッとしたりヒリヒリとした感触をだ……
おまけにラム酒はアルコール度数が４０度近く……下手なビールより8倍近くものアルコール濃度が含まれているのだ。

では、そんなものが顔に……しかも『眼』にかかったとすれば……

「@ｐｌ；：‥@ｐ@；‥‥ｐ@ＬＰ＝＊Ｌ、――――――！！！！！」

忽ち悶絶ものな激痛に襲われる・・・ラム酒を顔に吹き付けられた男は顔を抑え、絶叫を上げながら床を激しく転がりまわっていった。

そんな様子を彼は口を布で拭いで見ていた。

「舐めた真似してくれるじゃねぇか……」

一人の声を皮切りに、周りの男達は自分の獲物を出したり、拳を構えたりと今まさに襲いかからんという状態になっていく。

「ふむ、流石余所者には排他的だ……ちょっとした『お茶目』じゃないか」

そして、彼の一言に男達は完璧に『キレた』……

見るまに一斉に男達は襲いかかっていく。ナイフを……拳を……
持ち前の『力』を使って目の前の彼を排除……つまり『殺そう』と躍起になる。

だが、彼相手に力押しでの攻撃は危険だと……彼を詳しく知らなかった男達は今日この日、体で思い知らされる事となる。

まず、蹴りを食らわせようとした男には――

「直線的な蹴りは読まれやすいぞ？」

そのまま脚を伸ばした所に懐に入り込まれ、そのまま男の踵を蹴り上げる方向へと円を描くように押され、そのまま回転させられた。

次に、ナイフで胸を刺そうとする男には――

「握り方が甘い。使わない左手は一々一緒に前に出すな」

槍の一撃のように放たれたつま先蹴りが男の左脇の付け根に喰らい、右に構えていたはずなのに左に体を捻られながら床へと倒れ込む。

その次に、拳を彼の顔へと放とうとする男には――

「そういう攻撃は不意を付いてからにしろ」

何時の間にか交差させていた脚を軸にし、両手で男の右腕をキメながら掴んだ次に、交差した脚を戻す力を加えて彼は右肩に男を乗せてからの一本背負いをキメる。

その次、また次と『まるで自分の力を利用されている』かのような攻撃によって男達は次々と倒れていった。

最後には、死屍累々な様子で酒場の床下に呻く怪我人が倒れ込んでいる姿があった。

「うぅぅ……」
「い、てぇ……」
「あがががが・・・」

「まったく、どうしてこう単調な動作ばかりな攻撃で勝とうと考えるのかねぇ……」

彼は“後始末”を始め出す……
血を流している怪我に治癒譜術を施し、外れた骨を元の関節にはめ直し、気絶した男には気合てで覚醒させたりと……先程まで命のやり取りを行なっていたとは思えないような行動を取り始める。

その通りだ……彼は“殺す”存在ではないのだ、“治す”存在であるのだから・・・

一通り、怪我人の治療（自分が怪我させた）を終え、スッキリとした表情をしていると、再びドアの鐘が鳴る音が響き渡る。
そこに入ってきたのは、やはり夜側の人間といっていい雰囲気を放つ男達であった。だが、先程まで相手していた男達とは格段に違う覇気を放っているが・・・
そして、一番前方にいた顔に傷痕がある男が彼へと近づいていく。

「やあ先生さんよぉ……また一段と暴れたそうじゃねぇか」
「悪いな、お前のところの下っ端はどうやら血の気が多いヤツラなのでな」
「そりゃあ悪かったなぁ……だがよぉ、あんま家の者に手を出すとこっちも黙っているわけにはいかねぇんだ」

「ほぅ、それは面白そうだな……試しに此処で一気に『終わらせて』みるのもいいかもしれん」

彼と男は固い雰囲気を出し続け、睨むかのように・・・お互いを伺うかのように見つめ合う。その雰囲気に周りの男達は息を飲む感じで様子を見守っていた。

「……ぷっ」
「……ふ」
「くくくくくく――――――！！！！！」
「ふはははははは――――――！！！！！」

だが、突然二人は笑い出したではないか。そして、お互いの肩や背中をパンパンとおもむろに叩き出す。まるで長年の友人と再開したかのように……

「暫くぶりだな先生！！　逢いたかったぜ！！！」
「こちらもだ、丁度お前に用があったからな」

両者とも笑顔を浮かべ、お互いどうしてたかと言うような話を始める。

今ここで、今更ながら言うが・・・彼の名はハイル・シュヴェール兼ハーミット……オラクル騎士団治癒師団長である。
片や、顔に傷を持つこの男はジェラルド・ホーキンス……ケセドニアの『夜』を仕切るボスである。

ハーミットと彼との出会いは当時ケセドニアで遍歴医として赴いていたハイルとまだ下っ端であったジェラルドの頃に遡る。

まだ今より治安が最悪に悪かったケセドニアの裏側……当時縄張り争いが酷く、ジェラルドもまたその闘争に参加していた男であった。だが、当時いたファミリーは惨敗し壊滅……その逃走でジェラルドは顔に深い傷を負っていた。この頃の怪我の治療法は治癒譜術か薬を塗っての包帯……ましてや、ジェラルドは表では嫌われる裏方の人間。一般人が見れば医者に見られるどころか憲兵に突き出されるだろう。そして、ファミリーが壊滅した今・・・頼る場所もないので薬は疎か、包帯さえも手に入らない。彼はこのまま果てる存在であった。

だが、そこへ色街にて治療兼研究で赴いていたハイルに発見され、命を繋ぎ止められたのだ。まだ満足な手術道具もなかったので顔に下手な縫合痕が残ってしまったが、ジェラルドはこの傷痕を気に入っているそうだ。

――アンタ、俺にこんな事しても俺は何も返せないんだぞ――

――知っている――

――だったらどうして、こんな俺みたいなクズを助けようとすんだ――

――患者を治す……それが俺の生きる意味だからだ――

それから、ジェラルドは約束した。この街の裏側も“クズ達”にとって出来るだけ住みやすい場所に変える事を……それから彼は目指してきた。汚くてもいい……どこまでも前向きに生きていける『夜のケセドニア』を……

そんな彼も、今となっては大御所のファミリーのボスだ。
「テメェら！！　先生に何手を出してやがんだ！！！」
「どう落とし前つける気だコラ！！！」
「「「ひぃぃぃぃぃぃぃ――――――！！！！！」」」
そんな後ろで先程までハーミットにちょっかいをかけていたチンピラ達が所属しているファミリーの幹部らに大目玉をくらっていた。
ボスにとっての大恩ある人物だ。そんな人間をこいつらは蔑ろにしたとなると幹部らは黙っていられない。床で縮こまっているチンピラ達を彼らは蹴ったり罵声を浴びせたりと仕置きしていた。
事実、ハーミットは此処でも良くも悪くも有名な人間だ。色街での環境を改善した事でも有名であり、元々麻薬として取引していた薬をフィリスらを通して鎮痛剤や麻酔や精神安定剤として、ダアトとの大手取引に変えてもらったりと……
そして、悪い意味では巫山戯た悪事を働こうとする別のファミリーを全力で潰し上げたりと……現在の仕来たりで決めた事を破る輩に死すら生ぬるい御仕置きを施したりと、ほとんど恐怖の象徴として知らされていた。
そんなこんなで、ケセドニアの裏方とハーミットは切っても切れない関係でもあった。
「ジェラルド、話を戻させてもらう。……二階いいか？」
「……そうか。わかった……おい、二階へは誰も通すんじゃないぞ」

「「「おぅっ――――！！！」」」

先程までやんわかとしていた雰囲気が一掃され、真剣みを帯びた物へと変えられる。そんなハーミットの様子を察したジェラルドは部下達に人払いを頼み、共に二階へと上がっていくのであった。

二階には何部屋かがあったが、その内ほとんど使われていない部屋へと鍵を開けて入っていく。その中にある小さな円形テーブルと二つの椅子……その上に置かれている一本の蝋燭。まず蝋燭に火を点けて、それから椅子へと互いに腰を下ろす。

「では、話してもらおうか……」
「その前に言っておく。これを聞いたら、命の保証はないと考えとけ」
「ほざけ、命を惜しんでちゃこの世界ではやっていけねぇよ」
「まぁそうか……じゃあまず最初に……今マルクトがキムラスカへと和平の交渉に向かっている」
「はぁ！？」

いきなりの話で流石のジェラルドも酷く驚く。それは無理もないだろう……何百年と続いた二国の歪みを今日この日で一気に正そうとしているとなると、重要の一言では済まされない話である。

「そして、それはキムラスカ側が確実に受け取る……表面上でな」
「おいおい、マジかよ……って表面上？」
「キムラスカは元より和平を受け取る意思など持ってはいない。だが、ある目的の為にマルクトと和平を“これから”結ぶことになる」

「これから……まさか、預言か？」
「正解だ……そして、和平を受けたキムラスカは一人の人間をマルクトへと……『アクゼリュス』へと親善大使として送り込む」

ＮＤ２０１８
ローレライの力を継ぐ若者、人々を引き連れ鉱山の街へと向かう。
そこで若者は力を災いとしキムラスカの武器となって街と共に消滅す。
しかる後にルグニカの大地は戦乱に包まれ、マルクトは領土を失うだろう。
結果キムラスカ・ランバルディアは栄え、それが未曾有の繁栄の第一歩となる。
やがてそれが、オールドラントの死滅を招くことになる。

「キムラスカはこの繁栄が目的で、『悪意なき爆弾』を投げ込もうと和平を結ぶつもりだ」
「ま、待ってくれよ先生！！　秘預言ともなると流石の俺達でも手伝う事なんてできやしねえよ」
「安心しろ、お前達には秘預言に直接関わる出来事には関わらせない」
「んなこと言ったってよぉ……」
「まぁいい、話を続ける……キムラスカが用意するその『ローレライの力を継ぐ若者』とはルーク・フォン・ファブレ……キムラスカ公爵クリムゾン・ヘアツォーク・フォン・ファブレの一人息子だ」
「……オーケイ、もう驚かねえかんな……」
「そんな大物の息子が死んだとなると、キムラスカがマルクトへの大義名分を作るには十分な要素だ」
「汚ぇ……」

秘預言とはいえ、そんな戦争を始める為の偽装工作そのものにジエラルドはキムラスカに嫌悪感を込み上がらせる。

「だが安心しろ。実は今年の秘預言はなんせ……外れていく運命だからだ」

「んな！？　秘預言が外れるってせんせ――――！！！」

「静かにしろ……悪いがその原因には詳しく聴かない方向で宜しく頼む」

「……駄目だ、頭が可笑しくなりそうだ」

悪いが、前世で死んでから会ったローレライにＮＤ２０１８からその後の結末を簡単に伝えられたからだなんて言えるわけがない。分かっているのは『ルーク』はそこで滅びない……そして、ルークを介してオールドラントの消滅を何度も防いでいく。そして、最後にはルークはアッシュと大爆発を起こし、一つの存在となって帰ってくる事。預言から外れたその出来事が詳しく何時起こるのかはわからないが、それで悩んでいる暇はない。

今まで唯一つ知らされた秘預言とその年毎の現状から自分自らで予想をしてきたんだ。情報が全てに勝る。この勝負にはな……

「だが、ある出来事になるまで戦争は着実に火種を大きくしていくことになる。しかし、その戦争は最後には意味のないまま終わることになるが……そこまでの間にここケセドニアを……ファミリアの皆をお前に任せたい」

「え……？」

ケセドニアはキムラスカとマルクトの第二の国境でもある。秘預言によって勝手に始めた戦争によって飛び火を浴びるなんて真似、死んでもコイツらにさせてたまるか。

俺もまた、それを阻止する為に色々やることになる。だが、その間ケセドニアだけを意識に回すわけにはいかない。だからこそ、任せられる人物が必要となる。

「頼む、自分勝手な理由だが……この街を守ってくれ。この街は俺にとっても大事な場所なんだ」

ハーミットはジェラルドに深々と頭を下げる。そんな姿をジェラルドは目を瞑り、黙想する形で見続ける。

「先生、俺は素養がねえからアンタの話には正直付いていくことはできねえかもしれねえ」

「……」

「けどよぉ、大変なことはよぉーく分かった。もちろん、俺だってこの街を他の国の奴らに好き勝手に弄り回されたくねえ」

ジェラルドは決意したかのように目を大きく見開き、ハーミットを見据えた。

「此処は俺達ケセドニアに住む人間の街だ!!　アンタに言われなくたって下手な真似をさせるつもりはねぇ!!!」

「――――!!!!!」

「大いに協力するぜ先生!!　俺達もこの街を守りてえんだ!!」

ジェラルドは手を前に差し出し、握手を求める形を取る。

「……ありがとう」

「頑張ろうぜ!!」

ハーミットもまたその手を取り、力強く握り締めたのであった。

秘密の会談も終えた後は、ハーミットはファミリアへと向かった。
そろそろルーク達はケセドニアを出発し、バチカルへと向かっているところだろう。
だが、俺はバチカルへと向かうつもりはない……和平を終えたその先には彼らキムラスカの“政治”となる。それについてはファブレ公爵に任せるしかない。

そして、ちょっと心配な事がある……

「ティアちゃん……死ぬな」

襲撃犯がティアだとちゃんと知っているのは俺・ファブレ夫妻・シンク・シオン（被験者イオン）の四人だ。ヴァンは薄々と気づいているかもしれんが問題ないとして、問題あるのがシュザンヌ様である。

「どう料理されるか想像しただけでも恐ろしいな（汗）」

本当はヴァンを襲撃したという事実を残すだけだったのに、誤ってルークをマルクトへと飛ばしてしまったこの失態……正体を知っている一人のシュザンヌ様は襲撃犯の本人がバチカルへ来てるとなると、どんな事をしでかすか思いつかない。

「すくなくとも、始祖ユリアの子孫だということで抹消はしないはずだが……不安だ」

「なに孤児院の前で頭抑えてウンウン唸ってんのさアンタは」

そんなハーミットの後ろから声がかけられ、振り向いてみるとそこにはアイラに車椅子を押されて何時の間にか近づいていたシオンが居た。

「久しぶり、見るからに厄介事に巻き込まれているって様子だね」
「うるせぇな、こちとら真剣に悩みこんでんだよ」
「自業自得じゃないの？」
「うぐっ……」

ヴァン襲撃の計画を練った一人であるシオンは痛い所を着実についていった。

「あの先生、今日はどうしてこちらへ？」
「あぁ、久々に皆に会ってみたくなってな」
「えへへ……そうですか」

アイラはハーミットの来訪に嬉しそうな顔をしていた。

「アイラ姉さん、ちょっとハーミット・・・いやハイルと話がしたいから先にスヴェル院長のところへ行っておいてくれないかい？」
「え、う～ん……わかった」

アイラは車椅子から手を放し、孤児院へと入っていく。ハーミットの来訪をスヴェルへと伝えるために……
そして、ハーミットとシオンは孤児院の入口前の段差へとより、ハーミットはそこに腰掛ける。

「大方悩んでいるのはユリアの子孫のことでしょ？　安心しときな

よ、秘預言重視とするあの国は彼女を無残に扱う事は無いはずだよ。それにダアトにとっても大事だからそんなことしたら抗議を出すつもりだろうし」

「シュザンヌ様も……そこまで無茶をしない……よな」

「当たり前だよ。あの方は仮にもインゴベルト国王の妹君だよ？国という集団の中で力を持っている者とはいえ、無闇な事をすれば忽ち引きずり落とされる事を十分に知っているんだからね。……まぁ、政治的な要素を組み込まない報復はしそうだけど」

「その最後の言葉を入れなければ安心できる話なのに！？」

ハーミットのツッコミにシオンはしれっとした表情で話を続ける。

「さて、そろそろ大きい花火が上がりそうだ……」

「その花火が街一つを落とす物だというのが皮肉でも言えるがな」

「僕もそろそろモースの暴虐無人ぶりには耐えかねない所だったからね……動くとしようか」

シオンは物凄い笑みを浮かべてその後に何をしようかと黒い笑顔を出す。

「俺はマルクトへと交渉してアクゼリュスへ直接行くとしよう。交渉のカードはそろってるから多少の融通は聞くだろうからな」

「いいねぇ、キムラスカとダアト上層部の思い通りにならず、預言が成就しないことで焦りだす顔が想像できて面白くなるね」

二人はほとんど悪魔の笑みを浮かべて怪しい笑い声を出したりしていた。その場一体が怪しい力で震えていたりもしたが、気のせいであると考えておきたい。

「お二人方、折角なんで一緒に食事でもしませんか？」

「「もちろんよろこんで！！」」

その直後、やって来たスヴェルとアイラ達に話しかけられて、漸く普段どおりの表情へと元に戻す。

――――さあ、秘預言よ……抗って“みせるがいい”――――

――――この二人はお前が思っている以上に凶悪な存在だ――――

――――気を抜いていると逆にやられる事を忘れるな――――

原作編　第十四話

「あら、随分賑やかにやってるじゃない」
「ただいま～」
「おかえりなさいアクセル。フィリスさんも態々どうもすいません」

ファミリアの中では長テーブルを囲って子供達が食事をしている。
そんな所へ、フィリスの研究所（兼自宅）へ助手を勤めていたアクセルが丁度帰ってきた。おまけにフィリスも偶にと送り迎えと同時にファミリアに訪れることになったようだ。

「おやおや、フィリスさんではないですか。どうぞゆっくり居らしてくださいね」
「院長先生。別に普通に居るだけでもいいんですよ」

何気ない会話を始め、平穏な風景がそこに出来る。

――――臥龍撃！――――

――――臥竜空破！――――

外で騒がしい二人の声を覗ければの話だが……

「え、何？　もしかしてハイル来てるの？」
「え、えぇ・・・実はそうなんです……」
「アイツらも飽きないわねぇ。ファミリアにハイルが来るたびシオ

ンと模擬戦するんだから」
「仕方ないんですよ。兄さんもフラストレーションが溜まるもんで、相手できるのがハイルぐらいしかいないんで」
「ま・・・此処から離れた外の砂漠近くでやってるんだから文句はないけど」

――サンダーブレード！――

――ホーリーランス！――

「あわわ……二人とも大丈夫かな」
「大丈夫よアイラ、アイツらも流石に限度は弁えるわよ。・・・それが体の事で周りの事は入れてないのが玉に傷だけどね」
「そういえばこの前、民家を三軒ほど流れた譜術で半壊させちゃってアスターさんもかなり怒っちゃったよね」
「一応シオン君と先生がそれぞれ修理費出したから事は収まったけど……」
「というか、そうだから外の砂漠近くでやることに決め直したんだし」
「はっきり言って自業自得だわ」

――さぁ来いよイオン！　杖なんて捨ててかかってこい！！――

――ヤロオォォォ――ぶっ殺してやるうぅぅぅ――――――！！！！――

「それより聞いてよ！　ちょっと前にキムラスカ王家の血族らしき人物をケセドニア港で見かけたの。凄く珍しかったわ」
「おやまぁ、王族様かいね……確かキムラスカの王族は赤髪と翡翠の眼が証として知られているらしいねぇ」
「……キムラスカ王家ですか」

――――喰らえ！　原子力アンマァァァ――――！！！――――

――――今の時期でその言葉は色々とアウトだよ！　だが馬鹿め！
それは残像だ！！――――

「フィリスさん？」
「あーいや・・・私も一応キムラスカ人だけどさ、生まれが生まれで色々と王家の関係がある人間には余り良い眼で見られてないんだよねぇ……」
「ぁ……」
「まったく、ハーベスト家ってだけでロクデナシの烙印を勝手に押されたモンだから里帰りもオチオチとゆったりとすることも出来やしないわ」
「先生がロクデナシだなんてそんなのありえません！　僕から見ても、フィリス先生は凄い人だと胸を張って言えます！！」
「ふふ、ありがとうね。アクセル」

――――オンドゥルルラギッタンディスカー！？――――

――――ムッコロス！！――――

「てか、さっきからやかましいわこの馬鹿二人共！！」
「ふ、二人共やりすぎです！」
「駄目だよ、此処から叫んでも二人には聞こえてないと思うよ」
今日もファミリアは平和（？）なのであった……

さて、そんな彼らのことは暫し忘れて、後日のルーク達の行方を追ってみよう。

それから更に数日の船旅を経て、連絡船キャツベルトは、ついにキムラスカ王国の首都、バチカルの港に入った。港では、居並ぶ兵士たちが揃って頭を下げてくる。中に立派な軍服をまとった初老の男がおり、ルークに向かって深々と頭を下げた。

「お初にお目にかかります。キムラスカ・ランバルディア王国軍第一師団師団長のゴールドバーグです。この度は無事のご帰国おめでとうございます」
「ごくろう」

鷹揚にルークは返す。

「アルマンダイン伯爵より鳩が届きました。マルクト帝国からの和平の使者が同行しておられるとか」

イオンが前に進み出た。

「ローレライ教団導師イオンです。マルクト帝国皇帝ピオニー九世陛下に請われ、親書をお持ちしました。国王インゴベルト六世陛下にお取り次ぎ願えますか？」
「無論です。皆様のことはこのセシル将軍が責任を持って城にお連れします」
そう言って、ゴールドバーグは自らの傍らに立つ人物を紹介する。
「セシル少将であります。よろしくお願い致します」
きびきびと頭を下げたのは、薄い色の金髪を結い上げた二十代半ばと見える女性だった。青い瞳には強い意志が宿り、背筋はまっすぐに伸びている。
「（セシル将軍か……）」
少しばかり、ルークは複雑な気分にとらわれた。屋敷から一歩も出られなかった彼だが、彼女の顔は知っている。何故なら、何度も屋敷で見かけたからだ。それは……。
「どうかしましたか？」
ふと、セシルが怪訝な色を瞳に乗せた。だが彼女が視線を向けたのはルークではない。ガイだ。妙にそわそわしていた彼は、そう問われると慌てたように背筋を伸ばし、急に名乗り始めた。
「お、いや私は……ガイといいます。ルーク様の使用人です」
使用人が率先して名乗るなど、あまりあることではない。

……が、将軍たちが眉を顰めるよりも早く、客人たちが彼に倣って次々と名乗り始めた。

「ローレライ教団神託の盾騎士団情報部第一小隊所属、ティア・グランツ響長であります」

「ローレライ教団神託の盾騎士団導師守護役所属、アニス・タトリン奏長です」

「マルクト帝国軍第三師団師団長、ジェイド・カーティス大佐です。陛下の名代として参りました」

二人のキムラスカ将軍がハッと顔色を変えた。

「貴公があの、ジェイド・カーティス……！」

セシルが唸るように声を吐き出す。

「ケセドニア北部の戦いでは、セシル将軍に痛い思いをさせられました」

「ご冗談を。……私の軍はほぼ壊滅でした」

低く返したセシルの傍らで、ゴールドバークが探るような視線を向けている。

「皇帝の懐刀と名高い大佐が名代として来られるとは。なるほどマルクトも本気という訳ですか」

「国境の緊張状態がホド戦争開戦時より厳しい今、本気にならざるを得ません」

「……」

ふと、ガイの瞳に暗い色が浮かんだ。だが、誰もそれに気付くこ

とはない。

「仰るとおりだ。ではルーク様は私どもバチカル守備隊とご自宅へ……」

「あ・・・あぁ……」

ゴールドバーグは部下と共にルークを先導する形で集まり出す。

そして、共にファブレ家へと向かうべく歩いていく。

ルークの旅もこれで終わりだ……これから待っているのは少し前までしていた軟禁状態へと元通りとなる。

だが、そんなのはルークにとっては嫌であった。

「待ってくれ！」

進む途中のゴールドバーグ達を遮って、ルークは声を張り上げる。

「せめてもの礼として、こいつらに叔父・・・陛下への取り次ぎを俺にやらせてくれ。俺が城へ連れて行く！」

「ルーク！？」

イオン達は驚いた。ルークが今回の和平への架け橋として自ら名乗り出たというのだから。確かに、これからイオン達は和平として城へと赴くが、インゴベルト国王がマルクトからの和平を受け取るかはこの後の会談にかかっている。

そこへ、執政に関わっていないとはいえ・・・王族のルークによる取り次ぎが入るとなると、もし和平反対派として活動するかもしれない貴族達が何かしら言ってきても、下手な事はできなくなる。

それほど、王族である者の言葉は重く扱われるのだ。

「ですが・・・ルーク様」

「コイツらはマルクトへ事故とはいえ、不法侵入した俺を無事にバチカルまで届けてくれたんだ」

ルークの必死な願いにゴールドバーグはしばし悩むが、考えが纏まると真剣な表情で言う。

「……承知しました。ならば公爵への使いをセシル将軍に頼みましょう。セシル将軍、行ってくれるか？」

「了解です」

将軍たちの話はついたらしい。これで、ルークの手で和平の使者を連れて行くことが出来るのだ。

「ルーク……ありがとうございます！！　こうなれば今回の和平で心強いです」

「う、うん……まあ……」

何故だろう。どこか後ろめたい気がして、ルークは少し目を逸らす。

「（責任とか、お礼だとか、そういうことじゃねーんだ。そうしないと、俺は……）」

『まずは戦争を回避するのだ。そしてその功を内外に知らしめる。そうなれば平和を守った英雄として、お前の地位は確立される。少

なくとも、理不尽な軟禁からは解放されよう』

ルークの中で、嘗てヴァンが言った言葉がめぐり続ける

英雄になれば。自由になれる。――兵器として人を殺さなくてもいい。

「（そうだよな、師匠……！）」

ルークはこれでいいのだと、自分の中で正しいと決めつけて内心微笑んだ。

「では、ルーク。案内をお願いします」
「……おう、行くぞ」

微笑むイオンに意識を引き戻されて、ルークは一行の先に立って歩き始めた。

バチカルは、光の王都と呼ばれる。

音機関と精緻な細工飾りによって形作られた都市だ。縦長の層状の構造をしており、遥か下層には工業地帯や貧民街が、天空に届くかのごとき最上層には王族や貴族が住んでいる。中心街から港まで

など各所は「天空客車」と呼ばれるロープウェイで結ばれ、各階層への移動は、階段の他に昇降機も利用できる。特に、王城やファブレ公爵邸のある最上層へは昇降機なしでは向かえない。

天空客車から中心街に降り立つと、初めてこの街を訪れたと言うアニスやミュウは、上へ高くそびえている街の威容に打たれて「大きい！」と歓声を上げた。

「……すっごい街！　縦長だよぉ」

「チーグルの森の何倍もあるですの」

「ここは空の譜石が落下して出来た地面の窪みに作られた街なんだ」

ガイが説明している。

「自然の城壁に囲まれてるって訳ね。合理的だわ」

天空へ伸びる街を見上げて、ティアが感心した声で言った。

「ここが……バチカル？」

同じように見上げて、ルークは怪訝な声で呟いている。

「なんだよ。初めて見たみたいな反応して……」

「仕方ねぇだろ！　覚えてねぇんだ！」

可笑しそうに笑ったガイに向けて声を荒げる。

「そうか……。記憶失ってから外には出てなかったっけな」

ガイは笑みを消した。ルークは苛立ちに唇を噛む。

「（くそ……。ちっとも帰ってきた気がしねぇや）」

王城を目指して街を歩いていくほどに、ルークの苛立ちは大きくなっていった。

どこもかしこも見覚えがない。知らない。初めて見たとしか思えないものばかりだ。

「（なんでだよ。誘拐される前までは俺はこの街を自由に歩いていたはずなんだ。なのに、全然知らない。思い出せねぇ。コーラル城の時とおんなじだ）」

そんなルークの様子に、当然、仲間たちは気付いていた。

「ルーク、浮かない顔ね」

「折角帰ってきても、初めて来た街と変わんないんだもん。ルーク様、かわいそう……」

「ルーク、あの……「ルーク！！」」

ティアとガイの声が重なった。ティアは恥ずかしそうに口を閉ざし、ガイは朗らかに続ける。

「ちょっと街ん中見ていかないか？」

「ああん？　何で今更、んなことしなきゃいけねーんだよ」

「そう言うなって。折角だし、旅先と思ってブラつきゃいいじゃねーの。あとちょっと楽しもうぜ」

「別に俺は……」

「バチカル初めての奴もいるだろ？　もちっとブラついてもいいか？」

ガイは仲間たちを見渡した。

「そうですね。僕はいいですよ」

イオンが微笑む。

「まぁ、いいんじゃないでしょうか」

ジェイドも笑った。

「私も！」

アニスが明るく賛同する。

「ええ、いいと思うわ」

ティアは優しく笑った。

「ってことで。ルーク、行こうぜ」

「……ったく。しょーがねーなぁ」

ふっと口元が綻んでいく。ルークの顔に、満面の笑みが広がった。

バチカルの街は大きい。本当に。

「こんなすげぇ街だったなんてよ……」

しばらく見て回って、ルークは感嘆した声を上げていた。

「……本当に何も覚えていないのね」

少し驚いたようにティアが言う。

「あぁ。街ん中に闘技場があったり、軍の基地があったなんてな」

特に闘技場は驚いた。今は休止中だったが、武術大会が毎年開かれているのだという。この大会は有名で、マルクトからも見物客が訪れるほどなのだそうだが、例によってルークは全く知らなかった。

「大会のことは、屋敷中でルークには隠してたんだ」

ガイが言った。ルークは何故今まで隠してたのかと不満げに漏らしたが……

「だって、知ったらお前、出たいって大暴れするだろ?」

そう言われると、なにやら言い返せないルークである。

「私も初めて来た時は、街のあまりの大きさに驚いたわ。ローレライ教団の修道院がバチカルにあるから、多少は知っていたつもりだったけど」

「人はウジャウジャ、施設は沢山、街は馬鹿でかい！　なんか信じらんねぇよ。だって、屋敷の下にこんだけの世界が広がってたなんてな……」

「いいじゃない、とりあえず街に帰ってきたんだから。これからいっぱい見て回れば」
「まあ、こんだけ大きけりゃ暫く飽きねぇだろうけど。次はいつ屋敷から出られんのか……」
ルークがそう呟いた時、街の喧騒を一際大きな嬌声が貫いた。
「あ、ガイよ！」
見れば、数人の少女たちがきゃらきゃらと笑いさざめきながらガイを取り囲んでいる。
「ガイ～？　元気～？」
「う、うわっ！　キミたちか……」
「もうっ！　キミたちって言い方がか～わ～い～い～？」
既に戸惑っているガイに、少女たちは笑って近付いた。近付かれた分、下がったりと鼬ごっこな状況となり、とうとう壁際にまで追い詰められた。
「ちょ、ちょっと待ってくれ！　今はその……君たちと構ってあげれないというかなんというか……」
汗をかき、対応に困りつつあるガイにジェイドは面白そうに煽る。
「やー、幸せそうですね」
「おい！　ジェイドの旦那！　助けてくれてもいいだろう！　ルークでも……！」
だが、ルークはその場に留まったままニヤニヤと笑ってみせた。

屋敷でもよく見ていた光景だ。なんだか懐かしい。

「うへへ。お幸せに～」

「人の恋路を邪魔する者は馬に蹴られて死んでしまえと言いますし」

ジェイドもとぼけた笑みでそんなことを言っている。

「もう、可哀想じゃない！」

そんな二人を睨み付けたのは生真面目なティアだった。つかつかと少女たちに近付くと、「やめなさい。困ってるわ、彼」と注意する。元々軽い気持ちだったのだろう。少女たちはさして気にした様子もなく笑い、大人しく身を離した。

「そこが可愛いのにぃ？」

「ガイ！　またね！」

「今度はそっちの素敵なお兄さんたちも紹介してね」

それぞれひらひらと身を翻し、立ち去っていく。

「ティア、助かったよ！」

その場にへたり込みながら、ガイはティアに心からの感謝の目を向けた。

「大丈夫？」

立ち上がれないのだろうか、ティアはガイの手を引っ張り上げて立ち上がらせる。

「ガイってモテモテなんだね～」
「ははは……」

なんて答えたらいいのかガイは迷い、結局何も言い返せずに終わった。
実を言うとガイ、屋敷でも使用人達に人気だが、話したりしていると共に屋敷で働いている姉にこっ酷く叱られるため、女性と話すことに多少逃避癖が付いてしまっていた。

「……あれ。あそこにいるのって……」

その時、アニスが一方を見て言った。雑踏の中に派手な衣装を着た三人組が見える。

「……なるほど。そいつはあたしらの得意分野だ」
「報酬は弾んでもらうゲスよ」
「しかしこいつは一大仕事になりますね、ノワール様」

盗賊団・漆黒の翼だ。彼らがこんな所にいるのも驚きだが……。

「なんだ。またスリでもしようってのか？」

近付いてルークが言うと、彼らはハッとして話をやめた。

「で、では頼むぞ！　失礼します。導師イオン！」

驚いたことに、彼らと話していたのは神託の盾の兵士だった。イオンに頭を下げて、そそくさと立ち去っていく。

「へぇ～。そちらのおぼっちゃまがイオン様かい」

漆黒の翼の女――『ノワール様』と男二人に呼ばれていた――がイオンを眺め回した。

「何なんですか、おばさん！」

アニスが睨みつける。

「つるぺたのおチビは黙っといで。……これから何が起こるか、楽しみにしといで。坊やたち？　行くよ！　ウルシー、ヨーク」

「「へいっ！」」

三人もまた去っていった。おチビと言われてアニスは怒り心頭だ。

「なんなの、あいつら！　サーカス団みたいなカッコして！」

「そういや、あいつらどことなくサーカス団の『暗闇の夢』に似てるな。昔、一度見たきりだから自信はないが……」

記憶を探るような顔でガイが呟く。

「なんだよ！　お前、俺に内緒でサーカスなんか見に行ってたのかよ！」

そんな話、今まで一度も聞いたことがない。

ルークが思わず非難めいた声で言うと、ガイは少しばかりうろたえたように見えた。

「あ、ああ、悪い悪い……」

「……気になりますね。妙なことを企んでいそうですが」

「……ええ。それにイオン様を気にしていたみたい。どうかお気をつけて、イオン様」

ジェイドとティアは気遣わしげな顔をする。

「はい。分かりました」

イオンは素直に頷いた。

昇降機を幾つも乗り継いで、一行はついに王城に入った。

ルークの和平の使者を伴った帰還は既に知られており、謁見の間の前までは速やかに進むことが出来たのだが。

「ただいま大詠師モースが陛下に謁見中です。しばらくお待ち下さい」

中に入ろうとしたところで警備兵に止められて、ルークはムッと口を曲げた。傍らのイオンを見れば、どこか不安げな色が仄見えている。

確か、カイツール港へと向かう途中にイオンとジェイドに聞いたことがある。大詠師モースはキムラスカとマルクトとの戦争を望んでおり、この頃その推奨をするべくバチカルに入り浸っているそうだ。それを思い出したルークはなおさら止まる訳にはいかなかった。

「モースってのは戦争を起こそうとしてるんだろ？　伯父上に変なことを吹き込まれる前に入ろうぜ！」

「おやめ下さい！」
「俺はファブレ公爵家のルークだ！　邪魔をするなら、お前をクビにするよう申し入れるぞ！」
警備兵に子供じみた恫喝を返すと、ルークは扉に手を掛ける。
「ルーク、いいのでしょうか。こんな強引に……」
イオンの声にさえ危惧と非難の色が混じっていたが、ルークは構わずに扉を開けた。
「いいんだよ」
なにしろ、悪いのは戦争を起こそうとしているモースなのだ。正しい自分たちが堂々と行動して何が悪い。
謁見の間に入るのは記憶にある限り初めてだ。真紅の絨毯の敷かれた広大な空間の彼方に壇があり、玉座が三つ並んでいる。中央のそれに立派な装束を着た初老の男が堂々とした態度で座っており、その前に法衣を着た恰幅のいい壮年の男が立っているのが見えた。玉座に座っているのがインゴベルト王、立っているのが大詠師モースなのだろう。
「マルクト帝国は首都グランコクマの防衛を強化しております。エンゲーブを補給拠点としてセントビナーまで……」
モースがそんなことを言っている声が聞こえる。ムッとして、ルークは足音も荒々しく玉座に近付いた。玉座の傍に控えていた小柄な太鼓腹の男――恐らくは内務大臣のアルバインだ――が、気配に気付いて大声で叱り付けた。

「無礼者！　誰の許しを得て謁見の間に……」
「うるせぇ、黙ってろ！」

口汚く怒鳴り返すと、アルバインは顔を真っ赤に染めて絶句する。キムラスカ・ランバルディア王国国王インゴベルト六世は、突如闖入した焔の髪をした若者を見つめた。

「その方は……ルークか？　シュザンヌの息子の……！」
「そうです、伯父上」

王城とファブレ公爵邸は目と鼻の先だったが、軟禁されて以来、ルークが伯父である国王に対面したことはない。だが、王にはすぐに分かったようだった。

「そうか！　話は聞いている。よくマルクトから無事に戻ってくれた。すると横にいるのが……」
「ローレライ教団の導師イオンと、マルクト軍のジェイドです」
「ご無沙汰しております、陛下。イオンにございます」

イオンが言った。傍らに身を退いたモースが僅かに震えた声を上げる。

「導師イオン……。お、お捜ししておりましたぞ……」
「モース。話は後にしましょう。――陛下、こちらがピオニー九世陛下の名代、ジェイド・カーティス大佐です」
「御前を失礼致します」

スッとジェイドは跪礼をとった。

「我が君主より、偉大なるインゴベルト六世陛下に親書を預かって

参りました」

アニスが進み出て親書を差し出した。アルバインが王に代わって受け取っている。

「伯父上。モースが言ってることはでたらめだからな。俺はこの目でマルクトを見てきた。首都には近づけなかったけど、エンゲーブやセントビナーは平和なもんだったぜ」

「な、何を言うか！　……私はマルクトの脅威を陛下に……」

「うるせっ！　戦争を起こそうとしてるんだろうが！　お前マジうぜーんだよ！」

インゴベルトが穏やかに宥めた。

「ルーク、落ち着け。こうして親書が届けられたのだ。私とて、それを無視はせぬ。――皆の者、長旅ご苦労であった。まずはゆっくりと旅の疲れを癒されよ」

「使者の方々のお部屋を城内にご用意しています。よろしければご案内しますが……」

アルバインが言う。しかしイオンは言った。

「もしもよければ、僕はルークのお屋敷を拝見したいです」

「では、ご用がお済みでしたら城へいらして下さい」

アルバインがそう言った一方で、モースがティアに細い目を向けてくる。

「ティアは残りなさい。例の件、お前から報告を受けねばならぬ」

「モース様。私にはルークをお屋敷に送り届ける義務がございます。

後ほど改めてご報告に伺います」

ティアは形式上・所属上の問題にて、モースにマルクトでの休暇中にキムラスカ王族ファブレ家の子息であるルークを発見したことを前もって伝えていた。それを知ったモースはティアにそのまま一団に付き添うこと、別件として“ある物”の捜索任務を与えていたのだ。

その報告をモースは聞こうとしたが、第一重視としてのルークの付き添いに専念するべきと推薦案を出す。

「……よかろう。――それでは陛下。私はこれで失礼します」

それを聞き入れたモースはインゴベルトに頭を下げて立ち去った。

――去り際にルークを冷たく一瞥して。

「やっぱりモースの野郎、戦争を起こそうとしてるみたいだな。マルクトのことでデタラメな事を伯父上に吹き込んでたぜ」

不愉快な気分をルークは吐き出す。小さな声でジェイドが言った。

「ともかく、陛下は親書を受け取って下さった訳ですし、お言葉通り、無下になさることもないでしょう」

「後でもっとちゃんと話できるように言っておいてやるよ」

ルークは真面目な顔を作る。イオンとジェイドを伯父に会わせれば大丈夫だと思っていたが、事はそう単純ではないかもしれない。

「頼もしいですねぇ。さすがの七光りです」

「いちいちカンに触るヤツだな……」

「これは失礼。実際助かりました。あなたのおかげです」

「へッ、調子いいこと言いやがって」

一瞬ムカついたが、改めて感謝の言葉を送られるといい気分がしなくもない。

照れくさそうにしながら、ルークは鼻を鳴らした。すると、そこへ王座からインゴベルトが呼びかけてきた。

「ルークよ。我が妹がシュザンヌもお前との再開を楽しみに待っておる」

「母上が！？」

「うむ、今すぐにもお前の元気な姿を見せておやりなさい」

こうして、ルーク達はファブレ家へと赴くことになる。

ルークは戻る……我が家でもあり、『牢獄』でもあった懐かしき邸宅へと……

原作編　第十四話（後書き）

５００万Ｈｉｔまであと少しです。

リクエストはどちらでよろしいでしょうか？

１、六神将との無茶ぶり罰ゲーム付きな王様ゲーム

２、シオンとハーミットの絶対に笑ってはいけないローレライ教団２４時間

５００万Ｈｉｔ　特別編（前書き）

皆様のリクエストに答え、絶対に笑ってはいけない２４時の方に決定いたしました。どうもありがとうございます。

今回の話の注意書きとしては……

１，ネタの都合のため、ＰＣ系で閲覧してもらうようお願い致します。

２，今回はネタとして仕方なくＡＡを含むところがございますので、それが嫌という方は立ち去りを強く願います。

３，キャラが色々と吹っ切れています。一応本作とは関係ない物と表記しますが、それでも嫌と言う方も見ないことをお薦めいたします。

４，なぜ作ったし……

衝動が抑えられなかった……正直すまないと考えてもいる。

遠回りしましたが、それでは記念編どうぞ――

５００万Ｈｉｔ　特別編

――――パンパカパァ～～～ン！！！！――――

『おめでとうございます！　これより貴方方は晴れて「絶対に笑ってはいけないローレライ教団２４時間」の罰ゲーム参加権を獲得いたしました！』

「……」

「おい、罰ゲームがなんでめでたいんだ罰ゲームがぁ”ん？」

『ぐっ、相変わらず眼付けが恐ろしい方ですねハイルさん……いえ、設定上ハーミットさんと行った方がいいですか』

「ちょっと待ってよ、ハーミットが選ばれるのはわかるけどさ「テメそりゃどういう！？」・・・何故に僕が片割れとして選ばれるわけ？」

『私の趣味です』キリッ！

「……点穴縛態がいいかい？　アカシックトーメントでもいい？」

「奇遇だシオン、これから目の前の物体にアブソリュートを試し打ちしてやろうかと考えていた所だ」

『すんません！　茶化すのは止めにしますから本気で怒らないでください！！　といいますか、読者の皆様もこの企画をお選びになられてんですよ？　ですからちゃっちゃと用意してください』

「うわ汚い、自分の行動を読者様使って言い訳するなんてさすが作者汚い」

「そういってやるなよシオン。おそらく前葉頭のシナプス結合がゆるいからそんな考えに行き着く体なんだろな」

『容赦ないですね！！　さすがＵＳＤと　ＨＡ☆ＲＡ☆ＧＵ☆ＲＯ導師と言われるだけのことはあります』

『ですがね、こっちもちゃんと仕掛け人達にギャラ払ってもうスタンバイってるんですよ。無駄金なんて作りたくないんですからお願いしますよ』

「くそ、文句言っても終わらせねぇと帰れねえからやるしかないか……」

「後でシめるか……」

そして、ハーミットとシオンは早速用意に掛かる。

ちなみに、今回の企画の内容はこんな感じだ。

1．これから罰ゲーム参加者はオラクル騎士団へと一兵士として入団してもらうことにする。

2．その間、２４時間の間は決して笑ってはいけない（微笑みも禁止）

3．もしこれを破った場合にはキツイ御仕置きが待っている事を肝に命じておくこと。

4．仕掛け人に逆上して殴ったり蹴ったりと暴行を加えたら恐ろしいペナルティーが追加される。

5．今日一日担当される教官の言うことはちゃんと聞くこと。

「入団って……元から俺はオラクル騎士団所属なんだが……」
「僕も元とはいえ、導師だし小説の都合上、ダアトにいることはまずいんじゃないの？」
『そこんところは事務し……ゴホン・・・綿密な大人の話し合いにより一時無視することにしれいるから安心しろ。だから、初心に帰った気分でオラクル騎士団に入団してきなさいな』
「（さっき事務所って言おうとしたな……）」
「（リアルを出すなって始めでも何度も言ってるってのに……）」

二人の内心のぼやきは作者には届く事はなかった。

『それじゃ、まず更衣室があるからそこで教団服に着替えてきてくれ』

そうして、二人はやる気がなさげな感じで更衣室へとそれぞれ入っていく。

＊敵キャラの兵士の衣装はあれなので、ラフ的な教団と騎士団のマークが入った服になります。

「これは……」
「冗談だろ……」

だが、そこにあるのは“普通”とは言い難い形の教団服がそこにあった。

『それでは、そろそろ出てきていただきましょうかね……まずはハーミットからどうぞ！』

言われたハーミットは早速更衣室から恐る恐ると出てくる。
だが、その姿は“シモ”を強調するかのようにもっこりとした飾りが付けられているなんとも厳つい教団服であった。

「お、おい……本当にこれを着て２４時間過ごせっていうのか……」
『そ、そうでず……で、でも……ぷくく！　就寝の時はちゃんとしたパジャマに……しまず……から！！』
「俺はどこぞの変態仮面だコンチクショ――――――！！！！！」
『で、では次にシオンのご登場といきますか！』

ハーミットが自尊心を傷つけられている間に、シオンが更衣室が出てくる。
そして、想像通り……一人がおかしければもう片方も可笑しいのは当たり前である。

シオンの姿は、服としては“形”は問題ない……だが、兎・猫・犬といったファンシーなアップリケやストラップが所々と付けられたメルヘンチック子供服という感じな教団服であった。

「く、屈辱だ……こんなガキっぽい服を着せられるなんて」
『似合ってますよ、シオンさん（笑）』
「ちくしょおぉぉめえぇぇぇ――――――！！！！！」

始まり当初から散々な姿をさせられたが、これは作者の冗談という形で着替え損という結末を迎え、再び着替え直してようやく初めよりだいぶマシな服装へと着替え直されるのであった。

午前１０：００

彼らはローレライ教団の真ん前に立ち尽くしていた。ご丁寧に荷物のカバンを持ち、作者の指示を待つ。

『では、ここから足を踏み越えたところで罰ゲームが始まるから気を引き締めてやってきてね～♪』

「こうなりゃさっさと済ませて終わらせるしかないか」

「賛成だね、こんな馬鹿らしい事無視しながらで過ごしていけばいいだけだよ」

こうして、ついに二人は開始ラインを踏み越えてローレライ教団へと入っていった。短いサイレンの音が響き渡り、始まりの合図を尻目に進んでいく。

「絶対に笑ってはいけないだかなんだかしらんが、滅多な事で惑わない俺を舐めんなよな」

ハーミットは強きな発言をしながらシオンと共に入口へと入っていく。

そんな時、シオンは最初に何かを見つけたようだ……それを一瞬見て小刻みに震え出す。

「ん、どうしたシオン？」

そんな様子を可笑しく思ったハーミットはシオンが見ていた方向へと顔を向けてみる。

すると、そこには……

「……プハハハｗｗｗｗ」

モースとヴァンとノルドハイムが白目を向きながら手を合わせてお祈りをする姿を移したポスターが入口脇に貼られていた。

おまけに、キャッチコピーらしき文が『愛、信じてますか？』であった。

―デデ――ン！！！―

＞ハーミット……アウト――！

「え、何？　なんなんだ！？」

ハーミットが吹いた瞬間、ナレーションが何処からと流れてき、その次には何処からと黒いローブをフード付きで纏った人物が三人ほどやってくる。

その内二人は素早くハーミットの両腕を掴み、広げて拘束し……あと一人は彼の後ろでなにやら構えていた。

「ちょっと待て！　そりゃお前！？」

それは、『パチンコ』であった……ご丁寧に玉は鉛玉と重たそうな素材だ。

固いゴムが勢い良く伸ばされ、限界まで引き絞られた所を黒服の一人は思いっきり放つ。

ハーミットの“臀部”にだ……

「オヴァァァァ――――――――！！！！！！」

痛々しい音を上げて当たった玉は堪らずハーミットを跳ね上がらせ、その場に臀部を抑えて疼くまる。その様子を見送った三人組はさっさと退散していくのであった……

「だ、大丈夫かい？」

「け、ケツが・・・！！！」

そう、御仕置きとは強化パチンコによる臀部の狙い撃ちである。そんなものが笑うたびに放たれると目撃したシオンは先程の被害が自分で無くてよかったと全力で感謝した。

「それにしても……」

ふと、シオンはもう一度ポスターを見てみる。それは見事ｒｙ

「……ふふ、ってあぁしまった！！」

―デデ――――ン！！！―

＞シオン……アウト――――！

「アッ――――――！！！！！」

哀れ、シオン……

――――――――――――――――――――――――

さて、始め早々と災難が起こり、両者とも尻をさすりながら入口へと入ってくる。そんな彼らに待っていたのは……

「遅い！　さっきから入口でグダグダと何をやっていた！？」

「リグレット！？」

ガチャッ・・・！！！

「此処では教官と呼べ！！」

「うそー・・・」

ローレライ教団の全員が仕掛け人として動いていると事前に聞いてはいたが、まさかあの真面目なリグレットがこれに参加していようとは思っていなかったようだ。

「では、始めでもたついているようなお前達『亀ども』の為に私自らお前達の部屋をあんないしてやろう」

「いや亀って……」

「私語は厳禁！！」

そう叫んでリグレットは譜銃を向ける。流石に武器を向けられて騒いでいる訳にもいかないが、そんなこと露知らずにリグレットはトリガーを思いっきり引いたのだ。
だが、そこから出るのは譜弾ではない……

ピュウゥゥゥ――――・・・

水であった……水鉄砲よろしくな放射状の水がハーミットの顔に狙われ、シットリとハーミットの顔を濡らしたのだ。

「（何故に水!?）」
「（子供のおもちゃかいｗｗｗｗｗ）」

二人とも内心それぞれに疑惑を持ちつつ、リグレットの次の出方を待つ。

「以後、余計な口を叩くのならば、この『スウィート☆ソルティー』が火を吹くからな!!」

「なにそのネーミングセンス!?ｗｗｗｗｗ　しかも“水鉄砲なのに火を吹く”って!?」
「ペロッ（あ、ホントだ。これ砂糖水だわ……）」

ハーミットは掛けられた水を舐めてみると、甘味を帯びていることに気づき、シオンは銃の名前に一気に吹き出しながら突っ込んだ。

―デデ――ン！！！―

＞シオン……アウト――――！

無論、御陰で御仕置き実行となるが……

「これ以上甘さと辛さの狭間に苦しみたくないなら口を縫うんだな！！」

――ちょっ、無茶苦茶だよ本当に！！

「はい……（どんな苦しみだ……てか、名前からしてもう片方は塩水なのか？）」

――イエァァァァ――――――！！！！！

「では、付いてこい」

シオンの絶叫を一瞬聞きつつも、次のステップへと進んでいくのであった。

１０：３０

リグレットに連れられてきた先は、勲章やら賞状やらと色々な物が置かれたガラスケースのところだ。案内されながら歩いてるとき、唯一つ此処にだけ立ち止まったのだ。

「見ろ、此処に歴代の導師の肖像画が飾られている。お前達も一度目に入れておくがいい」

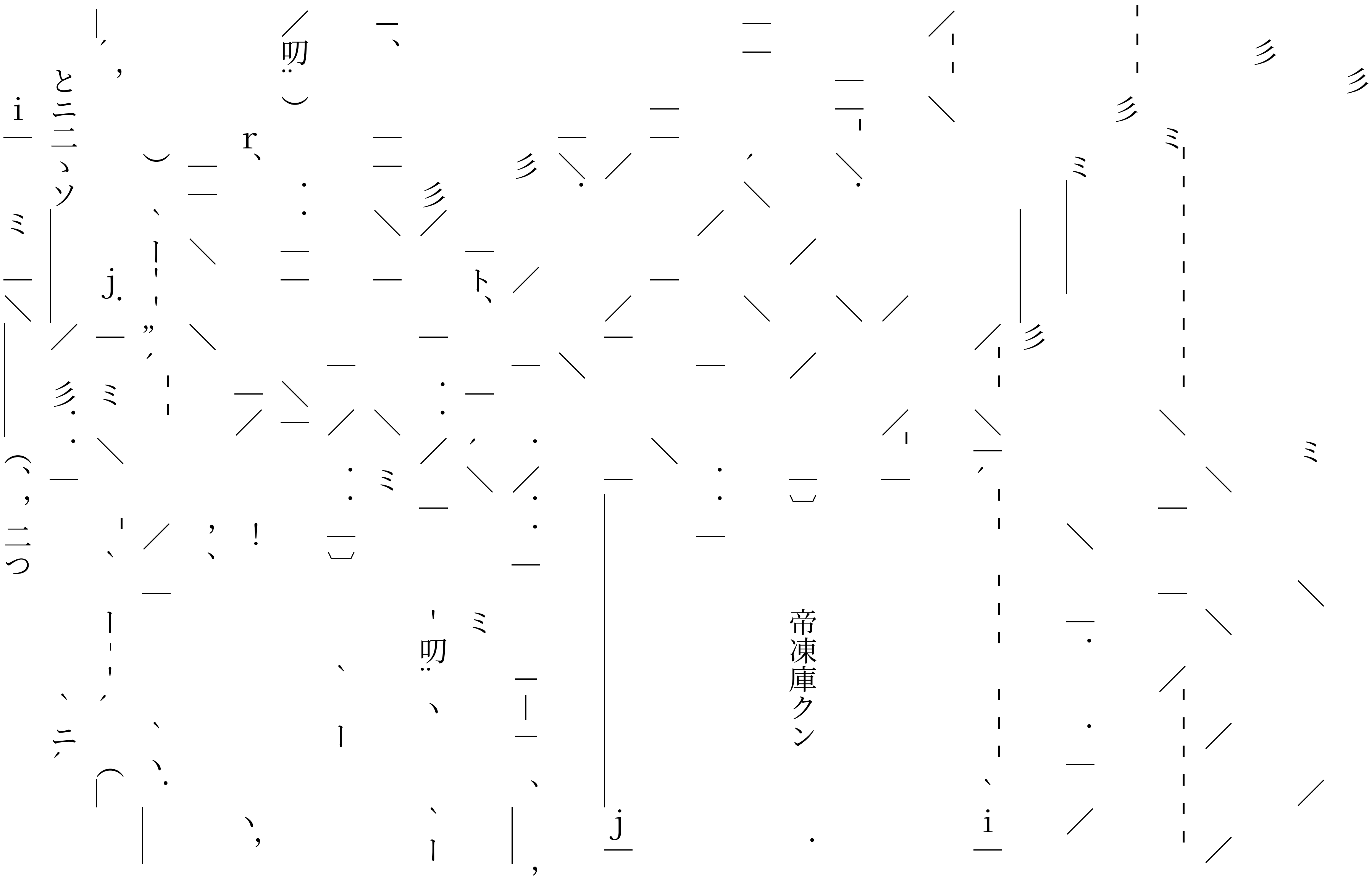
「（はっきり言って見たくねぇ・・・）」

「（次は何が……）ビクビク」

二人は恐る恐ると顔を上げて、その肖像画を見ていく。

現在の導師はイオン……前の導師はエベノス……しかし、その次がいけなかった……

第ＸＸ代目導師、――――


帝凍庫クン

―――、i―ミ―　　―彡・・・―´―――――

・―― ミ／　　＼彡 ―

用しねぇ ――　　―〕 常識は通

・・――　　―

j―　　―――――――――

「」バンバンバンバン↑腹を抱えて笑いながら床を叩く音

「帝凍庫クンって何さ！！　ちょっｗｗｗｗｗ！？」

―デデ―――ン！！！―

＞ハーミット・シオン……アウト―――！

「えー前前代導師様はダアトに冷蔵庫という譜業を取り込む事に力を入れた事で有名でうんぬんかんぬん・・・」

―――ウッディ！！！　―――シャオッ！！！

「であるからにして、こうして歴代の導師様は次々と偉業を成し遂げており、現導師イオン様にも期待が込められているというわけだ。

わかったかお前達？」
「ふぁぃ……（し、死ぬ……）」
「わがりまじだ……（洒落にならないよ）」
「うむ、よろしい・・・」

――――――――――――――――――――――――

１１：００

ようやく、彼らの今日専用となる部屋へと案内された。部屋の内部は彼らが初めて見たときの兵士の部屋の作りと同じ形であった。

「では、次の呼び出しが出るまではこの部屋に待機していなさい。いいな？」
「「イエッサー」」
「うむ、よろしい……ではまた後でだ」

そう言って、リグレットは部屋から出ていく。漸く二人だけとなった状態に漸くハーミットとシオンは楽な態度を取り出す。

「やばかった……さっきの導師肖像画はツボにはまったわ」
「その話題に入れようとしないでよ……思い出し笑いしちゃうから……（小刻みに震える）」

一刻も早く、笑いの元を頭から取り去ろうと別の事に集中するべく何かを探す。そういえば、部屋の真ん中には向かい合って並べられた机がある。そこに座ろうとハーミットはドカドカと椅子に腰を降ろし……シオンもまた……

プゥゥゥゥ～～～

ガス出し独特な音と共に椅子に座りつく。

「……」

「違うよ！！　スカしてなんかいないってば！！」

「……それじゃあシートの下か何処かにブーブークッション仕掛けてんじゃね？」

「ちくしょう……舐めやがって……」

文句を言いながらシオンは仕掛けられていたブーブークッションを勢い良く引っ張りだし、ベッドへと思いっきり投げつける。

「なぁ、他にも何か仕掛けてんじゃないのか？　特に今座っているこの机にとか？」

「ありえる……んで、調べてみるつもり？」

「いやいや、お前が調べてみろよ・・・」

「……」

「……」

「「ジャンケンポン！！！！！」」

＞パー×グー

「んじゃ、よろしく～」

「く・・・！！」

ハーミットは悔しそうにしながらも、机を凝視する。そして、恐

る恐ると一段目の引き出しに手を伸ばしてゆっくりと……開いてみると……

――――コロコロコロ・・・　　［う○い棒：たこやき味］

「・・・ふふふ（何故にう○い棒!?）」
「くぅっ――――!?（あぶね、吹くところだった!?）」

―デデ――――ン!!!!―

ナレーションが流れると同時に、そんなところに!?と思えるようなベッド脇に作られていた回転扉から例の三人組が現れる。

「う○い棒はダメだってば!!　思いっきり引っ掛かるだろうが!!」

――――ドルチェェェェ!!!!!!!

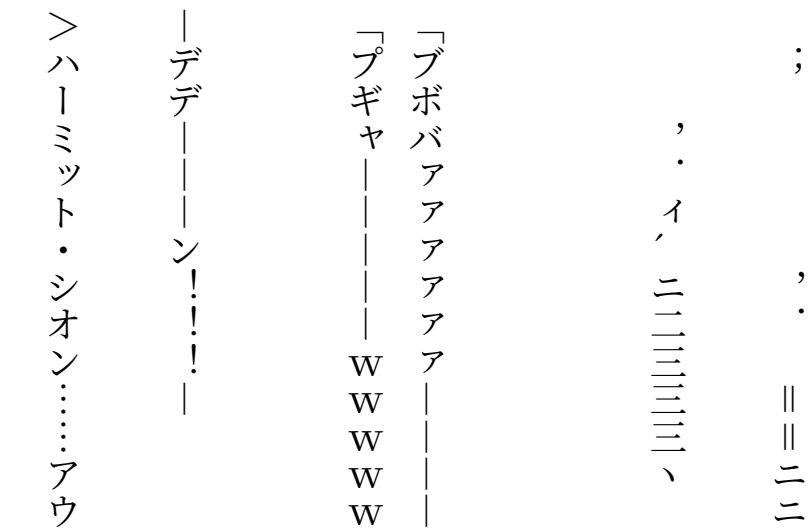
「災難だったね・・・（笑いたいけど笑えないため、無表情で言う）」
「ぐぅ……だが、次はお前の番だからな」
「う……!?」

そう言われてシオンは次は自分の番と身構えながら引き出しに手

を伸ばす。
そこにあったものとは……それは一枚の写真であった……
森の妖精、――

、、、、、，，
レ‐ 彡ミミ、
彡云ミj!
゛、‥‥、゛ミミ!
'；ミ!
rニニ、ミハ
テミ、，ft：テミ i 1
‥ レ'
、|'|、‥ ‥ ．!
|'ア、ノノ，'
ニ、 ，ハ

，，，，、、、、、
，．ィミミ、川j
，' ミミ、い州イ
i彡r'”、〃
i彡!
i彡! ‖ ，
ハV'．，ィ．t‥
いj! ． ‥
、j ，；‥
! |r
'，、、 、
'，、‥



「ブボバァァァァァ――――――wwwwww！！！！！」
「プギャ――――――wwwww！！！！！」

――デデ――――ン！！！――

＞ハーミット・シオン……アウト――――！

「色々と最悪だよねぇ！！　いったいスタッフ何考えてんのさ！！」
「もはや『R指定』の領域を超えてるわ！！」

――――ソルティ――――！！！　――――ドッグ――――！！！

しかし、まだだ……まだ終わらんよ！
引き出しはまだいくつか残っているのだ……

腹筋と臀部を抑えつつ、次へと進もうとする。

「これ以上やらないのが得策だが、そうなると企画的に面白くなんないからな……」

「メタな発言はやめとけってば……」

こうして、二人は共に同時に開けようと決めて、一気に二段目の引き出しを開けてみる。

ガラッと勢い良く開かれた引き出しだが、そこには何も存在しなかった。

「はぁ～セーフ……」

「よし、次いこうか……」

このまま一気に畳かけるべく、最後の三段目の引き出しを開ける。

「これは……テープレコーダー？」

まず、ハーミットが取り出したのはテープレコーダーと現実世界でもあまり見られなくなった物が一機入っていた。試しに中を調べてみるが、中にはカセットは入っていない。

「なんでこれが……おいシオン、そっちはどうだ？」

「……ハーミット、これ・・・」

スッと静かにシオンが引き出しから取り出したのは一枚のカセットテープであった。すると、組み合わせが丁度揃ったというわけだ……

「なんで態々分けて入れてたんだ？」

「さぁ、よくわかんないけどね」

それぞれ机の上に置き、交互に自分が取り出した物と相手が取り出した物を見てみる。しばらく同じことを何度かしていたが、遂に二人は決心をする。

「……聞いてみるか」

「そうだね、このまま待ってても何も変わらないだろうし……」

そう言って、シオンはカセットテープをハーミットに放るように渡し、それをハーミットは空中でキャッチする。念のためカセット自体を調べてみるが、なんの変哲もない只のカセットテープである。

この中には何が録音されているのだろうか……そんな疑問を持ちつつも、ハーミットはカセットをレコーダーに入れ、再生ボタンを押してみる。しばらくレコーダーの独特な読み込み音が響くが、二人はレコーダーを机に置いて音が再生されるのを待つ。

「まだか？　遅いな……」

「壊れてんじゃ……」

――キャッチ・マイ・ハーーーート！――

「」

「」

いきなりの声に放心しかけ、次からはドラムやらベースやらとリズムカルな音楽が流れてくる。だんだん聞いていくが、どうやらメロンを頑なに愛する男を歌った曲のようだ。だが、あまりにもアレな歌い方により、二人の我慢は限界に達しつつあった。

「早く停止しなよ!!　まずいってｗｗｗ!!」

「してんだけど、これ停止ボタンできねぇように細工してやがる!!」

その後、十分間近く流されたこの曲により、シオンは三回・ハーミットは五回ケツパチンコをぶちこまれたのであった……

―――――――――――――――――――――

11：00

室内にて、散々な目に会いつつも、しばらくしてからリグレットが呼び出しにやって来た。次は教団の集会があるため、二人も出席するようにとの事だ。

そんな二人が集まったのはオラクル騎士団が何時も訓練で使うあの広い訓練場だ。騎士団内部は逆ピラミット的な段差がある構造であり、梯子や階段をつかって降りるところが多くあるのだ。

すでに訓練場には沢山の兵士達が集まっていた。中には見慣れた人間もいる……

「これから何が始まるんだ?」

「無事に終われば幸いなんだけどね……」

そんな考えをしている内に、一番前にある壇上にて一人の人物がやってくる……導師イオンである。なんと、彼もまた仕掛け人の一人として参加していたのだ。

「お前もか……」

「頼むからこれ以上変な真似しないでくれ」

イオンは壇上に上がると、目の前にあるマイクを使って何やら喋り出していく。どうやら励ましの言葉か何からしい。

「皆さん、この度は我が教団の騎士団にご入団していただき、誠にありがと“ウサギ”」

「……（一瞬ビクッてなる）」

「……（息を止めて顔を下に向ける）」

「我が騎士団の歴史は本当に長きにわたり、歴史とともに語り継がれてきた神聖なモノ“デスノート”」

「これから入団する皆様もその一人となりうるやもしれま“センヌキ”。精進を怠らぬよう、今後の活動に励んで頂けることを望みま“ステーキ”」

イオンの話には、一句ごとの話の御尾がダジャレ口調にするというシンプルなものではあったが、これが二人には意外に効いていた。目を血走らせつつも我慢をし、喉からあふれでようとする笑い声を必死に押さえ込んでいた。

だが、イオンの仕掛けは更にレベルアップを遂げることになる。

「騎士団の主な活動は魔物を“ソゲブ！”することと、ダアトに来た要人を狙う輩を“デュクシ！”するものであります♪　これが遂行できない場合は騎士団の沽券に障るのでしっかりと“腹パン”覚悟で励んでくださいね♪」

「クゥゥッ……！！」

「アイツ、最後は『僕』で決めやがったよ」

セーフ……なんとか今回の集会では笑わずに済めたようだ。しばらく変な言葉が混じった激励の言葉は続いたが、耐えきってみせた。

１２：００

「それでは、次は騎士団内部の案内に入らせてもらおう……二人とも付いてこい」

「「はーい・・・」」

再びリグレットの指示の下、動き出す事になる。

そのまま会議室・武器庫・食堂と大した事は何もないまま進んでいったが、次の場所にて、彼らを罠に貶められる。

――――魔物小屋

「えー、ここにはかの有名な妖獣のアリエッタが使う魔物達が飼育

されている場所だ」
「ライガ達の場所か……」

ハーミットは此処によく来た覚えがあるので、内部の構造は知っていた。
目の前を見てみると、ライがやらフレスベルグやらグリフォンやらとバラエティー溢れる魔物達が小屋のそれぞれに収められていた。

今回もまた、何ら変わりない紹介で終わるだろうなと……油断していたところをやられる。

「……プハハハハ」
「フフフフ……」

小屋の部屋の内、一つだけあからさまに可笑しい場所が存在していたからだ。

なんせ、『ラルゴがライオンペイントを顔に施して小屋に佇んでる』なんて誰が想像できようか？　しかも、名札の場所には……

種族：黒獅子
名前：らるご
特技：にゃんにゃん

ふざけてるしか言いようのない名札の内容がそこにあった。

―デデ――ン！！！―

＞ハーミット・シオン……アウト――――！

「ラルゴー！！　お前もかあぁぁぁ――――！！！」
「今回のオラクルは最高に狂ってやがる！！」

――――オーマサーン！！！　――――アターミ！！！

「こいつはらるご、ライガ種の亜種として最近発見された珍種だ」
「いや、まるっきり人間でしょーが」
「私語厳禁！！」

シオンにリグレットの水鉄砲が降りかかる。ちなみに、舐めてみると予想通りに“塩っぱかった”。

「騎士団はこいつを重宝して可愛がっていてな……ラルゴだけの為の歌を作ってやったりもしている」
「歌……だと」
「これって耳ふさいじゃダメかな……えっ、禁止？」

リグレットはいつの間にか、持ってきていたラジカセを前に置き、再生ボタンを押す。そこから流れてくる歌とは……

『ホントにホントにホントにホントにラ～イオ～ンダ～♪』

「くくくくく――――！！！」

「ちょっ、それやばいでしょ著作権的にｗｗｗｗ！！！！！」

―デデ――――ン！！！―

＞ハーミット・シオン……アウト――――！

物凄く聞き覚えのある曲が流れ、この状況にうまくマッチして笑いのツボを生んでしまった。小屋に入ってきた三人組により二人とも四つん這いにさせられ、彼らの尻をパチンコが襲う。

――――フジィ”！！　――――サファリィ”！！

１３：００

漸く昼食の時間がやって来た。流石に強烈な笑いによる痙攣は着実に二人のスタミナを奪っていたようだ。初めに案内された食堂に行き、食券を自腹で払い、昼食を取ろうとする。

ちなみに、二人が頼んだのはカツ丼・カレーである。

「ラルゴぇ……」
「もし、アッシュが代わりにオカメインコとして出ていたら俺着実に死んでるかもな」
「あの赤毛が……ププ！！」

―デデ――ン！！！―

＞シオン……アウト――――！

「いや、あいつの場合鶏にしたほうが似合ってるかもしれない」

――――どうでもいいよアイ”ダー！！！

シオンは再び席へと戻り、早速食事に取り掛かる。文句を行っても仕方ない。腹ごしらえが先だ。そんな様子を見たハーミットもまた丼の蓋を開けた。

「……」
「どうしたの？」

ハーミットは一瞬硬直した。なんせ、丼の中身のカツ丼が余りにも変であったからだ……ご飯や卵は良い・・・だが、カツの方がお子様ランチにあるようなハンバーグ並みの大きさってどういう事なんだ！！

「チクセウ・・・」
「うわ、バランス悪・・・」

折角の食事タイムが一気に台無しになった。だが、中身がどうであろうが食べておかなければこれからやっていけないことは事実である。

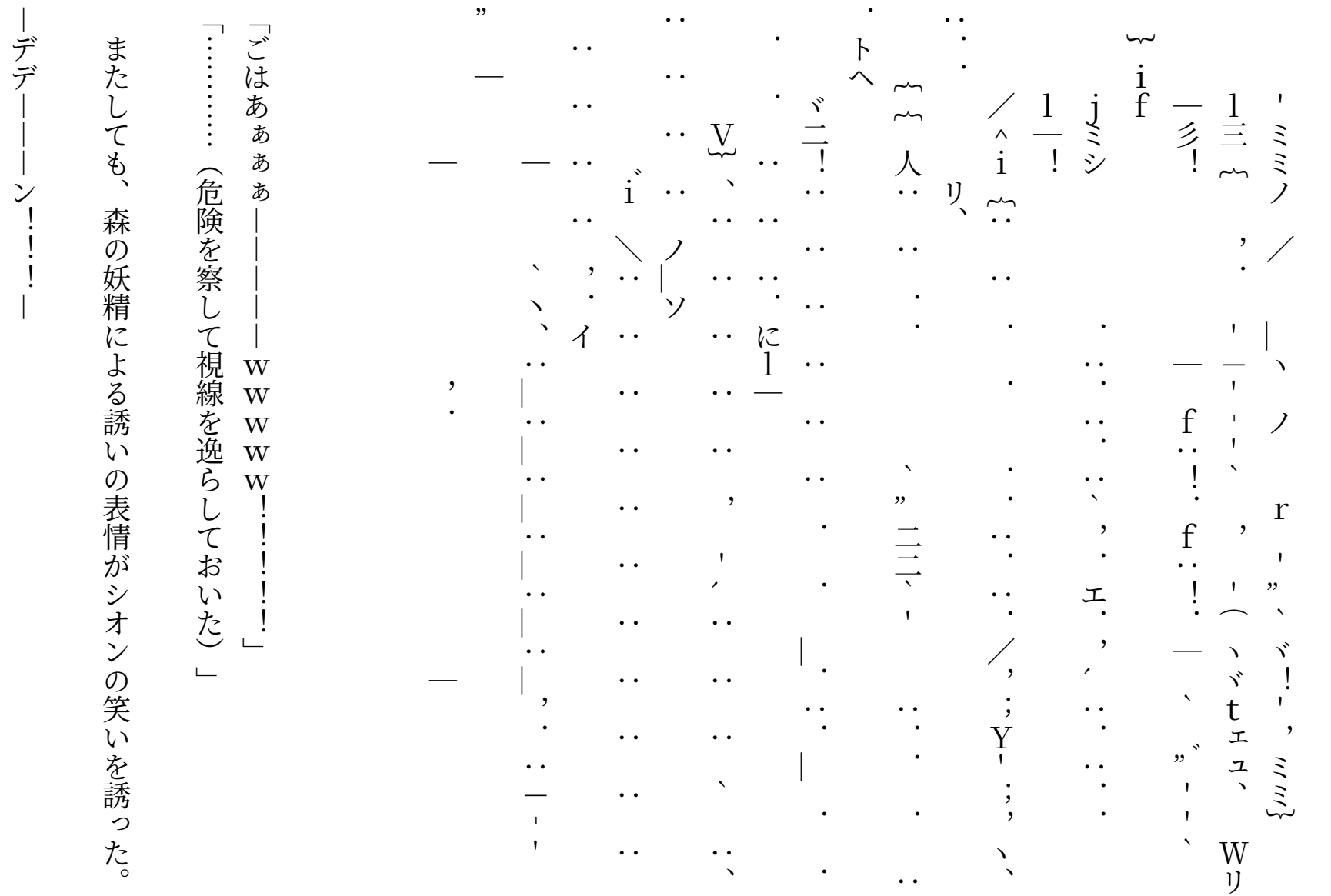
「もぐもぐ・・・ほとんどご飯の味しかしねぇ」
「ちゃんと食べなよ（内心笑い）」

シオンの方はカレーとしてちゃんとした形をしており、味は別としてちゃんと食べられていた。だが、そんな時……シオンはある物に気がついた。

「ん……？」
「どうした？」
「なんか皿自体になにか描いてあるんだけど……」

カレーが無くなって見える皿の表面がなにやらおかしい事に気がついたのだ。不思議に思いつつ、シオンは食べているカレーのルーとライスを皿の端ギリギリにスプーンで退かしてみる。そうして見てみた先には……

――シオンの皿表面



「ごはあぁぁぁ――――――wwww！！！！！」
「……（危険を察して視線を逸らしておいた）」

またしても、森の妖精による誘いの表情がシオンの笑いを誘った。

―デデ――ン！！！―

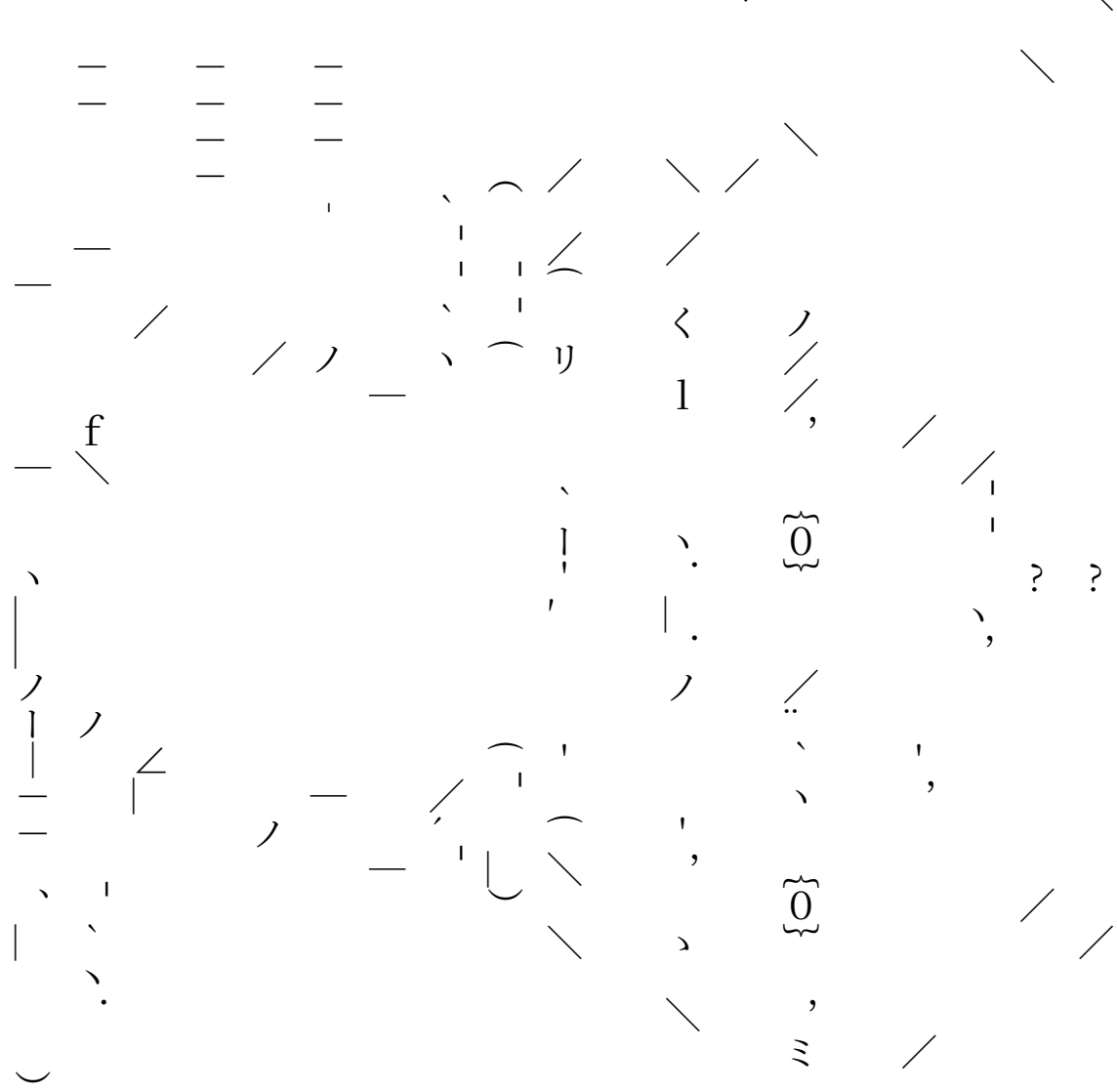
＞シオン……アウト――！

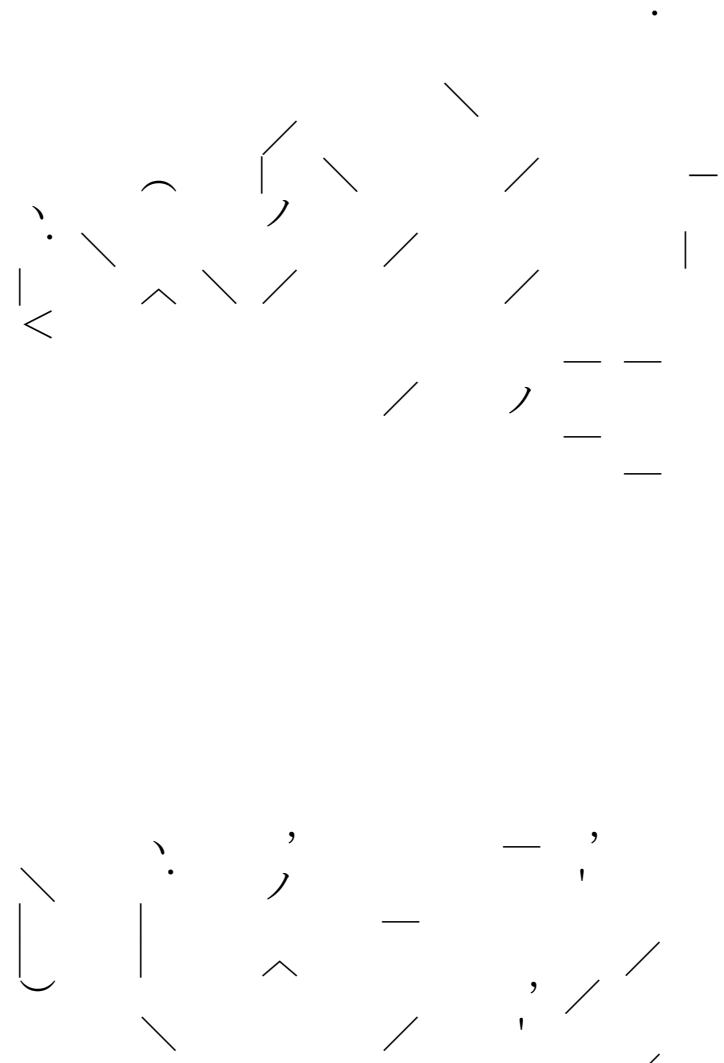
「スタッフぇ……」

――まそっぷ！！

一方、ハーミットもまたカツ丼を食べ終えるところでもあり、自分もまた丼の底を伺ってみる。

――ハーミットの丼底





「フフフフ……（もはや笑うしかない）」

「（痛みで悶絶している）」

―デデ―――ン！！！―

＞ハーミット……アウト―――！

もはや何も語るまい……

―――ペヤング！！！

こうして、午前の部は過ぎていくのであった……

しかし、二人への罰ゲームはまだ続いていく！！

今回はここまで……午後の部は次回の記念編にてお会いしよう…

…待て、６００万！！！

５００万Ｈｉｔ　特別編（後書き）

都合上、分けて書かせてもらうことを願います。

本当にすみません……

原作編　第十五話（前書き）

ナタリア初登場の回でもありますね。

原作編　第十五話

城への登城を終えたルーク達はファブレ公爵邸へとたどり着いていた。

門を警備していた白光騎士団がいち早くルークの姿を認め、「ルーク様！　お帰りお待ちしておりました！」と嬉しげに声を張り上げる。

住み慣れた場所なのに、こうして門を潜るのは記憶にある限りでは初めてで、おかしな感じだ。玄関ホールに入ってすぐに父であるファブレ公爵が立っているのが見えて、ルークは声を弾ませた。

「父上！　ただいま帰りました」

公爵がルークに視線を向ける。

「報告はセシル少将から受けた。無事で何よりだ。ガイもご苦労だったな」

「……はっ」

低く答え、ガイが身を正す。

「使者の方々もご一緒か。お疲れでしょう。どうかごゆるりと」

「ありがとうございます」

公爵の御好意の言葉にイオンが頭を下げた。

「ところでルーク、ヴァン謡将は？」

「師匠？　ケセドニアで別れたよ。後から船で来るって……」

公爵の隣に立っていたセシル将軍が「ファブレ公爵……。私は港に……」と彼を見上げた。

「うむ。ヴァンのことは任せた。私は登城する」

言うなり、公爵は今ルークが入ってきたばかりの玄関へ向かう。

そして、すれ違い様、ティアに視線を向け一瞥した。

「君がティア・グランツか」

「はい」

「君の事はある者からよく聞いている」

「……左様でございますか」

静かに会話を始め、やや普通な感じに互いに向き合う。

「ヴァンの妹だと聞いているが」

「はい」

「この度のルークの事件について、後で“色々”と話を聞かせてもらいたい。よろしいかね？」

「御意に……」

ティアは察した……己にヴァンへの暗殺未遂の計画を回した依頼主の正体を……

自分が組み込まれているハーミットの計画は、全てはファブレ家に帰回していることを……

何故あんな大雑把な計画を提案したのかは、当事者である彼らにしか知らない物だが、このことを他にばらしたら、相手も唯では済

まさないだろう。

でも、計画は限りなく失敗した……ルークをマルクトへと擬似超振動で飛ばしてしまったという失態に……この損失は埋め直すなどという簡単な行為では収まるはずもない。

恐らく、自分は秘密裏にファブレの者に処分される可能性も無くはないのだから・・・

「まぁよかろう。行くぞ、セシル少将」

約十秒ほどの対話であったが、長くも感じれた。
それも終わって公爵はセシル少将を従えて出ていった。

「なんか変だったな。旦那様」

そう呟くガイの声を聞きながら、ルークは気持ちが冷えていくのを感じていた。

「（俺が帰ってきたの、二ヶ月以上ぶりだぜ。なのに、殆ど顔を見もしないで、かけてくれた言葉は二言だけ。そっけなさすぎね？）」

……いや。いつものことだけど。
どうして父上は俺に冷たいんだろう。本当に……俺を兵器にするために軟禁してた、のか……？
……相変わらず、セシル将軍と一緒だしな

「ヴァン師匠がどうしたんだろう……」
「さあな……。まだバチカルに戻ってきてはいないようだが」

――師匠は。再会した時、笑ってくれたのに。『よく頑張ったな』って――

「それじゃ、私もここで……」

ティアが言った。長い間彼女を縛っていた、ルークを屋敷まで送り届けるという義務は終わった。もう一緒にいる理由はない。

とりあえず、別で宿を取って適当に時間を潰すしかない……

モースが命じた任務もあるが、一朝一夕で出来るものではないし、それに時間はほぼ無制限な中途半端な物に等しいから気にする必要はさほどないだろう。

だが、運命はそんな彼女を安楽へと導こうとはしなかった……

「ルーク！！」

突如として、歓喜に満ち溢れた女性の声が応接間に響きわたる。

誰もがその声の主の方へと顔を向けると、そこには奥の通路から小走りでこちらへと向かう赤髪の女性が目に入った。

「は、母上！？」

ただ一人、ルークだけはその人物を大いに知っていた。そう、自分の母親シュザンヌだ。

いきなりのシュザンヌの行動に驚きながら、ルークは流れるままシュザンヌの抱擁を受け止めた。

「おお、ルーク！　本当にルークなのね……。母は心配しておりました。お前がまた　よからぬ輩にさらわれたのではないかと……」

「へへ・・・大丈夫だよ。こうして帰ってきたんだしさ」

母の心配を解かせられたことにルークは嬉しく思い、愛しげに軽く肩を撫でてやる。

「お、叔母様……お待ちくださいませ……はぁ・・・はぁ・・・速いですわ……」

そこへ、もう一人応接間へとやって来た。

シュザンヌとは違い、息を切らして若干苦しそうにしつつも凛とした風貌を漂わせる一人の女性……キムラスカ王国王女にして婚約者でもあるナタリア・ルツ・キムラスカ・ランバルディアがそこに居た。

「まぁルーク！！」

「げっ……ナタリア……」

「なんですのその態度は！！　私（わたくし）がどんなに心配していたことかお分かりでして！？」

「いや、まあ、ナタリア様……。ルーク様は照れてるんですよ」

「ガイ！　あなたもあなたですわ！　ルークを捜しに行く前に、わたくしの所へ寄るようにと伝えていたでしょう？　どうして黙って行ったのです」

その美しい瞳でジロリとガイを睨み、ナタリアは一歩、彼に近付いた。そんな威圧感に圧倒され、ガイはじりじりと後ろに引いていく。

「む、無理ですよ！！　俺みたいな一介の使用人がそう易々と城に行ける訳ありませんよ！？」

「ならば兵士に頼んで私を呼び出せば良いのです！！」

「そんな無茶な！？」

いい加減、付き合いも長い。ルークが誘拐される以前からの顔なじみだ。身分は違うが、ルークを介した幼なじみと言ってもよい。

「はぁ・・・貴方の姉上の仰られたとおり……何故女性に対してそんな低い腰になさるのですか！！　男でしたらもう少し堂々となさいませ！！」

「ご存知でしょう！！　俺は特に姉さんには頭が上がらないんですよ～！！」

ガイはマリィの『男子たる者強くあれ』な教えを小さいころから受けてた事もあり、そんな気迫に幼少時では女性を相手にすると弱腰に接してしまう癖が出来ていたのだ。

無論、未だに姉のマリィには敵わないでいるのだ。

「おかしな人。こんなに情けないのに、何故メイドたちはガイがお気に入りなのかしら」

少しむくれた顔をして、ナタリアはルークに向き直った。これ以上ガイと話すのは諦めたらしい。

「それにしても大変ですわね。ヴァン謡将……」
「師匠がどうかしたのかよ」
「あら、お父様から聞いていらっしゃらないの？　貴方の今回の出奔はヴァン謡将に責任があるかどうか査問する予定だそうで」
「……兄さんが」
思わずティアが呟く。初めてその存在に気付いたかのように、ナタリアの視線が彼女に向いた。
「あら……そちらの方は……？　――ルーク！　まさか使用人に手をつけたのではありませんわよね！」
「何で俺がこんな冷血女に手ぇ出すんだ！　つーか、使用人じゃねーよ！　師匠の妹だ」
「……ああ。貴方がヴァン謡将の」
「んなことより、師匠はどうなっちまうんだ！　ていうかどうして責任だとかを師匠が取らなきゃなんねぇんだよ！！」
「仕方ないのですよ。ルーク……」
今まで口を閉じていたシュザンヌがルークを諭すように寄り添う。
「今回の出奔の原因はヴァン謡将を狙う輩が居たために起きたことが原因です。詰まるところ、ヴァン謡将があの時ファブレ家に訪れていなければ貴方があんなことになる事はなかったという論議にも一理あるのです」
「母上……ですけど……」
今まで傍観していたジェイドが口を開いた。
「姫の話が本当なら、バチカルに到着次第捕らえられ、最悪処刑と

いうこともあるのでは？」
「はぅあ！　イオン様！　総長が大変ですよ！」
「そうですね。至急ダアトから抗議しましょう」
「（師匠が処刑される……！？）」
ルークは幾分取り乱してナタリアに迫った。
「なあ、師匠は関係ないんだ！　だから伯父上に取りなしてくれよ！　師匠を助けてくれ！」
「……分かりましたわ。ルークの頼みですもの」
ナタリアは頷いた。両手を組んで、じっとルークを見上げて微笑む。
「その代わり、あの約束、早く思い出して下さいませね」
――う。いつものアレだ。ルークは憮然とする。
「ガキの頃のプロポーズの言葉なんて覚えてねっつーの！」
「「「！」」」
アニスと、何故かティアが息を呑んだ。無論、ルークは気付かなかったが。
誘拐から戻ってから、ナタリアといえばいつもこれだった。

「（んなこと全然思い出せねーのに……）」
「記憶障害のことは分かってます。でも最初に思い出す言葉があの約束だと運命的でしょう」

頬を染め、ナタリアはうっとりと瞳を潤ませる。自分の顔が熱くなっていくのが感じられて、ルークは俄かに落ち着かなくなる。

「い、いーからとっとと帰って、伯父上に師匠の取りなししてこいよっ！」
「もう……意地悪ですわね。分かりましたわ」

少し拗ねた声音で言うと、ナタリアは部屋を出て行った。城へ帰るのだろう。

「……ったく。ナタリアの奴は相変わらずだなぁ」

ようやく落ち着かない気分から解放されて、ルークは肩から力を抜いた。

「早速のナタリア節だったな」

ガイが笑う。本人が側に寄ってこられなければ余裕しゃくしゃくなのだ、この男は。

「お姫様～、な感じの人だったね～。綺麗な召し物。優雅な物腰。上品なおしゃべり。あれがいわゆる上流階級？　ちょっと賑やかなのも含めて」
「では、アニスも上流階級ですね」
「むー。大佐、それってどういう意味ですかぁ！」

アニスのむくれ顔を見てガイが笑い声を上げる。「あーぁ。うるせーっての……」とルークがぼやく側で、ティアが小さな声を出した。

「……ナタリア様って綺麗な人。可愛いドレスも似合うし……」
「そうかぁ？　ぎゃあぎゃあうるせーだけだよ」
「それに、ティアだって綺麗じゃないか」

何のてらいもなくガイが言う。ティアはぱっと赤くなった。

「あ……ありがとう……」
「あらあら、ガイったら相変わらずね」

そんな様子をシュザンヌは面白そうに見ていた。

「ガイ――――！！！！！！」

ドンッ――――！！！！！！

そんな所へ、大きな足踏みをして此方を見据える者がいた……
いきなりの彼女の登場に全員驚きながらも、視線を彼女へと移す。

だが、一人振り向かずに固まっている男が……ガイが居た。
次にはブリキの人形の如く、首だけをギギギと声のした後ろ方向へと向けてみると……

「何時まで旅行気分でいるつもりですか貴方は！！　屋敷へ帰ったのならまず使用人の仕事を処理しなさるのが使用人でしょうが！！」
「ねねねねねねね姉さあぁぁ――――――――ん！！！！！！」

背後に雷が落ちる光景が良く似合うガイと同じ金髪のメイド服を着た使用人……ガイの姉マリィ・セシルがそこに居た。
そんな怒りボルゲージＭＡＸな姉の姿を見るやガイは顔を真っ青にしてその場に硬直する。

そんなガイに構わずズンズンとマリィは近づいて行き、遂にはガイの襟元を片手でつかみあげる。

「あぁ、ようこそファブレ家へ御客人方。我々使用人一同は貴方方の御来邸を心より歓迎いたしますわ」

その際、使用人スマイルを忘れず一同へと向け、深々とお辞儀をしていた。

「ルーク様、こたびの御帰還誠に心待ちにしておりました」
「おぅ、マリィも相変わらずだな。暫く家に帰ってなかった分なんだか懐かしく見えんな」
「ふふふ、左様でございますか」

マリィはにこやかに笑い、未だに掴んでいたガイの襟を引っ張り上げて服ごと引きずり始めた。

「姉さん！　俺は捜索から帰ってきたばかりで……白光騎士団の方々に報告しなきゃなんないから・・・その……」
「何ですか？　そんな物ルーク様がバチカル港に入った時点で私とペールを経由に既に伝えてます！！　そんな事より貴方が留守にし

た分溜まった貴方の仕事をさっさと片付けることが先決です」
「ひぃぃ!!　ちょ・・・姉さん首!!　首がもげるぅ～～～!!!!」
「では皆様、これにて私達は失礼いたします」
こうして、ガイはマリィに強引に引きずられるがまま屋敷の奥へと去っていくのであった……
「おやおや、ファブレ家の女性の使用人は随分と逞しいものですね」
「うんや、あんなことするのはマリィだけだぜ？」
「はぅあ!!　ガイってばあんなお姉さんもってホント大変そうです!!」
「それにしても、あのマリィという女性……まるで台風のような方でしたね」
その場にいた人間がそれぞれ感想を言う。
「さて、折角ですし皆様方も我が屋敷をご自由にお使いなられてください」
そして、シュザンヌの言葉を皮切りにルーク他達は使用人や騎士に案内されて屋敷を見物しに回り出した
全員がファブレの屋敷を物珍しい顔をしながら見物していく。
最初はルークが自分の部屋を案内したりとルークは自分の屋敷を良く見られるのが嬉しく、どんどんと進んでいく。

途中、マリィにコッテリと絞られたガイも再びグループに入れて、ルークを筆頭とした屋敷案内は続いていく。

「ルーク様のお屋敷ぃ、すごいじゃないですかぁ。こんな素敵な所にあってぇ～」

部屋から退出して回廊を歩いていると、アニスがウキウキした様子ではしゃぎ始めた。

「そうか？　俺はこんな高い場所にあるなんて知らなかったからな」

「場所もそうですけど～、建物も立派じゃないですかぁ～」

「ふーん。普通だろ、こんなの」

「あぁ～ん、もう、ご謙遜してぇ？　でも、そういうところも素敵ですぅ。アニスも、こんなお家に住んでみたいなぁ～☆」

アニスは可愛らしくルークに擦り寄った。が。

「ミュウはチーグルの森がいいですの。チーグルの森の方が素敵ですの～」

「だーっ、勝手に話に入ってくるな、このブタザル！」

「みゅうぅぅ……」

ルークはミュウをぐりぐりしはじめた。……ので、アニスが「ちっ、邪魔しやがって……」と低く呟いたのには気付かなかったりした。

回廊を抜けて、再び玄関ホールに出る。

「色々なものが飾ってあって、流石は公爵家のお屋敷ね」

気分が落ち着いてきたのか、興味深げな顔でティアが辺りを見回した。ルークは素っ気ない。

「俺には何がなんだかサッパリだし、興味もねぇからなぁ」

「勿体無いねぇ。屋敷の中には由緒正しいものが、沢山飾られてるんだぜ？」

「じゃあ、あの柱に飾ってあるあの剣も、何かいわれが？」

苦笑いするガイにティアが尋ねると、彼はふと表情を固くした。

「……ああ、あの剣が気になったのか。あれは……」

「ん、ペール。そんなところでどうしたんだ？」

件の剣の飾られた柱の前に庭師の老人が佇んでいるのを見つけて、ルークが声を出した。

「これはルーク様」

頭を下げてくるペールの隣に立って、ルークは、例の剣を見上げる。

「この剣を見てたのか」

「はい……。懐かしい思い出の詰まった剣でございますから……」

「ペール！」

不意に、ガイが鋭い声を出した。

「そ、そうでした。申し訳ございません」

「何が申し訳ないんだよ？　それにガイも急に大きな声出して……」

「……いや、何でもないんだよ。気にするな」

ガイは小さく笑う。

「この剣のいわれだったよな。……聞いた話じゃ、何かの戦いで、敵の、……首級と一緒に持って来たものらしいな……」

「首級って……」

「首だよ。大将の首だ」

ぎょっとして、ルークは顔を引きつらせた。

「……う。なんか、あの剣が怖くなってきたな……。でも、この剣が懐かしいって、何でだ？」

「だから、気にするなって言ったろ」

「気になるっつーの」

ルークが唇を尖らせたので、ガイは苦笑する。

「そうだな。俺が賭けに負けたら話してやるよ」

「賭け？　何だよ、そりゃ」

「忘れちまったか？　なら、賭けが終わるまでは秘密だ」

「ちぇっ」

ルークは軽くむくれる。ガイが笑った。

そろそろ時間も遅くなってきた。

名残は尽きないが、もう旅の仲間たちとも別れなければならない。

「僕たちもそろそろおいとましますね」

イオンが言う。彼らの寝室は王城に用意されている。他にも会談でやるべきことがあるからなるべく城に居たほうが都合がいいからだ。

「ミュウはくたくたですの～」

「うるせー！　ブタザル！」

「みゅう……」

「ははは。久しぶりの我が家なんだ。休める時に休んどこうや」

「これからも大変そうだしね～」

ガイの言葉にアニスが頷く。ジェイドも続けた。

「そう。大変ですよ。まだ戦争が回避されたわけではないのですから」

「ルークは……明日からはどうするの？」

ティアが見つめてくる。

「そうだな……。ヴァン師匠のことも気になるし、明日……父上に聞いてみる」

「……全ては明日、ですね」

静かなイオンの言葉が響いた。

それにしても、恐らくこの面々が再び共に旅をすることはないのだろうが。

仲間たちは一人、また一人とファブレ邸を出て行った。

「ルーク様。アニスのこと……忘れないで下さいね」

「……なかなか興味深かったです。ありがとう」

アニスが言い、ジェイドも、いささか引っ掛かる物言いではあったが微笑む。

「じゃあな」

短くルークは声を返した。二ヶ月半。長いような短いような時間だ。その間を共有した彼ら。

「……私もモース様に報告があるから行くわ」

最後にティアが言った。ティアはわざわざモースに推奨して報告よりルークを屋敷に贈る義務を行なったのだから、次はこういうことだ。

「あ……ああ……」

何だか急に寂しくなった気がして、ルークは自分に驚いた。

「（……二ヶ月半、毎日一緒にいたからかな）」

「優しいお母様ね。大切にしなさい」

「何だよ。お前に言われる筋合いねーよ」

「そうね。……それじゃ」

そうして、ティアは屋敷を立ち去ろうする。

が……後ろからある者に呼び止められる。

「お待ちくださいティア様」
「ん、どうしたんだラムダス？」

ファブレの執事ラムダスだ……ルークは何故彼がティアを呼び止めたのか疑問に感じる。

「……なんでしょうか？」
「奥様が“旅行中”でルーク様を見つけてくださり、態々屋敷まで面倒もみてくださった貴方様に是非お礼がしたいと申されております。申し訳ありませんが是非ともう一度中へお戻りいただけませんでしょうか？」

ラムダスの言葉にティアに体が若干強ばった。
これから自分はどうされるか今日この場で決められると悟ったからだ。

もし、この誘い（命令）を断りなどしても、後からでも文句無しに連れて行かれるだろう。

「……わかりました。奥様の御好意に感謝致します」
「では、どうぞこちらへ……」
「へー、母上がお前になぁ……」

ルークだけが、事の全てを知らないためにこの言動の隠された裏には気付かなかった。
こうして、ティアは再びファブレの屋敷へと入っていくのであった……

「奥様、ラムダスです・・・ティア様をお連れいたしました」
「ご苦労でした。御入りになられて」
一度ノックし、中の主に確認をとったラムダスはドアを開け、それから側の壁について右手を部屋へと向ける。
ティアに「どうぞお入りください」という合図でもあった。
ティアは冷静に取り繕いつつ、部屋の中へと入っていく。
ちなみに、今入ったのはファブレ公爵夫人の私室であり……中の主は当然――
「お待ちしてましたわ、ティアさん」
シュザンヌ夫人その人である。
さて、ついでなので彼女について此処で詳しく紹介していこうと思う。
ファブレ公爵夫人。ルークの母であり、キムラスカ・ランバルディア王国の国王インゴベルト六世の妹。実質的にいえば彼女とインゴベルトは異母兄妹でもあり、幼少期では正妻の子であるインゴベルトとは会う機会はあまりなかったそうだ。さらに、己の母である前王の第二夫人は野心家でもあり、当初は王位を次ぐことができる男児が生まれる事を望んでいた。しかし生まれてきたのが女児であるシュザンヌ……このために権威の上に登る夢潰えた彼女はシュザンヌには愛情を注がず、全てを乳母や家庭教師任せにさせた。さらには虐待まがいな理不尽な暴力も振るわれたともいわれている。そ

んな家族関係により、成長したシュザンヌは“他人に人生を振り回される”事を心のどこかで嫌うようになった。

そんなシュザンヌの不遇に見かねた前王はシュザンヌを降嫁させ、当時のファブレ家子息であったクリムゾンとの婚約を結ばせた。ファブレ家はキムラスカに有数ある名家の中でも第一位に位置するともされる貴族だ。だが、それが若干災いして、前からファブレ家との家の繋がりを狙っていた貴族に謂れのない怨みを買われ、暗殺未遂となった事件に何度か合った記録もある。

こうして、王族の黒き歴史を踏み越えてきたシュザンヌは“バチカルの女傑”と何人かの貴族にも畏怖され、ファブレ公爵夫人として堂々とした地位ある人物へと成長していったのであった。

しかし、ルーク（アッシュ）を身篭り、出産した後に心臓の悪さが体に現れ、表舞台から身を引いたが、ハーミットの手術（第８０話参照）により完全復帰を果たし、少しずつ表舞台へと戻り出している。

ちなみに、性格としては裏を読む毎日が続く幼少期を過ごした為腹黒く、隙あらば相手の汚点や弱点を突くことにに長けている面もある。夫との仲は『一応』良好である……後、ルーク（アッシュではない）は溺愛している。↑アッシュ哀れ……

「貴方の事はハーミット殿から良く聞かされておりますわ。ですが、今回の“あの”出来事……予定にはなかったことが起きたようですね」

「この度の事故、私の不甲斐ないミスによる物です。誠に申し訳ありません……」

「あら、私は貴方から謝罪を受け取るために此方へ呼んだわけではありませんのよ♪」

この言葉とその時の笑顔をティアは生涯忘れることはないだろう……本人曰く、アレは女神の皮を被った悪魔そのものの笑みであったと・・・

ティアの謝罪を一掃し、逆に何をすべきかを問いただされているかのようだ……

「い、言い訳は致しません！！　ですが、どうかダアトには責任を持っていくことはお許しください！！　私だけの為にダアトの人達に迷惑をかけることは――――！！！！！！」

「貴方がそう仰られても、元より髭……コホン、“貴方の兄”と樽豚……ゲホンゲホン！！　大詠師モースには我がキムラスカは何度も煮え湯を飲まされているようなものなのですけどね……」

「うっ……！！」

シュザンヌの意見は最もだ……ティアはヴァンのやっている・やってきた事をまだよく知っていないが、公爵子息誘拐・コーラル城無断借用……モースは内政干渉などと普通の人が見れば横暴そのものな身の余る行為がずらりと並んでいる。

だが、ここオールドラントは預言うんぬんやらと定着した逃げ道の為に責任追及しようにも出来にくい世界でもあるのだ。しかも、国自体が預言を主体とした政治を行なっているためにシュザンヌを中心とし、クリムゾンも強くは言えない。

「ですが、ダアトには我が公爵家に最も大恩ある人物が活動する場所……ダアトを潰し、我がキムラスカに乗り換えるかの勧誘をしても、あの者は頑として首を縦に振ることは無いでしょう……たとえ強引に連れていこうものならそれこそ危険でもあるでしょう」
「はぁ……」
「貴方の意見を汲む訳ではありませんが、ダアトへの抗議は取消に致しておきます。ルークも傷なく屋敷へ戻れたことですし、もとより、あんな依頼を提示した私達にも否はありますので」
「あ、ありがとうございます！！」
「ただし、その代わりですが……」

そして、ここからティアの苦難が始まる……

「私の趣味に今日一日付き合ってもらいましょうか♪」

『３０分後』

久しぶりの屋敷の空気を味わいつつ、改めて屋敷の内部をルーク

は歩き回っていた。

「ふぅ、やっぱ自分家が一番だよなー！」

やはり住み慣れた場所が落ち着く。宿屋等でのベッドとは違って、私室のベッドは極上のフカフカ感が味わえた。

「そういや、ティア……母上に呼ばれてたんだよな。何話してんだろうな？」

折角だから見に行ってみるとするか……幸い、自分の部屋と母の部屋は近い所にあるのだから。

途中で会う騎士達や使用人の挨拶に軽い相槌を打ちつつ、ルークはシュザンヌの部屋の前へと来ていた。

「母上ー、いらっしゃいますか？」

一度ノックをして中の有無を確認するが、返事が帰っては来なかった。

「あれ、いねーのか？」

普段は自分の部屋に居る母だが、珍しい事もあるものだとルークは思いながら試しにドアを開けてみる。

ギィィィ――――――……

「お、奥様！！　流石にこのような服は――――！！！！！」
「うふふふ・・・中々似合っているじゃない。でも、こっちの方も貴方に似合うわきっと……」
「あ、可愛い……ってそうではなくて！！　そんなフリフリな服は私もちょっと――――！！！！！」
「あらあら駄目よ？　貴方に拒否権などないのだから♪」
「うぅぅぅ！！／／／／／／」

ガタンッ……！！！

「……ティア？」
「ハッ！？　る、ルーク！！　違うの！！　これは違うのよ！！」

ルークは覗いた先の光景に唖然とした。

何せ、ティアが色々と有り得ない服装をしていたからだ……

髪は赤いリボンで結んだツインテール……
耳には猫耳カチューシャー……
服装はフリルを多く使った少しピンク色を帯びた純白のドレス……
靴はシンデレラのガラスの靴のような綺麗なハイヒール……

そう、今のティアの姿は現世でいう“ゴスロリファッション”をさせられていたのだ。

「うぅぅ……いやあぁぁぁぁ――――――！！！！！」

羞恥心に塗れ、ルークに見られたという事実がティアの我慢に限界が起こり、感情を暴走させて顔を真っ赤にさせながらシュザンヌの部屋を逃げるように出ていった。

実はシュザンヌ、昔は娘が欲しいと考えたこともあり、男児であるルーク（アッシュ）が生まれたからには夢潰えたと考えたが、偶に使用人で可愛い娘を見つけると着せ替え人形にしてその姿を見て楽しむという趣味があるのだ。

嘗てハーミットがそんな趣味を知った時、シュザンヌからアリエッタをもし良ければ連れてきて欲しいと脅迫……ケホン、お願いされたこともあった。

その時ハーミットはアリエッタの着替えた姿を見てみたいとも考えた事があったが、シュザンヌに気にいられたらアリエッタを親権纏めて奪われる気がしたので敢えて断っていた。

「……母上、ティアは何してたんだ？」

「ふふふ、ちょっとあの子の願望の手助けをしてあげただけよ？」

飽く迄ルークの前では母親の顔をしているシュザンヌである……

何処か遠くでハーミットのティアに対する謝罪の言葉が風で流れてきた気がした……

原作編　第十五話（後書き）

ティアの姿は皆様のご想像にお任せいたします

原作編　第十六話（前書き）

就活の為のセミナーやらで忙しい毎日です。

原作編　第十六話

ノックの音が聞こえている。それが分かっても声を返せるほどに覚醒はしていなかったが、部屋の主の寝穢さは心得たものなのだろう、少し待った後で勝手に扉は開かれた。

「ルーク様。おはようございます。今日もいいお天気ですわ」

メイドが入ってきて、大きな窓に掛かったカーテンをシャッと開けた。眩い朝の光が部屋をいっぱいに満たしていく。

「ただ、ローレライ教団の預言によると、にわか雨があるかもしれないとのことですけれど」

ベッドの中で掛布に包まっていた赤毛がもぞもぞと動き、いかにも眠そうな顔でようやく半身を起こした。それを確認して、メイドはベッドの脇に立つと伝言を告げ始める。

「今朝方、ナタリア殿下から使者が参りまして、ご登城なさるようにとのことでした」

「俺、屋敷の外に出ていいのか？」

ぱちりとルークが目を開くと、メイドは自分こそ嬉しいような顔で「よろしいようですよ」と笑った。上着などを細々と用意して、一礼してから部屋を出て行く。

「ナタリア、何の用だろ？」

袖を通した上着の裾を払って、ルークは呟いた。今までは必ず彼

女の方から訪ねて来ていたのだ。こちらが軟禁されていたせいではあるのだが、呼び出されるなんて記憶にある限り初めてである。

「（家に来ないで城に来いって事は、伯父上の用事かもしれないな……。ヴァン師匠のことかな？」

……しっかし、簡単に屋敷から出れちまった。複雑だぜ……今までは何だったんだっつーの）

軽く頭を振ると、長い髪がサラサラと揺れ動いた。そのまま部屋を出て行きかけて足を止め、戻って、棚に無造作に立てかけておいた剣を手に取る。

厳重に警備されたバチカル最上層、ましてやバチカル城で、これが必要になることなどないだろう。だが旅の置き土産と言うものなのか、この重みがないと何となく落ち着かない。

腰の後ろに剣を差し、ルークは部屋の扉を押し開けた。

バチカル城とファブレ公爵邸は殆ど離れていない。領地ではなく王都に邸宅を構えているのは、体の弱い公爵夫人にして王妹のシュザンヌを慮ってということもあるのだろうか。

父の公爵は既に登城していると言う。勝手にくっついてくるミュウを足下に引き連れて、ルークもまた城の門を潜ったが、自分の名が耳を掠めて足を止めた。

「それでは第七譜石はアクゼリュスに……？」

「そうだ。恐らくルークがアクゼリュスに……」

見れば、廊下の片隅でティアとモースが話し込んでいる。

「俺がどうした？」

声を掛けると、モースはハッとしたように口を閉ざした。たちまち、気味が悪いほど相好を崩す。

「これはルーク様。お待ちしておりました。カーティス大佐はもう中でお待ちですよ」

「……ジェイドが？」

「参りましょう」

三人は連れ立って謁見の間に向かった。

ちなみに、その途中にだが……

「ルーク……」

「ん、なんだよ？」

「昨日の事はお願いだから皆に内緒にして……」

「あぁ、そういやまた服着替えたんだよな・・・確か母上が言ってたな、その服の名前というのボンテー……」

「ルーク！！！！！」

「おわ！？　んなでけぇ声だすんじゃねぇっつーの」

「ご、ごめんなさい。でも……本当に内緒よ……約束だからね」

あの後の真実は神のみぞ知る……という訳だ・・・

謁見の間には、玉座についたインゴベルト王とナタリアの他に、ファブレ公爵、アルバイン内務大臣、そしてジェイドが揃っていた。

「おお、待っていたぞ、ルーク」

モースたちと共に歩み寄ってきたルークを見て、インゴベルトが早速口を開く。アルバインが後を継いだ。

「昨夜緊急議会議が招集され、マルクト帝国と和平条約を締結することで合意しました」

「親書には平和条約締結の提案と共に、救援の要請があったのだ」

「現在マルクト帝国のアクゼリュスという鉱山都市が、障気なる大地［ノーム］の毒素で壊滅の危機に陥っているということです」

王とアルバインが交互に語り、ナタリアも口を開いた。

「マルクト側で住民を救出したくても、アクゼリュスへ繋がる街道が障気で完全にやられているそうよ」

「だが、アクゼリュスは元々我が国の領土。当然カイツール側からも街道が繋がっている。そこで我が国に住民の保護を要請してきたのだ」

「そりゃ、あっちの人間を助けりゃ和平の印にはなるだろうな。でも俺に何の関係があるんだよ」

ルークが不遜に言うと、ファブレ公爵が息子に言った。

「陛下はありがたくもお前を、キムラスカ・ランバルディア王国の親善大使として任命されたのだ」

「俺ぇ!?　嫌だよ！　もう歩いたりすんのはごめんだ」

アクゼリュスへ行くということは、また旅をするということだ。足を棒にして歩き、時に野宿をし、様々な面倒に耐えながら。

そういえば、今も剣を腰に差している。魔物相手に時々抜いて戦ったぐらいにしか使わなかったが、もし人間相手に使うことになるというなら……

護衛達が人間相手で戦闘を行なっていたところを何度か見たが、あまり直視出来るものではなかった。

あそこにあるのはかっこよさや優雅さでもなんでもない……只の暴力のせめぎ合いだけだった。

「ナタリアからヴァンの話を聞いた」

甥に拒絶されても、インゴベルトは淀むことがなかった。

「ヴァンが犯人であるかどうか我々も計りかねている。そこで、だ。お前が親善大使としてアクゼリュスへ行ってくれれば、ヴァンを解放し協力させよう」

「ヴァン師匠は此処に捕まってるのか！？」

「城の地下に捕らえられているわ」

暗い声でナタリアが言った。力が及ばなかったことを悔いているのだろうか。

「……分かった。師匠を解放してくれるんなら……」

「ヴァン謡将が関わると聞き分けがいいですね」

ジェイドが揶揄してくる。

「……うるせぇ」

「しかしよく決心してくれた。実はな、この役目、お前でなければならない意味があるのだ」

「……え？」

インゴベルトの言葉に、ルークは眉を顰める。ファブレ公爵が兵士に持たせた譜石を示した。

「この譜石をごらん。これは我が国の領土に降ったユリア・ジュエの第六譜石の一部だ」

「ティアよ。この譜石の下の方に記された預言を詠んでみなさい」

「……はい」

インゴベルトに促されて、ティアは譜石を詠み始めた。

「――『ＮＤ２０００。ローレライの力を継ぐ者、キムラスカに誕生す。其は王族に連なる赤い髪の男児なり。名を聖なる焔の光と称す。彼はキムラスカ・ランバルディアを新たな繁栄に導くだろう。

ＮＤ２０１８。ローレライの力を継ぐ若者、人々を引き連れ鉱山の街へと向かう。そこで……』。

……この先は欠けています」

「結構。……古代イスパニア語に言う聖なる焔の光とは、今のフォニック言語では『ルーク』。お前の名だ。つまりルーク、お前は預言に詠われた、選ばれた若者なのだよ」

『大丈夫だ。自信を持て。お前は選ばれたのだ。超振動という力がお前を英雄にしてくれる』

ルークの脳裏に、あの日キャツベルトの甲板でヴァンに言われた言葉が鮮明に甦った。

「よいかルーク。お前にはユリアから授かった超振動という力がある。今までその力を狙う者から護るため、やむなく軟禁生活を強いていたが、今こそ英雄となる時。その力でアクゼリュスを救うのだ」

「（そうか……。やっぱり師匠の言う通りなんだ）」

父の声を聞きながらルークは思う。

「（父上も伯父上も、俺が特別な力を持っていることを知っていた。それで……俺を利用するために軟禁していたんだ。だけど……俺の名前がユリアの預言に詠まれてるって？　和平のために親善大使になればキムラスカを繁栄に導く……ってことは、兵器にはならなくて済むのか？それにしても俺が親善大使……。アクゼリュスの奴らを助けたら、師匠は助かる、か～。それに、平和条約が上手く結ばれたら俺は英雄になれるかもしれない……。そしたら、師匠の言っていた通り自由になれるかも……）」

「英雄ねぇ……」

「何か？　カーティス大佐」

アルバインがジロリとジェイドを睨んだ。

「……いえ。それでは同行者は、私と誰になりましょう？」

「ローレライ教団としてはティアとヴァンを同行させたいと存じま

す」
「わ、私をですか？」
モースが言う。そんな提案にティアは一瞬驚く。
一応、自分は休暇の身ではあるが……ここまで大事に関わってしまった事だ。
はっきりいって拒否権などないだろうと結論づけ、ティアはモースの提案にうなづくしかなかった。
その次にファブレ公爵は息子に訊ねた。
「ルーク。お前は誰を連れて行きたい？　――おおそうだ。ガイを世話係に連れて行くといい」
「何でもいいや。師匠がいるなら」
どこか気もそぞろのルークの一方で、ナタリアは隣に座った父に懸命に訴えかけている。
「お父様、やはりわたくしも使者として一緒に……」
「それはならぬと昨晩も申したはず！」
ナタリアは憮然として黙り込む。ルークがインゴベルトに伺った。
「伯父上。俺、師匠に会ってきていいですか？」
「好きにしなさい。他の同行者は城の前に待たせておこう」

バチカル城の罪人部屋は、例に漏れずに城の地下にある。案内を受けて罪人部屋に入ると、ヴァンはちょうど格子戸の中から解放されたところだった。

「師匠！」

「簡単ないきさつはご説明してあります」

駆け寄ったルークに告げて、兵士は罪人部屋を出て行った。ヴァンはじっとそれを見送っていたが。

「今ここには私たちしかいない。だから私の言うことを落ち着いて聞いてほしい」

足音が遠ざかったのを確認すると、ルークを見つめて喋り始めた。

「……へ？」

「私の元へ来ないか？　神託の盾騎士団の一員として」

「……師匠、何言ってんだよ」

「お前はアクゼリュス行きを簡単に考えているだろう。だが、その役目を果たすことで、お前はキムラスカの飼い犬として一生バチカルに縛り付けられて生きることになる」

「ど、どうしてだよ。師匠が言ったんだぜ。英雄になれば、自由になれるって」

「しかしアクゼリュスはまずいのだ。お前もユリア・ジュエの預言を聞いただろう」

「ああ。俺がキムラスカを繁栄に導くとかって」

「その預言には続きがある。『若者は力を災いとし、キムラスカの武器となって』と。教団の上層部では、お前がルグニカ平野に戦争をもたらすと考えている」

「俺が戦争を……？　そんな馬鹿な……！」

「ユリアの預言は今まで一度も外れたことがない。一度も、だ。……私はお前が戦争に利用される前に助けてやりたいのだ！」

まっすぐに言われ、ルークの心は揺らいだ。

「――でも、どうしたらいいんだよ……。俺がアクゼリュスに行かないと街がヤバいんだろ」

「預言はこう詠まれている。お前がアクゼリュスの人々を連れて移動する。その結果、戦争が起こる、と。だからアクゼリュスから住民を動かさず、障気をなくせばいい」

「障気って……あの毒みたいなのだろ。どうやって……」

「超振動を起こして障気を中和する。その後、私と共にダアトへ亡命すればいい。これで戦争は回避され、お前は自由を手に入れる」

「……やれるかな。超振動だって自分で起こせるかどうか」

「私も力を貸す。船の上で超振動の暴走を収めてやったようにな」

それを思い出すと、ルークは安心感に包まれた。本当に恐ろしかったあの時、ヴァンはルークを助けてくれた。

「（――だったら。師匠が手伝ってくれるんなら）」

「……分かった。俺、やってみる」

ヴァンは真剣な表情でルークを見つめる。

「この計画のことは、直前まで誰にも言ってはならないぞ。特にキムラスカの人間に知れれば、お前をダアトに亡命させる機会が無くなってしまう」

「……なぁ、師匠はどうしてそんなに俺のこと、親身になってくれるんだ？」

「――お前は記憶障害で忘れてしまったのだったな」

「……俺が何か言ったのか？」
「私と共にダアトへ行きたい。――幼いお前はそう言った。超振動の研究で酷い実験を受けたお前は、この国から逃げたがっていたのだ。だから……私がお前をさらった。七年前のあの日に」
「師匠が！？　俺を誘拐したのはマルクトじゃなくて師匠だったのか！？」
「今度はしくじったりしない。私には、お前が必要なのだ」
「……俺、人に必要だなんて言われたの初めてだ」

ルークは声を震わせた。

冷たい父。利用するために軟禁していた伯父。母は優しくしてくれるが、それでも、過去の記憶はまだ思い出さないのか、と時折問われるのは辛かった。何も知らないことで呆れられ、眉を顰められる。ナタリアも、ガイも、本当に求めているのは誘拐される前の記憶を持った『ルーク』で。――記憶のない自分は、必要とされていないのではないか、と思えることがあって。

けれど。

「師匠だけは、いつも俺のこと褒めたり叱ったり、本気で接してくれてたもんな」

過去の記憶を思い出せ、とは言わなかった。知らないことを馬鹿にしなかった。間違っていたら叱ってくれ、覚えられたら褒めてくれた。

「俺……師匠についてくよ！」
「よし。では行こうか。お前自身の未来を掴み取るために」
「はいっ！」

ルークは、心が高揚するのを感じた。目の前に無限の未来が開けたのだ。そして、そこには誰よりも好きな師匠がいてくれる。

それだけで全てが満足であった……

後に、その全ての行動が『人形』に『糸』を括りつける為だと知るまでは・・・

【グランコクマ】

バチカルにて、和平協定が結ばれる直前になりかけているさなか、ここマルクト首都：グランコクマでは宮殿の王座にて貧乏ゆすりをする者がいる。

「おいゼーゼマン、ジェイドからの経過報告はまだなのか」
「申し訳ありませんが来ておらぬようですな。もう少し辛抱なさってくだされ」
「そうですぞ、果報は寝て待てと言い表しもありますな」
「んなこと言ったってよぉ、前途多難まっしぐらなスタート切って進められた和平だぞ!?　無事にすむと決めること自体無理に等しいだろ!!」

ピオニーはジェイドの導師誘拐・バチカル公爵子息の保護とダアトから流れてキムラスカへと入っていく数々の問題により、正直自身を失いつつあった。

「それにしても、最終決議を出した俺も言えんが、何で議会の殆どの奴らが和平の使者をジェイドに推薦したんだか……」

「恐らく『預言』絡みですな・・・我がマルクトは預言を必然としない政策を取ってはおりますが、その有用性を捨てきれん者がまだおるのでしょう」

「偶に態々ダアトまで行き、内密に今後の政策の決議の行方を詠んでもらう者が見られているそうですぞ陛下」

そうだ。現マルクトは前皇帝が行なっていた昔の政策とは違い、この眼で国の様子を調べ、それに則った政策を政務に携わる者達が作り出し、決議をまとめている。しかし、その政治家の中には前皇帝の代からピオニーに仕える者も多数居る。

一度覚え込んだ“蜜”の味は忘れられないと言うわけだ・・・

「しかし……和平の平和条約締結の提案と一緒に出した救援の要請・・・」

「やはり陛下も引っ掛かる所があるとお考えですか……」

「あぁ、確かにマルクト側で救助に向かおうにも街道が高密度の瘴気で塞がれて不可能だ。その為、まだ犯されてないキムラスカのカイツール側で住民の保護を要請するのは政策措置としては正しい……だがなぁ」

「“余りにも出来すぎている”・・・そう述べられますな」

まるでバラバラになっていたパズルのピースが次第に完成に近づ

いてきているような感じだ。それも悪い方に……そう、全てが仕込まれているように思える。思えば、アグゼリュスの救援要請を和平の平和条約締結で提案する議案を出したのも全文で述べたような“政治家達”が中心だった。

「どうやら俺達の知らない所で“でかい事”をやらかそうとしているのかもしれないな……キムラスカかダアトは・・・いや、或いは両方か」

「出来るだけ他の師団に救援の為、こちら側でもアグゼリュスにどうにか向かえないか検討中です。私共もなるべく急ぐよう努めさせて頂きますぞ」

「頼む……今でもアグゼリュスにいるこの国の民達は苦しんでいる……彼らには直ぐにもその地獄から救い出してやりたいんだ」

ピオニーは下の者達に行方を任せ、アグゼリュスの民達の無事を祈り続ける。

と、そこへ……

「失礼します、陛下」

「おぉ、アスランじゃないか？　どうかしたのか？」

フリングス将軍が謁見の間にて、礼儀をしてからこちらへとやってきた。

今の事態ではフリングス将軍はかなりの問題を処理しており、此処に来ること自体珍しくなっている。そんな彼が此処にひょっこりと現れ、若干驚きながらも此処に来た理由を尋ねた。

「実は、皇族御用達での伝書鳩にこのような手紙が届けられたのですが……」

そう言われてピオニーはその手紙を受け取ってみる。

「こ、これは……！？」

その手紙の封筒は真っ白なままで何も書かれてはいない……だが、封蝋は特殊な青の蝋で作られた“鷹”のシンボルを押されていた。それればかりではない……このマルクトでは知らぬ者は居ないといえる大貴族のサインがその脇に“証明”としても小さく記されていた。

「二つの内の一つはあのブリジスト侯爵の者です……ですが、封蝋はブリジストのとは違います。侯爵が印を変えたという報告は聞いた事がありませんし……かと言って検査の為、開封するわけにはいきませんでしたから――」

――ビリッ！！

フリングス将軍が説明している間もなくピオニーは勢い良く手紙の封を開けて急いで中身の手紙を広げて見てみる

数秒静かな空間が広がり、誰もが手紙を凝視しているピオニーの様子を見守る。だが、しばらくすると、ピオニーの手紙を持つ手がガタガタと震え出し、手紙を床に落とした。そこから現れたピオニーの表情は恐れを通り越して“恐怖”を表していた。

「へ、陛下？」

「あばばばばばばばば……！！！！！」

一体何があったのかゼーゼマンが訪ねてみるが、汗をダラダラと

流してそのままだ。
そんな時、丁度足元に導かれたように飛んできた手紙をフリングス将軍は拾い取って読んでみることにした。

その手紙の主が書いた内容とは……

“ご無沙汰しておりますピオニー・ウパラ・マルクト陛下様……
今日この頃、お忙しい中にてこのようなお手紙を出されることをまずお詫び申
仕上げます。

さて、今回の件は私が提案した“こちら側”でのアグゼリュスの救援活動の参
加での援助を願いたく思います。私供としては、大多数を現地へ運ぶにはそれ
相応の『足』がなければすべきこともままならない所存でございます。ですの
で、『タルタロス』の所有権利を一時的に“こちら側”にお譲り出来ないでし
ょうか？もちろん、アグゼリュスの救援が終了次第返還させていただきます。

それと、何時か予定がつき次第、ご内密ですが御食事を共に致しませんか？
もしよろしければ私自らが腕によりをかけた『ブウサギ』料理をご馳走させて
いただきたいと考えております。ご心配なく、素材は『現地調達』で済ませま
すので新鮮かつ濃厚なお味を堪能できることを御約束いたしま

す。
　きっと陛下も『泣くほど』美味なお味でご満足頂けることでしょう。
　それでは、この件について陛下の慎重なお返事をお待ちしております。

蒼鷹

ハーミット

”　”

「うわあぁぁぁ！！！　ブウサギがあぁぁぁ！！　俺のブウサギ達があぁぁぁ――――！！！！！！　ネフリー！！　サフィール！！　ジェイド！！」
「陛下！！　落ち着いてくだされ！！」
　手紙の内容は普通に見れば、何の変哲もない懇願状に近いものだ。
そう、“普通”に見ればの話だが……
　つまり、手紙の内容を要約するとこうだ……

――――テメェらが売った喧嘩、タルタロス寄越すことでチャラにしてやんよ？　だけどもし拒否すんならテメェの大事なブウサギちゃん達を料理しちゃうぞ♪――――

　なんとも手際のよい、国際問題にも引っ掛けぬようにしたクリーンに見せかけた脅迫文であろうか……たとえ脅迫の証拠として出さ

れても、内容的に『気遣い・御好意・お礼』に満ち溢れた良心的な手紙として場外にさせされるだろう。

――――汚いなさすがハーミットきたない！！

「ノルドハイムうぅぅ！！！　直ぐ様タルタロスを指定の場所まで送るんだ！！　早くしてくれえぇぇ！！！！！」

「お気を確かに陛下あぁぁ――――！！！！！！」

その光景を見ながらフリングス将軍はこの手紙を書いた人物がどのような者か一瞬知りたくもなった。ここまで鮮やかにピオニーを使いパシリにさせるなどジェイドでさえ難しい事なのに……そんな難問を鮮やかに突破したその男に……

この時は、フリングス将軍はまだ『彼』が若き頃の自分の命の恩人「第三十三話参照」であることを知るのはまだまだ当分先の様である。

――――――――――――――――――――――――――――――――

「やはりアグゼリュスの救援が和平の提案だったか……まさしく預言の通りというわけか」
「どうすんの？　このままだと僕達の計画途中であいつらが辿り着いちゃう可能性だってあるよ？」
「だいぶ苦しい……です」

「強引だが、アッシュに『導師誘拐』に近い行動をしてもらう」
「はぁ！？　んなことしたらまずいんじゃ――――！！」
「飽く迄『近い』だ……実質的に和平の仲介は終わった。後は導師のすることはもはや何もない……」
「……なるほどね、帰還と重ね合わせるというわけか・・・」
「出来るだけ俺がアグゼリュスでの仕込みを終わらせるまでに時間稼ぎが出来れば上々だな」
「あと、ヴァンへの眼を誤魔化すためか……分かったよ。僕とアッシュとアリエッタも時が来るまでは表面上従っていく」
「アイツの計画通りになるとすれば……次に彼らが向かうべき場所は・・・」

――――ザオ遺跡――――

原作編　第十七話（前書き）

色々と忙しさマッハです……次の更新が来年になる可能性があります。
作者の都合により多大な迷惑をかける事をお詫び申し上げます。

原作編　第十七話

ルークが親善大使任命を言い渡される日の前夜……それはとあるホテルの中にて起きた。
そこは俗に言うＶＩＰの専用宿でもあり、そこに二人は宿泊していた。

「いやー大変でしたね。イオン様！　これで漸くダアトに安心して帰れますよぅ」
「えぇ、そうですねアニス」

導師イオンと導師守護役のアニスである。
和平の仲介役を終えた今、ダアトに出来る事はもう何もない。これからの二人の予定はバチカル港から出るダアト行きの船へ乗り、帰るだけだ。そのためには、一夜開けてから船を出るまで待たなければならない必要がある。

「それにしても、今思えば大佐の仲介役の申請の仕方は強引でしたものですね。もうゴリ押しっていうかなんて言いますか」
「ははは、流石の僕もいきなり窓から入ってくるなんて思ってもいませんでしたよ」

そういえばそうだ……ジェイドは導師に和平仲介を申請するために入口で取り次ぎを願っていたそうだが、詠師達の拒否により直前申請やら預言やらと妨害されていたようだ。
だが、和平の件はたとえ中立国のダアトといえどもそう簡単に表立って発表するわけにはいかなかったのだ。なぜならば、『大詠師モース』がキムラスカに付いていると国間でも伝わっている情報が原因だ。

大詠師モースは預言に愚直なまでに忠実な人間だ……それにインゴベルト国王に預言関連の政務にアドバイスが出来る地位にもいる。おまけにキムラスカからの献金もあってそちら贔屓気味だ。

そんな人間に和平の件が耳に入ったらどうなるか？・・・詠まれていたならまだ“敵国”としての対応をするべき政務をキムラスカに干渉し、詠まれていなければ“問題事”としてキムラスカに干渉しだすとどっちをとっても傾向が悪くなる出来事だ。

だからこそ、詠師派を纏めるモースが外出中の時を狙って申請をしたのだが、『穴のムジナ』の如く、他の詠師達も反対してきたため、手段を選んでは居られなかったジェイドはほぼ誘拐という形で導師を連れ出したのだ。

だが、運命のいたずらとは働くもので……マルクトは秘預言の事を知らないが為にダアトとキムラスカに謀られ、ダアトは預言に従うが為にマルクトの意図を理解することはなかった。

ND２０１８

ローレライの力を継ぐ若者、人々を引き連れ鉱山の街へと向かう。そこで若者は力を災いとしキムラスカの武器となって街と共に消滅す。

しかる後にルグニカの大地は戦乱に包まれ、マルクトは領土を失うだろう。

結果キムラスカ・ランバルディアは栄え、それが未曾有の繁栄の第一歩となる。

やがてそれが、オールドラントの死滅を招くことになる。

そして、結果はどうあれ……『和平』という形でこの秘預言は成就されることになるとはこの二人でも知らない・・・そう、“導師”であるはずのイオンでさえも……

「あ・・・すみませんアニス。少し用足しを」
「はい、どうぞいってらっしゃいイオン様」

アニスはこの時、この行動を後悔することになる……完全に油断していたのだ。
このホテルはキムラスカからの専属での見張りが配置されており、自分が多少は居なくても導師イオンに危険が晒される事は無いと判断していたからだ。

イオン達が泊まっているホテルは無駄にと言っていいほどに広い。したがって、手洗い場を探すだけでも一苦労してしまう。

「あの、少しお聞きしてもいいでしょうか？」
「こ、これは導師イオン！！」

途中、イオンは警備で立っていたキムラスカ兵の二人に話しかける。此処の事は此処にいる人間が一番良く知っているからだろう。

色々と質問とし、道筋を指で辿る様に動かし、漸く的確な場所が知れたところでイオンは目的地へと歩いていく。

「ぐあっ――――!?」

だが、突如後ろから先程まで話していた兵士の悲鳴と倒れ込む音が聞こえる。その声に反応し、イオンは振り向くとそこには兵士が先ほどまで立っていたところに奇抜なトランプのダイヤ柄の服を着たずんぐりとしたハゲ頭に髭を生やした男がステッキをポンポンとして突っ立っていた。

「な、何奴……がぁ!!」

その異変に反応し、持っていたハルバートを構えようとしたもう一人の兵士も直ぐに倒れ込んでしまう。こちらには海賊風の服をきた眼帯と出ベソが目立つ細身の男がサーベルを持って同じように突っ立っていた。

「だ、誰ですか・・・貴方達は――――!?」
「ヨーク、ウルシー・・・終わったかい?」

いきなりの不審者達に驚き、後ずさりしていたイオンの後ろからは今度は女の声が響きわたる。慌てるように振り向いてみると、旅芸者が用いるような赤色の服と帽子をした桃髪の女：ノワールが手鏡を持ちながら此方に近づいてくる。

「あんたが導師様だね?」
「……はい」

イオンは正直に対応することを決めて答える。下手な嘘をしても無駄だと考えたからだ。

「とある人間からの依頼でね……悪いけどあんたを秘密裏に連れ出して来いと頼まれてきたのさ」
「……それは大詠師モースから」
「おや、言うと思うのかい？」

ノワールは不敵な笑みをしながら導師を見る。

「でしたら……態々何もここまでしなくても……」
「導師様ねぇ……アンタはダアトで一番のお偉いさまだってこと分かってんのかい？　そんな人間を普通の……特にあたし達のような輩が呼んで「はいこちらです」ってポイポイ簡単に連れてくる訳がないよ」

イオンのこの状況の必然さをよくわかってない言動にノワールは少々ため息を付いてしまう。そうしている内にも、何時の間にか何処かへと行っていたウルシーが戻ってきた。

「姉御、終わったでガス」
「そうかい……」
「何をしてきたんですか……？」
「なぁに・・・アンタんとこの導師守護役様にもこいつらと同じようにちょっとおネンネしてきて貰ったところさ」
「！？」

イオンはその言葉に緊張を覚え出す。

「安心しな。別に悪い意味じゃないさ・・・本当に眠ってもらったんだよ」
「いや～効くでガスなぁ・・・ケセドニア産の麻酔薬って薬はホント」

「そういや、初めて試しに一滴匂いを嗅いでみただけでお前倒れ込んだな」
「う、うるさいでガス！！」
「やかましいよ！　さっさと此処を離れるよ！！」
「「へい！　姉御！！」」
「あの〜、水を指すようで申し訳ないのですが……手洗い場へ行っていいですか」
「なんだって？　そんなもの外にでてから……」
「も・・・もれそうなんです……」↑プルプルプル……
「！？　あー分かった分かった早く行ってきな！！　ヨーク、ウルシーついて行きな」
「す、すみません……」
イオンはそうして、少し小走りでトイレへと走っていったのであった。

――――――――――――――――――――

夜の道を忍び足で進んでいく……ホテルから誰にも気づかれず抜け出した漆黒の翼とイオンは石段を使って下層へと下っていく。昇降機があるかと思うが、それを動かすのはそこに居る専門の人間であって乗る側の人間ではない。したがって、下手に近づきこんな真夜中で何をしているかと聞かれてくると色々とマズイ事もあるのだ。
「えっと……ここから北へ５０メートルほど進んで三軒目の所で左

に曲がる」

ノワールは持っている紙から何やら読み取って進み続ける。その後ろをヨークやウルシー、連れられているイオンが歩いているという構造だ。

「ここだね・・・」

遂にたどり着いた先は、一件の小さな安宿であった。微かなランプが看板に照らされている。

チリリン――――……

ノワールは鳴り鐘と共にドアを開け、中へと入る。その次にイオンにこっちに来るようにと催促していた。

「んで、ご依頼通りのお客人を連れてきたんだけど？」

「ご苦労だったな。ほら、約束のものだ」

中に入って何やら二人がやり取りをしていく。最後には奥の人間から大きな小袋を投げ渡されると、その紐を解いて確認し、満足そうにして紐を結び直す。

「じゃあね導師様、コイツらの言うことはキチンと聞いとくんだね」

どうやら彼女らの仕事は終わりのようだ。三人組が部屋から出てドアを閉められると、そこはイオンの他に何人かの人間が佇んでいた。

「これで漸くちゃんとした話が出来るな……何度か遭っているとは

思うが、久しぶりだな導師イオン」
「あなたは……」
ランプの灯りに徐々に照らされ、暗闇から姿を表す。
イオンはその人物の事を何度か知っていた。
「オラクル騎士団特務師団長・・・『鮮血』のアッシュ」
己の生やす黒髪を魔物の血で真っ赤に染め上げるほど殺し尽くしたと言われる男……
他の師団とは違い、主に汚れ役や面倒事を専門に任務を遂行する師団の長……
そのため、普段は滅多に人前に姿を表さないと言われていると様々な噂が飛び交う。
「おい、椅子を用意してやれ。流石の立ちっぱなしでは辛いだろうからな」
「はっ・・・!!」
周りの兵士の一人が奥から元々ここの所有物であろう椅子を持ってきて、イオンの横に置いてやる。自分としても、立ち続けるのはしたくないイオンもその好意を受け取った。
「さて、本題に移ろうか・・・導師イオン、これから貴方は我々オラクルが進めている極秘任務への同行を願いたい」
「ですが、僕は和平の為の仲介という最重要な……!!!」
「それはもう『終わっている』はずだが?」
「どういう・・・事ですか?」
やっぱり良く考えてなかったか……

アッシュは心の中でため息を付きながらも、一応説明を始める。

ダアトが出来ることの範囲……導師としての責務……

イオンにとって抜けている事をアッシュが知り得ている事の全てを話し尽くした。

「だけど……僕は……」

だが、イオンは何処か受け入れたくないところがあるのか反論してみようとするが、言葉が浮かび上がらなかった。

「話は終わりか……導師を部屋へ連れて行け。出発は早朝だ」

「ま、待ってください！！　お願いですアッシュ！！　まだ話を――――！！！」

イオンの制止の叫びも虚しく、強引ながらも丁重に二人の兵士が宿の奥へと連れていく。

「まさか、あそこまで甘ちゃんだとはねぇ」

その後、反対の奥の通路から一人の少年が出てくる。

「シンクか……どうだ？　お前の『兄弟』は」

「……正直言って、『アイツ』からアレが生まれたなんて奇跡に近いんだけど」

アッシュとシンクは被験者イオンのシオンを特徴ごとに並べて思い出していた。

腹黒くて……

傷口を抉るのが得意で……

めちゃくちゃ強くて……

天使という名の仮面を被った悪魔で……

「だめだ……考えれば考えるほど分かんなくなってきやがる」

「止めよう……僕が考えると却ってなんだか虚しくなってきそうだ」

二人はどんよりと気落ちした雰囲気でｏｒｚとなっていた。

「ごほん！！　とにかく、船の手配はここの廃工場の奥にある海流で配置しとく準備は？」

「上々と言っておくよ。けどそこらへんはラルゴとリグレットの師団が中心として行なっているからね。今回の僕達のお仕事は導師を船まで連れていくこと」

和平というキムラスカとマルクトが緊張状態となっている以上、ダアト個人の問題には見向きする意思が弱まる。

そんな穴をついて、ヴァンは“計画”を進めていくつもりだ。

「牢に入れられたから一時はどうなるかと考えたけど、アイツはルーク・フォン・ファブレと導師イオンの性格を上手く使って釈放してるしね」

「たく……“ハーミットの計画”が終わるまで過ごしてりゃいいっ

てのに」

だが、そのところは奴も予測していただろうな。ヴァンが牢からすぐ出れることを……

「レプリカ……か。アンタはレプリカに対してどう考えてる？」

「……あいつか」

タルタロスの上で再び合間見えた時、俺の心にはあいつへの憎しみや怒りなど浮かび上がることはなかった。

ただ、『嬉しかった』気がした……

秘密裏に屋敷に戻った時、その時見たあの幼い姿があそこまで無事に育ったという事実に少なからず歓喜した。

ハーミットから聞いた……レプリカは不安定な存在で、被験者とは体の内側から違う事もある。その重大な一つとして、『寿命』が挙げられた。

あいつが本やディストから独自で調べ上げ、通算した結果がレプリカとしての最大の難点として述べられてしまった。

昔、魔物を実験体とした結果で、本来は２０年近くは生きられるのにレプリカでは２０日も持たず音素乖離を起こしながら死んでいった個体があるという物もあったらしい。

だからこそ不安に思った……秘預言の日までに体を悪くするのではないか、精神をきたすのではないか……秘預言にとっては『ルーク』はただ生きてさえいればいい存在だ。

俺は己の分身とも言える存在であるあいつにはせめて無事に生き続けてほしいと考えている。そして、余計な物を背負わせる訳にはいかねえんだ。

「……なんとしてでも、ヴァンの思い通りにさせるわけにはいかねえ」
「どうしたの？　いきなり真剣な顔になっちゃってさ」
「うるせぇ！！」

こうして、夜が過ぎていくのであった……

そして、話は翌日へと戻り、ヴァンとルークが城から出てくる場面に戻る。

ヴァンと共に城を出ると、城門にジェイド、ティア、ガイが揃って待っていた。

「兄さん……」
「話は聞いた。出発はいつだ？」

ヴァンが妹に顔を向ける。「そのことでジェイドから提案があるらしいですよ」とガイが言った。

「ヴァン謡将にお話しするのは気が引けるのですが……まあいいでしょう」

そう前置きして、ジェイドは話し始める。

「中央大海をオラクルの船が監視しているようです。おそらく大詠師派の妨害工作でしょう」
「そうだな、昨日の謁見の時には誰かさんの御陰で散々恥を欠かされたからな」
「大佐……」
何か言いかけるティアを「事実です」と制して、「まあ大詠師派かどうかは未確認ですが。――とにかく海は危険です」と結論付ける。
「じゃあどうするんだよ」
「海へおとりの船を出港させて、我々は陸路でケセドニアへ行きましょう。ケセドニアから先のローテルロー海はマルクトの制圧下にあります。そこからなら、船でカイツールへ向かうことは難しくありません」
「なるほど……」
「大人数で行動できないのが痛いところなのですがねぇ」
「では、こうしよう。私がおとりの船に乗る」
「えー!?」
あからさまな不満声をルークはあげた。
「私がアクゼリュス救援隊に同行することは発表されているのだろう？　ならば、私の乗船で信憑性も増す。オラクルはなおのこと船を救援隊の本体だと思うだろう」
「よろしいでしょう。どの道あなたを信じるより、他にはありません」
「だけど！」
「ルーク。私を信じられないか？」
「……分かったよ」

「では私は港へ行く。ティア、ルークを頼むぞ」

そう言い置くと、ヴァンは一行と別れて去っていった。

「ちぇっ。折角師匠と旅が出来ると思ったのに」

呟くと、ティアが例によってたしなめてきた。

「仕方がないわ。前の時のように、船上で襲われたら危険だし」

「そうですね。砂漠越えも過酷ではありますが、逃げ場はあります。こちらの方が襲われた際には対応しやすいでしょうね」

「襲われないことが前提なんだろ」

同調してきたジェイドからルークはツンと顔を逸らす。ガイが苦笑した。

「けど、神託の盾［オラクル］の連中は、しつこいって噂だからな～」

「ええ。警戒はしておいた方がいいでしょう。とにかく、こちらは少人数の方が目立たなくて済みます。これ以上同行者を増やさないようにしましょう」

ジェイドが言う。「話を通しておきますので、街の出口で待っていて下さい」と、彼も歩き去った。

「ルーク様ぁ！」

街の出口近くに至った時、甲高い少女の声が聞こえた。波を持っ

た黒髪をツインテールにした少女が、満面の笑顔で駆け寄ってくる。

「おっと……！？」

その突進を前にしてガイは慌ててよける。少女は更にティアを押し退けて道を開け、ニコニコ笑ってルークに向かう。

「逢いたかったですぅ……でもルーク様はいつもティアと一緒なんですね。……ずるいなぁ」

「あ……ご、ごめんなさい。でも安心して、アニス。好きで一緒にいる訳じゃないから」

「（なんか傷つく……）」

ルークは思った。口には出さなかったが。

「アニス。イオン様に付いていなくていいんですか？」

その時、背後からジェイドが歩いて来た。話を通し終わったのだろう。

「大佐！　それが……朝起きたらベッドがもぬけの殻で……。街を探しても見つからないんです！！」

「朝起きたら・・・？　つまり、寝番をしてなかったのですかアニス？」

「はぅあ！！　そ、その……すみません！！　けど、アニスちゃん勝手に寝た訳じゃないんですよぅ！！」

「どういうこと？」

ティアが不思議に思って尋ねてみる。

「記憶が無くなる前に、部屋でイオン様がお手洗いから帰ってくるのを待っていた時、ドアの隙間から何やら不思議な煙が入りこんできて……調べようとして近づいてみたら急に眠くなっちゃって……」
「……言い訳を聞いている暇はありません。それで、導師が何処に行ったか手掛かりはないのですか？」
「あ、はい！！　実はイオン様がお手洗いに行く途中に会っていた兵士の人達が居たのを聞いて、それで訪ねてみたらなにやら『どこかのサーカス団』みたいな人達に襲われたそうなんですよぅ！！」
「サーカス団？　おい、まさか……」

ガイがハッとした顔をし、ジェイドが静かに結論付ける。

「やられましたね。多分漆黒の翼の仕業だ」

ようやくルークが合点した様子で叫んだ。

「なんだと！？　あ、そういえばオラクルの奴と何か話してたな。あいつらグルか！」
「追いかけようぜ！」

即座にガイが言ったが、アニスは眉尻を下げた。

「駄目だよ～！！　街の入口にいるオラクルの兵が言うに「導師はこれからダアトへ帰還なされる身。ですが、守護役はまだ付いて来られぬようとの上からのご命令です」と言ってなんか邪魔してくるんだよ～！！」
「導師が帰還……それなら別にいいんじゃ――――？」
「そうだと普通は思うけど、最初モース様に報告したら「私はそのような事を命令した覚えはない。早急に導師を取り戻してこい！！」って怒鳴られたんだよ！！　だから絶対可笑しいの」

「おいおい、どういうことだよ！！」

アニスの説明にルークは段々とこんがらがってきていた。

「お願い！　私も途中まで連れてって！　街の外に出られればイオン様を捜せるから！」

「ジェイド、どうする？」

ルークはジェイドを窺う。

「仕方ないでしょう。しかし今回のイオン様誘拐にはモースの介入がないようですね」

その中、ジェイドは冷静に分析し……一つの結論を出してみた。

「もしや、大詠師と六神将は繋がっていない・・・」

「それは……つまり・・・？」

「はい、ダアトでは預言肯定派と預言保守派で派閥が生まれていますからその類の問題かと思いましたが……どうやらこれは一筋縄ではいきそうにありませんねぇ」

「となると……やはりヴァンが……」

「えぇ、彼を中心として今回の行動を起こした可能性が――」

「ヴァン師匠はそんなことするはずがねぇ！！」

ジェイドとティアの話にルークは怒鳴るように割り込んできた。

「ルーク！　落ち着け！！」

「離せってガイ！！」

ガイはルークを後ろから組んで止めようとするが、中々激しく暴れるがゆえに一苦労していた。

「失礼……貴方にとっては大切な方なんでしたね」

「そうだ！　おいティア！！　お前ヴァン師匠の妹なんだろ！？何で兄妹であるヴァン師匠の事を信じようとはしねぇんだ！！　『家族』なんだろ！？」

「それは……でも、これとそれとは別よ・・・」

ティアはルークの言葉に一瞬揺さぶられたが、飽く迄冷静に言葉を返した。

「んだとー！！　やっぱりお前は冷血女だぜ」

「静かにしなさい！！　今は争っている場合ではありません！！」

喧嘩になりそうな所をジェイドが激を入れて強引に収める。

「しかし、その話が事実だとしたら……六神将はイオンをどうしたいんだ？」

親書は既に届けられているのだ。今更イオンを誘拐することに何の意味があるというのか。

「推測するには情報が少ないですね。それよりこの街をどうやって脱出するかです。六神将までもが敵に回る可能性がある以上、全てのオラクル兵を敵とみなす必要があります」

港は囮として使っているため使う事はできない……街の入口は見張りをつけられていて迂闊に通ることはできない。

全員が思い悩むその時、考え込んでいたガイが顔を上げた。

「待てよ。……いい方法がある。旧市街にある工場跡へ行こう。天空客車で行けるはずだ」
「工場跡？　分かった」
殆ど反射的にルークは頷いている。
「ガイ～。どこから行けばいいの？　その工場跡って」
「港へ行ける天空客車の反対側に、兵士たちが立っていた乗り場があったろ。あれが工場跡へと直結している天空客車なんだよ。昔はあそこに勤めていた人たちが利用していたらしいが、工場が閉鎖してからは、ずーっと使用禁止だったわけさ」
街の東の斜面にあるその工場跡は、閉鎖された今では魔物の巣窟になっている。その為、立ち入りが禁止されているのだ。
「ふーん。ガイ、何でそんなに詳しいんだ？」
何気なくルークが問うと、一瞬だけガイは言葉を詰まらせた。苦笑を顔に貼り付ける。
「ガキの頃から……何か、行った事のない所とか見つけると行ってみたくなる性分でね。たまたま見つけたのさ。その時は興味なかったんだけどな」
「ふーん。そうなんだ」
「話してないで行こうよ～」
「ええ、そうね。行きましょ、二人とも」
アニスとティアの催促に従って、一行が歩き始めた時だった。

「兄の仇！」

唐突に背後から一人の若者がジェイドに襲いかかった。ジェイドはいつものように手の中に槍を現出させて攻撃を受け流し、地に転がされた若者をティアが取り押さえる。

「お前！　どういうつもりだ！」

ルークの詰問には構わずに、若者はジェイドを睨み続けていた。

「昨日、港で話を聞いていた！　お、お前が死霊使い［ネクロマンサー］ジェイドだな！　兄の仇だ！」

「話を聞いていたなら分かってるだろう。こちらの方々は和平の使者としておいでだ！」

ガイが叱責する。

「……分かってる。だけど兄さんは死体すら見つからなかった。死霊使いが持ち帰って皇帝の為に不死の実験に使ったんだ」

「……」

ジェイドは黙って槍を手の中に霧散させた。様子に気付いたのか、慌てた様子でキムラスカ兵が駆けてくる。

「た、大変失礼いたしました！　すぐにこの男を連行します！」

若者は兵に連行されて行った。

「なんだ、あいつ。馬鹿じゃねぇの？」

「……ルーク。そんな言い方はやめろ」

一部始終の後でルークが言うと、珍しくガイが不快な顔を見せた。
「あの人のしたことは許される事じゃないが、馬鹿にしていいことでもないだろう」
「ふん。そんなもんかねぇ。それよりジェイド、前から聞きたかったことがあるんだけど」
「――なんですか？」
「お前の槍って、何もないところから突然出てくるよな。どうなってるんだ？」
「コンタミネーション現象を利用した融合術です」
「こんたみ……？」
「コンタミネーション現象」
ティアが言い直した。
「物質同士が音素と元素に分離して融合する現象よ」
「ああ。合成なんかに使われる物質の融合性質か」と、ガイ。
「ええ。生物と無機物とでは、音素はもとより構成元素も違います。その違いを利用して、右腕の表層部分に一時的に槍を融合させてしまっておくんです」
「へえ。それで必要な時に取り出すのか。便利だな」
「自分もやりたいなんて言い出さないで」
ティアがルークに釘を刺した。
「普通は拒絶反応が出て精神崩壊を起こしかねないんだから」
「そうだな。このおっさんだから出来てるんだろうよ」
ガイも追随する。

「はい。使いこなせるように努力するうちに　おっさんになってました。はっはっはっ。さあ、行きましょうか」

ジェイドは一行を促して歩き出す。素直に従っていくルークを見送りながら、ガイは立ち止まっている軍人二人に問いかけた。

「なあ、さっきの奴が言ってた噂……」

「そうね。軍人たちの間では有名な話よ。戦場で死体を回収して死者を甦らせようとしているって」

「マルクト軍の第三師団は死人の軍だって噂があったくらいだもんね。実際会ってみたら違ってたけど」

「……死者を、ねぇ……」

ティアとアニスの答えを聞きながら、ガイは少しばかり思いに沈んだようだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1100i/

深淵の異端者（現実→TOA）

2011年11月7日13時01分発行